THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正九年一月一日發行（毎月一回一日發行）
大正八年十二月廿五日印刷納本

新年號

第三十五年第一號　第三百七十八號



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥 健腦丸 を要求す

島村博士證明
腦病 良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長
逆上を引下け、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

改正價藥

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓九拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舖 大阪市順慶町 東京市箔屋町 丹平商會藥房

獨逸イエナ大學名譽教授 ヘッケル博士著　文學士 栗原古城譯

八版出來

宇宙の謎

◆四六判總布製・價貳圓六拾錢・郵税十二錢

『樹木だけ見て森を見ない實驗學者』と『森の繪を見るだけで滿足して其一々の樹木を見ない哲學者』即ち『科學と哲學との間、實驗と思索との間の不自然なる矛盾』を超越して、一元論の立場から宇宙の生成、物質の本體、人類の起源、生命の現象、心靈の本質等、永遠の神秘に對して人間理智の極致を盡せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述べたものが本書「宇宙のなぞ」である。苟も智識慾ある讀者には其興味は小說以上であらう。著者は近代獨逸に於ける科學界の最大大家專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるるばかりでなく、又有名の大思索家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかは、其發賣後多年を出でざる今日獨逸本國にて數十萬部英譯のみにて十四萬部の賣行を見たりと云ふ事實に見ても其一端が知れよう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

英國デゼルチス著　高橋五郎譯　（五版）

◉心靈學講話

壹圓四拾錢　郵税十錢

▽將來の世界を支配するものは心靈の學也

英國ラスキン著　文學士小林一郎譯（再版出來）

塵の倫理

壹圓九拾錢　郵税十錢

詩人の豐かなる想像力と哲人の深き思索力とを兼ね具へたるラスキンの特色は最も鮮かに本書に於て發揮せらる。一の老講師と數人の少女との問答に託して自然界に存する創造力の偉觀を描き出し斯る自然の大法則に基きて人生百般の法則を打建つべきことを明にす。大戲曲にして同時に大經典たるもの希臘のプラトーン以外に其匹儔を求むべからず自然を知らんとする者人生を知らんとする者眞を知り美を知らんとする者は必ず一讀を惜むべからざる也。

英國ラスキン著　文學士栗原古城譯（再版出來）

胡麻と百合

壹圓七十錢　郵税十錢

本書は美術批評に關する以外のラスキンの著述中で最も有名で、又一番弘く讀まれた書物である。本書は原文又「王者の寶庫と女王の花園」と呼ぶ「王者の寶庫」は讀書論である「女王の花園」は婦人論である。孰れも定評ある有名な大文字である。又附錄とせる「人生の神秘と其藝術」はラスキンの著作中、最も內省的な、冥想的な、從つて宗教的情調の最も豐かなもので、其一字一句は皆彼が實人生の經驗から得來つた血の出るやうな教訓である。

東京本郷西片町　玄黃社　電話小石川一三九番　振替東京七九九五番

今次大戰の國民的最高記念大出版

箕作文學博士が最後の熱血を濺ける國際的大著！

一九一四年
一九一九年
世界大戰史

後篇發行

菊判脊革天金函入千六百頁

◎地圖—石版凸版着色單色一頁乃至二頁十葉外大小八十圖
挿畫—コロタイプ二色版寫眞版同葉卅二葉・大戰年表八頁大

内容見本進呈
往復葉書申込

全部完成 特價提供

大正九年一月より特價改正

後篇特價 金八圓（定價九圓） 郵税三十錢 鮮支七十錢 臺樺六十錢

前篇特價 金七圓（定價八圓） 郵税廿四錢 鮮支六十五錢 臺樺五十錢

◎後篇三ケ月月賦拂特價應需——詳納内容見本

　箕作博士の世界大戰史は出版界近時の一大驚異也、前篇公刊の後半歳にして十萬部を普及し盡し、よく大戰の概念と教訓とを全國民の間に徹底せしめ得たるのみならず、之をヴェルサイユ會議に寄贈して佛米兩國大統領及英佛講和全權の最高批判を求め、以て世界最初の完備せる大戰史としての國際的評價を確得せり。而して今や公約の期日を違へず、前篇に繼ぎ一九一五年夏より休戰講和に至る全般の史實を網羅して茲に後篇を發行し、以て全部の完結を告ぐ。

　博士が本書の編述に從事せらるゝや、日夕寢食を忘れて討査研究に熱中せられ、又自ら苦心奔走、大類文學博士、齋藤、阿部、時野谷三教授以下協力諸家の起稿を監修整理せられ、加ふるに我陸海軍當局の終始至大なる厚意を以て貴重なる調査資料を寄與せらるゝあり、以てよく最小の時日に最大の勞作を成功せり。

　今や大戰の影響は日夜痛烈に國民の生活を脅迫して止まず、講和會議の經驗は我政府と國民とをして此際擧國一致、一層透徹せる世界的知識を研磨するに非ざれば、將來よく國際競爭の伍伴たるに耐へざるの事實を痛切に自覺せしめたる非ずや。思ふに慘澹たる兵器の戰爭總に止めるも、更に深刻なる平和の戰爭は無限に永く續行せられんとす。此時に當りて大戰全般の徹底的知識は事業に學問に一切の計畫の根幹たり判斷の基礎たるべし況や人類文明空前の一大回轉期と帝國曠古の世界的飛躍とを永く後世に記念すべき不朽の典籍として苟も教養ある國民の書架、本書一部を備ふると無くして可ならんや

發兌元 東京神田 富山房 振替五〇一 賣捌 全國書店

◉富山房出版圖書目錄進呈——往復葉書御申込次第


新春よは
專賣特許　黒中山帽
平和ダービー
ピース
純品質主義
株式會社
高橋製帽所



THE MEETING

BY SERGE VASSIEVITCH IVANOFF.

面白倶楽部

● 大發展大評判の新年號!!!

- 人情小說 武士の妻 長谷川時雨
- 歷史小說 焦熱地獄 大橋青波
- 長崎土産 萬亭夜話 遲塚麗水
- 探偵小說 雛色の眼 蘭秋郎
- 徳川情史 桂昌院 本田美禪
- 滑稽落語 成金 松迺家緑
- 新講談 鳥追おてる 鴻巣歌吉
- 武勇講談 荒木又右衛門 坂東太郎

等大傑作の他大家の筆になれる痛快讀物數十編掲載。

千紫萬紅 婦人實帳 學校及學生 演藝大福帳 等多趣味の記事頗多し

● 破天荒の大懸賞募集!!!

定價五拾錢　東京本郷駒込坂下　講談社　振替東京六六二九

平和克復の第一春

我々は、世界の人と共に、休戰の捷報を聞いて大正八年を迎へたのであつたが、今や平和克復の大業を殆ど卒へて、目出度此歳を永遠の過去に送る。歳は逝いたが併し遺された仕事は多い。平和克復の第一春は、更に踊躍の希望に充ちた我々の新しい心を鞭韃して止まない。

大正八年は實に多事な歳であつた。而してまた特筆大書すべき事件に富む歳であつた。其中最も著名な歴史的出來事は講和條約の締結と國際聯盟の成立とであらう。一部の人は其成績の不滿足なるを、衷心密に賤むべき快感を懐きつゝつぶやいて居る。巴里とヴエルサイユとを中心として如何に暗黑と光明との烈しき爭が闘はれしかよ。併し結局光明は暗黑に勝つたではないか。幾多の妥協と讓歩とが行はれたにせよ、我々は道理の勝利の途に動す可らざるを觀て、胸撫で下して大に安心したのである。

之に次いで大正八年の顯著なる出來事は、歐米諸國を通じての勞働不安である。一部の人は之を暴民の擡頭として顰蹙する。過去に於ける特權階級の過度の専恣が、其反動として下層階級の無節制なる横暴を齎せるは、許す可らざる事ではあるが、亦已むを得ない事でもある。併し勞働不安の現狀は、社會各階級の公正なる關係の發見と確立とによりて、結局安定せらるべきは、今日の趨勢に於て、略ぼ疑を容れざる所である。勞働運動も亦其根本に於ては決して惡魔の指導するものではない。

大正八年は、支那に於ける排日、朝鮮に於ける獨立の運動に依つて、更に又日本を特に多事ならしめて居る。併し一部の侵略的帝國主義者を除き、多くの忠良なる臣民は、之等の意外の出來事に因りて漸く過去の惡夢より醒めた。彼等が内外庶政の公正なる原理を諒解する上に、如何に深刻適切なる多くの教訓を之より得たかは、今更言ふの必要はない。昧者獨り迷ふも、識者は内外混亂の多事の裡に、更に光明の指導を認めて感謝の中に歳を送つたのである。

要之、大正八年は、總ての人に、強き者にも弱き者にも、此世界を住み心地よきものたらしめんが爲の異常なる努力の一年であつた。之を妨ぐる反動的勢力の抗爭に遭つて、苦戰奮闘の慘事もあつたが、勝利の榮冠の歸する所は、最早極めて明白である。

併し暗黑と光明との戰は之を以て全く了つたのではない。我等は遺されたる事業の完成のために、更に大に躍進せざるを得ない。過去に於ても我々は種々の戰を闘はせられた。が、之からの戰は、實に眞理と平和との爲めの戰である。光明我の前にあり、胸躍らざるを得んや。平和克復の第一春は、正に眞理と平和との勝利をはぐくむ永への春であらねばならぬ。

中央公論



第卅五年第一號
新年號
第三百七拾八號

煩悶の時代

丘淺次郎

一

「儘にならぬが浮世」とは昔から常に云ひ來つた言葉であるが、儘にならねば其所に必ず煩悶がある、されば煩悶の全く無いと云ふ世の中は、未だ嘗て無かつたであらう、併しながら、同じく煩悶と云ふても、其中には種々樣々の物があつて、子供の煩悶と大人の煩悶、野蠻人の煩悶と文明人の煩悶、昔の人の煩悶と今の人の煩悶と云ふ樣に互に比較して見ると其間に著しい相違を認める、また、個人個人によつて異なる煩悶もあれば、多數の人に共通の煩悶もあり、或る時期、或

る境遇に特殊な煩悶もあれば、何人も早晩出遇はねばならぬ煩悶もあらう、隨つて煩悶を除くべき方便も樣々で、容易く除くことの出來る場合もあれば、その頗る困難な場合もあり、中には到底除くことは六かしからうと思はれる場合もあるであらう。

一人一人に違ふ樣な煩悶は、子供にも、大人にも、野蠻人にも文明人にも、昔の人にも今の人にも、嘗て絕えたことは無い、例へば、棚の上の菓子に手の屆かぬ子供の煩悶とか、意中の娘との戀が成就せぬ青年の煩悶とか、教授が健康であるために何時までも位地の上らぬ助教授の煩悶とか云ふ如きものは何時の世にも必ず有る、實は、この種類の煩悶は人間に限つた譯ではなく、他の動物にも常に見られる、鎖の短いために人參を取り得ない猿の煩悶、鐵柵に隔てられて隣りの牝鹿に達し得ない牡鹿の煩悶、先着者のために皮の薄い場所を占領せられて止むを得ず、皮の厚い所で我慢するダニの煩悶などは性質に於て全く之に異ならぬ、斯樣な煩悶は、一つ一つに對する解決の方法がある故、之を除くことは不可能ではない、即ち子供には菓子を與へ、青年には娘との同棲を許し、助教授には位地を上げて遣りさへすれば、その煩悶だけは兎に角無くすることが出來る、尤も慾には限りの無いもの故、一つの煩悶が片付けば次の煩悶が現れて、煩悶その物が全く無くなることは望まれぬが、一つ一つの煩悶は何とか方法を講じさへすれば、解決せられるべき性質のものである、我らが今より論じやうと思ふのは、斯樣な種類の煩悶ではなく、子供や、野蠻人や、昔の人などの全く知らずに濟んだ、文明的、現代的の煩悶に就いてである。

二

我らは今より丁度十年前の本誌の新年號に「人類の將來」と題する一篇を載せて、人類の今まで經過し來つた道筋は、初

めは上り坂であつたが後には下り坂と成つた、即ち人類は今日下り坂の途中にあるとの考へを公にした、この説は、その後、著した「人類の過去、現在及び未來」の中にも、「生物學講話」の中にも簡單ながら書き加へて置いた故、今より述べんとする所も、之を基礎としたもの故、一應その要點だけを次に掲げる。

人類も原始時代には猿と同樣に小さな團體を造つて生活して居たもので、その頃には小さな團體同志で激しく相爭ひ、負けた團體は亡び失せ、勝つた團體のみが生き殘り、長い間、斯かる生活を續けて居る間には、自然淘汰の結果として、團體生活に適する性質が次第に發達し來つた、團體生活に適する性質として最も大切なのは、生まれながらに互に協力一致せずには居られぬと云ふ性質である、而して、人類や猿の如き階級型の團體を造る動物では、團體内の協力一致が充分に行はれるためには、誰もが上の者に絶對に服從すると云ふことが、最も有效である故、團體間に生存競爭の續く間は服從性は追々、完全に發達して來た、然るに人類は他の動物と違ひ、何をするにも道具を用ひる故、團體と團體との競爭にも、道具の進歩した物の方が勝つ見込みが多い譯で、其ため道具は時と共に段々精巧になつたが、道具が精巧になれば、それに伴ふて、團體は次第に大きく成らざるを得なかつた、何故と云ふに、團體は大きなほど強い筈ではあるが、道具が幼稚な間は、一定の際限を超えると、全部の統一が保たれず却つて不利益が生ずる、今日でも野蠻人は皆、小さな部落に分れて居て、國と名づくべき程の大きな團體を造り得ないのは其ためである、之に反して、道具が精巧になれば、命令を傳へるにも、兵糧を運ぶにも少しも困難を感ぜぬ故、團體は何所まで大きく成つても差支へは起らぬのみか、大きく成つただけ有力となる、所が團體が段々大きく成ると、團體間の競爭の勝負が容易に片付かず、且たとひ、一方が敗れたとしても團體中の者が悉く殺される譯ではなく、僅に一小部分の者が死ぬだけで、殘りは相變らず生存し繁殖する故、團體を單位とした自然淘汰は全く行はれぬことに成る、而して自然淘汰が止めば、その時まで自然淘汰の働きによつて、養成せられ、または

維持せられ來つた性質は退化し始めるを免れぬ、前にも述べた通り、人類の團體生活に必要な性質として、自然淘汰によつて養成せられ來つたのは、協力一致の實を擧げるための服從性であつたが、自然淘汰が止んだ上は、この性質は退化するの外はなく、服從性が退化すれば、階級型の團體は到底協力一致の實を擧げることは出來ぬ、元來が團體生活を營む動物でありながら、團體生活に必要な性質が少しづゝ減じて行くとすれば、之は已に運命の下り坂に向ふたものと見做すの外はない。我らが人類は今日已に下り坂の途中にありと云ふのは即ちこの意味に於てである、而して或る程度まで文明が進めば、誰にも必ず文明に伴ふ一種の煩悶の起ることは、この說によつてのみ、理由を了解することが出來る樣に思はれる。

三

以上述べた如く、人類の過去には、上り坂の時代と下り坂の時代とがあり、上り坂の時代には、自然淘汰の働きによつて團體生活に適する性質が次第に發達し、下り坂の時代には、自然淘汰が止んだために、斯かる性質が段々退化したものとすれば、今日の人類社會に何れの方面にも限りなく矛盾の存することが、容易に理解せられる、上り坂の頃には協力一致の方便としての服從性が、盛に養成せられた故それに基づいた風俗習慣が出來上つたが、下り坂に成つてからは、この性質が少しづゝ退化したために、その反對の性質が、何時となく發生し、それを基とした新思想が段々と現れて來た、服從性の反對の性質とは、自由平等を求める性質であるが、服從性が減じたと云ふのと、自由平等を求める性質が現れたと云ふのとは、實は同一の事を別の言葉で云ふて居るに過ぎぬ、恰も白が勝ち相になつたと云ふても、黑が負け相になつたと云ふても、事實に變りがない樣なものである、さて如何なる性質でも自然淘汰の働きが止んだからと云ふて、全部遂に

消え失せるものではなく、その後も隨分長い間、繼續することは、尾の骨や耳を動かす筋肉が今日の人間にも尙存するのを見ても明かであるが、上り坂時代に發達した階級型の團體に固有な絕對服從の性質は、下り坂に成つてからも依然として繼續し、團體の大きく成ると共に、階級の數も追々增して、一時は巍然たる階級制度の形を現した、今日も尙その引き續きとして、社會は大體昔のままの階級制度が行はれて居る。

社會が最上から最下まで幾段かの階級に分たれ、各階級ともに、上の者には絕對に服從し、下の者には無限に威張るのが階級制度の特徵であるが、斯樣な世の中に住んで居ても、昔ながらの服從性を尙多量に所持して居る人ならば、少しも煩悶が起らぬ、服從性を備へた人が階級制度の世の中に住んで居るのは、恰も魚が水の中に住んで居るのと同じ譯である故、上の者には恭しく頭を下げ、下の者には恭しく頭を下げさせて、之を當然の人間生活であると思ふて居る、上の者から貰ふた物は、寶物として大切に保存し、上の者に贈つた物が受納せられれば、之を非常な名譽と思ひ、上の者の前で畫でも書けば、之を無上の光榮と心得、上の者から一言ものを云はれただけでも有難くて堪らぬ樣な人間は皆、この仲間に屬する、階級が一つ上つて、制服が變れば、直に之を着て喜ぶ如きも、服從性を尙多量に備へて居る徵である、若しも世の中の人間が悉く斯樣な人のみであつたならば、他の動物と同樣の個人的の煩悶は有るとしても、それ以外の煩悶は起らずに濟んだであらう。

所が、人類の徑路が下り坂となつてからは、服從性が次第に減少し、其ため物の考へ方が大に改まつて來た、尤も總べての人が同じ步調で變化する譯ではなく、早く變る人もあれば晩く變る人もあり、死ぬまで變らぬ人もある故、今日の所では已に變つた新しい人と、未だ變らぬ舊い人とが軒を並べて生活して居る有樣である、舊い人は前に述べた通り、今日の階級制度に對して別に煩悶も起さぬが、新しい人の方は心の中に信ずることと、目の前の社會の制度とが、餘り甚

だしく違ふ故、到底煩悶せずには居られぬ、服從性の退化した人から見れば、今日の社會は實に理窟に合はぬことだらけで、先づ第一に、同じ人間に人爲的の階級を附けて區別することが、不條理千萬と思はれる、裸にして見れば彼と我との間に何の別も無いのに、彼は社會の上流に立つて、衆人に尊敬せられ、我は遙に、その下に置かれて、世の輕蔑を受けるのは何故であるか、彼は懶けながら贅澤の限りを盡し、我は日夜働き續けて、而も貧乏に苦むのは何故であるか、何故曾て一回も我を助けたることなき彼に敬意を表せねばならぬか、何故我よりも智慧が優れたりと思はれぬ彼の命令に從はねばならぬか、その他此は何故か、彼は何故かと、不審を起して見ると、一つとして正當と思はれるものは無い、物の考い方が、この程度まで進んだ後に自分の過去を振り返つて見れば、よくも今までこの樣な不條理極まる世の中に平氣で生活し來つたことよと驚かずには居られぬ、また自分の周圍の人々が、平氣で居るのを見れば、その無感覺の狀態が恰も眠れる有樣に異ならぬ故、自分等だけが、他よりも先に目覺めたものと信ぜざるを得ない、覺醒とは卽ちこの事である、而して一旦覺醒した以上は、服從性の上に築き上げた舊來の階級制度に自身を嵌めることが非常の苦痛であるが、世の中は一朝一夕に改まるものでない故、山に隱れるか、自殺するかせぬ限りは、苦痛を忍んで、有り合せの世の中に自身を嵌めるの外に致し方はない、現代の社會は大體が昔の階級制度のまゝで、風俗でも習慣でも皆、階級制度を基礎としたもの故、覺めた人が心の中に信じて居ることとは到底一致しない、されば今日の文明諸國に於て、覺めた人々が止むを得ず古い習慣に從ふて動作して居る樣子は丸で、曲馬の道化役者が、見物人の機嫌を取り結ぶために、心にも無い滑稽を演じて居るのと同じく、實に憫然の至りである、如何に渡世のためとは云ひながら、よくも此樣な馬鹿げたことが、臆面もなく出來たものであると考へては、自身で自身を輕蔑せずには居られぬが、自身を輕蔑せざるべからざるに至つては、煩悶も隨分甚だしからざるを得ない、昔から娼妓の職業を苦界と名づけ來つたが、己れの欲せぬことを我慢して務めながら、恰も喜んで務めて居

る如くに裝はねばならぬ苦みから云へば、今日の覺めたる文明人の生活は一種の苦界なりと云ふことが出來やう。

服從性が退歩して自由平等を求める樣になるには、知識の程度が大に關係する、之は歴史を見ても明なことで、最も早く自由平等の叫び聲を聞いたのは最も早く文明の開けた國々である、また同じ時代に住む人間では、知識の低い者は容易に覺めるには至らず、書物でも讀む樣な階級の者だけが先づ覺める、されば、此所に述べた如き煩悶は、子供にも無く、野蠻人にも無く、たゞ或る程度まで知識の進んだ者のみの有する煩悶であるが、今後は教育は益々普及し、知識は益々進むであらうから、覺めた人の數はたゞ增すばかりで、早晩文明人が悉く、この煩悶に堪え兼ねる時代が來るであらう。

四

以上は文明の進むに隨ひ、各個人に激しき煩悶の起ることの避けられぬ次第を述べたのであるが、煩悶は個人にのみ起る譯ではない、世の文明が進めば民族としての煩悶も生ずる、先づ如何なる民族には、民族としての煩悶が無いかと云ふに、之は自己の民族を以て、一番優れたものと思ふて居る民族である、地球上に住む民族の數は多いが、我が民族に優る民族は他に決して無いと思ふて居る間は、心の中は泰平であつて、民族としての煩悶は有り得ない、然らば斯かる民族は何所に有るかと云ふに、隣りの民族との競爭に負けるまでは何れの民族でも斯樣に考へて居る、また少し位、負けても、回復の望みが絕無でない以上は斯樣な考へを容易に捨てぬ、大概の野蠻民族は皆、斯く信じて居た、今日と雖ども、斯く信じて居るものが甚だ多い、而して何れの民族にも自己の民族が他よりも優れて居ることの證據となるべき口碑や傳說があつて、代々之を語り傳へて、自己の民族が世界に最も優れたるものなりと確信して居る。

斯樣な時代が何時までも續けば、誠に結構であるが、文明の進歩は到底之を許さぬ、未だ世の中の開けぬ頃には交通の

便が缺けて居るために、同じ地球の表面に住んで居ても、稍遠い所に居る他の民族とは接觸する機會が全く無い、此所より五千里隔つた所には、足の長い人種が居るとか、一萬里隔つた所には胸に孔のある人種があるとか、様々の噂を聞くだけで實物を見ることは一度も無い故、假に自分より遙に優つた民族が他にあつても、彼と我とを並べて比較して見ることが出來ぬために、我の劣つて居ることには少しも心附かずに居られた、然るに文明が進んで交通の機關が急激に發達し、汽車や汽船が盛に往復する様になれば、如何に世界の片隅に引込んで居た民族でも、他と接觸することを避ける譯には行かぬ、ヴエルヌが「八十日間世界一周」を書いた頃には二ケ月と二十日も掛かつて、地球を一周することが架空の小說と思はれて居たが、其後鐵道が延び、汽船が大きく成つたために、今日では、誰にも出來る尋常のことと成つた、飛行器を用ひれば、その三分の一の日數でも容易に世界を一周することが出來やう、斯くの如く交通の機關が發達すればそれだけ地球が小さく成つたも同様で、何れの民族も互に相接觸せざるを得ぬこととなるが、異民族の接觸する所には、其所に競爭が起ざるを得ない、彼の欲する物を我が有するか、我の欲するものを彼が有するか、彼と我とが第三者の有する同一の物を欲するかの場合には、到底衝突を免れぬが、衝突すれば力の優つた民族が勝ち、力の劣つた民族が敗けるの外はない、自分よりも優つた民族からの壓迫を受け、自分の意志を曲げて、相手の主張に服從することを餘儀なくせられるときに、民族としての煩悶が生ずる、彼が勝ち我が敗けたと云ふ目前の事實を見ては、誰の胸にも、我は今まで信じて居た如くに、世界第一の民族では無いのではなからうかとの疑ひが起らざるを得ず、一旦この疑ひが起れば最早昔の如くに枕を高うしては眠られぬ、而して斯かることが度重なれば、その度毎に煩悶の度が高まり行くべきは勿論である。

文明の進むに伴ひ、民族としての煩悶の起るべき尚一つの原因は、服從性の退化である、何れの民族でも、團體内のよく治まつて居ることを第一の誇りとして居るが、世が開けるに隨ふて、この事が次第に六かしく成つて來る、如何なる民族

でも理解力が增すと同時に、服從性の退化するを免れぬが、服從性が退化すれば舊來の階級制度を面白く思はず、上に位する者に敬意を表することを肯ぜぬ樣な人間が續々と出て來る、我が民族を世界第一なりと思ふ考への中には、階級制度の完全に行はれて居ると云ふことも、その一ヶ條として含まれて居た故、この事が少しづゝ崩れ行く形跡が見えては、今までの誇りの一部が傷けられたことに當り、今後如何に成り行くかとの心配が生ずる、階級制度のよく行はれるのは、素より服從性の旺盛なるによる故、世の治まれることを誇るのは即ち服從性の未だ退化せぬのを自慢して居たに外ならぬが、文明が進めば服從性の退化は到底防ぐことが出來ず、早晩この方面にも民族としての煩悶の生ずる時代が來るのを免れぬ。

五

四五年前の新聞に出て居たことであるが、二十六歳になる盲の女が、手術を受けて、初めて目が見える樣に成つたときの感想に、今までは、世間を遙に奇麗なものと想像して居た、目を開いて見て、その意外に汚ないのに驚いたと書いてあつた、またある脚本に盲目の夫婦が、兩人とも目の見えぬとを非常に歎き、觀音樣に願を掛けて一心不亂に祈つた所が、靈驗によつて兩人ともに同時に目が見える樣に成つた、併し互に顏を見合はすと、今まで心の中に想像して居た樣な美男美女ではなくて、頗る醜い顏であつたので、之ならば元の盲で居た方が幾らましか分らぬと云ふて、却つて觀音を怨む所が作つてあつた、總べて、美しいと想像して居たものゝ實物が醜いとを見出したときには誰も失望して、不愉快を感ずるが、それが自己の屬する民族である場合には、深く煩悶せずには居られぬ、文明が進むに從ふて各個人に煩悶の起るのは、無感覺から有感覺に移つたのである故、之は熟睡から目醒めたのに比較することが出來るが、世が開け行くため

に各民族に煩悶の起るのは、幻覺から目の覺めた狀態に移るのである故、恰も樂しい夢を破られたに均しい、而して樂しい夢を破るものは、先づ第一には他民族からの壓迫である。

今まで我が民族は世界無類の優等民族なりと自負して居た所へ、遂に他の民族が押し寄せて來て、種々のことを要求する、或は港を開けとか、居留地を定めよとか、鐵道を掛けさせよとか、鑛山の發掘を許せとか云ふて來る、先方に云はせれば一々尤もの理由があるが、當方から見れば何れも無理難題である、之を承諾すれば先祖代々我が民族のみで占領し來つた國內に他民族の勢力が入り込んで來る、而も、之を拒絕するには武力に訴へるの外に途はない、敵を知らず、己を知らず、兵力を用ひれば、忽ち打ち敗られて、前に幾倍する苛酷な要求を承知することを强いられる、斯かることが二三回も重なれば、如何に自負心の强かつた民族でも、我が民族が世界一なりと信じ續けることは出來ず、樂しかつた夢から搖り起されて、我が民族は相手の民族よりも劣ると云ふ醜い現實を認めねばならぬこととなる、人間にも少々位搖り動かしても夢の覺めぬ者がある通り、民族にも何回も搖られながら泰然として眠り續けて居るものが無いでもないが、目前の事實は何より雄辯である故、數回、我が無力なることが示されれば、大概のものは昔の夢から覺めて、それと同時に民族としての煩悶を始める。

文明が進めば服從性が退化するために、傳來の階級制度が少しづゝ亂れて行くことも、或る民族をして煩悶せしめる。上に位する者に對して、敬意を表せぬ者や、敵意を含む者が、少しづゝ現はれ始めても、最初の中は、之を全くの例外と見做し、再び有るまじきこととして心を安んじて居るが、同樣なことが、三度四度と重なると、徐々と心配に成つて來る、他の民族は兎も角、我が民族に限つては、斯かることは未來永劫決して有るまじと思ふて居た不祥事が、屢々起るのを見ては、若しや之は、例外ではなくて、當然斯くあるべき時代が到着したのではないかとの疑ひが生じ、又には疑ひが固ま

つて、愈々それに違ひないと考へるに至る、トルストイの「クレイツェロヴア、ソナタ」の中にある男が、結婚後間もなく夫婦喧嘩をした頃には、一度一度の喧嘩を過ちのために生じた偶發事件で、注意さへすれば、再び起るのを避けることを得るものと思ふたが、今から考へれば、それは全く誤りであつて、實は喧嘩は當然喧嘩の起るべき深い理由のために起つたのであつたと云ふた如くに、階級制度に反する樣なことを敢へてする人間の出るのも、最初こそ偶發的に見えるが、更に深くその奧を探れば、當然斯かる者が出ねばならぬ時代に達したのである、斯く氣が附いて見ると、今まで我が民族ばかりは別であると思ひ込んで居たのは、夢であつたと知れて、其所に煩悶が始まる、前にも述べた通り、長らく樂しんで居た美しい夢から揺り起され、醜い現實の我身を見せ附けられては、誰も煩悶を禁じ得ないであらうが、民族としは今まで世界第一と思ふて居た夢を破られて、我の劣つて居る現實を明に認めねばならぬ時や、我が民族ばかりは大丈夫と思ふて居た夢から起されて、頗る不用心なることを目の前に見た時などに、最も大なる煩悶が起るであらう、而して、この二つは、大槪の民族が野蠻から文明に進み行く途中に必ず通過せねばならぬ關所である。

六

以上は文明の進むに隨ふて、當然生ずべき個人の煩悶と民族の煩悶とに就いて簡單に述べたのであるが、次に人類としての煩悶なるものが有るや否やと云ふに、之は今日の所では未だ何所にも無い樣に見受ける、煩悶は美しい夢から覺めて醜い現實を見たときに起ると云ふたが、今日の人類は未だ美しい夢を見て居る最中である故、人類としての煩悶を全く知らずに居る、人は萬物の靈なりと昔から云ひ來つたが、斯く信じて居る間は、人類としての煩悶は決して起らぬ、神は天地萬物を造つた後に自分の姿に似せて人を造つた、それ故人は總べての物の上に位すると思ふて居れば、人類としては心

中大に安んじて居られる故、何も態々煩悶するに及ばぬ、生物は下等のものから次第に高等のものに進化し來つたが、人類はその最も高等のもので、今後は更に一層高等のものに成るべき筈であると考へて居る人も、略々之と同樣の狀態にある、斯くの如く、考への形は、人々によつて樣々に違ふても、人を萬物の靈と見做す點に於て悉く一致して居るが、我らから見れば、之は何れも美しい夢に過ぎぬ。

人類をして斯樣な美しい夢を見させて置く事情は澤山にある、先づ第一には今日人類を相手として、對等の競爭をなし得る動物が一種も無い、之が人類をして極度に自惚れしめた最大の原因であるは云ふに及ばぬ、人類は牙も短かく爪も鈍く到底他の猛獸と戰ふに適せぬ樣な身體を持つて居ながら、總べての動物に打ち勝つたのは、全く優れた智惠の働きによつて、牙や爪よりも更に有力な武器を造り用ひたからであつた、されば智惠に於ては、人類は遙に段を隔てゝ他の動物の上に位する、この點では人は萬物の靈と稱して少しも無理はない、而して昔の人に比すれば今の人の方が智惠が優り、野蠻人に比すれば文明人の方が智惠が優り、その文明人の智惠が日々增して行く所を見ては、人類が今日盛に上に向ふて進みつゝある如くに思ふのも決して無理ではない。

人類が智惠の力によつて進るものは道具である故、智惠の進步は道具の進步によつて直接に示される、昔の道具に比して今日の道具の優つて居るは云ふまでもないが、特に著しくその進步したのは最近百年ばかりの間である、今日文明の利器と稱して、人類の最も誇りとするものは、何れもその間に發明せられた、而もそれが絕へず改良せられ、昨日の新式も今日は已に舊式として捨てられる、飛行機、潜航艇、無線電信、無線電話など昔の人の夢にも知らなかつた精巧な器械が造られ、蒸汽機關の如きは、今日では最早前世紀の遺物であるかの如くに感ぜられる、外國の新聞雜誌には、新發明新發見が每日の樣に發表せられ、各方面ともに少しでも油斷すれば、忽ち時勢に後れて了ふ、實に今日ほど速に文明の進

步する時代は嘗て無かつた所で、此勢で進んだならば、終に何所まで達するやら、到底想像も出來ぬ樣な有樣である。

尙人類の自負心を昂るのは、自然の征服と云ふ言葉である、之はたゞ道具の進步を別の言葉で云ひ現はしたに過ぎぬが、この言葉を聞いただけでも、人類は今日誠に急勾配の上り坂を勢ひよく駈け登りつゝありとの確信が起る、燈を點じて夜を明るくし、薪を焚いて冬を溫くしたのを手始めとして、堤を築いて洪水を防ぎ、池を乾して、田を造り、鐵砲を以て猛獸を退治し、藥品を以て黴菌を驅逐した、汽車、自動車、タンク等によつて陸を征服し、汽船や、潜航艇によつて海を征服し、飛行機飛行船によつて空を征服した、夜は水を使役して、燈をつけさせ、夏は石炭を使役して、氷を造らせる、天地萬物一として、人類に征服せられぬものは無く、且日々征服の範圍が廣まつて行く、この有樣を目前に見て居るのである故、人類は今日盛に進步しつゝありと誰もが考へるのは、素より當然のことである。

以上の如き物質的方面に關することの外に、精神的方面に於ても、人類は今進步しつゝありとの考へを起さしめる事情がある、それは文明の進むに隨ふて、個人が追々覺醒したことである、自由平等を求めることを知らず階級制度に盲從して居た頃の精神狀態を振り返つて見ると、覺めて後の精神狀態は慥に一段上に進み來つたと考へざるを得ぬ故、誰も人類は精神的にも進步の最中であると信じて居る、解放せよとか、人格を認めよとか云ふのは即ち進步の徵である如くに思はれる、その他哲學とか宗敎とか云ふ方面の學問が盛に行はれ、その硏究の結果として、新しい學說が續々と發表せられることなども大にこの觀念を固くするに與つた、要するに今日は、人類は今、盛に上に向ふて進みつゝありと誰もが信じて居る時代である。

我らの考へは前にも述べた通り、少しく之と違ふ、我らの說によれば、人類は小さな團體を造つて、互に激しく競爭して居た頃までは上り坂にあつたが、その後、智惠が增し道具が精巧にたつたために、團體が過度に大きく成つてからは、

次第に下り坂に移つた、上り坂とは生まれながらに、協力一致をせずには居られぬと云ふ、團體生活に必要な性質が段々發達し來つた時代を云ひ、下り坂とは、この性質が追々退化し來つた時代を云ふ、凡そ如何なる生物でも、その生活に適する性質が進歩する時代が、その種族の運命の上り坂であり、斯かる性質が退化し始めれば、之はその種族の運命が已に下り坂に向ふたものと見做すの外は無からうが、この事を人類に當て嵌めて考へて見ると、元來團體動物として發達し來つたものに、團體生活に必要な協力一致の性質が少しづゝ減じ行くとすれば、之は當然、已に運命の下り坂にあるものと認めねばならぬ、如何に器械が精巧になり、交通が開け、敎育が進歩し、思想が發達しても、團體動物の一なる人類は、目下自然淘汰の中絶のために團體生活に必要なる性質を漸々失ひつゝありと云ふ生物學上の斷案は、決してそれによつて、動かさるべきものでない、この考への上に立つて、今日の社會を見渡すと、個人としてさへ、未だ目の覺めぬ舊思想の人等は云ふに及ばず、自由平等を求めて解放を叫ぶ新らしい人等も實は、個人として目が覺めたと云ふだけで、人類としては未だ樂しい夢を見て居る最中である。

然らば今日の世の中には、人類としての夢を覺めさせるべき事情が全く無いかと云ふに、之は、氣が附いて見れば、已に無數にある、勞働問題とか生活問題とか、社會問題とか政治問題とか總べて問題と名の附くものは皆、睡れる人類を搖り動かして居るのである、昔は無くて濟んだ問題が今は無數に現れ、而も、何れの問題も時と共に益々複雜に成つて、何時片付くことやら少しも見込みが立たぬ、これ等の問題は皆聲を勵まして、「オイ人間、貴樣は之でもまだ、自分は萬物の靈で、急速力を以て天に昇りつゝありとの夢から目覺ぬのか」と怒鳴ながら、頻に人類を搖り動かして居るのである、斯く搖られながら一向平氣で、夢を見續けて居る人類は、實に呆れ果てた寢坊と云はねばならぬ。

七

古本の目錄で「總べての鍵」(Clavis universalis)と云ふ表題を見たことがあるが、人類は今日已に下り坂にありと云ふことを承認するのは總べての問題に對す鍵を得たことに當る、但し一々の問題を解決し去るための鍵ではなく、何れの問題も容易に解決の出來るものでないと云ふ理由を知るための鍵である、今日續出する種々の問題は、その眞の源まで溯れば、必ず人類に協力一致の性質が退化したために起つたもので、例外と見做すべきものは一つも無い、協力一致の性質が盛である間は同一團體の內で、爭ひの起ることは絕無であるが、この性質が退化すると、同じ團體の內でも、利害の關係を異にする部分の間には爭鬪が始まる、今日何問題何問題と云ふて世人の喧しく論ずるものは、恐く同一團體內の部分間の衝突に基づいて居る、されば人類の協力一致の性質が退化すべき原因が依然として存し、この性質は今後も益々退化して行くものとすれば、何れの問題も容易に解決せらるべき望はない、今後は恐らく舊問題が未決のまゝである所へ、新問題が續々と現れ、一つとして、完全な解決の道の無いのに苦しむであらう、Influenza は一昨年來全世界の人々を惱ましたが、將來の人類を大に惱ますものは Insolvenza であらうと推察する、斯くて種々の厄介な問題が續出し、日々の生活にも不安を感ずる樣になれば、如何に寢坊の人間でも樂しい夢を見て居る譯には行かず、止むを得ず目を覺ますであらうが、その時から人類としての煩悶の時代が始まる。

人間の徑路が已に下り坂であることに心附いた者が今までに一人も無かつた次第ではない、昔から末世とか澆季とか云ふ言葉を常に用ひ來つたが、末世も澆季も、過去の徑路に比して、その時が一番下に降つて居るとの意味である、而して二千年前も、千年前も百年前も今日も、何時も、その當時が澆季であるとすれば、道は、何所までも下り坂であつた

に違ひない。然るに、口には常に澆季とか末世とか、云ひながら、人類が今日眞に下り坂にあると思はなかつたのは何故かと云ふに、之は、人類が下り坂に在らねばならぬ眞の理由を知らなかつたために、たゞ何等かの過失に基づく一時的の現象であると考へて居たからである、過失に基づく、その場限りの現象と見做す以上は、その過失さへ除けば、之を常態に回復することが出來る理窟になるが、この事を企てたのが、即ち宗教である、何れの宗教でも世を救ふことを目的とせぬものは無いが、人類が上り坂に在る間は何も之を救ふ必要はない、下り坂で、何所まで、落ちるやら知れぬ故、之を見兼ねて、救ふて遣らうとの大慈悲心を起す者が出たのである、されば、昔から宗教があつたと云ふことは、人類は更にそれよりも遥に昔から、已に下り坂にあつたことの證據と見做すことが出來やう。

さて人類の生まれながらに有する協力一致の性質が次第に退化し行くとすれば、今後は、協力一致を要する樣な仕事は段々行はれ難く成るものと覺悟せねばならぬ、協力一致には先づ私慾を捨てゝ掛かることが、必要であるが、私慾は、今日の世の中では、個人を單位とした自然淘汰によつて、益々發達するであらうから、之を捨てさせることは、素より無理な註文である、個人が私慾を捨てず、隨つて、團體は協力一致することが出來ぬとすれば、何れの問題でも解決は頗る六かしからざるを得ない、個人としては目覺めても、人類としては未だ夢を見て居る人々の中には多くの理想家があつて、斯くすれば、世の中が善くなる、斯く改めれば理想の世界が來ると、心中にも考へ、發表もしたが、何時も人類の協力一致の性質が退化して行くことに心附かぬために、折角の考案も、夢以上のものとは成らぬ、新しい人だけが寄つて、他の人の居ない所に新しい村を造り、自分等の理想通りの生活をしやうと試みた例はアメリカあたりには幾らもあつたが、以上の理由によつて悉く失敗に終つた。珍らしい間こそ、無事に面白く暮せるが、本來の性質を長く矯めることは不可能である故、其中には思ひ設けぬ衝突などが始まり、終には止むを得ず、離散して、元の出來合ひの世の中

に居らねばならぬことに成つた、同志の者だけが寄つてさへ、その通りであるから、誰も彼も雜居して居る廣い世の中を理想通りに改良することは到底望まれぬ、近頃喧しい勞働問題の如きも、ゾラの「トラヴァイユ」に書いてある樣に、資本と知識と勞働とが、よく調和して、全市が、愉快に榮えれば、何より結構であるが、斯樣なことは、小説の外には見られぬ、我らは嘗て、この本を讀んだときに、若しも自分がゾラだけの筆を持つて居たならば、前半だけは其まゝとし、後半には、誰が惡意を有するのでもなく、誰が失策を演ずるのでもなく、全く人間本來の性質のために、「クレシユリー」工場に大悶着の起る有樣を最も自然的に書いて見たいと思ふた。

或る問題が起れば、それを解決するために、多勢の人が集まつて會議を開くが、斯樣な會議で如何なることを議決しやうとも、それが、人間の性質として出來ぬことならば、結局何の役にも立たぬ、恰も鼠が寄つて滿場一致で、猫に向ふことを議決しても、何にも成らぬのと同じである、而して、如何なることが人間の性質として出來ぬかと云ふと、私慾を捨てゝ協力一致することであるが、この事が行はれねば、殆ど總べての問題は無解決に終る、一時の彌縫策は或は出來るとしても、根本からの解決は到底出來ぬであらう、斯くして、無解決の問題が殖えれば、殖えるだけ、人類としての煩悶は増進せざるを得ない、已に前にも云ふた通り、今日は、個人としては大に目覺めた人は有つても、人類としては未だ夢を見て居る最中である故、人類としての煩悶は無いが、其中には樂しい夢が覺めて、醜い現實を認めねばならぬ時が來るに違ひない、それが、人類としての煩悶の始まる時であつて、其後は現實の暴露する毎に煩悶の掛け増すばかりであらう。

八

最後に誤解を避けたるめに一言して置きたいのは、以上は、人類の過去及び未來を第三者として、側面から冷靜に觀察

した結論に過ぎぬとのことである、斯く成ればよいとか、斯く成つては困るとか云ふ如き自分の希望や憂慮は一言も云ふたのではない、例へば文明が進めば、器械が精巧になり、團體が大きくなつて、其ために人類の協力一致の性質が退歩したと云ふても、決して文明を呪ひ、野蠻に歸れと主張する譯ではない、今日の世の中で文明に進むことを躊躇すれば忽ち他の民族の壓迫を受けて苦しまねばならぬ故、否でも應でも文明は出來るだけ進めねばならぬ、また自由平等を標準として、世の中を改造しても、中々理想の世界には成らぬと云ふても決して、自由や平等が無用であると說く譯ではない、自由、平等を求めるのは、人類の進むべき唯一の道筋であつて、之を避けては、先へ行くことは出來ぬ、如何に改造しても中々理想通りには成らぬと云ふたが、之も決して改造を不必要と考へたからではない、現狀のまゝで長く續いては、大多數の者は到底我慢が出來ぬ故、之を打破することは無論必要である、人類は下り坂に成つてから、服從性が退化して其ために團體の纏まりが惡くなつたと說いたが、之も決して服從性を復古せしめたいと云ふ議論ではない、たゞ事實は斯くの如くであると云ふたに過ぎぬ、要するに、我らの述べた所は、人類生活の舞臺を棧敷から見物して居る心持ちで、觀察し得た所を有りのまゝに書き連ねたまでゞある。

人類の生まれながらに有する協力一致の性質は追々退化するを免れぬが、其ため、却つて協力一致の範圍が廣がつたかの如き外觀を呈する場合がある、之は、一寸不思議に聞えるが、實は何でもない、凡そ聯合とか、同盟とか云ふことは、共同の敵を目の前に控へた時には、誰と誰との間にも容易く行はれる、呉越同舟とは卽ち斯かる場合を云ふのである。協力一致の性質が退化すれば、團體は、利害の相反する若干の部分に分かれざるを得ぬが、これ等が互に相鬪ふに當つては、他の團體に屬する同じ境遇の者の助を借りるのが得策である、例へば甲民族の勞働者が資本家と相戰ふ際には、乙民族、丙民族などの勞働者と聯合するのが最も有效な方法に違ひない、斯くなれば、資本家は、また資本家として、

異民族の間に連絡を保つ方法を講ぜねばならぬ、他の方面に於ても總べて之と同様で、共同の敵に對して自分の利益を護るためには種々の聯合が出來るであらう、而して交通が樂になり、世界が狹くなつただけ斯様な聯合も多くは世界的のものとなるが、之だけを見ると、人類は今後益々廣く協力一致し得るものの如くに思はれ、今までの文明は鬪爭の文明であつたが、將來の文明は聯合の文明であると論ずる人までが出來る、併し、聯合は何時も共同の敵に對してのみ造られるもの故、實は競爭を目的とする一方便に過ぎぬ。

人類が今、下りつゝある坂路は左は絶壁で、攀ぢ登ることは出來ず、右は斷岸で落ちれば助かる見込みは無い、其所を多くの異なつた民族が押し合ひながら下りて行くのであるから、餘程用心せぬと險呑である、幾多の民族は今までの途中に谷に押し落されて、已に絶滅した、將に押し落されんとして居る民族は今日幾つもある、文明とは他の民族を押し落す様に、我が民族は押し落されぬ様にと、一生懸命に互に押し合ふときに用ゐる武器の名に過ぎぬ、文明の劣つた民族は續々斷岸から突き落されて亡び失せ、文明の優つた民族は互に押し合ひながら坂を下りて行く、人類は天國に昇りつゝありと云ふ樂しい夢から覺めて、ダンテの「インフェルノ」にも似たる、現狀に心附いたならば、煩悶の起るは當然であるが、この人類としての煩悶は、目の覺めて居る間は、到底減少する見込みはなく、恐らく次なる絶望の時代まで繼續するであらう。

生活不安の眞相

ドクトル(經濟學)
法學博士　森本厚吉

(一)總論

「生命程貴重な富はない」と云ふ、ラスキンの警句は確に意味深遠な眞理である　併し今日の樣に經濟的壓迫が力強くて、經濟生活の脅嚇される事の甚だしい時には、自然此眞理が閑却され、生命の保全といふ事よりも、物質的富の獲得の方が大切であるかの如き感が起らざるを得ない。近くはセイリグマンが「經濟學の目的は富を安價にして人を高價ならしむる法を說明するにあり」と力說して居る。是亦眞に穿つた眞理である、然るに我經濟界に於て之を見るに、國民の大多數は孜々として勞するにも拘はらず、其報酬は甚だ少額にして、生活の資料さへ充分に得る能はず、到底生活の向上に力を盡すが如き餘裕を有して居ない。恰も人は富の生產の爲めに存在せるかの如く、生命を犧牲に供してまでも生產の爲めに、苦しい勞働に從事しなければならぬ境遇に置かれて居るのである。從て彼等の生活狀態は眞に憐むべきものであつて、歐米先進國民と比肩して能率多き生活を營む事は現在では先づ難事と思はれる。

今や勞働問題は、唯一の經濟問題であるかの如くに、盛に論議され、國際勞働會議には代表者を派遣して、之に參加せしめ、勞働改善の策を討議しつゝあるのである。勞働非商品、八時間制、婦人及未成年者勞働制限、等に於て夫々何等かの解決を得て、やがて我國に於ても然るべき勞働條件改善に益ある法規の制定を見るに至るであらう。然しながら、勞働問題の根本は、勞働の能率である事を忘れてはならぬ、凡ての勞働條件に關する事項は如何に重大視されて居るものでも、勞働能率問題に比すると、皆枝葉の問題である。例へば勞働八時間制は、一定時間内の、勞働能率の如何によりて始めて決定すべき枝葉の問題である。然るに勞働能率の著しく相違せるものに對して同一の時間制を實施せんとするが如きは、恐るべき誤りである。勿論我國に八時間勞働制を實施する事は、根本的には、眞に當然の事

であるが、之を實施すると同時に、勞働者の能率增進方法に一層力をつくして歐米先進國の勞働者と同等のものに引き上げる事をしなければ、産業界に莫大なる損失を招くに至る事は明かである。

而して勞働能率は勞働者の體力、智力、及び德力の如何に依りて決定せらるべきものである。我勞働者が果して、歐米勞働者の夫に比して、遜色なき程度まで、夫等の力を有するや否や、或は直ちに之等を養成し得るや否や、之れが國際勞働問題の先決問題である。此根本論を徹底的に考究せずして、枝葉問題である勞働條件を國際的に決定するが如きは、我産業界を攪亂する甚だしきものと謂はねばならぬ。

國民の體力、智力及び德力の泉源は生命にして、生命の保全は健全なる生活を營む事に依りて、初めて期し得べきものである。故に勞働問題否凡べての經濟問題の根本論は、國民の生活問題に歸すべきもので、國民の生活狀態如何が、國の經濟進歩を左右するに至るのである。然らば我國民の生活狀態は如何なるものであるか。

我國は過去半世紀に非常なる進歩をしたのであるが、其進歩は主として物件的のもので人事殊に生活に關するものは、頗に遲々たるものである。故に國民の生活狀態の如きは、德川時代と大差なく、甚だしき時代遲れなるにも關はらず、眞面目に之を顧慮するものが甚だ少いのである。世界文明國で我國民程不合理で不經濟な生活を營んで居るものは恐らくは他には存在しては居まい。其結果として、經濟界は今日、人安くして富が貴いと云ふ不幸な狀態に陷り、生活難の聲は日々高くなつて、生活に不安を感ずる國民が次第に增加し、延いては思想界にまで惡影響を及ぼす樣になつて居るのである。是に於て經濟の根本問題として、國民生活の横斷面を審査し、生活不安の眞相を明かにする事は經濟問題解決の根本策として刻下の急務と信ずるのである。

(二) 生活費の研究

斯くも物價が騰貴した今日、吾々が能率ある生活を營むには幾何の費用を要するであらう、是が國民生活の眞相を明かにするに必要な第一の問題である。然し乍ら此問題に就いては殘念な事であるが、日本ではまだ徹底的に研究されたものがない。勿論牛馬其他の家畜、或は米麥等の作物に就いては此種の研究は比較的詳細に出來て居つて、如何なる飼料又は肥料を何程與へなければ充分に成育させる事が出來ないと云ふ事が解されて居る。然るに尤も大切な人間に就ては未だ我國では調べが出來

て居ない。故に農民の如きは自分は甚だしき不合理で憐れな生活を營んで居りながら、自分の牛馬や作物には合理的な飼養法を行つて居る、實に本末を誤つた事柄と云はねばならぬ。英米佛獨等に於ては既に過去二十ケ年程の間に此問題の研究が盛に行はれ、殊に近來物價騰貴の爲めに、生活難の聲が至る處に熾になつたので、米國の如きは政府自身が多額の費用を投じて凡そ幾何の金が在つたならば人類が生活し得るかと云ふ事を調査し、英國に於ては商業會議所其他で同樣に此問題に就て立派な調査が出來て居るのである。然るに日本に於ては此研究が甚だ不充分であるから、不得止私は自分自身で非常な努力を以て、此問題の解決に就て調査しなければならぬ事が多かつたのである。夫れで以下不充分ながら自分の調べた材料を基礎として論述するのであるから、色々と足らぬ點が多いのであるが何とも致し方がない。唯將來益々努力を續けて此問題の解決の爲に盡したいと決心して居る。夫れと同時に我中央政府或は府縣廳其他の公共團體に於ても此種の調査を盛に行ふて貰ひ度いのである。現今の樣に國民が生活の不安を感じて居る時代に政府の力で一家族幾人に對し幾何の生活費が要る位の調査が無いといふ事では文明國の要素を缺いて居るとの誹を免れないであらう。

偖我々の生活費は果して幾何を要するか、此大問題を解決するが爲めには、先づ我等が生活を營んで行くに必要とする條件を明かにして、各生活費目に要する正當なる費用を調べなければならぬ。生命保全絶に對的必要である食衣住の三つの中最も大切なものは食物であるが、此食物には幾何の金が掛るだらう、着物には幾何の金が要るだらう、又住家には何程、社交費教育費等にはどの位、と斯ういふ風に各方面に就いて一々研究をしなければならぬ。先づ第一に食費に就いて最も重要と認むる一二の事實を述べそれを根本にして生活費全體を論究する事としやう。

(三) 食費の調査

然らば如何にして食費を調べるかと云ふに、夫れは生物化學者や食品化學者の研究の結果を藉りて論究しなければならぬ。彼等はカロリメーター其他色々の精巧な器械を用ひて、人類が生活して働いて行くには體內に何程の熱量を要するかと云ふこと、其他生活に必要な滋養物の研究を行ふて居るのである。其結果に依ると、約十四貫目の體重を有して居る人が、普通の勞務に從事して居る時には一人一日約二千八百カロリーの熱量を要すると云ふ。(一カロリーとは五合五勺の水を攝氏一度だけ高むるに要する溫度) 然らば如何にして夫れだけの熱量を得るかと云ふに、夫れは食物が體內に入つ

て空中より吸入れた酸素と化合し、燃燒して熱を生ずるのである。而して幾何の食物を攝取しなければならぬかと云ふに、一人一日蛋白質が二十六匁、脂肪が五匁、炭水化物が百二十匁、是丈けの營養物を含んだ食物を用いたければ、我等の肉體的生活は充實されるものでないと認められて居る。營養物の必要量に關して異論を有する學者が無いではない。例へばエール大學チッテンデン教授の如きは蛋白質は普通に必要と認められる分量の半分位で足ると主張して居る。我國にも此派の學者がある樣であるが、併し之は一般に確證されて居ない說であると有力な多くの化學者は我等に敎ふるのである。夫れで、アトワーターやフォイト等の必要と認むる前述の營養物を含める食物を保健食料又は最近では安全食料と稱して居る。而して此食料は如何なるもので其費用は幾何であるかと云ふとを一々食品の分析表並に價格表に就て調査し、以て經濟的生活に必要なる食料と食費を知ると　出來る。此の事實を基礎として、現今我國民の消費せる食糧を考查し、國民生活の眞相を　出す端緒とするのである。

(四)　最小食費の決定

實際に於て我國民の食物消費狀態は如何なるものかと云ふに、先づ日本全國の監獄の囚徒に就て見るに、戰爭前の大正三年に於ては一人一日の食費が東京の相場で十錢四厘であつた。次に婦人勞働者の家族に就き一箇月間每日何を食つてゐるかと云ふことを詳細に調べた結果に依ると、大正三年には十二錢一厘であつた。此二種類の食物は恐くは最低限度のものであらう。夫れで此等を標準として辛うじて生存して行くだけの食費即ち生存費に對する食費が大正三年乃至大正五年には十一錢位であつた。所が大正七年一月から九月までの平均物價に依ると二十一錢、大正八年十月には約二十六錢に騰貴して居る。

一寸此處で注意をしなければならぬのは生活と生存とを區別する事である。吾々は皆生存してゐることは確であるが實際生活して居る所の人は非常に少く大抵の人は漸く生存してゐるに過ぎないのである。

夫れで生存するだけの食費でも、戰爭前には十一錢、大正七年には二十一錢、大正八年には二十六錢を要する樣になつた。今一家族が夫婦と子供三人で之を大人に換算して四人とすると大正八年では一日に約一圓の食費が生存する丈けに掛る。即ち一ケ月に約三十圓を要するのである。尙進んでもう少し良い食物を調べて見ると、戰爭前に小作農夫が十四錢三厘、海軍兵卒が三十九錢三厘、陸軍兵卒が三十四錢四厘、それから內務省の衞生局で保健食料として發表した獻立が三十六錢五厘、自分の家庭で

二年程掛つて調べた所謂「安全食物」なるものが三十錢五厘である。此等を標準として人間が人間らしく生活するに必要なる食費、即ち最小生活費としての食費が戰爭前には二十八錢で濟んだのであるが、大正七年には九十四錢、大正八年(十月)には六十八錢掛るやうになつた。之れを前述の如く一家族五人で大人換算數四人とすれば一日に食費だけが二圓七十二錢一ヶ月に約八十圓を要する事となる。之れだけの食費を投ぜねば前に言つた處の蛋白質を二十六匁、脂肪を五匁、炭水化物を百二十匁を含有して居る保健食料を攝る事が出來ず、結句人間らしい經濟生活を營み得ないのである。

食費と一家の收入の關係は密接なものである。普通の場合には一家の收入の三割乃至六割が食費である。而してエンゲル消費法則の示して居る通り一家の收入が增加すれば、食費の百分率は次第に減ずるものであるから、食費の率が多ければ多い程貧乏人である。嘗て私がアイヌの生計を調べたことがあるが、極く貧困な暮しをして居る家族は、收入の九割が食費となつて居る。勿論これは極端な例であるが、食費に收入の半分以上を費やして居る家族は貧乏人で、六割又は七割以上も費やして居る者は窮民である。不完全な食物を攝つて居りながら、收入の大部分を食費にとられるのであるから、生活には殆んど餘裕がないのである。中流の家族になると收入の約三割內外、上流は約二割以下が食費となつて居る斯の如く食費と收入との歩合で貧富の標準を大體決定する事も出來るのである。

(五)　最小生活費

進んで經濟的生活を營むに必要なる一家族の最小生活費は何程であるといふ事を調べて見ると、大正七年一月から九月までの平均に依れば、食費が一ヶ年に六百四十七圓、被服費が二百二十圓、住居費が三百八十五圓、其他の教育費、社交費、公費、健康費　等色々の雜費に八百二十四圓で合計二千七十六圓掛るのである。是は夫婦に十四才以下の子供三人即ち一家族五人大人換算數三・二人の家族と見て計算したのである。斯樣にして最小生活費を決定するのは或は獨斷的で正確なもので無いとの非難を受くるやを疑はないでもないが、此數字を出すには私は隨分苦心して三年間の年月を費やした事を附記して置く。尙其當時より大正八年十月に至る間に物價は總平均に於て、約二割五歩增加して居るから最近(大正八年十月)に於ける最小生存費は、一ヶ年約五百圓で、最小生活費は約二千六百圓であるが、大正八年に於ける事實は目下研究中であるから大正七年の數字により以下論ずるのである。

最小生活費（東京市一家族）

費目			全額（一箇年）大正三年	大正五年	大正七年一—九月平均	大正八年十月
食費	生存の標準（窮貧）	六五%	一三〇.円	一一七.円	二八四.円	
	生活の標準（生活的）	四五%	四三二.	三九九.	六〇七.	
被服費	生存の標準	六%	一二.	一五.	二七.	
	生活の標準	一〇%	九六.	一一七.	一三〇.	
住居費	生存の標準	一二%	二四.	二七.	三五.	
	生活の標準	一七%	一六八.	一八六.	二四五.	
其他	生存の標準	一七%	三四.	四〇.	八三.	
	生活の標準	二八%	二六〇.	二九九.	三二四.	
合計	生存の標準	一〇〇	二〇〇.	一九九.	四二九.	（五五四.）
	生活の標準	一〇〇	九六〇.	一〇〇一.	一三〇六.	（二五九五.）

（六）貧富の標準

然らば一ケ年二千圓以上の收入を得て一家族打揃ふて人間らしい文化生活即ち能率的生活を營み得る資格を有する者は何人あるか、我人口と貧富の關係が如何になつて居るかと云ふことを調べて見ると、誠に哀れな狀態にあるのである。而してこの問題を明かにするが爲めには先づ貧富の概念を所得額によりて示す事が必要である。去りながら、貧富の標準は相對的のものであるから、之れを正確に決定する事は、決して容易の業ではない。唯だ大體に於て之を指示し得るに過ぎないのである。先づ最小生活費である二千圓を分界線即ち中流の中として中流者の所得額を一千圓以上三千圓以下とし、次に一千圓以下を貧民とし、三千圓以上を富者とし、更に各階級者を上下又は上中下に區分して、各階級に屬する家族數を次表の如くに示す事が出來る。

貧富の標準（東京市）

	大正五年一家族所得額	大正七年一家族所得額	現在家族總數	百分率
貧民 下	三〇〇.圓以下	五五〇.圓以下	九〇〇,八五六.円	八三.
貧民 上	三〇〇.—四〇〇.	五五〇.—一,〇〇〇.	三六,七〇〇.	三.七
中流 下	四〇〇.—一,二〇〇.	一,〇〇〇.—二,〇〇〇.	一〇三,六六五.	一.〇
中流 上	一,二〇〇.—一,八〇〇.	二,〇〇〇.—三,〇〇〇.	三五,二〇六.	〇.五
富者 下	一,八〇〇.—五,五〇〇.	三,〇〇〇.—五,〇〇〇.	一六,五三三.	〇.三
富者 中	—	五,〇〇〇.—二〇,〇〇〇.	一〇,五二七.	〇.一
富者 上	五,五〇〇.以上	二〇,〇〇〇.以上	八二三.	微少

生活費が騰貴した戰後の今日に於て、人間らしい生活を營んで能率ある暮しをするには少くも約二千圓の所得を要するのであるから、此以下の家族は凡べて廣義の貧民階級に屬するものとすべきである。併し貧富の標準は絕對的のものではない。我國の現狀より考ふれば、其標準を餘程低下させる必要がある。

故に假りに一千圓以下を貧民とし其階級者を更に上下に別ち、五百五十圓以下の所得のある家族を貧民の下と假定する。そして此階級に屬する家族が何戸あるかといふと、驚く勿れ我國總戸數の九割三分即ち約九百萬戸の大多數を占めて居る。貧乏の上に位する五百五十圓以上千圓以下の所得を有する戸數が約五十六萬戸、中流の下に位する千圓以上二千圓以下の所得のある戸數が約十萬戸。中流の上に屬する二千圓以上三千圓以下の所得のある戸數が約二萬六千戸である。次に富者の下の階級に屬する三千圓以上五千圓以下の所得のある者が僅かに約一萬六千戸、即ち我總戸數の〇・二パーセントに過ぎない。富者の中に位する五千圓以上二萬圓以下の所得のある戸數が約一萬戸あつて僅かに〇・一パーセント、富者の上の階級に屬する二萬圓以上の收入のある戸數に至つては、日本全國に亘りて八百十二戸だけしかないのである。之をパーセンテーヂで表はすと〇・一パーセントにも達しない「微少」である。米國では富者と稱するのは少くも二萬圓以上の所得を有して居るのが普通である。而して其家族數が約十二萬（九百十六年）、百萬圓以上のですら八百二十七で我國の二萬圓以上の家族數よりも多いのである。

(七) 官公吏の俸給

更に進んで我國の俸給生活者が如何なる狀態にあるかと云ふに、先づ官公吏の俸給所得中、第一文官の所得を見るに、大正七年度に次表中「増額割」欄に示すが如く増給があつたものとして、總文官吏數二十二萬四千八百八十三人の平均一ケ年の俸給所得は次の如く憐れなものである。

即ち堂々たる勅任官にして其平均年俸は僅に四千二十三圓、奏任官に至ては最小生活費以下の千八百九十四圓、判任官は五百八十一圓、雇傭員は三百三圓である。勿論此増額の割合は大正七年度のものであるから、今日では更らに少しく増加して居るが、生活費は夫以上に騰貴して居ることを記憶せねばならぬ。

以上の俸給別に依りて貧富の分類をして見ると、勅任官が漸く富者の下の階級に屬し、奏任官が中流の下、判任官が貧の上、雇傭員が貧の下に屬するのである。然らば各階級の人員が文官總人員に對して幾何あるかと云ふと、貧に屬する判任官及び雇傭員が九割五分九厘の大多數を占めて居るのを第一として、奏任官即ち中流の下に屬する者が僅に三分八厘、勅任官所謂富者の下の階級に漸く入る事の出來る人がたつた三厘即ち千人に三人よりないのである。詰り人間らしい生活を營むことの出來る

資格を有する官吏は、漸く百人の中約四人しかない事になる。次に陸海軍の武官の方を見ても、次表に示せる通りで中尉以下の武官は皆貧者に屬すべきもので、其人員は武官總數の六割一分三厘の多數を占めて居る。然かも此數字は准士官以上の軍人のみで兵士は全部含んで居ないのである。

市町村府縣郡吏員に至ては、其所得の狀態は一層悲慘なるもので、總員十四萬九十四人の平均年俸は三百六十四圓である。即ち總てを平均した數に依れば吏員は全部貧の下の階級に屬すべきものである。以上官公吏員の俸給及び貧富の類別を表示すると次の如くである。

官公吏俸給（一人一ヶ年平均）

		大正五年 單位圓	大正七年 單位圓	増額割	貧富の類別 階級	人員百分率
文官（總員二八二三四・人）	勅任	四〇二三	四〇二三	〇	富の下	〇・[illegible]
	奏任	一五一五	一八九四	二五%	中流の下	三・八
	判任	四一五	五八一	四〇	貧の上	九五・九
	雇傭	二〇九	三〇三	四[illegible]	貧の下	
陸軍（總一六・[illegible]四）	大將	七七八六	七七八六	〇	富の中	三・〇
	中將	五一三七	五一三七	〇	富の中	
	少將	四一〇九	四一〇九	〇	富の下	
	大佐	三〇四三	三〇四三	〇	富の下	
武官（六員人）	中佐	二三〇二	二三〇二	〇	中流の上	三五・七
	少佐	一六一二	二〇一八	二五	中流の中	
	大尉	一〇二九	一二八六	二五	中流の下	
	中尉	六五七	九二〇	四〇	貧の上	六一・三
	少尉	五〇八	七一一	四〇	貧の上	
	准士官	五二二	七三一	四〇	貧の上	
市町村府縣郡吏員		二五一	三六四	四五	貧の下	一〇〇

同上有給吏員總數　十四萬九十四人

（八）職工賃金

更に進んで重なる工職賃金を見るに、大正七年六月現在は次の如くである（但東京商業會議所報、大正七年十月號に依る）

	平均日給	同一ケ月分概算
船大工職	一・八〇円	五四・円
洋服仕立職（裁方工）	一・七五	五二・五
塗師職（賄付）	一・五〇	九五・（賄賃一日三十三錢トシテ）
大工職（賄付）	一・三〇	五〇・（賄料一日三十三錢トシテ）
石工職	一・五〇	四五・
木挽職	一・四〇	四二・
煉瓦積職	一・三五	四〇・五
左官	一・三〇	三九・

畳職	一・三〇	三九・

大正七年六月以降職工の賃金は餘程騰貴して居る。東京商業會議所の調査に係る大正八年九月現在の賃金及び大正三年六月の賃金を比較して戰前戰後の騰貴率は次の如くである。

職工賃金騰貴率

職名	三年六月	八年九月	騰貴率
陶器轆轤	六九	三〇八	三四、六四
塗師	一三八	三一三	一二、六八
錺職	一五七	三九二	一四、七九
鋳物	△一五四	二七七	七、九〇
染物	五一一	三六八	七、四〇
洋服仕立裁方	△一六〇	二五〇	五、一〇
同・縫方	一八一	二五〇	三、八〇
木挽	一二一	三一五	一六、〇〇
大工	一四一	二六四	八、七〇
瓦葺	一一三	二六七	一三、七〇
屋根	一一六	二一一	八、二〇
煉瓦製造	一二三	二六九	一一、八〇
煉瓦積	△一二九	三七六	一九、二〇
指物	一一九	二六四	一二、二〇
建具	△九五	二六三	一七、七〇
畳職	△一一一	二一八	九、七〇
石工	一一一	二〇〇	八、〇〇
植木	一三〇	五六九	一〇、七〇
下駄	一三七	四二一	二〇、七〇
靴	一三〇	三〇〇	一三、一〇
馬具	一三〇	三七〇	一八、五〇
綿打	△一〇二	二三〇	一二、五〇
活版植字	一七六	三七六	一一、四〇
版摺	一四四	三三三	一三、一〇
杜氏	二〇七	四七二	一二、八〇
漁業	一八〇	二八七	五、六〇
下男	二〇〇	六〇〇	二〇、〇〇
下女	二二五	五二五	一三、三〇

(備考右表中の△印は季節に由る騰貴率を示す)

近來物價騰貴に伴ひ一家の收入も少なからず増加したる事は明白なる事實である。即ち前表に示せるが如く、職工其他の賃金は戰前よりも大正八年九月は陶器轆轤職の三四・六四割を最高とし、下駄職、下男、煉瓦積、馬具職、建具職、木挽職は十五割以上二十一割以下、錺職、瓦葺、下女、杜氏、靴職、綿打、指物、塗師、煉瓦製造、活版植字、植木職は十割以上十五割以下、畳職、大工、屋根職、石工、鋳物職、職染物、漁業、洋服[illegible]

立（拔方）は最低率の騰貴であるが、夫れにしても五割以上十割以下である。官吏の增俸は平均約五割、小學教員の俸給は大正八年七月一日現在東京市内本科正敎員三千三百三十九人の平均額は三十八圓十錢、專科正敎員三百五十八人の平均額は三十三圓五十七錢であるが、之れ約五割の增俸額を受けたる結果である。斯の如く薄給のものに國民敎育の大任を任かすと云ふ事は、國家の爲に果して賀すべきであらうか。

要するに俸給生活者は約五割の增俸を受けたのであるが、之を前表下男下駄職等の賃銀騰貴率に比すれば僅に四分の一、大工、植木職、活版植字等に比すれば二分の一の增加であつて、一般職工は俸給生活者に比すると二倍又は三倍の騰貴率で所得が增加して居る。俸給生活者が最も著しく生活の不安を感じて居る事は當然の結果である。

（九）物價の騰貴

物價の騰貴は滔々として底止する處を知らない。而して之が國民生活の不安を來す直接の原因であることは云ふまでもないことである。如何にして斯くも物價が騰貴するのであるか、其原因又は調節策は後日之を論ずる事として、今茲には物價騰貴に關する事實を示し生活に不安を來す由來を明にするのである。

日本銀行の東京物價調に依ると、大正三年九月を一〇〇とすると大正八年九月は二六三・六二に騰貴して居る。戰後物價騰貴は世界共通の事實であるが之を英國及び米國に比すると我國の方が騰貴率高く、我國では大阪が最も甚しいのである。即ち大正三年(七月)を一〇〇とすると大正八年七月は、倫敦が二二五〇、紐育が二一八、東京が二六〇、大阪が三一六である。尚之を逐年に示せば次の如くである。

	大阪	東京	紐育	倫敦
大正三年七月中	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正四年同	一四一	一〇〇	一一四	一二八
大正五年同	一七五	一一七	一三三	一六四
大正六年同	二〇六	一六六	一八六	二一八
大正七年同	二七八	二〇四	二二二	二三九
大正八年一月中	二八一	二二五	二一四	二二八
同　三月中	二七八	二一七	一九九	二二三
同　五月中	二八一	二二六	一九九	二三三
同　七月中	三一六	二六〇	二一八	二五〇

生活必要品中殊に騰貴率の甚しいものは衣類である。綿糸指數は大正三年(七月大阪)を一〇〇とすれば同八年七月が四二一七で同年九月が四七七である。玄米指數は八年九月が三二一、食

料品平均は二三五、總平均指數は三三三である。

斯の如く物價は騰貴して止む處を知らない。然るに元來低級なりし我國民の大多數殊に俸給生活者の所得の增額率は前節に示せる如く甚だ少ないのであるから、彼等が生活に不安を感ずるに至りしは蓋し當然の結果と云はねばならぬ。

十）生活不安と死亡率

以上記述した通り我國民の所得は一般に甚だ少なくして大正七年（一—九月平均）に於て、總人口の九割七分は其所得に於ては廣義の貧乏の階級に屬すべき事は既に論じた。其後今日（大正八年十月）に至るまでに物價總平均に於て更に二割方步の騰貴を來したのである。然るに一方に於て國民の所得は夫れに比例して增加を來たさない。勿論職工の或種類のものは相當或は夫以上の增給を受け居るものもあるが、俸給生活者殊に官吏の如きは僅に五割内外の增加に過ぎないのであるから、所謂智識階級に屬する大多數が生活の不安に脅かさるゝ事甚だしく、其結果は精神的及び肉體的共に悲むべき惡結果を齎らしつゝあるのである。今其主なるものの一二を指摘せんに、先づ第一に注意すべきは、出產率と乳兒の死亡率が共に多くなる事である。乳兒とは一歲未滿の赤兒を指すのであつて、此一歲未滿で死亡する乳兒の數と一家の所得との關係が如何なる割合になつて居るかといふことを調べたものを見るに、驚くべき事實が表はれて居るのである。此研究は米國で行ふたものであつて、日本には未だかゝる調査がない樣であるから、殘念ながら米國の事實に基づいて我國の狀態を推定するのである。其研究の結果によると、一家の收入が九百圓以下の家にあつては、千に對する乳兒の死亡率が百五十六人七分であるが、所得が段々殖えるに從つて死亡率は著しく漸減して居る。即ち千三百圓以上の家族になると、九十六人に、更に進んで三千七百圓以上になると三十七人といふ少數に減じて居るのである。之れ學說の示す如く所得少にして生活標準の低きものは一般に出產數多く、從て其死亡數も增加する爲めでもあるが、兎に角貧乏であればある程、一歲未滿で死ぬる乳兒の數が多く、所得が多ければ多い程產れた子供がよく育つて行く事を明白に示して居るのである。元來生後一週間內に死亡する率は最も多く、生後一週間經つと餘程育ち易くなる。併し生後一ケ月內に死ぬる乳兒が未だ甚だ多い。夫から次第に死亡率が年齡の進むと共に減少するのであるが、滿一歲までに死亡する割合は其後の死亡數に比べると非常に多いのである。而して其乳兒の死亡率に於て貧乏人と富者との間に斯くも恐ろしい結果が表はれて居るのである。

家族の所得と乳兒死亡率

家族收入高(一箇年)	乳兒死亡率	出産	死亡
九〇〇圓以下	一五六、七	一五四四	二四二
九〇〇—一〇九九	一一八、〇	一四四九	一七一
一一〇〇—一二九九	一〇八、八	一四八九	一六二
一三〇〇—一六九九	九六、〇	二四一七	二三二
一七〇〇—二〇九九	七一、五	一五九五	一一四
二一〇〇—二四九九	六六、六	六六一	四四
二五〇〇—二八九九	七四、〇	四一九	三一
三七〇〇圓以上	三七、二	四三一	一六

(十一) 生活不安と人口論

單に乳兒ばかりでなく一般の死亡率に於ても貧者は富者に比して多數である事は明かである。故に貧乏であるとマルサスの云て居る辿り死を早める Positiv Check が盛に行はれて、人間を殺す事夥しいもので非常に恐ろしい事である。

從て國民が生活の不安に苦んで居るといふ事は、國家經濟上から考へても、非常に不利益な事といはねばならぬ。最近統計に依て見ると、日本は外國に比して、近來青年の死亡率が非常に多くなつて來たやうであるが、之れは實に將來憂ふべき問題で、詰り生活の不安といふ事が、根本的の原因であると考へられ

こ。一般に貧民は健康保全に注意を充分に拂ふ事が出來ない。殊に病氣の場合に於ては、富者の如く手篤き治療又は養生が行屆かないから早死が多いのである。其處に至ると、佛蘭西人は仲々考へて居る。彼等の理想とする所は、二兒制即ち夫婦の間に子供を二人持つといふ事である。産兒の數は少いけれども、其代り其子供を充分に養育して自分よりも立派な有用な人間にするのが、文明國民とし國家に對する義務と心得て居る。佛蘭西は勿論極端な例を示して居るが、我國は殆んど夫れに正反對の例を示して居る。即ち未だに「生めよ殖えよ」主義で何でも宜いから國家の爲めに子供を澤山に持つといふ事を理想として居るのである。之を實際に就いて見るに、歐米の文明國は皆出産率が次第に減じて居るが、我國のみは增加して居る。人口千に付平均一年の出産を、一八八一—一八九〇年、一八九一—一九〇〇年、一九〇一——一九一〇年、の三期に區別して比較するに、英蘭は、三二・五、三〇・〇、二七・二、蘇格蘭も略同じく、獨逸は三六・八、三六・一、三三・四、佛蘭西は、二三・九、二二・一、二〇・七、白耳義は、三〇・二、二八・九、二六・七、であるに比して、日本は、二八・三、二九・八、三二・九、に增加しつゝあるのである。此數字のみで考ふれば多くの論者と共に我國人口の現在は他の文明國よりも優つて居る事を信ぜざるを得ない。去

りながら出產の多いと云ふ事實の裏には悲しむべき犧牲があるのである。其最も悲慘な事は死亡率が單に乳兒ばかりでなく一般に多いことである。零歳から五歳までの子供の死亡率に就いて、日本と米國とを比較すると次の表に示せる如く、各年齢別共に、何れも日本の方が米國よりも、遙かに多い。

五歳以下兒童死亡率(死亡千に付き)

年齢	米國			日本
	男	女		
〇—一	一二五・〇	一〇一・八	二二八・八	二五九・五
一—二	二八・八	二六・四	五五・二	六二・一
二—三	一三・〇	一一・六	二四・六	三四・〇
三—四	八・一	七・六	一五・七	二〇・九
四—五	五・八	五・五	一一・三	一二・五

(十二)多產の弊害

勿論男の方は子供を產むに別段苦痛を感じないであらうが、女の方は仲々容易の事ではない。姙娠をすれば十ケ月の間重い腹を抱へて、さうして分娩の際には、非常な苦しみをしなければならぬ。命を賭けて漸く產んだ子供が立派に育つならばまだしもの事であるが、前に述べた樣に一歳未滿で死亡するものが甚だ多いのである。而してやつと一人出產が終つたかと思ふと、直に第二、第三、第四、第五、と引き續くのであるから母親は恰も「子供製造機械」の如き觀があつて、母として、妻として又社會の一員としての義務は全うする事は出來るものでない。今日の如く生活上經濟的に非常な壓迫を受けて居る場合に於て、子供の粗製濫造は著しい空費である。子供の多い事は結構な事であるが、若し統計に表はれて居る樣に之を充分に養育をする事が出來ないのならば、寧ろ合理的の方法で產兒の制限を或程度まで行ひ、比較的少數の子供を心身共に充分に其能力を發揮せしめ得るやうに育てる事が子供の爲、兩親の爲、將又國家の爲めに必要と認めざるを得ないのである。近頃の人口論は大に人口の質に重きを置く樣になつたのは當然の事であるが、我國では今尙質よりも量を重んずる人が少くないから、產兒の制限などを口にすると非常なる反對を受ける事は覺悟の上である。去りながら若し國民生活を今日の儘に抛擲して置いて、生活不安から貧乏、貧乏から多產、多產から又貧乏と絕へず循環的に壓迫を受くる時には、國民は益々無氣力になり、病氣に罹り易くなり、又早く老耄れざるを得ないのである。

今尙殊に農村などに於て之を實驗するのであるが、四十の聲

が掛ると次第に老耄れ初め、五十歳にもなれば初老とか何とか云つて隱居するやうな人が隨分少くない。所が之を米國人に比べて見ると、米國人は五十歳位は青年時代と心得て居る様な譯で、六十歳になつて結婚する者さへある位であるから、五十、六十、は勿論働き盛りとしてドン／＼活動して居る。日本人の様に六十になると、停年に達したなど丶いふ様な事では社會的自滅である。斯の如く早く老衰して、生産能力を失ふに至らしむる最も力強き原因も亦、我國民の生活が不完全である事を證據立てるものである。

（十三）生活不安と勤勉の精神

次に生活不安の結果は、國民の貯蓄心を薄弱ならしめ、一般に勤勉の精神を失はしむるに至るものである。生活が不安ならば、一層努力して精勵事に當るであらうと一般に考へ居るのは必ずしも事實ではない。私が昨年景氣の好い地方を巡視して、其反對の事實を屢々發見した。即ち漸く借金が返せる様になつたとか、農業の利益が多くなつて、生計が少しく豐かになつて來たとかいふ時には、段々と貯蓄心が起つて來るもの丶様である。今迄酒を盛に飲んで、放縱な生活をして居つた人が、漸く借金の整理が出來て、是から何年經つと幾許の貯蓄が出來るといふ様な考を持つて來ると、急に酒や煙草を禁めるやうになつた人が澤山ある。貧せば鈍するといふ事は、蓋し意味深い眞理で、生活が不安であると、兎角自暴自棄になり、貯蓄心も、勤勉の精神も共に萎縮して其生活は益々能率を少くするものである。恐るべきは生活の不安である。國家も個人も協力して、生活の安定といふ大問題の解決に努力し、以て國民經濟の進歩發達を期せねばならぬ。

（十四）生活安定法　其一

如何にして生活の安定を來す事が出來るかと云ふ重大なる問題を解決するには、實際的と理論的との二方面より論ぜねばならぬ。實際的方面に於ては、第一國家的手段と、第二個人的手段との二つに分ちて、之を論述しやう。

第一　國家的手段

生活の安定を得る事が出來なくなつた根本的の理由は、一方では物價が暴騰して止まないが、他方に於ては個人の所得が之に伴はないからであることは、既に詳論した通りである。故に物價を調節する事と、所得の増加を圖る事が生活安定の根本義で、之に對する國家のとるべき手段の重なるものは、次の如きものである。

一、富の分配の公正を圖る事

「有る者は與へられて倘あまりあり、無有者はその有る物をも奪るゝ也」といふ事は精神界ばかりでなく、經濟界に於ても、分配に關する眞相を指摘して居る眞理である。貧富の懸隔は昔から存在して居つたが、近世產業の發達に伴ふて次第に甚だしくなつた。殊に歐洲大戰は世界經濟に大變動を來し、富者は益々富み、貧者は一層貧困に陷る樣になつたのである。米國に於ける所得調査を見るに、一ケ年所得六千圓乃至八千圓に屬する納稅者の數は、大正三年には八萬二千七百五十四人であつたが、大正五年には、八萬五千百二十二人に增加して居る。即ち大正三年を、一〇〇とすれば、大正五年は一〇二・八であるが、此增加率は所得額の多くなるに從つて、次第に增加して居る。即ち二萬圓乃至三萬圓は、一三二・七、二十萬圓乃至三十萬圓は二四三・九、二百萬圓以上は三四三・三と增加して居るのである（D. Friday: Statistics of Income.—American Economic Review, Sept., 1919 を見よ）

此のフライデーの研究に依ると明かに戰爭が富者を益々富ましめし事を證明して居る。戰後の今日社會問題が著しく社會の注意を惹いて居るのは富の分配が不公平なることが最大原因となつて居るのである。極端なる社會主義者は富者は取る可からざるものを取りて富を蓄積したので、彼等は一種の盜賊であると云つて居る。彼等の富の全部が悉く不正なものであるとは考へられないが、現今の社會制度には缺點があるから、資本家は勞働者よりも分前を得て居ることが不當により多いと云ふ事は疑ふべからざることである。資本家は勞すること少なくして尙ほ五割十割の利益配當を受くることが近來珍らしく無いにも係はらず、勞働者は終日苦役に從事して其受くる所得は一家の生計を支ふるにも足らざるの小額である。今日の分配制度は決して當を得たるものでない。分配に公正主義を適用することの必要缺く可らざるはライアン博士等の高唱せる通りである。而して分配の公平を期する爲めに國家の採るべき手段の主なるものは

A　稅制の改革、所得稅に於ては課稅最低額を高くして少なくも千圓とする事、累進稅率を高めて一層富者に重くする事、會社の利益配當金に課稅する事、第一種及第二種の所得稅率を更に重くする事等は必要なることである。土地稅に於ては地租を高くする事、土地增加稅を廣く課する事等を斷行し、消費稅に於ては一般奢侈に屬する課稅を殆んど禁止的程度に高くする事、從て造酒稅の如きは煙草稅と同じく政府の專賣業として共に稅率を一層高くするが如きは當然決行すべきことである。

B　生活賃銀法を制定する事、之は中央公論十一月號にも論

じた事であるが、特殊の職業に對し最低賃銀即ち生活賃銀を法律を以て制定し、不法に低廉なる賃銀支拂の結果、勞働者自身の能率を減少し、延いては資本家及社會全般の不利益を來すが如きことを防止する事は必要である。生活賃銀法は既に濠洲、米國諸州に於て實施され頗る好成績を擧げ居るものにして、經濟上、道德上、法律上より見て正當なるものである。此の法の制定せらるゝことは一方に勞働者の勞働力を增加し、其結果一般賃銀の增加を來すに力あるものである。

C 官公吏員其他俸給生活者に增給を行ふ事

謂ふまでもなく俸給は勤勞の報酬であつて、其額は少なくとも生活の資料を得るに足るものでなければならぬ。換言すれば生活費の增加に伴ふて又俸給も增額さるべきものである。我國官公吏の俸給令の制定された時代と今日とは經濟事情が著しく異なるが故に、官公吏が生活に不安を來たすやうになつたのである。故に政府も漸く本年までに(大正八年十一月)判任官以下のものには二回の增給を行ひ 合計六割五分の臨時手當を支給する樣になつた。

高等官以上のものに對しても一回の增給によりて三割乃至五割の臨時手當を給する事になつたのである、小學校敎員其他吏員も凡て五割內外の增給を受けて居る。併し物價は其後更に騰貴して殆んど底止する處を知らない勢である。之を物價指數に就て見るに前に述べた樣に大正三年七月を一〇〇とすると、同八年九月に於ては、玄米は二十二割一分、綿糸布は三十割七分、食料品平均は十三割五分、物價總平均は二十三割三分方騰貴して居るのである、之に對して俸給の增額は平均約五割であるが故に、其率は物價總平均僅かにの四分の一强にも當らないのであるから、俸給生活者に對し更に增給の必要なる事は明白なる事である。最近開催の帝國聯合敎育會に於て可決せし左の小學敎員增俸問題の如きは當然の要求と云はねばならぬ。

一、師範學校卒業者の初任給を月額男五十圓、女四十五圓となすこと。

一、一級上俸を月額二百圓とし特に功勞あるものに對しては二百五十圓迄支給すること。

一、最初五ケ年間は每年一級を進めて月額男七十五圓、女六十五圓に達せしめ、爾後二年乃至三年每に一級を進むること、

一、都市及之に準ずべき町村の敎員には五割以內の特別加俸をなすこと。

要するに現今約十五割官公吏に增給を行ふことは決して不當の割增ではない。今日の如く貨幣價値の下落せし時に於て、僅

に五割内外の増俸を加ふるに過ないとすれば、官公吏は何の理由もなく甚しき減俸を受けたと同じ事で、其結果は彼等が生活の安定を得る能はず、延いては思想界の動揺となり不吉の影響を來すに至るのである。

増俸に必要なるは、其財源である。勿論此の財源を得る事は容易の業では無いが、決して不可能の事では無い。歐洲戰爭の結果我國は非常に富力を増加し、國家の財政に於ても戰前に比べると餘裕を生ぜること大なりと謂はねばならぬ。自然増收に於て、増税に於て、公債募集に於て其他諸種の財政整理に依りて増俸の財源を今日得る事は決して不可能でない。蓋し文明國の財政は個人の經濟と異り、入るを計りて出るを制すると云ふ原則に嚴酷に束縛さるべきものでは無く、増俸の如き最も明白にして合理なる歳出に對して其歳入を見出すべきは當然の處置と云はねばならぬ。増俸に必要なる財源は現今決して缺乏して居るのでは無い。唯之を求めざるにあるのである。

(十五)　生活安定法　其二

二、物價の調節を圖る事

物價騰貴の原因の一として通貨膨脹を擧げるのは至當であるが、決して之が唯一の原因ではない。從て物價調節の唯一の手段の如くに通貨收縮論に重きを置かないのである。勿論通貨の膨脹は實に盛なもので、大正三年末の通貨流通高は五億八千萬圓であつたものが、四年末には六億四千萬圓、五年末には八億四千萬圓、六年末には九億八千萬圓、七年末には十五億四千萬圓、八年九月末には十六億三千萬圓に増加して居る、實に驚くべき膨脹である。

本年十月二十四日の官報に發表された大藏省調査を見るに九月末通貨流通高は金貨六千百八十三萬四千三百八十六圓、銀貨一億四千四百七萬八千六百圓五十錢、白銅貨千百八萬四千三百卅七圓十錢、靑銅貨三百九十一萬五千五百四十八圓卅八錢、銅貨七百九十九萬一千五百四十六圓九十五錢二厘、計二億二千八百九十萬四千四百十八圓九十三錢二厘の外小額紙幣一億二千萬圓、日銀兌換券十一億一千八百四萬三千三百九十九圓、鮮銀券一億二千廿二萬一千三百九圓九十五錢、臺銀券四千四百七十七萬九千三百五十八圓ありて總計十六億三千百九十四萬八千四百八十五圓八十八錢二厘を示し、之を前月に比較せば七千九百廿一萬九千七圓四十五錢、前年同期に比し二億七千廿二萬三千五百圓九十六錢の各膨脹を示せり。

大正八年九月末の通貨流通高を戰爭の初年末に比較すると實に約十七割の増加である。今大正三年七月の大阪物價の總平均

を百とし、倚手形交換高及通貨流通高を各百として比較對照すると、次表の如く物價と手形及び通貨とは密接にして鋭敏なる關係を有するかを知る。（中央新聞十月廿八日より轉載す）

年次	大阪物價總平均	手形交換高	通貨流通高
三年七月	一〇〇	一〇〇	一〇〇
四年同	一四一	一〇一	九九
五年同	一七五	一七四	一一二
六年同	二〇六	三二四	一六二
七年同	二七八	五六二	二〇七
八年一月	二八一	五六〇	二七〇
同二月	二七七	五五二	二四六
同三月	二七八	五九二	二四七
同四月	二七六	五九二	二四三
同五月	二八一	六五六	二五三
同六月	三〇二	七三七	二八五
同七月	三一六	七一四	二七七
同八月	三二六	二九八	二九一

以上の如く我國に於て通貨の著しく膨脹したる主要なる原因は、戰時中外國貿易に於て、輸出超過の結果約三十億の金が、我國に増加した事である。金が殖えれば事業が勃興して景氣がよくなる、物價が騰貴するのは當然の事である。元來通貨膨脹及び物價騰貴は共に原則としては、經濟界の好況を示し大いに賀すべき事實であるが故に、急激に銀行利子の引上げ、公債の募集、海外投資等の人爲的手段を用ひ、物價を下落せしむる策は、充分なる注意を拂ふて後決行すべきである。今や五ヶ年の大戰爭は、終局を告げて我國が戰時に獨占せし、經濟上の好機會は去つて了ひ、我外國貿易は既に輸入超過を再び來す樣になり、本年を通じて一億以上の入超を豫想せざるべからざる時になつて、通貨も自然に縮少されつゝあるのである。爾來我國の外國貿易に於て、最强力なりし武器は、產業の生產費殊に勞働賃銀が歐米に比して、甚だしく低廉なる事であつた。然るに現今物價の騰貴、生活の向上、勞働者解放運動等によりて、勞働賃金及一般の生產費は著しく騰貴を示して居る。今後の國際的經濟戰爭に於ては、最早我獨特の武器は、役に立たなくなつたのであるから、戰は實力に依らねばならぬ。而して歐米先進國と我國との國民能力及國力の相違を考へる時は、將來は必ずしも樂觀すべからざるものがあるのである。加ふるに事業界の浮沈は避くべからざるものであるから、現今の好景氣は必ず不景氣に變化するのは自然の勢で、止むを得ざる事であらう。唯其時の來襲が出來るだけ遲からん事に、努力しなければならぬのである。我等は多少の犠牲を拂ふても國力增進の爲めに務め、

物價調節策に於ても餘りに消極的の手段にのみ重きを置いて、企業界を萎縮せしめ、失業者を續出せしめ、不景氣の來ることを早からしむる如きは深く戒むべきである。要するに通貨の收縮は徐々に行ふべく、決して急激に行ふてはならぬ。

又若し一部の論者の如く現今に於ては通貨收縮が物價調節の唯一の方法なりとすれば、歐洲諸國の物價は我國に比して、遙かに騰貴すべき理である。英國の通貨は戰前に比すれば約九倍、佛國は五倍に達して居るが我國に於ては約三倍に過ぎない。然るに我國の物價騰貴は、英佛に比して寧ろ大なりといふ事實は、之れ通貨膨脹は、物價騰貴の絶對的の原因でない事を證明して、通貨收縮策に餘り重きを置くべからざるを示して居る。

然しながら通貨收縮策は物價の調節に有力なる一因である事は勿論の事であるからして、適度に其方策を講ずる事は必要である。我兌換券發行法に於て在外正貨を在內正貨と同樣に見做して、制限外の發行を許すが如きは大いに改正を要するのである。其他公債の募集、金利の引上、貯蓄の奬勵等、勿論物價調節に有力なるものであるが、常に穩健なる方法をとり、決して著しく物價の下落を來すが如き結果を生ぜざる樣にしなければならぬ。而して若し物價は依然として騰貴し其底止する處を知らざるが如き場合には、政府は宜しく最後の手段として生活の必要品の最高價格を公定し、一方では奸商の取締りを充分に行ふ事が必要である。

(十六) 生活安定法　其三

三、社會政策の實行

國家が社會政策を實行すべき機能を有して居るか否やの問題に就ては古來隨分議論があつた。バクニン一派の無政府主義の說は云はずとして、クエネー一派の重農學者の說に依ると、個人の自由を充分に發達せしむる爲めに、國家の機能を出來得る限り縮少せしめ、國家が個人の經濟的事業に干涉するが如きは勿論不當なることであると主張して居る。次にスミス一派の英國派學說に依ると、國家の機能は單に國家の獨立、國民の權利の保護及一部分の國民の利益となると同時に、國民全體を益する施設にして、少數人民のみの力を以て營む事能はざる事業を行ふのみで、夫以上の事を國家に行はしむるは不可なりと論じて居る。併し是等の學說は、今では共に陳腐に屬するものである。商人主義の勢力は次第に衰へて、社會主義が益々盛になりつゝある今日であるから、國家の機能も大に擴張される樣になつたのである。ワグナーは國家は人民保護の外に、文化開發の目的を有し、文明の進步に伴ふて、國家の政務は益々增大さる

べきものであると云ふて居る。アダムスの論ずる通り、現代國家の職務は、保護機能の外に商業的及び文化開發的機能を充分に發揮する事が必要である。而して文化開發的機能の內、今日最も重要なるは、所謂社會政策の實行である。富の分配が正當に行はれて居ないが爲めに、又社會及經濟制度が不備であるが爲めに、中產者以下のものが受けねばならぬ不當なる經濟的壓迫は社會政策の實行によりて幾分輕減され得るのである。自ら生計を營む事の出來ない國民を扶助する事、一般に國民の窮乏を豫防し、又奢侈を防止する爲めに適當なる處置をとる事等は、國家の義務である。而して社會政策的施設の重なるものは、公設住宅、職業紹介所、公設質屋、公設市場、施療院、小兒預所、公設運動場、公設浴場、社會的臺所、貧民小學兒童に中食給與、貧民部落社會事業、等である。幸に近來我國に於ても、之等の施設に社會の注意を惹き、其實施を見るに至つた事は賀すべきで、宜しく國民協力して其發達を期すべきである。勿論現在の諸政策は完成されたものではない。尙一層先進文明國の實例を研究し、之を我國の事情に適應する樣に、施設の完成に務めたならば、必ず國民生活の安定を期するに大いに利益ある事と信ずる。

以上國家的手段を、實行すると同時に、個人的手段を考究して徹底的に、生活の不安を除去しなければならぬ。否個人的のものは國家の政策よりも一層主要なものであるが、此問題は別に論ずる事にする（大正八年十一月）

改造の論議より改造の實行へ

文學博士　三宅雪嶺

世界戰役と共に一部分に改造の必要を感じたが、戰役が如何に終結するやが判らず、聯合國側が果して勝つか、獨墺側が或は強味を持ちはせぬか、聯合國が勝つとして、何の程度に於てするか、多少不安心がある丈け、特別に改造を考ふるに到らなんだ。戰役に忙しく、非戰論者まで忙しく、色々取紛れるを餘儀なくせられる。所が一九一八年夏まで獨墺軍の猛烈なる勢であつたに反し、遽かに屈服し、剰へ無條件で屈服し、全敗に了つた。聯合國は最後の勝利を豫期しつゝ、斯くまでと想はず。獨逸軍は全力を盡くし其儘に殪れたもの、最早何の力が無く、敵味方相談判するのでなく、凡べて戰勝者の自由に屬するといふ事になり、そこで戰後を如何にするかの問題が急に起つた。相談するに及ばず、聯合國で思ふ存分にしようといふのである。兎も角も憎みに憎んだ獨逸が滅亡といふ姿になり、獨逸流儀を根柢から排除し、新に平和の基礎を築かうといふ事になる。既に露國も自ら革命を以て仆れて居り、歐洲を始め、世界を建て直すが可からうとする。誰れ云ふとなく話が此邊に一致する。改造の語が頻りに用ひられ、新聞雜誌でも諸方から改造の意見を蒐める。

所が何と言ふても多くの國が關係して居り、國々で事情が違ひ、改造意見も違ふ。國で違ふが上、其の國の内で違ふ。激戰の巷になつた佛國、殊に戰場に近い地方では、改造論が恢復を意味して居る。如何に破損した都會を恢復し、荒れた田地を恢復すべきか、如何に佛國の疲弊を恢復すべきか、獨逸から償ひを得、尚ほ聯合與國の援助を得ねばならぬといふやうな事を唱へる。アルサス・ローレンの恢復は勿論の事とする。佛國でも戰場より遠ざかつた地方は、國内の恢復の外、如何に獨逸に壓力を加へ、再び起り得ないやうに爲べきかと云ふを考へる。其他の國々は各々國情に應じて考へる所あり、英國では佛國にも劣らぬ程戰役に利害を感じたが、國内に害を被らぬ丈け考へるが

餘裕がある。前から世界政策を念として居り、世界の上で考へるに傾く。米國は遅れ走せに走せ加はり、敵の止(とゞめ)を刺すに與つて力が有つたが、戰場より遠く、且戰時利得で最大成金國となり、世界一呑みのやうな意氣込みに成つて居る。歐洲に於ける敵も味方も、米國に依頼するの傾向がある。佛も英も其他も、疲弊を恢復するに米の資金を要するが如く考へる。獨墺側でも既に戰敗した以上、米の救濟を求むる外無いとする。露國でも米の救濟を望む。米が何程富んだとて、四方八方に手を伸ばし得べきでないが、必要上さういふ形に成つて居る。米國大統領ウイルソンが自ら講和會議に臨むといふので、其入り來る所、何處でも盛んに歡迎する。世界の事はウイルソンの思ふ存分と見える。

所で世間にいろ／＼改造意見が發はれる内、大畧二通りに岐れる。佛國とか白耳義とか、一國内の恢復を旨とするを別として、世界の上で考へるのは、現在の國家を如何に爲べきかといふ事と、現在の生活狀態を如何に爲べきかといふ事とである。隨分さま／＼の説が出た。ウイルソンの十四箇條は國家に關して居る。其の始めて出でた頃、特別に異議を挾む者が無く、夫れ位の事は有り得べきであり、又有らねばならぬとする。國家の上でさま／＼改造策が出た内、ウイルソン案から實行に着手すべきものの如く考へられる。正義人道の標準に於て事を定めて居るらしい。正義人道の前に抵抗しやうが無く、遉に米國は新世界の文明國であると、賞めそやす聲が聞える。

所が國によつて十四箇條に面白くなく感ずる所がある。英國では海上の自由を無造作に取扱ふ事を好まぬ。獨逸は兼ねて英の海上に於ける勢力を殺がうとし、戰役開始の原因に之を數へ得られるが、英が折角骨折つて勝利を得、而して海上の勢力を制限せらるゝ事は好む所でない。露しく爭はぬが、斷じて此點に觸れる事を許さぬ底意がある。ウイルソンは其邊に氣が着かぬでなく、ロイド・ジョーヂが之に就いて言ひ出した時、輕く受けて深入りを避けた。國際聯盟とすれば問題となるまいと思ひ、事實に於て英の言分を容れて居る。クレマンソーが敵國を處分するに就いて多少の面倒がある、佛獨特別の關係からの要であつて、米國の立場で考へては納得が出來ぬ。ウイルソンも直ぐと承諾するに躊躇したが、クレマンソーは國内に血を流したものは特別の事情が有ると言ひ、何としても聽きさうもなく。遂に之を聽かねばならなくなつた。

米の國内でも種々の議論が出て、十四箇條に不滿足を唱へ

る。モンロー主義を歐洲へ持出す事になり、之を承諾させた。モンロー主義は歐洲に何の必要あるか、世界に何の必要あるか。墨西哥では唯合衆國の爲めと稱し、之に反對する。然し米では何處までも之れを加へずに置けぬ。伊國はフユーメ問題で面倒を起し、急に承知しようと爲ぬ。日本でも青島問題で前の約束を反古にするを肯んぜぬ。ウイルソンが始め歐洲に渡つた時の意氣込が漸次減じ、殆どしどろもどろの爲體と云はれるやうになつた。然し國際聯盟は成立した。之れ南阿獨立に力有つたスマッツ將軍の關係する所であり、或ひは獨立計劃の變形したものとも觀られるが、一般に國際聯盟を是認する勢あつた事を認めねばならぬ。國際聯盟の語は何人より出でたるにせよ、既に二十四國の聯合を以て獨墺側四ヶ國を征服した以上、跡始末するとなつては、何とか聯盟に考へ及ばずに居れぬ。聯合は戰時だけの事、戰役が終れば必要なく、さらばと云つて散り散り離ら離らに成る譯に行かず、世界の事は何とか列國の相談盡くで取極めるが可いと云ふ事になる。國際聯盟は全く新しい現象と云へず、前にも其の形跡あるが、之を大規模にし、世界に關するやうにしたのは、戰役の結果に外ならぬ。改造と云へる程のものか何うかは疑問を免れぬにせよ、日本で憲法に觸れまいかとの議論が出て、米國上院で之に加はるの條件に關して、講和條件の批准を差控へたので、相應に重きを置くべきを認めてよい。之が何程世界の平和に益するか。若干國の同盟とか協約とかの變形に過ぎぬやうな事がなからうか。今後列國競爭に危險が無いではなく、英國のジエリコウ提督は米國の態度に不審を抱くことを明言した。列國關係の改造が、新に成立した國際聯盟で終つたものとすれば、物足らぬ感じを免かれぬけれども、今日實行といふ所は其邊にある。

國家關係を外にして、生活問題が之れに優るとも劣らぬ勢を呈して居る。其の由つて來る所久しく、過去幾多の變亂で全く之を省いたのが無いと云へるが、世界戰役を以て特別に重きを加へた事情が二つある。一つは多數の勢力のいよ〳〵明白となつた事、又一つは資本勞働の關係の不可解の事がいよ〳〵露骨になつた事是れである。多數の力は次第に知れ來り、立憲政治なり、徵兵制度なり、皆之を示して居るが、最近戰役に於て、一人にても多く人を要する事が分つた。戰役で最も重要なものは兵數の多いに存し、兵數が足らなくては何としても仕樣が無い。佛國は軍備及び勇氣に於て劣らず、同數の兵を以て闘へば佛に强味がある。獨軍は遭遇戰を避けようとする。然し佛國人口が獨より三割半も少いと同じく、兵も足らぬ。無理して兵を揃へ

るけれども獨でも無理して兵を拵へる。佛は到底受け身に成るを免かれぬ。英國も本國に人口が多くなく、植民地から集めねばならぬ。佛でも英でも黒奴を加へる。何でも人を得ねばならぬ。戰場に出る者があれば、何者かを以て其後を補ふを要し、矢張人を肝要とする。愈々危險を告げ來つては、苟くも銃を肩にし得る者は悉く戰場に出ねばならぬ。如何なる名將があつても、兵數が不足しては勝ちようがなくなる。飛行船、飛行機で相互ひに見張り、少數を多數に見せ掛けるのが難かしく、多數は眞に多數でなくてはならぬ。戰役が四年半も永引いたのは、孰れにもナポレオン程の名將が居らなんだのにも由ると言へるが、原とは言へば兵數の競爭となり、力づくで鬪ふの外ないに由る。一方が甚だしい弱兵ならば早く片着けど、昇ば優劣ない兵では數の多い方が勝つ。敵に大差なければ互に押し合ひ壓し合ひするに止まる。以前には名將を神の如く崇め、今でも之に敬意を拂はぬでなく、ジョッフル、フォッシュ、ペタンを尊敬するが、兵が大切といふ事が頗る明白になり。夫れ丈け民衆の力を重んぜずに居れなくなる。露國革命の如き、全く多數の力に基く。愚民でも何でも多數に敵はなくなつたのである。大將が命令しても、誰が命令しても、聽かねば夫れ丈けの事である、力づくでは大將が兵卒百人に勝てぬ。十人にも勝てまい。そこで命令が行はれず、一朝にして革命が出來上つた。他の國々で之れ程秩序が亂れぬけれど、多數の力を認めずに置けぬ。民衆自ら力有るを知り、政府に於て之を力有る者として取扱ふやうになつた。英國で一時に婦人六百萬人に選擧權を與へたのも、多數の力を認めたのに由來する。

多數の力を認むるに到り、偖て其多數が何の狀態で生活して居るかと言へば、少數資本家に較べて餘程の距りがある。勞働者が終日働きながら、資本家が寐轉んで居る所の百分一に足らず、千分一に足らず、萬分一に足らぬのがある。或ひは十萬分一にも足らぬ。資本家が何の力を以て斯く働かずに多くの收入を得るか。前に社會問題として唱つた所のものが、一時に注意を惹いて來た。勞働者が悉く複雜なる問題を解するのでなく、資本家との關係に疑を容れぬのもあるけれども、何處となく不可解を覺えたのが、いよいよ痛切に感ずるやうに成つた。音頭取りがあれば直ぐに之に應ずる。資本家は資本を以つて戰時に儲くしたもの丶、資金で損したのではなく、中に得したのがある。成金が可也にある。大成金もある。法律上當然の途を踏んだのであるが、多くの人が懸命に働き、生命を擲つて居るのに、募債に應じたり、必需品製造に加はつて居る丈けで懐が暖

くれるとは奇妙であると疑はれる。戰時利得税を取り立てるに異議が無く、異議を唱へれば社會の制裁を蒙る。併し革命でないが故、舊來の秩序の存續し、資本家も割合に得せぬといふ丈けで、得して居るのが多い。隨分得したのがある。勞働者も勞銀が高まつたけれど、物價騰貴して思ふほどに都合が好くない。資本家が成功するのも勞働者の力に依る事、尙ほ將校の成功が兵卒の力に依るやうであつて、而も資本家中懷手で濟して居る者が少くない。懷手して儲け、勞働者の百千倍を得るのは、何の理由に於てするか。資本勞働の關係を變革するの必要ある事が廣く知れ渡つた。産業上大改革を施すの時期が到來したとも見えた。若し變革を懈るならば、露國ボルセキキの侵入を禦ぐ事が出來まいとし、改革の機運が刻々に迫つて來た。

所が戰役が今一層永引き、七八年にも及んだならば、或ひは大いなる變革の餘儀ない事になつたらう。併し四年半で敵國全滅になり、戰勝國の政府が頓に力を得、資本家も之と共に力强く成つて來た。今ならば如何なる同盟罷業が起つたとて、之を鎭壓するに難くなく、根の深く廣まるに先んじ、同盟罷業を起さ世之を處分し、秩序を鞏固にするに若くはないと相談し始めたのがある。或ひは私かに煽動したとも疑はれる。戰勝を得た政府及び資本家は景氣が好い。多數民衆は萬歲の聲で景氣付いて居る。大勝利を得たので、是れから凡べて景氣が好くなると思ふ。選擧があると政府側の利益になる。産業の大改革期に廻つたやうであつて、いよ〳〵となり資本家の勢力が尙ほ旺んなるを示した。國際勞働會議の如き、資本家の勢力の容易に動かぬのを證する。然しそれで勞働者が屈服されたのでなく、大改革を豫期した割合に變革が少いのみで、勞働者の力の伸びるやうになつたのは確かである。勞働會議でも明かに之を示す。

世界に特殊國を認めるのは姑息のやうであるが、夫れでも全く手を着けぬに優して居る。特殊國でも勞働者に相應の注意を拂ふ事になつた。併し問題は之れで解決して居らぬ。今日まで勞働者といふのは殆ど全く筋肉勞働者に限り、精神的なのを含まぬ。問題が資本勞働より移り、怠惰勤勞となれば事が頗る難かしい。其愈々明白になる頃、今と社會狀態を變ずる事少くなからう。

改造の說のさま〴〵ある內、國際聯盟と國際勞働會議とが重要なる問題となり、愈々實行に着手するに及び、前の理論と遠ざかつて來た。實行は概ね理論よりも現狀維持に近くなる。然し實行は今日で終つたのでなく、前途遼遠、其間に理論の實行を促すのがある。次から次へと議論が出る。夫れも實行に臨ん

で現狀維持に近づく。が、理論は其れで消滅せず、更に實行を促し、斯くて次第に進步する。時として變亂があらう。大變亂があらう。或ひは退步もあらう。然し大體に於て進步を續け、一世紀は一世紀より進步の著しいのを見る。變亂の犧牲となるものは不幸であるが、人類全體として少しづゝ生活狀態を向上する。尙ほどれ程犧牲になる者あるかが知れず、如何にして犧牲を最も少くすべきかも、重要問題たるを失はぬ。

デモクラシーの制度を論ず

（新政治制度の提唱）

室伏高信

（一）

われ／＼は今日財産をもつてゐないしまた選擧權をももつてはゐない。われ等は貧乏であるがゆゑに選擧權をもたないであらうか。或は選擧權をもたないために貧乏であらうか。ブルジヨアの政治家はわれ等に告げていふ、『諸君は貧乏である。貧乏人は——恒産のないものは恒心がない。恒心のないものは選擧權をもつことができない』と。ブルジョアの政治哲學は實に簡單である。さうして彼等自身を支配者として維持するために好都合な政治哲學である。しかしこうしたブルジョアの『政治哲學』は目ざめた民衆を欺くべくあまりに簡易な政治哲學である。それは最も普通選擧の偉大なる民衆的要求の前に何等の權威をももつことはできない。普通選擧はデモクラシーの必然的の第一步であることは可成り久しくわれ等の世界に承認されてきた事實である。しかし普通選擧に對しても私は最初の疑問を繰返さなくてはならない。われ等は貧乏であるがゆゑに選擧權をもたないであらうか。或はまた選擧權をもたないために貧乏であらうか。プロンテーアは世界における最初のソーシャル・デモク

ラシーの主張者である。普通選擧は彼れにおいては一切のデモクラシーの母である。彼れはこの疑問に答へて次のように述べる、『惡漢共は諸君に對し、諸君は財產をもたないために代表されないのだと語るであらう。しかし私は諸君に對して次のやうに語るであらう、諸君は代表されないゆえに貧乏であるのだ』と。ブロンテーアのこの言葉は僅に一面の眞理を包んでゐる。ブルジョアの『簡易政治哲學』はブロンテーアの前に抗辯すべき何の理由をも發見すること」はできないであらう。しかしわれ等は普通選擧に對してあまりに多く買被つてはならない。普通選擧は米國に、英國に、佛國に、獨逸に、伊國に、ヨオロッパ人の住むあらゆる地球に行はれてゐるといふことができる。それにもかゝわらずヨオロッパ人の住む到る所に貧乏が存在してゐる。普通選擧が貧乏を救治することのできないものであることは明白である。普通選擧とは何んぞや。私はこゝに普通選擧を說明しようとするものではない。しかし普通選擧について何時にてもいひえられることは、それが政治的デモクラシーの必然的の方法であり、さうして今日までわれ等に與へられてきた政治的デモクラシーの最上の方法であるといふことである。獨りブロンテーアによつてだけではない。普通選擧は、今日までの多くのデモクラシーの主張者によつて政治的デモクラシーの究局の方法であるかのごとくに思はれてきた。世界は今日既に一、二の反動的國家を殘して普通選擧の時代にと入つてゐる。われ等は決して普通選擧の功績を否なもうとするものではない。われ等は普通選擧が各國において勞働者の政治的權力を擴大したことの事實を卒直に承認するものである。さうして今日未だ普通選擧にまで到達してゐない反動的な國家、例へば日本のような反動的な國家が直に普通選擧を採用すべきものであることを熱心に主張するものである。しかしそれが貧乏を救治する力のないものであることは既に述べたとほりである。獨り貧乏だけではない。貧乏の源泉としての賃銀奴隷制度をも救治することはできない。近代生活の一切の根本的病弊を救治するには普通選擧はあまりに無力であつた。普通選擧といふよりは、普通選擧によつて政治的デモクラシーの究局の段階にまで到着したかのごとくに裝つてゐる代議制度は、近代生活の根本的病弊を救治するのにあまりに無力である。或はあまりに不適當である。いふまでもなく私は代議制度をもつてブルジョアの治世に必然的なものとして說明しようとするものではない。われ等は勞働組合主義の歷史のうちにおいても代議制度の發達したことの事實に眼を蔽ふてゐることはできないからである。しかし勞働階級の治世において政治的デモクラシーの制度とし

ての代議制度が、縦令それが普通選擧の段階にまで到達してゐるにしても、眞にデモクラシーの制度として、デモクラシーの精神とその必然的要求とに奉仕することができるかどうか。デモクラシーの發達とデモクラシーの制度との關係如何。私のここに述べようとする問題はこの點である。

（二）

古代のデモクラシーが『中世の夜』のうちに葬られてゐる間は極めて長い間であつた。近世の初頭において、デモクラシーがわれ等の世界に回復された時に、そのデモクラシーは代議制度を作つてきた。英國に生まれ、英國に發達した代議制度は、近世デモクラシーの原則的制度として、大陸の諸國においてもそのまゝに承認されてきた。しかし政治的デモクラシーが議會のうちに、或は投票函のうちにデモクラシーの勝利を謳歌しつゝあつた間に、工場組織のうちには、更に新らしいオートクラシーが成長してきた。そのオートクラシーは『自由』の名を冠つてゐた。しかし自由の美名のもとに、封建主義よりももつと根強い、さうしてわれ等の生活の殆んど一切を支配する強大なるオートクラシーであつた。資本主義の發達がこれである。資本主義の發達とともに、政治的デモクラシーは單なる投票函のデモクラシー、議事堂内のデモクラシーであるに過ぎないこととなつた。このバロット・ボックス・デモクラシーに對して一八四八年の革命は世界の歴史に更に一時期を劃さうと企てた。社會主義の革命運動がこれである。社會主義運動とは實に工場オートクラシーに對する新らしきデモクラシーとしてわれ等の世界に提供せられた偉大なる運動である。彼れは鋭き眼をもつて政治的デモクラシーの缺陷を觀破した。彼れは更に工場のうちに隆盛なオートクラシーの存在してゐることの事實を觀破したのである。さうして經濟的自由は經濟的不平等を打破することによつてのみ贏ちえらるべきものであるの點に着目するに至つた。即ち社會主義は政治的デモクラシーに更に經濟的デモクラシーを接穀しようと企てた。ソーシャル・デモクラシーがこれである。この社會主義の發見は人間文化史上における偉大なる發見の一つである。私は社會主義のこの功績を否もうとする者へは少しもない。その社會主義は今日では既に單なる『ヨオロッパを徘徊する怪物』ではなくして、既に世界のある部分においては支配的權力であり、その段階にまで達してゐないところであつても、社會主義の宣傳は、各國の勞働階級の間に浸透しつゝある。それにもかゝわらず、社會主義は各國の勞働階級に對して必ずしも充分の滿足をもつて迎へられてゐる

のではない。否な社會主義に對する不滿の聲は益々甚だしくなりつゝある傾向を見る。サンヂカリズムのごとき、I・W・W・のごとき、ギルド社會主義のごとき、或はボルシエヴヰキ社會主義のごとき、みな社會主義——正統派または修正派社會主義に對する不滿の結果である。一八四八年において社會主義——『共産主義』が『ヨオロツパを徘徊する怪物』であつたがごとく、今日においてはサンヂカリズムのごとき、ボルシエヴヰキのごとき、或はI・W・W・のごとき、或はギルド社會主義のごとき運動が『世界を徘徊する怪物』である。さうして社會主義の實現されつゝある國家においてさへ、勞働不安は頻々として起りつゝある。勞働不安は、ロシアを除いては、今や全世界を通じての現象である。その勞働不安の世界的原因如何、私は敢て世界的といふ。各國においての特種の原因はこゝに考究することの必要に迫られてゐないからである。勞働不安の世界的原因のうちには、一、大戰の影響、二、物價騰貴、かういふ原因は何人もこれを閑却することはできない。賃銀値上げ或は賃銀現狀維持の要求は、今日においても勞働不安の重要なる原因の一つであることは疑のない事實である。しかし今日の勞働不安の世界的特質を發見しようとするものは、今日の勞働不安が、最早や單なる勞働條件の問題ではなく、また單に社會主義運動の結果でもなくして、更に現代勞働不安の根柢に横はつてゐる重要なる一原因を發見しなくては止まないであらう。反政治的の世界的傾向がこれである。英國において、フランスにおいて、米國において、われ等はこの現象を目撃するのである。英國の勞働運動について語つてゐる多くの人々は、英國の勞働運動が今日において政治的となつたことを主張する。對外政策について勞働者が干渉せんとすることのごときは、彼等の謂ふところの勞働運動の政治化である。しかしかういふ人々は勞働運動の政治化の意義について何等の理解もないことを暴露してゐるものであるに過ぎない。英國の勞働運動が政治化の傾向をもつてゐたのは一八八九年のドック・ストライキから一九一〇年に至るまでの時代であつた。爾後、英國の勞働運動は益々非政治化の傾向を示しつゝある。一九一一——一三年のサンヂカリズムの運動、その後においてのマルクス派産業組合主義、さうしてギルド社會主義、これ等の新らしい現象は、英國の勞働運動の非政治化の傾向を最も端的に物語つてゐるものである。フランスの勞働運動がサンヂカリズムにおいて特質をもつてゐるものであることは今更らいふまでもない。フランスの社會黨が今回（一九一九年十一月）の總選擧において失敗したことは、少くとも一、獨逸に對する敵愾心。二、選擧民の多數が保守的な農民で

あることゝの原因を無視することはできないにしても、それとともにまたわれ等の觀過することのできない他の重大な原因の一つは、勞働階級の政治運動に對する反感である。即ち社會主義とサンヂカリズムとの分裂であるといはなくてはならない。米國においても、勞働運動がゴムパアス一派のクラフト・ユニオニズムによつて支配されたのは既に過去の時代と化しつゝある。米國における今日の勞働不安は既にゴムパアス一派によつてよりは却つてより多くI・W・W・の一派によつて指導されつゝあるのを見る。かくして今日の世界の勞働不安は社會主義から來るといふよりは寧ろ勞働運動の非政治的傾向のうちにその世界的の新特質を見ることができるのである。この傾向は何を物語つてゐるか。或は何ものを要求してゐるか。それには純粹な無政府主義思想の影響も數えないわけにはゆかないであらう。サンヂカリズムのごとき、I・W・W・のごときは素よりこの影響をうけてゐる。ギルド社會主義と雖もまたこの影響から全然免れることはできないものであらう。しかしわれ等は無政府主義思想が現代勞働運動の基礎であると信ずることはできない。

(三)

アーサー・ヘンダアソンは英國勞働黨が最初に下院に送ることのできた三人の議員のうちの一人である。爾來引續いて(一九一八年の總選擧に落選したが一九一九年補缺選擧に當選)下院議員として立つてゐるヘンダアソンはクラインス等の一派と共に熱心なる議會派の一人として終始してきたものである。そのヘンダアソンが最近に演說してゐるところはわれ等の深く興味を感ぜざるをえない。彼れは勞働不安の世界的原因をもつて、政治組織の缺陷に歸してゐる。彼れは次のように述べてゐる「進步した組織をもつてゐる各國における勞働不安は、主として政治制度がデモクラシーの發達と調和を保つてゐないことの事實に原因するものである」と。私はこの見解に同意を表するものである。先づサンヂカリズムについて見る。サンヂカリズム——革命的サンヂカリズムは一種の無政府主義であることは勿論である。私はこれを組織的無政府主義であると考へてゐる。しかしフランスの勞働組合が最初から無政府主義の思想のもとに組織せられ、または最初から無政府主義に奉仕してきたとなすことは大きな誤りである。フランスの勞働組合は、他の多くの諸國の勞働組合のごとくに、最初は社會主義によつて指導せられた。ゲードの政治的社會主義はフランスの勞働組合の大半を征

服してゐたのである。一時は三萬六千のコムミユーンのうちで政治的社會主義から征服されないものが僅に百五十しかなかつたといふ時代もあつたのである。即ちフランス・サンヂカリズムの支持者としての勞働組合（サンヂカ・ウーブリエ）は、最初は無政府主義によつて指導されたのではなくして社會主義、政治運動に結合することにおいて彼等の勞働運動が指導されてきたのである。それが何故に革命的サンヂカリズムに變化して行つたのであるか。その原因は、これを單一のものとして指摘することは素より誤りであるにしても、私はその主要なる原因の一つは、社會主義者の變節的行動であると考へる。ミルランのごとき、ブリアンのごとき人々の行動がフランスの勞働者を政治的に失望せしめたことは實に傷ましいほどであつた。その失望から勞働者の政治的反感が生れたのである。更にもう一つの原因を數へると、フランスの選擧民の大多數が農民であるといふことである。その結果は勞働運動の主動力としての工場勞働者の利害が下院に適切に代表せられることが殆んど不可能とならざるをえない。この點もまたフランス勞働運動の政治的失望の重大な原因の一つでなくてはならない。かくのごとくにしてフランス・サンヂカリズムは、政治家または政治制度に對する失望と反感とによつて醞醸され、或は少くともこれによつて激成されたものであることを知るのである。ソーレルのごときはデモクラシーに對して深い反感をもつてゐるようであるにしても、ソーレルの謂ふところのデモクラシーとは、たゞ多數決主義の制度、特に代議制度を指すのであつて、デモクラシーそのものを指してゐるのではない。即ちデモクラシーの制度として今日までにわれ等の政治組織に提供された制度に對する反感であつてデモクラシーそのものに對する反感として受取ることはできないのである。また米國のI・W・W・について見るに、この團體にしても、決して最初から無政府的團體として生れ出でたのではない。I・W・W・の組織されたのは一九〇五年六月である。その年の十一月になつてこの團體が三十一人の人々に送つた書簡はI・W・W・の最初の宣言であるとして見ることができる。それによる時は、I・W・W・は勞働階級によつての産業の所有と運用とのために、勞働階級を『政治的及び産業的ラインに組織する』ことを主張してゐるのである。即ちI・W・W・は單なる直接行動の團體として生れたのではなくして、『産業的並に政治的』の團體として生れ出でたものである。その後一九〇六年の會議において『政治的』行動に反對するものもあつたが、デレオンやリヒタア等の支持によつて政治的行動はI・W・W・の綱領のうちから除きさられるに至らなかつたのである。かくのごとくにしてI・W・

W・もまた決して最初から非政治的の團體として生れたものではなく、その指導者中には多くの政治的社會主義者が存在してゐたのである。しかしI・W・Wはその會合の一回毎に非政治的傾向を濃厚にして、遂に政治派としてのデレオン等の勢力を驅逐して純然たる非政治團となるに至つた。アメリカ・デモクラシーとI・W・Wとの間に何等の調和點も發見されるに至らなかつたからである。しかしアメリカ・デモクラシーに對する失望はデモクラシーそのものに對する失望として考へらるべきものではない。アメリカ・デモクラシーは亡びてもデモクラシーそのものは亡びるものではないからである。また英國の勞働運動について見るも、一八八九年のドック・ストライキ以後において英國の勞働者は決して政治に對して反感をもつてゐるものではなかつたし、勞働黨の成立は、勞働階級の間に深い信用と期待とをもつて迎へられたことはその當時の事實であつたに相違ない。しかし英國の勞働黨がその勞働階級の期待したほどに效果をあげなかつたといふこともまた事實として承認しなくてはならない。この事實は產業組合主義、ショップ・スチュワード運動、また、ギルド社會主義によつて無遠慮に指摘されてゐるところである。これに對し勞働黨にも言分がないことはない。例へば昨年（一九一八年）の總選擧において英國の勞働黨が汎く選擧民に散布したリーフレットについて見る。それには次のように述べられてゐる。

『勞働黨の必要と價値とは過去十年間の經驗によつて證據立てられた。……勞働爭議法は勞働組合に對してそれの基金の保護とストライキの權利とを回復した。勞働者賠償法は、過去六ケ年間において不慮の出來事に對する賠償として二千萬磅を供給した。これ等の結果を齎らしたものは勞働組合の政治的行動である』(Labour Party Leaflet, No. 61)

英國勞働黨がその政治行動によつて何ものかを勞働階級に與へたことは事實である。しかし勞働階級の求めるところが、單なる賠償金の問題であるかのごとくに思ふことが既に大に時代に通ぜざるものである。英國の勞働階級が單なる賠償金の增加を要求したものでないことは、英國に於ける勞働運動の新らしい凡ての傾向がこれを卒直に物語つてゐるのである。勞働黨はこの求むるところを滿たすことができなかつたのである。勞働黨不信用の聲はかくのごとくにして揚げられてきたのである。しかし勞働黨は、勞働黨としてはできるだけの働きをなしたものであるかもしれない。それが何故に勞働階級の要求を失望せしめたか。その最も主要な原因の一つは勞働黨の議員の少數であつたことに歸すべきものであることは明白である。然らば更に

何故に勞働黨は多數の議員を選出することができなかつたか。それには各種の複雜した原因が存在するであらう。しかし私はその原因の最も重大なるものを、デモクラシーの制度の缺陷に歸せしめべきものであると考へてゐる。

（四）

政治に對する不信用の聲は現代勞働運動の世界的一大特質である。しかしこの現代勞働運動においての非政治化の傾向は必ずしも無政府主義の思想によつて靈感されてゐるのではない。彼れが政治的に出口を見出すことができないからである。デモクラシーの發達に對して新らしいデモクラシーの制度が與へられてゐないからである。

（五）

社會主義は新らしいデモクラシーを創造した。ソーシャル・デモクラシーがこれである。しかしソーシャル・デモクラシーは何等の新らしい制度をも創造することはできなかつた。彼はブルジョア・デモクラシーに對しては激烈な攻擊を加へた。パクーニンからはマルクス自身が『ブルジョア』として罵られながらも、そのマルクスはブルジョアに對し、ブルジョア・デモクラシーに對して痛烈な攻擊を加へた。しかしマルクスは國家社會主義に對して道を開いたことの以外には何等の新らしいデモクラシーの制度をも創造することはできなかつた。彼れの門下としての獨逸社會民主黨は、ゴータ宣言について見てもエルフルト宣言について見ても、その第一に標榜するものは普通選擧の要求であり、ブルジョアの舊制度に對して何等の新制度をも提供してゐない。即ちブルジョア・デモクラシーの舊制度に對して彼れの謂ふところの新デモクラシーとしてのソーシャル・デモクラシーを接續しようとしたに過ぎなかつたのである。獨り獨逸の社會民主主義だけがさうであるのではない。フランスにおいても、英國においても、墺洪國においても、白耳義においても、正統派社會主義または修正派社會主義はブルジョアの舊制度に彼れの新らしきデモクラシーを接續することの以外には何等の制度的創造力をも示すことはできなかつたのである。復興された第二回國際社會黨もまた世界の勞働階級の結合のために戰つてきた。しかし新國際社會黨は旣にツーリツヒの第三回の會議において一切の非政治的行動を排し議會主義を採用すべきことを決してゐる。爾來議會主義は社會主義の政治方法そのものであり、議會主義と社會主義とは切り離して考へることのできないものとなるに至つたのである。即ち『共產黨

言』においての政治的權力の征服はたゞ議會制度によつて行ふべきものであるとするのが正統社會主義または修正社會主義の信條となるに至つたのである。ベーベルはこの點を説明して『勞働階級によつての政治上の權利及び立法の利用』であるとなしてゐる。ベーベルの言葉の通りそれはブルジョアの制度の利用であらう。しかし利用とはそれ自身創造力の無能を意味してゐるものでなくてはならない。然り、社會主義は新しいデモクラシーを引出した。さうしてその新デモクラシーへの新らしい道を與へることができなかつた。私は社會主義の一大缺陷がこの點に存在してゐることを信ずるものである。またさうして社會主義への非難の重要な理由の一つがこの點に存在してゐることを信ずるものである。

（六）

今日までの世界に與へられたデモクラシーの制度として最も代表的なものは直接民主主義(ダイレクト、デモクラシー)と代議政治(レプレセンタテイヴ、デモクラシー)の二つである。ダイレクト・デモクラシーは希臘及びローマにおけるデモクラシーの形式である。『直接民主主義は近世の大國家には適用することはできない。』こういふ理由から近代民主主義は代議制度を採用することとなつてゐる。その理由に對してはわれ等もまた同感である。しかし近世の大國家に當嵌めることのできないものは獨り直接民主主義だけであると思ふことはできない。代議制度もまた近世の大國家、特にデモクラシーの發達に對して不適當な制度となつてゐるのではないであらうか。代議制度、議會主義は今日までのデモクラシーを表徴すべき制度として存在してきた。しかし今日のデモクラシーは多くは非議會主義として出發してゐる。或は少くとも議會萬能主義に反對のものとして立つてゐる。この點は議會制度の淵叢としての英國においてさへ既に顯著である。直接行動論が英國の勞働階級の指導的精神であることは何人も拒むことのできない事實である、英國におけるデモクラシーの二大對抗は、素よりトーリー、ホイッグの對立でないのみならず、今日にてはまた決して議會制度のうへに演ぜられる自由主義對社會主義の對抗であるともいふことはできない。その爭ひの最も中心的且つ感激的のものは議會主義對直接主義の對抗であるといふことができる。即ちロイド・ジョーヂ對ヘンダアソンの爭ひといふよりは寧ろより多くロイド・ヂョーヂ――ヘンダアソン對スマイリーの爭ひであるといふことができる。フランスにおいても米國においても、デモクラシーの潮流は同一の方程式に要約することができるであらう。ロシアにおいては既に議會主義の覆滅を見るに至つてゐる。世界のデモ

クラシーの潮流は今やかくのごとくである。素より私はI・W・W・を謳歌するのでもなく、サンヂカリズムを稱讃するのでもなく、ボルシエヴヰキに左袒しようとするのでもない。しかし如何なる立場にある人と雖も世界の指導的の潮流に鋭敏なる能はざる人はたゞ現狀維持においてのみ彼れの所有慾を滿たすことのできる人であるに過ぎない。世界は今動搖しつゝある。世界は何ごとか深い不安に驅られてゐる。專制主義を追ふた世界は、ブルジョア・デモクラシーを迎えた。しかしそれに滿足することができなかつた。その世界は更にソーシャル・デモクラシーの前にも不滿である。彼等は尙ほ何ものかの厭迫を感ずる。何ごとかの不自由を感ずる。世界はデモクラシーを愛せざるがために不滿であるのではなくして、デモクラシーを愛するがために、さうして自由のうちに眞實のデモクラシーを見出さんがために悶えてゐるのである。その悶えは議會主義を排斥しつゝある。然り、現代世界における最も著しい對抗は、或ひは少くとも最も新しい潮流は、資本階級對勞働階級の爭ひであるのみではなく、舊デモクラシー對新デモクラシー、舊社會主義對新社會主義の爭ひであり、さうしてその舊デモクラシー對新デモクラシー、舊社會主義對新社會主義の爭ひは、制度的觀察からすれば議會主義對非議會主義の爭ひに要約することができるのである。

（七）

議會主義の特質は二つに要約することができる。その一つはそれが地理的デモクラシーの基礎のうへに立つことである。他の一つは代表關係である。先づ第一點から見るに、議會主義は人民を代表するものとして生れてきたにしてもその人民とは地理的にのみ考へられてゐる。即ち議會が人民を代表するといひえられるにしても、その人民とは、たゞ地理的一定區域を意味するものであつて、その一定區域内の自然人を機械的に人民として觀察するものであつて（制限選擧權のもとではそれまでにもゆかない）この點において議會は尙ほ國家といふことゝ同じように同じ地理的關係においての人民を代表するに止まつてゐる。他の言葉をもつていへば地平線的にばかり人民を觀察してゐるものであつて垂直的に人民を觀察することの一切の用意を忘却してゐるものである。この觀察はある點において例外がないことはない。即ち上院と下院との區別がこれである。上院とは人民に對する地理的觀察から生れてきたものではなくして人民の階級觀から生れてきたものである。しかしこの例外はたゞ封建制度の遺物であるといふに止まつてデモクラシーの發生

とともに當然消滅すべきものであり、議會主義の本質が下院本位の政治原則に歸着するものであることは恐らく何人も承認しなくてはならないところであらう。從つて議會主義の本質は地理的であるといふことができる。その結果は、自給經濟の時代には何等の不公平もないであらうが、生產者と消費者とが區別せられる時代においては、この議會主義は決して人民を代表することはできない。卽ちこの時代においての議會主義とはたゞ消費者の利害を代表することができるだけである。消費者はその性質において地理的であるがゆゑに議會主義は消費者の利害に對しては一致してゆくことができるのであらう。それさへも今日においては他の重要な缺陷のために不滿足であるが、議會主義の性質上、それは消費者本位の世界にのみ當篏められるものであるといふのである。從つて生產者の利害は議會主義のもとにおいては代表されることができないことになる。甲の生產者、乙の生產者、一切の種類の生產者はたゞ地理的にのみ區別せられるものであり、從つて生產者として取扱はれるのではなくして消費者としてのみ取扱はれてゐるのである。農業に從事する人も、水夫も、礦夫も、鐵道從業員も、纖維工業に從事するものも、たゞ一律に消費者としてのみ取扱はれる結果、各生產者の特種的地位、特種的利害は議會主義のもとでは一切閑却され、たゞその人々の消費者としての方面だけが考慮されることとなるわけである。かういふわけであるから議會主義のもとでは生產者といふものが認められないで一切が消費者の利害によつて決せられることとなる。勿論日本の今日の議會のような制限選擧制で且つ資本主義のもとではこの域にさへ達してゐないことは明瞭であるが私はこゝに日本の現狀の制度を論じてゐるのではない）またその結果消費者の專制となることは必至のことである。卽ち生產者の不自由においての消費者の自由といふことになる。消費者デモクラシーであつて生產者のためのデモクラシーが壓迫されてゐるのである。こゝに議會主義の根本的病弊が橫はつてゐる。此病弊はデモクラシーの制度としての議會主義の致命傷である。かくして議會主義はデモクラシーの制度ではなくして生產者壓迫の制度となるに至つたといはなくてはならない。今日までのデモクラシーに對する不滿の聲の最も重要なものはこの點についてのものである。サンヂカリズムからの不滿、I・W・W・からの不滿、ギルド社會主義からの不滿は主としてこの點についてのものであるといふことができる。

（八）

生產者のためのデモクラシーの主張せられてきたことは現代

におけるデモクラシーの一大特質である。それはブルジョア・デモクラシーに反對してゐるものであるのみならず、また單なる消費者デモクラシーとしてのソーシャル・デモクラシーにも反對してゐるものであつて、生産者のための自由と生産者のための發言權とを要求するものである。I・W・W・サンヂカリズム、ギルド社會主義等はこの側のデモクラシーを代表するものである。そのうちサンヂカリズム、I・W・W・は一方に消費者專制を主張しながらも彼れ自らの主張するところは結局生産者專制の要求であり、消費者專制と資本家專制とに代ゆるに生産者の專制をもつてしようとするものである。從つて單なる消費者デモクラシーが排斥すべきものとされる理由によつてサンヂカリズムもアメリカ・サンヂカリズムもまたともに排斥すべきものとされるのである。こゝにサンヂカリズムまたはアメリカ・サンヂカリズムの缺陷が存在する。このデモクラシーとしての缺陷はサンヂカリズムまたはアメリカ・サンヂカリズムをして無政府主義に究局せしめるに至つてゐるのである。これに對してギルド社會主義はこの缺陷――消費者專制にも生産者專制にも反對して、生産者及び消費者のために新らたなるデモクラシーを創造せんとして生れ出でたものである。こゝにギルド社會主義のデモクラシーとしての強味が存在してゐるのである。この特質を制度のうへに體現するために、ギルド社會主義は一方に生産者議會を創造することを主張する。コール、ホブソン、オレーヂ等の立場がこれである。この生産者議會とは生産者によつて組織せられ、生産者の利害を代表せんとするものである。しかしギルド社會主義は決して消費者議會をも閑却してゐるものではなくして一方に消費者議會を認める。即ち今日までの議會制度を消費者の代表者として承認すると同時にそれと並んで更に新に生産者の議會を起し、この二種の議會によつて消費者の利害と生産者の利害とを代表し、さうしてこの二つのものの間の利害の衝突は一種の兩院協議會のような制度によつて調しようとするのである。私はこの制度の組立が果して適當であるか否かをこゝに批評することを避ける。しかし消費者としての人民のほかに生産者としての人民を考量し、生産者と消費者の双方のためにデモクラシーを創造せんとする根本の原則に對してこれを非難すべき理由を發見することができない。否な今日までの消費者本位のデモクラシーの病弊を救濟するものとしてのギルド社會主義の發見は極めて重要な價値をもつてゐるものといはなくてはならない。繰返していへば議會主義はたゞ地理的民主主義または消費者民主主義であり、これが救濟のためには生産者のためのデモクラシーを考量しなくてはならな

い。その生産者を如何ような方法によつてデモクラシーに接續するかは組立上の技術の問題であるが、こゝに重要なのは何れかの方法において生産者をデモクラシーに接續して生産者のための自由を制度のうへに體現するといふことそれ自身である。さうして生産者としての勞働團體を選擧の一主體として承認し、その利害をデモクラシーの制度のうへに代表せしめなくてはならない。この點がデモクラシーの發達とデモクラシーの制度との關係についての私の考察の第一點である。

（九）

議會主義の第二の特質は代表制度であることである。代表制度それ自身は一切の大民主主義には免れることのできないものであつて、原則として代表制度をとることとそれ自身についてはわれ等の承認しえられるところであるにしても、こゝに現代議會主義について考へられることはあまり代表者と被代表者との關係が稀薄であるといふことである。即ち議會主義による時は、二年三年四年或は五、六、七年に一回づゝの選擧が行はれ、それによつて代表と被代表との關係が規律されることになつてゐるために代表者と被代表者との接觸する機會は數年間に一回であり、この機會においてのみ人民はその勢力を議會のうへに及ぼすことができるのみである。それゆゑに代表被代表といつても實際はたゞ法律上の擬制（フィクション）であるに止まつて人民と代議士との間に代表關係の成立する理由はなく、代議士は選擧の終了とともに人民の監督から引離されることとなる。さうしてその選擧の終了後において代議士が如何なる態度をとるにしても次の選擧までは人民はこれを監督すべき何等の方法をも與へられてはゐない。またその意思を代議士に影響せしむべき何等の有效なる方法も許されてはゐない。その結果は代表關係は存在せず、且つ人民の政治に對する興味は奪はれ、政治は依然として少數の人々——議員の手に集中されることとなるがゆゑに、議會主義もまた寡頭制であり、その本質において專制政治である。議會主義がデモクラシーを代表した時代は既に過去の時代であり、今日においては議會主義の維持は專制政治の維持である。この專制政治を除きさらなくては眞實なるデモクラシーは來ることはできない。それに對してわれ等が新しいデモクラシーの制度として考量しなくてはならないものはロシア勞兵會の制度である。勞兵主義 Sovietism については私は賛成することはできない。私はそれについて重大な缺陷の存在を信じてゐるものである。しかし勞兵主義が提供した新制度としての勞兵制度は將來のデモクラシーの制度に對して新らしき道と暗示とを與へてゐ

るものとして何人も閑却すべからざるものである。

(十)

ロシア・ボルシエヴヰキは最初からメンシエヴヰキの議會主義と戰つてきた。さうして一九一七年九月革命の成功とともに議會制度を廢して新制度――勞兵制度を創造した。勞兵制度の中心は勞兵會である。勞兵會は都會では一千人について一人の委員が撰まれる(委員數は一都市につき最低限五十人最大限千人)また地方(人口一萬以下の都市を含む)では百人について一人の委員が選まれる(委員數最低限三人最大限五十人)さうしてこの委員の任期は三ケ月である。この各地方勞兵會はそのうちから行政委員を選擧する。このほかに『工場勞兵會』または『赤衞勞兵會』といふ制度がある。これはボルシエヴヰキ・デモクラシーが單なる地理的デモクラシーに一歩を進めたものである。さうしてこれ等の地方勞兵會または工場勞兵會は勞兵組織の基礎であるが、このうへに更に數種の地方勞兵會があつてそれ等のうへに全露勞兵會議がある。この全露勞兵會議は更に二百人の全露中央行政委員を選擧し、それがまた『人民委員會議』を撰むのである。この最後のものが内閣に相當するものである。さうしてこれ等の凡ての委員はその選擧團體によつて何時にても罷免されることとなつてゐる。以上が勞兵制度の根本である。これを議會主義に比べて見ると委員と人民との關係が、代議制度においてよりも密接であることは勿論である。さうして「最高の委員」に不滿である時は中央行政委員の手によつて改革することができ、中央行政委員に不滿の時は全露勞兵會議でこれを改革することができる。特にリコールの制度は決して勞兵會制度によつて創造されたものではないにしても、これが勞兵會制度に接續してゐるために被代表者がその委員を監督する實力と權威とは常に保持されてゐるわけであつて、代表者は人民に對して常に切迫せる責任を感じ、人民はまた公共の事務、國家の政治をもつて自己の責任であると感じ、且つそれに直接の利害と興味とを感んぜざるをえないこととなるのである。即ちデモクラシーが人民によつて支持せられ、またデモクラシーが人民に眞實に分たれることとなる次第である。この制度は今日の議會制度に比べてより多くデモクラシーを體現してゐるものであることは明白である。繰返していへば勞兵主義には重大な缺陷がある。勞働者の獨裁政治を主張することにおいて勞兵會の主義についてはこれを贊助することはできないのである。しかしそれの創造した制度は新らしき時代におけるデモクラシーの制度として、そのまゝではなくとも、少くとも議會制度の破壞

に代るべき、多くの重要な暗示と創造とを含むでゐるものと思はれる。

（十一）

國家社會主義が消費者本位の主張であるごとく、議會主義もまた消費者本位の制度である。そのうへに議會主義はあまりに人民から隔絶してゐる。その結果は人民の眞實の利害はデモクラシーの制度のうへに代表されるに至らない。またその結果はデモクラシーに對する懐疑、政治に對する反感となるに至る。この缺陷を救ふの道如何、私はデモクラシーの發達に伴ふデモクラシーの新制度を創造するにあると信ずる。さうしてそれへの道として私はギルド社會主義の制度とボルシェヴヰキの制度とに着目せざるをえない。（大正八年十一月廿九日）

俸給生活者の地位並に運動の目標

法學博士　河津暹

一

中流階級は社會の中堅であることは世人の常にいふ所であるが、其の中堅である理由に至つては必ずしも明瞭ではない。私の解釋する所に由れば、中流階級に屬するものが、物質上、精神上健全なる狀態にあつたならば、其の社會の經濟、道德並に文化の支持者となることが出來ると同時に經濟、道德並に文化を發達せしむることが出來るものであるといふ意味である。中流階級が物質上餘裕ある狀態にあつたならば、比較的多數であるから、其國の經濟に最も必要である資本の比較的大部分は中流階級の節儉、貯蓄の結果から出づるのである。上流階級は一人々々からいへば勿論餘裕もあり、從つて貯蓄力も頗る大ではあるが何といつても社會の少數者であるから社會全體から見れば其國の資本の增殖に貢獻する所が少からざるを得ぬ道理である。又社

會の下層階級は數に於ては甚だ多いが餘裕のない階級であるから、これ又社會全體から見れば其國の資本の增殖に貢献する所が少からざるを得ぬ。獨り資本計りではない、其國の經濟活動の中樞となるものは概ね中流階級のものか、若くはこの階級から出でたものである。中流階級は知識階級を包容するものであるから、技術家、事務家等は勿論、眞實に事業界で活動する企業家はこの階級のものか、若くはこの階級から出でて上流階級に昇つたものである。これ等の點から考へれば中流階級は其の社會に於ける經濟の支持者であり發達者であるといふことが出來る。其の社會の美風良俗は健全なる中流社會階級によりて維持せらるゝは勿論、勞働者階級には向上進歩の標的とはなり同時に上下兩階級の衝突を緩和調停するものである。更にこの階級は知識階級を包含するものである以上、文化の支持者、發達者であることも多く論せずして明なる所である。思想の源泉となるべき著作や、社會人文を震憾すべき發明等は皆この階級の所産である。要するに中流階級が健全なる狀態にあつたならば其國經濟、道德文化の支持者であり發達者であることはさまで異論はあるまい。其れに其國行政の局に當るものゝ大部分はこの階級に屬するものであるからこの點からいつても極めて樞要な位置にあるものであるといひ得るのである。私は中流社會階級は社會の中堅であるといふことをかくの如くに解釋し、其の社會階級が物質上にも精神上にも最も健全ならんことを希望せざるを得ぬ。

二

然るにこの中流社會階級が今日物質上並に精神上健全なる狀態にありや否やは文化批判をするものゝ冷靜に考へなければならぬ問題である。近年資本主義が盛行するに伴ひ中流社會階級は物質上少からず壓迫を感せざるを得ぬ狀態に陷つた。汎く中流社會階級に亘つて如何にして壓迫を受けつゝあるかは「經濟學研究」創刊號に於て少しく論じて置いたから、こゝには問題を狹くして俸級生活者が現今の經濟社會に於て如何なる地位に立ち、其の自衞運動が如何なる目標に對して行はるべきものであるかにつき愚見を披陳して見よう。

中流社會階級に舊新の別があつて手工業者、小賣商人、小農業家等は所謂舊中流階級を組成するものであつて、官公吏、會社員等定額の俸給に衣食するものは、著作家、醫師、辯護士等所謂自由職業者階級と共に新中流社會階級を組成するものである。して見れば俸給生活者は新中流社會階級の比較的重要なる分子であることは論するまでもないが、この階級が今日の經濟

社會に如何なる地位を占めてゐるかについては大體に於て實に憫むべきものであると斷言することが出來る。この斷言の正否を批評するものは次の諸點について注意せられんことを希望せざるを得ぬ。

（一）俸給生活者は官公吏、會社員たるを問はず、精神的勞働に服して定額の俸給を得て生活を營みつゝあるものである。家に恒産なく、自ら勞働するに非れば、其の家族を生活せしむることが出來ないものである、所謂無資産知識階級である。資本家階級に屬せずして勞働者階級である。唯所謂筋肉勞働者と異るは一は主として精神的勞働に服すると一は肉體勞働に服するの差異がある計りである。街衢を徂徠する精神的勞働者の有樣を見よ、形容枯槁、顏色憔悴、世にも哀な有樣である。精神的勞働が肉體的勞働に比較して世から多く酬ひられつゝあるかといへば、我國の如きに於ては決して多く酬ひられてはゐぬ。多年螢雪の苦を積んで初て社會に出でた夥多の學校卒業者の俸給を檢せよ。其の費す所に比較して決して多いとはいふことは出來ない。然らばこれ等知識階級の俸給は年と共に多く增加することが出來るかといへば、勿論例外はあるが之を肯定することは出來難い。かくの如く知識階級が物質上薄遇せらるゝ理由は、一面に於て社會が學問知識に對してしかく尊敬を拂はぬに拘らず、一面に於ては筋肉勞働をなすことを以て社會上甚だ賤しむべきこととなし、昔時の武士は喰はねど高楊子の思想と同じく專ら精神的勞働に奔るものが多く又奔らすものが多くあるからである。其結果、精神的勞働者には之に代はらんとする位地の候補者が比較的多くあるのである。社會主義者の辭を藉りていへば豫備軍が多くあるのである。精神的勞働者が多く酬ひられざるは半ば之に起因する。

（二）俸給生活者は俸給に衣食するものであるから、いふまでもなく其の生活は俸給の多少に關係する。所で手工業者等所謂舊中流社會階級は經濟社會が好況となり、物價が騰貴すれば其の收入を增加せしむることが出來るのであるが、俸給生活者は全く反對の地位に立つものであつて、俸給其物が增加せざる限り、物價騰貴するに伴ひ、其の俸給の購買力が減少して行く譯になる。生活が益々迫害せらるるのである。罪なくして罰俸を受けつゝあると同じである。殊に近頃のように物價騰貴の勢激甚である場合には俸給增額等に由る壓迫の緩和位では到底之を救濟することは出來難いのである。この點からいふと俸給生活者は舊中流社會階級とは異つて消費者階級である。會社員の如きは間接には生産者階級と利害を同うするものであるが、其の關係は俸給、若くは之に附隨する賞與金で結び付けられてゐる

のであるから、直接には消費者として經濟社會に立つ譯である。

（三）然らば俸給生活者も生活の壓迫に堪えずして其の俸給增加を要求することが出來るかといへば、頗る困難なる立場にあるものである。其の點については遙に筋肉勞働者に比較して劣つてゐる。其の劣つてゐる點を擧げて見ると、官公吏の俸給は法律等に由り官等其他を基準として一定してゐるのであるから、法律等の改正があるか、官等の昇進があるのでなければ俸給の增加を望むことが出來難いのである。官等の昇進も事實上容易でないと同時に法律等の改正も是又容易ではない。反之筋肉勞働者の賃金は勞働社會の景況によつて高低するものであるから、經濟社會が不況に陷ると賃金は著しく減少するし、又多くの失業者を出す代りに、經濟社會が景氣が良いと賃金は比較的容易に增加することが出來る。會社員の俸給も大體官公吏の俸給と同じようで、筋肉勞働者の如く容易に增加することの出來るものではない。この點から見ると物價騰貴の勢ある時には俸給生活者は筋肉勞働者に比較して寧ろ不利の地位にあるもの、といはなければならぬ。筋肉勞働者であれば、勞働組合が組織せられてゐる場合は勿論、勞働組合が組織せられない場合でも、筋肉勞働者は地位境遇が比較的に近いものであるし、其の要求希望も亦比較的單純であるから共同的運動をなし易いのであるが、俸給生活者の地位は大に之と異るものがある。第一一概に俸給生活者といつても例へば同じ會社に勤めてゐるものでも、其の位置、境遇が大に異るのであるし、從つて生活を脅かさるゝ程度も非常に違ふ。物價騰貴は薄給のものでは死活の問題ともいへようが、高給のものにはそれ程の問題でもなく、否、或は何等の痛痒を感ぜさる底のものであるかも知れない。して見れば共同的運動をなすべき素因を缺いてゐるともいへる。第二には俸給生活者は知識階級であるから、凡て打算的である。筋肉勞働者の如くに感情に驅られて附和雷同して運動することがない。打算的であることは良いには違ないが勇氣に乏しい缺點がある。共同運動を起し難い所以である。第三には俸給生活者は會社員の場合には資本家等雇主側と人的關係が比較的多い。俸給生活者は反抗的態度に出づるよりも、寧ろ自己のみが拔擢せられて、樞要なる位置に昇進せんことを希望する傾向が多いのであるから自然共同的運動をなし難いのである。共同的運動をなし難いことは利益擁護の上からいつて甚だ不利なのである。加ふるに、筋肉勞働者であるならば俗にいふ態面を飾る必要もないのであるが、俸給生活者は瘠我慢をしても、相當態面を飾る必要がある。達觀すれば苦しい思をして態面を飾る必要

はないのであるが、今日の世態人情からいつて已むを得ないのである。こう考へて來ると俸給生活者は知識階級である丈筋肉勞働者に比較して地位が劣つてゐるといはれなければならぬ點が少くない。從つて俸給生活者は中流社會階級の中でも知識階級ではあり、最も健全なるべき階級であるに拘らず、今日最も早く救濟せられなければならぬ地位にありといふことが出來る。これは私が俸給を以て生活してゐるものであるから、我田引水的にいふのではない。天下具眼の士は恐くは私の意見に大體に於て同意せられるであらうと信ずる。而して現今は權利は厭くまで主張をしなければならぬ、權利思想のない國民は到底國民として立つことは出來ぬとはイエリングが喝破した辭であるが、今日と雖も眞理であると信ずる。俸給生活者が社會の中堅の一部として其の職責を盡すには物質上にも精神上にも其地位を向上し、餘裕ある文化生活をなすことが必要であると信ずる。而して其の目的を達するには俸給生活者も團結を形成して自衛の道を講ぜざるを得ないと信ずる。團結を形成り共同的運動をなすことが困難であるから、この種の團結も運動も起らなかつたのであつたが、今日は其の難易を論ずるの時ではなく、之を實現しなければならぬ秋であると信ずる。

然らば俸給生活者の團結が如何なる目標に對して運動をなすべきか、この點に於て識者の間にも意見が種々に異つてゐるようである。其の異つてゐるのは畢竟、其の運動の目標が多端であるからである。私は前に擧げた俸給生活者の地位に關する解説が自ら又其の運動の目標を語つてゐるものではあるまいかと思ふのである。試みに少しく之を説明して見よう。

(一) 俸給生活者は精神的勞働者であるといふ立場から、今日の俸給では文化生活を營むことが出來ない限り、其の生活の安定を得るが爲めには相當の增俸を要求することはあながち不正不當ではあるまいと信ずる、其の點は筋肉勞働者と同じ立場にゐる。然し、一派の論者の觀察する如く、俸給生活者は筋肉勞働者と提携して共同的運動をなすべきものであると斷言することは出來ないと信ずる。何者、官公吏の俸給は法律等に由つて定まるものであつて增俸は畢竟法律等の改正の問題である。制度改正の問題である。筋肉勞働者が勞働條件について資本家に迫るとは自ら異ならざるを得ない。會社員等の俸給生活者にしても、雇主との關係で筋肉勞働者とは自ら異るものがあるから同じく增俸を要求するにしても筋肉勞働者とは手段方法が異らざるを得ない。私は俸給生活者は資本家にとりて所謂腹心の者であるから、其の要求が合理的であつたならば恐くは其の要求に耳を藉すことに吝でないと信ずる。俸給生活者の團結は俸給

者の要求を合理ならしむるが爲に基準と、其の材料とを調査、決定するに當り幇助をなすものである。資本家にして頑迷にして俸給者の要求に毫も耳を藉さなかつたなら、或は筋肉勞働者と提携するに至るかも知れないのである。故に私は當初より俸給生活者の運動は筋肉勞働者のものと同一であるといふ說に賛成し兼ねるのである。この點については論ずべきことが多々あるが之を他日に讓らう。

（二）　俸給生活者は消費者の立場から、其の生活を容易ならしむるが爲に種々なる施設、組織を形成ることを運動しなければならぬ、弘くいへば、今日世上で種々の方面で提案せられ主張せられてゐる生活改善の問題である。生活改善の方法も種々あらうが、要するに私達の消費狀態を如何に改めるか、私達の消費を滿足するが爲に如何なる施設組織をなすべきかの問題となるのであらう。第二の問題としては例へば購買組合の組織の如きは少くとも其の重要なるものであらう。消費の改善にしろ、費消の方法の改善にしろ私の特別に論ずるまでもなく共同一致して行はなければならぬことである。其方法について論ずべきことは多くあるが、之もこゝには省いて置かう。

（三）　俸給生活者は精神的勞働者である以上、其の生活の不安定を除く爲には社會制度の改正を大聲疾呼して、其の解決を關係權力者に要望せざるを得ぬ。俸給其物にしても、會社の種類に由りて非常に懸隔がある。俸給生活者の待遇、例へば死亡した時、退職した時に給與する資金にしろ其他種々なる方面に於て甚しく公平を缺いてゐるものがある。これ等は社會制度として決して面白いことではない。だから、俸給生活者はこれ等の點を研究して其の改善を計らねばならぬ。

其他俸給生活者が生活の安定を得るが爲に共同して共濟の道を講ずるのも一方法でなければならぬ。こう考へて來ると俸給者の團結の運動も決して單純でないことは諒解することが出來る。私は俸給生活者の地位と其の運動の目標とする所をかくの如くに見てゐる。

民衆文化の世界へ

大山郁夫

文化と時代精神――時代精神の移動性と新舊文化の闘爭――ブルジョア文化の近代人の生活に及ぼせる感化――差別感に即するブルジョア文化――平等感に即する民衆文化――充たされざる約束としての『自由平等』――知識階級の民衆的平等感への傾向――知識階級のブルジョア文化に對する離合關係――ブルジョア文化の破綻――その産業生活及びその他の社會生活の各方面に於ける表はれ――ブルジョア文化と民衆文化との連續關係及びその各個の根本精神の上に於ける差異――ブルジョア文化の行詰まり――文化堕落の標徴――資本主義が知識階級の生活に加ふる壓迫――俸給生活者達の生活の特徴――彼等の生活の機械化――彼等の生活の不安――對資本主義的關係に於ける勞働階級と知識階級との共通の立場――社會改造と生活安易の要求――俸給生活者達の運動の無力の原因――民衆精神に對する目ざめとブルジョア文化に對するホームシックとの中間に於ける彼等の彷徨――制度の改造――資本主義の否認と民衆文化の理想

一

文化は時代精神の表現である。さうして、時代精神は、その時代の民衆生活の各方面に表現せられて居るものである。少しくこれを具體的に例示すれば、一定の時代に於て行はれて居る哲學、科學、宗教、藝術、産業の如きものを始め、それから、我々の社會生活や家庭生活や個人生活を規定したり、支配したり、秩序づけたりする法律、制度、道徳、風俗、習慣の如きものは、いづれとして、その時々の時代精神の表現でないものはない。是等の多くの、さうして複雑なる民衆生活の諸斷面の綜合がその時代の文化を構成して居るものである。

時代精神は、常に移動して止まないものである。これをヨーロッパの歴史に就いてみれば、あの恐ろしく宏大な規模に於て行はれた十字軍の遠征といふやうなものを動かした中世紀の時代精神は、最早、宗教改革を基點として興つて、西歐の天地を風靡した啓蒙運動の原動力となつた近世紀の時代精神ではなかつた。またこの近世紀の時代精神は、最早、今次の大戰の間に醞醸せられて、大戰の終熄と共に世界の各方面に於て一齊に烽火を擧げた勞働運動を基調とする社會改造の大勢を誘發した最新の時代精神ではなくなつた。無論、右の三者の間に於て、一

種の緊密なる因果關係を認めないといふことは、歴史の継續性を無視する僻見である。が、それと同時に、右の三者を以て、同一物であるがそれぞれ異つた姿で現はれたものと見るのは、人間の創造性に對して盲目なる斷案である。新しき時代精神の誕生は、舊き時代精神に對する反動として現はれるものであることは、事實である。けれども、兩者は決して同一物の異つた現はれではない。少くとも、兩者はそれぞれ異つた存在の理由を持つて居る點に於て、同一物と見做すことが出來ないのである。

現代の文化は、その内容に於て、非常に複雜である。それは、一方に於ては、現代の時代精神の内容が複雜であるためでもあるが、同時に、他方に於ては、新舊の異つた時代精神が、現代生活の上に於て、相互に交錯して行はれて居るためでもある。新しき時代精神が、常に舊き時代精神の廢墟の上に産まれるものと決まつて居れば、一定の時代の文化生活の根本基調は比較的に單純である筈だが、前者は、後者がまだすつかり死滅し切らないうちから、——時としては、それが尚ほ旺盛なる活力を示して居るうちから既に早くも發生し、成長しかける。こゝに新舊の時代精神の闘爭の素地が用意せられて居るのである。

我々の眼前に展開せられたる時代は、新舊の時代精神が、最も激烈に闘爭して居る時代である。この局面に於ける舊き時代精神は、近世紀から現代までを支配して來た資本階級の勢力に依つて代表せられて居る。さうして、その對者たる新しき時代精神は、今まさに新興の氣運に在る勞働階級、及びそれと共通利害を感じてゐる人々の群れ——それは、我等が後に說かうとして居る通り、主として所謂『知識階級』と名づけられて居る集團の大部分を現に包含して居る、若しくは段々に包含して行かうとして居る——から成立つてゐる『民衆』に依つて代表せられてゐる。(以下『民衆』といふ言葉を用ふる場合には、いつでも、玆で定義して置いた通りの意味のそれを指すものであることを、豫め斷つて置く。)斯うした新舊二つの時代精神の闘爭は、やがて、一種の文化闘爭である。——新しき民衆文化が、舊きブルジョア文化に向つて、戰ひを挑んで居るのである。

新舊文化の闘爭。——

しかし、こゝで一應我々が考へなければならないことは、新しき時代精神の産物たる民衆文化といふものは、舊き時代精神の産物たるブルジョア文化といふものゝやうに、完成せられたる狀態に在るものか否かといふことである。否、それが完成せ

られたる狀態に在るものか否かを問ふのは、どの點から見ても、尙ほ早計に失するものであることが判り切つて居るものとして、更に問ひかたを加減して、それが既に幾らかでも明確な輪廓を具へてゐる程度に形成せられてゐるものか否か、と尋ねたならば、如何なる解答を豫期することが出來るであらうか。

民衆と文化。――普通の考へ方からいへば、この二つのもの程、違つた方向を指して居る觀念は、外にまたとないやうに見える。殊に我々が、民衆の根幹を成して居る勞働者達と文化とを相互に關聯させて考へる時には、我々は、兩極端に岐れて居る二つの觀念を結び附けて考へて居るもの丶やうに見えないではない。けれども、尙ほ仔細に考慮するときは、斯うした場合に於て、我々が『文化』の名に於て我々の頭腦の中に浮べて居るものは、過去から現在へ掛けて支配的地位を占め來つたブルジヨア文化そのものであつて、現在から將來へ掛けての支配的地位を占めようとして居る民衆文化そのものでないのではあるまいか。

如何にも、我々が單に『文化』といふとき、我々の念頭には、我々が不用意で居る場合には、直ぐにブルジヨア文化が映出せられて居る。それほど、ブルジヨア文化は、我々近代人の想念の上に深く喰ひ入つて居るものである。我々の生活は、ブルジヨア文化の雰圍氣で包まれてゐる。我々の學問や藝術、我々の道德や敎育、我々の風俗や習慣――斯うした我々の文化生活の各斷面は、いづれとして資本階級の支配を當然として肯定した舊き時代精神の表現でないものはない。我々の文化的價値判斷の尺度は、斯うしたブルジヨア臭味で一杯になつて居る雰圍氣の中で養はれて來た。若し我々が『思想の習慣』といふものが如何に拔き難い根據を持つて居るものであるかを知らば、我々が單に『文化』といふ時に、直ぐに我々を包圍して居る現代のブルジヨア文化を思ひ浮べることの、決して偶然でないことを悟るであらう。

斯うしたブルジヨア文化――すなはち、現代の文明人の心に深く喰ひ入つて居る在來の文化が民衆の間に播布せられるとき、そこに民衆文化がある――と、斯ういふ風に考へて居るものも多くある。けれども、こんな考へ方は、まづ第一段には、文化といふものが或る時代精神の表現であるといふ事實を忘れて居るか、但しは、現在に於て支配的地位を占めて居る資本階級を以てその發祥地とする舊き時代精神が、將來に於て支配的地位を占めようとして居る民衆を出發點とする新しき時代精神と同一性質のものであると認めて居るためでなければならぬ。

しかし、前にも述べた通り、この新しき時代精神が、あの舊き時代精神に對する反動として産まれたものであることは、事實であるが、それかといつて、兩者は決して同一性質のものではないのである。

さうだ。新しき時代精神は、舊き時代精神の異つた現はれと見るべきものではない。何故といつて、それは斯ういふ譯なのである。すなはち、資本階級及びそれと同心異體をなして居る權力階級を中心とする人間の集團なる現代社會に於ける特權階級の優越地位を肯定し、且つこれを維持しようとした舊き時代精神は、明かに『差別』といふことを以て、その基調として居るものである。現代の道德なり、敎育なり、法制なりが、盡く權威に對する服從といふことで、社會生活の秩序を維持することを圖つて居ることは、最も有力にそれを證明してゐるものに外ならないのである。けれども狹くいへば勞働者の群れを、——廣くいへば民衆全體を導いて居る時代精神は、言ふまでもなく、『平等』といふことを以て、その基調としてゐるものである。特權階級を廢止せよといふ民衆の叫び聲、すべての人々が、皆働かねばならぬ世界を實現せよといふ勞働者達の叫び聲、——斯うした主張なり要求なりの基底に橫はつて居る時代精神が、徹頭徹尾、人間性に立脚する平等感に依つて貫かれてゐるものであることは、無論のことである。

新しき時代精神が生じて來るとき、その具體的表現たる新しき文化がそれに伴うて生じて來ないとは、考へ得られないことである。少くとも、人間を原始的野蠻時代から今日の文明時代(無論それは、偏頗なものでもあり、缺陷だらけのものでもあるが)まで導いて來たところの、その創造性なり建設本能なりの滅び失せない限りは、それは我々に考へ得られないことである。

我々が『文化の行詰まり』を云爲するときは、我々は、無意識的にブルジョア文化の行詰まつて居ることを考へて居るのである。ブルジョア文化の行詰まつて居ることは、民衆文化の起つて來ることを妨げて居るものでないばかりでなく、寧ろそれが起つて來る道を開いて居るものとさへ考へられる。さうして、新しき時代精神が民衆本位の平等感を基調として居るものだとすれば、それに依つて導かれて來る民衆文化もまた、同様に民衆本位の平等感に卽して居るものでなければならない。差別感を當然のことゝして肯定して居るブルジョア文化の謳歌者は、一派の主張者に調子を合はせて、『ゲーテや近松に勞働させてはならない』といはなければなるまい。民衆本位の平等感の上に

立たなければならない民衆文化の唱道者は、『ゲーテや近松にも、他の人間並みに勞働させなければならない』といふ害である。生活は文化であり、文化は生活である。正しくない生活のあるところに、正しい文化がある筈はない。民衆文化主義の眼から見れば、差別を本然の權利として要求する生活は、正しくない生活である。こゝに兩者の立場が、明かに岐れて居る。

ブルジョア文化は、既に完成せられたる文化である。しかのみならず、それは既に行詰つてゐる文化でもある。すなはち、我等が後にも一晉しようと思つてゐる通り、それは既にその爛熟期を通り越して、その頽廢期に入つて居るものである。之に反して、それに對抗して起らうとして居る民衆文化は、今尚ほその形成の過程の上に在ることは、事實である。それがその狀態に達するまでには、尚ほ民衆の文化的創造行爲に賴らなければならないものである。極言すれば、それはそれ自身のあらかたの輪郭をすら、いまだに明確に描いてゐないのである。それにも拘はらず、それを指導する力となるべき時代精神――すなはち、人間性に立脚する平等感を基調とする新しき時代精神は既に現實に發生して、世界各國の民衆の間に活きた力として働いて居る。これが、將來の民衆文化の上に表現せらるべき精神的要素でなければならぬ。無論、この新しき時代精神が、將來の民衆文化の上に完全に表現せられるれまでには、ちやうど、五月の花が十月の果實となるといつた樣に、相當の時の經過を必要とすることは事實である。それは、すべての時代精神の、すべての文化に對する關係が、さうであり來つたからである。けれども、我等が個人としての、さうしてまた民衆としての、人間の創造性若しくは建設本能に信賴することが出來る限りは、我等は、新しき民衆文化の世界への社會進化の展開を、當然のことゝして期待することが出來るのである。

三

ブルジョア文化は、完成せられたる文化である。さうして、その完成せられたる姿で、我々を取圍んでゐる文化である。尙ほまた、その鋭さに於て、我々の骨身に泌み込んで居る文化である。我々が不用意の間に於て、單に『文化』といふときには、常にこのブルジョア文化のことを直ぐ念頭に浮べる習性を持つて居るのは、無理もない話である。

斯ういふ風に、ブルジョア文化の雰圍氣が、ひしひしと我々の周圍を立て罩め、そへこん我々の想念に浸潤して居るのは何のためであるか。それは無論、ブルジョア文化の基底を爲して

居る差別感の肯定の上に至られたる時代精神の發祥地でもあり、同時にまたその支持者でもある資本階級が、現代社會生活上に於ける支配的地位を占め、從つて現代の文化生活の指揮者となつて居るためである。資本階級が、現代社會生活上に於ける支配的地位を占めてゐるといふ事は、一見すれば、ブルジョア文化に極めて堅牢なる基礎を與へて居るやうでもあるが、併し同時に、この同じ資本階級が現代文化生活の指揮者となつて居るといふことは、やがてブルジョア文化の將來の崩落の期を早めるといふ結果に導くべき可能性をも持つて居るのでもある。こゝに、社會進化のパラドックスがある。

この點に關するこれ以上の考察は、しばらく之を後段に讓ることゝして、我等は、我々とブルジョア文化との關係に就いて、尙ほ一言を費さなければならぬ。

我々智識階級に屬して居るものは、ブルジョア文化の雰圍氣の中に生まれ、育ち、生長し、ブルジョア階級の道德、法制、風俗、習慣に依つて秩序づけられ、ブルジョア階級の經營する學校に於て教養を受けた、といふ風に、隨分とブルジョア文化の感化を受け、それを鑑賞することを——時としては、それを享樂することをすら學んだものである。それにも拘らず、我々は、ブルジョア文化を、根本に於に否定して、この局面に於ける或る新しき展開を求めて居るのは、何のためであるか。この問ひに對する第一の解答は、我々が、近年の社會進化の間斷なき旋轉——殊に大戰に依つて促成せられたるその最も急激なる旋轉の渦中に卷き込まれつゝ、その原動力となつて居る精神に觸れて居る間に、いつとなくそれに同化せられて仕舞つたからである。この精神とは、すなはち、民衆精神である。民衆精神は、不可抗的に人間性に立脚する平等感を基調として居るものである。平等感を離れて、民衆精神のありやう筈はない。それは、如何なる特權階級の優越地位をも否定する精神である。すべての人間に、政治生活、產業生活、その他のあらゆる社會生活の諸方面に於て、均等の機會を持たせようと主張する精神である。それ故、それは、文化生活を基點として言へば、その建設事業に一切の新分子を引入れて、局面の停滯の現狀を打開しようといふことに歸着するのである。斯うした局面の打開は、必然的に新文化の創造に依つて伴はれなければないことを前提としてゐるものである。さうして、その目指されて居る新文化とは、いふまでもなく、民衆文化である。

斯うして民衆精神が、一たびそれに目ざめた我々を捉へ、それ自身の上にしかと我々を乘せたまゝ驀然猛進して、その行き

着くところまで行かなければ已まない勢を示して居る。すべての關目の事物に就いて、その因果關係を究め盡くさせなければ承知が出來ないといつた習癖をば、近代的精神から學んだ我々は、この點に關してもまた『それは何故に？』にと自問して、それに自答を試みない譯には行かない。さうした時に、我々がまづ第一に考へ附くことは、民衆精神そのものゝ性質に、近代的教養を受けた我々を牽き附ける力が內在して居ることは、いふ迄もないが、しかし、それと同時に、ブルジョア文化を導く精神の內にもまた、我々を民衆精神の方へ向はしめる力があつたのである、といふことである。この力は、樣々の複雜な形式と作用とで現はれたのである。

我等は既に、ブルジョア文化を導いた時代精神は、差別の肯定の上に立てられてあるといつた。けれども、矛盾のやうではあるが、この同じ時代精神は、元はといへば、矢張り『自由平等』の叫び聲に依つて先驅せられたのである。近世紀に於ける革命運動の中堅となつて、在來の特權階級であつた貴族僧侶の勢力を倒すことに從事したブルジョア階級が、『自由平等』を標榜して、民衆の支持を得たことは、歷史に照らして明かなる事實である。この『自由平等』の叫び聲が、民衆の隱れたる憧憬の圖星を指して居るものであつたことは、彼等の本能的に認知したところであつた。で、これに依つて彼等は民衆の勢力を糾合して、その永き苦鬪に於て、遂に最後の勝利を收めたのである。けれども、革命の後に於ける社會秩序の再建設の際に於ては、彼等は當初の約束の一部を反古にして、成る程自由平等の理想を實現したにはしたが、それは唯、彼等の仲間に於てのみ實現したのに止まつた。斯うして、ブルジョア文化の下に於て認められて居る自由平等は、唯、ブルジョア階級間の自由平等であるに過ぎないものとなり、この階級と一般民衆との關係といふ大局から達觀して見ると、それは依然として、差別の肯定の上に立てられて居るものであつた。換言すれば、ブルジョア文化は、その基調をなしてゐる時代精神の本質から見ても、またその創造及び享有に直接に參加して居るものゝ上から見ても、ブルジョア階級自身の優越の肯定の上に立つて居るものであつた。若しくは、少し譬喩的に言つてみれば、それは『ゲーテや近松』を他の人間並みに働かせてはならないといふやうなことを肯定する種類の文化であつた。斯うした狀態の下に於ては、自由平等は、ブルジョア階級に取つてこそ、充されたる約束であつたが、その他の一般民衆に取つては、尙ほ依然として、充たされざる約束であつた。

充たされざる約束を持つて居る民衆は、それが充たされるま

で滿足しないのは、當り前である。しかも、その約束が、人間の隱れたる本然の憧憬に觸れて居るものであればある程、民衆がその實現を、益々熱烈に要求するやうになるのは、これも當り前のことである。尤も民衆の目ざめない間は、彼等がこの充たされざる約束の本質的價値を感知しないで濟むこともあるが、しかし、近世紀の社會史は、民衆のめざめの歴史であつた。殊に産業革命以來のそれは、民衆の根幹を構成して居る勞働階級の目ざめを以て、その最も際立つた特徴にして居る。この民衆の目ざめが、更に世界大戰を契機として、その最高頂に達した趣きがあることは、交通機關の世界的發達を遂げたる今日に於ては、單にヨーロッパに於ての事だけには止まらなくなつた。無論、ヨーロッパに於て、それが極度に實現せられてゐるのは事實であるが、しかし、それ以外の世界の各部といへども、多少の程度に於て、その影響を免れて居るところはない。極東に位置を占めて居る我國の社會までが、その餘波を可なり多く受けて居ることは、我々自身が、誰れよりもよく知つて居ることである。

四

デモクラシーや社會主義の諸流派やが、各々その究極の目的として主張して居るところのものは、畢竟、平等を求むる心――政治上、産業上、社會上に於て――に歸着するものである。政治上の特權階級を打破することとか、産業上の資本主義を廢止することとかゞ、その各々の方面に於ける平等感から發した要求であることは無論であるが、生産者としての勞働者の産業上の支配を目的とするサンヂカリズムの主張も、生産者を代表するナショナル・ギルヅと、消費者を代表する國家との間に産業的及び政治的支配權を分たうとするギルド・ソーシアリズムの理想も、詰まる所は、政治上、産業上、社會上の平等主義を實現しようといふ一點に總括せられることが出來るものである。

斯ういふ意味に於ける平等主義が實現せられるとき、最も直接にその恩惠を受けるものは、第一には勞働者の群れに相違ないから、彼等の思想が自然さうした方向に傾き易いのは、いふまでもないことである。が、しかし、事實上、彼等の思想をさうした方向に傾けしめる原動力は、概していへば、常に最初は知識階級から出て來るのである。これは、最も我等の注意に値することでなければならぬ。

知識階級は、社會上に於て、一種の特異なる地位を占めて居るものである。知識階級といふものは、資本階級とか、勞働階級とかいつた樣に、種々の經濟上の地位を標準として名づけら

れた階級ではない。それは寧ろ、一つの限られたる社會生活の内に於て、比較的に最も多く知識上の教養若しくは訓練を受けたる人々を總括して呼んで居るものである。從つて知識階級に屬する人々は、その知識上の教養若しくは訓練から來た銘々の人生觀、社會觀、世界觀に依つて、資本階級や勞働階級がその各自の經濟上の地位から來た人生觀、社會觀、世界觀に依つてすると同じ樣に、社會進化の今後の方向を決定することの上に、或る程度及び種類の作用を及ぼし得る地位に在るものである。

斯の如く、知識階級は、その中に資本階級に屬してゐる人々をも包含してゐれば、勞働階級に屬してゐる人々をも包含してゐるし、また、右の兩階級以外の獨立の立場に於て筆舌に依る言論といふ特殊の頭腦勞働に服して居る人をも包含してゐるが、この階級中に於ける最大多數者は、官廳、銀行、會社、學校、病院、及びその他の各種の團體に於て勤務を執ることに依つて、資本階級、またはそれと直接の關係を持つて居る中央及び地方の政府のために、主として或る種類の頭腦勞働を提供して居るところの、所謂俸給生活者の群れ、並びに現在の所屬は尙ほ不明であるが、將來この群れの中に追ひ遣られる可能性の最も多いところの、高等普通教育以上の程度の學生の群から、成立つて居るのである。

この意味に於ける知識階級の立場に關しては、本篇の筆者は、雜誌『我等』の九月號に載せた『知識階級と勞働者』と題する論文に於て詳論を試みたから、玆ではそれを再說しないことにする。が、しかし、知識階級中の最大多數者の部分を占めて居る俸給生活者の群れの地位の社會的意義に關しては、そこでは特別にそれを細論しなかつたことでもあり、且つは、それは我々の當面の問題に關して可なり重大なる關係を持つてゐることでもあるから、本篇に於ては、後に至つて、それに幾分詳細なる說述を加へたいと思つてゐる。

五

一率に知識階級とは呼び做されて居るものゝ、この階級は、その中に樣々の雜駁なる分子を交へてゐる結果として、そこには、資本家仲間、若しくは勞働者仲間に於て見られる樣な階級意識に對比すべき程の知識階級意識といふものがなく、從つて、そこには、樣々の方向を示して居る人生觀、社會觀、世界觀が並び行はれてゐる。さうして、知識階級中の資本階級に屬してゐる人達は、大體に於て資本家的見解を懷き、勞働階級に屬してゐる人達は、殆んど例外なく勞働者的見解を懷くのを通例と

するが、是等の人達は、知識階級中に於ては、寧ろ甚だ顯著ならざる部分を占めて居るものであるばかりでなく、その資本家的見解を懷く人達のことは、一般の資本階級意識と併せて論じる方が順當であり、同樣に、勞働者的見解を懷く人達のことは、一般の勞働階級意識と併せて論じる方が順當であるから、單純に知識階級の心理を說く場合には、これを不問に附して差支のないものである。

しからば、知識階級の心理を說く場合に於て、その如何なる部面の人達が最も細心の觀察を要するものであるかといへば、それは言ふまでもなく、獨立の立場から言論をしてゐる人達、及び俸給生活者の群れ、並びに高等普通教育以上の程度の學生の群れでなければならぬ。是等の人達は、知識階級の中に於て、あらゆる意味に於て、最も重要なる部分を構成して居るものである。といふのは、第一に、獨立の立場から言論する人達の意見は、最も直接に俸給生活者及び學生の群れに傳播せられ易いために、この三つの群れは大體に於て、比較的多く思想上の共通性を有し、從つて相互に比較的密接に結び附けられたる集團をなして居る。また第二には、これからの三つの群れを一つに纏めてみるときには、その數から言つても、知識階級中の最大部分を占めて居るのである。知識階級中のこの部分が、今後資本家側に味方するか、それとも勞働者側の味方するかは、場合場合の情況に繫つてゐるものである。いづれにしても、知識階級中のこの部分（以下單に『知識階級』といふ言葉を用ふる場合も、知識階級中のこの部分のことを指してゐるものである）の嚮背は、資本對勞働の鬪爭の上に、極めて重大なる影響――殆んど決定的の、といふべき程の影響を及ぼすべき力を持つて居るものである。

六

勞働階級か資本階級かのいづれかに對する知識階級の嚮背が、我國の今後の社會進化の方向を決定する上に於て、少くとも重大なる力の一つとなつて居るものであることは、前段で述べた通りである。素より我國の知識階級も、その中に多種多樣の思想の流れを包含してゐるが、しかし、大局の上からその現狀を達觀すれば、その重心が段々勞働階級の方へ傾き掛つて居ることは、蔽ふべからざる事實である。その證據には、第一、最近に於て、我國の新聞、雜誌、著書、及び演壇の上に、時勢の要求に應じて勞働問題が盛に論じられ、所謂勞働問題流行の大勢を現出してゐるが、斯うした議論は、主として、多少の程度に於て純粹に獨立の立場から言論をして居る人達から出て、次第

にその常讀者たる知識階級中の或る他の部分——それは主として、俸給生活者及び學生の群れから成立つてゐる——に浸潤して行くものであるから、最近の論壇に於ける勞働問題の流行の大勢は、大體、知識階級に依つて支持せられてゐるものといふべきである。第二、斯の如く知識階級の間に盛に行はれて居る勞働問題の議論の主潮は、多少の例外を除けば、全然勞働階級側の立場に對する同情を强調して居るものである。

知識階級は、勞働階級及び資本階級の中間に介在する階級であるとはいふものゝ、資本階級は、これを自階級の勢力範圍内に取入れる目的のためには、可なり便宜の地位に立つて居るのである。さうしてまた、資本階級は、その便宜の地位から、それをなし遂げるために、可なり努力をなし來つたものである。さうして、資本階級は、從來に於ては、この目的のために、相當の成功を擧げ來つたものである。今日の知識階級に屬するものは、誰れでも一度は、その社會生活、學校生活、家庭生活に於て受けた敎養、乃至、感化のために、ブルジョア文化に對する多少の理解力、乃至、鑑賞力を持つて居ないものはあるまい、しかのみならず、彼等は、時としては、それを享樂さへしたり、さうしてそれを肯定しようとする誘惑をさへ感じたりしたであらう。さうしてまた、『ゲーテや近松』に勞働させるのは不公正だとさへも考へたりしたであらう。斯ういふことは、資本階級が知識階級を自己の勢力範圍内に引入れる努力の成功でなくて、何であらう。

しかし、この成功は、他のすべての成功の場合と同じく、遂に決定的のものではなかつた。否、この成功それ自身の内に、既にその來るべき破綻の種子が含まれてあつた。斯うして、知識階級から出た資本階級否認の聲は、一面からいへば、資本階級が知識階級を魅するために用ひた魔睡劑ともいふべきブルジョア文化の破綻の暴露を意味し、また他の一面からいへば、資本主義の經濟組織が、知識階級の物質生活及び精神生活の上に加へた壓迫——それは資本階級の立場からいへば、全く無意識的に、唯、資本主義の經濟組織の自然的展開の當然の順序として加へたものであるが——が、必然的に彼等を勞働階級と共通の立場の上に追ひ遣るに至つた事實を意味するのである。我等は本篇を完結する前に、少くとも、右の二點の略説だけでも、與へて置かなければならぬ。

七

資本階級が知識階級をその勢力範圍内に引入れようとした努力の成功の裡に、既にその來るべき破綻の種子が含まれてあつ

た、と言つたとき、我等は、我等の念頭に於て、まづ第一にそれを文化問題に關聯させて考へて居たのである。

資本階級の庇護の下に於て發達を遂げたブルジョア文化が、自由平等をその理想として掲げて置きながら、その自由平等の享有を自由階級の範圍內だけに止めいて置いて、一般民衆をその埒外へと排除したことは、終極に於て、民衆の反抗を促さないでは已まないものであることは、前に述べた通りである。さうして、この反抗は、民衆の目ざめとその實力の增進と共に、益〻資本階級に對する脅威としての効果を加へるのである。

知識階級は、ブルジョア文化の雰圍氣內に在つても、自由平等の敎訓を敎へられて來た。けれども彼等は、ブルジョア文化の支持者の注文する以上に、この敎訓を學び過ぎた。彼等が資本階級を中心とする特權階級を眺める時には、彼等は、自由平等の主義が、一種の屈曲狀態に於てゞあるが、兎も角、それが實現せられて居るのを見た。けれども彼等が視線を轉じて、それ以外の一般民衆を眺める時には、そこに虐げられたる人達の集團を見るばかりで、自由平等の片影をさへ認めることが出來なかつた。ブルジョア文化の支持者は、人間の能力の自然的不平等を說いて、彼等の懷疑心を鎭めようとしたが、こんな低級な說明で、彼等がその儘引退がるべき筈はない。少くとも、民衆の能力の展開の途を閉塞する設備が遺憾なく施されてある現代の制度及び一般の社會的雰圍氣の存續が許される限りは、虐げられたる民衆の奴隷的境遇が、その本來の能力の低劣若しくは缺乏に基因して居る、といふことが、決定的に證明せられてゐるものと見ることが出來なかつた。彼等が、彼等自身、特權階級に比較的に近い位置に在るにも拘らず、自由平等の徹底を求める民衆の立場への路を辿るに至る徑路は、かうした出發點から開始せられるのである。

そこへ持つて來て、彼等は、彼等よりも下層に在る勞働者達の不安の聲を聞かされる。この不安の聲は、詮じ詰めれば、平等を求める聲である。それは民衆精神から迸つて出た聲である。何故といつて、勞働者達を措いて、民衆といふことが考へられないからである。この民衆精神から出た聲が次第に激烈さを加へ出て行くことは、やがて、平等を求める心が、如何に民衆の間に於て切實さを加へつゝあるかを、あるが儘に反映するものである。求めるものも人間であれば、求めるものに與へることを拒むものも人間である。しかも、求めるものが多數の人間の集團であるのに、拒むものは少數の人間の集團である。少數者の集團が、何故に多數者の集團の求めたものを拒むのであるか。少數者の集團は斯ういふ。『社會全般の福祉のために』

と。けれども、多數者の集團が苦んでゐるところに、何の社會全般の福祉があらう、といふ位のことは、誰れにでも判る。少數者の集團は、また斯ういふ、『多數者の要求は、いつでも正義ではない』と。けれども、多數者の要求の正義か不正義かを判斷するものが、何故に少數者の集團でなければならないのか。のみならず、『多數者の要求がいつでも正義でない』といへば、それが正義である場合も豫想されて居るにも拘らず、多數者は、如何なる場合にもその要求を貫徹することが許るされないやうになつて居る。この樣な狀態を當然と認める制度の不合理なものである位なこともまた、誰れにでも判る。知識階級の人達は、玆に至つて、深く考へさせられない譯には行かなくなつた。しかも、彼等が深く考へれば考へる程、民衆の立場へと下つて行かなければならなくなつた。さうして、この民衆の立場へと下つて行くことは、少くとも思想の上に於ては、決して困難なことではなかつた。彼等はブルジョア文化が上から與へた自由平等の教訓に導かれながら、その自由平等を求めて居る民衆へ下つて行けば、それでいゝのであつた。斯うして、彼等が自由平等を求める民衆精神に同化すればする程、益々急ぎ足で民衆の世界へ向ひかけた。無論、民衆精神は、既に自由平等の教訓を受けた彼等に對して、多大の同化力を持つて居るのみならず、底の知れない程深い魅力をも持つてゐるものでもある。

八

民衆本位の平等感を基調としてゐる新しき時代精神の立場から、自由平等の名に於て實は在來の特權階級の優越地位を肯定しようとして居るブルジョア文化を眺める時には、そこには、もう到底收拾することの出來ない程大きな破綻の露出して居るのを見ることが出來る。就中、ブルジョア文化の一斷面を成せる產業生活の方面に於て、斯うした破綻が、最も直接に感知せられる。それは決して他の方面に於て破綻の少いためでなく、產業生活が我々の生活の第一次的要件たる衣食住の狀態に對して最も緊密なる關係を持つて居るところからして、その方面のことが、何よりも最も先きに我々の生活そのものに觸着するからである。ブルジョア文化の下に於ても、その道德的標語の一つとして、『人道』といふことが强調せられてゐることは事實である。けれども、その實際生活の事相を見れば、このブルジョア文化の支持者たる資本階級に歸屬すべきものとせられてゐる利潤の獲得を中心とする產業組織は、期せずして、その下に無數の隊伍を成して蠢動して居る勞働者の群れから、その勞働力の成果を剩餘價値の形式に於て絞り取ると同時に、その家庭を悉

ひ、郷土を奪ひ、祖國を奪ひ、青春を奪ひ、愛を奪ひ、生の喜びを奪ふのである。そこに何の人道があるか。ブルジョア文化の支持者たる資本階級も、流石にこの自然の缺陷に心附いて來ると、直ちに例の温情主義を持出して、それを補填しようと試みるのが常例になつて居る。けれども、ブルジョア文化の使徒たちが、虐げられたるものゝ心を和げんために盛に使用する『受くるものより與ふるものは幸ひなり』。などいふ福音は、却て、ブルジョア文化の道德の特産物たる温情主義の弱點を、最も露骨に曝らけ出すといふ、パラドキシカルな結果に導くのである。すなはち、温情主義の場合に在つては、慥かに、受ける側に在るものよりは、與へる側に在るものゝ方が幸ひである。それ故、眞に勞働者達を幸福にするといふ人道的見地に順應しようとするならば、彼等を受ける側から、與へる側に引直ほさなければならぬ。が、それは、資本主義の破滅を意味し、從つてブルジョア文化の顚覆を意味するものである。

斯うした矛盾は、ブルジョア文化の各斷面に於て、隱しようもない程明かに表示せられてゐる。尙ほ他の一二の例を藉りていへば、その法律生活の上に於て可たり堅固に保障せられて居る所有權の如きものは、持つて居るものを保護して、持つて居ないものを保護しない。この種の矛盾も、ブルジョア文化の人道觀念が正當と認めて居るところのものであつて、斯かる狀態の下に於ける所有權の使用は、最も非人道的なる行爲の一つと見做されてゐるのである。またブルジョア文化の下に於ける政治生活の方面に於ても、政治的權利を最も必要とするものは、政治的に虐げられたる人達であることは、判り切つて居ることであるが、それにも拘らず、是等の人達の政治的權利の獲得のための運動が、如何に強硬に、且つ用意周到的に、さうして屢ば人道の名に於て、特權階級に依つて妨害せられて居るか。殊に我國に於て尙ほ幅を利かせて居る普通選擧不可論、乃至、その變裝したものに過ぎない普通選擧尙早論の如きものは、勞働組合反對論などゝ同じく、驚くべく少數の人間の集團の、驚くべく多數の人間の集團に對する本然の優越の肯定を根據にしての上でなくば、到底主張も出來ねば、辯護も出來ぬ筈のものではないか。斯の如き、民衆に取つては最も初歩的のものに過ぎないその政治的權利や産業的權利さへも、暴力の脅威若しくは行使に依るのでなければ、到底それを獲得することが出來さうにも見えないところに、どこに平等の實現があり、どこに人道の實行があるか。

試みに藝術生活の方面に向へば、そこでは、藝術的良心の命令に從つて勞作するもの程、いゝいゝより悲慘なる境遇に沈淪し、權力

者や財力者の淺薄なる趣味に迎合する作家程、より裕福なる生活を營んで居る。この樣な環境に於て、眞の藝術が產まれたら、それこそ眞に偶然の部類に入れなければならないものでなからうか。また試みに教育の方面に向へば、そこでは、權威に對する服從が美德として教へ込まれ、その結果として、個性が伸べられる代りに、殺されて居る。この樣た環境に於て、眞の人間性が育つことを期待するのは、科學の發達してゐる現代に於て奇蹟の再現を待設けると同じ程の愚かさでなければならぬ。我等の日常生活を最も有力に支配する暴君たる風俗習慣の方面に於ては、我等は殊に貨幣價値萬能の上に立つ資本主義的人生觀の橫行跋扈を見逃す譯には行かない。社交界に於て最も羽振りのいゝものは、最も反社會的な生活をして居る富豪たちではないか。儀式や宴席に入る關門が、燕尾服や振袖や夜會服の着用者か否かに據つて開閉せられる通りに、そこでは、人間に拂はれる尊敬が、人格の價値に依つて上下せられるのでなく、所有の多寡に依つて左右せられて居るではないか。斯うした狀態の存在が許されて居る社會に於ては、價値の創造に從事する勞働者が空虛なる胃腑に苛められる傍に、價値の浪費に終始する遊惰なる男女が日夕讌飮に飽けばとて、そこに何等の不思議がある譯はない。斯うした狀態を不可抗的に包含しなければならないブルジョア文化は、畢竟するに資本家のために、資本家に依つて支持せられる、資本家の文化である。この文化の雰圍氣の中に在つては、資本家のみが自主自治の人間であつて、その他の一般民衆は、商品であり、機械であり、奴隷である。

九

民衆本位の平等感に卽する新しき時代精神の立場から、現代を風靡してゐるブルジョア文化を眺める時には、上に述べた樣な破綻百出の狀態がまざ／＼と目に附くのである。けれども、ブルジョア文化の基調をなして居る差別感に卽する舊き時代精神の立場から見れば、斯うした破綻も、決して破綻とは見えないのである。それは何故であるかといへば、この舊き時代精神も平等を强調するにはするが、その平等は畢竟資本階級及び權力階級を中心とする特權階級に限られた平等であつて、それは根本に於て、この階級のあらゆる意味に於ける優越を事實上肯定するもの——若しくは論理的にそれを肯定しない譯に行かない破目に陷つた爲めに事實上肯定するものであるからである。

斯う考へて來ると、新しく產まれて來ねばならぬ——若しくは、產れて來させねばならぬ民衆文化と、舊來のブルジョア文化との差異は、實に、その各個の基調をなして居る根本精神の

上に在るものである。さうして、當來の民衆文化創造の參加者たり、またその支持者たるべき民衆の立場から見れば、一は民衆精神の特徴たる平等感の上に立てられてゐるものであつて、一は民衆精神が否認する種類の差別感の上に立てられてゐるものである。疑ひもなく、ブルジョア文化を構成して居るさまざまの要素の中には、當來の民衆文化のうちに持越されるものも、極めて多くあらう。また、持ち越されねばならないものも、決して少くはなからう。これらのすべてを否認することは、人類をその原始的野蠻時代から今日の文明時代（無論缺陷だらけのであるが）にまで導き、人類をしてあらゆる內在及び外在の障害にも拘らず、永い永い向上の旅を辿りつゝ、兎も角、やつとその今日の生活階段まで昇つて來ることを得しめた、その創造性、若しくは、その建設本能を否認することになる譯である。この人類の創造性なり、その建設本能なりを否認して、しかも尙ほ、ブルジョア文化の改造、乃至、民衆文化の創造を期待するのは、不合理千萬なことでなければならぬ。

唯、民衆文化の世界に在つては、その基調となつて居る根本精神が民衆本位の平等感であるから、或る特殊階級の優越の肯定の上に立つてゐる時代精神を基調として來た、前の貴族文化、及び今のブルジョア文化からそこへ持越して來たものでも、既往とは異つた働きをさせられるには違ひない。例へば、今日の科學上の知識や、その應用たる生産機械とか、交通機關の如きものは、民衆文化の世界にも、そのまゝ引續いて使用せられるに決まつて居る。が、しかし、その時には、これらのものは、最早、資本階級の利益のために民衆の勞働者を絞り取る目的の下に用ひられるのではなく、民衆全體の生活の向上のために用ひらるに至るであらう。また、民衆文化の雰圍氣の下に新しき藝術の興るべきことは容易すく豫想せられ得るが、しかし、今日の藝術と雖も、苟くも民衆精神に背反しない限りのものは、その時に至つても尙ほその立場を持續すべきものであることも考へられる。けれども、斯うした藝術が、或る特殊階級の優越を表彰するために用ひられるやうなことは全然なくなつて、民衆全體の共同享有の對照物となるに至るであらう。あのブルジョア文化に特有のものと見做される所有權の法律のやうなものでさへも、資本の私有が跡を絶つ範圍內に於てこそ、當然廢止せらるべきものであるが、それでも、身の廻りの小道具とか、家屋庭園とかの私有が認められる限りは、それは、如何なる形式かに依つて殘存して、引續きこの部面に適用せられるであらう。それからまた、その起源からいへばブルジョア階級の手に依つて發達せしめられた立憲制度のやうなもの——殊にその中

に於ける立法、行政、司法の組織及び機關とか、選擧制度とかいつたやうなものも、人類の過去に於ける政治的業積の遺產として、民衆文化の世界へも持ち傳へられるであらう。唯、その時に於ては、これらのものが、現今に於けるが如く、比較的少數者の特權保護の働きをなす政府の權威を表象するために用ひられるものではなく、民衆全體の協調を圓滑にするために用ひられるであらう。差別感を基礎とする社會制度の維持のためには、權威の表示が常に必要である。之に反して、平等感を基調とする社會制度の維持のためには、協調が快速に且つ圓滿に行はれなければならない。從つて今日の特殊階級の集團意識中に活きて居るところの、集團それ自身に對する忠誠とか奉公とかの精神的性質は、民衆文化の世界に於ては、そのまゝ民衆の全體の協同性の形に發達して行かなければならないし、またさういふ風に發達して行くであらう。要するに、民衆文化とブルジョア文化との間の差異は、その各個の基調をなす根本精神の上に、その重心を求むべきものである。

一〇

民衆本位の平等感に卽する新しき時代精神の立場から、差別感――若しくは特殊階級間だけの平等感に卽する現代のブルジョア文化を眺める時には、それが破綻百出のものであることは、前に述べた通りである。ブルジョア文化は、斯うした破綻百出の姿のまゝで、新たに民衆精神に浸潤したる智識階級の理知の眼の前に、その醜體を曝らけ出して居るのである。無論、あの時にも一言した通りに、ブルジョアの細部に於ては、人間の建設本能を反映する諸要素が光つて居ることは事實であるが、しかし、その基調をなす根本精神が、既に新しき時代精神から遠く背後に離れ去つて居るのである。それ故、ブルジョア文化改造の要求とは、その根本精神を破壞して、新しき民衆精神の上に新しき文化生活を建設しようといふ要求を意味するのである。

しかし、ブルジョア文化の破綻といふことの外に、その行詰まりといふことも亦、智識階級が、少くとも朧ろげながらにも感知してゐるところのものである。我等が過去に於て光彩を放つたところの、例へば桃山時代の文化とか、元祿時代の文化とかいつたものを回顧するとき、そこには、征服者の偉業を色彩づけるための豪奢とか、特權階級の優越を際立つて目立たせるための纖細巧緻とかいつたやうなものを認めない譯には行かない。そこには、斯うした文化を仰がせる階級と、仰がせられる階級とがあつた。仰がせる階級は一人若しくは少數の征服者

または抑壓者と、それらの周圍を繞ぐる直屬特權階級とであつて、仰がせられる階級は、大多數の集團たる民衆であつた。この種の貴族文化、乃至、ブルジョア文化を肯定した舊き時代精神と、民衆文化の基調とならなければならない新しき時代精神との間には、到底橋渡しの出來ない深大なる溝渠の横はつて居ることは事實である。けれども、それらの時代の文化の基底には、創造の精神が欝勃として躍動して居たこともまた、公平なる見地からは、見逃がすことが出來ない事實である。文化の昂進期に於ては、我等は、文化價値の創造者がその享有者を指揮するのを見る。けれども、文化の爛熟期に於ては、この狀態の上に一の變革が起つて居て、文化價値の享有者としてのパトロン等が、いつの間にか、文化價値の創造者に對しての指揮者となつて居るのである。この時から、當該文化生活は、その頽廢期に向つて、駸々として步調を早めるのである。さうして、それは當然の成行である。

我等が、明治、大正の文化を客觀するとき、そこに沈滯、頽廢の空氣の欝積してゐるのを見ないで濟まされようか。成る程、明治維新以來の西洋の學藝や制度の移入に依つて、殊にその前の如何なる時代の工藝生活の上にもなかつた種類の西洋式機械文明の模倣に依つて、その細部には幾多の複雜な新局面の展開してゐるのを見るけれども、しかも、それを全體として大觀するとき、我等はそこに、何等の創造的精神の躍動を見ることが出來ないのみならず、寧ろ、衰頽期の標徵をまざまざと認めない譯には行かないのである。

我等の眼前の文化生活がその頽廢期に在るといふことの標徵の最も主要なるものは何であるか、といへば、それは、文化價値の直接の享有者達であり、そのパトロン達である少數の權力階級及びそれと氣脈を通じて居る資本階級が、文化生活の各斷面に於て、文化價値の創造者に對しての指揮者となつて居る事實そのものである。產業生活に於て勞働者達が、その創造事業に何等の創意を貢獻することを許されないで、唯、資本階級及びそれに直接に奉仕して居る一部の知識階級の人達の命令の下に、全然機械的に勞働して居るといつたやうな狀態は、多少の程度に於て、藝術界、敎育界、政治界、宗敎界、及び其他の文化生活の各部面に於て、明瞭にこれを認知することが出來るのである。文化價値の創造者とその享有者との關係を究め盡くすことは、現代のブルジョア文化の本質を知る上に於て、極めて主要なことであるが、我等はそれを、雜誌『我等』の新年號のために書いた『勞働問題と敎育問題との交錯』に於て評論して置いたから、玆では再說しないことにする。我等は該論文に於

て、文化價値の享有者がその創造者の指揮者となるといつた現在の狀態が、資本主義の支配の下に始めて可能とせられたものであることを詳論し、この狀態を打開して、文化價値の創造と享有とを一致せしめること、——若しくは、ラツセルの用語を借りて言へば、『創造の衝動』と『所有の衝動』とを渾一せしめることのためには、資本主義に依つて可能とせられた文化價値の獨占的享有から、その社會的享有へ轉換して行かなければならないことを唱道して置いた。この結論に到着するまでには、我等は、我等自身としては、相當に獨創的工夫を重ねたつもりである。それは兎も角として、特志家がそれに對して、本篇と併讀の榮を與へられるならば、我等の大に欣幸とするところでなければならぬ。

二

我等は既に現代を風靡してゐるブルジョア文化の破綻と行詰まりとが、民衆精神に目ざめた部分の知識階級を、有意識的若くは無意識的に、漸次にそれから離れさせて行く傾向のあることを説いた。この次には、資本主義の經濟組織が、それ自身に内在する法則の展開のために、不可抗的に知識階級の生活を硬化したり、壓迫したりすることに依つて、此階級を絶望的盲從か、但しは、反抗的改造かの、いづれかへ逐ひ遣りつゝある過程を敍して、始めて本篇を結ばなければならぬ。

この過程を敍するためには、我等は、知識階級中の俸給生活者の群れを中心として筆を進めて行くのが、最も適當だと思ふ。といふのは、右の過程の渦中に、最も直接に且つ最も激烈に捲き込まれて居るものは、實に彼等である、と思ふからである。尤も今日の多數の學生達もまた、その大部分は、俸給生活者としての運命に待設けられてゐるものであるところからして、彼等もまた、將來その渦中に捲き込まれるべき可能性を持つてゐるが、しかし、この點に關して彼等に就いていふべきことは、俸給生活者達に就いて言ふべきことのうちに、當然含まれるべき筈のものであるから、それを特説する必要はあるまい。

言ふまでもなく、俸給生活者達の中には、樣々の分子が包含せられてゐる。單に收入の點からいつても、萬を以て數ふる年俸を取つてゐる總理大臣を始め、それに接近せる額の年俸を取つて居るその閣僚、若しくは國務大臣の誰よりも更に遙に多額の收入を得て居る企業會社や大商店の經營者または重役達から、三四十圓の月收があるだけで、その時々の物價の高低に一

喜一憂して居る教員、巡査、門番、及び其の他の種類の所謂洋服細民に至るまで、苟くも彼等がその生計の根本をその得るところの俸給で立てゝ居る限りは、これを、俸給生活者と稱することが出來る。また彼等の所屬の方面から見れば、或は中央及び地方の官廳の官吏及び地方自治體の吏員、各種の工業上、商業上金融上の企業會社の役員、個人經營の商店の使用人、學校、新聞社、病院、若しくはその他の各公益團體に於て勤務を執つて居るもの……といふ風に、際限もなく分類することが出來る。それから、彼等の仕事の性質から見れば、或はその參加して居る事業の上に、自己の創意に依つて、行政上若しくは經營上に自由手腕を揮ふことが出來る人達もあれば、單に各自に與へられたる仕事を、自己の意思とは關係のない他人の命令のまゝに、全然機械的に遂行しなければならぬ境遇に在つて、毫もこれといふ程の範圍内に於て自由手腕を揮ふことの出來ない人達もある。

けれども、我々が社會問題としての俸給生活者達の境遇なり地位なりを考へてゐる場合には、我々は、多額の俸給を得て生活上の不自由を經驗することもなく、且つ、自己の參加して居る事業の方針を決定する上に自己の創意を或る程度に貢獻することが出來る樣な幸福なる人達――茲では假りに幸福なる人達と言つて置く――のことを問題にしてゐるのではない。この場合に於て我々が問題にしてゐるものは、得るところの俸給が少額なために、動もすれば物價の動搖に際して生活不安の脅威を受け、且つ、その從事して居る仕事の性質からいつても、大體に於て自己の意思とは關係のない、他人から來る命令のまゝに機械的に働いて居る人達の境遇なり地位なりのことである。是等の人達は、樣々の程度に於ける洋服細民の部類に屬して居るものであり、また、所謂無產有識階級と見做されて居るものでもある。

尤も、俸給生活者達の全部が、無產有識階級に屬して居るものと見るのは、事實を正當に認識したものといふことが出來ない。彼等の一部分內には、無產であつても、有識でないものがあることは記憶しなければならぬ。殊に門番、給仕、使丁などの如きものゝ中には、寧ろ無產無識階級とも名づくべき部類に屬してゐるものが、少からずある。俸給生活者達のうちに、この部類に屬する人達の存在して居ることは、社會問題としての俸給生活者達の境遇なり地位なりの考察を、著しく複雑にするものである。それがために、俸給生活者達の問題は、一面に於ては、生存權の主張を包含すると同時に、他の一面に於ては、そのうちの或る一部に關する啓發運動の意味をも包含するもの

である。しかしながら、この最後の一點は、直接に我等の當面の問題に觸れて居るものでないから、茲にはそれに關する論述を省略して、直ちに無產有識階級を構成する洋服細民たる俸給生活者の群れに向つて、まづその生活狀態の特徵を指摘することから、我等の考察を始めよう。

二

我等が、無產有識階級を構成する俸給生活者の群れの生活狀態の特徵を觀察するとき、我等は、少くとも次の二點、――すなはち、第一、彼等の生活時間の大部分が、自己の意思とは何の關係もない他人の命令のまゝに機械的に仕事をすることのために消耗せられること、第二、彼等の生活の安定が、常に各種の方面からの脅威を受けつゝあること、といふ二點を注意しない譯には行かない。以下少しく、是等の點に關する我等の見解を述べてみよう。

第一 所謂無產有識階級に屬する俸給生活者たちは、大體の上からいへば、その官廳に勤務して居るものと、會社、銀行、商店などに働いて居るものを問はず、自己の上級に置かれたるものゝ命令に依つて、帳簿の記入とか、雜務の處理とか、應接または奔走とかいつたやうな各種の仕事を、唯もう機械的に遂行して居るに過ぎないのである。彼等は普通、自己の創意を以て、事業全體の方針の決定に參加することを許るされない。彼等は自己の仕事が、事業全體の上に於て、如何なる意義を持つて居るか、如何なる位地を占めて居るか、をさへも知ることを許るされない。この意味に於て、彼等は、仕事を持つて居るが、事業を持つて居ないのである。工場に於ける勞働者達の仕事が機械化して居る通りに、彼等の仕事もまた機械化して居るのである。彼等の地位は時々昇進せられるが、それは大抵の場合に於ては、一の機械的仕事から、他の機械的仕事に移ることに過ぎないのである。偶ま、彼等の地位の昇進が、彼等を自己の創意に依つて事業全體の上に手腕を揮ひ得る地位に移すことがないではないが、斯ういふことは、百千のうちの一例とも見るべきものである。『頂上に空席が多くある』とは、コンコードの哲人が懦夫を勵ます爲に發した格言であるが、實際に於ては、事業界は、どの方面も極めてビユーロークラチックなものであるから、エジプトの沙漠の金字塔のやうに、上になるに從つて、次第に狹ばまつて居る。それ故、右のエマソンの格言に從つて頂上の空席を狙ふものゝ努力は、大抵は空望の殘骸となるべき運命の下に在るのである。

仕事の機械化！　そこに何の創造の精神の躍動があらう。そこに何の個性の閃めきがあらう。そこに何の仕事への人格の移入があらう。そこに何の生の喜びの發見があらう。仕事の機械化！　試みに郵便局なり、銀行なりの窓口から、金網の檻の內へ覗き込んで、幾多の機械人の執務して居る光景を眺めて見よ。すると、その全體の場面の調子が、如何に荒寥、枯淡、殺風景を極めて居るものであるかを、即刻に直感することが出來るであらう。斯うした生活の機械化が、各當事者の精神生活の上に及ぼす惡影響は、工場生活が賃銀勞働者達の上に及ぼすそれとは、大差がないのである。

上級の地位に在つて自己が參加する事業の上に自由手腕を揮つて居る人達は、如何にも幸福な生活の持主であるかのやうに思へる。けれども、彼等とても、その創意に依つて自由手腕を揮つて居る樣に見えるのは、實は人間としてさうして居るのでなくて、資本主義の傀儡としてさうして居るのに過ぎないのである。資本主義は、最少の費用を以て最大の利潤を収めよ、と彼等に命令する。彼等は催眠術に掛つて居るもののやうに、この命令に唯々諾々として無條件に服從する。彼等は決して、勞働者達や下級の俸給生活者達の生活の慘苦を、よく承知して居ない譯ではない。が、資本主義の魅力の下に人間としての自覺を失つて居る彼等は、勞働者達や下級俸給生活達に、最低限の報償を與へて、それから最大限の勞働力を絞り上げる工夫を廻ぐらすことに腐心する。彼等はまた、市場からも最大限の利潤を擧げんがために、消費者が低廉なる商品の供給を受けんと熱望する時にも、その價格の釣上策を講ずることに熱中する。內地產米の不足を見計つて、外國產地から米穀を取寄せて居る途中に、內地に於ける米價の幾分の下落に喫驚して、飛電一發、直ちにその積載船舶の舳頭を他國に轉ぜしめた豪商等の行爲は、この點に關して最も類型的の實例である。斯ういふ事は、彼等が人間として目ざめた時には、到底なすに忍びざる非人道的行爲でなければならぬ。けれども、彼等の社會には、彼等の人間性を痲痺する道具立てが、萬端ぬかりなく調へられてある。酒、女、幇間、骨董品、――斯うした良心痲痺劑の使用量は、事業熱の昂進に伴れて增加するものである。さうして、この氣風は、直ちに彼等の下級の俸給生活者達を經て、工場勞働者達までへ、――下へ下へと傳染して、多くの模倣者連を發見する。

第二　無產有識階級に屬する俸給生活者達は、絕えず生活不安の脅威を受けて居る。この事の第一の原因は、彼等が資本主

義の當然の歸趨として、生活の資料を自ら有することなく、單にそれを自己の勤勞と引替えに獲得するより外に途がないことから生じて居るものである。この點に於てもまた、彼等の生活は、工場勞働者達のそれと、全然共通して居るのである。さうして、兩者は共に消費者として、常に利潤第一主義の資本階級のために壓迫せられて居るのである。この種の壓迫が、物價の一般的騰貴を見せて居る現今に於て、彼等に依つて如何に痛切に實感せられて居るかは、細說するまでもないことである。

俸給生活者達の生活不安の第二の原因は、彼等の仕事が全然自己の意思とは關係のない他人の命令の下に置かれて居る事實から來てゐるものである。この點に關してもまた、彼等の生活が、工場勞働者達のそれと共通して居ることが、明瞭に看取せられるのである。昔の詩人が、『半生の苦樂他人に頼る』といつた文句で形容した婦人の身の地位が、如何に不安を極めて居るものであるかは、今更言ふまでもないことであるが、洋服細民の境遇もまた、これを異るところがないのである。彼等の地位の進退上下は、大抵は彼等の上級者の意思に依つて左右せられることになつてゐる。彼等の地位の移動が、彼等の仕事の上に現はれる勤惰、若しくはその成績の良否に基くものとせられて居る場合が多いことは事實であるが、同時にそれが、上級者に對する緣故の厚薄といふやうな偶然の事情に支配せられて居ることも少くはない。また、縱しそれが、彼等の仕事の上に現はれる勤惰若しくは成績の良否に基因するものとせられてあるにしても、さうしたものを判斷するのは、彼等の上級者の自由意思である。是に於て彼等は常に、自己の人格を地位の上昇のために犠牲にする誘惑の前に曝らされてゐるのである。世人は『官海游泳術』なるものが、如何に細心の技巧を要するものなるかを知つてゐる。しかし、この如何はしき技巧が盛に使用せられて居るのは、決して官海の方面ばかりではなく、實業界にも、教育界にも、藝術界にも、宗教界にも……といつた調子で、あらゆる方面に於て、盛に使用せられてゐる、俸給生活者達が、その首を安全にせんがために、屢ば幇間的行爲に甘んじなければならないやうな破目に陷ることがあるのは、全くこのためである。この點は、彼等の人格保全のために考へなければならない重大なる問題に觸れてゐるものである。が、この考察は、結局、資本主義破壞の必要といふところまで行き着かなければ已まないものである。

一三

右に述べたところを振返つてみる時は、我等は、俸給生活者

達が、その對資本主義的關係に對して、工場勞働者達と如何に多くの共通の立場を持つて居るかを、容易に知ることが出來る。さうしてまた、彼等の對資本主義的關係の問題が、單に物質生活の安易といふことを含んで居るだけに止まらず、それと同時に、彼等の人間性の保全といふことを含んで居ることも、我等は、我等の論述に於て、少くとも、幾らか暗示し得たと思ふ。斯うなつて來ると、資本主義の否認といふことは、當然ブルジョア文化の改造といふことに導かねばならないものである。しかし、ブルジョア文化の改造といふことが、その先きに新しき時代精神に卽する民衆文化の創造といふことを控へ居るのでなければ、さうした改造は、畢竟、破壞のための破壞に終るのでなければ、中途半端の改造に止るであらう。破壞のための破壞は、到底我々の堪へ得るところでないが、それにしても、中途半端の改造は、我等の絕大の努力に値ひしないものでなければならぬ。

單なる物質生活の安易を求めるための改造は、破壞のための破壞にも到達しないうちに、早くも中途半端の改造で止まつて仕舞ふ可能性が、最も多いやうに思はれる。貧乏した時に極端な社會主義若しくは急進主義を唱へたものが、少しく物質生活の安易を得るや否や、直ちに斯ういふ主義から手を退いて仕舞つた實例は、東西の有名氏無名氏の間に、可なり多くあり來つたところである。ブラウニングの『失はれた首領』(The Lost Leader)の名篇は、この點に關して、反復熟讀を要するものである。黃金一握、紫綬一條を自己の理想の上に重んじたがために、幾多の眞摯なる隨從者や同志やを賣つた勞働黨の一首領の薄志弱行、しかも此首領を失つても、その當初の理想を失はうとしなかつた貧しき人達の情熱、我々はこの兩者の對照の裡から、如何なる敎訓を學ばんとしてゐるか、ブリアンや、ロイド・ジョージや、バーンスや、我國に於て見たる若干の社會主義の落伍者やは、無理想なオッポーチュニスト等の落ち着く先きを、赤裸々に見せて居るものではあるまいか。

單なる生活の安易を求めるための改造が、多くは中途半端の不徹底的改造に止まるべき可能性の多いことは、理論的にも考へ得られることである。それは、第一には、斯うした改造の叫び聲は、インスピレーションを甚だ稀薄にしか持たないからである。第二には、それが改造の理由を社會的に承認せしめる力に乏しいからである。第三には、この動機の下に企てられたる改造は、それがその當事者達の生活安易が或る程度に保障される程度まで進行する時は、彼等が前途の努力の負擔に恐れをなして、大抵の所でそれから手を退いて仕舞ふ見込が甚だ多い

からである。

一四

勤勞の提供者としての、及び商品の消費者としての俸給生活者達の境遇が、工場勞働者達のそれと同じ樣に、資本主義の產業組織の壓迫の下に、始終生活不安の脅威を受けて居るものであることは、上に述べた通りである。彼等は自らこの事を、工場勞働者達と同じ樣に、よく承知して居る筈である。否、彼等の多くは、無產とは言ひ條、有識階級に屬して居るのであるから、普通の工場勞働者達よりも、一層よくこの事を承知して居る筈である。それにも拘らず、勞働者達の生存權主張の運動が相當に活況を呈して居る時にも、彼等の同樣の運動が、あの小中學校敎員の增給運動のやうに、または例のS・M・U・の計畫のやうに、常に龍頭蛇尾に終り勝ちなのは、一體何に依るのであらうか。これは一つには、俸給生活者達のすべてが無產有識階級の部類に屬してゐるのでなく、彼等のうちの最も救濟を必要とする仲間となるほど、無自覺な無產無識階級の部類に屬してゐるといふ事實に基づくことも、決して少くはあるまい。けれども、右の種類の運動は、無產有識階級の部類に屬してゐる俸給生活者達の仲間に於ても、少くとも從來のところでは、決して捗々しく運ばなかつた。これは、彼等の物質生活の安易に對する要求の緩漫なためであるかといへば、さうでないことは、判り切つて居る。これは一面に於ては文化問題である。すなはち、これは、かれ等の民衆文化に對する憧憬が、まだ充分緊張し切つて居ないからである。彼等は、民衆文化の世界の招徠が、彼等の生活の商品化機械化を救ふ唯一の途であることを、理性に於て認めることはする。けれども、彼等の感情は、ブルジョア文化の根本精神に對する執着を離脱することを、甚だ困難とするのである。この點もまた、我等がこれまでに發表した論文中に於て、幾度となく繰返して述べて來たところであるが、我等が本稿に結論を與へるまでに、一度は通り過さなければならない場面であるから、兎に角その略説をだけでも左に揭げよう。

俸給生活者の群れを含む知識階級は、大體に於て、資本階級と勞働階級との中間に介在して居るものである。さうして、この階級中の一部內に、公然資本階級の擁護者となつて居るものもある。けれども、全體の上からいへば、中間階級としての知識階級は、それ自身の嚮背に依つて、資本對勞働の鬪爭の局面に於て、キャスチング・ヴォートを持つて居るといふ、可なり重要な社會的地位を占めて居るのである。

で、俸給生活者達の群れを中心とする知識階級の大部分が、資本主義の經濟組織の壓迫の下に、次第に勞働階級と共通の立場に逐ひ遣られつゝあることは、上に述べた通りである。けれども、彼等がまだ徹底的に勞働階級の味方になり切ることが出來ないで居るのは、どういふ原因から來て居るものであらうか。我等の解釋するところに據れば、それは主として、彼等の心の底に巣くうて居るブルジョア文化に對するホームシックから來て居るものである。第一に、彼等は、その社會的地位からいつて、勞働階級よりは一層近く資本階級に接觸してゐるところから、衣食住及び各種の生活様式及び享樂的氣分に於て、資本階級に對する羨望者でもあれば、模倣者でもある。第二に、彼等は、その根本に於て或る種の差別感に即するブルジョア文化の根本精神に餘りに深く浸潤されすぎて居る。無論彼等は、前にも述べた通りに、既に半ばは平等感に目ざめて居るから、彼等の上級者に向つては、少くとも陰ながら平等を要求する必要を感じて居る。彼等の不安焦燥が、この點から來てゐることも、決して少くはない。けれども、彼等が勞働者達のするやうに、正面から堂々とそれを主張とすることが出來ないのは、これもブルジョア文化の空氣中に醗酵せられて居る頽唐氣分に中毒して居る結果でなければならない。それだけならまだしもだが、彼等は彼等の下級に置かれて居る勞働階級に向つては、矢張り一種の優越感を以て臨んでゐる。それは彼等の勞働階級に對する言語動作の端にも明瞭に表白せられて居るが、しかし、根本に於ては、彼等の知識階級としての意識の内部にこびり附いて居るのである。第三に、彼等の生存權の主張は、彼等の仲間同志の協調、及び彼等と勞働階級との間の協調に依らなければならないものであるが、ブルジョア文化の根本精神中には、この協調を妨害する分子があつて、しかも、彼等はまだ徹底的にそれから脱却し切らないでゐる。それは何であるかといへば、彼等と勞働階級との協調を妨げるものは、右に述べた通り、彼等の知識階級としての優越感であるが、彼等の仲間同志の協調を妨げて居るものは、一種の打算的競爭主義、若しくは拔けがけの功名主義である。資本主義はこゝの呼吸をよく辨へて居るから、常に拔擢とか、地位昇進とかの誘惑を彼等の眼前に掲げて、益々彼等を打算的競爭主義、若しくは拔けがけの功名主義の深みへ導きつゝある。

一五

俸給生活者達を包含する知識階級の自覺運動を妨ぐる諸原因を根本的に絶滅する力は、動もすれば中途半端の改造に止まり

易き物質生活安易の要求だけでは不足である。それは終極に於て、民衆本位の平等感に即する新しき時代精神を基調とする民衆文化の創造に對する憧憬でなければならない。民衆文化の創造は、一面資本主義の制度の改造を含んで居るが、同時に、それは人心の改造をも含んで居る。制度の改造は人心の改造の普遍化を容易にする一手段であるといふ意味に於て絶對的に必要であるが、しかし、斯うした制度の改造は、それに從事する人々の心が先づ改造せられて居るのでなければ、完全に之を遂行することが出來ない。また、改造せられたる制度は、改造せられたる人心に依つてゞなければ、完全に運用せられることも出來ないし、安固に維持せられたことも出來ないのである。フランス革命後に一大反動が現はれたのは、人心改造がその時に尙ほ不充分であつた爲めではなかつたか。しかし、革命の事業が、その折々の反動にも拘らず、終極に於て遂にその完成を見たのは、人心の改造がその最後の勝利を遂げた爲めではなかつたか。今や、改造せられたる制度を更に改造し直ほすために、改造せられたる人心を更に改造し直ほす必要が眼前に迫つて居るである。さうしてこの改造の理想は、ブルジョア文化を倒して、その跡へ民衆文化を建設する目的を高調するものでなければならぬ。

ブルジョア文化の破綻とその行詰りとは、丁度今がその最高頂點に達してゐる。そこには創造の精神が去つて、享樂の氣分が漲つてゐる。この沈滯狀態を打破するためには、文化創造の圏内へ生氣潑溂たる新分子を注入しなければならぬ。文化創造の圏内へ生氣潑溂たる新分子を注入することは、そこへ民衆精神を導き入れることである。そこへ民衆精神を導き入れることは、一切の民衆をして、その創意を以て文化創造に參加せしめることである。それは、ブルジョア文化を打破して、その跡へ民衆文化を建設することである。この民衆文化の建設の要求は新しき時代精神の奧底に潜んで居る不可抗の要求である。一切の改造は、この要求の上にその基礎を据ゑるのでなければ、破壞のための破壞に終るか、但しは、中途半端の改造に止まる危險に在るものである。

勞働運動は世界的大勢であつて、我國の社會もその餘波を受けて居る。知識階級の自覺運動も、次第に社會の一隅に醱酵せられつゝある。地方農民の懷の暖かさに豚の如き滿足を貪つて居る一時的現象を見て安心して居る我國の爲政者は、やがては、屹度その不明の懲罰を受けるであらう。勞働階級及び知識階級の不安の活火は、今や頻りに其噴出口を求めつゝあることは、目あるものにはよく見えて居る。それは如何なる手段を以てし

ても、消し止めることが出來るものでなく、また消し止めるべきものでもないが、しかし、それをして適當の筋道を辿らしめることは必要である。この役目を務めるものは、民衆文化創造の理想である。

我等は、我等の主題に關聯して、文化要素としての勞働階級及び知識階級の素質及び可能性、並びに民衆文化の內容及びその前途の歸嚮に對する豫想に就いて、多くの事を言ひ殘した儘で、原稿締切時間の切迫の下に、一應筆を擱かねばならなくなつた。尤も是等の諸問題に關しては、我等はこれまで雜誌『我等』に於て發表した時々の論文に於て、飛び／＼に我等の考察を述べて置いたが、本誌に於ても、今後機會があらば、尙ほその論究の歩を進めることがあらう。兎も角、知識階級は、今後の社會改造及び再建設の運動に於て、重大なる役目を遂行すべく運命づけられて居るものには違ひない。それ故我等が本篇に於て、知識階級がこの運動の核心となるべき民衆文化の創造の理想を追求する必要といふことだけにでも觸れることの出來たのは、我等の大なる喜びとするところである。（八―一―七）

體育と能率增進問題

醫學博士 永井潜

（一）

イギリスの諺に"Muscle makes man"といふ事があるが、之は種々の意味に解釋することが出來る。先づ形體的物質的の關係から見ても、實際筋肉が人を造るといふことが出來る。何となれば筋肉の全量は體重の約四割五分を占めて居るのであつて、之れ程多量の組織は外に無い。若し新陳代謝に餘り關係ない骨骼を除き去ると、筋肉は實に六割以上の大部分を占有することに成るのである。即ち假りに一身を以て一國に比較するならば、筋肉は實に大多數を占むる民衆に比較すべきものであ

る。而して此筋肉組織なるものは検微鏡的に其構造を検べて見ると、複雑なる構成を有する無數の筋纖維の配列に因つて出來て居るもので、此位分化の程度の進んで居るものは外に無い。最も特殊の構成を具へたるものと看做されて居る神経さへも、筋肉には一籌を輸せざるを得ないやうな次第である。而かも此分化せる筋肉は微妙なる機能を營みつゝ、而かも病に罹ること最も少いものである。筋肉の機能は云ふまでも無く運動である。而して動物といふ名稱が示すやうに、生物就中高等なる生物をして生物たらしむべき顯著なる生活現象は實に運動である。此點から云へば筋肉といふ無數の民衆は、又一國の中最も大切なる活動を爲しつゝある所の階級に數ふることの出來るものである。加之、筋肉は其興奮に際して啻に運動といふ機械的エネルギーを發見し得るのみならず、同時に亦生活體の生存上缺く可からざる熱エネルギーを生成するものであつて、人間に就て之を論じて見ても、筋肉中に蔵せらるる潜的エネルギーの約四分の三乃至、三分の二は實に熱エネルギーとして發現するのであつて、殘りの四分の一乃至三分の一丈けが運動となつて現れ來るに過ぎないからである。斯く筋肉が熱生成の機關として大切なる意義を有つて居ることは、試みに動物に運動神經の末梢を麻痺せしめ、従て全身の筋肉の麻痺を招くべき毒物たる矢毒 curare を與へると、體温が著るしく降下する事によつて立派に證明する事が出來る。此意味に於て筋肉は生命の炎を燃やしつゝある無數の竈に比する事が出來る。

（二）

一概に筋肉と云つても之に元來二通りの區別を設ける事が出來る。一つは普通に筋肉と稱せらるるもので、骨骼に附着し意志のまに〳〵自由に之を動かす事が出來るもので、從て之を隨意筋とも、或は骨骼筋とも稱する。夫れに對して第二の種類は專ら心臓、血管若しくは腸胃の如き内臓の壁に分布せられて居るもので、決して骨骼に附着することが無く、又其伸縮は意志に依つて直接支配することの出來ないもので、從つて之を不隨意筋と云ふのである。分量の上から云へば全筋肉の四分の三は隨意筋より出來て居り、四分の一は不隨意筋より出來て居る。隨意筋の運動は直接意志の司配の下に行はるるものであるから、精神作用の機關たる神經中樞と最も密接なる關係を保つて居る。例せば筋肉は軍隊の如く、神經中樞は參謀本部の役目を爲して居るので、一擧手一投足悉く神經系の交渉無しには行はれないものである。是に於てか運動に依つて筋肉を鍛錬することは、同時に亦神經系の鍛錬となるのであつて、就中機に臨み

變に應じて敏捷巧緻なる運動を行ふ際に於て殊に然りとする。

元來鍛錬とは人が己の意志に依つて諸器官の機能を向上進歩せしむる爲の努力を意味する。而して斯かる目的に向つて直接意志の配下に立てる筋肉、而かも其物は身體といふ一國を代表する、最も活動性を帶べる民衆に比すべき肉筋を鍛錬することは、最も上乘の策と云はなければならぬ。況んや夫れに依つて全身を主宰統一せる神經系の鍛錬も亦同時に企圖を得らるゝに於ては、愈々益々其必要なる所以を理解することが出來るのである。加之、筋肉といふ任意に主宰し得る最も從順にして且つ最も力強き此民衆を訓練することに依つて、直接意志の配下に屬せざる、從つて容易に其訓練の目的を達すること能はざる他の物をも同時に訓練し得る利益あるもので、玆に到つて吾人は愈々益々筋肉訓練の多大なる價値を嘆賞せざるを得ないのである。即ち例へば、不隨意筋より成る心臟、血管の運動、腸胃の運動の如き、到底直接吾人の精神作用に依つて任意に之が訓練を行ふことが出來ないのであるが、然し若し筋肉に或る程度の運動を爲さしむる時は、忽ちにして其影響が是等の諸器官に波及するもので、心臟の鼓動は平時の二倍以上に昂まり、腸胃の運動も亦頗る旺盛と成つて來ることは、何人も日常經驗する所である。其他體内に於ける各種の腺の如きも、到底任意に之が訓練は出來ないものであるが、然し筋肉を媒介して其機能を亢進せしめることは極めて容易である。かの咀嚼運動に由つて唾腺の分泌を盛んにし、又一般運動の結果として汗腺其他各種の消化腺の分泌が一定度まで增進することは疑なき事實である。

斯かる關係あるを以て、心身の訓練を目的とする體育に於て、運動を其最も有力なる手段となし、筋肉の訓練に依つて、心身の圓滿なる調和發達を企圖することは最も其當を得たもので、運動即體育、體育即運動といふが如き重要なる地位を、筋肉の訓練即ち運動が體育上に占むる事に成つたのは、何等怪しむに足りないのである。斯かる意味に於て吾人は「筋肉(マッスル)が人(メークス)間(マン)を造る」なる訓言を十分に味ふことが出來るのである。

(三)

心身の圓滿なる發達を目的とする體育に於て、筋肉が最も重要なる地位を占むることは、以上述ぶる所の如くであるが、而かも吾人は、何處までも手段と目的とを明瞭に區別することを忘れてはならない。吾人が體育上筋肉に優越せる特權を與へるのは、畢竟、此最も有效なる手段を藉りて、最後の目的に到達せんと欲するに外ならぬのである。吾人が運動を奬勵し、運動即體育、體育即運動といふ意味に於て之を重要視する所以

は、言ふまでも無く心身の完全なる發育を目的とするのであつて、決して運動其物の發達の爲めに運動するのではない。勿論體育の目的も時と場所とに隨つて少からざる變遷を見るのであつて、人間の文化が未だ極めて幼稚で、比較的動物に接近して居つた草昧なる時代に在りては、腕力が凡ての力を代表して居つたのである。斯かる場合に於ける體育は、即ち筋力の發達の爲めに筋肉を訓練するのであつたが、併し乍ら文化が進むに連れて腕力萬能時代は夙くに過去つて、筋肉の爲めに筋肉を鍛練することは今や遠き昔の夢と成らねばならぬ筈である。此事は何故に人が萬物の靈長として其文化を築き上げたかといふことを考へて見ても、一目瞭然たるのであつて、若し筋肉の强弱即力の强弱を意味するのであるなら、裸一貫の力弱き人間は蓋し獰猛なる動物に比して最も憫むべき階級に立たなければならなかつたのであらう。實際人の人たる所以は彼の筋肉に非ずして彼の腦髓に在り、彼の腕力に非ずして彼の知識に在ることは、今更ら言ふまでも無い。而かも運動即筋肉、筋肉即運動といふが如き意味に於て運動の重要なる價値を認め、筋肉が人を造るといふ意味に於て筋肉に優秀なる地位を許した結果、人は動もすれば其本末を顚倒し、其手段と目的とを混同して筋肉の爲めに筋肉を訓練し、運動の爲めに運動を行ふが如き弊風を惹き起すに到つたのは、最も遺憾とする所である。殊に斯くの如き弊風は身體の訓練に熱中し盛んに體育を奬勵せんとするが如き場合に於て、最も其極端に達し、之が爲めに心身の圓滿なる發達を遂げんとする努力は、却つて甚しく其圓滿なる發達を阻害するが如き結果に陷るのは、最も慨嘆に堪へない次第である。運動の眞の目的が那邊に在るかを忘れて、唯筋肉の發達の爲めに筋肉を訓練し、運動の爲めに運動を行ふ結果、最も大切なる心臟を過勞せしめ、血管を脆弱ならしめ、呼吸器の障害を起し、仁王の如きヘラクレスの如き隆々たる筋肉を有ち乍ら、數級の階梯を上下してさへも、氣息已に喘々たるが如き不釣合の身體を造り、延いては天壽を空しうするが如き不幸を招くのは、最も愼まなければならぬ次第である。實際過度の運動に依つて身體を訓練した力士の多數が、孰れも比較的短命であるのを見ても、殷鑑遠からざる事を知るに餘りある。

(四)

筋肉は實に人を造る。其分量に於て、其機能に於て、吾人は筋肉が身體といふ一國の代表的民衆たることを承認するに躊躇しないものである。去り乍ら量の最も多きもの必ずしも質に於て最も優越せるものではない。多數の筋肉が共同一致其秩序を

保ち、整然として一絲亂れず、能く目的に適へる運動を行ひ、生活體の存在に大なる貢献を爲すには、此忠實勇敢なる軍隊の後ろに在つて、之を操縦指揮する參謀本部たる神經系の存在を忘れてはならぬ。人の人なるを得る最も重要なる點は、彼の腕力に非ずして彼の智力に在ることを考へねばならぬ。

過去五年の間世界の人類は實に慘憺なる暗黑の幕によつて包まれた。大いなる建設を成さんが爲めに大いなる破壞が行はるゝ時、吾人は徒らに其破壞を悲しむものではないが、然し兎に角破壞は實際破壞である。斯かる時人の心と軀とが、屢々彼が太古に有つて居つた原始的の野蠻的狀態に後戾りをする。遠き遠き昔の俤が知らず識らずの間に再び恐しい顏を出す。世界の平和は形式に於て正に克復したが、併し乍ら大破壞に次くべき大建設の來る迄には未だ可也長い時間を待たねばならぬ。而して其取り亂したる破壞の間から幾多の恐ろしい顏が我等を睨んで居る。吾等の世界は今や大いなる病より漸く癒えんとして、而かも其處に幾多の病的產物が橫はつて居る。ボルセヸーキは、最も恐るべき砲彈よりも、最も危險なる傳染病よりも、尚ほ恐る可き害毒を以て世界を蠱毒せんとして居る。破壞の仕事には多數の腕の力が必要であつた。而して誤まれるデモクラシーが此腕の力と結び着いて跳梁跋扈して眞正のデモクラシーを、即ち理想の生活を脅かさんとして居る。萬國勞働會議は海を隔てたる彼方の岸に於て近く其局を結ばんとして居る。筋肉勞働の聲は世界を通じて今や人の耳朶を打つて居る。實に此聲は、專橫なる官僚に對する自由なる民衆の煩悶、貪婪飽くことを知らざる强き資本家に對する虐げられたる弱き勞働者の叫びとして其第一聲が高唱せられた事は、大破壞に伴ふ大建設の第一着手として深く喜ぶ次第である。

併し乍ら最も美き衣の下に最も恐ろしき惡魔が屢々其影を潛めて居るやうに、此の喜の中にも亦、往々にして人間の原始的狀態に於ける俤が、其厭惡すべき姿を現はさんとすることを悲しむのである。最も數多きもの必ずしも最も貴む可きものではない。筋肉の力即人の力ではない。單に之を生產的仕事の上に就いて見ても、人の仕事は今や筋肉を離れて專ら機械に依つて、換言すれば彼の智力の產物に依つて其大部分が營まれて居るのである。全地球上に於ける人の筋肉に依つて爲さるる仕事の總量は、一日約四十五萬億基瓦米突である。而して人は彼の智力に依つて家畜を使用する爲めに、約四十萬億基瓦米突の仕事を爲すことが出來る。更に夫れよりも大なる智力の產物は機械の使用であつて、一日約三百五十萬億基瓦米突の仕事を之に依つて爲ることが出來ると云はれて居る。即ち人は今や彼の智力に

依つて彼が筋力に依つて爲し得る仕事の約十倍を爲し得ることに成つたのである。斯く單に生產といふ仕事の出來高より考へても、世界が人の筋力に待つ所は極めて尠いのである。若し筋力に要求する所有りとせば、夫は彼の智力に依つて造り上げたる機械の補助としてである。之に依つて考へても、現代の勞働問題は若し夫れが勞働の神聖を保證し、虐げられたる弱き者を正しき途に持ち來して之を擁護せんとするといふ意味に於てならば、勿論非常に光榮ある意義を有するものであるが、若し不幸にして勞働階級が一國の民衆の多數を占むる事恰も筋肉が最も多量であるといふが如き所以を以て、而して又未曾有の大戰爭なる破壞的事業に當つて、此多數なる筋力が大勢を支配し得たる特殊の場合に於ける關係を基として、玆に其破壞的惰性を續行し、人間の爲に勞働を論ぜずして勞働者の爲めに勞働を論じ、之れによりて啻に利己をのみ主張するが如きことあらば、之れ即ち運動の爲めに運動し、筋肉の爲めに筋肉を訓練して以て、一身の不調和を來すと同じく、一國民否な全人類の不調和不利益の源を爲すものであつて、實に痛嘆に堪へない次第である。

（五）

予輩は今や體育の見地よりして筋肉の價値を論じ、延いて現代の勞働問題に論及したのであるが、玆に到つて一面現代の能率問題と、體育としての運動問題とを併せ考へざるを得ない立場に到達したのである。能率問題より筋肉を觀察すると、人の身體は等しく一個の機械、而かも最も完全微妙なる機械であると云ふを憚らぬ。從つて自然科學的、機械學的に筋肉の性狀を攻究し、之に依つて得たる法則を運用して始めて其問題の根本に觸れる事が出來るのである。斯かる點に於て、吾人は、米國人テーロル氏が、一勞働者より身を起して、研鑽努力、筋肉生理に於ける原則を實際に應用して、驚く可き能率を高め、而して其事業を繼承せるジルブレス氏の如き、着々として之を勞働の實生活に施して、卓越せる效果を擧げ得たる事實を以て、現世界に於ける一の驚異として嘆賞せざるを得ないのである。

所謂テーロル・システムなるものの綱領とする所は、第一に疲勞と休養の問題に徹底的の運用を行つた事である。彼の心臟を見ずや、生を享けてより以來最後の呼吸を爲すに到るまで、一瞬時と雖も疲勞する事なく働いて居るではないか。而かも其働き振りを見ると、血液を押出すポンプとしての仕事を爲る丈けでも、一日に一基瓦の物を約五里――即ち富士山の五倍の高さまで押し上げる丈けの驚く可き仕事をやつて居るのである。而

して終身此仕事を續けて疲れる事の無いのは抑も何の爲めであるか。即ち一度び縮めば一度び伸び其の伸ぶる事に依つて、縮む際に失つた所のものを補給し、斯くの如くにして善く勞むると共に亦善く遊ぶが故である。斯かる關係は獨り心臟のみでなく、凡ゆる生活體に於ても同樣である。今筋肉に就きて見るに疲勞計といふ一種の裝置を使つて、同一の重さを種々なる時間的間隔を置きて上げさせて見るに、例へば指の筋肉を使つて、一定の重さを、一分間に三十回反復して上げたとすると、其疲勞を完全に恢復する爲めには二時間要かる。其の場合に、今若し同じ重さを半分間に十五回丈け上げた場合には、仕事は前の半分であるが其爲めに起つた疲勞を恢復するには前の場合の半分、即ち一時間よりも遙かに短かく、例へば半時間で足りる。そこで今三十回荷物を上げて二時間休む仕方と、十五回荷物を上げて三十分休む仕方と、此兩法を用ひて、八時間續けて勞働した場合を考へて見るに、第一の方では八時間中に十三回宛上げる事を四度しか繰返せない。即ち總數百二十回である。之に對して第二の方法に依ると僅か三十分休めば疲勞を恢復するのであるから、八時間中には十五度宛荷物を上げる仕事を十六回繰返し爲す事が出來るから、總數は二百四十回出來る勘定である。即ち第一の仕方よりも、第二の仕方を爲る方が、同じく八時間内に爲さるべき仕事の總量を、二倍に增す事が出來る。次に第三の方法として若し一回荷物を上げる爲めに二秒を要し、而して其疲勞を恢復する爲めには十秒で事が足るとすると、都合十二秒で濟む譯であるから、八時間には千四百回丈け繰返して同じ重さを上げ得るから、第二法の十倍、第一法の二十倍丈けの能率を高める事が出來る譯である。以上は唯簡單なる關係を示した丈けであるが、實際に於て働く可き時に働き、餘り甚だ多くの疲勞を感ぜさるに先立つて、能く休養せしむる時は、疲勞を無理壓しして強いて長く勞働せしむる場合よりも、甚だしく能率を高め得るといふのが筋肉本來の性質であつて、テーロル・システムは此秘訣を實生活の上に最も能く應用したものである。

（六）

テーロル・システムの第二の綱領とする所は、無駄の運動を除く事である。前にも述べた如く、筋肉が秩序立つて働くには、神經系と共同せねばならぬのであつて、神經中樞が度々運動を繰返す事に依つて訓練されると、或る目的を達する爲めに行ふ運動が、最も經濟的に行はれるやうに成る。然るに其訓練が不十分なる場合には、邪魔になる筋肉までも一緒に働くか

ら、其爲めに非常に無駄骨を折つて而して憊ぶれるのである。かの練習の不十分なる人が自轉車に乘つた場合に、無暗に把手(ハンドル)を握る爲めに手の筋肉が非常に疲勞するが如き、或は水泳に慣れない人が少時水上に浮んでも非常に疲れるが如きは、共に全く筋力の不經濟から起る結果である。筋力を經濟的に使用して非常に能率を高め得たる例はジルブレス氏の研究に依つて成されたる煉瓦積みの仕事の改良である。從來の遣り方では煉瓦積みの職工が腰を曲(かが)めて、左手で煉瓦を取り上げ、何(ど)の面(つら)を表にすべきかを見定めた上、之を相當な地位に置き、次に右の手で漆喰ひを塗り附ける。斯くの如く左右の手が交互に働いて煉瓦を積み上げて行くのであるが、新しい方法では、下職の者をして豫め表にすべき面を表に向させて置き、又腰を曲めずとも取れる地位に之を持ち來たし置き、職工は左の手で煉瓦を取つて積むと同時に、直ちに右手が働いて其上に漆喰ひを塗り附け、それと同時に新に左手が煉瓦を積み重ねるといふ風に、兩手が間斷なく同時に働くやうにしたのである。之に依つて古い法では十八通りも運動したのに、新しい法では之を五通りに減ずる事が出來た結果、舊法では百人を要した仕事が新法では僅に三十人で足りる事に成つた。

（七）

次に能率を高むる爲めには努力を成る可く合理的に行はしむる事である。單に理學的の見地から云へば、二〇基瓦の物を〇・四米突の高さ丈け上げるのも、又四〇基瓦を〇・二米突丈け上げるのも、仕事の量は等しいのである。故に或る筋肉に第一の場合に二〇基瓦の重さの物を〇・四米突丈け上げる仕事を與へて、それが全然疲勞するまでに何回上げ得るか、の關係から仕事の總量を求め、第二の場合には四〇基瓦の重さを〇・二米突丈け上げさせ、其筋肉の全く疲れるまでの仕事の總量を見ると、鳥渡考へると同じ量である樣に思はれるが、事實は然らずして、比較的輕い目方を上げさせた時の方が、仕事の總量は比較的大である。指の筋肉によつて試驗するに、三〇基瓦の重さを懸けた時の仕事の總量を假りに、一〇〇とすると、四〇基瓦の時は六五。五〇基瓦の時は四二。六〇基瓦の時は二三といふ風に、一定範圍内では、重さが増せば増す程、仕事の總量は著るしく低下する。テーロル氏が此理法を實際に應用して非常な効果を上げたのが、夫の有名なるシャベルの改良によつて能率を高めた研究である。從來は重い物を掬ふ時でも、輕い物を掬ふ時でも手當り次第にシャベルを使つたものであつて、シャベルの大き

さ重さ等には何等の考慮も拂はれなかつたのであるが、テーロル氏は上述の筋肉生理の原則から、手頃のシャベルを用ゆる事によつて、毎回取扱ふべき重さを適當にする事が、非常に全體としての能率の上に影響がある事を思ひ付き、實驗的調査を行つてアメリカの勞働者には、約九・五基瓦の重さを毎回シャベルで取扱はしめる事が一番適當である事を確めた。即ち輕い物を掬ふ時には大きなシャベルを使ひ、之に反して重い物を掬ふ時には小さいシャベルを使はした。要するに毎回約九・五基瓦の物を使用させた所が、其結果在來の秩序なき方法では、五百人を要した仕事も、僅々百四十人で足る事が出來、舊法では一人の仕事は平均一日十六噸の所を、新法では五十九噸丈け掬ひ得るに到つた。即ち能率は三倍以上に高まつたのである。之に反して賃銀は一日四・八マアクより七九マアクに高まつたのであるから、舊法では一噸につき二九ペンニッヒ懸つたのが新法では其半分、即ち僅に一四ペンニッヒしか懸らぬやうになつた。

（八）

吾人は玆にテーロル・システムに就いて、より以上云ふ可き多くを有つて居るがそれは省畧するとして、以上の叙述によつて能率問題で世界の各大工場を風靡せんとして居る所謂テーロル・システムの一斑を伺ひ知る事が出來たと思ふ。元來斯くの如き問題は、單に所謂工場等に於ける勞働問題に限らず、小にしては一家の臺所或は其他の日常生活に、何れも密接な關係あるもので、現に自分の知つて居る農村の研究を以て有名なる小尾晴敏氏の如きも、此問題に留意して臺所の器物の整理、場所の經濟等を實行した結果、一日中に臺所に於て運動すべき仕事の量を三分一に減らす事が出來、又鋤、鍬、鎌等の目方及び取扱方を研究する事に依つて、耕作を非常に經濟的成らしめたことを語られた。實に日常生活の上に各個人が此心得を有つて居ると居ないとは非常な損得の分れる事と想ふものである。惟り筋肉勞働者のみならず、精神勞働に於ても、此問題が最も大切な事は更めて云ふまでも無い事で、記憶聯想の如き、全く此經濟的原則を實行する事に依つて始めて確實に行はれるのである。上に述べた如く、世界現在の大勢に鑑みるに、粗大なる筋力を要求する時代は既に過ぎて機械を補助し、人の智力と相待つて筋力が始めて十分に其効果を發揮し得るの時に當つて、愈々益々吾人は此筋力の經濟的使用法を考究し、之に依つて其能率を増進する事に、出來る丈けの注意を拂はなければならぬと思ふ。斯かる立場より予輩は普通教育に於ける體育の一新事業として、此方面の筋肉訓練に留意し、心身の圓滿なる發達を企圖

すると共に、一面日常生活に利益する事最も多大なる能率増進の上に直接の効果を上ぐるが如き意味の練習を加味する事の必要を高唱する次第である。年新にして事益々繁からんとするに方つて、聊か體育の見地より運動の價値を論じ、併せて筋肉勞働の實險問題に論及した所以である。

國際勞働會議の歸趣を論じて我國勞働問題の將來に及ぶ

法學博士 堀江歸一

勞働會議概評

第一回國際勞働會議の議題は(一)一日八時間、一週四十八時間勞働の原則適用、(二)失業の防止又は豫防方法、(三)婦人の(イ)分娩前後並に懷姙中の手當(ロ)夜業(ハ)不健康なる作業、(四)少年勞働に關し、(イ)使用の最低年齡(ロ)夜業(ハ)不健康なる作業、(五)婦人の夜業禁止並に燐寸製造に於ける白燐使用禁止に關する千九百六年ベルン國際協約條項の擴張並に適用の五件に外ならざることは、夙に世人の知れる所なりき。是等の諸件に對しては、我國に於てこそ、兎角の議論あり、資本家代表者武藤山治氏が一方に列國代表者に向つて、日本の溫情主義なるものを說明すると共に、八時間勞働制の適用並に夜業廢止に反對す可き旨を聲明して、出發前に非常の意氣込みを示したるが如き、又政府代表者鎌田榮吉氏の渡米を桃太郎の鬼ヶ島征伐に擬して、其行を壯にせんとしたる資本家有産者階級のあれるが如き、何れも勞働會議に於ける我國の立場の困難なる可きことを想像したるの一端とす可きか。然も勞働問題の解決に就て將た又此問題に對する國民の見識に就て、一日の長ある歐米諸國の立場より云ふときは、上記の諸問題たる、略ぼ既定の事實に屬し、何等新とし、奇とす可きものあるを知らず。現に英米

兩國の勞働者は今日如何なる事を欲しつゝありやと云ふに、彼等の望む所は必ずしも賃銀の上進に非ず、勞働時間の短縮にも非ず、寧ろ現在の産業組織を改革し、資本家と云ひ、勞働者と云ふが如き階級的差別を撤廢し、勞働者自ら産業に對する管理權を掌握せんとするの一事にして、英國勞働黨の發表したる四大綱領中、産業の民主的管理の一項の存するに徴するも、勞働者の意嚮の如何なる邊に赴きつゝあるやを知るに難からず。斯る場合に華聖頓の勞働會議に於て、上記諸問題が盡く可決せられたりとするも、是等の國に於ては、勞働問題の解決を促進するに足らず。然も八時間勞働制、婦人並に少年の勞働上に於ける保護、婦人の夜業禁止等を國際間の決議に依て、其未だ實行せられざる諸國に及ぼすは國際間に人道的要求を普及するの所以なるが故に、勞働保護立法に於ける先進諸國は必ず聲を大にして、保護法の國際的適用を後進諸國に要求す可く、後者の諸國亦人道上の見地に於て、之を承認するに至るものと解せられたり。

我國は今日國際間に於ける政治上又は軍事上の地位に於て、如何に優秀なるものありとするも、勞働保護立法の點に於ては、後進國の一に列せざるを得ず。然も斯く勞働保護立法に於て後進國たるは、我國工業の發達の幼稚なるが爲めに然るに非ず、工業發達の狀況、機械工業に於ける大規模經營の一斑、勞働者自覺の程度等より云ふときは我國は今日に於けるよりも、勞働保護立法の歩を進めざる可からざるの道理なりしに拘はらず、勞働問題の解決に誠意を存せざる歷代の政府當局者と私利我慾以外に何等公心を懷かざる資本家と相結託して、勞働保護立法の大勢を左右し、今日の如き時代後れのものたらしめたるに外ならず。然も世界の大勢は我國の獨力を以て、之を如何ともする能はず。世界永遠の平和を尊重するの一手段として、國際勞働改善の諸原則を承認し、其實際に於ける適用を議する爲めに、第一回勞働會議に代表者を簡派する以上は、先づ世界の大勢に順應して、我國勞働保護立法を改善す可き確乎たる決心の存するを要したるや、論を俟たず。然も政府に勞働問題に對する理解を缺き、進んで保護立法に參加するの意思なく、只管猶豫除外を求むるを急とし、其及ばざるに至つて、保護立法を承認するの已むを得ざるに至り、然も其場合に於ても、方針に矛盾の跡あり、態度に不徹底の嫌あれるは、吾人局外に居る者の唾棄するを禁ずる能はざる所なり。

八時間勞働制問題

今回の勞働會議に於て、重要の問題を以て目すべきものは、

八時間勞働制を國際間に確立すること是れなり。始め會議の議題として「一日八時間一週四十八時間勞働の原則適用の件」なる一項公にせらるゝや、一部の實業家は之を以て、一日八時間の勞働制にして、實行せらるゝときは、八時間以上一分一秒たりとも、勞働者をして勞働に就かしむる能はざるものなりとし、之に對して異論を　まんとしたり。然れども外國に於て勞働時間の制限と云ふは、所謂正常時間を法律に於て規定するの意なり。一國に於て或る事業の產出する物資に對する需要が季節に依て增減し、天候風土の關係に依て、原料品が減失腐敗するは、免かれ難き所なるを以て、法律に於て勞働時間を制限するも、一方に或る時間を限りて、超過時間の勞働を許容し、且つ超過時間の勞働に對しては、事業主をして割增賃銀を支拂はしむるを常とす。如何なる程度まで超過時間の勞働を認め、又之に對して如何なる率の割增賃銀が適當とするやは、主として傭者と職工組合との間に於て、協定す可き問題にして、職工組合の勢力强大なれば、超過時間を減縮すると共に、割增賃銀の率を高くす可く、斯くて事業主は高率なる割增賃銀の支拂に依て、生產費の加重するを恐れて、自然緊急の事情に迫られざる限り、超過時間の便宜法を濫用せざるに至るものとす。ウェッブ氏の如き、其著「產業上の民主政治」に於て、此問題を說明すること詳かなり。我國に於て誤解の行はるゝものゝ、蓋だしき所柄氏の所說を引抄するも亦無用の業に非ざる可し。

職工組合の幹部は超過時間の勞働に關する要求に就て、反對するものに非ず、寧ろ之を以て組合員の爲に、割增賃銀を收得せしむるの特權に利用せんとし、超過時間の勞働に對しては、例へば二割五分又は五割と云ふが如き割增を以て、賃銀率を決定するの方法を案出したり。此方法は當事者の双方に取つて、有利なる妥協點を得たるものなることを疑はず。蓋し傭者は彼等の業務を有利に續行し、繁忙なる時期に臨んで、充分の利益を獲得するを得る一方に、勞働者は平生習慣と爲れる勞働時間を攪亂せられ、疲勞の狀態に於て、勞働を繼續するの苦痛に對して、高率なる報酬を以て酬ひらる可ければなり。固より此妥協は正常勞働時間の制より分離するに相違なしと雖も、割增賃銀の支拂は自ら超過時間の勞働をして臨實の事變に臨める時のみに限らしむるに至る可し。多年間斯る制度が傭者並に勞働者の滿足を收め得たるもの、亦偶然に非ざるなり。

今回國際勞働會議に於て、問題に上れる八時間勞働制は如何なる性質のものなりや。世人或は此點に誤解を懷き、八時間勞働と云ふ以上は、八時間以上に一分一秒の超過時間勞働たも、之を許さざる極めて嚴酷なるものなる可しとし、此點に論據を

置きて、我國に於ける八時間勞働制適用の可否を喋々したる如ありと雖も、斯の如きは大なる誤解にして、八時間勞働制に對し、種々の點に緩和的規定の存するは、四十八時間協約案第四條より第六條に至る條文に於て明白なり。左に之を引抄す。

第四條。工業若しくは工程にして其性質上、交替制に依り、繼續作業を必要とするものに在りては、四十八時間の制限を超過することを妨げず。但し其就業時間は一週平均五十六時間を超過することを得ず(下略)

別表甲に列記したる諸工業は本條の適用ある工業とす。

第五條。四十八時間の制限は別表乙に列記したる種類の勞働者　場合に於ては、之を六十時間に延長することを得。

第六條。一、別表丙に別記したる狀態の存在する諸工業の場合に在りては、一年百五十時間を超過せざる時間外勞働に從事せしむることを得。但し時間外勞働に使用せられたる場合に於ては、勞働者は其通常賃銀に比し、少くと二割五分以上の割増賃銀を支給せらる可きものとす。

二、前項に揭ぐる以外の諸工業の場合に在りては、今後十年間は一年百五十時間を超過せず、又其後に於ては、一年百時間を超過せざる時間外勞働に從事せしむることを得。

但し前號但書の要件に從ふ。

其後勞働會議に於ける勞働時間制委員會は準備委員會案に左の如き修正を施したりと傳へらる。

(一)一日八時間にして、一週四十八時間制度を採ること、(二)オーヴァー、タイムは仕事の緊急なる例外の場合にのみ、之を認むること、(三)オーヴァー、タイムの場合には、二割五分の割増賃銀を支拂ふこと、(四)オーヴァー、タイムに關する規定は使用者又は勞働者の團體ある場合には、其協議に依りて定め、而して其合意は法律上の效力を有するものとし、團體なき場合には、政府之を定むることゝしたり。

倫敦準備委員會の原案と右の修正案とを比較對照するに、後者に於てオーヴァー、タイムに關する規定が聊か嚴峻の度を加へたるの趣なきに非ずと雖も、其孰れを以てするも、八時間勞働制として、緩漫のものたるや、論を俟たず。然るに我國政府並に資本家代表者は右の如き緩漫なる八時間勞働制すら、之を採用するときは、我國工業の存立に危險を及ぼすものとし、只管我國工業の短所弱點を誇張して、除外例の適用を要望して已まず、結局日本自ら印度、支那、暹羅等と同列の特殊國なりと卑下して、漸く普通勞働者に對し、(一)原則として一週五十四時間卽ち一日九時間とし、生絲工業に就ては同上六十時間卽ち一日十時間とすること、(二)十七歲以下の職工坑內作業の坑夫

に對しては、一週四十八時間、危險且つ不衛生なる作業に就ても一週四十八時間とし、不健康なる作業に就ては、五十四時間とすることの原案を提出し、飽くまでも特殊國たる日本の特殊の取扱を得るの點に就て、努力を惜まず、彼等が勞働會議に出席したる意義は日本を特殊國とするの一事に在りて他に何ものも存せざるの奇觀を生ずるに至れり。彼等は之を以て、勞働會議に於て、自家の主張を貫徹し、又日本工業の利益を保護したるものとして、自負するやも知る可からずと雖も、吾輩は之を以て彼等が自己の幼稚なる知識に加ふるに、利己的精神を縱にして、無用の所業を爲したるものと斷言するに憚らざるなり。

我國が勞働會議に於て、八時間勞働制の適用に對して、除外例を求むるに就て、唯一の理由としたる所は日本を以て、工業發達の點に於て、印度、支那、暹羅等と同じく、特殊國なることの一事に外ならざりしが如し。然も日本の產業が工業殊に輸出工業の見地に於て、幼稚なること、印度其他と異ならざるや否や、將た又日本は原料品輸出國にして、既製品輸出國の地位に居らざるや否や、我國經濟社會に於ける大勢として、家內工業は漸次工場工業に推移し、工場工業亦株式會社に依て、次第に大規模に經營せらるゝの現狀に就かざるや否やの諸點を考量し、殊に最近數年我國工業の面目の一新せられつゝある事實を念頭に置かんか、我國こそ當然世界八大工業國の一に列す可きものにして、之を特殊國の班に置くの當らざるや、論を俟たざるなり。思ふに勞働時間を減縮して、勞働者に修養、休憩、娛樂の餘裕を與ふるときは、彼等の精神に良好なる刺戟を及ぼし、爲めに勞働能率に上進を來すの事實は先進工業國に於て、實驗せられたる所なり。但し時間短縮の爲めに、餘裕を生じたる場合に、勞働者が之を利用して、能率の增進に資するや否やの一點に就ては、教育若しくは勞働者生活上に於ける環境の影響に依るもの、極めて大なりとせざる可からず。是れ印度の如き、暹羅支那の如き、教育の普及未だ全からず、加ふるに勞働者生活上の環境の不良なる國に於て、其國情に顧みて、自ら特殊國たるの已むを得ざる所以なる可しと雖も、日本には毫も斯る必要の存することを認むる能はず。我國に於て勞働者の勞働時間短縮せられ、生活上に餘裕を得んか、彼等は餘裕を利用して、心身を快適にし、以て勞働能率を上進す可く、又特殊の技藝教育なり、補習教育なり、其好む所のものを受けて、勞働技術の熟練を謀るを得べき道理にして、此點に確乎たる成算の存するものあらんか、勞働時間の短縮は毫も躊躇す可き所に非ざるなり。

八時間勞働制に關する委員會に於て、我國資本家代表武藤氏

は長文の聲明書を發表して、八時間勞働制適用の我國產業に不利なる所以を陳述し、其一節に於て、「我國の勞働者は八時間原則實行の爲めに、剩し得べき時間を善からざる目的の爲めに費消するの虞あり。何となれば現在の所、讀書戶外運動其他歐米勞働者の爲すが如き慰樂は我勞働者の未だ知らざる所なり」と云へる由なるが、余は之を以て武藤氏が日本勞働者社會に向つて、誣言を弄するの甚だしきを認めざるを得ず。如何にも武藤氏等の經營する紡績業に於て、地方無智の女子を種々の手段に依て、工場に誘拐し來り、寄宿舍に檻禁して、外界との交渉を斷絕し、長時間の勞働に就かしむる場合には、彼等が讀書をも樂まず、戶外運動にも親しまざるは當然なりと雖も、之を一般の勞働者に推し、又勞働時間の短縮せられたる場合に於ける勞働者亦同一たる可しと速斷するに至つては、武藤氏が自己の管理する工場以外に、何ものをも知らざる井蛙の見とせざる可からず。武藤氏は日本を出發するに先だち、半生を紡績業の經營に費し、斯業以外の工業に就て、知る所なきを以て、顧問は之を一般工業の經營者中に求む可きことを明言したる由に傳へられたるが、八時間勞働制の勞働者に及ぼす影響を論ずるに當り、依然狹隘なる自己の經驗に基きて立論し、毫も其知見を擴大せざるの事實を暴露したり。算盤以外に、何ものをも知らざる一紡績屋の低調なる知識に對して、吾人は酬ゆるの語を見出す能はざるなり。

此點に於ては、日本勞働代表者の顧問武藤七郎氏が八時間制に就て發表したる聲明書を以て、價値あるものとせざる可からず。卽ち氏が日本の產業の發達の著しきこと、然も尙ほ足らざるものありとすれば、勞働者團結權の認められざるに基くこと、綿絲並に生絲工業には其多數の婦人を使役するの點に於て、八時間勞働制適用の理由あること、時間短縮は物資の品質を改善し、數量を增加することを擧げたるは勞働問題に對して、正確なる理解を有するの證據にして、氏の主張は敗れたりとするも、邦人に依て、第一回勞働大會の席上に於て、斯る正論の唱道せられたるは、吾人の滿足に堪へざる所なり。武藤と武藤、偶々其姓を一にすると雖も、其見識に於ては雲泥の相違ありとす可し。

特殊國たる日本の前途

勞働問題に無理解なる我國の政府並に資本家の代表者は態々華盛頓の勞働會議に出張して、我國に特殊國と稱する極印を刻し、我國が經濟上若しくは產業上に於て、印度支那暹羅と同列なりと云ふ不實の事實を世界に公表したり。講和會議に於て、

始め五大國の一に列したる我國が講和全權委員の不手際に依て、何時か此列より排除せられたるの事實は我國民をして痛憤措く能はざらしめたるが、今や勞働會議に於ては、我國自ら八時間勞働制の適用に於て、除外の取扱を受くる爲めに、進んで特殊國の地位に退きて、顧みざりしが如し。

然も八時間勞働制の適用が我國工業の存立を害せず、寧ろ近き將來に於て、此勞働制に律せらるゝことの必至の趨勢なる以上は、彼等は誠に無益の配慮、無用の狼狽を爲して、我國の地位を國際間に失墜したるの譏を免かるゝ能はざるなり。或は政府又は政府の爲めに辯ずるの輩をして言はしめんか、日本は特殊國と爲りたればこそ、八時間勞働制の適用を免かれ得たるものなりとして、一廉の手柄に擧ぐるものなる可しと雖も、余は此事を以て我國の立國上に大なる危險を及ぼし、又損失を齎すものと認むるに躊躇せざるなり。

過日講和會議の巴里に開かるゝや、日本の全權委員が人種差別撤廢の議を提唱し、其理由に就て、列國に向つて、辯明に勉めたるに拘はらず其容るゝ所と爲らざりしは、世人の知るが如くにして、而して此點に就ては六千萬の同胞、一人として不快の感を懷かざるものなし。然らば當時、歐米諸國が日本に對して、一方に世界五大強國の一に列するの事實を認めながら、他の一方に於て人類差別撤廢に關する我國の要求を拒否したるは何故なりやと云へば、此事たる必ずしも我國民が黃色人種にして、彼の國民が白皙人種なるの故に基くものとす可からず、更に根本の理由に就て、考量せんか、北米合衆國と云ひ、濠洲聯邦國と云ひ、我國の要求を容れて、人種差別を撤廢することを承認せんか、論理上の結果として、續いて、我國の要求し來る可き移住民入國の自由を許容せざる可からず。而して一旦我國に此自由を與へて、我國より生活程度の劣等なる移住民の入國し來るもの多きに至らんか、合衆國も濠洲も年來社會政策に依て、自國民の生活程度を高尙にし、又勞働條件を優良にするに就て、施しつゝある一切の計畫を根柢より打破せられざるを得ず、兩者が人種差別撤廢の要求に對して、頑强なる態度を持したるは、此故にして、斯く解釋するときは、人種差別撤廢の問題は一個の經濟問題なることを知る可く、我國にして勞働者の生活程度や、勞働條件を改善せざる限り、諸國をして人種差別の撤廢を容れしむるに難きことも、自明の理なりとす可し。

我國にして將來人種差別撤廢の要求を放棄して、顧みざるものならんか、勞働會議に於て、如何なる態度に出づるも、深く論議するを要せず。然も西園寺侯と云ひ、牧野男と云ひ、講和會議を終了して、歸國したる後に、國民に向つて、何事を語

れりや。人種差別の撤廢は將來我國の國論として、今後國際聯盟會議の開かるゝ度毎に、之を主張して以て其貫徹を期す可く、國民亦此覺悟を以て、臨む可しとして、大に吾人を激勵したるに非ずや。果して然らば我國の如き、今回國際勞働會議に上れる勞働改善の諸原則に對しては、一議に及ばず、之を承認し、以て列國をして我國の人種差別撤廢を要求したる場合に、異論を挾むの理由なきに至らしめざる可からざるの道理なるに拘はらず、我國の政治家に此勇斷と先見とを缺き、人種差別は之を撤廢することを要求しながら、勞働改善の諸原則は之を否認し、自ら特殊國を以て、滿足せんとす。斯の如くにして列國をして人種差別を撤廢せしむるが如き、不可能の沙汰にして、我國是を誤まり、國民の興望を空うするは、即ち短見なる政治家と我慾に富める資本家との罪に之を歸せざる可からず。我國の資本家代表武藤氏は時間制限問題に對して、陳述書を公にし、其一節に於て、日本の勞働界は封建時代の狀態を脫出せざること、其勞資關係は親子間の如く密接なること、日本の勞働者に多くの餘暇を與ふるときは勞働者自身の品性を害することの三點を擧げて、八時間制の適用に反對したりと云ふ。余は今日まで武藤氏を以て單に固陋の思想を懷抱する一紡績業者なりと信じたるが、此陳述書に接して、氏を以て一個の虛言者なることを斷ぜざるを得ず。日本に機械工業起り、大工場制の工業組織行はれて以來、年を經ること久しきものあり、一方に勞働者の間に教育普及し、今や彼等の間に自覺あり、向上心あり、勞働運動の何ものたるやを辨へつゝある場合に、勞働界が未だ封建時代の狀態を脫出せずと云ふは、何の譫言なるか。日本の勞資關係は親子の如しと云ふ。然らば氏は自己の經營する紡績工場の女工勞働者を親愛して、自家の子女に對するが如くなるを得るか、斯の如く爲るを得ると斷言するも、誰か之を信ずるものあらんや。若し夫れ勞働者は其與へられたる餘暇を以て、品性を害するの用に供す可しと云ふが如き、氏自ら勞働者を奴隸の如く酷遇し、二六時中勞働に羈縻せしむるを以て、得たりとする殘忍なる性癖を暴露したるものとせざるを得ず。

東京日々新聞は武藤氏の陳述書を報道するの傍ら、之を批評して「内容空虛にして、珍妙なる論理を暴露し、日本に於ける資本家の未だ過去の夢より醒めざるを思はしむ」と云ひ、又「多數の日本人は同聲明書を以て、世界八大工業國中に居る日本の立場として、慚愧す可きものなりと爲しつゝあり」と云へり。要するに資本家代表者は勞働會議に於て、殊更に不實の言を弄して、自家の私慾を縱にせんとしたるの譏を免かれず、其罪惡や、極めて大なりとす。此點に就ては、日本の政府代表者亦同

罪なり。岡政府代表者が勞働時間制限に關する委員會に於て、朗讀したる陳述書に幾何の眞實の認む可きものありや。氏は日本に於て八時間制の適用を困難なりとする理由を擧ぐるに當り、(一)日本の產業が農業期より工業時代に移れるは、最近の事に屬すと云ひ、(二)總ての工場は尙ほ小規模の域を脫せずと云ひ、(四)分業の發達尙ほ幼稚なりと云ひ、(五)機械の適用其他設備不充分なりと云ひ、(七)生產方法尙ほ其組織に於て完全ならずと云ひ、(九)職業敎育尙ほ發達し居らずと云ふが如き事實を擧げたれども、是等の事たる、要するに程度問題に屬し、日本の現狀を以てすれば、必ずしも日本を特殊國たらしめざる可からざる程に、是等の點に於て幼稚なりとする能はざると共に、今後の決心に依て、充分の進步を期圖するを得べし。若し夫れ岡氏が他の理由として、(三)雇主も勞働者も未だ團體的組織經營の狀態に入らずと云ひ、(六)職工の訓練充分ならずと云ひ、(八)勞働組合未だ幼稚なりと云へるが如き、從來內務省や農商務省が固陋偏狹なる勞働政策を持したればこそ、斯る結果を生じたるものにして、若しも彼等が政策を一變せんか、勞働者の團結は發達し、職工の訓練亦自然に行はるゝを得べき道理なり。多年農商務省に居りて、政府の勞働政策を分擔し、勞働運動若しくは勞働者團結を抑壓し來りたる岡氏が國際會議の席上に於て、日本には勞働者の團結的組織を缺けりとか、職工の訓練不充分なりとか、公言して憚らざるは、厚顏の甚だしきものとせざる可からず。

加利福尼州在住日本人は山岡音高氏を代表者として、國際勞働會議に於ける我國代表者に向つて「加州に於ける排日派は日本が一週四十八時間勞働其他の勞働條件に關して、除外を求めつゝあるは、日本人が支那人及び印度人の如き、劣等勞働者たる證據なりとして、排日の氣勢を煽り居れり。就ては日本に講和條約中の勞働規約全部を容認ありたし」と電請したりと云ふ。(十一月十二日東京日々新聞所載)排日か除外例か、是れ日本の進む可き道途に橫はれる二個の陷穽なりき。我國は之を回避して、天下の公道を濶步するに苦しまざりしに拘はらず、自ら勞働條件の改善に對する除外例を要求して、排日運動を煽揚せんとす。今後加州其他に排日運動を醸し、本邦人の進展す可き道を妨ぐるものありとせんか、此事は一に勞働會議に於ける政府並に資本家の方針を誤まれるの結果にして、國民は宜しく彼等の責任を糺さゞる可からざるなり。

夜業少年使傭禁止其他の問題

婦人の夜業廢止に就ては、始め我國紡績業者の間に、反對の

說あり、又は猶豫の要求ありたるやに聞きたるが、世界の大勢に逆行するは、彼等の能く爲すを得る所に非ず、世界の舞臺に出でゝ、勞働問題に關する新思潮に接しては、平生大阪辯りの混濁したる空氣を呼吸しつゝある紡績屋も固陋の意見を死守する能はざるものか、日本政府の代表は婦人雇傭委員會に於て、日本は千九百二十一年七月を期して、ベルン協約の規定を實行するの意なる趣を發表し、資本家代表亦之を默認したりと云ふ。ベルン協約と稱するは、十人以上の勞働者を使用する一切の工業に於て、婦人の夜業を禁止することを主眼とし、婦人には少なくとも夜間繼續する十一時間の休息を與へ、且つ此內に午後十時より午前五時に至る七時間を包含することを規定したるものにして、千九百六年同協約のベルンに於て成立するや、歐洲十四個國は之に加入し、何れも國內法を以て、婦人夜業を禁止したるのみならず、印度の如き、アルゼンチーンの如き、協約に加入せざる國にして、尙ほ夜業禁止の擧に出でたるものあり。然らば世界有數の工業國たる日本が婦人の夜業を廢止するが如き、當然の擧にして、一部の資本家が工場法施行後十五年を以て、婦人廢止の期限としたるを恰も既得權の如くに、考ふるは沙汰の限りなりとせざる可からず。

此點に就ても我國の資本家代表武藤氏は「婦人の夜業を即刻廢止するを以て、我國の產業に重大なる打擊を加ふるものなり」との保守論を喋々し、更に政府代表顧問田中孝子女史が政府代表のベルンの協約加入に關する意見書を朗讀する前後に、日本婦人の夜業に從事する慘憺たる狀態を陳述するや、之を以て日本の耻辱を外國に示すものなりとし、會後田中女史に向つて「貴女は國の耻を國外に曝したんですか」と詰れりと云ふ。(東京日々新聞十一月二十日所載電報に據る)此場合に於ても武藤氏の幼稚なる愛國心と僞善を重しとする資本家的精神とは遺憾なく暴露せられたるものとす可し。婦人を夜業に使役することの經濟上に、道德上に、非難す可き所業たるや論を俟たず。而して日本が婦人夜業に對して、何等の制限を加へず、資本家亦之に乘じて、婦人を夜業に酷使して已まず、否政府が婦人夜業に對して、何等の處置に出でざるが如き、主として資本家の運動に基くものなりとすれば、斯る國辱的事實の存在に對して、責任の資本家に存するや、論を俟たず。余をして忌憚なく云はしめんか、國辱を暴露する者に罪なくして、國辱其ものを釀成する者に罪ありとせざる可からず。

我國現行の工場法が十二歳を以て少年使傭年齡の境界とし、又輕易なる業務に限り、十歳以上の少年の就業を許容したるは要するに資本家の利益を偏重し、國民の保健を尊重することの

更に肝要なることを閑却したるものとせざる可からず。今回の勞働會議に於て、使傭年齡十四歲に引上げられ、日本亦之に贊成したるは、當然なり。然も尙ほ「十四歲未滿の者にして小學敎育を終りたる者は此限りに非ず」との制限を付し、一場の除外例を設けんとしたるは、如何なる意なるか、然も此提案は委員會に於て否決せられ、少年勞働者の最低年齡は十四歲とし、何等の除外を認めざるに至れりと云ふに於ては、日本政府の代表者は無用の事を提議して、外國の拒否に會したるものとす可し。

更に少年者夜業禁止問題に就て、日本の資本家代表者の發表したる意見に至つては、吾人をして驚嘆せしむるものあり。即ち同問題の委員會に於て（一）原則として十八歲未滿の者の夜業を禁止すること、（二）例外として鐵及び鋼工業、硝子工業、製紙業、反射爐、精毛業、亞鉛鍍金業の內、必然的繼續作業を要するものに就ては、十六歲以上十八歲未滿のものゝ夜業を認むることと決議したるに對し、日本の資本家代表武藤氏は對案を提出し、（一）年齡の制限を十六歲より十五歲に引下げ、（二）製絲業に於ては、一週六十六時間の勞働を許し、一年百五十時間の殘業を認むることを主張したりと云ふ。武藤氏にして勞働問題に就て、少許の知識を有せんか、少年の夜業の如き、速に之を禁止し、彼等に休養若しくは修學の便を與ふることを以て、一國勞働の能率を增進する所以なることを感得するの道理なり。否斯る判斷を下すには必ずしも專門の知識あるを要せず、氏が口癖の如くに他人に語つて已まざる所謂溫情主義なるものを以てするも、當然の結論なりとせざる可からず。然も氏の溫情主義なるものに據れば、少年の夜業を禁止するときは、彼等は自ら夜遊びに耽るの機會を得るを以て、飽くまでも彼等をして夜業に從はしめ、以て體よく工場に檻禁せんとするものなるか、少年の夜業を禁止する結果、晝間勞働に從事する少年に對する需要を增進し、斯くて彼等の賃銀に增加を來すときは、彼等をして濫費の惡習に染ましむるを以て、晝となく、夜となく、彼等を無制限に低廉なる賃銀を以て、使役するこそ、彼等自身に利益ありとするものなるか。武藤氏の溫情主義にして、斯の如きものならんか、溫情主義を口にせずして、勞働者を虐遇する他の資本家に比較し、心事頗る險惡なりとす可し。氏が勞働會議に於て、勞働改善の原則を我國に適用することに反對し、妨害するの態度に徵せんか、吾人は氏の資本家氣質を以て、極めて醜陋なりとせざるを得ず。

失業問題と產婦保護問題とに就ては、論ず可きもの多からず。我國現行の工場法規に於ける產婦の保護は極めて貧弱な

り。國際勞働會議の決議に依て、我國の法制の改善せらるゝは喜ぶ可しとす。失業者に關する協約に就ては、我國の如き東洋に偏在する島國の地位を以てしては、之を如何ともする能はず。唯我國に於ける失業問題を對外的關係に依て、解決するの方法としては、外國をして我國移住民の入國に對する制限を撤去せしむるを以て、極めて必要なりとす。然も我國は此點に於て、勞働大會に於て、果して幾何の努力を爲したるや。伊太利政府代表者は失業者對應策として、移民問題の解決を求めたるも、日本代表者は日米兩國間の國交に顧み、一切移民問題に觸れざることに決定したりと傳へられたり。而して日伊兩國共同の提議として、委員會に於て可決せられたるは、單に「他國に居る勞働者及び其家族は其國人と同等の權利、特權、社會的幸福、教育、集會、結社に關する法律上の保護を享くる權利を有す可きものとす」と云ふに止まり、入國の自由に對する制限を撤廢したるものに非ず、然らば其價値の如き、知る可きなり。我國が勞働條件の改善を容るゝに吝なる以上は、人種差別の撤廢は義理にも之を主張するを得べきに非ず。我國の代表者が移民問題に就て、默したるもの亦已むを得ずとす可し。

結論

余は結論として言ふ可きもの多くを有せず。唯從來勞働問題の解決を怠り、勞働政策の確立を不問に付したる日本は其代表者を勞働會議に送りて、能く何ものを得たるか。日本の政府竝に資本家の代表者が、事毎に固陋の意見を懷き、世界の大勢に順應する所以を知らず、然も大勢に促されて、勞働改善原則の或るものを承認せざる可からざるに至り、又一方に外國に笑を買へるが如きは最も醜陋なりとす可し。彼の佛國勞働代表ドルネイ氏が八時間勞働制の無留保實行を主張するに當り、日本政府が全然資本家に依て、操縱せられ、勞働組合の組織を妨害し、八時間制運動を阻害しつゝあることを訴へりと云ふが如き、ジユオー氏が日本政府が勞働組合の組織を認めざるは、講和會議に於ける勞働規約の精神に反するものなるを以て、警告を發す可しと提議したるが如き、將た又白耳義の勞働代表メルセンス氏が「日本政府は速に勞働組合を組織するの自由を日本勞働者に與へざる可からず。我等外國勞働代表は此決議を會議の議事錄に留め置かんことを提議す」るの決議案を提出し、多數の贊成を得て、其成立を見たりと云ふが如き、日本として極めて不名譽の沙汰なりとせざる可からず。平生勞働者の團結權を蹂躪したる我國政府の代表者、勞働者を奴隷視する資本家の代表者勞働組合と沒交渉の間に、否勞働團體に依て、極度の反對を

受けつゝ、尙ほ選に當れる勞働代表者は共に市朝に鞭たるゝの感なきを得ざりしならん。即ち我國の政府が內國の識者に依て非難せられ、更に國際勞働會議の席上に於て外國代表者の糺彈を蒙り、或る場合には犯罪人が裁判官に憐憫を乞ふと同樣の態度に出でたるは、吾人の最も不快とする所なり。

我國の政府が始め八時間勞働制に對して反對したる理由より推すときは、婦人夜業の廢止に對しても亦之に反對し、少なくとも工場法の現行規定に認められたると同一程度の猶豫を要求す可き筈なるに拘はらず、前者に反對したる政府並に資本家代表者が後者に就ては、之を承認するに、吝ならざりしは何故なるか。一方に保守を極めたる彼等の態度が他の一方に聊か進取の認む可きものある撞着は如何にして之を說明するを得るか。思ふに政府代表者が當初政府より受けたる命令は夜業の禁止に承諾を表すものに非ざりしなる可く、資本家代表の如き、實に夜業の禁止に反對することを以て、自家使命の一なりとしたるは、著明の事實なり。然も彼等が米國に到着し、勞働會議に出席して、四圍の情形を見るや、各國代表者は自己に比較すれば、遙に進步せる意見を有し、日本が八時間勞働制の適用に反對し、自ら特殊國の一たらんとするの提議に向つて、非難を加ふるの甚だしきものあり。此上に夜業禁止にも反對して、法外なる猶豫期限の承認を要求し、可憐なる婦女子を驅つて、深夜に從事せしむるの意を示さんか、如何なる非難の殺到し來るものあるやも測り知る可からず。茲に於てか、彼等は八時間勞働制と夜業禁止と孰れが我國の產業界に重大なる影響を及ぼすやを比較し、其一を取つて、他の一を棄つるの地位に陷り、結局八時間勞働制には飽くまでも除外猶豫を求むる代りに、夜業禁止に就ては列國並みの方針に出づることの決心に出でたるものとす可し。彼等は之を以て國際勞働會議に於て、一個の掛引を爲したるものとし、夜業禁止の規約に加入して、夜業を禁止するの已むを得ざるに至るも、八時間勞働制に對する除外國たるを以て、策の得たるものとするや、疑を容れずと雖も、八時間勞働制に對する除外の誇るに足らざる所以は前論に依て、明白なる可し。吾輩をして彼等の態度に忌憚なき批判を下さしめんか、彼等は緣日商人と異ならず。薄暮行人の店頭を過ぎる者多き時には、意氣昂りて、商品の代價を高くして、利欲を貪らんとすれども、夜漸く深くして歸路に就く者の多きに至るや、遽に代價を引下げて、投賣りを始むるを常とす。我國の代表者が始めは八時間勞働にも夜業禁止にも、反對しながら、後に夜業禁止に贊成したるが如き、恰も掛引を生命とする緣日商人の心事を暴露したるものなるのみ。

勞働會議の席上に於て、一國の勞働代表者が活躍す可きは、當然の數にして、外國の勞働代表者の如き、盛に言論を縱にしたるが如し。此間に於て我國の勞働代表者桝本氏は如何なる行動を爲したるか。氏に對しては、世間に於て政府並に資本家の代辯者なるが如くに、解したる者少からざりしが如くなれども、華聖頓に於ては、必ずしも然らず、政府並に資本家と反對の行動に出づるを憚らず、殊に氏の顧問武藤七郎氏の活動著しきものありしが如し。唯外國の勞働代表者が桝本氏に對して、多少の反感と疑惑とを有したるは、爭ふ可からざる所にして、斯くて氏の行動の自由を妨げたるものなしとせざる可し。此點より云ふも、勞働代表の選出は飽くまでも之を公正にせざる可からず。之を公正にして、內外國の勞働者互に協調せんか、勞働會議を通じて、勞働問題に就て頑冥なる意見を有する我國の政府に頂門の一針を下すを得べし。

勞働會議に對しては望む所多からず。唯此會議に取る可きものありとすれば、其勞働問題に就て、教育的效果を及ぼすの點に在りとす可し。我國の勞働會議關係者は會議に於ける空氣を呼吸して、能く平生の偏見や退嬰的意見を一掃し、世界に釀成せられつゝある新機運に觸るゝを得たりや否や。我國當面の勞働立法や、勞働運動の趨勢を國際會議に依て、指導せられ、强要せらるゝが如きは、吾人の最も不快とする所なり。邦人たるもの、其官界に居ると、民間に在るとを問はず、勞働問題に臨むに、熱誠と眞面目とを以てし、自發的に勞働問題の解決に力を致さゞる可からず。永く我國をして今日の如き蒙昧なる狀態に居らしめ、官權の專恣資本家の跋扈を許すが如き、吾人の到底忍ぶ能はざる所なり。今や勞働運動は國際的と爲り、我國獨り此大勢に對して、孤立するを得べからず。今回の勞働會議に於て、議決せられたる勞働時間、超過時間の制限、超過時間に對する割增賃銀の支拂、婦人並に幼年勞働者夜業の禁止、婦人の姙娠分娩期に於ける保護等は總て之れ工場法に規定するを要し、隨て現行工場法は殆ど破壞せらるゝの運命を免かれず。政府が勞働運動を抑壓するの目的を以て、重寶視する治安警察法第十七條の如きも、列國に對する體面上、到底廢止せらる可く、隨て勞働運動の自由も亦認めらるゝに至る可し。內に强くし、外に弱きは、我國政府當局者の病弊にして、國民の能く知悉する所なり。吾輩が千言萬語、當局者を鞭韃して、勞働政策を改進せしめんとするも、容易に非ず。然も一度び勞働會議の如き國際的團體の決議に會せんか、政府は總て之を容れて、只管後れざるを期するものゝ如し。茲に於てか政府を動かすに、外力を用ゆるに至るは、自然の勢にして、思ふに將來に於ける我國の

勞働運動は對外的に發展するに至らざるなきか、世人の攻究を要する所なり。

以上の議論を爲すに當り、事實に關する材料は專ら東京日々、東京朝日兩新聞に掲載せられたる華盛頓特電に取れり。兩新聞が比較的詳密なる電報を公にして、吾人研究者に大なる便宜を供したるは、余の深く喜ぶ所なり。但し電報は頗る遲着し、本論の稿を脱したる十一月二十八日には、同月二十一日の發電に係る報道に接するに止まれり。隨て其後に起れる事實に依て、上記の議論に如何なる變更を加ふるを要するやは、余の豫測するに苦む所なり。

本號に掲載せらるべき筈なりし

支那に於ける日・英・米三國關係の現在及將來

諸家

は頁數超過の爲め次號に廻はすの止むなきに至れり。此旨執筆せられたる諸家並びに讀者諸君に謝す。（編者しるす）

國家生活の一新

法學博士 吉野作造

(一) 舊時代に於ける國家生活の理想

――國家の偉大――富國强兵――偉大觀の變遷――維新後の國是――

國家が其一員たる國民に向つて何を要求するか、また何を要求したか、他の言葉を以てすれば國家の經營の爲にする我々の生活――國家生活――に於て我々の達成せんとする目的は何か。云ふ迄もなく我々の生活には色々の方面がある。其中國民としての生活――國家生活に於て、我々は何を目的として活動して居つたか、又何を目的として活動すべきであるか。此問題に對して、一番包括的な、一番無難な答案は「國家の偉大」といふ事である。國家の我々に要求する所も之れであり、我々國民の活動の理想的目標も之れであるといふに於て何人も異論はあるまい。只此問題を更に一歩進めて、如何にして國家の偉大を計る事が出來るか。又何うする事が國家の偉大を計る所以になるかと問ふに及んでいろ／＼說が分れ得る。

「國家の偉大」と云ふ抽象的名詞に具體的內容を盛らうとする段になると、各人各様の意見がある。或人は八八艦隊を一刻も早く完成することだと云ふだらう。或人は東洋の覇者たるの實を擧ぐるに足る丈けの十分の陸軍を有つことだと云ふだらう。產業の一層大なる發達によつて經濟的並びに財政的の基礎を確立することだと云ふ人もあらうし、學術技藝の進歩を計る事だと云ひ、又は宗教道德の振興を計る事だと云ふ人もあらう。而して國家を代表し又直接に國家經營の任に當る當局者に向ひ、若くは自ら國家の爲めに心身を勞して居ると稱する所謂有識階級に向て、何を以て國家の偉大を計らんとするやと問ふならば、彼等は必ずや陸海軍、產業、學藝、宗教、道德以上すべての方面に於て國民全體の能力を開展することによつて之を期すると答ふるであらう。口ではさう云ふても實際彼等は以上すべての方面に亙つて國民的能力の開展を忠實に計つて居つたかと云へ

ば、何人も其然らざるを見るに苦しまない。官民の何れを問はず、今日までの國家經營の方針や國家の爲めにする國民全體の努力は、決して以上各方面に亙る有機的關係を考察し其上に統一的の政策を施した形跡は更に無い。極端に云へば、さうしようと考へた事すら無いのではないかと疑はれる。之を他の半面から云へば今日までの我々の國家生活に於ては、疑もなく或何物かが或る他の何物かの爲に犧牲にされて居つた。少くとも或る何物かが或る他の何物かの手段として辛うじて其維持を許されて居つたと見ねばならぬものがある。さういふ偏頗の事をしたのかといへば當局者などは否と答ふに極つて居る。毎年の吉例として議會の開會の際に當局者の朗讀する施政方針に明かなるが如く、政府では國民生活のすべての方面に亙つて遺憾なき總花を振り撒いた譯になつて居る。然し實際は決して此理想通りになつて居ない。一つの例を國民教育の制度に取つて云ふならば、制度の上では修身とか倫理とかいふものを一番大事な課目として居るに拘らず、實際に於て此課目は之も制度上丈け重要視せらるゝ體操と共に、最も輕蔑せられて居るではないか。體操と修身の不成績は兒童本人は勿論、父兄も更に之を苦としない。或學校などに於ては他の高等な學校の入學試驗が迫ると、其上級生に向つて體操と倫理の時間を潰して數學や英語などをやらして居ると聞いて居る。此等は極めて小部分に於ける一つの例であるが、斯う云つたやうな例は他に幾許もある。否、比々皆然りと云つていゝ。而して此事は何を意味するかと云へば、今日の國家が國民のすべての能力を要求して居るのではなくして、或一方のみを特に求めて居るといふ事實を語るものではないか。他の言葉を以て云へば、國民の能力を或偏つた方面に集中せしめ、又は其偏つた方面に國民的能力の主たる活動を期待し、更に進んで斯くの如き特殊の方面の活動に適するものを人材として特に要求すると云ふ風潮を語るものではないか。斯くして近代に於ける我國の國民個々の活動に期待する所のものは、之を國民の方から觀れば、彼等の國家生活の理想とする所のものは、少くとも主たる目標とせられたものは、或偏つた一方であると云はなければならない。

然らば其偏つた一面、而して之が爲に他の多くの方面が犧牲とせられ、又手段とせられたものは何かと云へば、一言に約して之を富國强兵の理想と云ふ事が出來ようと思ふ。金と力との充實を圖る事である。國家の物質的勢力の振興を圖る事である。此外には無いとは云はないが、現に今之が主たる目標であつて、之が爲めに如何に他の多くの方面が犧牲に供せられたかは、深く問はずして讀者の諒とせらるゝ所であらう。人によつて

は國富めば兵弱からざるを得ずといふ所から、貧國強兵の理想を取るべしと云ふものもあるが、併し故らに貧國を理想とするとまで極言したものはない。兎に角近代我國の國家經營の方針が、如何にすれば産業の振興を圖り得るか、如何にすれば軍國的設備を完全ならしめ得るかと云ふ方面に殆んど其全力を注いだ事は疑を容れない。之が「國家の偉大」を圖る所以であると信じて居る人の少からざるは云ふ迄もないが、よしんば意識的に其處まで考へて居なくとも、勞働者が勞資關係の革正を求むれば、一國産業の衰替を如何せんといひ、又軍備制限の聲を聞いては、斯くては日本は三等國、四等國に落ちるの虞ありなどゝ説くものあるは、皆暗に富國強兵の理想に立つものなるを語るものである。

予輩が玆に國家生活の一新を説く所以は、右の富國強兵の理想を以て正に舊時代の遺物たらんとすと觀るからである。戰爭以前までは之でよかつたとは云はないが、兎も角も之れでやつて來た。又之を捨てゝは世界の競爭場裡に立つことも出來なかつた。けれども今度の戰爭の結果として國家生活の此理想は遂に玆に一新せざるを得ざるに至つたと予輩は認むるのである。

斯う云ふと國家生活の理想はさう急に變るものではない。少くとも富國強兵の理想の如きは國家の生命の物質的條件であり、而して生存競爭の絶滅せざる以上此點に努力することは永久に變るべき道理はないと云ふ。併し此説には其儘贊同することは出來ない。無論國家の永い生命と云ふ點から觀れば、其物質的基礎ゝ固たるの必要あるは素より云ふ迄もないけれども、之が意識的に國家政策の上に現はるゝのは、主として外國との交渉が開けた時に限るので、昔のやうに島國として世界と全然沒交渉な孤立生活を營むで居つた時代には、國家內部の各階級の生存競爭、爭と云ふやうな事はあつたけれども、國家全體として富國強兵を理想とした事はない。而して我國の歴史を讀むと、大體は孤立沒交渉の生活であり、稀に支那、朝鮮と交渉を開いた時代もあるが、此等外國交際の刺戟によつて促がされた當時の所謂國民的活動は、常に必ずしも富國強兵といふ方面に奔つたのではない。予輩の觀る所にして誤らずんば、我日本民族は斯る場合に常に其當時の世界に於て國家偉大の要素として最も重んぜられたものを早く着眼して、何よりも先きに之を我物とせん事を努めたと考ふるのである。或國が古來高尙な固有な文明を有つてゐなかつた事は隱すことは出來ない。始めて朝鮮と交通し、初めて支那と交通した時に、我々の祖先は隣邦の偉大に對

常に多少の壓迫を感ぜずには居られなかつた。而して隣邦の偉大に眩惑して文化的奴隷の境遇に陥るのは弱少民族の常であるが、我々の祖先は毎に負けじ魂を振ひ起して、對手の有つて居る丈けのものは我も亦之を具備して、對等の地位を確實に主張せんと努めた事は、我々の密かに誇る所であり、又感謝する所である。そこで我大和民族は金と力とを有つて國家の偉大を表徴する時代には之によつて一等國たらんと努めるが、又文物制度を以て國の大小を定めた時代には、即ち之によつて我も亦高級の國たらんと努めた。其努むる所の方面の何たるやは時代によつて同じくない、同じきは只各時代に於て其當時の世界が最も重きを置いた方面に專ら力を注いだと云ふ點である。支那と始めて交際した奈良朝平安朝時代に於て、大和民族の負けじ魂が專ら力を注いだ方面が支那の制度文物の摸倣であつた事は云ふ迄もない。支那は如何に大國でも武力を以て臨んだ所があの頃としては何にもならない。彼が傲然として我を眼下に見下したのは燦然たる文物制度を以てゞある。支那に使するものが如何に彼の剛岸に憤慨したかは、明かに歴史の我々に教ふる所である。推古天皇が日出る所の天子日沒する所の天子に書を送ると書いたのも、畢竟對等の地位を主張すると云ふ一種の敵愾心から起つたものと云はれて居る。當時の人は盛に支那文を習つた。支那の制度を摸倣し又支那に倣つて我國の過去を飾る爲めに國史を修めた。其努力の結果はやがて支那人に劣らざる立派な詩文を書き得るものも出來れば、又大寶令の如きものも出來た。態々日本の二字を冠した日本書紀などは、實は我々にも斯う云ふ立派な過去があると云ふ事を支那人に見せる爲めに書かれたと說く人もある。何れにしても當時の識者が新らしい國際關係に入つて國家の偉大を主張するが爲めに如何に全力を擧げて文化開發の爲めに盡したかと云ふ事が分る。之を以て觀ても國際關係に於て努力する所のものは、如何なる時代でも富國強兵に限ると云ふべきでない事が明かであらう。

尤も現代のやうな國と國との距離の極めて近くなつた時代、而かも生存競爭の激烈になつた時代に於ては、富國強兵が主なる着眼點とならざるを得ない。而して今日のやうに時勢に執着するものは富國　兵以外に大事なものが無いやうに考へるけれども、併し我々は今日の時勢を以てすべてを律してはいけない。近代の日本は時勢に順應せんが爲めに、富國強兵の爲めに努力したといふのはいゝ。富國強兵が永久に國際交通に於ける國家的活動の目標でなければならないといふのが誤りである。國家的活動の目標は時によつて變り得る。變らざるものは只國民の順應性のみである。而して此順應性が近代の日本をして富

國强兵の理想に奔らしめた如く、更に新しい時代に進んでは自ら又他の方向を取らしめなければならない。そこで問題は此富國强兵の理想が戰後に於ても尙繼續せらるべきものであるかどうかと云ふ事になる。

現代の日本を作つた先輩の政治家、即ち維新の元勳並びに其直後の門下生が、如何に富國强兵の理想に執着したかは、彼等が初めて見た當時の世界が、如何なる形勢にあつたかを考へれば直ぐ分る。明治元年は西洋の曆で一八六八年に當る。普墺戰爭が過ぎて普佛戰爭が準備されつゝあつた時ではないか。即ち外交界に權謀術數の最も盛んに行はれ、虎視眈々として隙あらば乘ぜんと各國皆爪牙を磨いで居つた時代である。金なく力なきものは、よし他に如何なる文化の寶を蓄へても、國際關係に於て殆んど何等の發言權を認められない。加之、やがて普佛戰爭に於ける獨逸の勝利は益々富國强兵の福音を强め、軍國的帝國主義の流行を盛ならしめたから、之を第一印象として受け入れた我國先輩政治家の幼稚なる頭腦が、國際關係と云ふものについてどう云ふ思想を作つたかは略ぼ想像することが出來るであらう。

單に之ばかりではない。西洋諸國を貪婪飽くなき怖るべき侵略者と觀る考は已に幕末の所謂識者間に通有の觀念であつた。民衆の大部は勿論、武士階級に屬する者と雖も多數は西洋の事を知らなかつた。中には三尺の秋水以て夷狄を攘ふに足ると信ずるものすらあつた。數艘の漁船に薪を山と積み、敵船に近き自ら火を放つて風上より押し寄せ、以て黑船を火責にし得べしと眞面目に計畫した時代である。けれども少數の識者は乏しき材料によつて西洋の文物に接し、殊に其物質的文明の偉大なる進步に驚嘆して殆んど爲す所を知らざる有樣であつた。偶々露艦の北海に遊弋するの報に接し、又米艦の堂々と浦賀に來つて通商を求むるを聞くに及んで、彼等は其裏面の異圖測るべからざるもののあるを警告して止まなかつた。此考が餘程維新當時の先輩の識者に影響して居る。表面對外硬を裝うて內實案外な恐外病に囚へられて居るのは、恐らく一つには此邊に原因があると思はるゝ。そして彼等が自ら眼の當り日本新政府の責任者として西洋諸國と折衝する段になると、當時の世界の形勢が前述べた通である所から、益々富國强兵の大事な事を痛感せざるを得ない。固より彼等は其他の方面に於てもいろ〳〵西洋文物の壓迫を感じたには相違ない。けれども何となく我々の輕んぜらるゝ所以、而して若し之を備へれば優に重きをなし得たらうと云ふ點を專ら富國强兵に認めた事は爭ふことを得ない。斯くし

て彼等は新日本の建設者として固より各方面に熱心な努力を注いだのではあるけれども、併し主として力を注いだ點が富國强兵であること、又此爲めには多少他のものを犠牲にすることを厭はなかつた事も亦爭ふことを得ない。若し新日本の政治的建設が富國强兵一點張りの極端な努力から少しでも免れた點がありとすれば、そは僅かに高明達識な故伊藤公あるが爲めに過ぎない。

富國强兵を以て國家生活の主要の目標とし、而も此點に於て足らざるを感ずる國民の動もすれば陷る弊害は、强者に對する猜疑、嫉視である。更に進んで一種の排外思想である。斯う云ふ考が官民を通じて如何に熾烈であつたかは、明治の初め廿餘年間の歴史を回顧すれば分る。自信の無い政治家を集めた政府は外交問題については必要以上に軟弱である。而して彼等は自己の責任を外國の强嚇に轉嫁して國民を瞞着するを常とする。(斯くの如きは今日の支那に於て我々の觀る所である。)さらぬだに外國の事といへば猜疑心に富む國民は、直ちに昂奮して徒らに呪咀の惡聲を放ち、果ては器物を毀して故なく外人に侮辱を與ふるやうなものも現はれる。古くは生麥事件、更に後れては大津事件の如きは皆此類である。此種の罪惡に對して、國民は心中密かに痛快を感じて居つたに觀ても、當時の對外氣分は分る。予自身の少年時代の記憶を回想しても、小學一二年の兒童に「萬國公法ありとても」弱肉强食の世の中で我々は一刻も油斷が出來ないとか、「三千餘萬の兄弟共よ」外國の侵略に對して大いに我國を護らなければならないと云ふやうな唱歌を盛んに數へたのみならず、時々縣廳から派遣さるゝ巡回講演などで我々の聽かされた題目は、西洋人の怖るべきことや、元寇の亂の時のやうな勢で彼等を驅逐せねばならぬと云ふやうな事である。今から考へれば亂暴極る教育法であつたと思ふが、當時の先覺識者が之によつて初めて國運の勃興を期し得べしと善意に考へた事は疑を容れない。此點に於て當時の日本の國民思想は恰度今日の支那に髣髴たるものがある。何れにせよ此等の現象は、外國文物の壓迫を專ら富國强兵の方面に於てのみ考へた事を語るものであつて、他の一面に於て又先輩の政治家をして專ら富國强兵を念とせしめた事を明かにするものである。

今から觀れば間違つた考ではあるけれども、兎に角此等の先輩の苦心は相當に成績を擧げた。彼等の苦心は日清、日露の兩戰役に亘る十年間の活躍時代に於て遺憾なく酬いられた。初めて支那と戰爭をした時、彼等はあれ程自分を强くなつたとは考へなかつたらしい。次いで北淸事件に於て列國と並んで拔群の武勳を示した。やがて世界の恐怖たる露西亞と戰ふに及んで初めて力の自信が出來た。富國の點に於て未だしとする所ありとす

るゝ、強兵の點に於ては最早や世界有數の軍國と自負してい
る。斯うなると自然心に餘裕も出來て昔のやうに徒らに外國を
呪はない。徒らに外人を侮辱して得意とするやうな陋風が無く
なつた事は云ふ迄もないが、小學校の唱歌にした所が、花が咲
いたとか月が出たとか、兎と龜が競走したとか極めてのんびり
とした事に代へられて了つた。尤も一部の間には外國殊に特別
の關係ある強國(例へば米國)に向つて廿年前のやうな一種猜疑
嫉視の眼を放つ僻見者流もあるけれども、大體に於て今日の日
本人は弱い者が強い者を呪ふと云ふ態度より免れた事丈けは疑
が無い。併しそれだけ又他の一面に於て我々には富國強兵の目
的の達成に於て成功したと云ふ自信が出來た。見様によつては
自惚れに過ぎる程の自信が出來た。此點に於て恰度ビスマルク
の成功が益々獨逸をして侵略的軍國主義に走らしめたやうに、
又成金が非成功によつて惡辣陰險な掛引を得意氣に誇るやう
に、富國強兵を以て益々國家政策の動かすべからざる根柢と信
ずるやうになつた。此事は殊に日露戰爭後我國に於て金持と軍
人並びに彼等の偏見が如何に社會の上下を風靡して居るかを觀
れば深く問はずして明かであらう。

併し此風潮は獨り日本ばかりではない。西洋諸國では今日日
本を見ても兎も角も一等國の班に列せしめて居るが、一體日本が何を
以て此待遇を受けて居るかを顧るならば、蓋し思ひ半ばに過ぎ
る者があらう。殘念ながら我々は一般文化の發達に於て尚遙か
に彼等に及ばない。而かも尚彼等が我を一等國として取扱ひ、我
亦甘んじて此待遇を受くる所以のものは、所謂富國強兵と云ふ
方面に於て多少恃む所あるが爲めではないか。然らば即ち今日
世界が國の等級を分つ標準として居る者は、一般文化ではなく
して富國強兵の點であるといはなければならない。現に我國で
も軍備縮少論に對して、之に手を着けては我國の一等國たる所
以のものはなくなるからと云ふ丈けの理由で之に反對した將軍
もあつた。

我々は強いて二等國三等國に落ちたくはない。一等國の地位
を永く保つ爲めに富國強兵が必要とあらば、此大勢に順應する
とに必ずしも異議は無い。けれどもよく考へて見ると此富國強
兵の實すらが又他の一般文化の開發に根柢するものであり、從
つて前者の爲めに後者を犧牲にするの謬なるを思はざるを得な
い。そこに富國強兵一點張りの方針に大いに異議を唱へざるを
得ないのであるが、今や我々は今度の戰爭の結果として富國強
兵を唯一若くは主要の理想とした政治的觀念が變りつゝあるこ
とを認むるものである。國際關係に於て何を一番大切とするか
の目標の不變なるものにあらざる事は前述べた通りである。

今や我々は戰後の新らしき世界に入らんとして永き惡夢より覺め、玆に國家生活の行程を全然一新せんとして居る。

(二) 戰爭の影響としての道義的醒覺

——從來の戰爭——戰爭觀の一變——戰爭目的の普遍化——勞働者勢力の增進——戰爭に對する道義的支配の發達

國際紛爭の解決を戰爭に俟つと云ふ事はどう考へても「道理の支配」と全然相容れないものであることは疑ひない。泥棒の仲間にも一種の道徳的規約が存する如く、戰爭にも戰時公法の規定はあるが。之すらもいろ〱の口實の下に蹂躪せらるゝことが多い。我々は戰時公法の發達に於て道義的支配の要求が深く人心に根柢して居ることを認めずに居られないけれども、已に國際紛爭の最後の解決が常に腕力に訴へらるゝの事實ある以上、殘念ながら國際關係の無政府的狀態を承認せざるを得ない。從つて國と國との爭といへば要するに慾の衝突に過ぎない。慾の衝突の眞中に立つて勝者たらんには、少くとも自滅せざらんが爲めには、どうしても富國强兵の實を擧げなければならない。富國强兵は實に國家存立の第一義であつた。そして何か外國と爭ふ事あれば卽ち其蓄ふる所の富と、其養ふ所の力とを以て自己の意思を他國に强制せんとする。對手が聽かなければ卽ち干戈を執つて戰陣の間に見ゆることになる。斯くして一旦戰爭となれば最後まで奮闘してやめない。理が非でも押し通す。而かも一旦劍を拔いた以上は先に求めた所のものが承認された丈けでは戰爭を罷めないので、更に飽く迄突進して侵し得る丈け、掠め得る丈け敵に迫つて我に奪ふ。斯くすることが富國强兵を以て立つ無政府的國際關係に於て各國家の執るべき最善の策であるからである。從つて從來の戰爭に於ては其戰爭の原因となつた當初の目的の何であつたにしろ、兎に角一旦戰爭となつた以上は、一方が他方を終局的に屈服する迄は止めない。死ぬまで戰ふと云ふ點に於て恰度軍鷄の喧嘩のやうなものだ。

一旦戰へばいゝ加減な所では止めないと云ふ丈け、歐羅巴諸國の政治家には其結果の重大なるを顧慮して容易に戰爭を開かないと云ふ用意もある。彼等が自ら緊急した且つ險惡な外交舞臺を作りながら、尙戰爭の勃發を怖れて如何に之を未然に防がんが爲めに彌縫に彌縫を重ねて苦心慘憺したかは、最近の外交史を繙くもの丶明かに知る所である。されば今度の戰爭についても所謂外交通なるものは今度も開戰を見るには至るまいと豫言したものは多かつた。豫言は當らなかつたけれども、當らないのが寧ろ本當の外交通の見識であつたと見てもいゝ。

加之、歐羅巴の人々一般の間には戰爭に對しては我々と全く違つた考を有つて居ることにも注意しなければならない。歐羅巴の人々は近代に於て幾度か戰爭の慘禍を經驗し、爲めに出來るものならば成る丈之を避けたいと云ふ考を有つて居る。一體戰爭と云ふものは之を屢々經驗するものに對して之を避けたいと云ふ考を愈々深からしむる者である。只此點について我々日本人は一種特別の立場にあるが故に、我々の考を以て一般歐羅巴人を忖度することは出來ない。最近代に於て最も屢々戰爭の經驗を積んだものは寧ろ我日本であるが、併し我々のやつた戰爭は日本に於て戰はれたのではない。戰爭は勝つても負けても兎に角戰爭となつた箇所に於ては或は家屋田畑が荒され、或は少くとも一時他邦に流寓する憂目を見て隨分苦い思をさせられるものであるが、最近日本の鬪つた戰爭はいはゞ他人の家へ行つて喧嘩したやうなものであつて、之が爲めに障子、唐紙が倒れたとか、又、瓦斯、電燈や茶碗や土瓶が壞れたとか云ふ滲憺たる光景の被害者は朝鮮人や支那人であつて、我々日本人は之を想像することすら怠つて獨り戰爭の勝利、國力の發展、總じて之を云へば徒らに前途の光明に醉ふばかりであつた。幸か不幸か、我々のやつた戰爭は皆此種類のものであつたから、度重ねた割に戰爭の慘禍に對する深刻な經驗はない。否、兎もすれば戰爭は面白いものと云ふやうな上つ調子の考に刺戟されて、西比利亞の出兵などゝ云へば直ぐに「よからう」と云ふやうな氣分になる。好戰國民と云ふ批評は誣妄としても、少くとも戰爭に一種の興味を有つと云はれては一寸辯解の辭に窮する。而して此氣分から推して西洋の人も何かと云へば直ぐ兵を動かして國力の膨脹を計りたがると思ふならば之れ大なる誤りである。此點に呉々も讀者の注意を喚起して置きたい。尙西洋には我々の想像以上に一種の非戰氣分――何とかして戰爭を未發に防止したいと云ふ氣分に富んで居るかは、戰爭の度毎に生れる所謂戰爭文學等を見れば分ることを一言して置く。

であるから歐羅巴では大抵の事ならば戰爭を避ける。殊に近代の樣に歐洲の六大强國が二大團體に分れて相對峙して居ると云ふやうな形勢の下に於ては、其結果の容易に測るべからざる者あるを顧慮して、避けられる丈けは戰爭を避けようといふ考に强く支配されてあつた。而してそれにも拘らず今度の戰爭の勃發を見たとすれば、それはよく〳〵の事であると見なければならない。不斷隱忍に隱忍を重ねて居つた時、一旦破裂すればもういゝ加減な所では止めない。それ丈け又戰爭に大いなる熱を有つのも當然の道理であるから普段の非戰氣分が一轉して强烈なる戰爭氣分に變つたのも亦怪むに足らない。即ち彼等は開戰以

前の外交的苦心と同じ程度の熱度を以て戰爭の遂行に從事し、最後の血の一滴を流すまで飽くまで奮鬪せんとするの志を固めたのである。

開戰の當初羅馬法王や亞米利加の大統領は頻りに調停を試み、此兩者が調停者として名乘りを擧ぐるは怪しむに足らないが、結局何の役にも立たないと云ふ事も亦明かであつた。何故なれば所謂公平なる第三者が相當の條件を以て「いゝ加減に罷めないか」と云つてオイソレと之に應じ得らるゝ位なら、彼等は初めから戰爭をやらなかつた筈であるからである。避けられるものなら避けようと云ふので、あらゆる手段を講じて見た。にも拘はらず、遂に戰爭の勃發を見るに至つたとする以上、最早や大抵の事で止める譯に行かない。法王の調停も大統領の仲介も實際上何等の効果を見なかつた所以である。

そこで最初世人は此戰爭は双方共に最後まで戰ふ決心であると觀た。尤も何れの一方がどの位の時期で全然他方を屈服するかについては觀る人によつて說を同じうしなかつた。瞬く間に獨逸が勝つと云つたものもある。聯合軍の勝利を信ずるものは比較的に永い將來を期したが、それでも長くて三年位と見た。而して段々戰爭の進むに從ひ、双方容易に屈するの色なく、漸次持久的形勢を現出するに及んで結局五年か十年の後に双方共倒れになるのではあるまいかと見る者さへあつた。「共疲れの戰爭」（ウォア・オブ・エキゾースション）と云ふ言葉は屢々新聞雜誌にあらはれて居る。要するに此戰爭は慾の衝突である。一旦戰爭となつた以上は道理の文句を云ふ餘地は無い。第三者の調停に耳を傾けず、最後まで戰ふと云ふ運命に置かれてあるのだから、一方が他方を全然屈服するにあらずんば、双方共々精も根も盡き果てるまで平和關係の恢復する見込は無い。斯う云ふのが在來の考に基く今度の戰爭の一般の見方であつた。

扨、始めて見ると戰爭はなか／＼片附かない。遠からず勝つて見せると云ふ豫想の誤りは間も無く悟つたけれども、戰局の限りなく擴大することゝ、戰鬪方法の限りなく深刻を極むることは一々豫想を裏切つて、何時終局を見ることやら丸で見當が附かなくなつた。之と共に民心も段々緊張して來るから意氣は益々昂るけれども、生活の壓迫は日に／＼募る。半年や一年は我慢も出來るが、二年三年となれば奈何ともしようが無くなりさうになる。我々も交戰國の一つではあるが、戰爭の本舞臺の事は到底想像が附かない。敵國の獨墺は云ふ迄もなく、味方の英佛にしても國の大半を擧げて戰爭直接の仕事に當らしめて居ることを思はゞ、僅か數十萬の貔貅を滿洲の野に曝すこと一年に

して內實非常の物質的窮境に陷つた我々としては少し深く反省すれば今度の戰爭が如何に大いなる影響を歐洲の民心に與へたかは多少想像することが出來る筈だとおもへるけれども、不幸にして我同胞は此點に於て、案外鈍感であつたことを惜む。故に我々がボンヤリして居る間に彼の地ではいゝ方面にもわるい方面にも種々深刻なる變動が起りつゝある。之を知らずして漫然戰後世界の新形勢を語ることは出來ない。

今度の戰爭によつて受けた深刻なる經驗から歐洲の人々の熱く〴〵考へたことは、「斯う云ふ苦しみは二度と繰り返し度く無い」と云ふ事である。さればと云つて彼等は決して戰爭に厭きはしない。戰爭氣分も益々緊張して居るが、只之と同時に今度の戰爭で國際紛爭の種は本當の意味に於て根本的に解決して了ひたいと云ふ要求が油然として起つた。否らざれば他日復た此同じ苦しみを繰り返さねばならぬからである。而して今度の戰爭の與ふる苦しみが深刻である丈け、それ丈け右の要求は熱烈を極めざるを得ない。

此要求の根柢をなす所の痛苦は、更に次のやうな事情によつて一層深められる。それは最近交通の發達に伴つて歐洲各國が物質的にも經濟的にも殆んど單一の社會となつたといふ事である。昔は彼我交通の頻繁に行はれて居つたとはいへ、兎に角歐洲は數多き社會的個體の集合であつた。今日は僅かに政治的意義に於て斯くあるに止まり、社會的又經濟的に觀て歐洲は最早や個々の社會的單位の集合では無い。ノルマン・エンゼルは經濟關係の錯綜より觀て戰爭の不可能を書いたが、更に雜婚其他の關係から精神的聯絡の國際的に密接なる狀態を見れば、此間に戰爭の勃發を豫想するは親子兄弟の間に爭鬪を豫想するが如く困難であつた。ノルマン・エンゼルの豫言は見事に外れて茲に戰亂の勃發を見たので、一部の人は彼の立說の根據を疑はんとするけれども、それは誤りである。戰爭の勃發の爲めに如何に歐洲の社會が苦悶懊惱したかは、偶々以て彼の說の誤らざりしを證明するものである。蓋し今日の如く精神的にまた物質的に關係の密接になつた歐洲に於て、戰爭の起るのはいはゞ內亂の如きものである。親子兄弟が敵味方に分れねばならぬと云ふやうな悲劇が珍らしくない。之も我々日本人の想像することが出來ない所であるが、兎に角此方面から來る非常な煩悶が戰爭に伴つて起つた事を見逃してはならない。之が先に述べた戰爭の壓迫と云ふ現象を通して直接に與ふる所の苦痛の感をどれ丈け强めたか分らない。

斯くして歐洲の交戰國民は敵味方共戰爭は飽くまで遣る。けれども此苦しみを二度と繰り返したくはない。故に今度はどう

あつても將來戰爭の種となる樣な問題は根本的に解決しなければならないと云ふ考を深くした。戰爭に於て相當に流行した「戰爭は人生の常態にして、永久の平和は一場の甘夢に過ぎず」と云ふ樣な說を顧る餘裕は無い。出來る出來ぬの論理上の判斷は扨て措て永久平和に對する熱情は抑へ難き彼等の要求となつた。

斯くして茲に一つの新しい問題が起つた。それは戰爭の根本的解決とは如何と云ふ問題である。他の言葉を以ていへば、從來の所謂根本的解決方法は果して本當の根本的解決たりや否やと云ふ問題である。

從來戰爭の根本的解決と認め來つたものは何か。戰爭は力爭である。腕力の絕對的勝利は即ち其根本的解決である。双方共疲れの結果止むなく第三者の調停に聽いて、不得要領の講和を締結するは爭端を他日に貽すを常とし、從つて敵味方共に之を以て本當の平和克復を見たと考へないことは云ふ迄もない。然らば一方が全然他方を屈服し了れば之で本當の解決を告げたのかと云ふに、成程目前の戰爭は之で終つたと云ふに妨げなきも、今度の場合の如く二度と同じ苦しみを繰り返したくないと云ふ永久平和の熱烈なる要求から觀れば、どうしても之を根本的解決として承認することは出來ない。何故なればり盡きて已むを得ず負けたものは所謂臥薪嘗膽の隱忍に内心滿腹の憤激を躍らせ、機を見て他日の復讐を思ふべきを以てゞある。然らば從來の解決方法は之れ眞の解決にあらずして、寧ろ第二の戰爭を誘發するものに外ならない。斯くして歐洲の民心は其深刻なる經驗の結果、從來の考へ方に疑を懸け、戰爭の根本的解決として從來とは全く違つた方法を求めねばならぬ必要を感じた。意識すると意識せざるとを問はず、力爭の勝利のみによつて安んずべからずとするの考は、戰後一兩年の頃から段々强くなつたやうに考へらるゝのである。

力を以て根本的解決の要素とすべからずとせば、之に代つて當然考へらるべきものは何か。云ふ迄もなく、それは「道義」で無ければならない。尤も斯く云ふと、道義でさばきが附かなかつたから腕力に訴へることになつたのではないかと云ふ人もあらう。成程其通りである。道義で最後のさばきを附けやうと云ふ要求は昔からあつたけれども、實際の場合になると、腕力にはかなはない。けれども腕力の横行を許しては我々の生活が立ち行かないから、そこで、段々我々は我々の力を組織立てゝ道義を後援とすることにした。今日我々の社會生活の如何に多くの方面に於て、道義が社會力を背景として一種犯すべからざる制裁力となつて居るかを觀ば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。而して抽象的の道德的原理を一種の社會的制裁力たらしむる所以のもの

は我々の熱烈なる共同的要求にある。而して此共同的要求が十九世紀百年間の歴史の上に人類の幸福に資すべき幾多のよき仕事を成し遂げたが、只國際關係の方面に於ては或る特別の理由によつて(此事は後に說く)十分なる制裁力を立て得なかつた。そこで國際關係は無政府狀態に陷り、すべての紛爭は腕力に最後の解決を求むることゝなつたけれども、併し之が國際關係の永久不變の姿では無い。人によつては國と國との關係は人と人との關係と其本質を異にし、法律と道德とによつて支配さるべきものに非ずなど云ふものもあるけれども、之には何の學問上の根據もない。而して斯くの如き狀態が實に百年の長きに亙つて近代世界の人心を苦しめたのであつたが、殊に今度の戰爭によつて遂に斯くあらしむべからずとするの熱烈なる要求が最高潮に達し、玆に國際關係を支配すべき一大制裁力としての國際的道義を確立せんとするの風潮が起つたのである。曲りなりにも國際聯盟なるものゝ出來たのも畢竟此結果ではないか。從つて道義でさばきの附かなかつた戰爭の解決を更に腕力の爭から取り上げやうとするのは再び無力無能なものに解決の役目を任かすといふのではない。改めて結束の力を後援として道義の貫徹に集中せんとする所に心情の一變を見なければならない。而して戰爭の與へた經驗の如何に深刻であつたかを考へる時に、我々は容易に此心情の一變を頷くことが出來る。斯くして戰爭未だ闌ならずして交戰國双方の民心に於ける道德的醒覺の第一幕は切り落された。

道德的醒覺は戰爭目的の普遍化と云ふ事からも來た。戰爭目的の普遍化とは戰局の進むにつれ參加國の殖えるに從つて各々特殊の目的を捨てゝ共同の目的を立つるやうになつた事を云ふ。他の方面から云へば形は共同の敵に對する同じ戰爭であつても、其戰爭によつて遂せんとする所の目的の實質が必ずしも同一でない所から、事實上は個々別々の戰爭であつたのを、段々目的を一つにする所からして名實共に同一の戰爭となつたことを意味する。

戰爭勃發の當時は、外交的形勢の當然の結果として英吉利も露西亞も佛蘭西も一齊に起つた。けれども表面の口實は何であるにしろ、英吉利の此戰爭によつて遂せんとする目的は必ずしも露西亞と同一では無い。露西亞佛蘭西も亦然りである。只戰爭遂行上共同動作を必要とするので單獨不講和の條約など云ふものを結んだけれども、實質的に觀れば少くとも當初は英獨の戰爭、佛獨の戰爭、露獨の戰爭と云つた風に個々別々の戰爭の偶然の競合に過ぎなかつた。單獨不講和條約の締結を必要とし

た事が、之れ取りも直さず個々別々の戰爭であることの明白な證據ではないか。何故ならば之れ無くんば我は戰爭の目的を遂したりと稱して脫退するものがあるかも知れないからである。現に我國でも靑島の陷落した以上は速かに單獨和議を講ずべしと主張したものもあつた。後亞米利加が戰爭に參加した時も之を歐洲戰爭に參加したと觀るのは通俗の解釋であつて、米國當局者は我は全然獨特の見地から獨逸と戰爭するものであると云ふ態度を固執し、而かも永く獨逸以外の同盟國に對しては宣戰の布告をしなかつた。故に之を一つの戰爭と觀るのは全然便宜上の器械的觀察に過ぎなかつたのである。けれども段々戰局の進むにつれて、戰爭の這般の意味は何時とはなしに遂に一變せざるを得ない事になつた。

何が此一變を來たした原因かと云ふに主として聯合側が遠巻きに獨逸を屈服するが爲めに、出來る丈け多くの國を味方に引き入れんとした外交的努力である。力を以て敵を屈するの頗る困難なるを見た英佛は、經濟的に敵を孤立せしむる事によつて最後の屈服を見んとした。斯くして世界のあらゆる國を仲間に入れて獨墺との一切の交通を遮斷せんとした。而して此等の國々を仲間に入れる爲めには俺が靑島を取る爲めの戰さに仲間入りして吳れとか、俺がアルサス・ローレンを取る爲めの戰さを援けて吳れとか、又獨領植民地を掠奪する爲めの戰爭に味方して吳れとはいへない。獨墺側と利害關係の交涉ある國を誘ふのなら、勝つた場合に之れ／＼の利益を保障すると云ふ密約で聯結するといふ方法もある。從つて戰爭の初期に於ては共同策戰の聯絡を堅うする爲めに此種の密約の締結せられた事は珍らしくない。日本の講和委員が巴里に於て支那委員の攻擊に對する防禦用として頻りに振り廻した英佛諸國との密約の如きは、此戰爭初期のいはゞ舊時代の遺物である。形式上有効なる條約であるから之を振り廻しても差支ないやうなものゝ、既に戰爭に關する思想の一變した新らしい場面に於て、殆んど道德的權威の認められなかつた事は怪むに足らない。兎に角初めは密約を以て聯絡を取つたが、後には之れでは追ひ附かなくなつた。何故ならば段々味方を多くするに從つて獨逸に何等利益の求むべきもの無いものがあるからである。さうなるとどうしても茲に何人も納得し得る所の抽象的な道義的原則を揭げると云ふで無ければ第三國を誘ふことが出來ない。斯くして戰爭の目的は各國特有のものであつたのが、段々に普遍的の道德主義を立てると云ふ事になつた。否、英佛諸國と雖も初めから國際的正義とか、小國の權利の保護とか云ふやうな原則を揭げないではなかつた。けれども彼等の現實に求めたものは物質上利益に相違な

い。今や彼等は時勢の餘儀ない變遷に迫られて當初の目的を露骨に主張することは出來なくなつた。それでも余外物質的利益を拋棄したのではないけれども、少くとも最初第二第三に置いた抽象的原則の方が最も重要視さるゝことになり、其結果彼等の物質的利益の主張は著しく牽制さるゝ結果を見ることになつた。即ち此現象を簡單な言葉で約言するならば、戰爭の目的は普遍化した、又道徳化したといへる。而して戰爭目的の此變化はまた他の一面に於て個々の戰爭であつたものを單一の戰爭たらしめた。之で我々は今度の戰爭は個別主義より共同主義に變つたと云ふ。自分は自分丈けの目的があるから其要求さへ聽かるれば何時戰爭を罷めるかも分らないと云つて單獨不講和條約加入の勸誘を斷つた米國が、何時の間にやら全交戰國の先頭に起つて講和談判の衝に當り、而かも國際聯盟と云ふ味方の結束を以て講和談判の先決問題とするの態度を執つた事は最も鮮かに此變遷をあらはすものである。

戰爭目的の普遍化が少しでも仲間を多くしようと云ふ英佛側の外交的努力より來る思はざる結果であるが、米國の戰爭參加が此風潮を大いに助けた事はまた云ふ迄もない。何故なれば米國の戰爭參加は全然道徳的にして、而して有力なる米國を最後までの味方としたいと云ふ要求は自ら英佛側の從來の目的をして進んで米國のそれに接近せしめたからである。一體米國は何の爲めに戰爭に參加したか。原因は獨逸潜航艇の無警告擊沈にある。英國を食料責にする外最後の勝利を得る見込の無い困憊の獨逸に取つて、潜航艇政策は必要缺くべからざる者であつたらう。而し此目的の爲めに潜航艇を利用する以上、從來の國際法に從つて一々警告する譯には行かない。各交戰國は潜航艇の襲擊を怖れて商船にまで武裝を加へて居る。ウツカリ警告をすると却つて敵の逆襲に自滅するの外はない。故に無警告擊沈を禁ずるのは取りも直さず潜航艇政策の拋棄を要求すると同じである。そこで獨逸では國家の存亡には代へ難いと云つて此方法を罷めやうとしない。而して之に對する米國の言ひ分は、如何に危急存亡の必要ありといひながら、而も公海に於て故なく無害の第三者を攻擊していゝと云ふ理屈はないと云うて爭ふ。詰り獨逸は必要の前には法律も道徳も顧るを得ずと稱し、米國は渇しても盜泉の水を飲む勿れと要求する。獨逸にとつて如何に苦痛であるにしろ、兎に角米國の獨逸に求むる所は國際的正義の遵奉の外他に何物も無い。世上には之を口實に戰爭して旨く勝てば何が獨逸から取る積りだらうなどゝ疑つたものもあつたが、結局彼が物質的に極めて寡慾恬淡であつた事は講和會議に於ける態度に視ても最早や明白である。此米國の態度が前に述

べた英佛側の外交的努力に基く自然の新狀勢と共に如何に戰爭目的の普遍化道義化を助けたか分らない。

戰爭の目的が利益を離れて或は少くとも利益以上に道義的原則を重んずるやうになれば、其當然の結果として此戰爭の結末も亦道義的原則によつて着けようとする考の起るは云ふを俟たない。講和會議の結果を觀て隨分物質的利益の主張も盛んであつたではないかと反問する人もあらう。過渡の時代に於ては之も致し方がないが戰爭の遂行並びに其結果に於て、從來未だ曾て道義的原則の重要視せられなかつた過去を思へば、今度の戰爭が如何に世界の人の良心を手酷しく鞭撻したかを思はずにゐられない。

　道義的醒覺を促した第三の要素として勞働者の勢力増進を見逃すことは出來ない。最近最も多く戰爭の經驗を積んだものが日本であることは前にも述べたが、其日本で戰爭の度毎に著しく勢力を増すものは金持と軍人とであつた。從つて戰爭は其度毎に富國强兵主義を强むるのである。けれども之は日本の戰爭はまだ／＼國を擧げての所謂乾坤一擲の戰爭でない證據である。戰爭も軍人と金持の力に之れ據るの間は先づ樂なものだ。やがては金力と武力とでは間に合はなくなる。是に於て所謂國民總動員と云ふ現象が文字通りに假借する所なく推し上つて來る。斯うなると戰爭は最早や軍人の仕事でもなければ金持の仕事でもない。否少くとも此等の人の仕事たるよりはより多くの意味に於て一般國民の仕事である。もつと分り易くいへば下級勞働者の仕事であるといはなければならない。是に於て當局者は先に軍人と金持とに頭を下げた如く、今度はまた勞働者の前に膝を屈しなければならない。斯くして戰爭の半ば頃より勞働者の勢力は勃然として高まつた。

　政權が少數者の手にあると戰爭が起り易い。國家の運命を左右する最後の決定權が多數者に歸することが平和確保の一要件であるとは從來多くの學者の認むる所である。從つてデモクラシーは或意味に於て平和主義であるかの如く考へられて居つたが、併し今度の戰爭では民衆も亦時に怒ることがある。怒れば即ち非常な勢を以て戰陣に突進する。デモクラシーは必ずしも平和主義でないと云ふ實例を示した。故に勞働者の擡頭が直ちに平和的風潮の促進を意味すると云ふのは論理上正しくないかも知れない。けれども少くとも今度の戰爭に於ては此兩者の間に一種密接の關係あつた事は疑を容れない。

　概して之を云へば一般勞働者階級は上級の軍閥財閥の人のやうに戰爭に興味を有たない。少くとも直接の物質的利害關係を

有たない事は明かである。社會主義者の云ふやうに戰爭は資本家の慾の爲めの仕事であると論定するのは正しくないとしても、資本家の慾の爲めに起さるゝ場合が實際に多い事も亦明かであるから、少しく開發した勞働者なら召集の命を受けて戰場に赴く前に、一體此戰爭は我々と何の關係があるかを考へて見るのは當然である。何れにしても彼等は戰爭に對して軍人や資本家と同じやうな感激と昂奮とを覺え得ない事丈けは疑ない。

それにも一つ見逃してはならない事は勞働者階級間に於ける社會主義的思想の浸潤である。云ふ勿れ、勞働者の間に於ける社會主義者の數は案外多くないと。社會主義者と自ら名乘るものゝみが社會主義說に感染(かぶ)れて居ると思ふならば大いなる誤りである。或意味に於て今日の世界は社會主義の思想の風靡する世界といへる。少くとも社會主義の所說に一面の眞理あるを認めないものは殆んどあるまい。況んや一般勞働者階級おや。殊に況んや歐洲諸國の勞働者階級に於ておや。故に少くとも歐洲に於ては勞働者の擡頭は取りも直さず社會主義の擡頭といへる。然らば社會主義の國際主義的傾向は云ふ迄もなく其獨得の戰爭觀が遂に目前の戰爭に對して獨得の批判——從來の支配階級のそれとは全然異なれる——を無遠慮に加ふるに至るは極めて見易き道理である。

然らば社會主義の戰爭觀は如何なるものか、一言にして云へば戰爭は資本家の慾の爲めに起る。從つて勞働者には全然無意義なものである。全然自衞の爲めにする場合の外、之を是認すべき理由は無い。故に我々は假令戰つても敵の領土を一寸も取らない、又敵の懷ろから一錢の賠償も奪はないと云ふ事にすれば、結局戰爭は此世の中から跡を絕つに至るだらうといふのである。其動機が全然倫理的でないとしても、之れ亦戰爭に對する一種の道義的解決主義に立つものと云つてゐゝ。斯くして勞働者が段々頭を擡げるに從つて、此戰爭は之を其儘遂行繼續するにしても、財閥軍閥と同じやうな氣分でやる譯には行かないと云ふやうな、又は財閥軍閥が先頭に立てば格別、我々勞働者丈けで事を捌き得るものなら、案外容易く戰爭を始末することが出來ようと云ふやうな考が擴まるやうになつた。只政界の實權が尙未だ所謂上流の支配階級の手にあつたから此等の考が實際上十分重きをなさなかつたけれども、若し一朝何等かの機會あれば、此考が猛然と動いて反對の思潮を壓倒し得る丈けの一種の精神的準備丈けは出來上つて居つたと云ふ事は出來る。

斯く一種の精神的準備の出來上つて居つた所へ、勞働者階級の思想に飛躍的活動の機會を與へたものは云ふ迄もなく露西亞の革命である。之によつて社會主義者の戰爭觀は確實に實際政

界の動かすべからざる原則となつたのである。表面の政治的推移から云ふと、革命後の露西亞の政權は三度遷轉した。最初は自由派を主とする聯立內閣で、次はケーレンスキー一派の穩和社會主義者に、次でレーニン一派の過激派に。けれども此等の變遷を通じて常に全體として露西亞を支配して居つたものは極端な社會主義の思想である。第一次の聯合內閣が僅か二ケ月にして倒れたのも、勞兵會の意に悖つたからである。ケーレンスキーが一時あれ丈けの勢力を振ひながら半年足らずして沒落の悲運を見たのも亦勞兵會の主張に忠ならざりし爲めである。而して比較的最も多く極端社會主義の主張を容れて居ると云ふ點がまた實にレーニン政府の永く勢力を保つ所以ではないか。極端社會主義の主張が露西亞の上下に瀰蔓して居る事の可否。露西亞の國民が斯くまで極端社會主義に感染れて居る事の得失、此等の問題は今茲に論ぜんとする所ではない。現に今露西亞は革命によつて實權が全然勞働者階級に歸し、而して彼等は徹底的に非妥協的に社會主義多年の主張を內外諸政の上に實現せんとして居る不屈不撓の努力を事實として承認すればいゝ。而して此中予輩の今茲に問題として居る點に關係のあるのは、目前の戰爭に關して彼等が如何なる態度を取つたかといふ事である。即ち彼等は資本家の慾の爲にする戰爭を全然否認して、或時には戰爭の目的如何などゝ皮肉な質問を放ち、又或時には戰線整理の絕對無用を唱へて政府を手古摺らせたが、結局非併合主義、無賠償主義並びに民族自決主義の三大原則を揭げて現戰爭を解決せんと主張した。換言すれば彼等は又其獨得の立場から戰爭の解決を資本家の貪慾より道理の法廷に移さんと努めたのである。

露西亞に於ける此新しい現象は二つの點に於て歐洲一般に於ける同じ思想の勃興を助けた。一つは前段に述べた他の別個の理由により起りかけて居つた道義的醒覺を更に著しく刺戟した事である。も一つには露國革命成功の結果として他諸國に於ける勞働者の奮起躍進を促し、延いて社會主義的思想の一層の勃興を進めたことである。斯くして歐洲一般は勞働者たると否とを問はず何の爲めに戰爭するかの目的についても、如何にして戰爭を終結するかの解決手段についても、從來とは全く違つた考を有つやうになつた。而して此考を徹底すれば此上戰爭を繼續するのは無用のやうにも考へらるゝが、さればと云うて途中でやめる譯にも行かない。只行掛り上止むを得ず干戈を執つて爭ふと云ふやうな譯になる。卑俗な例を以ていへば醒めかけた夫婦喧嘩のやうなもので、縺り合ひながらそこに一種の煩悶と悔恨とがある。かゝる狀形は露西亞革命の前後に於て少しく內面的觀察を好むるものゝ決して見逃し能はざる所であつた。

以上予は三つの方面から戰爭に伴ふ世界民心の道義的醒覺を論じた。然し之は心情の變遷に止つて社會事象の表面のみを淺薄に觀察するものには時として見落さるゝ。けれども一旦起つた心情の激變は丸で表面にあらはれずしては止まらない。是に於て予輩は此心情の一變を背景として戰爭に對する道義的支配の要求が政界の表面に如何に發現して來たかを說いて見ようと思ふ。

戰爭に對する道義的支配の要求をあらはした第一の具體的事實はウイルソンの「勝利なき平和」の提議である。彼はいよ〱戰爭參加を決した前年の暮れに最後の調停として勝利なき平和を各交戰國に提言した。彼は說明して云ふ、勝利によつて平和を復するは敗者をして他日の復讐を思はしめざるを得ざるが故に、これ眞の平和克復にあらずと。斯くして彼は眞の平和克復は力爭を罷めて、道理の裁斷に一任するの外なしと云ふのであつた。當時各國の當局者は勝たう勝たうの一念に驅られて居つたから、迂儒の空論に對するが如くに此提言を遇した。我國でも勝つことが目的とする戰爭に、勝負無しでやめろと云ふは頓珍漢も亦甚しいと冷評を放つものが多かつた。結局政界の物笑ひとなつて有耶無耶の間に葬られたけれども、併しこれ實に一つにはウイルソンの達見であつて又一つには極めて適切に時勢の要求に應ずるものであつた。何故ならば前にも述べた如く、時勢は已に舊式の戰爭解決方法に疑を有つて居つたからである。故に目前の事に齷齪する政治家は冷評を以て之を迎へたけれども、一般民衆が諸ろの國に於てウイルソンの提議に共鳴するものゝ意外に多かつた事は當時の新聞雜誌などを讀んでも分る。

ウイルソンの提議は時勢の要求に應ずるものであつたとはいへ、未だ機運が熟さない爲めに夫自身は失敗に畢つた。又提議の內容から云つても力爭の解決にはいけない、最後の決定を道理に任かすべしと云ふに止つて、扨て然らばどう云ふ原則を適用するかの內容を示さなかつたから、具體的問題となる丈けの形を具へてゐなかつたともいへる。尤もウイルソンの腹にはどうして戰爭を片附けるかの具體的成案はあつたらう。それをいひ出すには順序がある。其第一の順序に於て失敗した譯であるが、併し之は本當の失敗ではなかつた。前にも述べたやうな民心の一變が已に何等かの代辯者を待つて居つたのであつたから、ウイルソンの提議は偶々眠れる獅子を鞭撻したやうなもので、之を機として次に第二の段階即ち如何なる道義的原則を今度の戰爭に適用すべきかの問題に移らしむるやうになつた。故にウイルソンの勝利なき平和の提議は政治的に死して社會的に活きた

といつている。

道義的支配の要求を具體的に表現する第二の段階を作るに貢獻するものは露西亞の革命政府である。革命後の露西亞の民衆が今度の戰爭について非併合主義、無賠償主義、民族自決主義の三大原則を掲げた事は前にも述べた。此中民族自決主義丈けはやゝ後れていひ出されたと云ふ特別の因緣もあるが玆に詳々しく說かない。兎に角此三大原則の宣明はウイルソンの提議した道義的支配の抽象的要求に具體的の內容を與ふると云ふ意味に於て大いに重要視すべきものである。ウイルソンは只道理で支配しようと云つた丈であるが、然らば原則を如何に適用するかと云ふ段になつて之に明白な答辯を與へたのは露西亞なのである。併し露西亞革命政府の貢獻は單に此理丈けに止らない。更に之を机上の空論から實際政界の活きた原則たらしめた點にある。蓋し彼の三大原則の如きは露西亞人の發明ではなくして一般社會主義者多年の主張であり、又社會主義者に限らず昔から同じやうな事を云つた人がいくらもある。單に戰爭を如何にして防ぎ得るか、永久の平和を如何にして確保し得るかの原則を考へた人なら、外にいくらも數へ擧ぐることが出來る。けれども之を考へたと云ふ丈けでは所謂机上の空論に止つて實際社會とは何の交渉もない。從つて露西亞の革命政府が三大原則を唱へたと云ふ丈けならサンピエールの平和論や、カントの永久平和論の主張と並んで僅かに書齋の問題たるに止るものである。けれども露西亞の革命政府は彼の三大原則を書齋から街頭に持ち出して之を民衆に投げ與へた。一方に民衆の熱烈なる要求があつたからでもあるが、投げ與へたものがなければ、又之が活きた原則として實際を動かすことは出來ない。予輩は此點に露西亞の功績を認めんとするものである。

然らば露西亞は如何にして此役目を爲し遂げたか、と云ふに予の觀る所では意識的に之をやつたのではない。露西亞國民性の一本調子なる事、極端社會主義に對して深き執着を有つて居つた事、從來の專制政治に對する極度の反感が民衆をして頗る非妥協的たらしめた事等の原因が、不知不識の間に三大原則に實際的勢力を附與したのであると思ふ。今其來歷を簡單に說けば斯うなる。露西亞の民衆は革命後第一の政府に向つて戰爭の目的如何と云ふ質問の形に於て三大原則の遵奉を迫つた。次で其國の內外に對する宣明を迫り、更に進んで其原則を遵奉する以上、即刻聯盟國と交渉して戰爭を罷めよと迫つた。大勢に押されてイヤといへなかつた政府もコゝまでは跟いて行けない、斯くして第一の政府は退けられた。次でケーレンスキー內閣に至ると、民衆は三大原則遵奉の當然の結果として即刻戰爭を罷む

べきの交渉を外國と開けと迫つた。尤も形は密約改訂の要求と云ふに取つた。即ち共同策戦の便宜上いろ〳〵密約する所あつたものを全部破棄せよといふのである。斯うなると英佛側でも默つては居れない。戰爭を今罷める譯にも行かないが、されぱというて露西亞を味方から失ふ事も惜しい。露西亞を依然として獨逸に對する有力なる牽制力たらしむるは聯合國に取つて絶對に必要である。けれども露西亞は、俺が云ふ事を聽かねば單獨に和を講ずると云ふ。聽いて戰爭を罷める譯にも行かねば、聽かずして其去るに任かすことも出來ない。斯う云ふ場合に外交上巧妙なる活動を縦まにするのが常に歐米政治家の得意とする壇場である。英や佛や白やは社會主義を奉ずる第一流の名士を送つて露國の民衆と直接折衝せしめた。國内に於ては頻りに吾人の戰爭目的は露西亞の諸君のそれと異るものでないなどと世辭を振り撒いた。尤も全然露西亞の言分に賛成したのではたい。例へば非併合主義はいゝ、けれどもアルサス・ローレンのやうに從來不當に奪はれて居つたものを奪還するのは併合ではないとか、無賠償主義はいゝ、けれども白耳義、塞比亞のやうに不當に損害を與へられて居つたものに對して相當の賠償を拂はしむるは戰時賠償と其性質を異にするから、必ずしも無賠償の原則に背くものではない、などゝ云ふ遁路を作つて居つた。が露西亞は全然之を承認せず、飽くまで徹底的原狀回復を主張して居つた。其飽くまで非妥協的な一本調子な所が即ち聯合國をして苦心慘憺せしめた所以で、此爲に彼等は一方には出來る丈け露西亞の言分に撥を合せながら、他方には又努めて對手方を我に讓歩せしめんとした。其結果英佛側では國内に於ても盛んに我々は露西亞の言分と決して相反するものではないとか、彼の三大原則は我々も亦初めから之を承認するもの也などゝいふ事をいひ觸らした。さうすると民間にも露西亞と同じ考のものがあるので得たり賢しと之に裏書する。斯くして遂に猫も杓子も三大原則を唱ふるやうになり、やがて今度の戰爭は何れの勝利に歸するにせよ、兎に角其結末をつけるものは大體の原則として此三主義の外に出づるものにあらずといふやうな考が固まることになつた。他に觀る所あつて此説を流布せしめた當局者から見れば、嘘から出た誠といはざるを得ない。が要するに戰爭終結方法としての三大原則に對する信頼は露西亞は勿論、英・佛・米に於ても將た亦敵國側に於ても動かすべからざる原則となつた。即ち机上の空論に非ずしてどうでもかうでも大體此原則に依らずしては戰爭の結末は着かないと云ふやうな風潮を作つた事は疑を容れない。斯うなると、戰爭の終結に適用すべき具體的原則は已に明白になつた。殘る問題は之を戰爭の種となつた、又

戰爭によつて新たに起つた個々の問題に適用して實行し得べき講和條件の體系を作ることだ。之も實際問題としては困難な仕事ではあるが、又達識明敏の士に取つては或意味に於て一擧手一投足の勞ともいへる。此容易いやうな、六づかしいやうな第三の仕事を見事に爲し遂げたものは即ちウイルソンの十四ケ條の宣言である。尤も之と相前後してロイド・ジョーヂの講和條件の宣言もあつた。之を先にしてはグレー卿とかスマーツ將軍とかいろ〳〵の人の意見の發表もあつた。ウイルソンの最後の總つた宣言が此等の人々の攻究に負ふ所頗る大なるものありしは想像し得る。けれども明白な區劃りをなすものはウイルソンの宣言であるから、茲には姑く彼一人の功を語るに止めて置かう。要するに彼の宣言した十四ケ條の講和條件は先の「勝利なき平和」の提議の結論をなすものであつて、道義的支配に對する世界民心の熱烈なる要求を最も適切に而も有効に表現したものである。

此宣明が如何に時勢の要求に協つて居つたかは、講和會議は勿論、之と相伴へる世界改造の論議に於て終始一貫基本的準則となつた事によつても明かである。人によつてはウイルソンの折角の宣言も講和會議に於て丸で骨抜になつたではないかと云ふ。成程重要な原則にして成り立たなかつたものもある。出來上つた結果について遺憾を感ずる點も少くはない。然しながら世界歴史初つて以來、慾の爲めの戰爭が斯る道義的原則によつて始末せられたと云ふ事は曾て有るか。講和會議に臨んだ多くの政治家が尚舊い思想に捉へられて、國家的利己心の衝動のまゝに虚々實々の陰謀を廻らしたにも拘らず、曲りなりにも條約成案の全體の上に、あれ丈けの道義的色彩を濃厚ならしめた事は我々の驚嘆して措かざる所である。此點に於て予輩は一つにはウイルソンの勞を多とし、又一つにはウイルソンをして此態度を取らしめた世界民心の今日の醒覺を心強く思ふ。

よしんばウイルソンの宣言が講和會議の實際に於て如何に蹂躙せられたにせよ、戰爭の眞最中講和條件を宣明したと云ふ事夫自身が已に破天荒の慶事と云はなければならない。此位で和睦しないかと云ふ事は第三の調停者がよく言ふ。けれども當事者はてんで取り合はない。之に取合ふ位なら初めから戰爭をしないと云ふ事は先にも述べた。敵方の獨逸皇帝も一二度此位の所なら講和してもいゝと申し出た事がある。我々は敵情を探り、又敵の内部に困難を起さしむる爲めの誠意なき、いはゞ政略的の提議としててんで之を顧みなかつた。干戈を取る前なら格別、一旦戰端を開いた以上はいゝ加減の所で戰爭を罷められたものではない。從つて從來の戰爭に於ては講和條件と云ふものは殊

め豫定の出來ぬものとなつて居つた。併し之は公平なる講和條件の發見の不可能なのではない。國際關係の實情が發見された條件の實行性を保障しないのである。何故なれば國際關係が腕力によつて支配されて居る以上、一旦戰爭となれば厭くまで敵を窮迫しなければやまない。戰前に於て求むる所の何であつたにしろ、一旦戰爭となれば出來る丈け敵を苦しめて、得られる丈けのものを得んとするからである。從つて講和條件なるものは最後の瞬間に於てどれ丈けのものを獲得し得るかによつて極まり、戰爭最中に之を豫定することの出來ぬものである。戰爭商買には正札がない。骨董の賣買のやうな者で、値段の高低は對手次第に極まる。これ〳〵の値段なら賣つてもいゝと云つた所で最後の瞬間までは當てになるものでない。從つて又講和會議などには從來第一流の政治家を送つて巧に駈引せしめた所以である。然るに今度は不思議にも戰爭闌にして講和條件の宣明があり、而も敵味方を通じてすべての國の人々が之を來るべき平和克復の公平なる代價だと定めて了つた。而して今度の戰爭は勝者の何方であるに拘らず、平和克復の條件は大略の所著しく此邊を外れまいと考へられた所に特色がある。之れ畢竟世界の人がおしなべて今度の戰爭は公平な道理で捌きをつけよう。從つてウイルソンの示した程度の條件でどうでもかうでも片を附けようと云ふ熱烈な要求があつたが爲めではあるまいか。何れにしても戰爭商賣に於て事前の正札があれ丈け重きを爲したと云ふ事は、歴史初つて以來空前の出來事である。之によつて觀ても我々は道義的支配の要求が如何に熱烈であつたかを考へずに居られない。

(三)　第十九世紀文明の概觀

——第十九世紀初頭社會的激變の精神的根柢——第十九世紀文明の特徴——第十九世紀文明の二大缺陷——

今度の戰爭の進行につれて世界の人心が道義的に覺醒した直接の經緯は前段述ぶる通りである。けれども前段に述べたやうな戰爭の直接の影響としてのみ現はれたものとすれば其根柢はまだ深しと云ふ事は出來ない。予輩の密かに考ふる所によれば最近の道義的醒覺は又實に十九世紀百年間の文明に深い又密な關係があると思ふ。他の言葉を以て云へば過去一世紀間の歴史は、非常然の結論として現代に於ける道義的醒覺を齎らさねばならなかつた。して見れば戰爭に伴ふ個々の事情の發生は偶々醞醸せる機運に一大進展の機を與へたものに外ならない。それ丈け我々は今日の世界の新しい傾向に對して偶然的、突發的とするの見方を取つてはならない。今少しく其故を語らう。

第十九世紀の新文明は佛蘭西革命を中心とする社會的一大激

變を以て始まつた。佛蘭西革命並びに之を中心とする各種の激變を夫れ自身孤立して考へて見ると、不徹底でもあり亂暴でもあり、又誤つた點も少くない。けれども今日我々が丸で赤の他人のやうな態度であの運動を冷眼に批判するならば誤つて居る。現代の我々をして幾多の社會問題に改造を叫ばしむるのも、又百年前の佛蘭西人をして改革に狂奔せしめたのも、畢竟新たに眼覺めた同じ魂の動かす所に外ならない。そこで我々は姑く今日の我々を動かし、百年前の彼等を動かした根柢の魂に遡つて其要求を探つて見なければならない。斯く考へて見ると、我々は十九世紀初頭の社會的激動の中に、極めて鮮かな輝きの中に或物を觀る。何ぞや、曰く人格的自由の主張即ち之れ。

佛蘭西革命の表面の形は政治的階級の打破であつた。換言すれば自由平等の政治的確立であつた。專制的封建時代に於て階級門地の人爲的牽掣が著しく人間の自由活動を妨げて居つたから、之を打破し、此桎梏から解放されんと云ふのが革命の根柢的精神であつた。之が爲めに如何に多くの犧牲を拂つたかは革命に伴ふ幾多慘禍の事實に見ても明かであらう。而して皮相なる觀察者は革命を以てすべての惡しき物と共にすべてのよき物の破壞と見たけれども、之は必ずしもさうではない。固より革命は進化の理想を無視する點に於て重大なる誤をなしては居るが革命は何等建設的の努力を伴はないと見るならば大いなる誤りである。然らば佛蘭西を筆頭第一と稱する十九世紀初頭の歐洲諸國の革命は何の新しきものを持ち來たしたか。それは社會的秩序の根柢として階級門地と云ふ人爲的權威の代りに知能品性と云ふ道義的權威を打ち建てた事である。今までは大名だから頭を下げる、武士だから頭を下げると云ふのであつたが、此丈けの理由で人に頭を下げさす權利はないと云ふ事の明白になつた今日に於ては、自ら世人一般をして頭を下げしむるものは道義的權威の外にはない。無爵の宰相と云ふ新例を作るのはどうかと疑ふものゝあつた我國でも、人間としての値打ちさへあれば豆腐屋の小倅から遞信大臣に上り得る世の中になつたではないか。人の上に立たうと思ふなら、金がある、生れが高いといつて來るな、知能と品格を磨いて來いと云ふ處に今日の立憲政治の道德的意義がある。要するに十九世紀初頭の革命はあらゆる人爲的拘束よりの人間その物の解放である。從つて又すべての人類に道義的開發の機會を十二分に提供せんとするものである。階級や門地によつて人格の自由が著しく傷けられて居つた舊い世界に對する反抗が即ち革命であつた。してみれば當時のあらゆる社會的激變の根柢は人格的自由活動の尊重と云ふ事に歸する。只之が初めて僅かに政治的方面に部分的發現をなしたに止

り、未だ各種の方面に徹底的にあらはれなかつた嫌がある。けれども此思想が本となつて時の移るに從ひ、それからそれへと發展し實現すべきは當然豫想し得べき事であり、又實際の歷史に現にあらはれて居る所でもある。

第十九世紀初頭の社會的激變の根柢的精神はまた同時に十九世紀文明全體の顯著なる特徴をなすものである。只初めは此根柢の精神が特に專ら政治の方面に而かも部分的に發現したのであるけれども、單に此に止るべきものではない。第一の關門を突破して第二の關門に進み、更に第三第四と階梯を踏み進んで遂に完全なる理想の實現を見ずんば已まざらんとする。デモクラシーと云ふ言葉を單に政治上の事に限つた從來の狹い用法を固執しないなら、十九世紀文明の特徴にはデモクラシーの精神の人事各般に涉る徹底的實現にあると云つてもいゝ。十九世紀初頭の政治的デモクラシーが一部に偏局した故を以て之を眞正なるデモクラシーにあらずと云ふのは、餘りに社會現象の時間的聯絡を無視した議論である。我々は寧ろ先づ政治的自由を叫ばしめた其根本の精神が今日更に如何なる方面に其發現を主張して居るかを懇切に考へて見たいと思ふ。

十九世紀文明の顯著なる特徴をなすデモクラシーの精神が人格的自由の完全なる實現を期するが爲めに取る所の方策中論理上第一に急務とする所は、各個人の精神生活の自由を保障すると云ふ事でなければならない。茲に言論の自由、思想の自由を如何にすべきやの問題、教育、學藝、宗教等を如何に取扱ふべきやの問題がある。廣き意味に於て所謂文化政策は現代デモクラシーの政治に於て最も力を注がれねばならぬ所である。何故なれば本當の人格、本當の文化は、獨り此所からのみ回轉するからである。けれども精神生活の自由は獨り文化政策によつてのみ保障され得ない。事實上物質生活の不安が、精神生活の自由を妨ぐること稀でない。精神生活の自由が如何に經濟生活の影響を受くるやは唯物史觀の明白に我々に教へた所である。斯くして經濟生活の自由を保障することの必要がまた感ぜらるゝ。一部の人は此事を重んずるの餘り此問題さへ解決すればいゝと云ふ風に見るが、之には我々贊成が出來ない。何故なれば我々は人格と文化とは我々の生活の客觀的基礎からは斷じて出て來ないと信ずるからである。けれども物質的條件は精神的自由の活躍を妨げる消極的勢力としては實に偉大なる者がある。昔は此事を案外重く觀なかつた。マルクスなどのお蔭で我々は先づ此問題を決せずんば精神的文化の回轉を見る望みはないと云ふ事を明かに示された。從つて此方面を專ら取扱ふ廣義の所

謂社會政策が少くとも實際政策上の順序として文化政策に先立つ研究問題たるを認める。事實上並びに論理上の緩急の順序は姑く別問題として、所謂人格的自由は文化政策並びに社會政策の兩面から實行的に打ち建てられなければならない事は云ふ迄もない。

人格の自由を打ち建てる爲の各般の政策の、國家の機關を通して發現すると云ふ段になると各個人に對しては差當り制限拘束の形を取る。そこで制限拘束の形を取る規範的命令を誰が作るかの問題が起る。主權者が之を作るのだと云ふやうな形式論は姑く別問題として、我々は此場合にも矢張り一種の思想的專制主義に陷らざることを注意する必要がある。所謂善政主義は此點から斷じて排斥されなければならない。局に當るものは常に所謂賢明の少數者である。どんなに發達した立憲政治の下に於ても、少數賢明のものが天下に其經綸を行ふと云ふ仕組を脫する事は出來ない。只之と舊式の專制主義と異る所は、其少數者が自家の所信の眞僞を民衆の批判に待たんとする態度にある。立憲的政治家は一面に於て所信に厭くまで勇猛なると共に、又他の一面に於て自分の考の果して誤なきや否やを反省すると云ふ臆病な方面をも備へて居る。出來上つた或說を正しいと固執するよりも、常に正しからんことを欲する態度を我々は多とするものである。而して彼は常に正しからんとして眞僞の批判を民衆の意嚮に求むる。人或は云ふ、斯くの如くんば即ち立憲政治は愚民の盲動に過ぎないと。併しながら人類の靈能を信じ、其無限の發達を信じ、人格的自由の價値を信ずるものに取つては、自由なる人格の集合としての民衆の上に最もよきもの丶開發することを疑ふ事が出來ない。眞善美の理想は昔は成程貴族の專有であつたらう。だから本當のものは出て來たかつた。デモクラシーの文化的意義は本當の眞善美を民衆の上に回轉させんとする事にあるのではないか。斯くしてデモクラシーは必然に理想主義の立場と相伴ふものである。唯物的自然科學的立場からは斷じてデモクラシーは出て來ない。

思想的專制主義の排斥は當然社會的規範の構成を民衆の手に委ねなければならない。少くとも最後の決定權を民衆の手に委ねなければならない。又民衆の側から云つても今日の社會國家が彼等の作る所であり、彼等の直接に經營する所たる以上、自ら規範的命令の制定者たらんとするは當然である。斯くして政治的自由の問題が起つて來る。文化政策社會政策の、人格の自由を實質的に打ち建てるのに對して、之は其形式的方面を問題とするものと云つてい丶。そこでよく人は我々の生活の本當の自由は政治的權利の享有からは出て來ないと云ふ。選擧權があ

つても飯が旨く食へるでなし、品性が一段と高尚になる譯でもないが、併し之れ無くしては又實質的自由は確保せらるゝのではない。近頃勞働運動などに熱中する人々が動もすると普通選擧運動などを罵倒するのは、其間に恕すべき點はあるが此點に於て斷じて誤なりといはざるを得ない。

故に論理上の順序は兎も角として事實上政治的自由の擴張は又人格の自由を完成する爲めに必要缺くべからざる問題となる。而して之については量的方面の擴張と質的方面の確立とを計らねばならない。普通選擧の要求は即ち前者を代表するものである。後者の爲の方策としては折角得た政治的權利を權勢利慾の惑はす所とならず全然良心の自由の命ずるがまゝに行使するやうに制度の上にいろ／＼劃策する餘地がある。選擧民が全然良心の自由に從つて行動すると云ふ事はまた一面に於て政爭を倫理化する所以であつて、現代立憲制の重要な一原則たる多數決主義をば少數者をして壓迫と感ぜざらしむる所以でもある。多數が少數を壓迫すると云ふ制度が人格の自由を保障する所以たるの道理は亦實に茲に存するのである。

以上予は主として政治上の方面から十九世紀文明の特徴を說いた。同じ事は他の方面についても云へると思ふけれども專門外の事だから略して置く。兎に角あらゆる方面に於て人間共物を赤裸々に出す、其自由活動に對する舊い一切の拘束から之を解放すると云ふのが、一貫したる顯著なる特徴ではないか。而して其赤裸々にあらはるべき人間は即ち一個の靈能である。此點に於て自然科學的立場は決して十九世紀文明の基本原流を爲すものでない事は云ふ迄もない。茲に十九世紀文明の道義的色彩の根據はある。十九世紀の文明が僅か百年の星霜を經たるに過ぎずして、過去數千年の歷史に比し殆んど比較にならぬ程の豐富たる內容を有する所以は只一に此點に因るのではないか。靈能ある人格の自由なる活動、之が實に十九世紀文明の一大特徴であつた。

前述べた如く十九世紀百年の歷史は人格的理想の實現の發達史である。甲から乙、乙から丙と人事のあらゆる方面に滲み込んで我々の生活を潤うした。が茲に殘念な事には最も重大な方面で取り殘されたものが二つある。幾多先覺の士が忍び難き犧牲を拂つて奮鬪したにも拘らず、而かも尚此高貴なる精神の徹底を見なかつた方面が二つあるのである。それは何かと云ふに云ふ迄もなく勞働資本の關係と國際關係とである。

勞働資本の關係の事は今我々の論ぜんとする主題に直接の係はりが無いから委しくは說かない。けれども資本家並びに勞働

者と云ふ固定的社會階級の發生が十九世紀の特色であり、而して此兩者の關係が公正なる道義の支配下に置かれなかつた。と云ふ事は今日何人も疑はない。此事は勞働者自身が未だ十分に自覺しなかつた十九世紀初頭に於ても已に識者の問題とする所であつたが、十九世紀後半以來、下層階級の自覺と共に此事は社會問題若くは勞働問題として盛んに論議せらるゝやうになり、而して公平なる學界の定論は殆んど擧つて勞働者の主張に裏書して居るに拘らず、今日まで未だ曾て根本的解決の曙光に接しなかつた。成程所謂社會政策は非常に流行して居る。けれども之れ畢竟源を抛擲して徒らに末流を清めんとするものに過ぎない。今度の戰爭を機會として勞働問題が更に陣容を改めて大いに起つたのも偶然ではない。

若し夫れ國際關係に至つては十九世紀の初め以來、徹頭徹尾虎視眈々の武裝的對立を以て押し通して居る。維納會議後一時列國協調と云ふ事が外交上の主義として立てられたけれども、畢竟佛蘭西を脅かさんが爲めに列國協商の外形を裝ふたに止り、眞に世界共存の人道的精神に促されたものではない。されば十九世紀の中頃から各國各々漸く内部の紛亂より免るゝや、彼等は轉じて殺伐陰險なる競爭を之れ事とするに至つた。此風潮がビスマルクの獨逸帝國創建の成功後殊に甚しくなつた事は先にも述べた通りである。斯くして富國强兵が國家生活の最高の理想となり、所謂正義公道は强國の無道の壓迫に對する泣言として小弱國に利用せらるゝ場合の外、殆んど國際關係には顧られざるに至つた。

十九世紀百年の歷史を一貫する根本精神が人格自由の尊重であり、而かも此精神が概して非常な勢を以て發展し來つたに拘らず獨り前述の二方面に於て全然其發達を見なかつたのは誠に不思議の現象であるが、事實は之を如何ともすることが出來ない。そこで一部の人は人事百般の現象が道義の原則で支配されて居るのが誤りで、勞資關係並びに國際關係の如く「强い者勝ち」と云ふのが世の中の本當の姿なのだと云ふ風に見る人もある。併しながら我々は此立場を取らない。何故取らないかは別問題として玆には述べないが、實際の事實として最近世界の人心が此矛盾の現象に對して非常に煩悶して居つたといふ事實に見て、私は寧ろ當今の勞資關係並びに國際關係を以て十九世紀文明の二大病患と見做すものである。然らば此病患は如何なる所から起つたのか。

此等の原因を歷史的に詳述することは本論文の目的でないから、只予輩の說かんとする趣意を明かにする範圍に於て簡單に述べて置く。予輩の觀る所によれば、其原因はいろ／＼複雜で

あるけれども、最も主たるものは矢張り産業組織の急變にあると思ふ。産業組織が丸で變つたと云ふ事と、而かもそれが急激に來たと云ふ事が注意すべき點である。此等の原因から資本主義産業經營と云ふ事が起り賃銀勞働者と云ふものが起つた。之に契約自由とか其他いろ／＼の要素が加つて、即ち勞働者と云ふ階級を發生したが、更に資本主義的經濟組織の當然の結果として此産業本位主義は勞働者の無自覺に乘じて之に適當なる注意を拂ふを怠らしめた。此形勢で段々産業界が堅まると、後勞働者の自覺によつていろ／＼地位の向上を求めても、産業の衰替を怖れて容易く之れに應ずることが出來ない。こゝから又た國際關係の競爭對立といふ事も出て來る。近代産業革命に伴ふ大量政策は當然に産業競爭を馴致し、而して此競爭は遂に國家的に發展して商權　擴張を競ひ、商權は國權の保護を賴んで遂に國と國との競爭を激しからしむる。前世紀以來殘されたいろ／＼舊い思想にして此趨勢を導いたもの、又助けたものあるとは論を俟たない。けれども國と國とが相競ふに於て殆んど手段を選ぶに遑あらざる程焦せっしめたものは、産業變革の非常に急激であつたといふ事である。絶大の變化が而かも急激に來る時には、人多く此境遇に迷うて周章狼狽するを常とする。ゆつくりしたなら之に處する適當な方法の工夫もあつたらう。けれども餘りに急激であつたので各國は皆面喰つた。尤も狼狽へたのは國を異にする産業ばかりではない。國内の産業も亦大いに處置に迷うて不　の競爭をしたのであるが、然し同一國家内に於ては段々無用の競爭を避くる方法を講じて、トラストとかカルテルと云つたやうな組合を作るに至つた。之といふのも國家と云ふ中央の指導的權力があつたから出來たのである。國と國との間には之が無い。從つて一旦爭つたものが益々激しく爭ふばかりで、斯くして遂に現代のやうな殺伐な無政府的狀態を現出したのである。之を要するに十九世紀の文明が前記の二大病患を有して居つたのは、産業革命の急激に基する止むを得ざる疾患であつて、斷じて之が本流であると觀るべきではない。尤も一部分には之が人生世態の常狀であるとして、之で無ければ國は立ち行かない、國が立たねばまた我々も立たないと說くものもあつた。國の爲めには他國の數に乘じて火事場泥棒を働くもいゝ。國の富の增殖の爲めには勞働者などは少し位の苦痛は忍ぶべきだなどゝ云ふ。併し斯くの如きは我々の立場から見れば、一時の變態に眩惑して良心の痲痺せるものに外ならないと思ふ。我國の所謂有識階級中にも聊さへあれば少し位道樂しても構はんなどゝいふ標準で人才の甲乙を分たんとするものもあるが、之なども詮じ詰むれば皆此種の謬想に囚へられたものであ

る。十九世紀一般の世界の良心は決して此風潮に滿足したものでもなければ、又かゝる風潮に於ける勝利を以て得意氣に誇つたのでもない。斯くの如き變態に處して正義を說き道義を叫ぶは時として宋襄の仁に陷る。苟も自ら起たんとすれば、不本意ながら俗衆と其外形の行動を同じうせねばならぬ必要に迫らるゝ。けれども之は彼等の良心の喜んでなす所ではない。玆に我々は十九世紀文明に一つの大なる煩悶のあつた事を認めざるを得ない。

冷靜に考へて見ても已に人格尊重と云ふ事が十九世紀文明の根本基調をなす以上、之が一部に徹底して他に徹底しないと云ふ事は銳敏なる良心の安んじ得ない所である。外へ出ては平民主義を振り廻し、內へ歸つては傲然と下女下男を追ひ使ふといふやうな事は理義に徹底した人の爲し能はざる所である。然るに十九世紀の文明は一面に於て兄弟は仲善くせよと敎へながら、隣の坊つちやんや三軒目の御孃さんとは喧嘩してもいゝと敎へねばならぬ苦しい地位にすべての人の親を置いた。甚しきは隣りの坊つちやんのしやぶつて居る飴を捥ぎ取つて來る事が、其丈け內の經濟を助くることになると敎へねばならぬ地位に置いた。少くとも兒童が斯くの如き亂暴な態度に出づる時に、世間が之を愛國的行爲と賞讃するのを彼は默認せねばならなかつた。斯くしては本當に兒童を道德的に敎育することが出來ないのみならず親たるものも滿足しない。彼は其銳敏なる良心が勞資關係、國際關係の現狀を見て大いに傷けらるゝことに懊惱した。更に近き將來に於ける兒女の道德的墮落を豫想して又大いに煩悶した。此煩悶の事實に又我々は十九世紀の文明が、歸する所人格主義を以て一貫した事を疑ふ事が出來ないのである。

何によつて這般煩悶の事實を觀るか。最も明白な證據は文藝である。近代歐洲の文藝が如何に此等の點についての社會の現狀に反感を有つて居つたか、如何によりよき、より合理的な社會に對する熱き憧憬を有つて居つたかは、專門家ならぬ予輩の玆に諄々しく說くまでもない。轉じて純思想の方面に觀るも十九世紀の前半一時物質的文明の隆盛を極むると相前後して自然科學的唯物的哲學が隆盛を極めたのであつたけれども、最近に又再び新らしき意味に於ての理想主義の哲學が復活しつゝあるではないか。此等の點も專門家の研究に任かして多く言はない。我々の專門に屬する方面から觀ても止むを得ざる社會の險惡なる狀態を認めつゝ、尙如何にかして之を道義的に支配せんとするの苦心が著しく政治法律の上にあらはれて居る。例へば國際法に於ても、國家の爲にあらゆる危險を冒して其任務を全うする間諜は、我國などでこそ愛國の志士として大いに之を尊敬する

けれども、西洋では決して之にかゝる待遇を與へない。何故なれば間牒などゝいふものは普通の道德觀念では許されないやうな方法を取るにあらずんばてんで成功しないものであるからである。社會に無くてならぬものだけれども、皮剝や、隱亡は好んでなりもしなければ又尊敬もしない。間牒は卽ち此點に於て皮剝、隱亡と云つたやうな待遇を與へて居る所に一種皮肉な道義的鞭撻がある。之を此れ思はずして西洋でも資本主義、軍國主義が何等の煩悶なしに天下に横行して居ると考へるのは大いに誤りである。少くとも多少歐洲の文藝に親しみを有つて居るものには斯う云ふ考は起り得ない筈である。況んや最近に於ては一部先覺の士の豫期した如く、資本主義と軍國主義とは果して顯著なる道德的頹廢を齎らして到る所に其ボロを曝露しつゝあつたに於ておや。

斯う云ふと必ず次のやうな反問が起るに相違ない。それ程世界の良心が一般に煩悶して居つたのなら、何故に彼等の要求が實現して資本主義、軍國主義の弊害を抑へないか。何故に道義的支配の要求が勞資關係、國際關係にまで入り得なかつたかと。如何にも尤もな疑問である。併し世の中をサンぐ〵悩まして居る弊害の中には其原因の個人的なものもあるが、又社會的なものもある。從つて其救治策も個人的で行けるものもあり、社會的に行かなければならないものもある。例へば禁酒問題、廢娼問題の如きは酒を飲むな、放蕩をするな、と個人的良心の覺醒を促せば出來る。自分獨り酒を罷められない、放蕩は止められないと云ふ問題ではない。けれども問題によつては外の人が皆罷めなければ自分一人罷める譯には行かないと云ふ問題もある。例へば或資本家が大いに良心に恥ぢて勞働者の待遇を根本的に改めようとしても、外の同業者が依然從來の待遇法を改めなければ自分の事業の自滅を厭はざる限り、良心の命ずるがまゝの改革を實行することが出來ない。若し夫れ國際間の軍備制限と云ふやうな問題になると、一國でも異議を唱へるものがあれば、外の國は一兵一卒をも減ずる譯には行かない。故に斯う云ふ問題になると責は社會にあつて個人にない。從つて制度の根本的改造を實行するにあらずんば問題の解決は出來ない。而して制度の根本的改造は決して容易の談ではない。之れ熱烈なる變革の要求あつて而かも永く實現を見ざりし所以である。啻に實現を見ざりしのみならず勞資關係、國際關係は軍國主義の横行と、資本主義の跋扈との爲めに益々險惡になる。而して淺薄なる觀察者は自ら品性の墮落するを顧みずして自他を擧げて此形勢に順應せしめんとする。之が世態人情の常態であるとする哲學をすら建てた。けれども少しく物を親切に觀察する人は、一[illegible]

なる狀態の昂進と正比例して變革要求の熱度を增しつゝあつた。觀よ、廿世紀に入つて以來、眞面目なる平和運動の如何に盛んであつたかを。又觀よ、之と伴つて社會主義的改造運動の如何に躍動しつゝあつたかを。故に十九世紀の文明は一面に於て餘儀なき行掛り上、二大疾患に惱んで居つたけれども、他面道義的良心を振ひ起し、之と闘つて健康恢復の爲めに大いに努力しつゝあつたといはなければならない。病が遂に世界を滅ぼすか、世界がつひに病を征服するか、之が廿世紀の我々に殘されたる問題である。

（四）最近の世界思潮と國家生活の新理想

――道義的支配の要求――平和到來の原因――講和會議を支配する思想――改造の要求と其根本的精神――國家生活の新理想

前項第三段に述べた所は第二段に述べた所を確かむるものである。言ひ換へれば十九世紀の文明を貫通する根本精神が第三段に述べた通であるとすれば、第二段に述べたやうな事情の下に、戰局の進行につれて道義的支配の要求が、非常な勢を以て起つたといふ事は斷じて一時的の現象と觀ることは出來ない。戰爭と云ふものを背景として初めて起り得た偶然の出來事といふ事は出來ない。然らば即ち戰爭の最中から段々力說高調さるゝやうになつた侵略主義、軍國主義、資本主義、階級的特權主義等に對する極度の反感と、自由平等、博愛平和若くはデモクラシー等に對する熱烈なる憧憬の起つた事は之を民衆の自覺した良心に深く根ざす所の、而して次の世界を支配すべき不動の原則として確立したものといはなければならない。最も頑迷なる侵略的軍國主義者は其無智曚昧から又は其階級的偏見から、此明白なる世界の趨勢をすら正視し得ずして、或は一時的の現象なりといひ、或は内心の野心を飾る爲の美しき而かも怖るべき着物に過ぎないといひ、又は之に順應せんとするものを罵倒して徒らに大勢に盲從するな、大いに自主的にやれなどゝ血迷ふて居る。彼等は世界の大勢に順應するといふ事は常に必らず英米の後塵を拜するとゝ極めて居る。焉んぞ知らん、今日の自覺せる青年は、英米の主唱する所なるが故に之に從ふにあらずして、内心の已むに已まれぬ要求に驅られて自ら大勢の作興に貢献せんとして居る。自主的と云ふ事は、必ずしも人の云ふ事に面を背ける、旋毛曲りを云ふのではない。予輩は寧ろ此種の「自主的」論者に、一部の僻論に迎合する最も著しき非自主的態度を觀るものである。尤も如何に道義的支配の要求が熱烈であつても、それが國際關係を支配する確實な法則として抗し難き制裁

力を有つまでは｜國際關係が一種の法的組織の下に統制せらるゝまでは油斷は出來ない。最早や武力に要はないといつて安心するならばそは云ふ迄もなく迷想である。けれども油斷をしない、いざと云ふ場合の用意をおろそかにしないと云ふ事は必ずしも他人の公明を疑ひ、自ら武力を張つて威嚇を逞うすると云ふ事ではない。所謂平和論者が一も二もなく軍國的設備に反感を表するのも誤りであるが、又軍國主義者が民心の弛頽を防がんとして徹頭徹尾殺伐なる氣風を唆らんとするのも間違つて居る。封建時代の愚民に對してなら、強いて敵を作ることが民心を緊張せしむる唯一若くは最良の方法であつたらう。百里の途を歩ましむるには九十里を以と半ばとすと教へなければならなかつた。現代の開明人は專ら理義によつて進退することを好む。百里の半ばは四十九里でもなければ五十一里でもない。行くも止るも一に法度によらしめなければならない。強いて不當に進ましめんとしたり退かしめんとしたりすれば、却つて此に弱點を暴露する怖れがある。頑迷無智の結果道義の勢力に眼を掩ふのは仕方がないが、爲めにする所あつて故らに現代の自由平等、博愛平和の風潮を曲解せんとする一部の軍國主義者に對して、我々は言ひ難き不快の感を抱くものである。

此種の偏見者流は無論西洋にも少からずある。少くとも前代の行掛りに捉へられて十分なる安心を將來の國際關係に繋け難しとするの考は殊に政治家の間に尙相當に强い。之が道義的支配の理想の實現を著しく妨げて居ることは事實である。從つて之に有力なる制裁力を有たしめんとするいろ／＼の組織は、講和會議に於て立派に作り上げられたとはいへない。現に此目的の爲めに案出されたる國際聯盟は散々歪められて當初の原案とは餘程違つたものになつた。然し過渡期の仕事としては之も致方がない。只我々はあれ丈けのものが出來たと云ふ事によつて、已に時代の休徵の一端を窺ふことが出來るのである。一部の論者のやうに、國際聯盟の前途は悲觀すべきものか、或は我々の期待するが如く樂觀すべきものかは姑く之を時の判斷に任かして置かう。

國際聯盟が一時の思ひ附きで永久平和の確保と云ふ樣な深い誠意から出たのではない、講和會議等も各國銘々野心を蔽はした醜き折衝の結果であると觀る者もあるが、そは恐らく如何にして平和は來たかの現前の事實を透視せざる者の言であらう。

然らば平和は如何にして來たと觀るべきか。最も簡單な答は獨逸が負けたからである。然し問題は獨逸は如何にして負けたかと云ふにある。從來の戰爭は力爭の敗北を以て終局するを常とした。力爭の敗北は取りも直さず物質的勢力の消耗の結果で

ある。然らば獨逸の敗北は其の原因を此物質的方面に求むべきやと云ふに予輩はさうは思はない。

無論獨逸が物質的缺乏の結果困難の極に達して居つた。兵員の徴募にも苦んだ。軍器彈藥も乏しくなつた。殊に食糧其他の物資にも事を缺いた。けれども此等の點を數ふるなら獨り獨逸に限つた事ではない。英吉利も佛蘭西も同じ事である。春まであれまで勢を以て大壓迫を聯合軍側に加へて居つた獨逸が――而かも平素打算に長ずるを以て聞えた獨逸が、夏になつて俄かに弱り出したといふ事はどうしても其原因を物質的方面のみに求めては考へ得られない。之も重要な要素であるには相違ないが、最も根本的な原因は恐らく精神的方面にあるのだらう。即ち意氣の弛頽である。此等の點は曾て本誌上で述べた事もあるから再び玆に繰り返さない。要するに獨逸の敗北は力爭の敗北ではない。意氣の敗北であつたといはなければならない。從つて亦聯合國側の勝利は力爭の勝利ではない。故に力爭の勝利を以て本當の名譽ある戰勝と考へて居つた人々からは聯合軍の勝利は如何にも値打のないもの丶やうに映じた。中には之を拾つた勝利だと冷笑した人もある。けれども聯合國の拾つたのは獨逸が過つて落したものを拾つたのではない。落すには落さゞるべからざる丈けの理由がある。拾つたものに特別誇るべき功なしとするも、餘儀なく落したと云ふ所に何等か道義的意味があるのではあるまいか。

予輩の觀る所によれば、獨逸が精神的意氣の頽廢を見るに至つたのは、戰爭の目的に關する民衆思想の一變にあると思ふ。即ち世界一般が國際關係を、從つて又戰爭をも道義的に支配せんとするの風潮を捲き起したにつれて、獨逸自身も亦玆に大いに覺醒せざるを得なかつた。生活の壓迫、民衆勢力の勃興此等の要素が、民間の覺醒せる精神をして當局の軍國主義的傾向に堂々と反抗するを得しめたと云ふ點もあらう。殊に露西亞の革命以後は著しく非戰思想の浸潤を蒙つて居つたが、ウイルソンが起つて十四ケ條の講和條件を宣明するに及んで、どうせ負けても此位の所で結末が着くものなら、又勝つた所あれ以上貪る事の困難が明かなる以上、此上戰爭を繼續するの必要は何所にあるかと云つたやうな考が段々民間に起つて來た。之を皮相的に見れば過激派かぶれの非戰思想であるが、も少し本質的に觀ると矢張り一種の平和的道義的醒覺と云はなければならない。斯くして民衆は戰爭繼續の可否について段々官僚軍閥と觀る所を異にするやうになつた。そこで政府は此弛頽せる民心を一新して更に軍國的方針に緊張する所あらしめんとして實はあの春の大攻撃をやつたのである。あの攻撃は部分的には非常な成功

であつた。けれども最早平和と道義とに目覺めた民衆は部分的の成功に徒らに酔ふことをしない。全局の大勝を收めて一擧に戰爭を終局するの見込が立てば格別、否らざる以上、――勝つには勝つにしても此先き尙二三年もかゝるのでは――民心は再び戰爭繼續の無意義を一層痛切に感ぜざるを得ない。斯くして生中春の大攻撃をやつたと云ふ事が政府の豫想に反して民心の弛頽を一層甚しからしめ、遂に夏に入つて俄然として士氣の頽廢を暴露した所以である。他にも數へ擧ぐれば細かい原因はある。けれども根本は右述ぶる所に外ならない。而して之を徒らに道德的意味に於ける士氣の頽廢と解しては誤りだ。彼等は公平なる相當の條件で始末し得べしと信じたるが故に、換言すれば戰爭終局に對する一種の道義的勢力を信頼することが出來た故に、戰爭繼續に反對したのである。故に獨逸の負けたのは力爭の敗北ではない。聯合國の成功は畢竟拾つた勝利に過ぎないと云ふ點に、我々は寧ろ大いなる道義的意義を發見せんとするものである。

斯くして戰爭は終つた。扨、いよ〳〵休戰平和となつて見ると、俄かに勝に乘じて意氣揚々たるものもあれば、戰時の獨逸の脅迫に對して復讐を考ふるものもある。對手の顏色を見て俄かに値段を釣り上げる狡猾なる大道商人の如く、獨逸に對する態度を急に改めた者もないではない。官僚軍閥によつて支配さるゝ我日本が、斯の如き連中の随一であつた事は予輩の多數國民と共に深く遺憾とする所である。さもあらばあれ此等紛々たる要求の上に超越して講和會議は兎も角も動かすべからざる道義的精神によつて支配された。而して根本の考は之からの世界をば一層住心地のよいものにしようといふにある。弱い者でも強い者と同じく其所を得しめ様とするにある。此方針を以て戰爭を終結し、又此精神を以て戰後の世界を一定の組織に統制せんとするのが講和會議を支配する根本精神であつた。講和條件の議定に先つて先づ國際聯盟の事を相談した事などは最も著しき特色であることは先にも述べた。講和條約を後廻しにしたのは抑々間違ひだ、などとしたり顏するものゝ意見が分らない。

講和條件の細目に關する評論は茲に述ぶるを適當としないから略する。只少しく苛酷に過ぎはしないかと云ふ嫌あることを一言して置く。而して苛酷に過ぐると云ふ批評の起る所以は畢竟道義的支配の要求に燃えて居るの證據ではないか。若し夫れ國際聯盟の組織に至つては卽ち國際關係を支配すべき從來の、並びに將來考案せらるべき一切の法則慣行に決定的制裁力を附與せんとするの仕組みであつて、いはゞ混沌たる無政府狀態に

確固たる規律を與へんとするものである。世界全體を作み心地よきものたらしむる爲には先づこゝに發足して、遂に世界一家の理想に到達せねばならぬ事は明白の道理である。從來に於ても世界永久の平和を夢みた多くの思想家は皆此の考を抱いて居つた。之が漸やく今度の講和會議で實現の端緒に就いたのである。最初の試として不徹底なるは餘り嚴しく尤むるには當らない。我々は曲りなりにも國際聯盟の出來た事を喜ぶべきである。而かも我國一部の頑迷者流の間には國家の獨立とか、國家の主權とか云ふ外面の形式によつて、聯盟に反對の聲を擧ぐるものあるは寧ろ嗤ふべきの至りである。

遺憾ながら國際聯盟の仕組は甚だ不徹底である。けれども我々の痛快に堪へざるは國際聯盟の成立を促した根本の精神が國際聯盟とは離れて昨今の國際關係に大いに働かんとしつゝあることである。一つは世界を我事とする考である。もつと具體的にいへば他國の進止行動を他所事に放任して置けぬと云ふ感じである。露西亞の過激派が世界全體に社會革命を起さねば自分達の使命は全うされないと考へて居るのは些か有難迷惑の感がないではないけれども、他國が依然として專制主義でなり、依然として侵略主義であるのを兎や角氣にするのは、強ち他人の疝氣を頭痛に病む者と云ふ事は出來ない。世界全體を弱き者強き者おしなべての安住の樂郷たらしめんには斯の如き態度に出づるも亦止むを得ない。武力的干渉は舊時代の遺物として之を排斥せねばならぬけれども一種の精神的干渉は之からの世の中には益々多くなるだらう。而て此考の論理的結論としても、一つ顯はれて來ねばならぬのは自國の進止行動を世界の自由なる批判に開放せねばならぬと云ふ事であるが、此點が今日未だ十分に行屆いてゐないのは予輩の甚だ遺憾とする所である。寧ろ今日の所世界の自由批判に對して門戸を閉鎖せんとする傾向あるは、就中米國英國等に對して大いに惜まざるを得ない。併し之は政界の樞機が今尚ほ少數特權階級の手にあるが爲めであつて、今日進行中の社會的改造の進行と共に改めらるべきを信じて疑はない。

何れにしても今度の講和會議を支配した思想は、唯一片の國際法ではない。從來の講和會議に見るやうな利害の調節ではない。雄大なる道徳意識がそれであつた事は戰爭後期の新空氣の當然の結果である。日本が講和會議に失敗したと云ふのも畢竟此邊の諒解を缺いて、主張の根據を一に戰爭前期の密約に置いたからである。密約は國際法上依然として效力を有するから之を楯に取つて議論をするに差支はないやうなものゝ、已に根本的精神を異にした新しい時代に於ては古證文を楯に取る議論の

道德的權威なきは理の當然である。從つて今日日本が山東問題などを論ずるに當つても專ら大正五年の日支協約などに基いて立論するのなら、法律上誤りではないけれども、世界の舞臺に於て道德的權威を要求することは出來ない。

國際聯盟の成立は或意味に於て國際關係の根本的改造である。國際關係は聯盟の成立を第一步として之から漸を追うて根本的に改造せられんとして居る。而して改造の根本動機は道義的支配の要求であるが、此要求は只國際關係の方面にのみあらはれたのではない。改造運動の對象となつたものは尙も一つある。卽ち資本勞働の關係である。所謂勞働問題が之れである。否、改造と云へば殆んど直ちに勞働問題を聯想するやうに寧ろ此方面に改造が強く叫ばれて居る。勞働問題も其歷史的起因に遡れば貧乏の根絕であり、次いでは勞働條件の改善であつた。一言にしていへば勞働階級の物質的生活の向上であつた。けれども今は一轉して勞働者に正しき地位を保障すると云ふ事が主要の目的となつた。斯うなると勞働問題も亦道義的支配の要求の一面の表現に外ならない。

改造の要求に根柢する勞働問題の意義、又勞資關係が國際關係と相並んで何故に今日激しく改造を要求せらるゝか等については、又別の機會に於て說く事にしよう。兎に角社會上政治上の諸問題の根軸をなす所の勞働問題も亦實に國際關係の改造と其根本精神を同じうするとを指摘して、道義的支配の要求が今日如何に力強く社會の内外を風靡して居るかを明かにすれば足る。

右述ぶるが如く改造の要求は其發現の方面を異にして、而かも根本精神を同じうする者である。けれども實際の事實を皮相的に觀ると、勞資關係の改造に熱中して居るもの丶中には國際關係の改造に冷淡なものが少くない。又後者に熱中して居るものは概して前者の運動を袖にするの傾がある。此隱し難き實際の現象を我々は如何に觀るべきであるか。よく考へて見ると之には又多少の理由がある。一方の理由は國際關係の改造運動は今日所謂ブールジョアジーの手に握られて居ると云ふ事である。又他の一つの理由は、社會改造の運動を自家の專門的仕事の如く取扱ふもの丶多くが、沒理想の唯物的改造論者であると云ふ事である。之では兩者手を携へやうがない。民衆の間に於ける改造の目覺めが同一の根本精神に促されて居りながら、偶々民衆を代表して其各々の部面を分擔するもの其人を得なかつた爲に、彼此相軋るのが甚だ遺憾である。併しながら之も過渡時代としては止むを得ないが、幸にして我々は今日已に、根本

精神の滔々たる大勢が末節の紛糾をひた押しに押して、兩面の改造運動に精神的統一を與へんとする形勢にあるを觀て、大いに愁眉を開くのである。何を以て之を云ふかならば、所謂勞資關係の改造は、昨今段々沒理想の唯物的な舊式の改造論者の手を離れて、段々理想主義的な、精神主義的の改造論者の手に育まれるやうになつた事である。社會改造論に二つの潮流あることは本誌前號の卷頭論文にも說かれてある。而して理想主義的の立場が漸次重きをなしつゝあるのは、即ち改造の根本精神が民衆の間に段々意識されつゝあることを語るものである。若し夫國際關係の改造に至つては、先にも詳述したるが如く、先、民衆の自覺的要求に出で、偶々ブールジョアジーの手に取扱はれて不徹底なる解決を見んとするや、民衆は猛然として之に反對の聲を擧げて居るではないか。各國の勞働者階級が講和條約の結果に不滿足なるは寧ろ此點に於てゞある。彼等の要求は決して長く埋もれて居ない。其徵候は已に明かである。之亦根本精神より來る自然の順序ではないか。之を要するに兩種の改造運動は今や統一せられんとして居る。否、實に我々の努力によつて之を統一せしめなければならない。而して統一の趨勢は即ち道義的支配の如何に力強く働くものなるかを明かに示すものである。

斯くの如くにして之からの世界は道義の支配する世界である。我々國民は對外對內兩面の生活に於て著しく道義の支配力を感ずることになる。一躍して黃金時代が來ると觀るのも間違だけれども、道義を無視して尙且つ榮える途があると思ふならば、之れ日天に沖して尙前世紀の惡夢に迷ふものに外ならない。油斷はするな、萬一に備へよとの警告は依然として必要であるけれども、然しながら我々の國家生活の理想は最早富國强兵一點張りであつてはならない。道義的支配の疑なき以上、我々は腕力の橫行に警戒し過ぎて、無用の方面に精力を浪費するの愚を重ねてはならない。我々は過去に於て富國强兵の理想の爲めに如何に多くの文化的能力を犧牲にしたかを反省するの必要がある。從來は之も致し方もなかつた。併し之からは遠慮する所なく、我々の能力を全體として自由に活躍さすることが必要である。我々のあらゆる能力の自由なる回轉によつて、玆に高尙なる文化を建設することが國家生活の新理想でなければならない。

新しい國家生活に於て最も大事なものは人間の能力を自由に開展さすることである。斯う云ふと人或は反問するだらう。餘りに自由を許せば又いろ〳〵弊害が起るだらうと。成程人間が

神の如き完全なものでない限り、自由なる活躍に伴つていろいろの弊害が起るに相違ない。併しながら人間は靈的活物である。社會も亦靈能を具備する一個の活物である。人類を以て理想を追うて運命を創造する活物と觀る限り、少くとも人間の本能は貪婪殺伐を好むものと見ざる限り、彼を自由に活かしむれば、時に起る所の幾多の弊害を制御して結局大なる理想に向上發展するものである。發育の盛んな青年は其資性の奔放に任かして置くと却つて少し位の病氣に勝つて行く。所謂老婆心は人間を丸で病氣を造る機械の如く見るから、あゝしてはいけない、斯うしてはいけないと干渉して却つて其眞を傷くることは我々の日常經驗する所である。專制主義は兎に角人間を愚民扱ひにくして徒らに其自由を拘束したがるが、斯くして國民の發達を傷るのみならず、何時の間にやら自分が愚民よりも馬鹿になる事に氣が附かない。我々は人類の靈能を信ずる。其無限の發達を信ずる。從つて之に臨むには警察的たるべからず、教育的たるべきことを主張する。彼に自由を與へよ、すべての個性に自由活躍の機會を許せ。斯くして人格的價値の十分なる開展を計ることが出來る。自由の許與によつて起ることあるべき多少の弊害は、自由なる人格が自ら之を始末して行くことを疑はない。之れ道義的精神に目覺めた新人の衷心の要求である。

されば我々の國家生活に於ては「有らしむべからざるもの」を無からしむると云ふ事は必ずしも必要でない。寧ろ肝要なるは「無かるべからざるもの」を有らしむる事である。富國强兵を唯一の、又は少くとも主要なる理想とした時代に於ては、國民の生活を或一局部に强いて集中せしむるが爲めに、「有らしむべからざるもの」を無からしむるに骨折つた。卽ち自由の拘束である。斯くして人生は頗る無味平凡のものとなつた。斯くの如き方針からは、いはゞ落第生の發生を防ぎ得ても、優等生を輩出せしむることは出來ない。我々の生活を意義あらしめ、人生の內容を豐富ならしむる爲めに必要なのは、多くの優等生を出すことではないか。此の爲めに一人二人の落第生を出すことを怖れてはいけない。否、多くの優等生を出すことが結局すべてを優等生たらしむる所以である。自由は卽ち能力の無限の開展に對する唯一の機會である。拘束は如何に善意であつても、人生を平凡化せしめずんば止まない。而して十九世紀の國家生活は實に人生を平凡にした。否、甚しきは道德的墮落をさへ伴つた。それでも尙多少の向上あり、多少の發展あつたのは、人生の平凡化に對する熱烈なる自由の反抗が戰はれたからである。今や時勢は一變した。人事社會のすべての關係は之より道義的精神の完全なる支配を受けんとして居る。是に於て富國强兵のみ

が國家生活の理想ではない。之が爲めに我々の他の能力の開展を犠牲にするの必要を見なくなつた。斯くして初めて我々は憚る所なくあらゆる方面に於ける人格的自由を高調することが出來るやうになつた。玆に我々は新しき理想を確實に握つて、更に新しき面目の下に國家生活を建て直して行かなければならない。

中澤臨川、牧野博士の兩氏が御病氣の爲めにつひ本號に執筆せらるゝことが出來なかつたのは、讀者諸君と共に編者の深く〳〵遺憾とする所であります。御病氣が癒り次第、必らず御寄稿下さるゝことになつてゐますから、其日の一日も早く來らんことを祈つて居ります。（編者しるす）

各方面に於ける 世界改造の新基礎

國家哲學の更新

杉森孝次郎

個性は成長する多態だ。このやうな個性の保護機關の一が國家だ。交通機關未發達の當時に於ては、自國即全社會であつた。勿論封建時代の日本を例に取つて見ても、英國も、佛國も、わが日本と時を同うして存在した。けれども、それは、星の內の或るものには人類と酷似した生物が棲んでをると假定しても、地球と星との間に汽車も、汽船も、電信も、飛行機船も通はない故に、棲んでゐないと假定したと、實生活上の見地から言へば大差なきと似た事實であつた。日本は一個獨立の社會をなし、日本と英佛等との間には、社會が存しなかつたからである。

吾人は交通機關の意義を理解せねばならない。外務省を建築と見てしまはないだけの知識があるならば、船や電信を物理學と工學で說明し去ることはできない。國家は制度である。國民は人である。國家をその內容實質たる人の方面から呼んで國民といひ、國民をその制度方面から呼んで國家といふのだ。國と國との間を、船車が往來するといふことは、國と國との間に、社會が形成せられるといふことを意味する。船車の內容は人だからだ。そして二人以上の人の意思的關係を中心として見たる生活が社會だからだ。協力が社會の柱だからだ。

人は欲望だ。情愛だ。理性だ。恐怖心だ。投資や貿易が國際間に發達するのは、欲望的國際人の成長だ。異國人間に私交が伸び、或はまたカーライルがゲーテを慕つたり、エマーソンがカーライルを敬愛したり、レーニンがマルクスを尊信したり、わが文壇の人々が、イプセンに私淑し、トルストイを渇仰し、ワイルドに想ひを寄せたりすることは、情愛的國際人の成長だ。科學と哲學との國境を橫斷しての浸潤、傳達は、列國の專門學者が、本質的には協力してその專門學術の進步に從事しつゝあ

るの事實と相俟つて、理性的國際人の成長を意味する。歷山第三世が佛と組み、エドワード第七世が同じくまた佛と組み、勃興の獨逸に對抗せんとしたのは恐怖的國際人の生育の一部的現象であつた。國際聯盟は、これを信ずる或人々の心理から言へば、戰爭そのものに對して發動した恐怖的國際人の出現だ。

協力は社會の條件である。國家自身が一とつの協力だ。國家は一とつの社會であるのだ。協力を信ずるが故に吾人は國家を創造した。吾人が國家を創造するにあたつては、血のつながり、言葉の共通、風俗習慣の同一、地域の共有、それから最後に、しかしながら最重要な位置を占むるものとして、歷史の共有といふが如き自然的社會を出發點として利用した。無理もない事であつた。血緣近ければ情愛生じやすきが通例なり。繼子と實子の場合を見てもわかる話だ。母がその兩者に對する心情の差をいふのだ。勿論國民を繫ぐ紐としての情愛は、家族骨肉を繫ぐ紐としての情愛ほどに自然的强烈性を有しないとは、普通の事實ではある。それは別の問題だ。兎に角血緣が情愛に多少の礎地を供給し、情愛が協力に有力なる機會を準備することは爭はれない。

言葉がちがつてゐては、相手がどんなに善意と、その善意を實行する能力を持つてゐても、われに助けを貸すにたよりあし
し。こつちから言つても同じだ。これでは協力がむつかしい。風俗習慣がひとつであれば、交際が樂だ。地域が遠隔してゐては、近處の他人よりも賴みにたらない親類となる。一旦緩急の際のみではない。平時の生活に於て、會談して理性人の相識を促がす機會も、道路、病院、學校、公園、などといふ共通目的を經驗する機會もすくない。協力の內容が制限される。亞細亞共通の目的とか、歐洲共通の目的とかいふ慣用語が示す如く、だいぶ堅實牢固でないものとなる。一八〇四年から一八〇五年の間に、フィヒテは伯林の公衆にむかつて演說した、「現代の特質」といふ題下に於てだ。そのなかで彼れは「基督教的歐洲人は、本質的には唯だ一とつの民族だ。かれらはこの共同歐洲をかれらの唯一の眞の祖國として認める。そして、その一方のはてから、他方のはてに至るまで、かれらは殆ど同じ目的を追求し、いつも似通つた動機に驅られて動作する」と言うてをる。ところが、一八〇六年には、ナポレオンの鐵蹄が、イエナの穀物畑と、葡萄園と、山林田野の悉くを蹂躪した。家庭も、社交も、すべての生活は破壞された。そして一八〇七年には、ティルシットの和議が結ばれて、普魯西國はその領土の半ばを取らる。その國民的威信の全部を失墜した。それで一八〇八年の「獨逸國

民に愬ふる演説」ともなつたわけだ。基督教的歐洲人の唯一の眞の祖國は、一九一九年の暮になつても、容易に出來さうもない。すくなくとも一九一八年の十一月十一日までには、そんなものは出來てゐなかつた。

亞細亞同文國の現狀はどうだ。無論地域の異同ばかりが、これらの現象の原因ではない。わかりきつたことだ。けれども、日本海一とつ隔てゝも、英海峽や北海を一とつ挾んでも、胃の腑と、心臟と頭の血が通はない程度は、恐ろしい。交通機關は血管であり、神經脈であるのだが、無い筈の魂とかいふやつが、殆ど獨立に存在するかの如くに、國際心の發育は遲々として堅實なりだ。

歷史の共有は記憶の共有だ。廻顧の共有だ。けれども、歷史は理想の過去だ。現在の歷史は理想的要素を含む。全然理想でなくては實は嘘だ。歷史の共有の畏ろしさはこゝにあるのだ。瑞西の例を見ると、血も言葉も三つにわかれてゐる。獨佛伊にだ。それだのに瑞西の國民的鞏固も、國家的統一も、他のどの國にも劣らない。理由は簡單である。歷史を共有してゐるからだ。骨の折れた戰ひを、協力して戰つた、そして勝つたといふ記憶が、かれら三民族を結合してゐるのだ。現在は過去の成果だ。明日の自己は、今日の自己の意思として存在する。國としても個人としても、道理は同じだ。過去の努力の産物である現在の制度、習慣、理想に對して、瑞西の全國民は、誇りを共有してをる。希望をも、確信をも、卽ち主義理想をも共有してをるのだ。これが瑞西の異語、異血、そして同國である事實の說明だ。エリザベス治下の數年が、其以前の數代數世紀にもまして英國民の一致團結を促進したこと、一七九二年中の佛蘭西が、外冦のために、國内の分爭を轉じて統一に化し得た事例は、讀者の耳に章魚かも知れない。最も注意すべき一事は、國際間に交通が開けて、發達するといふことは、それ自身が、國際的歷史の誕生と成長であるといふ事だ。亞米利加はマンロー主義で著名だ。けれども、一九一七年の四月六日に、公然歐洲に出兵する緒に就いたのは、そして積極的參戰の功を奏したのは、亞米利加が、平和事業に於てのみならず、戰時の英佛伊等と歷史を共有するの緒に出でた事を意味する。政治上の現實家は、國際競爭に主として注意する。あだかも政治上の理想家が、國際協力に主として注意すると相對する現象だ。國際關係を競爭のみと見る事は平時の國際生活を、戰時の國際生活の準備、殘生、低調と見る事だ。國際關係を協力のみと見る事は、戰爭を、平時の國際生活の軌道上に、外から置かれた石塊の所爲と見る事だ。兩見解ともに誤りだ。しかしながら、戰爭は變態にして、平和が常態なり

と見ることは、幼稚なる今日の國際關係に於てもすでに眞だ。郵便の國際組織はどうだ。

歴史の過去は理想の過去であつて、今日に於て吾人が主義理想を共有することは、明日から見れば歴史が吾人に共有された原因だ。この點から觀察して、諸國民は、歴史共有の原因を、文化方面を中心として鋭意創造しつゝある。政治的にも、大公使館と領事館とは、異國民が歴史を共有しつゝある事實の不完全なる陰影だ。經濟的には、輸出入と外債とがそれだ。佛英は帝政時代に、ケレンスキー時代のロシヤに投資した。レーニンがそれを踏む旨宣言したのが、佛英をして反レーニン派を援けしむる一動機ともなつたことを考へて見ても、國際投資が、國際歴史の一要素たることはわかる。交通機關の發達は、諸國民をして血、言語、風俗習慣、及び地域をのみならず、一層重要な事實として、歴史を共有せしむることを意味する。文化、經濟、及び政治の三方面に於てだ。道德は抽象的に存しない。文化、經濟、及び政治が共有される時には、道德的社會が、吾人の自覺のみを、殘る條件として成り立つ。

交通機關は、一國の文化人、經濟人、政治人を、他國のそれらと接觸させるのみならず、道德人をもさうする。生活は、それが現實に帶着する形相は、文化であつても、經濟であつても、政治であつても、實體は道德だ。生活の自覺が道德だ。丁度吾人が、平素勞働者のお陰になつてゐながら、封建道德の遺習に因はれて、勞働者を馬鹿にしてをるやうに、吾人は國際的社會に負ふところあるに拘らず、外國とさへ聞けば、喧嘩腰になり、高飛車にでることに得意を感ずる。特にどの國民についてではない、すべての國民について言ふのだが、これは粗大な過誤だ。他國の天産物、人産物が、どれほど吾人自身の利益と幸福とを、平常生活、及び異常生活の兩態にわたつて、補助し、增進してをるかは、精査したら、何人も、月末の勘定書を推し廣げて、こんなであつたかと一驚を喫するほどだらう。時計も、電燈も、汽車も、種痘も、進化論も、シェクスピヤも、そんなものは、實はすべてほしくはないのだ。生存の必要上、開港、國交を選ばないわけに行かん。それを選んだ以上は、すかない保護色をも着けねばならんのだ。好んで採用する外國品、外國式、外國語ではないのだと言ふ人があるかも知れない。けれども、個性は成長する多態であつて、無限の機會を要求するものであることを、その人は知らずにゐるのだ。國家自身が、個性のための機會たるところに、其全價値を有することを、その人は明かに視ないのだ。國家は組織せられたる機會だ。生命財産の安固をも保障し、政府の各省が、符徵的に指示する如くに、各人の各能に、訓練

の機會と、活用の機會とをも得さす。人は協力の手段でない。協力が人の手段だ。協力しないでは、火事も、洪水も、疫病も、外寇も、盗賊も、制することができない。個性の保護は協力を呼ぶ。國家は協力の目的でなく、協力の手段だ。協力の目的は個性だ。

國家は國民の各能を保護し、各必要を滿たすことを目的とする。理想の國家はだ。これは不思議でない。國民が作る國家でないか。國民は人でないか。自衛自達の要具として、人は國家を作るのだ。或は作られたる國家を繼承するのだ。けれども、このやうな國民的國家であつてさへも、なほ且つその目的通りに、國民の各能と各必要とを充分に待遇することはできない。個性は成長する多態であるのに、國家は有限の制度だからだ。成長する多態としての個性は、自己に忠實であるためには、機會を人爲的に、卽ち好んで制限することはできない。國家的社會が、國際的社會に伸達した事は、個性の機會の増大だ。

善を競爭するために、自國と外國とを對立させることには道德的意義がある。創造的意義を有するからだ。生産を奬勵する機會となるからだ。善とは言ふまでもなく公善だ。公利公福だ。機會を制限するために自國と外國とを對立させることには不道德がある。不經濟があるからだ。生活全體の不經濟があるからだ。個性の損失があるからだ。獨逸の兵士も、英國のリスターのお蔭で、自傷しても救かるが如しだ。その兵士が、未來のワツトかも知れない。レムブラントかも知れない。奴隸解放の政治家リンカンかも知れない。外國とは名のみ。國際的社會の片影なんだ。國家的社會と國際的社會とは、然るに、唯一の社會の内の、比較的に自己に直接な、そして組織せられたる部分と、比較的に自己に間接な、そして組織されてない部分との差だ。もつと簡明に言ふならば、富士山と日本との差だ。位置の問題だ。パースペクティヴの問題だ。大小から言へば、日本の方が富士山よりも大なるが如く、國際的社會の方が國家よりも大だ。けれども、裾野からお山を見上げ、お山の上に立つて四邊を望めば、崇拜と自尊の對象は、日本でなくて富士だ。眼の中に飛び込んだ砂粒をだすことは、大西洋の浮流水雷を浚ふよりも急務だから、これは道德的當然事だ。

恐らくは學理的精確を犧牲としたる比喩に耽つた。國家は國民の個性のための、そして國民によつて作られたる、組織せられたる機會だ。社會は人類の個性のための、そして人類によつて作られたる、まだ組織されてない機會だ。同じ材料でも、組織された方が多く用をなすが故に、國際的社會は、國家的社會の如くに、次第に組織されねばならない。現存の國家は、國際

的社會を組織する階程であらねばならない。國際的社會を組織する機會であらねばならない。國際的社會を組織することが國家の目的であるとは言はない。國家の目的は常に個性にある。國家の目的とする個性が、それ自身の保護成長のために、國際的社會の組織を要求するのだ。國家は、個性のこの要求を阻碍する權利を持たない。刀が武士にむかつて、槍と弓を使ふなと命じた話は聞かない。國際的社會は、國家的社會に取つて代はるゝのではなく、國家的社會を援助するものだ。個性の目的を成遂するためにだ。

社會は一體だ。國際的社會のほかに、今明日の世界に社會はない。國家はその中の一大組織だ。國家と社會との關係を、個性を本位として調節し、統一することが新國家哲學の一任務だ。國家と國際的社會とを、本質的に別なものと假定しては、統一はできない。調節もできない。水と油だ。けれども、國家と國際的社會とは、本質的には一だ。個性の機會が、兩者の全意義だからである。吾人の任務は、個性に開眼するにある。何ぞその多態にして、成長性の無限なる。藝術家は、人類の藝術心を支配するまでに、豐富に自己の藝術能を當養すべし。醫學者は人類の健康を保險するほどに、遍ねく病理と治術を研究すべし。生產家は、人類の物質的欲望を完全に滿たすまで努力せよ。國家は即ち、國民のかくの如き創造欲に、機會を供給する直接當事者であらねばならない。國民のために、國際的社會の機會にむかつて、窓を明けねばならない故に、國家は、他の國民のために、自己の窓をも、相當に明けねばならない。さうでないと、個人間に於ける利己主義と同様の事實が、國際間に許されたことになる。個人間に於ける利己主義の價値は、仲間の人々に迷惑をかけるといふ點からのみは決定されない。當人が損失する點からも決定される。丁度その通りに、國際間に於ける利己主義は、直接には他國が被むる損害の故に、けれども間接には自國が招く應報の故に否定される。國際的社會の組織が充實完備するに隨つて、この、功績と報償との間の關係は、ます〳〵精確になる。新國家哲學は、國民の、及び國際民の個性のために、この原則を支配せねばならない。支配とは利用するのだ。

各專門が、それ〴〵に一個の組織と社會とを形成し、そしてそれを保護し、その發達に從事する事は、近代の一大現象である。產業組合主義の一傾向は、產業組合を擁して、國家と對抗せんとし、或は國家を奪はんとさへしてゐる。國家と各專門とは、從來通り、單純に主從關係を保持すべきであるか、その間に權限を改整すべき餘地あるかは、目下の一問題だ。國家は立法と行政もしくは執政を制度上の樞軸として存立する。血、言

葉、歴史等を共有する人々が、その自然的社會を機會として、人爲的社會を創造した結果が國家だ。人爲的とは、政治的といふ事だ。政治的とは、立法と行政だ。自然的社會を材料として、これに立法と行政といふ加工をなし、理想的社會を製作する、そして出來るものが國家なのだ。立法は議會が、行政は政府官廳が代表する。無政府主義は、各專門に共通の要素ある事を無視してをるが故に不完全だ。過誤だ。共通の要素は、これを取扱ふに法律を以てすることが最も經濟的だ。卑近な例は、詩人も、商人も、生命財産の安固を等しく必要とする事だ。そこで、司法、警察を設けることに意義がある。國家は、國民通有の必要を滿たすための方法として、各專門の外に、當然存すべきものだ。各專門は、その專門特有の利害に關しては、自治權を持たねばならい。內務省が、文藝上の自然主義と浪漫主義との選擇にまで干渉すべきでない。產業にも、學術にも、この理は當て嵌まる。國家は國民の國家である。それが國家の當然態だ。或專門のみの保護機關であつてはならない。同時に、國家は、文化的及び經濟的專門の、どれをも不親切に取り扱つてはならない。卽ち各專門に共通の目的を發見して、それを成就するための機會であることが、國家の職分だ。及びそれと關聯して、各專門間の協力を助成することが國家の任務だ。徵兵、納稅の如き共通能力のためには量的協力の原則を適用し、農夫、商人、敎師の如き特異能力のためには質的協力の原則を適用する。總理大臣の下に諸省が統べられてゐる事がその象徵的事實だ。各專門、各職業の自治を條件とした中央集權といふ事に歸するのだ。簡單に言ひ表はすならば、各專門間に、量的及び質的兩樣の協力を實現するための專門職が國家だ。

國家は國民の國家であらねばならん。筋肉勞働者を馬鹿にし頭腦勞働者に媚びる如きは、土臺まちがつた話だ。正業に從事する者には道德的資格が完全してゐる。國家の原則は道德だ。各專門を通じて道德ほど共有的なものはない。道德は、人類の最根本の利害だ。一國民の場合に於ては尙更らの事、道德にもまして通有の必要はない。道德的自尊心、これをこそ鍵調として國家は各專門を合奏さすべきなれ。健康、敎育、家族、娛樂、これらに關屬する機會の如きは、また實に平板なる通有的必要だ。これを滿たす意思だにない國家は、當然責任が問はれる。敎育の機會を完全にすることは、自治の機會を完全にするための參政權と共に、新國家哲學のいろはにも算入しがたい原始的公理だ。正業に從事する良民を、參政權から除外するのは、この上もない道德的侮辱だ。親の貧富によつて、小供の敎育を薄くし、厚くすることは、國民的能率を高める目的から言つて

さへも罪悪だ。國民の一半たる婦人を、殊にその結婚者を、生計と母情とのために、その夫の奴隷たる位置に束縛する事は、理性人と情愛人に機會を與へない制度である。こゝにも道徳的原則が適用されねばならない。國家は、あらゆる意味に於て、活人力でなくはたらない。資本家の機會でもなく、成人の機會でもなく、男子の機會でもなく、國民の個性の機會であらねばならぬからだ。外に武力的帝國主義を脱ぎ、内に專制主義を脱いで、内外の個性を目的とする機會の組織が、吾人が要求する國家だ。

新國家哲學は、しかしながら、ダヌンチョが何をなしつゝあるかを知る。クレマンソーが何をなしたかを知る。そのクレマンソーが、最近の總選擧に於て、いかに大勝を博したるかを知る。ロイドジョージが誰であるかを知る、大英帝國民が、獨露に對して、どういふ感情を持つてをるかを知る。共和黨が、合衆國で、いかなる形勢を呈しつゝあるかを知る。文化的、經濟的、道徳的自己を主張するためにも、生存は必要であることを知る。人は理性のみに支配されず、情愛に動き、欲望で進み、恐怖で退く天質を永久に脱却しない事を知る。心理と歴史を利用しないでは、論理は物にならない事を知る。數十年でも、ナポレオンは支配し、瞬間でも、耶蘇は支配された事を知る。形體と精神とを、全然離して考ふることの不眞を知る。自然的社會を聰明化することによつて、理想的社會を、地球の表面に、一齊に開發させる用意を、新國家哲學は怠らない。新國家哲學の神は聰明だ。勇氣ある聰明だ。

歐洲戰爭と經濟思潮の動搖

法學博士　堀江歸一

「コスモポリタニズム」と「ナシヨナリズム」

歐洲戰爭は交戰諸國の經濟生活上に、大なる波瀾を惹起し、講和成立の今日に於て、尚ほ諸方面に於ける破綻の收拾す可からざるものあると同時に、經濟政策の基調たる可き經濟思潮にも亦著しき動搖を來し、今や人をして岐路に迷はしむるの甚だしきものあり。蓋し從來經濟思潮として、實際の政策を裨したるものには、二個の矛盾したる思想の存在したることを認めざる可からず、一は「ナシヨナリズム」にして、他は「コスモポリタニズム」又は「インターナシヨナリズム」と稱す可きものなり。前者に於ては一國は國家を一の經濟單位として、其下に於て

國民をして自給自足の生活を營ましめんとするに反し、後者に於ては一國が他國と經濟上の關係を結ぶに就て、何等の制限を加へず、國民をして其好む所に於て、外國と經濟上の關係を密ならしめ、寧ろ國際間に於ける經濟上の障壁を撤去し、其境界を絶滅するを要旨とするの趣ありき。

從來「コスモポリタニズム」に依て、國民の經濟生活を律したるものは英國にして、多年自由貿易の下に、國民をして其好む所の市場に於て、物資を購ひ、又其好む所の市場に向つて、物資を賣らしめ、國家として其賣買の自由に干渉せず、單に諸國に向つて、未開諸國に對して、門戸開放、機會均等の主義を以て、臨むことを求むるに止めたり。蓋し或る一國が未開國に優越權を擁して、其國内に開發せらるゝ天然富源の供給を獨占するの處置に出でんか、原料品食料品の供給を他國に仰ぐ英國經濟の根柢に龜裂を生ずることを免かれざるを以てなり。斯る政策を實行しつゝある間に、英國が今日の經濟的繁榮の基礎を築きたるの事實は之を否定す可からず。第一外國貿易の自由に依り、國民は世界到る所の市場に就て、低廉なる代價を以て、食料品を買入れ、以て其生活を安易にし、第二未開國に開發せられたる富源は英國自ら之を輸入し、自國に於ける製造工業の原料品を豐富ならしめ、第三斯く內國の經濟社會の發達するに隨ひ、蓄積せられたる資本は外國に放下せられ、之に對する利子收益は原料品食料品等の輸入價格を決濟するの資金に供せられて、益々其輸入を容易にし、第四外國貿易の隆盛に伴ひ、或は內國の物資を輸出する爲めに、或は外國の物資を輸入する爲めに、海運業の繁榮を促し、海運業者が運賃の形態に於て、內國に吸收するを得る資金は英國の債權を加重するに至れり。英國が「コスモポリタニズム」の經濟政策を施し、國際經濟と國民經濟との關係を融和するに對して、全然正反對に出でたるは「ナショナリズム」を基礎とする獨逸以下大陸諸國の經濟政策にして、諸國は何れも生活必需品若しくは工業原料品の供給に就て外國より獨立するの必要を認め、此見地に於て外國貿易を制限し、內地產業殊に農業並に一部の工業に保護を加へて、其存立を計畫したり。

戰爭前に於ける英國の經濟狀態を一瞥するに、千九百十三年に於て、輸出貿易五億二千五百二十四萬五千磅に對して、輸入貿易七億六千八百七十三萬四千磅に上り、二億四千三百四十八萬九千磅の輸入超過を告げ、然も連年此程度の輸入超過を生じて已まざりしは、前記の如く對外放資に對する利子收益並に海運業の運賃其他の債權あるに歸せざる可からず、而して輸入貿易の內容を檢するに食料、飲料並に煙草は二億九千二十萬磅、原

料品は二億八千百八十二萬磅にして、輸入貿易總額に對する割合に於ては、兩者共に三割七分乃至三割六分の間に居り、隨て輸入貿易の七割以上は食料と原料との二者に係り、斯る程度の輸入ありて、英國は始めて國民の給養と工業の經營とを全うするを得たるものなり。故に斯く「コスモタリニズム」の下に外國の物資供給に依頼し、又外國に自國物資の販路を維持し、更に進んで外國に資金を放下し、而して自國經濟上の繁榮を期するには必ずや、世界平和の存續の之に隨伴するを必要條件とするや、論を俟たず。コブデン倶樂部に屬する論客が當時の正統學派の經濟學者と共に、自由貿易政策を主張するに當り、前者は自由貿易を通じて、世界の永世平和を維持せんとし、後者が世界の永世平和の持續せらる可き推定の下に、議論を進めたるもの決して偶然に非ざるなり。

獨逸が帝國の下に、經濟政策を定むるや、一に國家を以て經濟上に於ける單位とし、當初より外國貿易の方針に就て、國家自ら干渉を加ふるを怠らざりき。而して國力の發達に伴ひ、外國に資金の放下せらるゝものあり、商工業發達して、農業の進歩之に副はず、自然外國より食料品原料品の輸入せらるゝことの盛ならんとするに至るや、帝國は關税政策に依て、之を掣肘するの擧に出で、自國をして國民生活上に、將た又其礎工業經營上に外國に對して獨立せしむるに苦心し、以て近年に及べり。固より外國より廉價を以て、輸入せらるゝ農産物の供給を關税に依て遮斷するときは、內國の農業を保護するに足る可しと雖も、內國に於ける農産物の價格を騰貴せしめて國民の生活を壓迫するに至るは論を俟たず。隨て獨逸の如き自給自足の國家を樹立するの主義を徹底する能はず、自給主義を標榜する一方に、食料品原料品の外國より輸入せらるゝもの、相當の數量に上り、現に千九百十二年の統計に徵するに、輸入貿易百十二億六百七十一萬馬克の內、農産物の輸入高が七十一億二十六萬馬克を數うるが如き、自ら自給國たらんと欲して自給國たるを得ざりしの事實は頗る明白なりとす可し。

戰爭と經濟政策上の基調

果して然らば英國が自由貿易政策の下に、世界の永世平和を維持する能はず、自ら多額の原料品や、食料品を外國より輸入するの地位に居りながら、戰爭に從ひたることの大なる失策なりしが如く、獨逸が其計畫したる自給自足主義の毫も實現せられざる場合に、戰爭の端を開きたることも、亦著しき逆算なりとせざる可からず。兩國が戰爭に從ひつゝある數年間に於て、食料の生産分配消費に就て極端なる政策を施し、進んで價格公

定の處置に出でたるが如き要するに戰爭に伴つて生ず可き變動に對する經濟上の政策に就て、平生の施設に缺くるものありしが故に外ならず。英國が平生優勢なる海軍力を維持する以上は、世界如何なる方面よりも物資の供給を仰ぐに難からざるの自信を有したるに拘はらず、此自信は獨逸の潜航艇封鎖に依て打破せられ、今更らの如く海上國として、戰時に於ける物資供給上の不安の甚だしきを感ぜしめ、加ふるに輸入する物資の代價騰貴著しきに至れる他の一面に於て、平時外國より收得したる對外債權の收入殊に運賃收入に減損を招きて、爲めに國際貸借の關係の打破せられたるが如き、英國經濟組織の缺陷の暴露したるものと認めざるを得ず。

然れども之を獨逸の戰時經濟狀態に就て見るも、亦大なる缺陷の存したることを疑ふ可からず。獨逸が經濟生活上の自給主義を實現する目的を以て關稅政策を變更したるは、實に千八百七十九年ならずや。其後一時關稅政策を再變して、外國より農產物の輸入を迎へたる時なきに非ずと雖も、固より短日時の變態たるに止まり、大體に於て農業保護の政策を行うこと、四十年の久しきに及べるを見る可し。然も開戰の當初より食料品の供給缺乏に憂慮するは勿論外國より平生六億馬克に近き程度に於て輸入する棉花や、二億馬克を超へて、輸入する羊毛の供給の杜絕したる曉には、國民の被服を如何にし可きやの點に就て、確乎たる成算を有せず、短日月の間に勝敗を決するの急に迫られて潜航艇封鎖を強行し、却て北米合衆國をして自國に敵對するの地位に立たしめ、國民が事實に於て饑餓に陷れるの結果、講和の已むを得ざるに至れるは、經濟上の經綸の伴はざる戰爭を敢てしたるの災禍とせざる可からず。

然も之を他の一面より考ふるに、獨逸は自給主義を徹底せざりしが爲めに、戰爭の持續に困難を感じたるが如しと雖も、若しも自給主義を徹底的に實行したる場合に、彼の如き大戰爭に當るを得たるや否や、一個の問題とせざる可からず。今回の戰爭に際して、列國の識者間に三「エム」の說なるものを生じたり。即ち戰爭に於て、一國をして優勝の地位に立たしむるには第一にMen（人）第二にMoney（軍資金）第三にMunition（軍需品）を要し、是等の一を缺くときは、如何なる國も到底優勝者たる能はず、現に獨逸が結局戰爭に敗北したるも、是等三種の「エム」に缺くるに至れるが爲めたりと云ふもの、此說の生じたる所以たり。而して獨逸が數年の久しきに亘り、世界の諸强國を對手とする戰爭に從ひ、相當の成績を收め得たるは何故なりやと云へば、要するに獨逸が多年間必ずしも「ナショナリズム」を基礎とする自給的經濟政策を勵行せず、或る程度ま

で、外國に原料品食料品の供給を求むるの危險を顧みず、商工業の發達を謀りたるが爲めなり。獨逸の人口が千九百十四年に於て六千七百八十一萬人を數へ、製鐵、製鋼業は普魯西、アルサス、ローレン、バイエルン、ザクセンの諸地方に起り、加ふるに國民に貯蓄せられ、又運用せられつゝある資本の豐富と爲れるは、即ち獨逸をして戰時に必要とする前記三箇の「エム」を有せしむるの道理なると共に、是等の「エム」を有するに至れるは、畢竟商工業發達の致す所とせざる可からず。

玆に於てか獨逸立國の根柢には經濟上より觀察して、大なる矛盾の存するを免かれざりき。戰爭の遂行に必要なる三個の「エム」を備へんとすれば、商工業の繁榮を謀らざる可からず。商工業上の繁榮を求むるときは、自國民の生活上に、將た又基礎工業の經營上に外國に依賴する所多くして、結局開戰の曉に大なる打擊を蒙らざるを得ず。英國亦然るものあり。三個の「エム」は備はり、又兵員の如きも、國土の割合に人口の饒かなるに乘じて、戰爭の開始後に養成するを得たりと雖も、外國の物資供給の斷絕したる爲めに、大なる苦痛を感じたるは、敢て獨逸と異なるものあるを知らざるの狀なりき。旣に然りとすれば、一國は戰爭の遂行を便ならしむるの條件を備へつゝある傍らに於て、之を不便ならしむるの事實に接しつゝあるものと見る可く、此矛盾の解決せられざる間は、國家をして安んじて戰爭に從はしむる能はざるなり。

今や歐洲大戰爭の後を承けて、國際聯盟の規約は世界文明國の承認する所となり、列國共同の力に依て、國際間に於ける永久的平和を維持せんとするに至れり。若しも列國にして國際聯盟の効果を信じ、又、爭に訴へずして國際間の爭議を解決するの希望を懷くものならんか、今日こそ經濟上に存する國際間の障壁を撤去して、「コスモポリタリズム」の經濟政策を實行せざる可からざるの道理なるに拘はらず、列國經濟政策の方嚮は決して斯の如くならず、戰爭を機會として、却て「ナショナリズム」の風潮を帶びんとするに至つては、國際聯盟の効果も亦微弱なりとせざるを得ざるなり。

勞働の價値大に增進す

從來勞働を尊重する經濟學說としては、或は勞働價値說あり、或は勞働全收權說ありと雖も、是等の說たる現時の經濟組織の下に於て、未だ完全に實行せらるゝに至らず。然も今回の戰爭を機會として、歐米諸交戰國を通じて、勞働を尊重し、又勞働者に優越せる社會的地位を與ふるに至れるは、之を否定する能はず。蓋し今回の戰爭に於て、交戰諸國が決勝的勝利を收めん

とするや、之に要したるもの丶兵員と軍需品との二者に外ならざりしは、論を俟たず。然らば兵員は如何にして徴募せられたりやと云へば、專ら勞働者階級に之を求めたるものなり。軍需品は如何にして製造せられたりやと云へば、一に勞働者階級の勞働力に依賴したるが故なり。現に英國の如き開戰の當初に於て、政府自ら勞働者の代表たる職工組合聯合會の當事者と會商して、職工組合をして所謂制限的條件を撤回せしめ、續いて勞働者の諒解を得て、軍需品法を制定し、軍需工業に於ける勞働爭議に對して、强制仲裁制度を適用することゝし、以て軍需品の製造を豫期の程度に進捗するを得たるが、斯の如きは畢竟勞働者の愛國心公共心に訴へて、事の成就を得たるものなり。勞働者自ら其一身の利害を犧牲に供して、兵員の徴募に於て軍需品の製造に於て、國家の急に赴き、事實斯る勞働者の獻身的所業に依て、國家をして戰捷の榮譽と利益とを占むるに至らしめたるものとすれば、戰後の今日に於て、勞働者が戰時に於ける努力の報酬として、求むる所の大なる可きは論を俟たざるなり。

　戰爭の終熄と相前後して、戰前に於ては、勞働問題研究者の主張に止まれるギルド、ソーシャリズムが純然たる勞働者階級の主張と爲れるは吾人の看過する能はざる所なり。ギルド、ソーシャリズムと稱するは、之を一言にして云へば勞働者をして產業の管理權を掌握し、勞働者頭上の利害に關係ある事項は總て勞働者自身の意思に依て、之を決定せしめんとするものなり。斯る主張の戰後に於て、勞働者階級に熾烈と爲れるは、要するに勞働者自ら其社會的地位を上進し、資本家に對抗して、讓る所なからんとする結果なりとす可し。今や英米兩國の勞働者社會に於て、勞働者の要求しつゝある所のものは、賃銀上進又は勞働時間短縮と云ふが如き、從來傳唱せられたる事項に非ず、是等は寧ろ今日彼等の眼中に存せず、彼等の要求は他の方面に進みつゝあることを知らざる可からず。英國の勞働黨が千九百十八年の會議に於て、社會の新秩序として、如何なる事を決議したるや、第一國民的最小限度の普及、第二產業の民主的管理、第三財政に於ける革命、第四公共の利益に對する剩餘財の收用こそ、勞働黨が將來の社會に於ける四本の柱とする所にして、斯くて社會組織の改造を完成せんとす。米佛兩國の勞働者の要求する所亦之に類似するは勿論過激思想に感染したる獨逸に於ては、勞働者の要求更に峻烈なるものゝある可きを想像するに難からざるなり。

　彼の華盛頓に開會せられたる第一次勞働會議が歐米諸國の重要視する所と爲らず、緊張せざる氣分を以て、議事を終始した

は何故なりやと云へば此會議の議事に上れる事項が歐米諸國に於ける既定の事實に屬し、寧ろ時代後れの觀ある一方に、勞働者の要求が意外の邊に進みつゝあれるが故なるのみ。斯る時勢に顧みられざる勞働條件に對しても、日本の政府並に資本家代表者は我國に於て之を採用するを困難なりとし、保守頑冥なる意見の限りを盡して抗爭したり。然も思想は國際間に共通するものにして、如何なる勢力を以てするも、一國又は多數の國に行はれつゝある思想の他國に誘導せらるゝことを防止し得べからず。我國に於て保守的思想の横行しつゝある今日、外國の新思想を攝取し、之を消化して、國民の榮養を增進するに、能く困難の伴うもののなきを得るや否や、余の甚だ覺束なく感ずる所なり。

此他資本主義若しくは資本的生產制度に對しても、其效果に就て、大なる疑惑を生じ、少なくとも資本主義の跋扈を制する爲めに、代價公定、利益制限の政策を講ずるか、又は事業其ものを國有とするの説を生じつゝあるが如き、經濟思潮に於ける大なる動搖を以て之を見る可く、其影響に就て、論述す可きもの多々あれども、姑く他日に讓りて、擱筆せんとす。

政治學の革新

法學博士 吉野作造

今度の戰爭が、物質上にも精神上にも、非常な影響を人類の生活に與へたことは云ふ迄もないが、殊に社會生活の理想に根本的變革を與へたことは最も注意すべき現象である。中央公論が此點に着眼して各方面に起れる戰爭の影響を研究せんとするは寔に時宜に適した企てゞあると思ふ。予は其中政治の方面を分擔したのであるが、此點に關しては實は「國家生活の一新」と題する別の論文に於て可なり詳細に說いたから、改めて茲に說き立てる程の新らしいものを有たない。依て此所には只政治即ち我々の國家生活に於ける行爲の規範を論ずる政治學が、戰爭の影響として如何なる根本的革新を見たか、又は見んとして居るかを簡單に述べるに止めようと思ふ。

戰爭以前の政治學に在つては強制組織としての、國家其物が絕對の價値であつた。凡て人類は團體生活即ち社會に於て初めて其生存を全うすることは云ふを俟たない。而して其社會生活

を總織的に可能ならしむる所以のものは强制組織によつて秩序立てられる事にある。社會生活を此方面から觀る時、我々は特に之を國家生活と云ふ。我々は日常の用語例に於て國家と社會とを混同し、國家の文化を進めるとか、日本帝國の精華を誇るとか云ふ。けれども此場合の國家は日本民族の社會生活を意味するのである。政治學で國家と云ふ時には、專ら其社會生活が强制組織に於て統制されたる方面のみを着眼しなければならない。此方面を兎や角批評したからというて日本民族の團體生活其物を兎や角云ふものと誤解してはならない。

斯う云ふ見地からすれば我々の生活に於て最も大事なのは其團體生活の上に最高の文化を開展することであるといはなければならない。所謂强制組織も此目的の爲に存在の理由がある。無政府主義者は此最高の目的の爲めに邪魔になるからといふので强制組識を否認する、從つて政府と法律とに依て表現さるゝ國家を否認するけれども、我々は此立場を承認しない。けれども法律と政府とを承認する所以のものは、文化的目的の達成の爲めであつて、强制其事を絕對の目標とするのではない。

けれども從來の政治學は、强制組織としての國家其物を絕對の價値とした。我々の所謂正しい立場から云つても、國家の强制權は出來る丈有効、優勢であらねばならぬ。如何にすれば强制組織を最も有効に構成し且つ運用することが出來るかは政治學上の主要なる問題でなければならない。けれども其有効なる構成と運用其事に絕對の價値あるのではない。そは何所までも或るより高い目的の手段であらねばならぬ。然るに從來の政治學は此點に於て「手段」を「目的」とするの重大なる誤謬に陷つた。如何なる點に於て此誤謬を犯したかと云ふ事は、一々此所に例を擧げて說明するの必要もあるまい。

尤も從來の政治學が斯くの如き誤謬を犯したと云ふについては相當の理由がある。そは從來の國家生活、殊に其國際的方面の現實が、政治の理論を究むる者並びに其實際に當るもの等をして國家生活の眞の理想を正しく視ることを妨げたからである。此事は別の論文に詳しく述べたからこゝに繰り返す必要はない。要するに從來の國際關係が全然無政府的狀態であつて、何等道義の支配がなかつた、卽ち優勝劣敗弱肉强食の殺伐なる狀態であつたから、苟も獨立自存を捨てない以上、各國家は富國强兵を以て差當りの理想としなければならなかつた。此富國强兵の理想が、强制組織の發開を以て第一の、否な唯一の仕事とするに至るは怪むに足らない。斯くして從來の政治學は「何の爲めの强制組織」と云ふ點を忘れた。否、之を考ふるに暇なかつたのである。

從つて段々デモクラシーの精神が起つて、專制的政治方針に反抗するやうになつても、それでも尙從來の政治學者は强制組織の有効なる構成、運用と云ふ點に執着してデモクラシーの効用を動もすれば說かんとして居つた。卽ち何の爲めにデモクラシーを推奬するかといへば國家の强制權を强むる爲めに必要だからと云ふ。頑迷な專制主義者はデモクランーの精神は國家の强制權を弱むると考へて居るけれども、之は誤りだ。少くとも今日の時代に於て强制權の本當の强味は民衆の承認になければならない。强制力を民衆が自分とは何の係はりのない、外よりの力だと考ふる時に國家的結束の中心點が動搖を始める。故にデモクラシーは實は本當に國家を固むる所以であると說いたのである。之は無論間違ではない。けれどもデモクラシーの精神は一つの文化的現象としても少し深い根柢を有するものであつたけれども、其點を力說することは從來の政治學には係はりのないものとせられて居つた。

そこで從來の政治學は我々の社會生活の本當の理想に目覺めて居る人にとつては一つの躓きであつたともいへる。從來の政治學の系統の中に於て多少の煩悶無しにデモクラシーは其安全なる地位を見出し難かつた嫌がある。然るに今や時勢が變つた。富國强兵は最早や國家生活の唯一の理想ではない。强制組織其物を絕對の價値と認めねばならなかつた時代は過ぎた。是に於て今後の政治學は初めて强制組織に當然の價値を認め、人類の文化的進步向上を計る爲めの一つの科學として成立することが出來るやうになつたのである。直接の硏究對象たる强制組織についていはんか。從來の政治學は其推奬者であつた。少くとも其代辯者であつた。今後の政治學は其監視人とならなければならない。

政治學の着眼點が、右のやうに變つた結果として起る一つの著しい現象は其倫理學との提携である。人文の進步の爲めに國家は何を爲すべきや、强制組織は如何に構成され、又運用されべきやを論ずるものとして政治學は或意味に於て國家の倫理學であるといへる。

政治學と倫理學との提携は從來の政治學に於て重要視せられなかつた。否な殆んど顧られなかつた。政治道德と云ふ事が說かれないではない。けれども之は政治に關する個人の道德を論ずるものであつて、國家の――國家機關の行爲の價値を論ずるものではなかつた。從來の政治學は富國强兵を理想とし、强制組織其物に絕對の價値を認めたから、所謂國家の爲めにする事はすべて絕對の價値ありとする。此事の前には一切のもの皆頭を

下ぐべきものとせられて居つた。從つて倫理道德などは此國家の目的の爲め利用すべきもの又利用せらるべきものと見て居つた。今日の政治家中に富國强兵の爲めに利用すると云ふ事以上の意義を宗教、道德、藝術等に認めて居るものがあるか。其國家的理想の極めて低劣なるに氣が附かず、其事の爲めには何物をも利用して倦まざらんとする謬想の極は、浪花節に賴んで所謂國民精神の陶冶を計らんとするに至る。正直なマキアベェリーは思ひ切つて、國家の目的の爲めには道德を無視すべきことを高調力說して、臆病な世間を驚かしたけれども、舊い政治學は結局玆に落附かなければならぬ筈のものである。最近の悧口な政治學者は全然倫理道德を無視していゝとはいひ切れ得なかつたと見えて、遂に國家の爲めに盡すことが最後の善なりと云ふ一種獨特の倫理說を立つるに至つた。故加藤弘之先生の如きは眞に國家の爲めならば人を殺すも可、人の財物を奪ふも亦道德なりと云ふ風に極論されたと記憶するが、そこまでに至らなくとも所謂國家の爲めにすることと夫れ自身の上に絕對の倫理的價値を認めんとするの謬論を抱くものが多かつた。

併しながら今日の政治家は强制組織其物を絕對の價値としない。絕對の價値は個人の生活に於ても國家生活に於ても共に最高の善である。其最高の善を國家に實現せしめんとするのが我々の常に唱ふ所である。國家の爲めにする事が善なのでは無い。國家をして善を行はしめねばならないのである。然らば國家の行はねばならぬ善とは何ぞやと云ふ事が問題になるが、之に政治學は答案を與へんとするのである。是れ今日の政治學が倫理學と根柢を同じうし、從つて國家倫理學と云ふを妨げざる所以である。之によつて政治學は初めて文化科學として重要な位置を占めることが出來ると思ふ。

哲學の新傾向

文學博士 桑木嚴翼

(一)

近來世情一變の機に際して、哲學にも亦何等かの變動があるであらうか。此問題は折々人の發する所であるが、私は今之に就いて明確なる斷案を下す準備も無く、また恐らくは何人も之を周密に論究する事は出來ないであらう。然し凡ゆる事物に改造の聲が著るしい如く、哲學に對しても決して安閑として居られない事情もあるであらう。元來少し前から哲學に對する

革を要求する運動は、殊に英米の新哲學に於て見る所であつた。近頃では矢張之を哲學改造といふ旗幟の下に集合せしむる事が出來るであらうが、其の主なるものは、少し古くはプラグマチズム、引續いて新實在論等から唱へられて居る。プラグマチズムでは例へば、デュウイ氏の如きは今日盛んに哲學を根本的に改造する事を主張して居る。デュウイ氏に從へば、從來の經驗の觀念に誤りがあつた、從來は經驗を以つて唯知識の材料を供給するものと考へて、此の材料を齊整するものは別に經驗外に存在して、例へば範疇とか理性とかいふやうな種々の哲學的術語で表はされて居る、而して其結果として生じた哲學は、世界を靜止無活動の全體として之を認識し、之に依つて種々の世界觀、人生觀を構成する事を以て其の歸着點であると考へて居つたのである。要するに哲學は知識的要求から出て居ると觀るのが從來の解釋であるが、デュウイ氏などのプラグマチストは之に反し、知識は決して本源的なものではない、畢竟意志實行の一手段たるに過ぎない、我々が經驗を繰返して行く中に失敗や成功があつて、其間から自ら一定の經驗の形式卽ち範疇の如きが發生してゐる、之れに依つて經驗が統一されて行くから、範疇を以て經驗以外に存在すると考へる事は出來ない。哲學は是等の經驗の自己自身統一され發達する一般の過程を述べるもので、決して知識的なものでなく、寧ろ實行的なものである。斯樣に考へて從來の哲學を根本から打ち壞さうとして居る。

其他にも新實在論者ペリー、マルギン等は矢張り同樣な立場から從來の哲學に對して、殊に從來の哲學が知識齊整の形式を論究するに沒頭して所謂知識哲學にのみ傾いて居る事を難じ、哲學の問題はもつと內容の有る現實の世界に關係して居る、科學の基礎を得て事實を事實の儘に研究する立場に成らなければならない、昔の形而上學は固より復活しないが、併し今日流行の知識哲學は邪道である、と考へて居る。卽ち惟り古風の形而上學者からのみならず、新派に屬する人々からも知識哲學に對する反抗が出て居るのである。

最近頻りと活動して居る英國のラツセルは、廣義に言へば矢張實在論者の一人であるが、米國の新實在論者と多少趣を異にして居る。卽ち其說によれば、古來の傳說的形而上學及び今日一派の知識哲學等は畢竟靜止不動の世界を念ふもので、到底今日の激動せる社會には一致しないから、進化論の如き思想が其反動として出て居るのも當然である。其中にはスペンサー一流の機械的進化論もあれば、ベルグソンの創造的進化論もあつて、勿論後者が哲學上には一方に勢力を得つゝある。此の如き形而上學及び進化論の二派あるが、ラツセルは之に對して別に一派を

立てんとして居る。蓋し是等は何れも宇宙を一括して論究しようと試み、人間の立場から勝手に宇宙に目的があるやうに考へて、之を或は善とし或は惡とするやうな見解を立てゝ居るが、畢竟折傳說的思想に囚はれたものである。眞の科學的哲學はもつと小心に世界を部分的に考察して、虛心平氣に事實を事實として記述するものでなければならぬ、と言つて居る。要するに是は古來多く行はれた形而上學的研究、目的觀等に關して反抗の旗を翻したもので、何れも哲學改造の運動たることは掩はれない。

固より改造は何れの時代にもあつた事である。所謂エポックメーキングの事業とは即ち改造の事であるから、哲學史上新時代を劃した人は固より、多少大字を以て史上に記載せらるるやうな人々は皆一種の改造家である。が、併し現に我々から云へば、現在我々の耳にする改造が最も著しく注意に上る譯である。茲には其の改造の適不適を論ずる譯ではない。唯先づさういふ聲があるといふ事實を述べて、夫れから論步を進めて行くのである。

（二）

斯樣に改造の聲が一方にあるのは、同時に哲學が現在の社會狀態と無關係で有り得ないといふ事を證明するものであるが、事實多くの哲學は一方の論者が考へて居るよりは、もつと遙かに實際問題に密接の關係を持つて居たもので、又現在も有つて居るのである。今之を歷史について古今の例證を擧げるまでもなく、先づ戰爭中の事を考へても、歐洲の哲學は我々には稍過當と思はれる程戰爭の渦中に捲き込まれて居つた。殊に其の中で最も注意を惹いたのはベルグソンであらう。戰爭の始めからベルグソン　屢々講演を試み、獨逸の文化が組織的であり機械的であつて流動性の生的跳躍（エラン、ヴイタアル）を缺いて居る、之に反して佛蘭西の思想には自由な天才的な生的跳躍（エラン、ヴイタアル）が實現されて居る、故に謂はゞ此戰爭は機械と人との戰爭、物質と精神との衝突であるといふやうに說明して居る。生を以て宇宙の根本とする哲學說に最も相應した議論で、我々は其議論の巧妙な所には確に感服する。ベルグソンは其等の趣旨をいろ〳〵講演し論述して、常に寧日莫しといふ有樣であつたやうである。人が偶々哲學上の問題などを提出しても、今は夫れを考へて居る餘裕も無いといふやうな答をしたさうである。哲學者として戰爭といふ社會的現象に關係したのみならず、哲學其物が著しく戰爭向きのものに成つて了つた。ブートルーも同樣に、一面獨逸の過去の文化に重きを置きながら、現在の擧動を非難し、之を獨逸精神の缺點に歸して居る。例へば英吉利で試みた「思想と行爲との關係に關

する獨逸流の見方と古典的の見方との對照」の講演の如きは、即ち獨逸では知行を分離して、從つて行爲が知識の如き現象界に局限せられざる說を出すと共に、反對に又放埒となつて、惡行到らざる莫き事もあつたが、古典的な見解では知と行とが本來一致すべきものであるから左樣に分割せず、感情を以て之を統一する新しい見解を開かなければならないと言つて居る。之も亦一種の哲學說を以て戰時中の社會現象を說明せんとしたものである。

一方には獨逸の方にもヘツケル、オイケン等を始めとして、さまざまに獨逸文化の價値を高調し、今回の戰爭も獨逸自衞の爲めの戰爭であると辯護するものがあつた事も一々言ふまでもない。此等の人々も亦自家の哲學說を以つて、例へばヘツケルは其の一元論を以て、オストワルトは其のエネルギー論に基いて、國家獨立文化宣傳の爲めの戰爭を是認したり、或はオイケンの如き、精神的戰鬪の一の方法として斯くの如き戰爭を辯護したりした。即ち此等の學者が人として戰爭に興味を有ち、且つ其の學說を之に結び着けた事が明かである。のみならずヘツケルやオイケン等は自國を辯護するが爲めに可也常軌を逸した議論をして居る。故に戰時中から此等の學者の學者的良心を疑ふ人も出たが、固より此等の人々が獨逸の所業を一も二も無く正善と

觀たのは愚に非ずんば欺であるとも云へようが、併し、事情を精査したら恕すべき點も分るであらうし、又戰爭中の悲慘な殘虐な出來事を以て悉く獨逸に冠らせる事は公平ではないから、是等の學者の言說を一々事實曲解とのみも見られないであらう。英吉利のラッセルが既に、英國と雖も地を換へれば同じであるといふ意味を說いて居る。又バアナード・ショウの諷刺は言ふまでも無いであらう。即ちオイケン等が稍事實を曲げて獨逸を辯護し外國を罵つた事は勿論淺薄であるが夫れが爲めに此等の人々を徹頭徹尾或は腐儒とし、或は迂儒とし、甚だしきは奸佞の一小人として、其學術上の功勞までも沒する事は、當面の英佛の人でも、稍公平な人は敢て爲さない事であらう。ラッセルなどの言ふ所を見れば、英國と雖も決して紳士的に國際的道德を戰時中若しくは戰地で示して居る譯ではない。然るにオイケン等を憎むやうなのは、唯英米感染れの議論と見なければならないが、然し私は特別に是等の人々を強いて辯護しようとも思ふ譯ではない。兎に角此等の人々は何れも時事問題と哲學とを結び着けて居た人々であるので、哲學が決して時代と沒交涉で無い事は是等でも證明されるといふまでゞある。

更に最近の社會問題、勞働問題に取つても、哲學の影響は鮮くない。例へばマルクスがヘーゲル派から出て居るとか、英吉

利の經濟學が英國の哲學と密接な關係を有つて居るとか、社會主義の一派には新カント派に屬する者があるといふやうな事を數へて行けば、哲學は改造論者の考へて居る程、現今に於ては社會及び經驗と沒交渉になつて居る譯ではない。サンヂカリズムとベルグソンとの關係を結び着けた人にサンヂカリズムのソレルがある。尤もベルグソンは之を迷惑に感じて居るやうであるが、サンヂカリズムの所謂直接行動がベルグソンの所謂直覺又は生的跳躍と其趣意精神に於て全く同一であるとは言へないかも知れないが、併し兩者の間に論理的關係のある事は掩はれない事實である。最近にジエー・ダブリユー・スコツトといふ人が『サンヂカリズムと哲學的實在論』といふ著書に於て、ソレルの說とベルグソン及びラツセルの說との比較をして皆同一傾向に屬するものであるといふ意を述べた。固より一方には直接の時事問題若くは社會問題等に無關係なる哲學が無いではないが、併し今日一方の哲學改造論者の思ふ程、從來の哲學が全然社會問題と無關係になつて居ると言へない事は、以上大體述べた通りである。

（三）

然らば斯くの如き哲學と社會問題との交渉が既に行はれて居る事は、哲學改造の要を全く認めないといふ事になるであらうか。或は言葉を換へれば、此等の哲學が社會問題等に沒入した爲めに全然別途の哲學と成り了つたのであらうか。若し斯くの如く戰爭とか勞働問題とかに哲學の興味の中心點が移るとしたならば、茲に過去の哲學問題は全然消滅したから、所謂改造論者即ちプラグマチストや新實在論者などの希望するが如く、古今哲學に對する歷史的關係を離れ、全然新問題のみを哲學が考察するやうになるであらうか。

夫れに對する解答は今日の社會問題論者としての哲學者が其の過去に唱へた哲學的原理と同一の論理を辿りつゝあるか、それとも全く新しい人となつて、例へば過去のラツセル現在及其以後のラツゼル、戰前のベルグソン、戰後のベルグソンといふやうに區別せられるかといふことで決定せられるであらう。ベルグソンの場合に就いては既に前に述べた通りである。即ち其の生の哲學の原理を時事問題に應用したのであつて、之に依つて從來の純粹理論的の研究にも意味が生じて來た譯である。併し多くの人はラツセルの變化を見て數學者、哲學者から一變して社會運動家になつたのであるから、兩者の間に何等の共通點が無いと考へて居るかも知れない。併しラツセルの經歴を見ると、初めは數學及び論理的哲學の研究に從事して居つて、其點

に於て同樣の思想を具へて居つたライプニッツを研究し、更に哲學問題の方に入込んで、今では社會問題の方に心を盡くして居る譯である。故に其社會論を見ると其哲學思想並びに十七世紀の數學、物理學本位の思想を認める事が出來る。ラッセルの論理的原子論なるものは全く十七世紀の物理學者科學者等の精神を享け繼いだものである。其理想國に於て說く所の諸般の設備等は、恰も數學者が理想的の圖形を作つて其の數量の關係を論ずる如き態度で、全く純粹科學者の立場を離れて居ない。言葉を換へれば、十六世紀以來發達した自然科學の精神を基礎として、全然國家社會等の問題を解決しようとしたのである。ベルグソンは生物學數學等の思想を超越したる境地の哲學を以て時事を論じ、ラッセルは十七世紀の數學、物理學の方法精神を以て現代の實際問題解決の端緒として居るのである。斯樣に哲學が社會問題に關係して行くと同時に、其社會問題の解決に自ら其人の先入主となつて居るやうな思想が影響し、特殊の解決を生ずるのである。故に例へばラッセルを理解する場合に、單に今日の社會論のみでは其背景が詳かでないといふ事を言ひ得ると共に、如何なる哲學も之を社會問題等に應用する事が出來るといふ想像も爲し得る譯である。

更に又十九世紀の獨逸哲學が一種の國家論を産み出した事も顯著なる事實で、其或る點は今日非難の的になつて居る譯である。が、此等十九世紀哲學の根源となり、而かも十九世紀の前半の哲學では、或は横道へ逸らされた觀のあるカントの批評哲學は、一面十八世紀十七世紀の思想と連關するもので、既に一種の社會主義に關係して居るのみならず、又今日の種々の問題とも關聯する望みが無とは言へない。カントが夙く世界の永久平和を論じた事は何人も知つて居る事である。之が永く空想視されて居たが、併し今日の國際聯盟の根據は此の中に道破されて居ると言つて可い。固より國際聯盟其物が種々の妨害の爲めに理想的に成つて居ないだらうが、兎に角成立して一歩を向上の路に向けたとすれば、其思想に共通なる哲學は矢張今日の社會に實際的の意味を失はぬと言つて可い。斯く考へると所謂哲學改造論者が自己の新しい哲學を說くのは固より勝手であるが、夫れに合はない哲學が悉く今日に存在の理由が無いやうに考へ、全く經驗と沒交渉なる抽象的世界を論ずるものの如く看做すのは、所謂敵を知ること詳かならざる者としなければならない。新實在論もプラグマチズムも改造の試みである。併し此等の人々が古い傳說的のものと觀て居るものの中にも、矢張一種の改造的精神を含んで居るものが有ることを考へて、私は先づ改造的哲學の內容を豐富にしたいと思ふ。而して此點から見て、

改造の眞の哲學的基礎を論ずる批評哲學の如きものも決して度外視してはならぬものであると思ふ。

斯樣に考へると、哲學改造は恐らくは從來より一層盛んに今後の問題となるであらう。唯其の改造の性質が今日一派の人の改造と看做すものと限らないといふ事に歸する。恐らくはサンヂカリズムに結び着くと言はるるベルグソンの直覺主義も、今日のデモクラシーの機運に一致するプラグマチズム、新實在論等の心理主義的哲學も、又一種の社會主義と過去に於ては結合し世界平和の意見を唱へ、文化問題の根本たる文化價値の研究を中心とする論理主義的哲學等も、皆何れも種々の意味に於て新しい時代と結合して新しい形を帶びて來るであらう。而して斯の如く哲學が時代に結び着く方面のみならず、更に溯れば是等の研究の基礎たる部分が哲學上の重要なる部分を占めて行く事は疑を容れない。所謂論理主義に於ては其基礎として形式問題即ち知識其他の先天的基礎を說く爲めに先天的觀念其物の純粹理論的研究が常に豫想されて居るが、所謂改造論者の經驗主義實在主義も、之を分析して觀れば、結局先天的基礎論に入らなければならないのであるから、此等の論者と雖も其根柢に論じ到れば結局純粹理論の問題に逢着する。直覺主義は稍々趣を異にして居るが、併し固より直覺といふ事に現實的問題を超越する意味が含まれて居るのであるから、之も一種の純粹理論的の問題に導いて行く事を免かれ得ない。要するに哲學は時勢の變革に伴ふので、今日主なる學派を假りに直覺主義、論理主義、心理主義に分けて見ても、何れも現實問題と密接な關係を帶びて來たと共に、一方益々現實を超越する純粹理論的研究を促すものであると思ふ。哲學は改造されても益々其知識的性質を失ふとはない。而してラッセルの流行に因つて十九世紀の個體性的價値定立的思想が再び十七八世紀の一般學的價値別離的觀念に回轉する所あるを暗示すると共に、一面又十八世紀思想の征服者にして又其完成者たる批評哲學が新なる意味を以て哲學の新傾向の基礎となり得ることを證明するものではあるまいか。併し以上は從來の哲學を根據として述べたもので、今後突然新しいものが現出したならば、其は私の論斷外に屬することである。

教育改造の新基礎

―教育者組合を組織せよ―

木村久一

（一）

教育を盛んにせよと云ふ要求は、お目出たい要求である。民は知らしむべからずとは、支配階級が經驗的に會得した信條である。東洋流の民は知らしむべからず主義などゝ慨する人もあるが、民は知らしむべからず主義は東洋の特産物ではない。成程西洋には、民は知らしむべからずと云ふやうな、露骨な言葉はないかも知れぬ。併し民は知らしむべからず、教育すべからずと云ふ主義は、東西古今に通ずる支配階級の政策である。無智なる民は支配階級の寶であつて、民衆の矇眛は支配階級安全の礎である。これ東西古今變りなき眞理である。されば支配階級に向つて、教育を盛んにせよと云ふは、汝の特殊地位を捨てよと云ふことである。恐ろしい要求でもあれば、馬鹿げた要求でもある。手強く行けば、支配階級が青くなる要求であるが、普通なら、石地藏に願をかけるやうな要求である。而して口の先で、教育を盛んにせよ〳〵と云ふだけでは、謂はゆる手強い要求ではない。故に予は近頃は、口の先ばかりで教育を盛んにせよと云ふことは馬鹿げた要求、お目出たい要求だと考へて居る。

予が此處に支配階級と云ふは、政治上の支配階級と經濟上の支配階級を一括して云ふのである。政治上の支配階級と經濟上の支配階級を、截然區別することは不可能であるが、官僚軍閥の如きは政治上の支配階級であつて、經濟上の支配階級とは資本家階級これである。民主的な國でも、民主主義の徹底しない間は、政治家は大抵資本家階級の傀儡である。而して近代の官僚軍閥は、何處の國に於いても、普通の政治家と似寄つた點がある。即ち資本家階級と、相互扶助の關係を結んで居ることこれである。違ふところは、普通の政治家は、資本家階級の機嫌を取るに汲々として居るが、官僚軍閥は、威張りながら資本家階級と結托して居ることである。併しながら官僚軍閥は、何處の國に於いても、普通の政治家と益々似寄つたものになりつゝあるのが今日の傾向である。これ彼等の勢力が、地に墮ちつゝある徴候である。この現象は、社會運動が、政治的より益々經濟的になりつゝあるのと平行して居る。政治的より經濟的へは歴史の大勢である。

それは兎に角、支配階級は、政治上の支配階級たると經濟上

の支配階級たるを問はず、民衆の教育を喜ばないものである。併し此處に彼等をして、民衆を教育することを餘儀なくせしむる事情がある。これは國際間の競爭である。國際間の競爭に於いて優者たらんが爲には、嫌やでも國民を教育しなければならぬ。蓋し國力は國民の質に由るからである。富國强兵は支配階級だけでは得られない。どうしても國民の協力に待たなければならぬ、國民の質が良ければ良い程有效だからである。故に各國の國民教育は、近世に於ける國家主義の隆盛と共に盛んになつた。義務教育なるものは、近世國家主義の産物である。それでも各國の利己的な支配階級は、事情の許す限り、國民を教育しまいとして居るのが常である。

(二)

英國では一昨年、新教育令を發して國民の義務教育に大改革を加へた。謂はゆる千九百十八年の教育令である。これに由れば、小學教育は五才から十四歳に至る九年である。併し小學教育だけで義務教育が終るのではない。更に十八歳に至る四年の補習教育がある。九年の小學教育と四年の補習教育を合せて義務教育である。これまでの義務教育は八年の小學教育だけであつた。故に今度の教育令は大英斷と云つて可い。併し補習教育の方は、一週八時間以上と云ふのであるから、餘り時間の多いものではない。但し夜學ではなく、晝間に教授すると云ふ規定であり、尚ほ登校前二時間の準備時間を與ふべしと規定してあるから、これまで賃銀の安い少年勞働者を盛んに使用して、懷を肥やして居つた資本家に取つては非常な打擊である。彼等の惡辣な掠奪は、大いに減ぜられる譯である。それで今度の教育令が出來る前、資本家階級は非常にこれに反對した。その結果補習教育の方は、一週僅か八時間以上と云ふやうな、不徹底なものとなつたのである。不徹底なロイド・ジョージ内閣の事であるから、資本家階級の反對を頑强に撥ねつけることが出來なかつた。

併し資本家階級の反對があつたにも拘はらず、兎に角此處まで漕ぎつけたことは、資本家階級の傀儡に過ぎないロイド・ジーヨジ内閣としては、大出來であつた。それは何に由つたかと云へば、今度の戰爭で獨逸と戰つて見て、ロイド・ジョージ等は、自國の義務教育の獨逸のそれに及ばないことを、つく〴〵悟つた爲である。英國に於いては、今度の戰爭をやつて見て、初めて義務教育の改革と云ふことになつたが、獨逸に於いては、この程度の事は戰前既に實行されて居つたのである。即ち獨逸に於いては戰前に於いても、聯邦中の約半數は、小學教育八年に補習教育四年を加へて、義務教育として居つたである。而して今度英

國が、獨逸と戰つて見ると、英國の兵士はどうしても獨逸の兵士に及ばない。而して之れは何の爲かと云へば、どうしても英國の義務教育の不完全に歸せざるを得ない。そこでロイド・ジョージ等はどうしても、義務教育に大改革を加へなければならぬと云ふことになつた。そこでロイド・ジョージはフイツシヤを文部大臣に擧げて、義務教育の改革に着手させた。その結果として現はれたのが一昨年の教育令である。併し今度の教育令は、實は獨逸の制度を眞似たものに過ぎない。英國では、義務教育の改革は何時も戰爭に刺戟されて行はれる。この前は南阿戰爭後に行はれた。南阿戰爭に於いても、英國の政治家は義務教育の不完全をつく〴〵感じた。そこで資本家階級を說伏して、かの千九百二年の教育令となつたのである。英國の資本家階級は、平時は義務教育の改善に極力反對する。併し戰爭に會つて見ると、義務教育の不完全に由る國民的缺點が明白に暴露するから、嫌々ながらこれに同意するのである。併し記憶すべきは、國民の教育を喜ばないのは、英國の資本家階級だけではないと云ふ事である。何處の國の資本家階級も、この點は同樣である。國民教育を盛んにすれば、その結果は民衆の覺醒である。さなきだに始末の悪い勞働者が、益々要求が多くなる。賃銀を高くしろとか、勞働時間を短かくしろとか、厄介な事である。金をかけて勞働者を増長させて居られるか。資本家階級から見ればからである。

（三）

併し予は今から云つた。英國の今度の義務教育改革は、獨逸の制度を眞似たものだ、獨逸に於いては、戰前既にこの程度の事は實行されて居つたのだと。然らば獨逸の支配階級は、國民の教育を嫌ふどころか、中々これに熱心ではなかつたか。何處の國に於いても支配階級は、國民の教育を喜ばないものだとは、事實ではないではないか。から抗議する人があるかも知れない。然り獨逸の支配階級は、國民の教育に中々熱心であつた。併しこれは決して予の斷定に矛盾するものではない。予は前に云つて置いた。何處の國に於いても支配階級は、民衆の教育を喜ばないものであるが、此處に彼等をして、國民を教育することを餘儀なくせしむる事情がある。それは國際間の競爭だと。獨逸は近世の國際競爭に、立ち後れた國である。その爲に非常な苦勞をした。この形勢を挽回せんが爲に、獨逸の支配階級は色々な手段を取つた。その一つは國民教育を盛んにすることであつた。獨逸が前世紀の後半から、旭日沖天の勢があつたのは、その結果であつた。

獨逸の支配階級が、國民の教育に熱心であつたことには、も

う一つの事情があつた。それは彼等が、政治上の支配階級であつて、經濟上の支配階でなかつたことである。卽ち獨逸の主なる支配階級は、官僚軍閥であつて、英國のそれの如く資本家階級ではなかつた。官僚軍閥は權力慾の盛んなものであるから、國際競爭に熱心でする。從つて資本家階級よりも、國民の教育に贊成し易いものである。これ獨逸の國民教育が、英國のそれよりも盛んであつた所以である。又英國は有り餘る領土を有つて居るので、獨逸程國際競爭に眞劍でなかつたといふこともある。併し獨逸の支配階級も、國際間の競爭がなかつたなら、矢張國民を教育することはなかつたであらう。

(四)

我國の主なる支配階級は、戰前の獨逸のそれの如く官僚軍閥である。近頃は餘程勢力が衰へたやうだが、まだ中々盛んである。併し我國の官僚軍閥は、獨逸の官僚軍閥と違つて、思ひ切つて國民の教育を喜ばない。彼等は過去半世紀間、口實の出來る限り、國民を出來るだけ啓發しないやう、出來るだけ國民を愚昧にして置かうと云ふ政策を取つて來た。流石に教育の事であるから、彼等と雖も正面からは反對しなかつた。併し彼等は軍備の更に急なることを說いて、國費の大部分をこの方面に取つてしまひ、事實上教育に金をかけることが出來ないやうにして來たのである。一體官僚軍閥は、軍備を盛んにすることに由つて二重の利益を得る。一には彼等の畑が廣くなる。二には自然教育の不振となるから、國民の覺醒を防ぐことが出來る。卽ち一擧兩得である。

かくて彼等の地位は安全に、何時までもその利己心を滿足させることが出來る。要するに我國の官僚軍閥は、自家の地位の安全と利己心の滿足の爲に、國民を犧牲にして居るのである。國運は國民の質の如何に由るものであるから、國民の教育を妨げて居る彼等は、自家の利己心の前に國運を犧牲に供して居るのである。かくて我國の官僚軍閥は、戰前の獨逸の官僚軍閥よりも、利己心を抑へることをしない。併しながら我國に於いて、國民の教育を喜ばないものは、官僚軍閥だけではない。資本家階級もこれを喜ばないことを忘れてはならぬ。我國に於いて國民教育の改善が行はれないのは、官僚軍閥の外に資本家階級の爲である。この二階級が協力して、これまで國民の教育を妨げて來たのである。されば官僚軍閥が勢力を失つても、國民教育を盛んにすることは六かしい。見よ謂はゆる政黨內閣が出來ても、高等教育機關は黨略の爲に增設するが、初等教育の方は知らん顏をして居るではないか。原內閣は資本家階級の傀儡に外なら



黄夫人の手

大泉黒石

前篇

一

あけましてお目出度うございます。本年も何卒御引立ての程を希望いたします。つきましては、毎度何の變哲もない御話を申し上げて御茶を濁して居りましたが、當節のやうにやれ勞働問題の、やれ婦人問題のと目の廻る忙しさの暇を裂いて、熱心に御讀み下さるごひいきの皆さん方に對して、今度こそは御意に召す話を申し上げたいと考へ、いろ〳〵と、肝膽を碎いては見ましたが、さてどうも、これと言ふ珍種も見つかりません、飜案も面白くないし、つくり話は身が入らぬと申しますやうな鹽梅で、どゝのつまり新年の小手調べに「黄夫人の手」と題する未熟な痴け話をいたし、御機嫌を伺ひまして引下らうと存じます。早速本題にとりかゝりますが、この怪談と間違へられさうな話は、筆の加減で或は長びるかも知れません。新春永日。皆さん、何卒、御ゆつくり、御聞き下さいまし。

處で皆さんも御承知の如く、長崎の新地街と言ふ處は、維新頃から、渡來した幾萬の支那人が集つて、大きな一つの廓を拵へてゐる。その廓へ、一歩足を踏み入れると、遠い支那と云ふ國へ行つたやうな氣持ちがする程の別世界なのです。土地の人

ないから、これは當然の事である。

既に見た如く、英國では今度の戰爭の經驗に由つて、義務教育を小學教育九年補習教育四年の十三年にした。佛蘭西でも同じ動機から、小學教育八年の外に、男子は二十歳まで、女子は十八歳まで、義務教育として補習教育を實行せんとして居る。然るに我國では、たつた六年の義務教育年限が、何時延長されるか見當もつかない。我國の支配階級は、今度の戰爭から何も學ばない。成程我國は今度の戰爭から、英國や佛蘭西の如く災害を受けなかつた、併しそれを良い事にして、安閑として利己心に耽つて居ることは、許さるべき事であらうか。

（五）

今度の戰爭に鑑みて、歐米諸國は競つて、義務教育を改善せんとして居るが、予は世界中、最も徹底した義務教育は、新露西亞の義務教育だと思ふ。新露西亞の義務教育は、六歳から十七歳に至る十一年で、最初の二年は幼稚園、殘りの九年は二部に分れて、一部は八歳から十三歳まで五年、二部は十三歳から十七歳まで四年となつて居る。而して經費は全部國家の負擔である。六歳から八歳までの幼稚園は少し可笑しいが、これは普通の幼稚園と違ふ幼稚園であらう。又學級は、凡て二十五人までとなつて居るが、金を惜まない點は感心せざるを得ない。一體國民教育が徹底的に行はれないのは、支配階級が國民を掠奪し、利用し得る狀態に置かうとするからである。然るに新露西亞は純然たる社會主義の國であるから、或る階級が他の階級を自家の利用に供することは絕對的に排斥する。かくの如き國に於いては、國民の質が向上すれば向上する程同胞一般の利益となるから、國民の教育を重視する。而して思ひ切つてこれに金をかける。新露西亞の義務教育は十七歳までゞあるから、餘り長いことはない。併し十七歳までちやんとやるのであつて、時間の少ない補習教育で誤魔化すのではない。予は勿論新露西亞を讃美する者ではない。只だ國内に、國民を自家の利用に供せんとする階級がある限り、國民教育の徹底は六かしいと云ふことを、明かにしようとしただけである。

（六）

新露西亞の教育制度は、今度の戰爭に鑑みて作つたものではないが、他の歐米諸國は、今度の戰爭に鑑みて、競つて國民教育を改善せんとして居る。然るに我國では、今度の戰爭に鑑みて、陸軍をどうするとか、海軍をどうするとかとは盛んに云つて居るが、國民教育をどうすると云ふことは殆ど云はない。一

體我國の文字は、漢字と云ふ厄介極まる文字である爲に、教育の效果が極めて少ない。我國民は一般に、我國の教育が漢字の爲に、如何に效果を殺がれて居るかを自覺して居ないが、これは非常なものである。そこへ持つて來て、義務教育年限がたつた六年と來て居るから堪らない。ところがそれだけではない。我國では非常識的に教育に金を惜んで居るから、六年の義務教育が更に效果の少ないものとなつて居る。新露西亞の學校では、學級は凡て二十五人以下だ云ふに、我國の小學校では、一級に六七十人、甚だしきは八十人も入れて居る。こんな事で教育の效果が擧つたら奇蹟である。而も教育者を極度に冷遇して居るから、有爲の人間が教育界にはいらない。はいつても直ぐ出てしまふ。電車の車掌や運轉手でさへ、初任五十圓ではないか。彼等は小學卒業の學歴さへあれば可いのである。然るに師範學校を出て、初任たつた二十何圓では、誰が教員になるものか。近頃師範學校の入學志望者が激減して、當局者が困つて居ると云ふが、それは當然の成行である。師範生が寄宿舍の粗食に堪へかねて、一同逃げ出したなどは、何處に持つて行つても名譽ではあるまい。かくて教育界に、有爲な人物がなくなる爲に教育の能率が減ずるのみならず、殘つた教員も、待遇菲薄の爲に不平滿々、教育の效果が益々減ずるのである。

併しもつと金をかけなればならぬのは、初等教育だけではない。中等教育高等教育も同樣である。原内閣の增設ぐらゐでは、我國の高等教育機關はまだ／＼足りない。高等教育機關の不足の爲に、我國の中等教育が如何に毒せられて居るかを見よ。我國の中學は、上級學校入學試驗準備所に外ならない。併しこれは、中學教育の本旨ではない。中學はそれ自身の目的を有するもので、上級學校の豫備校ではない。然るに我國では、高等教育機關が少ない爲に、我國の中學は競つて入學試驗準備の教育を施して居る。その結果は詰め込み主義、丸呑み主義の教育であつて、生徒は學科の丸呑みに困憊して居る。かくて我國の青年は、學問の嫌ふべきを覺えてその愛すべきを知らない。彼等には、愛智心も智識慾も養はれない。かくの如き教育に何の效果があるか。かくて我國民の能率が、如何に低下されるかは測り知ることが出來ない。かくの如き教育に由つて、文部省が口癖に言ふ、生徒の獨創的精神を養ふことなどは、思ひも由らないことである。併し入學試驗に首尾好く及第して、高等教育を受け得る者は、卒業後謂はゆる成功者であつて、食ふに困ることが少ないからまだ良いが、こんな教育を受けただけで、その儘社會に出る青年こそ、好い迷惑である。我國の中學卒業生は、その儘では社會に出て殆ど何の役にも立たない。何の爲か

と云へば、高等教育機關が足りない爲に、中學が上級學校入學試驗準備所となつて居る爲である。我國は高等教育にも、もつと金をかける必要がある。然らざれば我國が、國際間の競爭に於いて、諸外國と併行して行くことは絶望である。

以上述べて來たやうに、國民教育の改善は、外國と競爭の爲に必要である。國民の教育を喜ばない各國の支配階級が、嫌や〳〵ながら利己心を抑へて、これに同意するのはこの爲である。併しながら我等は、かくの如き見地から國民教育の改善を說くことを好まない。我等が國民教育の改善を說くのは、正義の上から說くのである。社會生活に於いて、何人も他人に掠奪され、利用されない爲には、徹底した國民教育が必要である。教育上の機會均等は、徹底した民主主義の基礎である。掠奪は重に教育の不平等から行はれる。支配階級が教育の隆盛を喜ばないのはこの爲である。我等は我等の社會に掠奪を絶たんが爲に、國民教育の改善を叫ぶのである。

（七）

かくの如く國民教育を盛んにすることは、何れの見地から見ても急務であるが、本文の初めに述べた如く、支配階級に向つて教育を盛んにせよと云ふことは、石地藏に願をかけるやうなもので、馬鹿げた要求である。教育を盛んにせよとは、これまで幾ら叫ばれたか分らない。併しどれ程の效驗があつたか。故に予は近頃は、支配階級に要求して、教育を盛んにさせやうとするのは徒勞である。教育を盛んにするには、我等の手でこれを盛んにしなければならぬと考へて居る。併し我等の手で、如何にしてこれを盛んにするのであるか。我等の手で果してそんな事が出來るか。曰はく出來る。その道がある。それは外ではない。教育者組合を組織することである。

國民教育の改善を、教育者組合の組織に待たなければならぬ理由がもう一つある。それは勞働者階級が、國民教育の改善に餘り熱心でない爲である。無產者階級全體が、國民教育の改善に熱心であれば、解決は譯がないのであるが、勞働者階級は、餘りこれに熱心でない。而してこれには道理がある。云ふまでもなく勞働者の生活は、非常に窮迫して居るので、彼等は子弟に出來るだけ早く勞働させて、家計を助けさせやうとする。故に義務教育年限の長いことを餘り喜ばない。新錫西蘭に於いての如く、就學の經費を全部國家が負擔するやうにでもしなければ、これは尤もな話である。故に國民の教育を盛んにするには、教育者組合を組織するより外に道がない。

併し教育者の如き、謂はゆる中間階級に、組合を組織させる

ことは一寸六かしい。この階級には勞働者階級に於いてと違つて、拔け駈けの出世をする機會が多い。故に各々拔け駈けすることばかり考へて居つて、團結心が少なく、非常に個人主義である。歐米諸國に於いても同樣であつて、教育者組合の歷史は新しいものである。予も啓明會を背景として、教育者組合組織の宣傳に出かけることがあるが、何時も效果が少ない。(啓明會は、文化運動と全人類愛の宣傳を標榜する會であるが、今後大いに教育者組合組織の宣傳に努める筈である。) 我等は大抵、增給運動の煽動者と見られるらしく、小心な教育者諸君は、後難を恐れてか中々出て來て吳れない。併し我等の理想は、增給運動のやうな小さな事ではない。實に非常に大きい理想を抱いて居るのである。

かくの如く、教育者に組合を組織させることは、今のところ一寸六かしいが、これは徐々にやつて行かなければならぬ。性急にやれば弊害がある。それで我等の望んで居る第一歩は、府縣教育會の自治化である。府縣教育會を先づ自治的にするのである。府縣教育會の會長は、普通知事であるが、これは規則に出るのではない。ほんの習慣に過ぎないのである。新しい知事が來ると、師範學校長、中學校長、女學校長、及び二三の有力な小學校長より成る幹事會が、習慣的にこれを會長に推戴するのである。併しこれは今云つた通り、規則に出るのではない。故にこれを會長に推戴しなくとも可いのである。

ところが此處に面白い事情がある。それは外ではない。師範學校長、中學校長等は、大抵頭の禿げた年配であるが、府縣教育課長は大抵大學を出て、餘り年の經たない法學士である。官等から云つても俸給から云つても、師範學校長、中學校長等の下である。而して教育の事は何も知らない。それにも拘はらず、師範學校長、中學校長等は、府縣教育課長の差圖を受けなければならぬ。前者はこれを非常に不快に思つて居る。これは面白い事情だと思ふ。故に師範學校長、中學校長等が、覺醒さへして吳れゝば、府縣教育會を自治的にすることは極めて容易だと思ふ。會長は總會で選擧すれば好い。

同樣な事情が市教育會などにもある。市教育會の會長は矢張市長であるが、これも大抵教育の事が餘り分らない。それで矢張教育者側に不平が多い。現に此頃關西の某市に於いて、會長なる市長と教育會が喧嘩した。遂に市長は教育會を解散した。すると教育者側は私の教育會を組織した。市長はこれを切り崩さうとして居ると云ふ話であつたが、多分市長に負けるであらう。かう云ふ事は一ケ所に起つただけでは負けるに定まつて居る。併し此處にも彼處にも起れば、而して互に聯絡を取つて行

勤すれば、屹度勝つ。

我等は今のところ、餘り深い事は望まない。併し諸教育會が自治的になれば、それを徐々に組合に變形することは容易だと思ふ。而して行く〳〵は、教育上の事は凡て教育者組合會議で定めることにし、今日の文部省は廢してしまふのである。而して地方の教育に關する事は、その地方の教育者組合に定めさせるのである。さうすれば今日の如く、全國に劃一教育を施す弊も除去される。併しこれはいく〳〵の事である。俄かにさうする譯ではない。かうすれば、教育上の望ましい改革は、早晩凡て實現される。

併し改革は容易だが、經費はどうするかと云ふ反對があるであらう。支配階級は何時も經費云々を以て國民教育の改善に反對する。併し我等に云はせると、金は幾らでも出來る。東京市内にさへ、何百町歩と云ふ山林がある社會ではないか。富豪の租税を嚴重にしただけでも、莫大な金が出來る。若しそれ軍備を縮少すれば、國民教育の改善ぐらゐ何でもない。而して軍備の縮少は勿論でも何でもない。此處には詳論の餘裕がないが、我國の軍備は縮少ハ必要こそあれ擴張の必要は斷じてない。軍閥が狼來れり〳〵式に軍備擴張の必要を說くのは、彼等の利己心の爲に外ならない。

（八）

教育者組合の必要な理由はもつとある。我國の教育制度は、教育者の創意（イニシアチヴ）を働かせる餘地が殆どない。一から十まで規定で定められてある。成程金をかけないでやる事業には、この方法が一番良い方法かも知れない。少なくとも我國の當局者は、さう考へて居るやうである。安い給料きり與へないのであるから、有爲な人間を教員に得ることは六かしい。併しさう云ふ教員に、勝手に兒童を教育させてはどんな事をするか分らない。故に一から十まで、規定で定める必要がある。一から十まで規定で定めて置けば、教員の質はどうでも良い。と云ふのが我國の當局者の政策らしい。さう云ふ制度であるから、我國の教育に於いては、教育者が創意を働かせる餘地が殆どない。

併しながらかくの如き制度の下に、教育の效果の擧がることとは到底望まれない。教育の效果の擧がる爲には、どうしても教育者が創意を働かせ得る制度でなければならぬ。今や勞働問題に於いても、産業の能率を高める爲には、勞働者の創意を働かせる組織にしなければならぬと云ふ事になつて居る。教育に於いても同樣である。否教育に於いては一層さうである。

併しながら勞働問題に於いて、勞働者の創意を働かせる組織にしなければならぬと云ふのは、産業の能率を高める爲のみではない。實に勞働者の精神的滿足の爲である。教育に於いても同樣であつて、教育者の創意を働かせる制度にしなければならぬと云ふのは、教育の効果を高める爲のみではない。矢張教育者の精神的滿足の爲である。見よ我國の教育者を。如何にその影の悄然たるか。衰弱、無活氣、無氣力、意氣銷沈等の、有らゆる不景氣な形容詞を適用しても、尙ほ足らざるを感ずる。何故かと云へば、勿論生活難の壓迫にも由る。併し更に大たる原因は、自己の創意を働かせる餘地のない仕事に從事して居る爲である。教育者に限らず、腰辨と稱せられる階級が、一般に意氣銷沈して居るのは、自己の創意を働かせる餘地を有たない爲である。小規模でも、利益が少なくとも、自己の創意を働かせ得る仕事に從事して居る人を見よ。彼の目は輝いて居る。彼の眉宇の間には、覇氣が横溢して居る。彼は生々して居る。この事實はこれまで餘り注意されなかつた。併しこれは人生の大事實である。この事實の發見と共に、社會問題は今や一紀元を劃せんとして居る。

一から十まで規定で定めて、教育者の創意を働かせる餘地のない教育制度に於いては、教育者が意氣銷沈してしまふのみならず、教育が形式的になつて、教育者は外觀上の結果にのみ憂身をやつし、實質上の成績を度外するやうになる。例へば成績考查の際、自校の成績を良くせんが爲に、生徒を放課後に殘して、規定外の時間に考查の科目を教授したり、甚だしきは他の學科を止めて、その時間に考查の科目を教授したりして、準備すると云ふやうな馬鹿な事が行はれる。某縣で國語の成績考查を行つた時、或る小學校では算術を廢して、その時間に國語を教授して準備したことがあつた。我國の小學校では、こんな馬鹿な事が普通に行はれてゐるのである。而してそれは、校長の名譽心の爲に行はれるのである。

又我國の小學校に於いては、規定として十五種程の帳簿を作らなければならぬ。然るに校長の名譽心は、更に三十種ぐらゐの帳簿を作らせる。而してさう云ふ校長は、行き屆いた校長、敏腕な校長として當局者に喜ばれる。實際文部省の選賞に與るぐらゐな小學校は、大抵四十五種ぐらゐな帳簿を作つて居る。この爲に部下の教員は仕事が多くて、毎日五時や六時頃まで學校に殘つて居なければならぬ。何の爲かと云へば校長の名譽の爲である。校長は自己の名譽の爲であるから、それでも可からうが、部下の教員は詰らない話である。これは一例に過ぎないが、教育者の創意を働かせる餘地のない教育制度に於いては、教育者

がかくの如く、外觀上の結果にのみ憂身をやつすやうになるのは當然である。又當局者がかくの如く、教育者の名譽心を釣つて、外觀上の効果のみを擧げやうとする態度も實に惡い。併し今日の如き專制的な教育制度に於いては、かくなるのが當然である。故にこの點から云つても、教育者組合を作つて、文部省を廢し、今日の專制的な制度を打破する必要がある。教育者の創意を働かせる餘地のある制度は、只だ教育者組合の組織に由つてのみ得られるのである。我等は產業自治に對して教育自治を主張する者である。

（九）

教育者が創意を働かせる餘地を有たない爲に、外觀上の結果にのみ憂身をやつして居る例は、小學校に於いてのみならず、中學に於いても同樣に多い。入學試驗の成績が如何に良好でも、家庭を調べて見て貧家であれば、その志願者に入學を許さないと云はれる公立中學がある。蓋し貧家の子弟は、上級學校に進む見込が少ないからである。その公立中學の校長は、每年の入學式に、新入生に對して、本校は上級學校に進む者を養成する所であるから、上級學校に進む積りのない者は、今の中に止めて貰ひたいと云ふ意味の事を云ふと稱せられる。又入學後成績が少し惡かつたり、貧家の子弟なることが分つたりすれば、體好く除名して、その代りに他の學校から、成績の好い生徒を入れると云はれる公立中學がある。かう云ふ學校の有難さには、かう云ふ補充に決して不足しないのである。

我國では、卒業生が上級學校に入學することが多ければ多い程、優良な中學と稱せられる。而して卒業生の、上級學校に入學する率を高くせんが爲には、貧乏人の子弟を入學させることは不得策である。何となれば貧乏人の子弟は成績が好くとも、上級學校に進む見込が少ないからである。故にかう云ふ方法は、外觀上の効果を收めるには、最も良い方法である。併しかう云ふ事は、公費で立てゝ置く公立學校に許さるべき事であらうか。併しながらこれは、我國の教育制度の罪であつて、教育者が惡いとは餘り云はれない。我國の如く、教育者の創意を働かせる餘地のない教育制度に於いては、教育者がかくの如く、外觀上の結果にのみ憂身をやつすやうになるのは當然である。教育界の有らゆる弊害を除くには、教育者組合を組織するより外にない。教育者組合なるかな。全國の教育者結合せよ。



黄夫人の手

大泉黒石

前篇

一

あけましてお目出度うございます。本年も何卒御引立ての程を希望いたします。つきましては、毎度何の變哲もない御話を申し上げて御茶を濁して居りましたが、當節のやうにやれ勞働問題の、やれ婦人問題のと目の廻る忙しさの暇を裂いて、熱心に御讀み下さるごひいきの皆さん方に對して、今度こそは御意に召す話を申し上げたいと考へ、いろ〳〵と、肝膽を碎いては見ましたが、さてどうも、これと言ふ珍種も見つかりません。飜案も面白くないし、つくり話は身が入らぬと申しますやうな鹽梅で、どゝのつまり新年の小手調べに「黄夫人の手」と題する未熟な痴け話をいたし、御機嫌を伺ひまして引下らうと存じます。早速本題にとりかゝりますが、この怪談と間違へられさうな話は、筆の加減で或は長びるかも知れません。新春永日。皆さん、何卒、御ゆつくり、御聞き下さいまし。

處で皆さんも御承知の如く、長崎の新地街と言ふ處は、維新頃から、渡來した幾萬の支那人が集つて、大きな一つの廓を拵へてゐる。その廓へ、一歩足を踏み入れると、遠い支那と云ふ國へ行つたやうな氣持ちがする程の別世界なのです。土地の人

も、旅人も、流石に此處へ出掛けることを避ける位。長崎と云ふ寂かな、おつとりとした町の、而も殆んど眞中に、泥を浴びて跳いてゐる豚の宿と言ひたい一廓が、どうして今日まであるかが不思議でせう。はじめて、長崎へお遊びになる方が、必ず驚かれるやうに、廓を繞る高さ凡そ七尺に餘る白泥の回塀が、埒もなく崩れかけて、塀の破れ目から、丸煮にした鳥や家畜の湯や、責め油の煙が、何とも言へぬ悲調を帶びて、塀外を通りかゝる人の首に捲きついたら最後、終日臭ひが跟き纏ふて離れない。

何故そんな氣持の悪い場所を紹介するんだと仰有るかも知れませんが、これから申し上げやうとする話が、迷惑ながら、この奇怪な支那人の廓で起つたことなんですから、御厭でも暫く御辛棒なすつて下さいませんと困ります。

此處にまた、同じ街の寺町の裏手に、藤三と言ふ中學生が彼の祖母と貧しい生活を立てゝゐました。新地街の廓から、ざつと西北、伊良林の墓地を拓いて建てた隱居所風の小さい二階家、と申し上げると、さも立派な建物のやうに聞えるから、面倒でも間數を調べて見ると、二階が三疊に四疊半で、階下が六疊、六疊とそれに板張りの臺所と、つまりこれだけの處に藤三と彼の祖母が、居賃四圓を半年溜めて住んでゐたと、かう申し上げる積りだつたんです。彼は中學の五年生でした。この家から東山手の學校までは、新地街を突つ切るのが一等近い。でも、何しろ、今申し上げた通りの場所だから、其處を突つ切る勇氣がなくて、廓の外側、一口に云へば、先づ支那人街の外廓の泥塀に沿ふて、五町ばかり迂廻し、それから、大浦居留民地へ拔けて、名代の切り通しは、和蘭陀坂を登り切ると、すぐ取り付きが活水女學校。中學は其隣りになります。餘談に渉つて恐れ入りますが、私が、日頃お世話になる文學者の秋田雨雀さんのお話によると、この女學校へ、神近市子さんが通つて居られたさうであります。

えゝ。處で、も一つ藤三が此新地外廓を何故通るかと云ふと、それは師走の、ぐつと押し詰つた或る雪曇りの日に、同塀の下を歩いてゐると、一軒の支那造りの屋根と、雪雲とが、すれ〳〵に見ゆる赤黝い窓の中から、突然眞つ白い女の顏が現はれた。汚ない巫女の住みさうな穴倉と、白い女の顏との釣合が餘り懸け離れてゐるので、藤三は、四角なぺんから石を疊んだ路傍から、凝手と窓を見詰めてゐると、窓框が深く切り込まれてゐる上に、高いので判然は見えないが、女の顏は、壓しかゝる雪の切れ目に光る雲の澪を無心に眺めてゐたが、ふと眉を潜めた時に、片手に握つてゐたものと見え、小形の綠色の瓶をかざし乍

ら、中を透して見てゐました。藤三の好奇な目は、忽ち女の顔から瓶に移つたが、それが青梅の砂糖漬だと解ると、頓に馬鹿々々しくなり、知らないうちに引摺られて行つて、赤塗の壁にぴつたり噛りついてゐた自分の姿も馬鹿げて見えたので、あたふたと窓下を通り過ぎましたが、藤三がその日一日窓に現はれた女の白い顔を忘れることが出來なかつた譯は、その顔に刻まれてゐた柔らかい鼻から、眉の薄い處から、濃い髮の生え際から考へて見て、どうしても支那人らしくないからでありました。けれども、日本人が半ば怖れ、半ば嫌つて近づかぬ場所に、まかり間違つて日本の女が隱れてゐると考へて見たところで、あれ程色のくつきりした、細面の主が道樂にも住めたものぢやないんです。

あとで解つたんですが、それは、矢つ張り日本人の女でした。藤三は、それが果して日本人であつたか、支那女であつたか、先づ正體を知るまでは、どれ程苦んでも、承知出來ない變つた性質でした。

その日の課業が終つて、今一度新地街へ廻つた時、氣にかゝる窓下を通る心組みだつたが、愈々外廓まで足を運ぶと、路端一面に擴げた蓆に、ころ〳〵と、轉がしてある青黴の黑海鼠や海鼠から漂ふて來る異樣な臭ひに、他愛もなく脅やかされて、共處を窓下へ駈け抜かうとした藤三は、愕然する物に出遇つて了ひました。往きがけに見た女の顏が、形は、そのまゝ眞つ黄色に變つて現はれてゐるではありませんか。而も、朝、怖る怖る、窓に倚つてゐた女が、思ひ切り乳房まで露はにひろげて、藤三を瞬きもせずに見詰めてゐるではありませんか。藤三の眼は彼女の髮に向つて閃めきました。女の髮は丸髷。窓の中に丸髷がゐるとすれば、疑ひもなく、支那人の女房になります。それに、朝見た時は、まだ二十を少かに越したばかりだつたのが、一足跳びに四十五六の大年増に早變りしてゐるんでせう、藤三は泥塀を曲るや否や、苦力の女房達が土器を洗つてゐる濁つた河を銅座の方へ駈け出しました。銅座は新地街の隣り町になつてゐます。家へ歸つた後も、成る可く彼女の醜い土色の顏を思ひ出すまいと努めましたが、その無益な努力は、意地惡く、一層強く女の幻を彼の頭に燒きつけるのでした。

氣の所爲か、首筋まで虱の這ふやうに、むづ痒いので、襯衣一枚になつて、襟口を調べたが、何にもない。

多分神經だらうと思つても氣持が惡い。その晩湯屋で着物を脱ぐ時、また一頻り同じ首筋がむづ痒くなりました。何でもないと思ひ乍ら、手を伸べて撫で廻したが、矢つ張り何にもなかつた。然し、中指と藥指の裂け目に、黄色い油じみた汁が、粟

粒ほど、ぽたりと密着てゐるのを見つけた時、彼は寒さを覺えて、湯槽へ駈け込んだんです。黄色い汁は生臭い匂ひがしたけれども、それが何であるか、どうして頸筋についてゐたかと言ふことは、それから、ずつと後になつて、黄塵來といふ支那人に說明して貰つて始めて解つたやうなもの、、さうでなければいつまでも知らずにゐたでせう。

黄塵來といふ支那人は藤三より一つ年下で、その日から約三週間目に、偶然藤三の中學校へ入つて來たんです。その時、藤三の左席が空いてゐたから、其處へ席を占むることになつたが、始めのうちは、お互に遠慮し合つて、碌に口も利きませんでしたが、冬季の試驗が濟む迄には、餘程親しくなつてゐました。然し一方は藤三と云ふ變人で、一方は、此處に入る前迄上海の邦人學校に居たと云ふので日本語こそ達者でしたが、隱せないのは支那人の容貌なんです。この二人は、親しく交際ふやうでも、何處かに、冷めたい風が流れてゐるやうで、言葉も丁寧なものでした。

處で、色々冗いことを申し上げるやうですが、どうして、藤三が指の叉の黄色い一物の說明を得たかと云ふと、或る日、藤三と列んで一尺を距てぬ黄塵來の額に、丁度藤三の指の叉に着いてゐた小粒の汁が、三ケ所も、ぽつ／＼と浮いてゐたから、彼は決して其儘見遁しませんでした。藤三の問ひに應じて黄塵來は、淋しげに笑ひ乍ら、

「これは湯海鼠蟲の糞です。私の家では湯海鼠を賣買しますから、それが飛びついたんでせう」

と、なま白い手の甲で、すうと拭きました。それは會得出來た。すると、今度は、彼が、湯海鼠を扱ふ支那人であるとすれば、新地街に住んでゐなければならないと云ふことになる。同時に、この男も其處から通ふて來るんだと思つたとき、忘れやうとして、忘れ切れずにゐた黄色い女の顏が浮んだ。黑い鐵の扉を窄めて、その奥で、恐ろしい罪惡が赤い口を開いてゐるやうな窓框を思ひ出さずにゐられませんでした。人間の心は、こうも勝手に、變り易いものでせうか。今まで一番親しかつた塵來が頓かに汚なくなつて、彼の支那服から、知らずにゐた異樣な惡臭が洩れて來るやうです。男としては、支那俳優の女形にしたい位、優し過ぎる程優しい美男子の彼が、外向いてゐると、いつのまにか、あの泥窓の下に蹲まつてゐた、「濟度界」と首に彫つた青塗りの石狗に似て來るやうです。

藤三は塵來と敎師の隙を見て、故意と鉛筆を机の下に落して、それを拾ひ上げやうとする拍子に、別段のこともい塵來の身の周圍を嗅がうとしました時、突然小さい聲で、彼が「私が拾つて

上げませう。何だか、私の靴の先へ轉げたやうでしたから」
と云ひ乍ら、手を伸べて、
「これでせう？」
と藤三を見た顔が、妬ましい位美しかつたので、藤三は心中で恥じ入りました。兎に角、指の又の一物が湯海眼蟲の糞であることが解ると、新地街を通つてゐるうちに、ふと、そんな蟲がつかぬとゝ限らぬと考へたのでせう。すつかり安心しました。

二

處が、それから二三日經つと、黄塵來がちつとも學校へ出なくなりました。彼の席には、彼が持ち歸へるのを忘れた消しゴムとペン・ナイフが埃を被つたまゝ、轉がつてゐました。話の先を急ぐために、つい申し上げるのを怠つて居ましたが、實は塵來が出なくなる前日に、こんな事が、藤三等の教室に起つたんです。それは黄塵來の左隣りの席を占めてゐる田代と云ふ男の、財布が突然行衛不明になつて、教務係が來て、部屋中隈なく調べましたが、どうしても出ないので、到々財布は何者かに盗まれたことに決つたのです。そうなると今度は同級生の身體檢查。その檢查が始まらうと言ふ騷ぎに紛れて、突然居なくなつたのが、この塵來です。然しそれには誰も氣がつきませんでした。先づ檢查の「い」の一番が蒼くなつてゐる田代で、身體の調べが、濟むと、教務係が、一度問ふたことを繰り返して、財布の中味は幾何だつたかと尋ねた。田代は判然幾何々々だと答へる。自分の財布の一錢一厘まで記憶てゐると言ふことは、有り得べきことで、而も、そうでないのが普通でせうが、田代は月謝の外に何にも入れてゐなかつたらしいのです。教務係は先づ彼を疑ひました。と云ふのは、田代が一年生の時に、或る友人の本を盗んだ歷史もあるし、金箔付の月謝滯納者の一人として、教務係の目には、不良性を帶びて見えてゐたんでせう。それであはよくば、月謝を盗まれた體にして、期日を延ばして貰はうと云ふ太い了見から、危ない狂言を打つのではないかと思はれたらしいのです。そのどさくさに紛れて塵來は搔き消すやうに見えなくなりましたが、誰一人入學つたばかりの彼の仕業とはしない。然し到々金入が出ないで、學校がひけて、いつも連れ立つて門をくゞる支那人がいなゐので、藤三は、歩いてゐるうちに、だん／＼塵來を疑ひ出しました。

その翌日から跡を絕つたやうに姿を見せなくなると、彼を怪しむ心は強くなりました。三日目に、突然田代が面目なげに、
「財布がありました。本箱の後ろに落ちてゐたんです。皆さんに大變御迷惑を掛けて申し譯がありません。何卒私の不注意と

粗忽を許るして下さい」

と同級生の前で頭を下げた時、藤三は、つまらぬことから、塵來を疑つた淺墓な考へを一人で恥じました。同時に彼に對して氣の毒でなりませんでした。財布が失くなつた翌日は、向ふ見ずにも、友達甲斐に、塵來の家を探して、不心得を諭して、忠告を與へやうとさへ思つたのが、やがて、さうでない事が解ると、獨りで赤面はしましたが、今度は、彼が登校ない譯を知りたくなつたんです。

財布が紛失したといふ話を聞くと、どう言ふ譯だか、彼の顏色が、あの美しい顏色が、見る間に死人の如く變りました。それが藤三は、傍で見てゐて、腑に落ちない。三日間姿を見せなくなつた時、藤三は、漸く彼を病氣だと決めました。そして、彼を疑つた罰に、一度見舞つて、序に財布が出たことも知らせて置かないと氣持ちが惡いだらうし、また、彼を見舞つてやる者は、藤三を措いて、他になからうと思つたからです。

翌日も顏を見せなければ、愈々訪ねる積りで、學校へ行くと、塵來の席は依然として空いてゐましたので、今申し上げた考への外に、いつも藤三を苦しめる彼の好奇心から、塵來の家庭を知りたいために、教務係で住所番地を尋ねて、思ひ切つて、新地街の廓の中へ、例の窓を避けるやうにして、入りました。

藤三が無斷で、異民族の部落へ闖入するのを豫期しない塵來――胥煙の奧深く病臥してゐると想像した塵來が、石垣を疊み折つた家の閾に腰掛け乍ら、長管の吸煙罐を抱えて、夢見るやうに、じゆう、じゆう、じゆうと吸ふてゐやうとは、どうして思ひがけませう。

藤三の姿を發見するや否や、塵來は慌てゝ吸煙罐を後ろへ隱して秘密を探りに來る探偵でも拒むやうに戸口に立ち塞がりました。藤三は呆氣に取られて了つた。褪紅色に塗り潰された戸口の土間に埋めてある二箇の銅筒の口から青い煙が蛇の如く蜒つてゐて、その煙の消ゆる處に、土皿に盛られた一尾の胎豚が、手と足とを縛られたまゝ、眞つ赤に烹られ、仰向けに轉がつてゐました。

塵來は只無暗に驚いたのですが、次の瞬間には、こんな奇怪な家が自分の住居だと藤三に知られるのを恥づるやうに、

「あなたは、何處へゐらつしやいますか」

と云ひました。塵來は、洞穴のやうな奧を振り返りさま、顏を赤らめて、

「私を訪ねて來たんですか」

とまた云ひました。

默つて立つてゐる藤三の後ろを、煤けた雙輪車が、蠅の集つ

た黒砂糖の籠を乗せて行く、その後から赤珊瑚の耳玉を下げた纒足の女が、ちよびんとした兒を網袋に入れて、肩から背負ふて過ぎた頃、藤三は漸く口を開きました。塵來は家へ入れとも言はぬし、彼も入る氣がしません。Chinese Grocery「余腿彩蛋」など、云ふ門を潜る氣味惡さを經驗せずに、藤三は引返しました。塵來は、氣分さへよければ明日から、また學校で、あなたと逢へると言ひました。藤三が新地街の廓を跳び出す迄、家々の戸口から、鬢垂れた日本服の女や、辮髮を切らずにゐる兒や、カラーのない洋服に木履を穿つた支那人が、今にも掴みかゝりさうな氣色で、彼を見送つてゐました。

途中で、片手に大きな支那銅貨を掴んで、片手に藥瓶を提げた黒衣の老婆に出逢つたり、姙み犬を連れて露路を徘徊する立ん坊と擂れ違つたりして、怖々黒煉瓦の倉と倉との間から、振り返ると、黄塵來の軒が、一番冴へてゐるやうな氣がしました。

思ひ切つて、廓の中で、塵來に逢ふことは逢ひましたが、彼に、どんな家族があるんだか、知らずに、頭から此界隈の空氣に脅かされて、物に怖える犬の如く、廓の外へ遁れたんです。

家へ戻るまで、彼の家に見た硝子棚の中のいろ〳〵の瓶や壺の形が、目先にちらついて「大粒千貝」とか「大炒蔥」と云つた文字が、赤レッテルの上で躍つてゐるやうでした。

三

で、翌日學校へ出ると、塵來の席は、まだ空いてゐました。物理學の時間に、小使の老人が來て、教務係が藤三に用があると言ふ。餘計なことを申し上げるやうですが、この學校は、月謝の納入期日を三日も經過すると、授業中に、かうして呼び出して、滯納の理由をなじる習慣になつてたので、度々その辛い目を見てゐながら、貧乏者の悲しさには、殆んど毎月催促されて來た藤三も、流石に、この時はひやりとしました。レンズの講義をしてゐる教師に斷つて、教室を出たんです。

「小使さん。月謝の催促だらう」

「あゝ、早う納めるものは納めた方がよか。さうせんと、何遍も呼び出されちや、あんたの方でも、きまりが惡かろ」

藤三と小使の老人との對話は、いつも定つてゐます。教務係に逢ふと、型のやうな催促を受けました。それが濟むと、尾を掴まれた猫が、隙を見て逃げるやうに、藤三が教務室から跳び出さうとすると、

「おい。君。君。一寸待ちたまへ」

と呼び止められました。教務係が

「君だつたね、黄塵來の居所を尋ねに來たのは？　どうだい。行

つたかね」

と煙草に火を點けて、大變ゆつくり構へるので、藤三は一寸意外の感がしました。

「行きました」

「どんな家かい。」

藤三は見て來た通りを述べます。すると、

「濟まないが、月謝滯納の罰金に、君、歸りがけに、も一度廛來の家へ立ち寄つて呉れないか。こつちで行く者がないんだから。實は、一昨日葉書で月謝を期日までに是非納めろと云つてやつたが、返事も來なければ、本人も出ない。困るから明日まで整をつけろ。本人が病氣で出られなければ、使ひでも寄越せと。君。言つてくれないかね」

と命令的に賴むんでせう。こう言ふ理由から、藤三は再び新地街の廓の中へ、いや／＼ながら舞ひ込んだんです。二度目には、二つ出口の別の口を選んで、中へ入ると、いきなり、消魂しい家鴨の啼聲に驚かされたのですが、その無數の鳥籠の中で騒ぎ廻る家鴨の群を、窓から斜めに見下してゐる女の横顔が、突然、藤三の目に入つた時、藤三は、思はず後退りせずにゐられなかつたやうです。途端に女の横顔は窓に消えて、消えた空間に、思ひも寄らぬ廛來の顔が、浮き上つたではありませんか。藤三を惱ました例の女の顔が、煙の如く消えた跡に、すぐ入れ替つて廛來の顔が現はれたのですから、少なからず狼狽しました。家鴨籠が、苦力の手で、すつかり何處へか運び去られるまで、彼の名を呼ばうとして、出かゝつた聲が、咽喉の奥へ逆戻りして、どうしても出ないでゐるうちに、廛來の顔も窓の中へ消えて了つたんです。窓下から、露路を拔けて表口へ廻らうとした藤三の足は、石狗の前で、ぴつたり動かなくなつた。出し拔けに窓のうちで、月琴の爪彈が起つたからです。同時に、髮の毛の慄ふやな聲で、「丁香欖玉桂欖和味鹹甜白欖」と此邊の流行青樓歌謡を唄つたのは、確かに男でした。藤三は屋守のやうに壁にくつついた。途端に、又、「二文錢買兩個實在便宜」と惚れ惚れする艶めかしい聲がつゞいて、それが女であるか、男であるか判斷のつかぬうちに、急烈な靜けさが、窓のうちに漲りました。それまで彼は壁から離れずにゐたんです。表口へ廻つた時劈頭に藤三の目を驚かせたのは、女の顔を見た例の石狗の窓が直ちに一度見た廛來の家の裏口だつたからです。して見ると藤三と彼女とは、こうして、一度はどうしても落ち合はねばならぬ因緣の下にあつたんだと、言ふことが出來るではありませんか。

例へばです。通りがゝりに見た醜い女の顔に苦しめられてゐ

る矢先を、廉來が態々學校へ入つて來たり、田代が財布の置き場を忘れたり、廉來が無屆缺席をし、つゞいて月謝を滯こらせたりする。それがために、藤三が新地街へ入ることを餘儀なくされる。それが皆藤三を彼女に引合はせるために、つくられた事件のやうではありませんか。藤三も實は、さう考へて、恐ろしい、厭な、弱い氣になつたことを申し上げませう。

處が、最初窓の中から藤三を睨んだ彼女の顏は、彼女の目は彼女の口は、藤三が門前に佇んで、入るのに躊躇する氣色を見て、彼女が、慌てゝスリツパを足の先へ突つかけ乍ら、彼の手を取らんばかりにして、部屋の中へ招き入れた時とは、まるで別物の觀がありました。然し、確かに窓に見た女です。而も、藤三が想像通りに、紛ふべくもない日本婦人だと云ふことは、着物の着方から、言葉から、體のこなしから、隱せるものではない。

彼女の不思議はそればかりでなく、或る時は二十前後に見え、ある時は四十の年增に見えた顏が、藤三と圓卓を挾んで面と向つた時は、三十代に變つたゐました。世の中にあるだけの苦勞を仕拔いた風情の彼女が、遇然にも廉來の母親になつて現はれた刹那の驚愕は、藤三自身でも、形容が出來ますまい。

「廉來が始終お世話樣になりますさうで、おうきに、有難うございます。なにしろ、こちらには、お友達もありませんし、また廉來も內氣な我儘者でございまして、こうして居りましても、近所に友達一人ないんですよ。これからも、何卒、いろ〳〵御敎へなすつて下さいまし。それに、昨日は、態々御見舞ひに來て下すつたさうですが、廉來が、あの通りの解らずやでございますから、家へお上げもしないで。」

と云ひ乍ら、

「廉さん、お茶を」

と丁寧に藤三へ向つて、頭を下げて面喰はせたんです。廉來は硝子戶の中から取り出した銀針古芬一摘みを茶器へ移しました。然し藤三は到頭此家を出るまで、湯垢の茶碗に口をつけなかつた。彼女は藤三の前に茶碗を出して、「每年春が近づく頃は、ぶら〳〵する癖がありますので、上海の學校も辛棒が出來ずに、途中で廢めてこつちへ渡つて來ましたんです。」

と、如天昌と捺した金文字印の黑繻子の帶をぎゆうと締めました。白珊瑚の簪さしの頭が眞つ黑な手柄の下から、しほらしく見えてゐました。藤三は世の中に、黑い手柄のあることを始めて知つたんです。

「あなたも、お父さんがないさうですね。」

彼女は、こんな奇問を發した。

「廛來にもございません。去年亡くなりましたんです。二人つきりでほんたうに淋しうございますから、度々遊びに來ていたゞくと、いゝのですが。」
と云ふ。

藤三には兩親がない。ないのは彼が幼ない折に死んだからであります。自分の身の上話を或時廛來に打ち開けたことがあつたが、廛來は、いつの間にか、それを彼女に仲次したと見えます。藤三へ勸めた水瓜の種を摘んで、巧妙に縦から嚙み割り乍ら、藤三が月謝の一件を持ち出さうとすると、慌てゝ大仰に、
「まあ〳〵。どうも恐れ入りました。それでは、まことに、」
と帶の間から、遠慮なく財布を出した。
「まことに、憚り樣ですが、明日學校へお登りになる時に、お面倒でも、お屆けなすつていたゞけますまいか」
と紙幣を折つて出しました。廛來は、葉蘭の床に掛けてある、支那美人が、絹團扇をかざして、小狗に戯れてゐる軸の前に腰かけて、顏を赤らめてゐました。

歸途。廛來が門口で、
「あそこが私の伯父の家です」
と指して敎へた軒先を通る時、戸口に「黃隆泰——包辦酒席海鮮炒賣　No. 152. Woo Loong Taih」といふ文字が見えて、曇つた硝子窓の中に、鈎づりの肉類と一鉢の水仙があつたやうでしたが、ふと、髪毛や玉葱の皮を取り散らした床の奥から、じゆう、じゆうと沸る油の煙が柱のやうに、なびく中から、垢じんだネルの繻袢を、細いしごきで締めた下へ、桃色の腰卷をはみ出した女中が、ぺつと唾を吐いたとき、藤三は、あつと言つて逃げました。

翌日廛來の月謝を納めてやりました。自分の分は滯らせて置き乍ら、他人の分を持つて行く體裁惡さに、小使の老人を頼んで敎務係へ屆けさせたのです。廛來は何の目的で學校へ入つたのか、まだ聞ないが、藤三は來年の四月此校を出て或る専門學校へ行くことになつてゐたから、「半月以上月謝を納めざる生徒は除名す」とある規則が無暗と怖かつたんです。滯納してゐる間は、何を敎はつても、しみ〴〵頭の心底に落ちつかぬ。處へ妙なことから親しみ合つた廛來や彼の家族のことが横合から、頭へ入つて來て、何を考へても纏まらぬことばかりでした。

その日。和蘭陀坂から梅ケ崎の斷壁の下を通つて、
「もし。もし。」
と後から呼び止められた時に、月謝一件が胸に閊へてゐた藤三は、はつとしました。まさか、自分一人の月謝を催促に、後から誰かゞ追ふて來る理屈もないのですが、藤三には、さう考へるだ

けの餘裕がなかつたんでせう。

それは麿來でした。藤三を迎ひに來て、和蘭陀坂で行き違つたと見えて、急いで駈けて來るんです。

「やゝさんが、一寸立ち寄つてくれと云ひますから、是非私と一緒に家まで來て下さい」と云ふ。やゝさんとは麿來の母親――彼女のことです。家へ戻つた處で、香ばしい事があるでなし。勉强するでなし。藤三は彼に伴はれて、三度新地街へ入ることになりました。

いつ見ても泥まみれの街ですが、二度三度と足繁く來るにつれて、どうやら、その邊のエキゾチツクな別種の趣が、いくらか受取れるやうな心地もします。「やゝさん」の彼女は、麿來が藤三を連れて來るのを、窓から例の如く、不思議至極の顔を出して、待つてゐました。彼女の顔が今日又白く見えるのは、厚化粧を凝らしてゐたからです。藤三は彼女に或る親しみを發見してゐたと思はれるほど、馴れ馴れしく、

「月謝は確かに屆けて上げましたよ」

と日附の受領證を彼女に渡しますと、彼女は「大きに。大きに。お世話様でした」

と二三度いたゞいて、帶の間へ藏ひ乍ら、

「今日は、麿來のちやい〳〵さんの一周忌で、これからお墓詣りをしますが、その前に、ほんの、眞似だけ御飯を一緒にしまはうと思つて、お呼びしましたが、あなた、まだでせう?」まだですとも。藤三は午後の課業を棒に振つて、午前十一時に出て了つたんですから。彼女は、藤三に晝飯を奢るために、態々藤三を呼ばせたんです。

「さあ。こつちへ何卒。娘も間もなく來ませう」

と言ふ處へ、

「どうも、遲くなつて濟みません。おやお客さま?」

と藤三の後ろから、十八九の娘が、派手に着飾つて、入口の部屋を、外から覗きました。この娘も日本人でした。此邊へ平氣で來る處を見ると、餘程馴れてゐなければなりません。すると、久しぶりに此娘と逢つたやうに、麿來が、戸口へ駈け寄つたかと思ふと、暫く扉の蔭で、ひそ〳〵立話をしてゐましたが、やがて、娘は耻しさうに、麿來を連れて、藤三に默禮し乍ら、隣室へ入りました。

「あの娘さんは誰ですか? 近所の人ですか」

「いゝえ。妾の娘ですよ。」

と笑ひ乍ら、彼女は、

「お慧。お慧。」

と呼びますと、扉を細目に開けて、お慧といふ娘が顔を出しま

した。
「其處で何をしてゐるの？　廛來を呼んでおくれ。」
　廛來とお慧は顏を見合せ乍ら圓卓の側へ來ました。彼女にお慧といふ年頃の娘があると云つて、別に不思議とは思ひませんが、廛來が彼女の子だと、最初聞いたときに、少しも親子の顏が肖てゐないと思つたやうに、お慧も自分の生みの子だと云はれたとき、また、何だか、肖ない親子もあるものだと思ひました。藤三自身も、彼の持ち前の好奇心が、むく／＼と頭を擡げてゐたことを恐らく、覺らなかつたでせう。段々に、解つたんですが、お慧といふ齒なみのいゝ、色白な、背の小高い娘と、廛來とは許嫁だつたさうで、さう聞いて見ると、成る程、顏が親に肖なくても、差し支へない。つまり、お慧と廛來とは、どちらかゞ、黃家の養子だ。藤三は、讀者諸君が、道理上、御推定になるやうに、お慧を、廛來の女房になる女だと考へました。この場合、さう考へなくては叶ひますまい？そんな詮議は後廻しにいたしませう。お慧が彼女の側の床几に掛けて、「艶情碎錦」の赤表紙に、うつとり眺め入る横顏を見てゐると、目の下に、小さい黑ほくろを、發見したが、その黑ほくろが、彼女の目の下にも一つあることだけが、奇妙と云へば、まあ奇妙でせう。

四

　その時、廛來はお慧の、つゝましやかな小膝に片手を置いて、そつと藤三を竊見してゐるんです。藤三にはよく解つた。廛來は一方の手に水煙草の罐を握つて、藤三の手前、遠慮がましく、出し兼ねてゐたんです。藤三も、煙草は好き。ゴルデン・バツトを學校の厠に隱れて喫ふ程ですから。
「黃さん。喫つたらいゝぢやありませんか」
と藤三は思ひ出して、金蝙蝠を一本吸ひますと、彼女が、
「のんだらいゝ。妾にも一服。吸煙罐だと、煙が水を潜つて來るから、口あたりが、柔らかでご」
と廛來の手から、引つ奪くるやうに取つて、吸ひました。丁寧な物腰の彼女は、時々、冗談のやうに、こうした無作法をして見せます。それは、彼女が、自分で告白する通りに、長崎育ちの無教育女だからでせう、こんな町の支那人の女房になる位ですから、念を押して貰はないでも、氏と育ちが結構でないことは解つてゐます。お慧と廛來は、顏を見合せて、秘かな微笑を浮べました。許嫁とは夢にも知らぬから、兄妹のない藤三は、仲のいゝ兄妹だと、嘸羨しかつたことでせう。
　處へ、大きな飯籠を抱えた支那男が入つて來て、それを、圓卓子の傍に据えて行きました。眞似ばかりの御馳走と云ふのが、それだつたんです。大飯籠の側に玫瑰露酒と老酒とが添へてゐ

る。四人が一緒で、支那料理を隣室へ運んで、一つ宛朱塗の短架に列べる間、藤三自身も、この寂かな家族の一員となつたやうな心地がしました。藤三はかやうに親しみ易い男でした。

先刻お慧と廬來とが暗がりに隠れたのは、この部屋の隅に設けてある佛壇に跪禱したんだと云ふことが、

「二人とも、ちや〱さんを拝んだかい」

と彼女が云つた其答へに、

「えゝ、廬さんと二人で、今、拝んでたぢやありませんか」

とお慧が呟くので解りました。ことさらに、日光を蔽つて、壁と扉で仕切つた暗い疊敷の部屋に、赤と緑と、だんだらに染め分けて灯した一尺餘りの支那蠟を左右に七本宛立てゝ、竹軸の青線香から燻る煙の節穴を、ちら〱見え隠れする、古ぼけた支那老人の肖像を眺め乍ら、丼の湯氣を前にして、彼女が壁に凭つたまゝ、月琴を抱え、指の爪を唇に濡すうちに、忽然として藍碧いろの上衣の下から、たぶたぶの絹股引に着替へた廬來が、廊下から跳び出すや否や、彼女と相對して坐つたと思ふと、突然唄ひ始めたとき、藤三は、ある悲慘な神秘の世界へ、落ち込んで行く、不安な愉快を覺えない譯に行かなかつたんです。廬來の唄が高潮に達しやうとした時、ぱつと立つて、佛壇の前で、踊り始めました。その踊りの眞中に、彼の兩手が、目まぐるしく動いたのは、支那老人の前に供へてあつた緑色の爆竹を掴んで、いきなり燭の灯に燒いたのです。無論烈しい音が起つて、眉を顰めてゐるお慧の後ろへ、金線紙の碎片が飛び散りました。廬來は佛前に新燭をかゝげた後で、藤三に倚るやうに、お慧の膝に凭り乍ら、

「ごめん下さい」

と斷つて、寢轉ぶんです。月琴を投げ棄てた彼女までが、今まで、きちんと折つてゐる膝を崩して、胡座を掻いたのを見たとき、藤三は意外の感がしました。實際、固くなつてゐたのは、彼とお慧の二人だけでしたが、愈々、短架に列べてある食ひ物を、態々疊の上へ下ろして、寢轉び乍ら、食ひかけた女人を見ると、こんな女が、日本にもゐるんだらうかと、疑ふ位でした。然し、彼等は平氣です。

「毎年、今月の今日は、佛事をするんですか」

「はい、來年もまたお招きしませう。こんなことは始めてなんでせう。」

「えゝ。伯父さんを何故よばないんです」

「この家と伯父とは、ずつと以前から仲たがひして、往來しません」

彼女は崩した膝を立て乍ら、こう云ひました。それから暫く

して、突然、
「あなたの御宅は寺町の山ですつてね」
「えゝ」
「どの邊ですか」
「三寶寺の裏手にありませう。山番小屋のすぐ側で、森の中に一軒しかないから、直ぐ解りますよ」
「では、南京寺の墓地から、あまり遠くないんですね。家來の父の墓が、南京寺の墓所にありますよ」
と云ひました。何故彼女が、こんな問を發したかと申しますと最後に、
「では、妾共はこれから、墓詣りに參りますが、あなたも一緒に行きませんか。どうせ、その近所まで、いらつしやるんでせう。墓所から、直ぐお歸へりなさることが出來ませう。」
と、藤三を墓參の道づれに誘ふつもりだつたのです。もつとも、藤三の家と南京寺の墓地とは、左程離れてはゐない、と云つても、三町はたつぷりありました。

　面倒でも、此處で少しばかり、說明をさせて、いたゞきます。長崎にお住居の方は、先刻御存じでもありませうが、南京寺と申しますと、その名の示す通り、日本人には緣のない巨刹で、有名な寺町の中央に位してゐます。墓地へ出るには、放鶴亭や保叔塔の下をくゞつて、三潭印月湖の側から、池に沿ふて首を垂れてゐる石馬と、墓地の門に彳む巨きな石人に叩頭して、着物の裾をかゝげ乍ら、面を壓して聳ゆる百七段の長坂を攀らねばなりません。支那人が、最も恐るゝのは、保叔塔の千里神と萬里神の木像でした。

　一像は耳に手をあて、千里の遠い惡事を聞いてゐる。一像は眉に手をかざして、萬里を距てた惡事を見てゐると云ふのです。この、支那寺が、支那人のみならず、街の人々の目に、恐怖の的の如く見られてゐるのは、多分、支那人の屍が、埋葬に先だつて、境内に十日あまり、寢棺のまゝ、必ず雨露に晒らされるからでせう。そして累々と幾百幾千の柩が、或は蓋を彈いたなりで、或は亡者の手足を、はみ出したまゝで、庭一面に列んでゐる景を、片足は木履、片足は、はだしで徘徊する老婆が居るからでせう。

　ですから、彼女に誘はれた時、藤三も決して、愉快な返事をしなかつた譯です。然し、支那人の寺へ足を踏み入れたところで、熱病や惡靈にとりつかれる恐れもないから、うかうかと、三人の親子に混つて、出掛けました。其の家を出やうとする時、ふと、彼の目を烈しく射た物がありました。それは、何でもない、「美爪術師」と云ふ小型の釣り札でしたが、藤三が二度

振り返つて見たとき、硝子戸を洩れる風に、釣札は、ぐるぐると回轉してゐました。途中で、釣り札のことを思ひ出して、彼と肩を列べて歩いてゐたお慧に、
「美爪術とは何ですか」
と尋ねたが、お慧は彼の顏を盜見たゞけで返事をしませんでした。多分聞えなかつたんでせう。銅座から八坂へ、八坂から南京寺の門前へ出る迄、無口な廛來は一口も利きません。門をくゞると、支那人の乞食が、五月蠅く墓參者の跟をつけて厭な氣持ちがしました。一度返事をしなかつたお慧は、
「お慧さんの家は何處ですか？やつぱり新地街の廓ですか」
と藤三が尋ねた時も、聞えないと見えて、返事をしません。奇妙な娘だと思つたのでせう。藤三は執念く、も一度、
「今日お參りする墓は、貴女のお父さんですか」
と尋ねた時、漸くお慧は答へたんです。
「いゝえ。廛來のお父さんです」
　廛來の父親の墓石は、横樣に倒してありました。彼女は僧坊から借りて來た桶の水を、墓石の上に波々と注ぎ乍ら、よく、あれ程、都合よく涙が出るものだと思はれる程、廛來と列んで、墓石の前に跪いて泣くんです。お慧一人は、まるで他人のやうに藤三の傍から觀てゐました。
「廛來のお父さんは、何で亡くなつたんですか。病氣ですか」
とお慧に尋ねた藤三の低い聲が、二三間を距れて、頻りに低頭してゐる彼女の耳へ入るか入らぬうちに、彼女は突然恐ろしい眼でお慧を睨みました。
　もう一つ不思議なことがあるんです。それは、先程まで、美しく冴えてゐた廛來の片頬が、泣き終つて、藤三の方へ向いたとき、爪で搔かれたやうな跡が、すうと二筋現はれてゐました。奇妙なことには、
「あなたは顏をどうしました？」
と藤三に聞かれて、はじめて氣がついたやうに、慌てゝ無氣味さうに、頰を撫で乍ら、陰欝な目を、彼女に向けたまゝ、どう答へたらいゝかと惑ふ風が見えたことです。
　藤三が彼等と別れて、其處から墓地傳ひに家へ歸ると、彼の祖母が、つくねんとして、板張りの臺所に坐つてゐる。藤三が戻つて來ても、振り向こうとしない。老婆は珍らしく、鏡に向つてゐました。
　藤三の祖母を、これから單に老婆と云ふことにいたしますが、老婆は盲目なんです。
「藤さんは、お晝飯が遲いね」
と漸く鏡から離れました。

「新地街の支那人の家で、よばれたんです。お婆さんは、何だつて、鏡臺なんぞ持ち出したんです。」

　盲目の老婆は、鏡と云ふものを、今まで知らずにゐたんです。鏡臺は、それで、押入れの隅に、埃を浴びたまゝ、藏はれてゐました。

「眉の毛が延びたで、拔こうと思ひました」

と老婆が藏ひかける鏡に映つた藤三の顏は、眞つ蒼でした。老婆は、その見えない目の奥から、鋭い光を放つやうに、眉をひそめ、凝乎と藤三を見詰めてゐたが、こう云ふんです。「今日はな。醬油と間違へて石油を鍋の中に入れたけ。煑えた豚肉をロん中へ入れると、石油の匂ひが、ぷんとしたから、氣がつきましたぞ。お前が戻つたらお茶がないところだつたけ。よう他所で食べて來ましたな」

「石油を？そんなものは家にないぢやありませんか」

老婆は慌てゝ手を振つた。

「お前、電燈があるのを、つい忘れたもんぢやけん、もうランプの油が切れる頃と思ふて態々墓地下へ買ひに行きましたさ」

この森の中へ、電線が引かれたのは、既に二ケ月も前のことでした。

「變だなお婆さん。今日に限つて、石油を買つたり、鏡臺を持ち出したり。」

「それがさ、馬鹿げてゐるぢやないけ」

　老婆は、口を開けて、笑つたが、氣の爲か、老婆の舌が、唇を舐めたやうに黝ずんでゐました。藤三は茫然其處に立つてゐました。綺麗な水色の夕空が障子の破れ目から、美しく見えてゐました。

　その晩方でした。藤三が一ケ月目に、ものうく、懶く湯へ行くと、一つ湯船に浴つてゐた痩せた老人が、藤三の顏を、しげ〱と見詰めてゐるのです。不思議な老人だと、藤三の方では氣にかけまいと思ひましたが、何だか一度何處かで見かけたやうな氣もするので、湯船の中で、思ひ出すつもりではなかつたんですけれども、ひよこり慶來の父親の肖像が頭へ浮びました。老人は、あの肖像に、そつくりだつたんです。すると、厭な心地がしました。その老人が、

「あなたは、顏を猫に搔かれましたね」

と言ふではありませんか。藤三は痛みがないので、ちつとも氣がつかずにゐたんですが、老人に指で指されて、慌てゝ湯船を飛び出して、鏡の前に立つと、成る程、頸から頰へ、丁度慶來の顏に現はれてゐたやうな細い線が走つてゐたんです。藤三が着物を引つ掛けて、湯屋の戸口を駈け出さうとすると、露路口

から肩をすぼめた女が出て來て、ふつと藤三と摺れ違ひました時、藤三は立ち止つて「お慧さんぢやありませんか」と口走りました。その女の横顏が、お慧に、そつくりだつたからです。女は、

「おや。だれ?」

と振り返ることは、振り返つたんですが、

「貴女も、この邊にお住ひですか」

と云ふとき、

「あら、あなた、南京寺を御存じないの?」

と、草履を引摺つて去るを見た藤三は、ずんとしました。後で考へると、この女の目の下には、小さい黑ぼくろがないやうでした。

その夜半に、藤三は、物凄い夢に、うなされてゐました。

五

月謝の納入期日を到々一週間經過して、どんな氣の毒な、同情すべき理由が、あつても、今日までには、是非持つて行かねばならぬ日が、その翌日だつたので、藤三は覺束ない金策に出る積りで、二階の四疊で、袴を穿いてゐる處へ、一人の訪問者が來ました。二階へ通したその、突然の訪問客は、支那人でしたが「黃隆泰」と云ふ名刺を見た時、直ぐ、廬來と往來しない彼の伯父だと云ふことが解りました。隆泰がこの、五十格好の男であらうとは思ひませんでした。何故なら、藤三は此男と一度新地街廓の新妓班で出逢つたことがあるからです。

新妓班は廓の公娼が巢を構へてゐる、行き詰りの狹い露路の名で、藤三が最初に廓へ入つた時、出口を失つて、其處へ通りかゝつた時隆泰を見たんです。それは、不規則な形の石を積んだ城塞見たやうな家で、長さ二尺に、丈五尺餘りの穴を造つて、出入りする戶口の、暖簾から、頰紅を塗つた十四五歲の纏足の娘が、白鼠のやうに、首を出して、通りかゝりの支那人を呼ぶ家が、七八軒列んでゐるんです。其暖簾の前で、若い、といふより寧ろ、幼ない賣女に戲れ乍ら、砂糖で固めた南京豆を、石垣の角で、カチ〳〵と割つて、頰紅の女に、分けて與へてゐたのが、藤三を訪ねて來た隆泰だつたので、彼は、或る輕蔑を含んだ意外を以て、迎へました。

更に意外なのは、二階へ通して、藤三が茶器を階下から、運んで來る、ほんの僅かな時間に、隆泰の左の頰にも、一筋の爪跡が出來たことです。藤三が意外に感ずると同じやうに、彼も藤三の頰を見詰めて、暫く首をかしげてゐましたが、間もなく、こう言ふんです。彼の日本語は驚くばかり、流暢でした。

「あなたは黃廬來と御懇意でせう」

「さうです。あなたは、伯父さんださうですね。」

すると、彼は、一層藤三を捕へて、放すまいといふ形でした。

「あなたは、彼家で、何か私の身の上について、お聞きになりませんでしたか」

新妓班を徘徊する男とは受取れない程、言葉つきが丁寧なんです。

「あなたのことゝは？」

「いえ私の噂か何か」

と、いくらか、落ちつかぬ様子もあるやうです。藤三が、廬來の母親に聞いたゞけの話をすると、

「さうですか。それだけですか」

と、漸く安心するらしいんです。藤三は、彼が、何のために、こんな些細な事を糺さうとするのか、また、どんな用件で來たのか解りませんでしたが、つゞいて、

「廬來の家庭を不思議とは思ひませんか」

と云ふので、一層解らないでゐると、

「私や廬來は支那の湘潭から出て來ました。湘潭といふ處は、湖南にあるんです、御存じでしやう。洞庭湖の湖南です。廬來の家も私の家も、あの町では、商家で、代々農業をつゞけて、丁度廬來が、生れた翌年、さうです湘江が汎濫する少し前まで、湘潭にありました。」

こう語つて來た隆泰は、時々、物に怖えるやうに、切り窓を見たり、階段の降り口を振り返つたりしました。藤三は、袴をつけたまゝ、月謝一件を氣にし乍ら、止むを得ず聞いてゐました。然し、

「今日まで湘潭の人々の間に『黄夫人』といふ女の名が、忘れられずにゐますが、その黄夫人と云ふのが、あなたのお友達の廬來の生みの母親なんです。」

と聞いたから、藤三は、段々と話の中に、釣り込まれて行くんでした。それほど、彼は好奇心の強い青年でした。彼の好奇心は、或時は、甚だしく彼を苦しめ、或時は、目先に迫つて來る貧乏と心配とを醫してくれることも屢ありました。藤三は、まだ隆泰が、何故彼を訪ねて、廬來一家の話をするのか、腑に落ちないのでした。

「どう云ふ事からして、黄夫人の名が今以て湘潭人の頭にあるかと云ふと――すつかり御話してもいゝのですが、私にはそんな暇もありませんし。また、詳しく云へば、長くなりますから、掻い摘んで申しますが、一つは黄夫人が、非常な美人だつたからです。黄添娘と云ひました。」

御退屈でせうが、此物語が後篇に移ります前に、是非とも隆

泰の話だけは御承知していたゞきたいのですから、暫くの御辛棒を願ひます。藤三さへ、忙がしい體を忘れて、こうして耳を傾けて聽いてゐるのですから。

「黄添嬿は湘潭人の目を奪ひました。同時に彼等を心底から戰慄させたんです。美人添嬿には恐ろしい竊盜狂の血が流れてゐました。」

隆泰の頸筋から耳の下へかけて、毛肌のやうな、粟が浮いてゐました。

「塵來のお母さんは、あの『やゝさん』ぢやないんですか。」

「違ひます塵來の母親は、今申し上げた女竊盜狂なんです。泥坊だと云ふと、彼女が困窮してゐたやうに思へますが、添嬿の親元は以前、長沙の町でも相應に羽振りを利かせた被布商賣で、添嬿が塵來の父へ嫁した土産は大したものでした。彼女が塵來を生んだのは十五の年と思ひます。初めは目立たずにゐた盜癖が、塵來を生むと、醜くつのつて、彼女が巡邏の手に抑へられる迄には、他人の持ち物は無論、自分の夫の品まで盜んでゐたことが、發覺しました。

添嬿の閨房には、棚に隱された、夫の品物が、いくつも現はれたさうです。彼女は最後に、ある友達の留守宅に忍んで、生憎留守居の老婆に咎められた口惜しさと、自分の惡事がこの老婆の口から世間へ洩れるのを恐れて、其場で絞殺したと御考へ下さい。老婆の仕末もつけずに、物を盜んでゐる處へ、出先から戻つて來たのが、主人でした。

一時は隨分騒ぎました。こう云ふ私も二つ三つ家財を奪られてゐたんですよ。添嬿が竊盜狂だつたことは、彼女が湘潭東郎で死刑になる時、自分で告白したんださうです。彼の父親も手曲が惡かつたんですが、彼女ほど無鐵砲ではなかつたさうです。

娘の方では、自分の父親に、こう云ふ厭な性質があることを知つて居たさうですが、親の方では少しも氣づかずにゐたんでせう。添嬿の業死を聞いて、卒倒して、塵來の家へ、謝罪に來たとき、さう言つたんですから。

然し悧巧な彼女は、恐ろしい病癖を滿足させた後で、定つたやうに、後悔しました。自分の汚れた血が、籠の中に、すや〱と眠つてゐる塵來にまで、傳るのを恐れて、幾度も殺しかけたと申します。

流石に嬰兒の無心な顔を眺めては、それも出來ないのでしたが、彼女は或日、方神に向つて、今嬰兒の生命を絶つことを許すならば、彼は決して二十一歳まで生き延びぬやうにすると誓つたさうです。」

藤三は、それまで塵來の年齢を知らずにゐました。

「麗來は何歳になりますか」
「丁度その二十一です。確かに二十一です」
「二十一？」
「そうです。」
と隆泰は頷きました。二十一まで生かさぬと方神に誓つた黄夫人は、麗來が二つの年に、罪に斃れたことが解りました。
「役人は添嬿の屍から、幾多の湘潭人を惱ました右の手首を斬り取つて、保存することに決めきした。私は無學者ですから、よく存じませんが、稀有の女盗ではありますし、町一番と稱へられた美しい手だと云ふ處から、罪學の參考にでも、する積りだつたらうと思ひます。添嬿は指の爪を生命よりも大切に扱ひました。彼女は磨爪術を知つてゐたんで、自分で、自分の部屋に「美爪術師添嬿夫人」と書いた札を掲げて、自得してゐたやうです。
然し可哀さうな麗來は第一番に母親の二の舞ひをしやうとしたことがありました。彼は、けれども、嚴しい父親――私には血を分けた兄にあたります――の監視のうちに、戸外へ一寸も出ずに育つたんです。湘潭人は昔から、色が黒いと言はれてゐますが、麗來だけは、十歳まで外出をせずに、ゐたものですから、あなたも御承知の通り、異人のやうに白いんです。それに、爭はれないことには、麗來が段々成長するにつれて、母親の黄夫人に顔が似て來るではありませんか。私の口から、こんなことを申上げるのは可笑しな話ですが、實際あれほどの器量を持つた男は、支那には珍らしいでせう。」
と云ひ乍ら隆泰は淋しく笑ひました。それから、また、
「私は湘潭の役場に書記を勤めてゐましたが、黄一家――と申しても、僅か兄と私ですが――世間から爪彈きされては、流石に落ちついた心持もありません。添嬿が死んだ翌月の同じ日に、湘潭を去りました。一寸した、いゝいきさつから兄には默つたまゝ廣東へ出て、海產物を買ひました。損もしない代りに餘り儲けもないので、上海で、今度は料理店を開きましたが、その時は競爭者があつて、とても、長持ちはしまいと思ふ矢先に、折よく、その店を人に讓ることになつて、到々此處へ渡つて來ましたが、もう大部前のことです。兄の方でも、それから、湘潭に居たゝまらず、上海へ出て、それから只今の新地街へ來ました。それは、私より、ずつと後でした。」
隆泰の話が一段落を告げた時に、藤三は待ち受けたやうに、
「麗來も手癖が惡いと仰有るんですか」
と言ひますと、隆泰は老人の口つきで、
「さあ。只今は、譯があつて往來しませんから、存じませんが、

血統が血統ですからね。伯父の癖に、しんみの甥の悪口を叩くと仰有るかも知れませんが、あなたも御油斷なさらない方がいゝでせう。あの今のお袋が麈來の身の上を死んだ兄から、よく聞いてゐますし、折には、變なこともあるんでせうから、あゝして、外へも成る可く出さないし、友達も作らせないやうにしてゐるんだらうと思はれます。然し、これは私一人の考へですけれども。」

と麈來を矢っ張り第二の黄夫人と見てゐるやうです。こんな尤もらしい話を聞くと、成る程と頷かれることも中にはありました處へ、

「私が家の窓から見てゐますと、あなたは昨日麈來たちと黄夫人の墓へお詣りに行きましたね」

と、調子を落して、今度はこう云ふでせう。藤三もこれには、ぎよつとしやうではありませんか。

「麈來の父親の墓ですよ」

「いゝえ。兄の墓は筑後町の崇福寺にあるんです。あなたがお出になつたのは、屹度南京寺でせう。さうでせう。」

「さうです。然し黄夫人の墓が、どうして南京寺にあるんです」

藤三は隆泰に馬鹿にされたくなかつたんです。「それは、南京寺にある墓に黄夫人が埋めてあるとは申しません。そんな馬鹿なことは無論ある可き道理がないんですが、あの――あなたも御覧になつたでせう。あの墓は、黄夫人の靈を慰るために、無益にも、兄が生前に建てたんです。兄の墓は崇福寺にありますよ。それに兄の忌日は昨日ではない。昨日は黄夫人の死んだ日でした。黄の家族は、死人の祟りがないやうにと云ふ意味なんでせう。毎年行くんですよ。麈來もお袋も氣の弱い人間ですからね。」

と云ひ乍ら、時計を出して見てゐました。

「こんな事は何卒誰にも言はないで下さい。とんだお邪魔をいたしました。」

と立ちかけました。隆泰は、態々藤三の家まで、暇を潰しに來た譯は、何だか、これだけのことを饒舌るためでなかつたやうです。外に、もつと重大な要件があるのではないかしらと思ひました。

さうでせう。藤三が期待しない話を切り上げると、さつさと歸つて了つたんですから。

藤三は、出し抜けに來て、出し抜に歸つた隆泰の振舞ひが、不思議でなりませんでした。彼が、墓地の狹い路を抜けて歸る、しよんぼりした後姿を、二階の窓から、瞬もせずに見てゐる

と腹の底からじわ〳〵と、身慄ひが押し寄せて來るやうでした。

えゝ。大變長々と申し上げて、御退屈樣。こゝまではほんの話の前提でございまして、これから、いよ〳〵物にケチが附くと云ふ場面から、藤吉月謝の工面と云ふ大詰めまで申し上げるのでございますが、まづ、この邊で一服いたしまして、後篇へ移ることにいたしませう。

下篇

一

えゝ。前篇は、隆泰が藤三の家より、歸る處で打ち切りましたが、引續き先を申し上げます。藤三が其日の金策は失敗に終りました。學校へは出ませんでした。翌日は日曜でしたから、前日の失敗に懲りず、一日袴をつけて駈ずり廻りましたが、矢つ張り駄目でした。藤三の親戚は彼を相手にしません。愈々金策は駄目だと諦めて、家へ戻つたときは、すつかり疲れてゐたんです。藤三が二階の四疊半で、押入から取り出した小說類を一束に括つて、それを風呂敷に包んでゐる處へ、階下から、老婆が上つて來ました。

「昨日の人がまた來ましたよ」

藤三が階下へ下りて見ると、戸口に隆泰が蒼褪めた顔で、立つてゐました。彼は、また何の用で來たんだらうと思つて、

「お上んなさい」

「いえ。今日は、一寸寺町まで參りましたので、御立寄りました。こゝで失禮しますが、五分間ばかりお耳を拜借したい」

隆泰は、そは〳〵してゐる。寺町に何の用で出掛けたのか、何だか、それも嘘らしく、態々藤三の家を訪ねて來たとしか思へません。藤三が下駄を突つかけて、戸口へ出ますと、隆泰は、

「一寸」

と、藤三を一本の榎の下まで誘つて行つたところで、彼の耳端で、「あなたの家では、變つたことはありませんでしたか。」

と私語くんです。藤三には、その意味が、判然しないので、

「變つたことゝは？」。

「いえ。昨晩、何か變つた出來事はありませんですか」

「何です。變つたことゝは」

「いえ。そんなら、いゝんです」

と、隆泰は其話を切つて了ひましたが、藤三には、それがいくらか氣がゝりでした。

「どうも、すみません、いえ何でもないんです。」

と、隆泰は氣の毒さうに頭を二三度下げるんでせう、藤三は不氣味でならないんです、何處までも奇妙な男だと、あまり好い氣持がしませんでした。すると、隆泰がまた小聲で、
「昨日の話のうちに、黃夫人を捕へて警邏の手に渡した黃家の友達の名前がありましたか」
と云ひます。
「いゝえ。」
「あゝ。左樣ですか。」
と隆泰は安心する樣子でした。
「どうかしたんですか」
「いゝえ別に」
と口籠つた彼は、暫く默つて居ましたが、藤三の目に、心持慄えてゐる隆泰の蝙蝠傘を握つてゐる手の指が、明らかにわな〱と動き出す頃、うつむいてゐた彼は、突然相手の藤三の耳に、また私語きました。
「實はね、いきなり斯樣申し上げては、御解りになりますまいが、私の家に先達てから有つた『黃夫人の手』が突然昨日見えなくなりました。私はお宅から戻つた時には、もう失くなつてゐたんです。」
無論藤三には黃夫人の手と云つたゞけでは、解る筈がないんです。藤三が默つて相手の顏を見詰めてゐると、彼は痙攣るやうに微笑しました。
「黃夫人の手と云ふのは、昨日のお話の中にあつた窃盜狂の手ですか、役人が斷つた手と云ふんですか」
「えゝ。えゝ。」
「それが紛失したとは？」
「私の家にあつたのが、昨日なくなつたんです」
「だつて、あなたの話によると、それは湘潭にある筈ぢやありませんか」
「湘潭になければならない筈なんですがね」
藤三が噴き出すと、彼は淋しく微笑しました。どうもお騷がせしまして濟みませんと云ひ乍ら、すた〱と歸つて行つた隆泰の狂氣じみたところが、可笑しくもあり、哀れにも見えました。何故なら、隆泰は眞面目なんですから。小說の風呂敷包みを提げて、藤三は森の中から、寺町通りへ下つて、それから、南京寺の門前を通り拔けて、或る賑やかな往來へ飛び込んだんです。丁度、東京で申しますと、本鄕の大學前とか神田の神保町と云ふやうに古本屋が列んでゐる。しかし、とても東京などには及びもつきません。
皆さんも御身に覺えがございませうが、申すまでもなく、藤

三は彼が唯一の財產を投げ賣りにするために、彼樣な非常手段を取つたわけであります。古本屋は擔ぎ込まれた藤三の本を調べて見てゐましたが、

「栞の紙は、お戻しいたしませう」

と云ひ乍ら、小說の中へ挿込んであつた紙を、一冊から一つゞつ拔てゐましたが、

「黃夫人と云ふのは何ですか」

と藤三の顏を見るんです。栞に黃夫人といふ文字が一枚づゝ書いてあつたからでせう。その黃夫人が誰であるか識らない古本屋の老人から貰つた買受証を、一度袂へ納めて、途中で出して見ると、一、黃夫人一冊。金六十五錢也。一、黃夫人一冊。金三十六錢也と十五六部の小說が、悉く黃夫人になつてゐたんです。

藤三が慌てゝ引裂いて投げ棄てた買受證が、黑い胡蝶のやうに、ぴら／＼と散つて行くのを眺めてゐると、

「おや」

聲がしました。それは隆泰で、藤三が南京寺の石段を、山門の方へ登らうとする反對側から、こと／＼と下つて來る處で、ぽつくり出逢つたんでした。

「どこへいらつしやるんです」

と隆泰は不思議さうに藤三を見詰めました。

「あ。」

「先刻は失禮いたしました」

「あなたは？」

「寺へ寄りましたので」

と泥まみれの手を後ろへ隱さうとしました。藤三は南京寺の門前から、跳びのいて、駈け出しました。

藤三が隆泰の側から逃け出した時、

「あなたは、隱しちやいけませんよ、黃夫人の手は、墓を發いたつて無いんですから」

と云ふ聲が後ろから追つかけて來たやうです。も一息で、隆泰の泥まぶれの手に袖を掴まれるんだつたと、彼の家に駈け込んだ刹那に、さう思ひました。烈しい動悸が打つてゐたんです。老婆の姿は家の中に見えないで、藤三は、二階へ駈け上るや、否や懐から、古本の賣り上げ高を掴み出して机の抽斗に入れやうとしましたが、抽斗の中を見隙したまゝ、ふら／＼と眼暈を覺えたんです。抽斗は空つぽです。空つぽの抽斗を心持ち傾けた拍子に、ころ／＼と女の手首が轉つて來ました。

「それごらん。あなたが隱してゐたんでせう」

と、見えない處で、隆泰が云つたやうです。藤三が抽斗の中から、摘み上げて、机の上に置いた女の手首は、まだ温味があつたんです。

讀者讀君は、それを藤三の幻影に過ぎないと仰有るでせう。幻影だとすれば、物凄い幻影ではありませんか。それは、學者の說によりますと、手首の部分を內屈とか腕關節とか云ふさうであります。藤三が摘み出した女の手首は、丁度其邊から、鋭利な機械で切斷したやうになつて、滑らかな羽二重のやうな皮膚が、だらりと伸びて、その斷り口を蔽ふてゐました。

色の褪めてぼやけた死人の手とは事變つて、それはさながらに桃色の血がどく／＼と脈を打つてゐるやうでした。

形は大きくないけれども、小さいなりで、華奢に出來てゐたんです。

も少し細かに說明をいたしますと、すらりとした五本の指は、先に近づくに隨つて、細く、少しも歪んだところがなく、麗はしく纖つてゐました。皇妃でも持ち合せますまい。その白い星を浮べた巴旦杏の爪は。

掌を下に向けて、四本の指と親指とは、ゆるやかな弧を描いて微匂を漂はせてゐたんです。見ただけで、人生の奇異を暗示してゐるとこじつけさせて、いたゞきませう。

いつの間に、こんな美しい手首が、机の抽斗に入つたのか、藤三には解りません。たゞ、これが、所謂湘潭婢の手であることだけは、皆さんの御想像通り、藤三にも亦異論がありませんでした。

此處で、本怪談の種を明して了つては、興が醋めるやうですが、世俗の怪談に現はれる「屋敷の主」とか「古池の靈」とかいろ／＼不思議なものが、いくらか迷信的ではありますが、兎に角、あることはあるので、そう云ふ類のものは、大抵、女の怨みであつたり、古狸であつたり、畜生の遺魂であつたり、まづあつさりした處で、けりがついて居ります。これが怪談作者の道具に使はれて、色々奇怪な面目を施して居る。つまり種でありますが、このお話には、その種がありません。支那の湘潭に納まつてゐる黄夫人の手が、長崎へ來るなど〻云ふのは眞つ赤な嘘であります。では、それ見ろ、藤三の心の迷ひだらうと仰有るならとんでもないと御答へしませう。藤三の氣の爲からありもしない黄夫人の手が、机の抽斗から出たのではないと云ふことは、も少し、御辛棒なすつて先をお聞きになれば、お解りになるだらうと存じます。

それでは、先へ行つて黄夫人の手だと思つたのは藤三自身の手だつたとか、大根の切つぱしだつたとか、胡魔化さうと云ふ

積りだらうと仰有かも知れません。そんな卑怯な逃げ方はいたしません。そんな不正直者ではないんです。では、早速先を續けませう。

どう言ふ譯で、何の係り合ひもない藤三の家に、黄夫人の手があるのか、何のためにあるのか、少し理屈つぽくなりますけれども、實際、藤三には、判斷がつきませんでした。

差し當り困るのは、その手首の處置でした。迚も、元々通り轉り出た場處の机の抽斗に納めることは出來ません。

藤三が生涯を通じて、忘れやうと努めても、どうしても忘れることの出來ない戰慄と一本々々の髮の毛が白髮に變るやうな恐怖とは、彼が、その美しい艶めかしい隻手を再び摘み上げて、先程小說を、包んだ風呂敷に包み込まうとした瞬間でありました。

藤三は、風呂敷に包んで、新地街の廓へ持つて行くより外に方法がないと思つたのでした。手首を摘み上げた時の心地は既に氣味惡さを通り越してゐたんです。夢中だつたんです。而も摘み上げて、風呂敷へ移さうとして、藤三が放さうとした指が、突然、手首の中へ、烈しく締めつけられた刹那でありました。その動作が非常に自然的であり、突然であつたゝめに、午前十一時といふ白晝であり乍ら、彼は悲鳴を舉げずにゐられませんでした。藤三の指を摑んで手首は、また瞬間に、その反動のやうに、だらりと綏んで了つた。筋力のコントラクションだつたかも知れません。藤三は二階から跳び降りやうとして、出合頭に、老婆が、

「今朝來た人が又見えたよ」

と云ふのを聞いたんです。隆泰は、多分南京寺の前から、引返して、藤三の跟を追ふて來たんでせう。どうも、左樣としか思へませんでした。隆泰が二階へ登つて、例の一間に座り込む前に、藤三は黄夫人の手を包んだ風呂敷の部屋の襖を締めて、出て來ました。

藤三は彼と面と向つて座つた時、

「先刻は、つい急いでたものですから失禮いたしました」

と云ひましたが、隆泰の方では、そんな挨拶には、ちつとも頓着せずに、

「實はね。今朝來ました時に、お話しやうと思ひましたが、今日は休日だから、店が忙しいので、また更めてお伺ひする積りでした」

と云ひかけて、

「あなたは、どうか、なすつたんですか。大變お顔の色が惡いやうですね」

と一寸口をつぐむ。

藤三は悪靈に憑かれたやうに、きよとんとして、時々、襖のうちを氣にするんです。然し、隆泰は、何にも知らないやうでした。ですから、すぐ、

「あなたと寺の前で出會してから、どうしても、あの話をすつかりしないで店へ戻れなくなつたんです。お忙しいですか？日曜日は」隆泰が日曜日はと云ふのが、ことさらに、さう云つたやうに聞えたんです。

「いゝえ。」

と云ふ返事を待ち構へる積りだつたことは、明らかでせう。

「では、二十分ばかり、お邪魔いたします。」

何卒、五月蠅いでせうが、隆泰が云ふだけのことを、此處で云はせてやつて下さい。彼はこう云ひました。

「黄夫人が、どうして捕へられて死んだか、御存じでせう。彼女が死んだので 二度と彼女の爲に酷い目に逢はないで濟むと思つた湘潭人は男も女も喜びました。ことに、彼女が最後の犠牲を出した、ある友人の家が喜んだのも無理はありません。何しろ雇老婆の仇を取つたんですから。」

「その友人の名は何といふんです」

「それは、何とか云つたんですが、一寸思ひ出せません。然しそれから黄家とその家とは不和がつゞきました。それは、容易に想像が出來ることです。その人には妻がありました。處が、世の中に妖蠱と云ふ奇怪なものがあつて、色々な眞似をする——と云ふことが實際あるとしますならば、それは確かに黄添壽の妖蠱と云ふことが出來ます。その友人の妻が子を生めば、女盜の忌日には必ず死ぬんです。怪我をしたり、病氣をしたりしてね。死んだと思ふと、直ぐ又生れる。つまり、その人の妻は多産性の女だつたんですね。早い話が、死ぬために、子供が出來ると云つても差し支へないが、考へて見ると、隨分氣の毒ではありませんか。大體添壽の方が悪いんですもの。それに、復讐に事を缺いて、生れる子を片端から殺すなんて、間違つてゐますよ」

と隆泰は自分のことのやうに云ふんです、「可笑しいのは、添壽の手首が、何でもない人の袂へ入つてゐたり。急須だと思つて握ると、手首だつたりするんでせう。そんな筈がないんです。考へても御覧なさい。死人の手首が、お伽噺ぢやあるまいし。一人で飛んで廻るなんて、開けた世の中に、節棒なと、てんで、信じなかつたのが、どうでせう。私の目の前にも、それが現はれて來るぢやありませんか。現に、この間まで、新地街の店の二階の床の上に轉つてゐたんです。毎夜、曉け方近くなると、階段が、ことんと鳴るんです。私は、これで隨分氣

性質なんですが、この位厭なことはありませんでした。五日目の朝、近づくのを控へてゐた階段の下へ行つて見ますと、手首は、上から五段目の踏板に、拳を握り詰めてゐたんです。私は、ぞつとしました。毎晩、一段づゝ、ことん、ことんと、降つてゐたんです。手首に觸るが、厭だつたのが、終ひには、見るのさへ怖くなりました。それは私の部屋でしたから、奉公人の目には觸れないで濟みました。私は、直ぐ、階段の入口を板張りにて、それつきり二階へは登らずにゐるんです。」

隆泰は、こう云つて、毒氣に吹かれたやうな、黄色く濁つた目で、藤三を見詰めてゐましたが、またつゞけて、

「すると、昨日から、手首の音がしなくなつたんです。どう云う譯で、私が、それを知つたと申しますと、私の店の女中が、葉書を出しに行きました時、人間の手が郵便函の上に乘つてゐたと申して逃げて歸りました。葉書も投げ込めずにですよ。行つて見ますと、てつきり、彼女の手でした。すると、其晩、廣來の家で、旅の馬鈴薯を庭へあけた時、芋にまじつて、轉り出たと云ふことを隣の主人から聞きましたので、私の部屋の階段の板張りを取り外して見ました。怖々、覗いた時はもうなかつたので、いくらか、安心しますと、新地街で逢つたあなたの顏に搔疵があるではありませんか。昨日、私が、お訪ねしましたのは、あなたの身の上に、何か變つたことがないかと思つ心配になつたからです。今朝だつて、さうです」

藤三が、何か言はうとすると、咽喉を締めつけられるやうに、苦しくなつて、聲が出なかつた。立たうとしても、兩手で、肩を壓へられたやうに自分の體が、重くて、動けなかつた。藤三はその女の手首が、愈々、此次の部屋まで、來てゐることを打ち明けたかつたのでせうが、それが、どうしても出來ませんでしたですから、隆泰が、無氣味な目付をして、藤三のヂレンマを刈り拔き乍ら、冷笑するとしか、思はれぬやうに、

「別段。あなたの家には、そんなことは、ございませんですか、四五日前迄私の左の頸筋にも、丁度あなたのやうな、爪で掻かれた跡があつたんです。」

と折返して聞いたときも、彼は唇を、もぐ／＼と慄はすだけで返事が出來なかつたんです。

隆泰が彼の家を辭して出ると直ぐ、藤三は、老婆に無斷で、森の家を飛び出した。藤三が古本屋の老人から貰つた金は、總體で五圓三十錢ありました。月謝を差引けば、二圓三十錢餘るんです。彼は、二圓三十錢を太決斷で使ひ果す覺悟でした。寺町から、側目も振らずに、廣小路へ出る。

丸山と申します。賑やかな遊廓の入口で、まあ、長崎隨一の

目貫の場所でせう。酒場があつたり、劇場があつたり、その後ろが寄合町と云ふ藝者街につゞいて、殿御方の、お喜びになる花街。青樓が軒を連ねてゐます。この講釋師の文句に出るやうな、巷を選んで、出掛けました。そして、ある曲り角に彳み乍ら、これから、二圓三十錢を思ひ切つて投げ出す可き、バアを探しました。そして、探し當てた家へ、例の手首に追ひ込まれるやうに入りました。森の家では、二階の四疊半に女の手首が、一つ轉つてゐることを知らずに、孫息子の藤三のために、夕飯の仕度をする時刻でした。

三

藤三は入口から、三番目の卓子について、給仕女がやつて來るのを待つてゐました。入つて來た時、何だか天井から釣した大きな電燈の光が、ぼうつと暗くなつて、家全體がぐら〳〵と搖ぐやうな氣がしました。其處へ來た給仕女の顔も蒼白く見えました。彼は其晩何を食つたか覺えない。正宗を飲みたいと言ひつけた給仕女が、間違へて老酒の罎を抱えて來た時、馬鹿野郎と怒鳴つたことも覺えない。ぎつしり詰つてゐる客と客との間を、目に見えぬ影が、往來するやうで、彼は唇につけやうとした盃を幾度も其儘卓上に下ろしたんです。

この暗い電燈と姦ましい雜閙の部屋の中に、あまたの客に取り卷かれ乍ら、恐怖に襲はれてゐたんです。

給仕女は藤三と背中合せに、客衆のさんざめきを、面白さうに眺めてゐましたが、突然、振り返りました。藤三がナイフを動かさうとしてゐる處でした。

「旦那すみません」

光澤を失つて、血走らうとする藤三の目は、すぐ、給仕女に向きました。

「ごめんなさいまし」

と女は頭を下げました。

「何が？」

「妾、旦那に觸りやしませんでしたか」

「知らないよ」

「あら、左樣でしたか。それぢや、旦那が妾に」

「俺がお前の手を握つたつて？いゝえ」

醉ふた客が、給仕女の手を握つた時は、ごめんなさいと言はれるさうです、土地の習慣かも知れません。藤三の後ろに居た女が云ふのを見ても解るではありませんか。

藤三と彼女とは、椅子を距てゝゐましたから、そんな筈はないのでした。藤三が、相手にならずにゐると、女は、捌けない客だと思つたのでせう。ふいと廊下へ外れて了ひました。何故

なら、こんな時には、客の方で、女に幾何か握らせるのも、また土地の習ひでしたから。でなければ、藤三が怒ると思つて出て行つたのか、また、極りが悪いと考へたか。

藤三は怒つては居ません。怒る程のことでもないのですから。然し、いゝ氣持ちでないことは、申すまでもない。五分間ばかりの後、藤三は二圓三十錢を費ひ果しましたが、其處から動き度くないので、そろ〳〵と月謝の分へ手をつけました。彼は森の家に歸るのが、一番怖かつたんです。藤三の周圍に集つてゐる男や女の客は、一人一人、愉快さうな顏で、愉快さうな話をしてゐましたが、到々月謝の金をはたいて、立たうとしました時、群衆は一齊に驚愕の目を、藤三の上に放つたと、お思召して下さい。

立たうとした彼は、無意識に元の場所へつきました。今まで平和に見えた酒場の中は、忽ちにして、不安の底へ落ち込みました。不安は刻々に押し寄せて來ました。その不安の脈は、酒場の隅から隅へ、一人の客から、次の客へと、傳つて行くやうで、一人が椅子から跳び退くと、また一人が立ち上る。そればかりではない。椅子を離れた人々は、丁度申し合せたやうに、銘々の身のまわりを、じろじろと見まわすんです。

藤三の前に突つ立つた中折帽が、

「おや」

と呟くと、群衆は一樣に其中折帽の男を見詰める。多分、その連れだと思はれる眼鏡の男が、

「どうしましたか」

と云ふ。云ふかと思ふと、今度自分が、

「おや」

と云ふんです。渦のやうな風が、部屋の中をぐる〳〵と廻り出したやうです。中折帽はいきなり、藤三に、

「私の手を、ぎゆつと握つたのは、失禮ですが、あなたではありませんか」

「違ひますよ。」

「はてね。」

と首を傾げたが、

「とんだ失禮」

と眼鏡の男を見たとき、

「冗談しちやいけません。僕は女ぢやないよ」

と眼鏡の男が、また藤三へ向くんです。すると、殆んど、部屋を塞いでゐる凡ての人が、一樣に手首を嚴しく握られたと叫び乍ら、瘋癲病院のやうな、物狂はしさを見せました。藤三は、酒場の亭主に抱えられて、辻待車で送らるゝ時は、物覺えがな

かつた。車の上で、氣がつくと、彼の側に、も一人腰を掛け乍ら、藤三が逃げないやうに、目に見えぬ手で、彼の腕を、捕へてゐる者があるやうな氣がしてなりませんでした。然し彼の側には誰もゐる筈がないのです。

森の家に戻ると、彼の老婆は、寢てゐました。一人で、二階へ登れない彼は、態々寢込んで了つた老婆を起して、一緒に、例の部屋へ連れ行きました。

どうしても目に觸れずにゐない、目に觸れたら、觸らずにゐられない、女の手首がなくて、手首を包まうとした風呂敷包みが、きちんと、折り疊まれて、机の上に片づけてあるのを見た藤三は、

「お婆さん、風呂敷は、あなたが、疊んでくれたんですか」

と、急き込んで、問はずにゐられませんでした。

「はい。妾が疊んで置きましたよ。お前が居ない時は、妾が掃除をしないとすぐ芥だめのやうになるけ。」

「風呂敷の中に、入つたものはどうしたんです」

「何にも入つてやしないよ。くしや／＼に揉んであつたぢやないけ」

藤三は、机の周圍を見廻しましたが、女の手首らしいものは落ちて居ませんでした。確かにある可き筈の物が、失くなるほど氣持ちの惡いものはないでせう。ことに、それが、不思議の手首である以上、確かでなかつたんです。藤三は、部屋の中に、暫く茫然立つてゐましたが、突然押入を開いて、中を調べましたけれども、女の手首は、なくて、終りました。

彼が、その隣の部屋に夜具を被つて寢た時「電氣は、點けとかうかの」

と老婆が云ふ。

彼は、電燈をつけつ放しで寢たこともないし、眩い光の下では、眠れぬ癖が、ついてゐたんです。それを心得てゐる老婆が、今宵に限つて、そう云ふのが、また氣になる。

藤三の方では、どちらにしても、眠れないと覺悟してゐましたが、明るければ、色々奇妙なものが、見える。けれども、暗の中に一人埋まつてゐるのは、更に恐ろしかつたのでせう。

「點けといて下さい。それで、いけなかつたら、自分で消しますから。」

と、態々、寢轉んで、電燈も手の屆く場所へ、下げて貰ひましたが、

「それでは、明る過ぎらう」

と老婆が、覆布を被せたのを、目を閉ぢて知つてゐましたが、

「お休み。」

と云つて、こと／＼梯子段を下つた時、ふと目を見開いて、頭上に垂れてゐる、電球の覆ひが、女の手首を包んだ紫色の風呂敷だと解つたので、驚いて、除り棄てました。風呂敷が、投げ棄てられて、鴨居の釘に引掛ると、彼は跳び起きて、今度は隣室へ放り込んで、襖を締めたんです。

電燈の下で、眠れない彼は、思ひ切つて、消しました。そして、夜具を頭から、すつぽり被つて、今一日の奇怪な出來事を一切忘れてしまはうと努めたのです。

藤三が、眠りに落ちたのは眞夜中頃でした。とろ／＼と睡りかけた、彼は直ぐ恐ろしい夢を見たんです。

半睡の夢は朦朧として、判然りとお話が出來兼ねますが、ざつと申し上げますと、二人の旅人が夜更けに、ある川合街の旅宿に泊つた。その一人は、道連れで、一人は藤三自身でした。宿屋は、中央に一條の廊があつて、その兩側に、陰欝な部屋が、いくつもあつたやうです。亭主も旅客もゐないのに、只一人の女の飯たきが住んでゐました。暗い廊下には、赤色のランプが、一つ、ほゝづきのやうな光を床に投げてゐました。

藤三と旅人とは、旅亭の入口まで、一緒だつたのですが、入口へ來ると、直ぐ見紛れて了つたのでせう。彼は一人で、誰れにも斷らず、廊下を歩いてゐました。廊下の板には、處々穴がありまして、途中で、一人の女に擦れ違つたのです。二人とも一口も利きません。それが、飯たき女らしいのです。女は炊事場へ一振りの斧を提げて行く處でした。女の姿は見えなくなる。彼は立ち停る。部屋を探さうと云ふので、その邊を見廻つてゐるうちに、赤ランプの下に、三角形の白紙が貼りつけてあるのを發見しました。三角の紙には、奇妙にも、彼が、入口で見失なつた連れの男の名が、走り書きに認めてあつたのです。何故、その旅人の名が、其處へ貼り出してあるのか、解りません。それが、夢といふものでせう。

その文字は、仄赤い光で、やつと讀めましたが何の意味だか解らずに奥まつた部屋へ入つて、寢やうとしました。扉を開くと、二つの寢床が敷いてありました。中へ入ると、焦茶色の壁はぼろ／＼です。突然、一つの寢床が、むく／＼と持ち上つて、人間の顔が現れたのを見ると、斧を下げてゐた女なんです。藤三が入つて來るのを見て、

「あの床へお入り」

と靜かに指す。藤三は、頷いて、その傍の夜具の中へ、まづ足を差し入れて、蒲團をめくると、胸を二つに割られた男が、逆さまに横臥してゐました。肉の裂け目からは、まだ、鮮らしい

血が、たら／＼と落ちてゐるではありませんか。すると、赤ランプの下で見た、三角形の紙が、扉の隙間から、すうと流れて來て、死人の上を、ふら／＼と舞ひ始めました。

「その死人と一緒におやすみ。氣持ちがいゝだらう」

と側から、藤三を凝視してゐた斧の女が嘲けるのです。藤三は必死でした。逃げやうとすれば、直ぐ殺されるだらうと思ひました。夜具の中へ、足を差し込んで、物凄い死人と添寢し乍ら、暫く死人の顏を見詰めてゐると、それが、段々、連れの旅人だと云ふことが解りました。何故胸を裂かれたのか、解らないが、更にその旅人の死顏を見下ろしてゐると、それが、次第に藤三自身の顏に似て來るのでした。

藤三が目を醒したのは、午前九時だつた。恐ろしい景色が、夢だと解つたとき、彼は、

「助かつた。助かつた。」

と心の中で、叫ばずにゐられなかつたのです。

四

目を醒した時に、

「今日も學校は休だ。」

と呟きました。學校の月謝は、心配になります。或は、今頃、教務室の廊下を通つたら「月謝滯納により、除名す」といふ卷紙に書いて貼つた掲示の中に、彼の姓名も混つてやしないかと思ふと、今度は、それを見に行かないでは、凝乎としてゐられなくなるんでした。

額を撫でると、汗が溜つて、夜具の襟も手拭で包んだ枕も、その汗の臭がする。いやな臭でした。彼の顏は、心持膨れてゐました。

氣がつくと、消して寢たと考へる電燈が、點いてゐた。藤三が眠つてゐる間に、誰か來て、釦を捻ぢたものとしても、いつも午前六時限り、几帳面に消ゆることを決して違へたことのない電燈が、九時に目を醒した時、まだ、明々と輝いてゐました。

九時三十分まで、寢床の中に凝乎としてゐました。半身乘り出して、部屋の中を見廻しましたが、何にもない。誰もゐない。然し、何にもない空間に、誰かゐて、彼を見詰めてゐるやうでした。そして、折々、藤三の肩をそつと撫でるやうでした。肩を撫でられて目が醒めたのではないかしらと思ひました。彼自身にも意識しないやうな弱い息が、咽喉を通つてゐたんです。彼の目に見えぬ人間が、始終彼に跟き纏ふてゐるといふ感じは、どうしても消えません。窓を繰ると、南から射し込んで來る日光が、黃色く迸つて、朝風に、煽られた枕元の紙屑が、

女の手首のやうな形に擴がつたまゝ、出し拔けに、彼の足へからみつからうとしたので、藤三は驚いて、跳びのきました。

その拍子に、枕の上に這ひ上つた紙屑は一本の藥指を延べて枕の上の指環を、穿めやうとしましたが、それは、指環ではなくて、手拭の紋に過ぎませんでした。

藤三が、押入れの中から、五年の間の自然に溜つた中學校の一年から五年までの教科書を搔き出して、それを行李に詰め、肩に擔いで戶口を出る迄、二階の電燈は、ぽつと光つてゐました。

袴をはいて、制帽を冠つた藤三が、その不要なものと、現在なくてはならぬものとを、ごたくと詰め込んだ荷を、例の古本屋の店に放り出した光景は、嘸滑稽だつたらうと思はれます。

最初、彼は、押入の中に賣り殘してある小說を賣らうと思つて調べましたが、金になりさうな代物は、一つもなかつたんです。彼はその時使つてゐる教科書を賣つて、月謝を拵へやうと考へました。月謝だけ納めて置いて、當分、その本を受け出すまで、休學する積りでした。教科書は平均一冊十錢で賣れた。

首尾好く出來た月謝を懐に入れて、二日休んだ學校の門を潜る時は、辛いやうな、恥かしいやうな、一寸變な氣がしました。教務係室の廊下の掲示を、こつそり見に行つて、自分の姓名が、見つからずに濟んだ時、彼は、ほつと吐息しました。彼は、缺席屆と、月謝とを一緒に差し出して、慌てゝ、其處から、同級生の誰彼に出逢はぬうちにと思つて、學校の運動場から、門の外へ出やうとする時、ばつたり、麐來に突き當らうとしたんです。

麐來は、藤三の顔を見るといきなり、

「どこへ行くんですか」

と尋ねました。藤三は、麐來を見ると、直ぐ、隆泰の話を思ひ出した。この美しい容貌の主が、第二の竊盜狂だとは、どうしても信ずることが出來ない。門の外で、出會すのは別段に偶然とは云へないのですが、何だかさう思へてなりませんでした。

「家へ歸るんです。あなたは?」

「私は當分學校へ出られませんから、屆けに來ました。伯父が死んだんです」

「隆泰と云ふ人ぢやありませんか」

「えゝ。あなたは、どうして御存じですか」

私が、遼らう樣子を見た、麐來は、

「一寸待つて下さい。私屆をすまして來ますから。一緒に其處まで行きませう」

と云つて、門の内へ駈け込みました。彼は恐らく、五分も費やさずに、藤三の側へ戻つて來ました。そして、
「すみませんでした。」
と云ひ乍ら、藤三と列んで歩き出しました。
「伯父さんは何時死んだんです」
と藤三から切り出しました。
「今朝の九時です、かつちり、九時でした」それは藤三が夢を見て目を醒した時刻でした。
「どうして死んだんですか。四五日前、隆泰と言ふ人と新妓班で出逢つたから、知つてゐますが、死ぬやうな病人ではありませんでしたよ」
　藤三は、隆泰が二度も三度も森の家を訪ねて來て、黄夫人の物語をしたことを、隠しました。内心では、彼の急な死方が、意外でもあり、不思議でもあり、多少氣味が悪かつたんでせう。容易に自分と隆泰の關係を打ち開けやうとはしませんでした。
「伯父さんが死んだからと云つて、何も、平生、往き來しないあなたが、學校まで休むことはないぢやありませんか」
「いゝえ。あなたは御存じないでせうが、私共は、どんなに仲が悪くつてゝ、身寄の者が、死ねば、十日の間は、仕事が出來ないのです」
塵來は、頭の冠り物から木履まで、黒づくめでした。
「伯父さんは、どうして死んだんです」
と云ふ藤三は、それが、氣がかりでした。塵來は活水女學校の門の前から、和蘭陀坂を抜け切る迄、返事を控へて居ましたが、二人が、梅ケ崎の廣小路へ出た時、他人の耳を憚るやうに
「あなたは、隆泰の家の前を、今朝お通りになりませんでしたか」
と低い聲で、言ひました。
「いつも新地街の外廓を通るんですが、今日は、路を替へたんです。」
　新地街の外廓を通る勇氣がないことは、流石に云へなかつたのでせう。すると、塵來は、また内證話をするやうに云ひました。
「それでは、御存じないんですね。隆泰は二階で死んでゐたんです。二階に登つたことのない彼が、二階で死んでゐたのを、女中が見つけたんです。隆泰が二階へ登るのを店から見てゐた女中は、隆泰が二階で暴れてゐる物音を聞いて、泥棒と組みついてゐるのではないかと思つたから、二階へ昇らうとすると、階段の上り口が、すつかり、板張りされて、入れなかつたさうです。すると、二階から隆泰が、苦しい聲で、救ひを求め

てゐたと云ふのです。女中は板張りの外から、頻りに、主人の名を呼んだけれども、多分、終ひまで、隆泰の耳には入らないでしまつたらうと思はれます。でなければ、内側から板張りを開ける譯ですから。」

「一人で死んでゐたんですか」

「えゝ。あなたも御承知でせうが、支那人の家では、人の妻は、閨房から一切外へ出ません。然し、そんな騒ぎですから、誰も彼も近所の家から飛び出したんですよ。可笑しいのは、私の隣りの家のお神さんを私は、今日まで、ざつと半年になりますが、まだ一度も見たことがないんです。それが、今朝の騒ぎで、外に出たので、漸く見ました。

と云つて、彼は微笑しました。その微笑は忽ち消えて、慶來はいつもの、沈み切つた顔を見せてつゞけました。

「隆泰が二階で、爭ふ音は、すぐ消えて、眞夜中のやうな靜けさに歸つたと云ひます。私の話は、みんな、あの店の女中から聞いたんですが、彼は、絞め殺されてゐたさうです」

「誰です下手人は？泥棒ですか？」

「いゝえ。自分です」

と云ひ乍ら、ふと、彼は藤三を見返りました。恐らく二人共いつもの顔色ではなかつたでせう。

「自分で縊死したといふんですか」

「世間では、泥棒だとか、何だとか云ふかも知れませんが、私だけは、自分で自分の首を絞めたんだと思ひます。何しろ、窓も入口の戸も、すつかり締めて、外から人が忍んだ氣色はないのですから。私は、あとで、二階へ登つて見て、知つてゐますから、確かにさうだと思ふんです。氣が狂つたんでせう。」

「氣が狂ふやうなことでもあつたんでせうか」

藤三は、直ぐ隆泰が、彼に遺した黃夫人の話をまた考へました。而も慶來の口から、それに似寄りの事を聞かうとは、豫期しないで。

「ないとも云へますまい。隆泰は支那にゐる時分からの女狂ひだつたんです。私の母親も隆泰のために酷い目に逢ひました。彼のために酷い目に逢つた上に脅迫されて最後に巡邏の手に引渡されたんです。私の母親の恨みだつて、いくらかあるでせうとも」

「何故、巡邏に渡されたんです」

「私の母親は、お恥しい話ですが、竊盜する病氣がありました隆泰のうちにも物を盜みに入つて、彼の虜になつたんです。そんなことは、あなたも、とつくに御存じぢやありませんか」

と云つて、藤三の顔を凝乎と見詰め乍ら、

「私の家にゐるやゝさんが、私の生みの母でないことは、御存

じの辯に、何故、しらばつくれるんです。」
と云ひました。藤三は意外でした。
あなたの家へ、隆泰が行つたことはちやんと解りますよ。私の母親の手首が、あなたの處へ行つたことも解りますよ。あなたの頬には、爪の疵があるぢやありませんか。その疵のある人は皆私の母が死んだ譯を知つてゐる筈ですよ」
と云ひました時、藤三は、息が詰るやうでした。説明するまでもなく、黄夫人の話の黄家のある友人と云ふものは、隆泰でございました。それは、藤三も隆泰の口裏から、十中の八九までさうだと思つてゐたんです。

五

その日でした。「やゝさん」の父親と云ふ七十に近い、身なりの卑しい老人が、森の家を訪ねて來たさうです。

藤三が學校へ行つた留守でした。老人は、藤三の祖母に、紙と鉛筆とを借りて、彼の住所と姓名とを認めて、
「今晩でも、お暇がありましたら、直ぐ近所ですから、お話にお出なはりますやうに、お仰つて下さい」
と云つて歸りました。

老人と掛け違ひに、藤三は戻つた。老婆からその話を聞くと手拭と石鹸とをぶら下げて、出掛けました。老人の住居は、湯屋の側にあつたんです。藤三が、その晩、この老人の家を尋ねなければ、まだ、黄家の事情は、すつかり、のみ込めなかつたでせう。

藤三は、こんな時でも、態々、老人の家を訪ねる振りをすることの出來ない男でした。

その爲に、彼は、滅多に浴らぬ湯へ、入つて、濡れ手拭と、石鹸と、ほとびた手足と、てか〳〵光る額を、ことさらに拵へてから、老人を訪ねました。

湯屋の門を、四五日前、お慧によく肖た娘と出逢つた處から半町足らずの暗い露路に、御神燈を下げた戸口がありました。それが、老人の家でした。

老人と顔を見合せた時、また、何だか、見たことのあるやうな人だと思ひました。すると老人の方から、よくいらつしやつたと云ひ乍ら、「あなたは、よく存じて居ります。つひこの秋でございました。伊良林の墓地を拓きました處へ、電燈を引きますのに、五十人の申込者がなければ、どうしても、會社の方で承知いたしませんところから、この邊の老寄共が、相談しました上、墓地跡に住んでゐる方々を一軒一軒廻りましてな。お頼みして、皆さんに、加入して、いたゞくことにしました。その節、お宅へもお伺ひしまして、「あなたともお會ひしましたで

な」

と云ひましたので、漸く思ひ出しました。電燈を勸誘して廻つた在所の有志者の一人でありました。

「左樣でしたつけね。そんなことがありましたつけね。そう云ふと、あの時、あなた方に運動して貰つたので、隨分、何ですよ。今になつて見ると、助かりましたよ」

と云ひ乍ら、入口から、上つたとき、ふと、老人の後ろに、小さくなつてかしこまつてゐる娘を發見しました。

それは、お慧でした。そのお慧が、

「先日は、新地街で失禮いたしました」

と云つて、おとなしく兩手をついた時、藤三は、一寸狼狽しました。そして、直ぐ、今朝の、隆泰の縊死事件を思ひ出したんです。そこへ、老人に、

「先刻お訪ねしましたが、生憎、お留守でしたが、私が、やゝの父でございます」

と更めて、挨拶されたとき、今度は、直ぐ、塵來のことを思ひ出しました。

藤三が、老人と面と向つた時、老人は、目を見張るやうにして藤三の顏を覗き込みました。藤三には、それが、後になるまで、解りませんでした。

「突然、こんな事を申し上げるのは、どうかと存じますが、あなたは、今晩の新聞を、御覽になりましたか」

と云ふんです。

「いゝえ。まだ見ません。墓地跡まで、配達して呉れないので、困るんです。一つ、電燈のやうな鹽梅に、今度は、新聞社の方も、お願ひしたいですね」

と云つて、藤三は笑つた。

「はゝ。然し、お尋ねしましたのは、塵來の伯父が死んだことですよ。縊死したと新聞に出てゐましたが、」

と、藤三の前に、新聞を擴げやうとして、

「あなたも、お交際ひのやうですから、御話だけして置きますが、隆泰は氣が狂つたらしいんです。新聞には生活困難としてありますけれども。でなければ、やつぱり、絞め殺されたんです。」

と云ひました。老人に、あなたも、隆泰とお交際でせうと云はれたとき、藤三は、一寸、迷惑さうな、顏をしましたが、老人は、頓着せずにかう云ふんです。

「こんな、不思議な、あまり世間に洩れないことですから、ほんたうのことは、とても、新聞記者などは、解りますまい。また、解らないのが、眞個でせう」

と前置しみたことを云つて、
「隆泰は添喰の手首に、跟け纏はれたんです。廣東から上海へ行く時も、上海から長崎へ渡つて來る時も、そうでございました。隆泰は、上海から長崎へ航る船の中でも、その手首に苦しめられたさうで、その時あの男は目の前に現はれた手首を、海の中へ投げ棄てたと、自分で申しました。
　隆泰は、私の娘が連れ子をして、廛來の家へ嫁きますとき、乾度自分の素性が廛來の父親の口から洩れると思つたんでございませう。すぐ、私の處へ來て、先廻りに色々打ち開けた話を、いたしましたよ。私も、廛來の母親が、そんな、惡い性質の女でありまして、その血統が、代々子供に傳ると云ふことを存じてゐますれば、始めから黄の家へなどへ、娘をやるんぢやありませんでした。」
と云ふ、老人は、藤三に茶をすゝめ乍ら、また、しみじみと話を、つゞけました。
「でも、娘の年では、差し當り、いゝ亭主を持ちたいと申しました處で、この狹い土地には、ございません。」
「やゝさんは、おいくつですか。」
と藤三も、何だか、話につり込まれるやうに、こう尋ねました。

「もう四十になります。お豐を生みましたのが、十八でございました。」
「お豐さんと云ふのは、お慧さんの姉さんですか」
「はい。左樣でございます。廛來の嫁にする積りで、新地街へ連れて行きましたが、祝儀が濟んで、間もなく、死にました。」
　藤三は、突然、湯屋の出口で出逢つた娘を思ひ出して、異樣な感がしました。
「廛來さんの家は財産家なんですね」
「たんとは、ございますまいけれども、新地街では、それでも一二の家でございませうね。私が、こうして、遊んで生活するのも、まあ、娘のお蔭だと、申し上げてもいゝと思ひます」
　藤三は、お慧が、お豐といふ娘の後を襲ふてあの美しい男の妻になることになつてゐるのだと聞いたのも、老人の口からであつた。お慧は面目なささうな顏をしてゐた。藤三は、よく、そんな氣味の惡い家へ嫁げるものだと思つたのでした。それから、また老人は、隆泰の話へ移らうとしました。
「海の中へ投げ込みました手首は、隆泰が新地街の空家を見つけて、其處を借りた時、安心して押入を開け、掃除をしやうとした彼の目の前に、ころ〳〵と轉り出たのでございますよ。それは昨年でございました。押入から轉げ出た手首を、爐の中へ投

げ込んで、石炭と一緒に、じり／＼と燒いたさうでございます。黒燒けになつて、到々灰になるのを見屆けて、日本に來た最初の夜を寢やうとしました。安心して、ほんたうに安心して枕につきますと、耳たぶが、むづ／＼とする。撫で廻して見ますと女の髮の毛が、一本すうと指の叉に挾まつて來ました。お斷りいたしますが、實は隆泰には家内が、ないのでございます。支那に居ります時はいろ／＼な女を女房にして居りましたと云ふことも聞きました。

　でございますから、床の中に、女の髮の毛が、あるわけがない。一本だと思ひますと、二本三本と、する／＼する／＼耳ぶたに引つ掛つて參ります。あんな、亂暴者の隆泰も、いくらか、怖毛がついたらしく、ふと、頭をもたげて、枕元を見ますと、どうでございませう。枕と思つて、頭をすけてゐましたのは添孃の手首でございました。」

と云ふ時、彼は、しげ／＼と藤三の顏を見詰めてゐましたが、

「あなた顏について ゐた爪の跡はもう すつかり、消えましたね」

と云ふんです。

「添孃の素情を聞る前には、だれでも、爪の」と云つて、今度は、自分の頰を、さら／＼と撫で廻しました。

「私共も、隆泰から、その話を聞きますときは、いろ／＼變なことが、ございましてね」と口をつぐみました。藤三が、始めて、森の家の所謂不思議と云つてもいゝ出來事を打ち明けた時、老人は、笑ひ乍ら、もう大丈夫でせうと申しました。

「隆泰が死ねば、添孃の手首は、それで、もう出なくなるんですか」

「えゝ。えゝ。すつかり安堵したらうと思ひます。」

　藤三は、間もなく、老人とお慧に別れを告げました。老人は、まだ隆泰から聞かないでゐる話があります。添孃の手首は、まだ安堵しますまい。彼女が、方神に誓つたことを實現するためには、丁度隆泰の仕末をつけたやうに、今年二十一歲になる男を襲はねばなりますまい。

「今度は廢來の番だ」

と藤三は呟きました。

　また餘計なことを、つけ加へますが、隆泰の話は、信じていゝものか、まるで、荒唐無稽なつくり事か、解りません。ほんたうと思ふお方は、何卒、ほんたうと思つて下さい。嘘だと仰有る方は、なる可く嘘にして下さい。目に見ゆるものと目に見えないものとの交渉――（俗に世間の物數奇が、云ふ靈の暗示と想像すべき限界です。）ぐつと、さつくばらんに申し上げると

怪談の縄張りにある事件には相違ございません。何故なれば、目に見ゆる手首が目に見えないけれども、始終黄夫人の斷られた腕の先に、ついて廻つて、途方もない事をするんですから。但し、本怪談で、種がないと申しましたのは、即ち、手首があるとかないとか、又はその手首を見たといふ人の神經の迷ひであるとか、ないとか申しましたのを、二つともさうでないと否定した譯は、かうなんです。

實は、この話は、土臺から嘘なので、皆さんの方で、いや、眞個にあるかも知れないと仰有つた處で私が承知しません、何しろ私が、こしらへたんですから。こしらへたと申すよりも、私が見た大正九年の初夢を、そつくりお話申上げたんです。尤も、その初夢も、あてにはなりませんが。で、藤三や、麼來や黄夫人などゝ申す人間が居ると云ふことを、まだ見たこともなければ、聞いたこともございません。多分ゐないでせう。ですから、手首がほんとうに、あつた譯でもなければ、また誰の迷心でもありません。こゝまで御話を申し上げたら、もう眠くなりました。皆さんお休みなさい。(完)

猿の話

田中貢太郎

さるほどに本紙の主幹瀧田樗蔭氏に逢つた所、庚申の歳首號に猿の話を書けと云ふ。もとより三猿塚を學んで、見ざる、云はざる、聞かざるを振り舞はしてゐられない場合だから、早速引受ける事にしたが、その時瀧田氏は、『猿は雨を凌ぐ必要上から、肱から先の毛並は、肱の方に向けて生へさがつてゐると云ふ説があるから、それも調べてみてはどうか。』と云つて、右の手の掌を、その寛い額にぱつと當てゝみせてくれた。瀧田氏は頬の肉のはちきれさうな紅い澤々した顔の持主だ。私は猩々の趣があるな、と思つた。

さて猿の毛並だが、何時も猿を見てゐても、そんな事に注意してゐない私は、上野の山へ見直しに行かうと思つて、桂月翁の所へ寄つてみた。桂月翁は近々足利の方へ字を書きに行く〳〵

云つて、一生懸命になつて筆ならしをしてゐる。私はその傍へあがり込んで『先生、あなたは、猿の毛がどう生へてをるか知つてをりますか』と云ふと、『知らない。』と云ふ。『猿の前肢は、肱から先の毛が手首の方から下へ生へさがつてをるのです。何時かも某畫家が猿の畫を書きましたが、毛の研究が足りなかつた爲めに、物笑ひになつてをるのです。』と、瀧田氏の受け賣りを直ぐやると、『さうかね、そいつは知らなかつたよ。』と、翁が感心する。併し、そんな事を云つて油を賣り過ぎたので、上野へ行つてみると、もう三時を過ぎて動物園の入口は閉つてゐた。私は仕方なく圖書館へ這入つて、數日前に見殘してあつた支那本の隨筆を讀んで歸り、翌日再び上野に出かけたが、どの猿も毛は肩から生へさがつて、手首の方から生へた物は一疋もゐなかつた。

併し、これでも不安であるから、その翌日、植物園に猿のゐたのを思ひ出して、又其所へと出かけて行つた。可成り大きな女夫猿か、二疋の子猿と一所に住んでゐる檻と、他に一疋、毛のいぢけた狸のやうな猿のゐる檻とがあつた。私は眞直にその女夫猿の檻の前へと行つた。六七尺もある腰掛臺の上に、女夫猿が並んで坐つてゐたが、雄は横腹の毛の中に爪をやつてをり、雌は雄に背を向けるやうにして、弟の小猿に乳を飲ませてゐたが、折々片手の指を小猿の眼の縁にやつて、何か見てやつてゐるやうな風をした。その小猿は、大正八年の四月に生れたものである。兄の方の小猿は、大正六年の四月に生れたもので、其は砂の上に遊んでゐた。其日は曇日がして今にも時雨の來さうな空合であつた。私は、『初時雨猿も小簑をほしげなり』の句を思ひ出してみた。其所の猿の毛並も上野で見た猿の毛並とすこしも變つてゐなかつた。

私は博士めいて動物學の講釋をする氣はないが、話の順序として、ちよと云つてみやう。一體猿類はその種類が澤山あつて、アフリカの密林中に住む黑猩々、猩々、大猩々などの人類猿をはじめとして、世界各國に各種各樣の猿が住んでゐる。我國に住んでゐるのは、猴類の中の獼猴屬で、さる、ましら、えて、などの名で呼んでゐる。北海道を除けば、國中到る所に住んでゐるが、四國の山中に住む猿は、小形で、四國猿の名がある。猿芝居や猿曳に用ゐる猿は、この四國猿が尤も適する。四國猿の次には、上總地方、日光附近、秋田、新潟などの猿もそれに適するらしい。又藝能を仕込む猿は、深山の猿が適して、人家に近い端山の猿は、記憶力が弱くて不適當だと云ふ者もあるが、私にはその理由が分らない。それから臺灣にも、臺灣猿と呼ぶ猿が住んでゐるが、それは內地の猿と違つて、體形も大に、顏

の色も一層赤く尾も著しく長い。支那にも數種の猿がゐて、一般的に支那猿と云つてゐるが、『和漢三才圖會』に獮猴(ましら)、玃(やまこ)、狨(むくげざる)、猨(ゑんかう)、獨、果然(をながざる)、蒙頌・獑猢(ざんこ)、猩猩(しやうじやう)、野女(やまうば)、狒狒(ひひ)・山都(みこし入道)、山𤟤(さんくわい)、木客(もつかく)、山𤢖(やまわう)など、獮猴屬から類人猿、山鬼妖魔に類した名まであげてある所をみると、各種の猿が住んでゐた事が分る。隨つて支那には、猿に關する傳說が多く、報恩孝順の仁獸として觀察せられる一方、邪惡怪奇、變幻の術を自得して、人を殺し、婦女子を辱かしめるの惡獸となつて、恐怖的好奇心の對照とせられてゐる。唐の『白猿傳』、『袁人傳』などは、猿の怪異を說いた代表的の野乘として、その影響は、遠く德川時代の文學に及んでゐる。その他猿の事を書いた物で我國の文學に影響を及ぼした物には『西遊記』を飜譯した『繪本西遊記』がある。東勝神州傲來國の石猿は、不老長生の術を學ばんものと、南贍部州の地に行き、漁人の衣裳を剝ぎ取つて神仙を尋ねに出發して、當時の讀者を瞠若たらしめた。

要するに、支那にても我國にても、猿に關する傳說は、仁獸と惡獸との二つに別れてゐる所に、面白い話の綾がある。私は机邊の雜書を亂抽して、その中からなるべく面白さうなのを見出さう。

碧玉の環飾

先づ『唐人說薈』に採錄してある袁氏傳の說からはじめやう。それは、唐の代宗帝の廣德年間の事であつた。その時、孫恪と云ふ若い貧しい男があつて、それが洛陽にある魏土池と云ふ所へ遊びに行つた。遊びに行つたと云つても、それは物見遊山の爲めでなくて、漂泊して行つた者のやうに思はれる。所で、この魏土池に女主人で袁を姓とする豪家があつた。孫恪は別に目的もなかつたが、其前を通りかゝつたので、ちよとした好奇心から、覗いてみると門番も誰れもゐない。で、門の內へ這入ると、靑い簾を垂れた小房があつた。孫恪はその傍へ寄つて、內の容子を伺はうと思つてゐると、內から扉を開けて若い綺麗な女が顏を出した。

孫恪は此女は主人の娘であらう、と思つたので、拜をしようとすると、女は驚いて引込んでしまつた。孫恪は調子が惡いので、ぽかんと立つてゐると、靑い着物を着た少女が出て來て、『何の用があつて、此所へ來たのか。』と聞く。で、孫恪は、『通りすがりに這入つて來た者だ。尊門を汚して相濟まむ。』と云つて、

みだりに門内に這入つた罪を謝した。

其所で青衣の少女は、内へ這入つたが、暫くすると最初の女が少女を伴れて出て來た。孫恪は少女に向つて、『この方は誰れか。』と聞くと、少女は、『袁長官の娘で御主人である。』と云つた。『御主人はもう結婚なされてをるか。』と孫恪が又問ふと、『まだ結婚はなされてゐない。』と少女が云つた。

その後で女は少女と一所に引込んだが、直ぐ少女に茶菓を持たしてよこして、『旅人の心に欲する物があれば、何によらず望みをかなへてやる。』と云はした。既に女に戀々の情を起してゐる孫恪は、『我は貧しい旅人で、學も才も無いのに引代へ、袁氏は家が富んでゐる上に、賢であるから、とても望まれない事であるが、若し、結婚する事が出來れば、大慶である。』と云つて、結婚を申込むと、女は承知して、少女を媒妁にして結婚の式をあげると共に、孫恪はそのまゝ女の家に居坐つて、入婿となつてゐた。

その中に四年の歳月が經つた。孫恪はある時、親戚の張閑雲と云ふ者の事を思ひ出して、久しぶりにその家へ行つた。閑雲は、孫恪の顏をつくづく見て、『お前の顏色が非常に惡い、これは妖怪に魅入られてゐる。』と云つたが、孫恪は別にそんな心當りもないので、『別に怪しいと思ふ事もないが。』と不審する。

『人は天地陰陽の氣を[illegible]て、魂魄を納めてゐる。若しその陽が衰へて陰が盛になれば、その色が忽ち衣に露はれるが、本人には分らない。』と、閑雲が主張するので、孫恪は袁氏の婿になつた事を話す。『それが怪しい、速に去るが好い。』と、閑雲が勸めたが、孫恪は、『併し、袁氏は財産がある上に賢明な女で、我の爲めに非常に盡してくれてゐる。その恩に對しても棄て去る事は出來ない。』と云つて、その言葉を用ゐないので、閑雲は怒つて、『邪妖の怪恩は恩とは云へない。又其に叛いたからとて不義とは云へない。我家に寶劍があるから、これを借してやらう、それを帶びて行けば、妖魔の類は千里の外に逝げ走る。』と行つて、一振の刀を出して來た。

孫恪は心に惑ひながらも、その劍を持つて歸つた。すると袁氏は、既にそれを悟つて、『郎君はもと貧しかつたのを妾が憐んで夫婦となり、交情も日ましに厚くなつてゐるにかゝはらず、その恩義を忘れて妾を棄てやうとするのは、人の道にはづれたしうちだ。』と云つて泣いた。孫恪はその言葉を聞くと、非常に心に恥ぢた。『之は自分の本意でなくて、親戚の張閑雲から強ひて云はれたから、仕方なくやらうとした事だ、どうか怒りをやめてくれ。我には決して二心がない。』と、これも涙を流してあやまつた。

其所で袁氏は、孫恪の持つて來た劍を手に取つて、それを笨を折るやうにぽきぽきと折つた。孫恪は懼れて遁げ出さうとしたが、それも怖ろしいので、わなわなと慄へてゐた。袁氏は莞爾と笑つて孫恪の顏を見て、『數年間も同居して、かうした間になつてゐるから、決して郎君を害する事はない。』と云つた。孫恪は遁げるも怖ろしいので、そのまゝ袁氏の婿となつてゐた。その後、孫恪は、張閑雲に逢つて、その日の事を話すと、閑雲は仰天して、『變異測りがたし。』と云つて、それからは孫恪と逢はないやうになつた。

やがて袁氏は、二人の男の子を生んだ。その子供は、至つて怜悧で、二十歳にならない内から能く家事を治めた。その時分になつて、孫恪は仕官の口が見付かつたので、唐の都の長安に赴任する事となり、一家を擧げて出發したが、瑞州と云ふ所へかゝると、袁氏は孫恪に向つて、『瑞州の決山寺と云ふ寺に親しい僧がある、東西に別れてから數十年にもなるから、是非逢つて行きたい。』と云つて、決山寺へ行き、住持の老僧に逢つたが、老僧は袁氏を知らない。袁氏は又懷から碧玉の環飾を出して老僧の前へ置いて、『これはこの寺の舊物である。』と云つたが、老僧にはその意味も分らなかつた。

その時、庭前の樹木へ數十疋の猿が來て、啼き出した。それを見ると袁氏は非常に哀しいやうな顏をしはじめた。そして、筆を借りて其所の壁に詩を題し、終ると傍にゐる二人の子供を抱き締めるやうにしてさめざめと泣いてゐたが、やがて孫恪の方を向いて、『これから永のお別れをします。』と云つて、着てゐる着物を引裂いて、それを投げ出すと見ると、赭顏圓目の一大老猿となつて、庭前の大木の上に飛びあがつて、夫や子供の方を見て啼いてゐたが、まもなく欝蒼たる綠樹の中に姿を消した。

その後で孫恪は、老僧に向つて、『何かこれに就いて、思ひ當る事はないか。』と問ふた。老僧は頻りに昔の事を追思した末に、『愚僧がまだ沙彌であつた時、一疋の雌猿を養うてゐたが、ある日、玄宗皇帝の勅使高力士がこの寺へ來て、その猿の敏捷なのを見て、絹を代りに置いて猿を携へ行き、それを玄宗に奉つた所が、玄宗も又その猿を非常に愛して上陽宮に養はしてある内に、安祿山の亂が起つて、猿の行方も分らなくなつたと聞いてゐたが、今能く能く思ひ出してみると、この環飾は常に彼の猿の首に嵌めてゐた物だ。』と云つた。孫恪はそれを聞くと、ますます悲しくなり、もう長安に行く事も厭になつたので、中止して引返した。――この話は、上田秋成の雨月物語にある『蛇性の婬』の粉本となつたものである。

美女を盗む鬼神

今度は『白猿傳』の話をしよう、これも『唐人説薈』の中に收めてある。袁氏傳が雨月物語の粉本になつてゐるに對して、これは大江山酒顚童子の原話になつてゐる。梁の武帝の大同の末年、歐陽紇と云ふ武人が、南方に出征して、長樂と云ふ所に至り、その地方の匪亂か何かを平定して、山間險岨の地に這入つた。その紇は、陣中に妻を携へてゐたが、その女は色が白く顏が美しかつた。すると、その地方の人が、『君は何故に美女を携へて此所に來た。此所には鬼神があつて、美女と見れば必らず盗むので、往來の者でこの難に罹る事がある。君も能く守るが好い。』と云つた。紇はまさかと思つて疑つたが、それでも軍士に命じて家の外を衞らし、妻には十餘人の婢女をつけて、奥深い所に置いてあつたが、その夜は別に何事もなかつた。翌晩は烈しい風が吹き荒れた。夜半になつて皆が疲れて睡つた所で、妻と枕を並べて寢てゐた紇は、うなされて眼が開いたので、妻の方を見ると、もう妻の姿が見えない。驚いて起きあがつたが、戸締も宵のまゝになつてゐるにも係はらず、何處へ行つたのか分らない。戸外へ出て探さうにも、家の前は直ぐ深山になつてゐて、不用意には探せない。朝になるのを待ちかねて探したが、手掛りになる物も見當らなかつた。

紇は最愛の妻を失ふた事であるから、大に怒り悲しんで、『女を得なければ歸らない。』と心に誓ひ、朝廷の方へは病氣と云ふ事にして兵を留め、日々附近山谷の間を探し歩いたが、月を越ゑた所で、妻の履いてゐた鞵を一つ拾つた。それは、駐屯地から百里ばかり行つた所であつた。紇は其所で三十人の精兵を撰んで、糧食を餘分に用意して、又深山に別け入つたが、十日あまりの後に、二百里外の土地へ行つた。

其所には南方に當つて半天に攅り立つた高山があつた。この山の麓には谷川が滔々と流れてゐた。紇の一行は巖角を傳ひ、樹の根に縋つて、山の中へ這入つたが、行つてゐる内に、女の笑ひ戯れる聲がした。紇は怪みながら、その聲をしるべにしてあがつて行くと、大きな洞門があつて、その前の花の咲き亂れた木の下で、數十人の美女が蝶の舞ふやうに歌ひ戯れてゐた。紇の一行が行くと、女等は別に驚きもせず、『何しに此所へ來た。』と云つた。紇がその譯を話すと、『その婦なら此所に來て三月になる、今病に罹つて寢てをる。』と云つて、紇を誘うて中へ這入つた。

病床にゐた妻は、紇の顏を一眼見ると、手を握つて、『此所へ來てはならん、早く出て行け。』と云つた。紇を誘うて來た美女

慾は、『妾等も君の妻と同じく、鬼神の爲めに奪はれて來たもので、久しい者は十年にもなる。この鬼神は能く人を殺すが、百人の者が劍を揮つて一齊にかゝつても勝つ事が出來ない。今は他行中であるから、歸らない前に早く行くが好い。若し、鬼神を斃さうとならば、美酒一斛、犬十頭、麻數十斤を用意して來るが好い。そして、重ねて來る時は、午後に來るが好い。それも今日から十日と云ふ事にして約束しよう。』と云つた。

紇は悅んで山をおり、その約束の日を違へないやうに、酒と犬と麻とを持つて、鬼神の棲家へとやつて來た。美女の一人はこれを見ると、戸外へ出て來て、『鬼神は酒を好み、醉ふと五色の練絹を以て手足を床に縛らし、一度に躍りあがると、絹は皆切れる。若し、その絹を三幅合せて縛ると切れない。今、絹の中に麻を入れて繩となして縛ると、どんな事があつても切れる事はない。そして、鬼神の體は鐵のやうに固いが、たゞ臍の下五六寸の所を、彼が常に覆ひかくすのを見ると、其所から刄が通るらしい。』と云ひ、又傍の巨巖に指をさして、『これは鬼神の食物を斂める所である。酒を花の下に置き、犬を其所此所の樹下に繫いでから、時刻の來るまで此所に隱れてゐるが好い。』と敎へた。

紇はその言葉に從ひ、酒を置き、犬を繫いだ後に、巖の陰に隱れて待つてゐると、申の刻になつて、白練團のやうな者が何處からともなく飛んで來て、洞門の中へ這入つたが、暫くすると鬚のある綺麗な男が、白絹の衣服を著片手に杖を曳いて、美女達を伴れて出て來たが、犬を見付けると、片つ端から躍りかゝつて引裂いて旨さうに喫つた。犬を喫つてしまふと、美女達は、花の下に置いてある酒を取りあげて我先にと勸めた。男は歡んでそれを飲んでゐたが、六七斗ばかりも飲むと非常に醉つて來た。美女達はその手を取つて、洞の中へ這入つたが、歡び笑ふ聲が一頻り聞えて來た。紇は巖の陰で合圖のあるのを待つてゐた。と、美女の一人が出て來て、『早く早く、』と云つて招いた。紇は軍士を率ゐて洞の中へ突進した。四足を床に縛された大きな白猿が、敵と見て起きあがらうとしたが、練絹の中に麻繩があるので、引切る事が出來ない。眼を電光のやうに怒らして悶掻いた。紇の軍士は競ひかゝつて刀を當てたが、巖鐵のやうで刄が通らない。其所で紇は美女の云つた事を思ひ出して、その臍下を刺した。鬼神は、『これは天が我を滅したものだ。汝等の力の及ぶ事でない。』と云ひ、又、『汝が妻は既に妊んでゐるから、その子を殺さないで置け、必らず賢王に遇うて家を起すものだ。』と云ひ畢つて死んだ。

紇は其所で軍士に命じて、鬼神の掠奪して來た財寶を收め、

美女の數を檢べてみると、三十人ゐた、美女達は、鬼神の事を細々と話して、『鬼神に奪はれて來た女の中で、色の衰へた者は、何時の間にかゐなくなつた。鬼神は毎朝、手を洗ひ、帽子を被り、白い衣の上に矢張り白い羅の衣袷を著て、古文字のやうな物を書いた木簡を讀んだ。讀み終るとそれを石の下に置いて、今度は劍を舞はして身を踊らしたが、恰も電光のやうであつた。食物は定まつた物はなく、平生は果實を喫つてゐたが、犬を非常に惡んで、それを見ると一滴の血も滴さないやうに喫つた。午の時を過ぎて他山に飛び行き、晩になつて歸つて來たが、欲しいと思つた物は得ないと云ふ事はなかつた。女達に對しては、言葉つきも丁寧であつた。この鬼神は既に一千年の壽命が來て、死期の近い事を豫期してゐた。』と云つた。紇は財寶と美女を將て山をおりたが、美女達はそれぞれその夫を探して歸らした。

翌年になつて紇の妻は、子供を生んだが、その形が猿に似てゐた。後、梁が滅んで、陳の朝になると、陳の武帝は紇を攻殺した。紇の從者の江總と云ふ者が、その子供を隱匿して養育したが、至つて敏捷活潑で、鬼神の云つた通り、後に文字を識り、書を著はして家名を揚げたのであつた。

灰汁桶

信州伊那郡殿島の農家に親猿と子猿と二疋飼つてゐる者があつた。ある日、其所の亭主が野良へ行つた留守で、女房は洗濯をしようと思つて、灰汁を燒き、熱灰と一所に桶の中へ入れて置くと、子猿がやつて來て、桶の縁にあがつて遊んでゐる內に、熱湯の中へすべり落ちて死んだ。親猿がこれを見て、泣き悲んでゐる所へ、亭主が歸りかゝつた。亭主はこの樣を見て、『怪我でかうなつたものだから、是非ない事と諦めるが好い。』と云つた。親猿は鍋の蓋を持つて來て、それを桶の蓋にして見せた。亭主にはその意味が分つた。亭主は哀れに思つたので、『今日かぎり暇をやるから、山へ歸へりたければ歸つて行け。』と云つた。親猿は亭主の顏を恨めしさうに見ながら、子猿の死骸を抱いて出て行つた。その擧動が如何にも不審であるから、亭主が後から見えかくれに跟つて行くと、猿は山の方へは行かないで、殿島河原の方へ行き、其所にかゝつてゐた橋を渡つて、半ば頃まで行つた所で死骸を抱いたなりに河の中へ身を投げて死んだ。——『新著聞集。』

猿芝居の猿

天明五年の秋であつたと『耳囊』の著者は云つてゐる。江戸堺町の猿若の芝居の休みの間に、猿芝居の興行があつたが、そ

の芝居に出る猿の中に、子を産んだ猿があつた。ある時、その子猿に虱がたかつて煩さがるので、猿廻はしの男が、湯を浴びせて、濡毛を乾す爲めに二階の物干に繋いで置いた所で、鳶が見付けて嘴でつゝついた。それを猿廻はしの男が知つて、種々に手をつくしたが、とうとう死んでしまつた。猿廻はしの男は、母猿に向つて『その方が悲しむのも尤だが、俺もまさか鳶が來るとは思はなかつた。諦めてくれ。』と云つて慰めた。母猿は涙を流して聞いてゐたが、猿廻はしの男が、ちよつと席をはづした間に、狂言道具の紐を棟にかけて縊れてしまつた。

烏を使ふ猿

文覺上人がある日、清瀧川の傍を通つてゐると、河原に三疋の猿がゐて、その内の一疋が、岩の上に仰向けになつて寢た。そして、他の二疋の猿は、その傍を遠退いてしまつた。文覺は不思議に思つて、體を見られないやうにしてゐると、一羽の烏が飛んで來て、寢た猿の傍へとまつたが、猿が動かないので、烏は安心したやうに、猿の足をつゝき出したが、それでも猿は死んだやうになつてびくとも動かない。烏はいよいよ猿が死んでゐる物と見極めて安心したものか、今度は顏の方へ行つて、その眼をくじらうとした。と、寢てゐた猿が、不意に手を出して、その足を捕へておきあがつた。すると遠退いてゐた二疋の猿が、長い葛を持つて出て來て、その足を繋いだ。烏は飛んで逃げやうとしたが、飛ぶ事が出來ない。やがて猿どもは、その烏を水の中へ投げ入れて、一疋がその葛の端を持ち、他の二疋は川上の方へ行つて、魚を狩り立てるやうにしたが、水を知らない烏は、そのまゝ溺れて死んでしまつた。猿どもは烏を捨てゝ、山の方へと行つてしまつた。これは人の鵜を使つてゐたのを見てゐて、魚を取らさうとしてやつた事であらう。『不思議なりし事、まのあたり見たりし』と云つて、文覺が話したとの事である。――『古今著聞集』

名刀の行方

瀧澤馬琴の編著にかゝる『兎園小説』にも、猿に關する話が一つ二つ載てゐる。文政元年六月、羽州の山役所と云ふ所を預つてゐる大山十郎と云ふ武士が、祖先傳來の名刀を取り出して、例年のやうに風を入れてゐた。それは貞宗銘の者であつた。十郎は注意に注意を加へて、すこしの間も刀から眼をはなさないやうにしてゐたのに何處から來たのか、白い三尺ばかりの猿が、つるつるとあがつて來て、その刀を抱えて逃げて行つた。十郎はそれと見ておつとり刀で追ひかけた。その物音に從者ど

も〻集まつて來て、十郞について追つて行つたが、猿は直ぐ傍の山の中へ逃げ込んで分らなくなつた。十郞は大に當惑して、翌日大勢の人を驅り催して、猿の逃げ込んだ山を狩り立てゝ奥深く行つた所で、廣い芝原があつて、其所に二三十疋の猿が集まつてゐた。よく見ると、その猿どもの眞中に昨日の白猿がゐて、何か相談でもしてゐる風である。なほよく見ると、その白猿は藤葛を腰に卷いて、昨日の刀をさしてゐた。十郞はじめ從者の者は、刀を拔きつれて切りかゝつた。猿どもは大に驚いて、ちりぢりになつて逃げたが、彼の白猿ばかりは、貞宗の刀を拔いて相手になり、味方五六人に疵をつけた。こつちから切り付ける刀は、猿の身にはすこしも通らなかつた。鐵砲も打ちかけたがそれも通らなかつた。人々はもてあぐんでゐると、猿は隙を見て逃げて行つた。十郞は其所で山獵師を集めて、猿を討たうとしたが、たまたま見當る時があつても、彈丸が通らないので、猿も取れなければ、刀も歸らなかつた。『此の後いかになりけん、今に手に入らざるよし、その翌年、かの地の者來りて語りしを、思ひ出てゝ、けふの兎園の一くさりにもと、記し出だすになん』と編者は云つてゐる。

鐵砲きず

信州下伊奈郡入野谷村の者が、冬の日、獵に行つたが、その日は仕合がわるいので、何も獲れなかつた。かへつてゐると、路ぶちの大木の梢に猿がゐたので、それを打つて家に歸り、翌日皮を剝ぐ積りで、凍らないやうにと圍爐裏の上に釣して寢た。そして、夜半頃に眼を覺してみると、宵にいけて置いた圍爐裏の火が、見えたり隱れたりちらちらするので、不思議に思つて、よくよく見ると、圍爐裏の上に釣してある猿の死體へ、子猿が來て、かはるがはるその手を圍爐裏の火で焙つて、それを親猿の傷口に當てゝ、その傷を癒さうとしてゐる所であつた。獵師はこれを見ると『かぎりなく哀に思ひ、我いかなれば、身一つをすぎんとて、かゝるなさけなきいとなみをする事ぞや』と云つて、翌日女房にも暇をやり、頭を剃つて念佛の行者になつて、諸國修行の旅へと出た。——『近世拾遺物語』

畚の中の老猿

『閑田耕筆』の中には兒島尙若と云ふ醫士の話を乘せてある。その醫士が京都から丹波路を經て、播磨に歸省してゐると、直ぐ路の向ふの方でがさがさと音がして騷がしいので、何事であらうと思つて、近寄ると、澤山の猿が集まつて、それが藤葛のやうな物で編んだ畚を中に据えて、それにかはるがはる寄つて

行つて、木の實などを入れてゐた。みると、その畚の中には老いさらばひた猿が坐つてゐた。醫士は後にそれを著者に話して、『子うまごどもこれに仕ふるとしられて、みづからも母の親もたれば、こと更に感じて、かヽる路のいとどいそがれし』と云つた。

義猴記

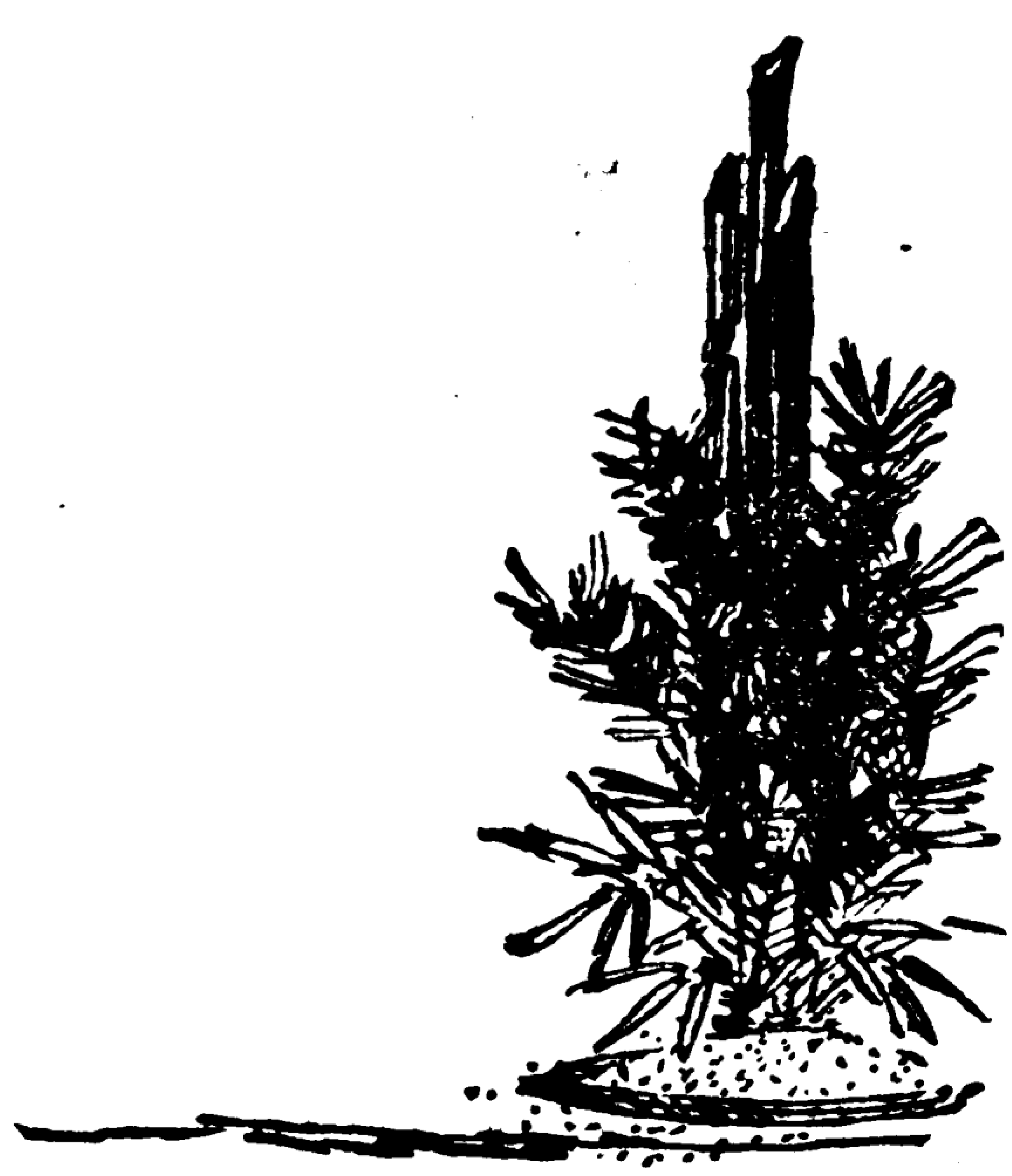
支那の萬曆年中、毘陵に猿曳の乞兒があつて、日々一疋の猴を伴れて街坊に行き、それに技をさして錢を貰つてゐたが、數年の後に、その金が集まつて五六圓になつた。その乞兒、ある日、知合の乞兒と一所に酒を飲んだが、醉つて蓄へてゐる金の事を誇り顏に話した。相手の乞兒は、それを聞くと、急に惡心を起して、酒の中に毒を入れて飲ましたので、その乞兒は死んでしまつた。相手の乞兒は、乞兒の蓄へてあつた金を奪ひ、その死骸を野外に運んで行つて瘞めた。その上相手の乞兒は、乞兒の飼うてゐた猴も奪つて、それに技をやらさうとしたが、猴はその意に從はない。乞兒は怒つて、鞭で打つたので猴も渋々技をやつてゐたが、隙を見て何處へか行つてしまつた。

その時、張廷榮と云ふ縣尹が新に任に就いて、廳に升つた所で、一疋の猴が丹墀の下へ來て、跪いて號んだ。張廷榮は不思議に思つて、隸官に命じて猴の後をつけさした。猴は養濟院の方へ行つて、その門前に集まつてゐる乞兒の間を往來して、何者か探す風であつたが、やがて其所を離れて行くので、隸官も又その後からついて行つた。行く途で、猿は人家へ這入つて、糕餅を貰つて來て、それを隸官に喫はし、又行いて大市橋のある所へ出たが、その橋の袂にゐる乞兒を見付けると、隸官を引きとゞめるやうにして、突然その乞食の肩に跳りあがり、頰を打ち、面を抓み出した。隸官はその乞兒に意味があるだらうと思つて、すかさず執へて廳に歸つた。張廷榮が再三これを鞫問した。それは猴の主人を毒殺した相手の乞兒であつた。其所で張廷榮は、乞兒の死骸を掘らして、それを棺に入れ、火を持つて焚かしたが、その火の燃えあがつた時、彼の猴は、隸官の前に頭をさげ、そして、不意に火の中に飛び込んで焚死してしまつた。張廷榮は大に感じて、『義猴記』と云ふ文章を作つて、石に刻んだのであつた。——『奇說排悶錄。』

猿の祟

北山大原の知行所で、大猿を鐵砲にて打つた人があつた。その猿は鐵砲を見ると、己れが腹を教へて手を合はしたが、終に打ち殺してしまつた。すると、その人は、その日から心地が惡

くなつて、急いで京都へ歸つた所で、平生藥を貰つてゐる醫師が折好く來合はしたので、脈をみて貰ふと、『これは平生の病とは違つてゐる。蝮を飲むと好い。』と云つた。それでは大原の庄屋の許へ云つてやつて、蝮を取り寄せやうと云つてゐる所へ、これも折好く大原の庄屋がやつて來た。『汝が方にて蝮を取りて送れと使をつかはす所であつた』と云ふと、庄屋は『幸、人に賴まれて蝮を持つて居るから、どれを奉りませう。』と云つて、蝮を出したので、醫師の敎た通りに調べて、病人に飲ました所が、病が急にひどくなつて、譫言を云ひ出した。家人は恐れて、醫師の許へ人をやつた。醫師は數回の使の後にやつて來て、『私は江州へ行つてゐて今歸つたばかりの所である。』と云つた。家人は不思議に思つて、大原の庄屋へも人をやつて聞かすと、『この間は京へ出た事がない。』と云つた。これは只事でないと云つて、若王子僧正と、六角の正仙院僧正とを請じて、壇を築いて祈らせると、壇の上に大猿が一疋あらはれた。僧正はさてこそと猿と引組んで取押へやうとしたが、僧正は壇からころび落ちて、猿は見えなくなつた。僧正は、『この祈は叶はない。』と云つて壇を破つた。それと一所に病人も息を引き取つた。――『新著聞集。』



男の運女の運

村松梢風

人物

零落せる士人、紀ノ多氣麻呂
難波の長者
長者の召使の童
攝津守の妻、皐月の前
郎黨喜藤太
侍女右近
其の他——葦刈る下衆大勢。攝津の守の郎黨ならびに侍女大勢

時

王朝時代、秋のなかば

所

難波の浦、住吉明神に近きあたり

舞臺　住吉明神へ通じる往來の一部、其の向うは一面の葦原、葦原を越えて海が見える。上手の方には程近く松林が續いて、其の間から住吉明神の朱色の建物が隱見してゐる。舞臺では、難波の長者に使はるる大勢の下衆が葦を刈つてゐる。其の中に交つて多氣麻呂も無器用な手付きで葦を刈つてゐる。風のために葦が微かにサヤサヤと鳴る。明るく澄んではゐるが、何處ともなく物寂しい秋の午後の氣分。

葦刈り人甲。（葦の束を二つ三つ抱えて來て亂暴に抛り出して、顰め面をし乍ら自身の足腰をさすつて）ああ草臥れた草臥れた。おいおい皆の衆、餘分に働いたとて褒美は出ないから、ここらで一と息みしやうではないか。

と、働いてゐる者の方を向いて言ふ。葦刈り人乙丙丁戊、手に手に鎌を持つてゾロゾロ葦の中から出て來る。一同往來の端へ思ひ〳〵の恰好をして座る。多氣麻呂だけ相變らず働いてゐる。

葦刈り人甲。（葦の束に腰を掛けてゐる）今日で七日續いて葦を刈らせられるが、俺はつくづく倦いてしまつた。肩は張る

し腰は吊るし、斯んな厭な仕事があるものか。

同乙。（稍老年）それは誰しも同じことだ。しかし和主は、此の間の土運びの時にも、斯んな苦しいことは無い、どんな仕事でもよいから、ただの一日でも他の仕事がして見度いと言うたではないか。

同丙。まつたく仕事に碌な事は無いものだ。

同丁。否、碌な仕事は主人が俺達にさせないのだ。

同戊。それに違ひない。しかし、俺達の主人はどうしてあんなに無慈悲なのだらう。

同乙。無慈悲は俺達の主人に限つたことではない。金持は皆左うだ、慈悲だとか情けだとかいふ言葉は、貧乏人が考へ出したものだらう。（と言つて淋しく笑ふ）

同丙。（遠くの方を眺めながら）大層彼方が賑やかなやうだな。

同丁。おほかた國司殿御夫婦が、まだ住吉に居られるのだらう。空は晴れ渡つてゐるし、葦の葉ずれのほかには風もなし、申し分のない遊山日和だ。あゝして夫婦睦ましく大勢の人間に取り巻かれて遊んでゐたら、嘸かし愉快な事だらうなあ。それを思ふと、俺は人間が厭になつて來る。

同戊。俺達が斯うして働いてゐるのが、あの人達の眼にはなんと見えるだらう。

同甲。しれたことだ。陸で人間が葦を刈つてゐるのも、空で千鳥が飛んでゐるのも同じ事に見てゐるのだ。昨日も生靑い都の奴らが俺達の働いてゐるのを見て、難波の浦の景色も若し葦刈り人が居なかつたらつまらないものになるだらうと吐かし居つたわい。俺は餘り腹が立つたから、遠くから土塊を投げ付けてやつたのだ。

同乙。はてさて和主は何時も乍ら憤りつぽい男ぢや。葦刈り人と言へば、昔から此の難波の浦の名物なのだから仕方がないではないか。

同甲。でも俺は、他人を樂しませるための名物などにはされたくないのだ。

同丙。一體いつ頃から葦など刈り始めたのだらう？

同乙。それは遠い昔から刈つてゐるのだ。

同丙。この後も永く續くだらうか？

同乙。永久續くだらう。此の浦邊に葦の根が絶えてしまはぬからには、俺達のやうな人間の無くなる時節は來ないだらう。

　暫時倦怠を伴ふ沈默。葦刈り人乙は膝小僧を抱へて居睡りを始める。

葦刈り人甲。（ふと氣が付いたやうに起つて）多氣麻呂が居な

いと思つたら、あんな處に一人で働いてゐやがる。おいおい多氣麻呂、そんなに精を出さずと、和主も此へ來て一と息みするがよい。

多氣麻呂蹌踉とした足どりにて近寄つて來る。三十五六位の年配、他の葦刈り人と等しき泥に塗れた衣を纒つてゐる。日に燒けた顏には薄い髯が伸びて、眼に力が無く病人のやうに憔悴してゐる、それで神經質らしい、何處かに殘つてゐる高尚（ノーブル）な表情。下手寄りに並んで踞む。

葦刈り人甲。（同情のある調子で）和主は慣れぬから骸骨が折れるだらう。俺達のやうに每年のことでも、此の仕事は苦しいのだから。

多氣麻呂は依然として默つてうつ向いてゐる。返辭をする氣力さへ失つてゐるらしい疲れ切つた容子。

葦刈り人甲。和主が難波の長者の家へ初めて來たのは何時頃だつたかな。

多氣麻呂。（僅に額をあげて）今年の五月でござつた。

葦刈り人甲。さうさう、丁度早苗を取る時だつたな。あの時和主は、來る早々苗田の中で轉げて、苗を滅茶々々にして主人から初眼玉を食つた事を忘れはしまひな。あははは。（一同笑ふ）しかし、月日の經つのは速いものだ。あれからもう半歲になるのだから。來たばかりには和主は色白の優男だつたが、今では頓と其の頃の面影もない。それではもう誰が見ても立派な葦刈り人ぢや、あははは――時に、和主の故郷（くに）は何處だつたかな？

多氣麻呂。わしは美濃で生まれましたが、育つには京へ來て育ちました。

葦刈り人甲。成る程、さう言へば何處となく都育ちらしい處がある。とにかく俺達のやうな土民の生まれではあるまい。しかし、其の都育ちの和主が此の難波へ落ちて來て、長者の奴僕（やつこ）に成り下る迄には、いづれ身の上ばなしがあるであらう。それを一つ聞かせて貰ひ度いものだ、のう皆の衆。

同丙。それは一段と面白からう。殊更多氣麻呂は優男のことだから、吃度俺達の知らない艶つぽい話もあるだらう。

同丁。幸ひ今日は見廻りも來ぬ樣子だから、骨折り休めに、是れから直ぐに始めて貰はふか。

多氣麻呂。（迷惑さうに）是はしたり皆の衆。わしは唯京に居たといふまでのこと、人に話して聞かせる程の身の上ばなしはござらぬ。それに元々輕い身分の生まれ、今更土を運ばふが葦を刈らうが、何も不思議はござらぬのぢや。

葦刈り人丙。さう言はれると猶更聞き度うなる。昔は兎も角、

同じ長者の奴僕で起き臥しを共にする俺達に、何も隱し立てするには及ばぬではないか。

同丁。はなしを聞かせて吳れるなら、和主の今日の仕事だけは俺達一同で引き受けて遣るとしやう。

一同多氣麻呂の顏を見詰める。多氣麻呂は當惑してうつ向いてゐる。此の間、葦刈り人乙だけは、膝の上へ額を押しあてて睡つてゐる。

葦刈り人戊。（不圖上手の方へ眼を配つて吃驚して起ち上る）大變だ／＼、身の上ばなしどころではない。向うからうちの旦那が遣つて來るぞ。

葦刈り人甲丙丁驚いて一度に起つ。

葦刈り人甲。來た／＼。銀の杖が光つてゐる。俺は世の中にあの杖ほど畏ろしいものはない。

一同コソコソと葦原へ這入つて仕事に掛る。葦刈り人乙、最後に靜かに額を上げて邊りを見廻し、軈て是れも葦原へ行く。間もなく難波の長者、銀の杖を突きながら童一人を具して慌ただしげに登場。餘程の老體頭髮も髯も雪の如き白さである。舞臺の中程迄來て立ち停まる。

難波の長者。（獨白）はてさて忙がしくなつて來たわい。しかし、國司殿の御夫婦がわが屋敷へお立寄り下さるとは、何たる家の譽れだらう。何はさて置き、早う戾つてお迎への支度をせねばならぬ。（歩き掛けたがふと葦刈り人の働いてゐるのに眼をつけて、軈て端から葦の束を驗べはじめる。と、一つの束の山に眼をつけて）こりや／＼。此の束は誰が刈つたのぢや

一同吃驚して仕事の手を止めて振り向く。多氣麻呂葦の中を出ておづ／＼長者の側へ近寄る。

難波の長者。（杖の先で葦の束を指し示しながら）是れは汝が刈つたのか？

多氣麻呂。はい……。

難波の長者。はいではない。これ、此の刈りざまは何んぢや。又斯んな束ねざまで（と言ひながら杖の先で一つの束をバラバラにする）役に立つと思ふか！

多氣麻呂。申譯はござりませぬ。

難波の長者　おのれは何時も何時も唯謝まれば濟む了簡で居るのぢやな。何をさせても疎ざまな事しでかしもせぬに、飯ばかり滿足に食らひ居る。あのここな穀虫めが。

斯う言つて長者多氣麻呂の首筋をしたたかに杖で打つ。多氣麻呂其の場へ轉ける。長者續いて二つ三つ杖をくらはせる。

難波の長者。（他の者に向つて）こりや〳〵皆の者、此處へ出え。

葦刈り人一同ゾロ〳〵出て來る。

葦刈り人甲。これは〳〵お旦那樣。何ぞ御用でござりまするか。（と恐々言ふ）

難波の長者。（比較的優しい調子で）其方達は精出して働いた褒美として、葦刈りは是れ迄にして、今から屋敷の內の仕事をさせて遣はすぞよ。

葦刈り人甲。はい〳〵有難うござります。（一同揃つて頭を下げる）

難波の長者。實はな、國司殿御夫婦が、住吉御參詣の戾りに身が屋敷へお寄り下さるといふのぢや。夫れについて大急ぎでお迎への支度に掛らねばならぬ故、仕事はし掛けの儘にして置いて、直ぐ樣屋敷へ歸るのぢやぞ。

葦刈り人一同。畏まりました。

難波の長者。（再び多氣麻呂に對ふ。多氣麻呂は肩で息をつきながら大地に兩手を突いてゐる）こりや。おのれはな、今日のうちに百束の葦を刈るのぢやぞ。もし、百束に滿たぬうちに屋敷へ戾ると許さぬぞよ。

と憎く憎くしく言ひ捨てて、下手より退場。一同其の後姿を見送つてほツと安心しながら顏を見合はせる。

葦刈り人丙。何んだ馬鹿々々しい。褒美だと言ふから遊ばせるのかと思ひの外、お客を受ける支度をさせられるのか。是れは猶更忙がしくなつて來たわい。

同甲。それでも泥田で蛭に食はれて、葦を刈らせられる思ひをすればどれ程助かることか知れない。それに斯んな時には、どさくさ紛れに盜み酒でもあほるのが俺達の役得といふものだ。

同丙。それについても氣の毒なのは多氣麻呂だ。あの痛い杖で打たれた揚句に、今日中に百束の葦を刈れとは何んたる無理な言ひ草だらう。

同丁。（空を見て）もう彼れ是れ八つ過ぎのやうだ。此の日の短いのに、俺達が三人掛りで働いた處で、今から百束の葦は刈れるものではない。

同乙。年中人を虐めて居なければ氣の濟まぬのが難波の長者の持前なのだ。

同丙。まつたく目差されたのが此の男の不運と言ふもの。俺達の手ではどうして遣るわけにも行かないのだ。斯う言ふうちにも時刻が遲れて、俺達まで飛んだ側杖を食はぬやう、そろそろ出掛けるとしやうではないか。

無言でうなづき合ひながら氣の毒さうに多氣麻呂の方を見遣つて、めい／＼鋒を腰に差して歸り掛ける。軈て一同下手へ退場。多氣麻呂一人が舞臺の中央へ取り殘される。彼は可成り長い間身動きもせずに居たが、軈てすこじづつ顔を上げて痛ましい眼つきをして空を見詰めてゐる。軈てふら／＼起ち上がらうとして、ばつたり其の場へ尻餅を突く。

遠くから千鳥の聲が聞えて來る。

多氣麻呂。（喘ぐやうな調子で）何んといふ見苦しい態だ。何んといふみじめな態だ。此の姿を見て、假りにも紀の姓を名乘つた士人の成れの果てだと思ふ人があるだらうか。（間）俺は乞食にも劣つてゐる。乞食程の働きも意地も持つてはゐないのだ。此の世で落ちられるだけのどん底迄俺は落ちてしまつたのだ。運命といふものの怖ろしさ酷たらしさを、俺ほどまざまざと見せ付けられた人間があるであらうか。（間。何物かの幻影を追ふやうな表情）俺は八年前迄の自分が戀しい。それも近頃では夢にさへ見られなくなつてしまつた。あの頃の總ての物が懐かしい。俺の側には皐月がゐた。どんなに苦しい時でも、俺を慰めて與れるあの美しい皐月の笑顔が側にあつた。俺は皐月と一しよに暮らしてゐるのだつたら、現在より百倍もみじめな境涯に落ちたとて、誰よりも幸福な人間で居られたに違ひない。その皐月を俺は自分から捨てたのだ。心の迷ひだつたのか、それとも惡魔の誘ひだつたのか――兎に角俺が愚かだつたからだ、幸運の珠を捨てた代りに、瓦の破片さへ拾ひ得ない程の俺は意氣地無しだつたのだ。（間）それにしても、皐月は今何處に暮らしてゐるだらう？　あの女の胸の底にも、未だに俺の姿が消えずに殘つてゐるだらうか……

突然騒がしい人聲が聞えて來る。多氣麻呂は幻想を破られて聲のする方を振り返つて見入る。陽氣な女達のさざめきと亂れた足音が次第に近付いて來る。多氣麻呂は慌てて起ち上つてよろ／＼よろめきながら葦原へ這入つて再び葦を刈り始める。間もなく其處へ、上手から大ぜいの侍女が面白く手拍子を揃へながら驅けて來る。其のあとから攝津守の郎黨喜藤太といふ剽輕者が眼隱しをされて大手を擴げて追つかけて來る。とど舞臺へ掛つて一人の侍女を捕へる。

喜藤太。（頓狂な聲）さあとらまへたぞ。とらまへたぞ。今度は大丈夫ぢや。ええと――音羽どのでござらうがな（と言つて眼隱しを取り）ホイ失策つた。

侍女各々に走り寄つて再び侍に眼隱しをしやうとする。侍手を振り乍ら遁げ廻る。

喜藤太。もう謝りさんす。謝ります。どうか此の邊で許して下され。

侍女一。ほんにもう許してあげてもよい時分。それに、餘り遠くへ行つて、あとでお叱りを受けてはなりませぬ。皆さん、此の邊で一寸休まうではござんせぬか。

侍女大勢。それが宜敷うござんす。

一同往來のまん中へ一列に蹈み込む。喜藤太は葦の束を一つ提げて來て女達と向き合ひに腰を据へる。

喜藤太。やれ〳〵、草臥れた草臥れた。眼隱しをされてゐると足元が危いせいか、一倍草臥れるやうでござるて。(と言いながら脛をさする)

侍女一。最前喜藤太どのが、石につまづいて往來のまん中へ四つん這ひになつた事を考へると、わたしは可笑しくてなりませぬ。ほゝゝほ。

同二。ほんにあの時の姿を、喜藤太どのの御內室にお目に掛けたうござんした。(一同笑ひこける)

喜藤太。(苦い顏をして)これ〳〵、人の災難を見て其の樣に笑ふ奴があるものか。こなた衆は、揃ひも揃つて何んといふ情無しだらう。

侍女一。いゝえいゝえ情はたつぷりあるぞへ。あの時抱き起こすと見せかけて……

喜藤太。ふむ、ふむ。(と乘り出す)

侍女二。密り袂へ忍ばせてあげた物に、あなたはまだお氣が付かれませぬかいなあ。(と艶な眼つきをして見せる)

喜藤太。(急に相恰を崩して)へゝゝゝ。左樣でござつたか。どれ〳〵。(と後を向いて袂の中を覗く)何んぢや是れは！ 馬の靴——生きた蛙が出た！ ええ汚い。

と取つて投げる。侍女達一齊に笑ひこける。

喜藤太。おのれ憎いいたづら者。その返報には斯うして呉れう。(と脅しに起ち掛ける)

侍女一、二。きやあ！(と遁げる)

喜藤太。あはゝゝゝ。

侍女一同。ほほほほほほ。

一同暫時笑ひ崩れてゐる。其の聲も聞えぬかのやうに、多氣麻呂は葦原の中で淋しく葦を刈つてゐる。

侍女三。わたしは今日ほど面白かつた事はござんせぬわいなあ。

侍女四。ほんにわたしとても同じこと、よい景色を眺めながら面白く遊んだせいか、何んだか命まで延びたやうな氣がいたしますわいなあ。

喜藤太。それも是れもよい主人を持つたこつちの幸せ、殿が御

出世なさるにつれて、自然われ〳〵にも果報が向いて來ると
いふものぢや。
侍女一。果報で思ひ出しましたが、御臺様くらぬ世の中に果報なお方はござんすまい。殿様はすこしお齢こそ召してゐるけれど、あの通りお優しい上にもお優しいお方だし、とんとん拍子に御出世は遊ばすし、まつたく今では何一つ不足のない御身分。ほんに人の運ほどわからぬものはござんせぬわいなあ。
同二。御臺様の御運の良いは知れてゐれど、いづれもと〳〵夫れだけの御身分柄、氏無いわたし達の身にひき比べることはできますまい。
同一。處が御臺様だとて、元は矢つ張りわたし達同様のお身の上であつたとのこと。
同三。それがまたどうして今の御身分におなりなされたのでござんすへ？
同一。わたしも人傳に訊いたこと、此の場限りの話でござんすぞへ。御臺様とおつしやる方は、元々御身分のあるお生れでもなく、其の上お小さい時分に御兩親にお別れ遊ばしたため、隨分御苦勞なされたとのこと。それから年ごろにおなりなされてから、一度さる處へお嫁き遊ばした處が矢つ張り御運が惡く、何かの譯から御離縁になり、さて身の寄るべも無いところから今の殿様の處へ御奉公にお上りなされたのださうでござんす。處が運といふものは何處に轉がつてゐるかわからぬもの。其の頃の殿は今程の御身分ではないにしても、相應なお役にはついておいで遊ばしたには違ひござんせぬが、それが先の奥方がお亡くなりなされて間もない時分のこと――それ、何彼につけて御不自由がちの處へ、今の御臺様はあの通りの御縹緻ではあるし、眼から鼻へ拔けるお悧巧な處と言ひ、謂はばまあすつかり思召しに適つたといふもの。それから後はとんとん拍子で、御正妻に直される、公達をおもうけになる、殿は益々御出世を遊ばすといふ、まあよくなりかけると際限のないものだと、昔を知つてゐる人がわたしに斯う言つたことでござんす。
同二。してそれはいつ頃の事でござんせう？
同一。何んでもまだ七八年にしかならぬとかいふはなしでござんした。
同三。それはまあ大層早い御出世のなさりかた。したが、今のお話でわたしは氣が強うなりました。わたし達も諦めずに、御臺様にあやかつて精々よい運を摑まうではござんせぬか。
喜藤太。ちがひない。女氏無うして玉の輿、さしづめ運試し

に此の喜藤太ではどうでござる。

侍女一。ほほほほ。喜藤太どのでは、玉の輿ではなうて、味噌漉しでござんせう。

喜藤太。いや、是れはきびしい、きびしい。

と頭を掻く。女達の明るい笑聲暫く續く。

侍女四。（起ち上つて）あれあれ皆さん。御臺様のお車がこちらへ參りましたぞへ。

侍女皆々起つて道を開く。喜藤太も女達と並んで路傍に蹲踞まつて控へてゐる。間もなく牛に曳かせた綺羅びやかな女車上手より出づ。そして舞臺へ掛かゝると直ぐ車をとめる。車の内から攝津守の妻皐月の前が降りてくる。年ごろ三十前後で、美しい中に何處か寂しさもある比較的じみな顔だちである。皐月の前は暫らく浦邊の景色を眺めてゐる。

日暮れに近付いて空が薄赤く焼けてゐる。

皐月の前。（獨白）此の浦べの景色ほど自らの心を惹き付けるものはない。靜かな空、靜かな海、哀しみの囁きに似た葦の葉のそよぎ。何んたる寂しい秋であらう？（間）先き程まで澤山居た葦刈の男達は何處へ行つたのだらう。（ふと多氣麻呂の姿に眼をとめて）おお、まだあすこに一人だけ殘つて葦を刈つてゐる。哀れな男——何んといふ痛しい姿だらう。此の寂しい浦べから生まれて來たやうな姿ぢや。（凝と多氣麻呂の方を見詰めてゐるうち、突然何物かにぶつかつたやうな驚きの色が現はれる。そして一二歩後へよろめいて物に襲はれたやうに身を震はせる）恐ろしいものを見た。否々今のは幻に違ひない、そんな事のあらう筈はない……

しかし矢つ張り氣になるらしく再び多氣麻呂の顔を凝視する。軈て皐月の前は獨り何か合點きながら、一名の侍女を手招ぎして呼ぶ。侍女主の前へ來て手を突く。

皐月の前。（落ちついた調子で）右近、あれに葦を刈る男が居るゆゑ、そなた一寸見るがよい。

右近。（向うを振り返つて見て）あの男でござりましたら、最前からああして葦を刈つて居ります。それが如何いたしましてござりまする？

皐月の前。みづからの眼には、あの者は何處とたう腹からの下衆とは違ふやうに見えるのぢや。葦刈り人となるまでに面白い身の上ばなしがあらうもしれぬ、そなた行つて問ふて見るがよい。

右近。畏りましてござりまする。（と主の前を退いて向うへ行き掛ける）

皐月の前。これ／＼一寸待ちや。（と呼び止める。右近再び其處

（蹲踞まる）身の上ばなしをさせる前に、酒を飲ませて遣はすがよい。

右近。畏りました。

皐月の前、上手の程よき處へ脇机を持たせて腰を掛ける。郎黨侍女悉く其の後に居並ぶ。皐月の前は右手に檜扇を持つて顔を隠す。右近酒肴の器を兩手に持ち、多氣麻呂の側へ行く。多氣麻呂氣が付かずに葦を束ねてゐる。

右近。これ〳〵、其處な葦刈り人。一寸是れへ參るがよい。

多氣麻呂は吃驚して顔を上げる。そしてけげんさうな顔をしながら畏る畏る出て來る。

多氣麻呂。お呼びなされましたは、何ぞ御用でござりまするか？

右近。そなたは、果報者ぢやぞい。あれに渡らせられるやんごとないお方が、そなた獨り働いてゐやるのを不便に思召して、酒を下さると仰せられるのぢや。有難く頂戴するがよい。

斯う言つて右近は多氣麻呂を下手の程よき處へ伴れて來て座らせる。多氣麻呂は迷惑相な顔をしてもじもじしてゐる。

右近。（構はず大きな盃へ波々酒をついで）さあ〳〵、遠慮しやらずと飲んだがよいぞへ。

多氣麻呂。はい〳〵。では、頂戴いたすでござりませう。（と言つて兩手で盃を持つて、眼をつぶりながら漸うのことで飲み干す。）

右近。直ぐに重ねたがよい。（と酌をし掛ける）

多氣麻呂。（手を振りながら）もう十分でござります。

右近。でも、それでは餘り尠いではないか。

多氣麻呂。いえ、もう頂けませぬ。わたくしは下戸の方でござります。

右近。下戸と言やるか、それでは酒はすすめぬほどに、肴なと食べたがよい。（と言つて重箱の蓋を開けて押し遣る。）

多氣麻呂。有難うござりまする。

と料理を見るが否や飛び付くやうに手を出しかけたが、「はつ」と氣がついて、自ら恥ぢるやうに人々の方を見遣つて極り悪げに其の手を引つ込める。

右近。遠慮しやらずと、どつさりと食べたがよいではないか。

多氣麻呂は食べやうか止さうかといふ風に暫らくの間躊躇逡巡してゐる。しかし最後に、極度の饑と美味に對する猛烈な食欲が、其の體からあらゆる自制力を奪つてしまふ。

多氣麻呂。では、頂戴いたしまする。

と嬉しげな顔をして、犬のやうにガツガツして、顔中の筋肉を動かしながら料理を食べ始める。途中で喉に閊えて眼

を白黒させる。侍女達それを見てクスクス笑ふ。皐月の前は顔をそむけてゐる。多氣麻呂は料理を悉く平げてしまふと、滿腹の處へ多少酒の醉も發して來て、頓に元氣づいた聲音になる。

多氣麻呂。これはこれは、思はぬ御馳走にあづかりまして、誠にはや、有難いことでござりました。御酒と言ひお料理と言ひ、われわれ下衆の身分では見たこともない結構づくめ、腹の虫めが驚いて雀躍りいたすやうでござりまする。はははは。

右近。ほほほほ――そなたが其のやうに喜びやるので、わが君樣にも定めし御滿足でありませう。(一寸前へ出て)就いてはそなたにも一つ所望がある。斯う見受けた處、そなたは生まれながらの下人ではなささうぢやほどに、此の場のお慰みに、そなたの身の上ばなしをお聞かせ申したがよいわいなあ。

多氣麻呂。是れはしたり。滅相もない其のお尋ね。わたくし事は、お耻かしながら親代々の卑しい土民、今は難波の長者が奴僕の身の上でござります。お慰みになるほどな身の上ばなしが、あらう道理はござりませぬ。

右近。隱しやんな。たとひ何んと言ひ抜けしやうとも、爭はれぬそなたが人品骨柄。いづれ由ある者の成れの果と、實はお見抜き遊ばしてのお尋ねぢやぞへ。包まず話して見たならば、お情深いわが君樣、またそなたの身の幸せにならうもしれぬ。さ、ありの儘を話して見や。

多氣麻呂は凝と考へ込む。暫らく經つてから、何か心に決する處があるらしく顔をあげる。稍威儀をもつた態度。

多氣麻呂。何處の尊いおん方かは存じませぬが、路傍のわたくし風情にそれまでのお尋ねでは、まことの事を申上げずばなりますまい。如何にも御賢察の通り、わたくし事は、以前は、滿更身分の無い者でもござりませなんだ。それが零落に零落して、御覽の如く見るも淺間しい今の身の上。それも皆身から出た銹ではござりまするが、折に觸れては、運命といふ者の不思議さを考へさせられるともござりまする。また、謂はば痴人の懺悔ばなし、格別お慰みにならうとも思はれませねど、人づてに傳へられましたならば、廣い世の中では愚か者の誡めにならうかも知れませぬ。まづ一と通りお聞きなれて下さりませ。――わたくしの父と申しまするは、紀姓をば名乘りまして、或る受領のおん方に仕へて居りました者でござります。さしたる身分ではござりませなんだが、正直一途で、永らく御奉公もいたしたところから、自然主人のお扱ひもよく、先づ氣樂に世の中だけは過ごせたのでござりました。處で、

わたくしは其の一粒種に生まれたのでございます。——わたくしの生まれましたのは、殿が美濃國に御在任中の事で、無論父もお伴をして參つて居りましたので、わたくしは其の儘六つの歳まで美濃で成長したのでございましたが、殿が京へお歸になられましたについて、わたくしどもも其の後は續いて京の住居をば致したのでございました。それから以後は格別のおはなしもなく、二十の歳になつてわたくしは正式に妻を迎へました。妻は其の時十七でございました。——全體、わたくしどもの婚姻につきましては兩親は最初から進まぬといふよりも寧ろ反對いたしましたのを、わたくしは飽く迄強く我意を立て通してしまつたのでございました。相手の家の門地だとか、富だとか、そんなものが何んになる。財産や權力と婚姻するのではない。自分は愛情のために夫婦になるのだ——と、わたくしは心底斯う思ひ詰めてゐたのでございました。しかし、結果は惡うはございませんなんだ。妻と申します女は、わたしの口から申すもおかしなものではございまするが、まつたく縹緻と言ひ氣だてと言ひ申し分のない女で、其の上浮世の苦勞にも隨分慣れて居りましたから、お心好しの兩親の機嫌を取るくらゐなことは造作もなく、直きに今度は親達の方からこよないものに思はせるやうになつたのでございました。——茲迄が、わたくしの人生の春でございました。此の調子で何時迄も續きましたなら、わたくしは天下無二の幸福者だつたかも知れませぬが、花が散り、雨が降り風が吹くやうに、わたくしの身の上にもさまざまな出來事が追ひ追ひとふり掛かつてまゐりまして、それまでは世間知らずの懐つ子で居りましたわたくしも、運命の手に胸倉を取られて小突き廻された揚句に、浮世の大濤の眞つただ中へ拋り出されたのでございました。——妻が來てから二三年の間に兩親が引き續いて此の世をば去りました。すると、それから一年も經たぬうちに、今度は主君の殿が急病でおかくれ遊ばしたのでございました。兩親とてもまだ惜しくない齡でもござりませなんだが、しかしそれは順當で止むを得ないといたしましても、まだ出世盛りといふ御年配だつた殿の突然の御他界は、お館全體の御不幸は言ふ迄もなく、わたくし一個の身にとりましても、兩親を亡なつたより以上に、遙かに大きな打擊だつたのでございまする。と申しまする譯は、肝心のお世嗣ぎの公達が無く、あとに北御臺所とまだおいたいけな姬君とがお殘りなされたのでございましたから、殿の御在世中とは事かはり、自然お暮し向きなども縮めなければならぬ場合になりまして、古い譜代の者が少しばかり留まつたほかは

一同お暇になつたのでござりました。其の時限りわたくしも祿を離れたのでござりましたが、幸ひわたくしには親が殘して行つて呉れた貯へも可成りありましたため、どうやら衣食の憂へは無く、結句からだの自由を得たのをよい事にして、若い身そらを無爲に過ごしてゐたのでござりました。しかし、それも永續きは致しませなんだ。其の年の冬、ある風の强い晩に近隣から出火して、瞬く暇にわたくしの家まで燃え移り、屋財家財一物も餘さず灰燼に歸してしまつたのでござりました。おまけに運の惡い時は惡いもの、其の火事の揚句にわたくしが大煩らひをするといふ始末。座して食らへば山も空しの譬へ、まして此の災難續きで、私達は最早安閑としては居られなくなりました。しかし、別段他に志しもござりませぬゆえ、今一度何れかへ主取りをいたすよりほかに工夫はござりませぬ。でわたくしは、まだ病後ですつかり本復もいたしませぬうちから、あちこち奔走して仕官の口を探し廻つたのでござりましたが、どうも思はしい口が見當りませぬ。と言つて、餘り身を落した事もし度くないのでござります。さうかういたして居るうち、半歳一年と月日ばかりが徒らに速く經ちましても、わたくしは相も變らぬ浪人で、家の暮しは益逼迫して來るばかりでござりました。——しかし、斯んな中でも、わたくしは左程苦勞にも存じませなんだ。なに、まだ時節が來ないのだ、時節が到來して一つ何かの蔓さい摑めば、幾らでも出世はして見せる——と謂はば若氣の夢のやうな考へから、運なぞは何處にでも轉がつて居るやうな氣がして、人生といふものを樂觀して居りましたのと、今一つは妻から受ける慰籍(なぐさめ)があつたからでござりました。妻に對するわたくしの愛情は、結婚當時も其の頃もすこしの變りもござりませなんだ。また妻に言はせて見ても、矢張りさうだつたらうと思はれまする。わたくしども夫婦の仲は、まつたく餘所眼にさへ羨ましがられる程でござりました。妻は、如何なる貧苦の中でも、ただの一度たりともわたくしに辛い顏をば見せたことはござりませなんだ。全體、學問といふほどの素養はござりませなんだが、風流で、そして器用な性分(たち)でもござりまして、歌なども上手によみました。わたくしは妻のためにどれ程救はれてゐたことかしれませぬ。仕官の事で外を驅け廻つて歩くわたくしが、一日の奔命に疲れ切つて、其の間に出遇ふさまざまの屈辱のためにすつかり氣を腐らせてしまつて意氣銷沈して我家の門を潛りました時でも、妻の笑顏を一と目見まするなら、頭にかかる雲は忽ちにして吹き拂はれ、わたくしの魂は樂園に遊ぶが如く長閑に、ほのぼのとして

ゐるのでございました。——で、是れが此の儘永遠に續きましたなら私の身の上には何んのお話もございませぬ。縱し又わたくしが今日以上に零落して、此の世に有らむ限りの苦しみをば身に受けました處が、それが妻と一緒に居ての上の事ならば、慘めな境涯を悲しむどころか、わたくしは自身の幸福を神や佛に感謝しなければならない人間だつたのかもしれませぬ。處が、世の中の事といふものは、兎角過ぎ去つた後でなければ良いも不良いも判斷が六か敷いもの、其處が所謂運でもございませうが、若いうちは殊に分別が肝心な所以でもございまする。——餘事はさて置きある日もわたくしは、豫て仕官の事を依賴してあつた人の處へ自身で返辭を聞きに出向いて參つたのでございました。處が、今度こそは大丈夫と自分でも安心して居つた其の口が、矢つ張り駄目だつたのでござりました。わたくしは全く落膽してしまひました。其處の門を出まする時には、頭は朦朧といたして、地を踏む足の力さへ感じなかつたほどでございました。我が身の前途が、深い穴の中へでも這入つて行くやうに、ただ暗澹として見えました。——わたくしは、とある町を通行して居りましたが、不圖側らを見まするると、加茂のなにがしといふ名高い陰陽師の家がございました。わたくしは何氣なし其の前で足をとめて、「一つ自分の運勢を占つて貰はふかしら」と考へ付きました。わたくしは平素は一向左樣な事には頓着いたさぬ方の人間でございましたのに、どういふものか其の時に限つてふとそんな氣になりました。で、到頭思ひ切つて這入つて行つて、其處の先生に會つて占ひを立てて貰ひました。すると先生の申されるには、「是れは甚だ吉くない運勢ぢや。お前の運勢はまだ容易に開けて來さうな模樣もない。猶是れはつい手に言ふ事ぢやが、お前は結局今の妻と添ひ遂げられない運命をもつてゐる、其の譯は、本來夫婦といふものは、前世に於て必ず何かの因緣を有つてゐなければならぬのぢやが、それがお前達の間には無い。謂はば夫婦になる可からざる人間同志が誤つて婚姻を結んだものぢや」といふのでございました。わたくしは腹が立ちました。同時に、斯んな愚にも付かぬ出鱈目を聞いてそれで金を取られるのかと思ふと莫迦々々しくもあり後悔もいたしましたが、仕方が無いので定めの禮を置いて其處を出ました。家に歸つても、無論こんな話は妻にもいたしませぬ。——それから二三日經つてからの事でございました。其の夜、わたくしは床についてから、睡られぬままに樣々と過ぎこし方や行く末の事を考へて居りました。するうちに、わたくしは何んとも言へない悲しい心持に惹き入れられてし

まひました。世間は寂と靜まり返つて居りました。妻は寢息さへ立てずに、靜かに睡つて居りました。たゞわたくしの耳の中で鳴るのか、それとも何處かで鳴つてゐるのか、ジーンといふ微かな地蟲でも鳴くやうな音だけが聞えて居ります。わたくしは子供の時からの習慣で、あの音が耳につきますと、直ぐに地獄を聯想するのでござりまする。つまり、地獄の物音が地上へ漏れて來るのだといふ風に、子供の頃は考へてゐたのでござりました。――わたくしは引き込まれでもしさうに氣分が滅入つてしまひましたので、斯んな時には妻を起こして話しでもしてゐるに限る、と斯う考へまして、側らを見遣りますると、妻はすやすやとよく睡つて居りまする。わたくしは何氣なく妻の顏を眺めたのでござりましたが、不圖妙な感じに胸をうたれたのでござりました。夢さへ見てゐさうもない靜かな其の寢顏が、なぜか斯う冷ややかな感じをわたくしの心に與へたのでござりまする。たとひ睡つて居る間でも、互ひの魂と魂とは緊りと手を結び合つてゐるのだといつたやうなわたくしの心持は、其の時餘程傷つけられたのでござりました。すると、陰陽師の言つた言葉が、自然にわたくしの胸に上つてまゐりました。「夫婦になる可からざる人間同志が誤つて婚姻を結んだのぢや……」わたくしは其の言葉を考へて居りました。さうして譬へがたない淋しさに襲はれながらも、何故か妻を搖り起こさうといふ心持は失せてゐたのでござりました。――此時から、妻に對するわたくしの心持は、自身でも氣付かぬ間に、すこしづゝ變つてまゐつたのでござりまする。世の常ならば、日數と共に薄らいで行く可きでござりまするのに、陰陽師の言葉は眼に見えぬ怖ろしい蟲の如く、次第々々にわたくしの心の奧深く迄喰ひ入つて居りました。是れ程愛し愛されてゐる妻の本體に全く自分と融和じ難い何物かが潛んでゐるのかと思ふと、わたくしは怖ろしくなりました。殊に近年の不幸續きを考へまするると、陰陽師の言葉が一々意味を有つて躍り出して來るのでござりました。「此の女と一緒に居ては生涯うだつが上らない」と、斯樣にわたくしは考へました。――しかし、退いて妻と別れる場合を想像して見ますれば、それも矢張り堪へられない事でござりました。愛戀の情は別といたしましても、妻として是れ程言ひ分の無い女が他にあらうとは思はれませぬ。また、陰陽師の言に囚はれ過ぎてゐた自身の考へを、心の迷ひとして叱つて見もいたしました。――悧巧な妻が、わたくしの樣子に心づかずに居る道理はござりませぬ。妻は心配して、さまざまにわたくしの胸の中を問ひ糺すのでござりましたが、斯

様な事を打ち出して言つたために、妻に與へる悲しみを考へますると、どうして浮か浮か口外が出來ませう。わたくしは自分ながら判斷の付かぬ心地で、毎日とつおいつ其の事ばかりを氣にして暮らして居りましたが、ふと思ひ付いて、或る處で念晴らしに周易を立てて貰ひました。すると「火澤睽」といふ易が現はれました。それは物事に縁の無い、夫婦なれば和合の出來ぬといふ卦ださうにござりまする。わたくしの心はそれで最早すつかりと定まつてしまひました。わたくしは早速我家へ歸つて、妻に向つて是れまでの事を話し、悲しい事ではあるが双方の身のためにならぬから夫婦別れをしやうと言つて相談を持ち掛けたのでござりました。果して妻は、非常に駭きました。そして嘆き悲しみました。自分だけは、どのやうな水火の苦しみを受けやうとも厭はぬゆえ、元々通り妻として側へ置いて呉れと言つて泣いてわたくしに縋りました。妻の眞情には如何なる無慈悲な人間でも、胸を掻きむしられずには居られぬやうな強い力が籠つて居りましたが、わたくしに取りましては夫れも豫期して居つた事でござりまするから、今更初志を翻へす了簡はござりませなんだ。わたくしは鬼のやうな心を張り詰めて居りました。妻とさへ別れたなら自分の運は乾度開けて行くに違ひない――斯う思ひますると、なまなか妻に對する同情に囚はれてゐて、自分の生涯を棒に振つては溜まらないといふ、冷酷な自我の觀念ばかりだつたのでござりまする。で、結局わたくしの意志通りに事が運びました。妻もわたくし同樣親兄弟の無い身の上で里方と申してもそれは叔母にあたる人の許でござりましたが、他に手寄る處もなく、泣く泣く其處へ歸つたのでござりました。――妻が居なくなりまするると、わたくしの身邊には始終火が消えたやうなうそ寒さが付き纏ひ始めて、島流しにでもされたやうな寂寥と遣る瀬なさの日を送つて居りました。戀しさ、未練、さうした意氣地のない心持に惱まされて何事にも手の付かぬ日もござりました。女々しい悔恨の情に責められて、夜徹し枕を濡らして睡られぬやうな事も珍らしくはござりませなんだ。しかし、わたくしがどれほど勝手な男でも、今更妻を呼びに行くこともなりませず、且又一方には、漸く係累から放たれた自由な此の境涯を利用して、一日も早く立身出世をし度いといふ劇しい慾望が燃えて居りますので、瘦せ馬が驅け廻るやうな慌ただしい奔命を續けてゐたのでござりました。――其の後は二度と妻に顏を合はする機會も無く、どうした事やら更に成り行きも存じませぬ。處で、わたくしの身の上に就きましては、猶更詳しく申上げる必要

はございますまい。愚かなわたくしは、最愛の妻を失つたばかりでなく、やがて名譽も地位も意地も勇氣も、唯一つ此の淺間しい骸を殘したほかは總ての物を失つてしまつたのでござりまする。最初の二三年は京のうちに居りましたが、何をいたしましても思はしくまゐらず、到頭京を喰ひ詰めて他國へ走り、其の後は諸々方々を流浪して空しい命を續けて居りまする。野心が無ければ勵む氣も出ず、望みと言つては腹存分に物を食ひ度いぐらひなところ、意地が失せては死ぬことさへもなりませず、斯くは淺間しい恥を晒して居るのでござりまする。はははは……

多氣麻呂は、自らを嘲笑ふやうな、世を呪ふやうな、悲愴な笑ひ方をする。皐月の前は、物語りの途中から何物かに撲たれて、大濤のやうな心の激動から辛うじて自身の體を保つてゐたが、多氣麻呂の長物語りが終りを告げた時到頭堪へ兼ねてフラフラと卒倒しさうになる。侍女皆々駭いて驅け寄り左右から抱き留める。

侍女皆々。御臺様、靜り遊ばして下さりませ。

皐月の前。(漸う元の狀態に戻つて)もうよい、もうよい。世にも哀れな葦刈り人の身の上ばなし、思はず吊り込まれて聞くうちに、胸が痛うなりましたわいのう。

と泪を拭く。皆々元の場へ戻る。

侍女一。ほんに御臺様のおつしやる通り、可哀相な男の身の上、わたくしどもまで貰ひ泣きをいたしましてござりまする。

夕燒の空次第に濃くなる。

皐月の前。誰ぞ、短冊を是れへ。

一名の侍女は文臺に硯と短冊をのせて主人の前へ運ぶ。皐月の前は短冊を手に取つてサラサラと認める。そして、書き了へた短冊を眺めながら又もや涙を落す。

皐月の前。右近——。

右近。(側へ來て)お召しにござりまするか。

皐月の前。此の短冊をあの男に遣はしてたも。

右近。畏りました。

と恭しく主人の手から受け取つて再び多氣麻呂の側へ行く。多氣麻呂は默然として差しうつ向いてゐる。

右近。御臺様よりそなたへ下される此の短冊、有難く拜領いたされよ、

多氣麻呂。(徐ろに頭を上げ、短冊を手に取つて讀む)あしからじと、おもひてこそはわかれしか——などかなにはのうらにしもすむ……

多氣麻呂は猶一二度口の中で繰り返しながら、合點のいか

ぬ面持をして考へてゐる。軈て其の短冊を右手に載せたまま、ヒョロ〳〵と起ち上つて皐月の前に近づく。兩人顏を見合せて互ひに駭く。

多氣麻呂。(緊張した聲)おお! そなたは皐月……。

と言ひ掛けて惘れ果てて立ち竦む。皐月の前は檜扇で顏を隱してブルブル戰いてゐる。家來達兩三名驅け寄つて左右から多氣麻呂の腕を捉へる。

郎黨甲乙。高貴の御方に對し、無禮をいたすと許さぬぞよ。

と多氣麻呂を元の場へ引き据へる。多氣麻呂は暫し心も轉動したさまでゐる。稍あつて胸のあたりを撫でながら、

多氣麻呂。是れは〳〵。有難い短冊をば頂きました嬉しさ。つい周章へ過ぎました唯今の無禮の段、一重に御勘辨のほどお願ひ申し上げまする。(右近に向つて)もしお女中、恐れながら返歌を奉り度う存じまする。

右近は肯いて直ぐ樣料紙硯をそれへ持つて來る。多氣麻呂涙を呑みつつ短冊を認めて三寶の上に置く。右近それを皐月の前に渡す。

皐月の前。きみなくてあしかりけりとおもふにはいとどなにはのうらぞすみうき。(と讀み了へて聲をあげて泣き倒れる)

其の時下手より郎黨一名慌ただしく驅けて來て遙か彼方へ平伏する。

郎黨。申し上げます。殿には唯今近道を經て難波の長者が許へ御越しになられました。御臺所にも直ぐ樣御渡り遊ばすやう、殿の仰せにござりまする。

一同俄かに色めき立つ。皐月の前は侍女に助けられつつ車へ乘る。車は、郎黨を前後に、侍女を左右に隨へて動き出す。多氣麻呂も起ち上つて路を避けて、茫然として車のあとを見送る。車は徐かに下手へ這入る。多氣麻呂一人舞臺のまん中に取り殘される。稍騷がしき葦のそよぎ、千鳥の聲。――靜かに幕――

金持の犬と貧乏人の猫の對話

生方敏郎

金持の犬　おい、三毛公、遊んで行きなよ。此處で會ふのは久し振ぢやないか。

貧乏人の猫　何か話があるのかい。僕は忙しいんだからなあ、そんなに遊んでも居られないんだ。

金持の犬　又お株が始まつたね。忙しいと云つた處で、格別大きな仕事をする譯でもないんだらう。お前の所の御主人にかぶれたんだな。

貧乏人の猫　どうだか。そんな事は僕は知らない。

金持の犬　でも君の所の御主人は有名なサボタージストだつて云ふぢやないか。

貧乏人の猫　それはさうよ。それがどうしたのだい。

金持の犬　恐ろしく喧嘩腰に出たね、君の家のサボタージストは、毎日碌な仕事もしないで、ぶら〳〵して居る癖に、何時も忙しい〳〵と云つて居るからさ。大方君も些とばかりそれにかぶれたんだらうと思つたのよ。

貧乏人の猫　大きに御世話だよ。誰にかぶれないつたつて、サボりたくなれあ何時でもサボるさ。此自由の天地間にこせ〳〵して生きて居て耐るものか。晝寢がしたくなれば晝寢をするし、朝寢がしたくなれば朝寢をする。それも奥さんの膝の上でも、主人公の枕許でも、平氣で、堂々と寢てやるさ。僕の主人は、僕の事を「此奴は横着で、面白い奴だ」つて云つて居るよ。

金持の犬　大分メートルが揚るね、近頃はデモクラシー流行で、君の所の御主人なんかも、大分鼻息が荒いことだらう。

貧乏人の猫　鼻息は昔から荒いよ。家の主人と來たら、一文の金が無くてもみそかに閉口たれた例がない。彼が少しばかり悄氣るのは、細君に取つちめられる時だけの話だ。あゝ云ふ豪傑も、牝に會つてクド〳〵云はれると、手の出しやうが無いと見える。

金持の犬　それあさうよ。俺達だつてさうぢやないか。强盜

や盗人なんぞは恐くはないが、牝に威張られると耐らないさ。理窟を云つて聞かせたつて分らないし、嚙れば泣くし、殺せば化けて出ると云ふ奴だからな。

貧乏人の猫　さうよ。だから家の御主人の風來居士と來たら、細君より外に恐いものは無い。それも晦日だけの話だ。それあ恐しいサイノロジーのプラス、チヤイノロジーと來て居るから、金さへあれば一家團欒和氣靄々、地所の見る眼も羨しい位だ。

金持の犬　それあお目出度つて結構だね。だが其チヤイノロジーと云ふのは何の事たい。

貧乏人の猫　子煩惱と云ふことさ。風來居士は朝は十一時、時とすると十二時半頃、ぼんやりした顏をして、眼を覺して二階から降りて來るが、先づ何より先に小便臭いべそ子と云ふのを抱き上げて、無性鬚のもぢや／＼と生えて居る頰ぺたを、赤ちやんの搗立ての餅のやうな柔かい頰へ押付けるのさ。べそちやんは驚いて泣き立てるよ。それでも構はず。嘗めたり抱き縮めたりして居る。それを下へ置いたと思ふと、今度は腰も立たない蛭兒を抱き上げて、天井へ支へる程高く差上げるんだ。すると此奴は男の子だけに、舌を出して喜ぶよ。夫から、あの悪戯者の凸坊の頭を、好い子／＼と云つて撫でるんだ。全く子供に眼はないね。細君から劍突を喰つて、漸く顏を洗ひに行く始末だ。これをチヤイノロジーと云ふのさ。

金持の犬　成程、其チヤイノロジーと云ふものは、餘程人間離れのした滑稽至極な物だね。

貧乏人の猫　それあ詮じ詰めれば人間のすること、云ふこと、皆お茶番の種さ。豈獨り風來居士の言行に限らんやだ。君の御主人の成金君が孫のやうな妾に現を拔かして居る圖も、デブ君の遣りさうな喜劇の連續ぢやないか。

金持の犬　處が君も知つてるかも知れないが、あの妾が家の運轉手にくつ附いて、金を盜んで駈落をしたのさ。其時の親爺の憤慨し方と云つたら全く眼も當てられなかつたぜ。禿頭から湯氣を立てゝ、怒つたり、泣いたり、家の者を叱りつけたりさ、あゝなると悲劇を通り越して喜劇だつたよ。

貧乏人の猫　うん、聞いた／＼。其事なら此間の新聞に出て居たよ。風來居士がそれを朗々と讀上げて、一人で痛快／＼と嬉しがつて居たよ。運轉手と云ふのは、あの眼鏡を懸けた生意氣な奴で、僕が道を歩いて居る時、ブー／＼大きな音をさせて驚かせた失敬な奴だ。何もあんな音をさせたいでも、あんな大きな圖體をした車が走つて來るのは眼に這入らない奴があるものか。全く、人を盲目と心得て居る。

金持の犬　さうも行かないさ。我々と違ひ人間は眼も悪いし、耳も遠い、五官が總て發達しない上に、足が二本しか無いと來て居るから、車を避けるのでも容易の事ではない。先達てもあの運轉手が、他所の老人を轢き倒したので、其時も新聞で盛に筆誅されたものさ。俺達が考へた所だと、年寄の方が、野呂間過ぎるんだ。二本足なんかで歩かずに、四本で歩いたら宜ささうなものぢやないか。

貧乏人の猫　さあ何うだかな。家の蛭兒なんかは、僕達のやうに完全に四本足で歩いて居る所は殊勝なものだが、然し餘り早くはないやうだよ。轉んだり起きたりだ。家の主人の曰くさ、人間は二本の足がありながら、自動車なんて人轢車を乗り廻すのが間違つて居ると。

金持の犬　あの記事の出た時、家の親爺も憤慨して居たよ。其記事を書いた新聞記者共が、快速力で走る自動車の味を知らないもんだから、自動車と老人と衝突すれば、一もなく二もなく自動車を惡者にしやあがる。あゝ云ふ貧乏な新聞記者共を一週間ばかり打つ續けに自動車に乗せて見たい。さうすれば自動車を謳歌するに違ない。そして其次に自動車が人を轢いても、轢かれた方の人間を攻撃するだらうつてさ。

貧乏人の猫　常識の無いことを云つてるな。家の風來居士が可なり非常識だと思つたが、君の御主人は更にそれ以上の沒常識漢だね。然し新聞記者を一週間自動車に乗せたら、それを謳歌するだらうと云ふのは眞理かも知れない。

金持の犬　彼等は乗らない間から自動車を謳歌して居るんだ。唯だ乗れないから攻撃するのさ。少し金を出して買收して見ろ。彼奴等の筆は何うにでもなるんだ。本當に貧乏人の味方として筆を執る人間なんか、幾ら居るものか。金持を攻撃するのも金の爲だし、金持の提灯を持つのも金の爲めだ。實際、貧乏人を相手にしても、得は立たないもの。三井、岩崎の自動車にならば擦り傷を受けても、莫大の御見舞金を得られるだらうが、貧乏人の自轉車に轢き倒されたのでは一文にもならないからな。金持と金持の番頭さんの提灯持をしたばかりで、自分自身も分限帳に載るやうになつた雑誌屋さんのあることは、お前の主人の風來居士の皮肉を煩はすまでもなく、天下萬人皆知つて居るよ。之に反して、貧乏人は苛めるのも可哀想だし、煽てた處でストライキか、サボタージュを始める位のもので、迚も分限帳に載るやうな報酬を與へては呉れない。だから近頃の言論屋を見ろ。正面から金權の御用を勤めるか、さうでなければ、金持を脅迫して、幾らかの小遣錢を捲揚げやうとして居るに過ぎない。叩頭をするにも、啖呵を切るにも、相手は貧乏人ぢやな

くつて、金持なんだ。勞働者を煽て揚げるのも、實を云へば、勞働者の爲に勞働者を煽てるのではなくして、金持を脅かす爲に、勞働者を煽てゝ居るんだ。何時の場合にだつて、貧乏人の爲のプロパガンダなんかがあるものかい。

貧乏人の猫　それあ筆を執る者が自分の位置を自覺しないからだ。自覺しさへしたら、金權者流と戰ふに違ひない。それは成程金權側の御用記者もあるだらう。然し生來涙脆い彼等は、貧民の悲慘なる狀態を見ては、泣かな いでは居られないだらう。さて、其結果は何うなるだらう。

金持の犬　君の云ふ通り、兎角文字などを弄ぶ奴等は泣蟲に定つて居る。だから自分が困れば乾度泣くさ。人の困つたのを見ても、泣かずには居ないだらう。泣く。それだけだ。食ふことは又別問題だからな。食はずに泣いて居る譯には行くまい。處でたゞ泣いたんでは、誰も飯を食はせては吳れないんだ。藝者が狂言の墨塗り女のやうに、空涙を流して泣けば、金になるだらう。然し女が本當に泣いて見ろ。殊に貧乏でもして泣いて見ろ。誰も恐がつて相手にはしない。肉親の親戚だつて知らぬ顔で傍を向く。それあ誰しも困る者と一緒に泣いてやつて、親切な人と思はれたいさ。人が親切だと思つて吳れないでも、自分で自分を親切だと思ふだけでも、可なり好い氣持がする。然し唯では親切は出來ないからな。物質を頒たないで、精神的だけの親切ならば、誰もするよ。坊主もする。牧師もする。教育家もする。新聞記者もするだらう。だから、さう云ふ人達は頻に精神的を尊ぶわな。けれども物質的親切を敢てするのは、よく〱の馬鹿者だけだ。少しばかり損が行くからな。それより人道主義でも唱へて、精神的に親切をした方が、當世向きだと云ふものだ。俺の家なんか金持と見て、主人の同鄉の奴だとか、遠緣の親戚だとか云ふのが、時々合力を賴みに來るよ。其時家の主人は、色々處世の方針を說いたり、二宮流の勤儉貯蓄を勸めたり、能率增進を說法したり、色々資本いらずの精神的人道主義を實行して番茶一杯で追ひ歸すよ。

貧乏人の猫　さうかい。君の家の成金さんは新聞にもあつた通り、强慾非道の評判が高いが、それでも合力を乞ひに行く親類なんかゞあるのかね。

金持の犬　それあもう始中終來るさ。金持になると、思ひも寄らない所から、親類が出て來るのだとさ。成程、元を糺せば日本人は皆親類なのだらうから、もつと大きく考へれば、人間は皆親類なのだらうから、親類呼ばりをして來る奴が絕間なくあつても不思議はない譯だ。

貧乏人の猫　さうか、僕の家へなぞは又親類の奴等が顔を出

したことがない。盆にも、正月にも來たことがない。赤ん坊が出來てもお喜びにも來ない。だから僕は風來居士には親類は無いのかと思つたら、あるのなんのつて、千生り瓢箪のやうに、澤山生つて居るんださうだ。だが今まで親類の奴等の顔を見たことがない。

金持の犬　見ない方が宜いだらう。風來居士の親類とあれば、大概サボタージュの小賣人位の所だらう。それあ來ない方が宜いぜ。僕は始め人間の親類と云ふものは、一圓位の手土産を持つて來て、博覽會や花見の時などに、一週間も泊つて行く食ひ潰しに對して與へた名辭かと思つた位だよ。家のお嫁さんの云ふ所に依ると、さんざん喰ひつぶした上に後から蔭口を利くんださうだ。そして前にも云ふ通り、親類でございと云つて來る奴に限つて、貧乏人に定つてらあな。

貧乏人の猫　處が風來居士の親類は其反對だ。彼等は皆な勤儉貯蓄主義で、君の所謂精神的人道主義者だよ。だから先方で寄りつかないばかりでなく、風來居士に寄りつかれるのを、ペスト菌か何かのやうに恐れて居るんだ。

金持の犬　それあさうさ。風來居士と來ちやあ親類諸君と限らず、誰だつて恐れ入るよ。金も無い癖に、晦日が恐くない男なんだから。それに細君を宛てがつたのは、彼をして社會的生活を營ましめる自然の與へた安全辨さ。彼に妻子でも無かつた日には、サボタージュは毎日のことで、我儘勝手此上なしと云ふ人物だからな。

貧乏人の猫　我儘勝手には違ひない。併し氣樂な男だから、居士自身は自分をそんなに貧乏とは思つて居ないやうだつたけれども、世間で彼を貧乏人扱ひして居るものだから、近頃は彼も圖に乘つて、自分を淸貧だと考へ出した。近來貧乏人の旗色が少しいゝやうだからかも知れない。

金持の犬　それが惡い、金持は惡くは言はれるけれども、周圍から寄りついて來る所を見ると、本當は惡いのでもないだらう。之に反して貧乏人は惡くは云はれないけれども、人が相手にしない所を見ると、餘り善くないに違ひない。どうだ君、はまだ朝飯も食はないだらう。風來居士の家に居ては、食事も恐らく滿足ではあるまいな。

貧乏人の猫　馬鹿を云ふな。僕は朝飯どころか、晝飯も先刻に喉まで支へる程食べて來た。

金持の犬　遠慮しなくも可いよ。君が食はずに遊びに來ても、金持の家では一椀の飯を御馳走しようと云ふんではないんだから。其邊の事は遠慮するには當らない。

貧乏人の猫　誰が遠慮して嘘を吐くものか。遠慮をするのは

本當を云ふ時だけのことだ。僕の家の風來居士は、僕に自分と同じ物を幾らでも食はせて居る。門構は貧弱でも、食物は奢つて居るぜ。お前の所のやうに主人と女中が別々の物を食ふやうな事は無いんだ。

金持の犬　そんな所が近頃流行の平民主義かね。それなら俺の家なんかも、御多分に漏れないんだ、親爺こそ外で勝手な眞似をして居るし、食物や着物のやうな形式上には差別主義だが、近頃番頭共や下女共の鼻息の荒いつたらないんだ。丁稚は番頭のやうに心得てるし、番頭は主人のやうな積りで居るし、下女は娘のやうに振舞つて居る。此分で行けば、俺なんかも縮緬の座布團の上へでも坐り込んで居て宜ささうだ。結構な世の中になつたものさ。

貧乏人の猫　さうかね。君の家の成金さんの工場では隨分女工を虐待すると聞いて居たが、近頃では奉公人をそんなに優待するやうになつたのかい。尤も噂ほど當てにならないものは無いには違ひないがな。

金持の犬　なあに、主人の方では優待しようなんて思ふものか、唯だ奉公人の方で優待されようと思つて居るだけさ。奉公人の方では、折もあらば優待されやうと狙つて居るし、主人の方では、態よく虐待しやうと考へて居るのさ。尤も僕のやうな忠僕は別者だがな。犬は昔から忠義者と相場が定つて居るよ

貧乏人の猫　そんな事は昔のお伽噺作者が定めたことだい。犬が忠義なら、猫だつて忠義だ。人間共とは譯が違ふよ。僕だつて鼠を捕ることを怠りはしないさ。

金持の犬　鼠の一匹や二匹位捕らずに措いたつても、格別大きな損を主人に掛ける事もあるまい。君なんかのは義務と云ふよりも、寧ろ自分の食慾の爲に働くのだらう。僕等はさうではない。少しは憎まれても泥棒に吠え付いて、家の番人をするんだからな。

貧乏人の猫　金持の金庫の番をすることを以て、職務に忠實だと思ふ程、頭が惡くつては、お話にならないね。幾ら職務でも犬殺しだの、隱亡だの、監獄の看守だの、高利貸に賴まれた執達吏だの、收賄官吏の辯護人だのは、眞平御免だよ。だがそれよりも、もつと惡い職務は金持の金庫の番人を勤めることだらう。だから忠實も場合に依ることだね。

金持の犬　君の筆法から推論すると、工場で汗水たらして働いて、因業な資本家を富ます職工達は、矢張り餘り感心出來ない事になるんだね。それから自分の操を切賣して、强慾非道な樓主を富ます藝娼妓等は怪しからぬと云ふのかね。

貧乏人の猫　勿論さ。それだからこそ世間の人は勞働者を賤

み藝娼妓を人間でないかの如くに非難するぢやないか。最も精神的、人道主義な教育家や宗教家ほど彼等を非難するではないか。そして工場とか、妓樓とか、牢屋以上に殘酷な悲慘な所に、彼等を押込めさせて、世間は平氣で見て居るではないか。

金持の犬　成程、藝娼妓や、職工を虐待することを、世間は平氣で居るかも知れない。然し其協力者たる工場主や、妓樓の主は、政府からさへも常に尊敬されて居る。家の主人の友人で、某と云ふ妓樓の主人は賤妓の操を切賣して蓄積した數萬圓を、公共事業に獻納した廉に依り、何とやら云ふ勳章を、政府から頂戴したと誇つて居るのを見た。是れ政府が賤業の協力者を尊敬するの證據ぢやないか。

貧乏人の猫　政府から勳章を貰ふ位の事は、自慢にも何にもなつたものぢやない。大阪には贋造紙幣の製造業者にして、男爵を貰つた者があるし、東京には石ころを加工して牛肉の罐詰を製造したる功績に依り矢張男爵を貰つた男がある。神戸にも、食料の買占をして、一時人工的飢饉を現出せしめたお婆さんがあるが、いづれ其内に、男爵夫人の稱號でも奉られるだらうと、噂してゐた男があるが、そんな事は勿論噂だから嘘だか眞實だか僕は知らない。

金持の犬　そんな例ならまだ澤山ある。下野の國とやらには盛に鑛毒を流して、數ケ村を湮滅した功績によつて、矢張り男爵を貰つたのがある。

貧乏人の猫　然しさう云ふ事をすると、爵位や勳章の有難味を減らすばかりだ。さうだと將來高利貸や株屋で爵位の無い者はなくなるだらう。

金持の犬　爵位の値打が下つたのではない。其反對に金の値打が上つたのだ。詰り金さへ出せば、何でも買へると云ふことが露骨になつて來ただけのことだ。金を以て美服も買ふべく、愛妾も買ふべく、駿馬も買ふべく、名譽も買ふべく、天國へも昇り得るのだ。昔から地獄の沙汰も金次第と云ふではないか、家の親爺は目に一丁字のない成金だが、國家の參政權を持つて居る。市の參政權も持てば、區の參政權も持つて居る。あの頑冥な瓦斯會社さへも、彼が威嚇すれば其持家は新に瓦斯管を引く。家の親爺のやうな小成金ですら、此通りの力を持つてゐる。況して明治以來の大成金となれば、東京市の眞中へ森林を作ることも出來る。

貧乏人の猫　金を出して爵位を買ふのは聞こえて居るが、東京の眞中に森林などを作つて何にする。

金持の犬　なに、それは唯だ粹興からだらう。それを脫税の爲だなどと思ふ者もあるだらうが、實際は立派な塀で取圍み

々たる門を立て、家を建てゝ住みながら、それを官吏をして宅地と云はせずして、森林と呼ばせるのが痛快なのだ。謂はゞ秦の趙高が、群臣をして馬を指して鹿と呼ばせて痛快がつたやうな無邪氣な考へさ。

貧乏人の猫　夫が無邪氣か、得をしたり、人を馬鹿にしたり、誠に結構な無邪氣だ。尤も家の茶目吉なんぞも、駄々を揑ねて、好きな物をねだつたり、罪もない僕の耳を引張つて苛めたりして、それでも風來居士から無邪氣だと云はれて居るのだから、人間の云ふ無邪氣位當てにならないものはない。家の風來などは、其の又反對に、此頃自分達の住む家は少しも庭と云ふものが無い。是は家主が庭を家にしてしまつたんだと愚痴をこぼして居た。さう云ふ家主も矢張り無邪氣の一人だらうか？

金持の犬　然し一方に宅地を森林にする魔法遣があると同時に、他方に又庭園を住宅に變化させる手品師があるのは、大正の御代の宜いコントラストで、面白いではないか。それもこれも皆金の力だ。だから俺は人間界に於いて金は魔法の杖だと思ふよ。君の所の風來居士のやうに、見識ばかり高くつても、金が無ければ誰も相手にはしない。何時ぞや俺が家の書生と一緒に散歩して君の家の横を通つた時にも、風來居士は、夕刊の外國電報を讀んで、講和委員が大失敗だの「西園寺はロイドヂョージや、クレマンソーの足下にも寄り付けない、實に困つたお卿さんを委員にしたものだ、」などと大聲を揚げて、細君に喰つて掛つて居るやうだつたが、「選擧權一つ持たない身で、講和委員の攻撃が聞いて呆れる。東京市の市政は愚か、自分の住む小石川區の事にでも、一言も口を出す權利も持たない癖に」と家の書生が笑つてゐたぜ。

貧乏人の猫　其事なら主人も實際殘念がつて居るやうだつた。そして何でも選擧權を持たなければ駄目だと云ひ出して、此春中は頻に普通選擧論を唱へ、人の顔さへ見れば、其議論を吹掛けて居たが、誰も相手にしないので、此頃は罷めてしまつた。

金持の犬　實際風來居士が此春熱心に絶叫する所を聞くと、何の由緒もない我々までも感動して、普通選擧贊成論者とならざるを得ないやうな氣がした。けれども其後人氣取の代議士共や政界のバチルスたる政黨抱への壯士共までが柄にもない普通選擧の演説をしたり、自動車の上からビラを撒きちらして歩くのを見ては、一寸熱がさめて來たね。

貧乏人の猫　君等は遊戯的に聞いて居るから、そんな目障りな物でも見ると、直ぐお座が醒めるんだ。本當にそれを要求して居る者なら、どんな嫌な奴が出しやばつたからとて、それを

中途で捨てるものでない。家の風來なども、君と同じやうな心持から普通選擧の熱が餘程醒めて居るやうだが、あんな事ではいけない。斯う云ふ世の中の遷り變り目には、如何なる時だつて、火事泥的な際物師が飛出して來る。然しそんな者が何だ。直に自滅してしまふんだ。成程普通選擧の贋豫言者は、軍閥主義や官僚主義と同程度にまで文化の進歩を妨げる。然しそんな物に反撥されて普通選擧尚早など云ふ横道へ外れてはならない。矢張り眞驀らにデモクラシーの爲に進まなければならない。

金持の犬　だが君、デモクラシーとか、普通選擧とか云ふ理想が實現された曉にも、風來居士のウダツの揚ることはあるまいよ。貴族主義、英雄主義の世の中なればこそ、彼も多少識者のやうな顏が出來るのだが、デモクラシーの世になつて、熊公、八公のお氣に召すやうな事ばかり云はなければならない時代が來ると、風來などは一等先に國外へ追放されてしまふだらう。サボタージュの好きな所位は彼等と趣味が一致するだらうが、外には餘り一致點も無いではないか。

貧乏人の猫　其點は暢氣な風來居士と雖も承知して居る。金權者流から惱まされるのは、實は强烈なのだけれども、間接に來る。金持はまさか大聲に怒鳴り立てゝ喧嘩に來はしない。彼等は又垣根を越えて竊盗に這入りはしない。否、それ處か、勞働者も洋服細民も、一見資本家あるが故に生活出來るやうなものだ。資本家がレールを引いて呉れたので、人々は便安な旅行も出來る。資本家が家を立てゝ呉れたればこそ、雨露風雪に曝されず、どうか斯うか塒に付いて安眠することが出來る。資本家が運んで呉れゝばこそ、居ながらにして佛蘭西の葡萄酒を飲み、南米の珈琲を啜ることも出來るのだ。けれども資本家の供給する御馳走は、日々に需要者の生命を縮め、資本家の提供する住宅は、夜々に借家人の身を細らせるのだ。

金持の犬　では貧民は、どの位風來居士の友として親切だか。風來居士は如何に快く彼等と交際して居るかね。

貧乏人の猫　交際なんぞ爲ては居ない。彼は知己朋友にも年始狀すら書かない男だ。それが何で遠くの貧民と交際を結んだり、又其親切を享けやうとするだらうか、居士は唯一人で甍寝をするのを好むだけだ。

金持の犬　それ見ろ。彼自身が變人なんだ。彼が金持を厭がるのは、貧民を厭がるのと同樣なのだ。結局彼は人間嫌なのだらう。

貧乏人の猫　さうではない。人間は嫌ひだと云つては居るが、客が來れば喜んで話し込む。唯だ彼は面倒がつて交際を求めな

いんだ。轉居をすれば人並に轉居の報知を印刷したりするが、其儘出すのが面倒で捨て﹅置くと云ふ人間だ。だが貧民の多く住む所謂貧民窟は時々華族様が見物に御出掛けになるやうだが、實はそれ程結構な場所でもない。新聞に時々某公爵が家扶を從へて、貧民窟を遊覽されたと云ふ記事が出ると聞いて、僕等は淺草の花屋敷のやうな所かと思つて居たら、飛んでもない違ひだつた。風來居士と共に今度越して行つた家の近くに、貧民窟があるが、途方もなく汚い物だ。居士は野呂間だものだから、其町の錢湯へ行く毎に、虱を背負つて來る。風來夫人は錢湯へ行くと、足袋や紐を盜まれて來る。貧民から加へられる危害は爪の垢ほどの物だけれども、直接だものだから、少しは閉口して居るらしい。

金持の犬　それ見ろ、俺の云ふ通りだ。金持の壓迫にすら堪へられない風來居士が、どうして貧民窟の隣に住むとが出來るものか。居士は口を開けば常に金權の横暴のみを罵倒して居るが、貧民が若し横暴を極める時代が來れば、それこそ居士などは生存することも出來はしまい。一寸錢湯へ行つても、悲觀して歸るやうな知識階級は、此先き貧民が市場や劇場に殺到して、彼等の趣味や要求に從つて、それを支配する時が來たら、唯だ小さくなつて隅つこの方に引込んで居る外はあるまい。

貧乏人の猫　まさか、そんな時代は來ることはないから、心配しなくても宜いよ。有史以來何處の世界に貧民が横暴を逞うした國があるか。如何なる時代にも、如何なる國でも、貧民は常に下積みにされて居る。貧民に花の咲いたことはない。彼等貧しい民衆の呻き苦しむ叫び聲は、空氣のやうに天地間に滿ちて居るのだ。彼等の苦しみの吐息は大地の底にまで泌み込んで居るのだ。

金持の犬　さうか、貧しい民衆が苦しみの呻きは、天地に彌蔓して居るかも知れないが、彼等の歡樂の聲も亦都鄙に洽ねからうとして居るやうだ。少くとも淺草の活動寫眞館や場末の劇場は彼等の趣味性に依て導かれて居るのだ。デモクラシー好みの風來居士も、淺草趣味の天地に彌蔓することには辟易しては居ないかい。

貧乏人の猫　勿論それは辟易して居る。主人は淺草ばかりでなく、大阪へ旅行して、千日前を通つた時も、京都へ行つて新京極を見た時も、もう其俗惡な繪看板だけ見て身の毛が竦つたと云つて居た。然し同樣に貴族的な帝國劇場を見て歸つた後にも、其趣味の墮落を悲んで居たし、箱根へ行つて金權者流の多くの別莊を見て歸つた後にも、矢張り其沒風流を歎息して居た。趣味の下落は啻に民衆の爲ばかりではないかも知れない。

それは一つの時代病ではなからうか。

金持の犬　確にそれは君の云ふ通り時代病であるかも知れない。學士の人殺しが飛出したり、收賄好みの税務官吏が出て來たり、ストライキや、サボタージユの尻押をする政治商人や文筆商人が、出て來るのと同樣に、それも時代病の一つかも知れない。然し其時代病を作つたのは誰れだ。それは多くの民衆ではないか。鐵道院も民衆に媚びればこそ一等車を廢したんだ。けれども、それでもまだ足りないと見えて、民衆は二等車をも赤切符化してしまつた。安氣に便利に心持快く旅行することは不可能になつた。そして何處にも野卑と粗暴と不行儀とが行亘つてしまつた。斯うしてしまつたのは誰か。數多い貧しい民衆ではないか。

貧乏人の猫　いや〳〵、粗暴と野卑と不行儀とを行渡らせたものは、民衆よりも寧ろ成金だ。彼等は其上に輕薄なる奢侈をも撒き散らした。奢侈が罪惡を生み、爭鬪に動力を與へた。そして生活を一層困難にした。

金持の犬　成程、小成金の奢侈は淺薄にして下劣だから惡い。然し奢侈其ものゝ本質は文明の華なのだ。誰も皆一等車に乘れないからとて、一等車其ものが惡いことはない。惡いのなら三等の方が惡いのだ。廢すなら寧ろそれを先にすべきではないか。此分で行くと、人は一等米を溝へ捨てゝ、三等米を食ふことを喜ぶやうになるだらう。綾羅綿繡を捨てゝ弊褞袍を着ることになるだらう。金殿玉樓を燒棄てゝ藁小屋の生活を營むことになるだらう。それでは丸で中古の禁欲坊主の生活だ。餘り咨たれた考へではないか。それよりも贅澤になれ〳〵。生活基調を淺草式にしやうとする官僚的平民主義は餘り賞めたものではないぜ。

貧乏人の猫　僕は一等車其ものを憎くみはしない。一等米其ものを好まない譯ではない。然しながら少數の貴族及金權者流が之を獨占する時に、それは破棄しなければならない汚れた物になる。金殿玉樓や綾羅錦繡を我々が憎む所以は、それが少數者の橫暴を表象する爲であるからだ。社會の不自然な差別を撤廢する手段としては、過去の文明を悉く破壞する底の爆發力を以て、世々の改革者が血を流した。而も其血の中から本當の力の有る新しい文明が生れた。

金持の犬　如何にも君は風來居士の飼猫だけあつて、理窟がなか〳〵達者だよ。だが其文明などと云ふものが實は煩いね。我々には始めから相互の間に差別欲がない。從つて差別撤廢の必要も起らない。それを思ふと人間なんて實に氣の毒なものだ。其中でも貧乏人は一層氣の毒だ。

貧乏人の猫　だが金持だつて近頃氣の毒でないこともない。僕の眼から見ると、人間は實際氣の毒だよ。朝から晩まで餘裕が無さゝうだ。家の風來居士と來ては、間拔だけにぼんやりして居るが、それでも何かそは〳〵と忙しがつて居る。そして時々、「さううつかりして居ては暮せない」などと、こぼして居る。

金持の犬　さう云はれゝば、拙者も同感だね。家の成金大將と來ては、忙しがつて、てんで家に悠くり寢ることも滅多に無いよ。アクセクして金を儲けるが、其儲けた金を又アクセクと使つて居る。そこへ行くと我々はお互に幸福者だね。寢たくなれば朝でも晝でも他人に遠慮はいらない。道傍でも、裏口でも、勝手の所で寢られるんだ。先刻はお互に堅くなつて、文明が何うの斯うの、綾羅綿繍が何うの斯うのと、お互に主人の口吻を眞似て議論して見たが、我々は人間のやうな裸虫と違ひ、生れながらムク〳〵と暖い毛が生えて居る。一文も出さないで駱駝の外套に包まつて居るやうなものだ。自然の御四季施ほど有難い物はないね。

貧乏人の猫　それあ君なぞは何時も暖かさうにして、冬になれば冬の中を驅廻つても寒さ知らずと云ふのだから結構だが、僕なんかは餘り寒い日は困るね。僕のお婆さんなんぞは、よく竈の中へ潜り込んで寢て、屢々下女を驚かしたと云ふが、もう僕の代になつたら、暖い竈は無くなつてしまつた。金屬製の瓦斯竈の上は疊の上より寒い。尤も風來居士と來たら一日大抵寢て暮す男だから、其布團の中へ潜り込んで居さへすれば、此方は寒さ知らずさ。だが時々おぺそちやんの布團へ這入つて寢て居ると、凸坊に發見されて、襟首をつまんで、引張り出されるのには閉口する。

金持の犬　その代り君はいざと云ふ場合には、鼠取の名人だから一人になつても食物に困ることはない。俺は今君等よりも旨い物を食べて居るが、然し若しかして主人が居なくなつたら困りはしないかと心配して居る。掃溜を探して歩くのも氣が利かないからな。

貧乏人の猫　氣の弱いことを云つてらあ。君だつて、一人立の出來ないことはないよ。飼はれたればこそ飼ふ人が必要のやうなものゝ、放されゝば天下到るところに食物は轉がつてゐるよ。一層人間なんていふものが無ければ、我々は苦む代りに、もつと自由に世界を家として遊び歩けるかも知れない。

金持の犬　生意氣を言つてらあ。君みたいな意久地無しが、天下を横行してみたまへ。忽ちブルドックにでもあへば殺されてしまふだらう。時に、君は今度いくつに成つたのだ。

貧乏人の猫　明けて二つに成つたところさ。

金持の犬　なんだ。まだ、君は去年生れたばかりな乳臭兒だつたのか？　それにしては仲々口が達者だ。

貧乏人の猫　そりやあ、頭が好いもの。内のおべそ孃は僕と同年なのだが、まだ何ともかんともおしめにレモン、エローで橙の繪を描くより他には、藝が無い。人間なんて幼稚なものだね。時に君は何才だ。

金持の犬　俺は君よりズツト兄さんだ。恁う見えても今年もう六歳だぜ。明々年、犬の年が來れば本卦歸りだ。俺はもう初老だといふ感じがしてならない。

貧乏人の猫　ふうん。ずいぶん、お前も年寄だな。だが、一體、その戌の年とかいふのは何だい。猫の年といふのは無いのかい。

金持の犬　君も仲々先刻から理窟は達者だと思つたが、あれは風來居士の氣焔の聞噛りで、ほんとうはまだ、何も知らないんだな。俺も委しいことは知らないが、猫の年といふのは、つい聞いたことが無い。今年はたしか猿公の年だとか云つてたよ。時に君は戀をしたかい？

貧乏人の猫　えッ。何？　こひ？　一ぺん喰べたことは有らあ。風來がこひを洗ひにさせてたまさか晩酌しやうとして油斷してゐるところを、ペロ〳〵と片づけてやつたのさ。さうすると、「此畜生め。皆な喰べてしまやがつた。太い奴だ」と風來に怒られたよ。太いにも細いにも御覽の通りだが、チツとばかり歯糞の足し位しか買ひもしないでみんな喰べたもないものだと思つたよ。

金持の犬　あはハハハ……その鯉ぢやないよ。猫の戀のことさ、日が暮れると、屋根へ上つて變な聲を出して吠える奴さ。

貧乏人の猫　そんなことは、まだ經驗が無い。今頃日が暮れてから屋根へ上つても、寒いばかりだらう。

金持の犬　まあ、さう思つて、炬燵にもぐり込んでゐれば、無事なものさ。來年のお正月をする頃は、もうその塀の上なんかで恐らく黄色い聲を出すのだらう。あゝ、いやだ〳〵。本當に、君、今の中が花だよ。お互ひに年を取つちや、面白くはないぜ。それこそ、皆なにバカにされるからな。

貧乏人の猫　でも、君の家なぞでは、禿成金が一等幅を利かしてゐるんだらう。それでも年をとれば、威張れるのぢやないのかい？

金持の犬　威張つてはゐるさ、禿はあれでも氣が若いからなあ。そして自分ではまだ十分若々しいものと思つてゐるんだ。併し店の者でも工場の等でも、皆笑つてバカにしてゐ

るよ。だから妾の今度の一件なんか起つたんさ。人間は年をとると可哀相だぜ。我々だつて同じことだらうが。

貧乏人の猫　でもお正月が來て年をとるのを、人間は皆悦んでゐるやうぢやないか。來るお客は皆な「お目出度う〳〵」と言つてゐるもの。そして風來も亦「お目出度う」と挨拶してゐたよ。

金持の犬　そりやあ、胡麻化しの文句なんだ。皆なだん〳〵年寄りに成るのが辛いもんだから、あんなことを言つて胡麻化してゐるのさ。いくら胡麻化しても、ぢき老人に成るのだから、あんなお祝ひ文句なんか止せばいゝんだけれども、人間て生仲猿智慧があるから、仕様のないものさね。

貧乏人の猫　家の隣では、此お正月になつてから、毎晩おそく迄、多勢よつてワイ〳〵騒いで、息子が鼻の詰つた聲でしきりに何か讀み上げたり、近所の娘共がキャア〳〵金切聲を立てて喚いたり、矢釜しいこと夥しいが、何うしたのだらう。

金持の犬　それは歌留多會といふ奴さ。丁度、お前が來年の今頃、屛の上で夜啼るがそれだ。猫なら戀猫といふところだ。隣の息子つて、何んな男だい。

貧乏人の猫　學生だ相だけれども、學校へなんかメッタに行かない。矢張サボタリストだとさ。でもお隣りの矢釜しい位いゝけれども、近頃家中で喰べる餅といふ奴は、癪の種だね。皆なうまさうに喰べてゐ乍ら、僕には一つも喰べろといはないから、茶目吉の喰ひあましを夜中にそつと、喰べてやつたよ。そうしたら、僕はひどひ目に會つたぜ。恐らく、あんな目にあつたことは、これまで一度も無いぜ。齒へねばりつく、咽へからまる、實に驚いたものだつたよ。

金持の犬　そいつは、面白いお正月だつたな。あハハ……序でにお屠蘇も飲んだら、どうだ。

貧乏人の猫　屠蘇つて、顔を赤くする水のことだらう。あれは變な匂ひがして、僕には口が付けられないが、茶目吉は飲むから感心だよ。

金持の犬　妙なところへ感心したものだな。

貧乏人の猫　でも、風來が、それを見て、大變悦んで「流石は俺の子だ。茶目は酒が飲めるぜ」と、客さへあれば吹聽してゐるやうだから、僕は屠蘇を飲む者は、豪いのかと思つた。

金持の犬　一廉の文明論者も、お正月だけは初めての經驗だから、分るまい。風來さんは年賀狀は出さない相だが、年始には歩くのかい。

貧乏人の猫　うん毎日歩いてゐる。

金持の犬　そりやあ、感心だ。噂のやうでもない。先輩知己

の家でも、歩いて來るのだらう。

貧乏人の猫　さうかも知れない。此寒いのに年末中は、年末氣分を味う爲めだと云つて、毎晩銀ブラに出かけたやうだつたが、尤も正月二三日は家の二階に籠城をして、そこで新年號の雜誌を讀んでゐたよ。そして、細君に「人が來たら、もう今夜は鎌倉の方面へ旅行に出懸けましたと云へ」と云つてゐた。主人のことだから辯解するが、大方心持だけは鎌倉へ行つたのに相違ないのだから、それも丸きりの嘘言ではないんだ。

金持の犬　うそで無いにしても、甚だよくない遁辭だなあ。

貧乏人の猫　いや、併し風來居士は、普段でも、時々地圖を擴げて、物も言はずに一晩中見詰めてゐる。そして、後で、「俺は今夜旅行した」なんて言つてゐる。だから、彼には旅行するといふ事と地圖を見るといふことゝは、同じことなんだ。君、旅行つて、そんなに面白いものかね。

金持の犬　うん、僕は旅行してひどい目に會つたよ。矢張、その鎌倉へ行つたんだがね。一等の汽車でよ。家のお內儀さんが、俺をあけび籠の手提に入れて連れて行つたんだ。そうして蓋を明けてくれないんだ。仲で僕が鳴くと、御內儀さんは上から袂を乘せて、手でトン／＼と叩くんだ。「默つて居ろ」といふのだと思つて、僕は何のことか分らないが默つてゐたよ。後で聽いたら、僕達が一等に乘ると、やかましいんだとサ。バカにしてゐるね。でも、それから、鎌倉へ着いて、目出度く越年したわけさ。又暇があつたら、遊びに來たまへ。

貧乏人の猫　左樣なら、ぢや又、明日遊ばう。

新春劈頭の社會觀、趣味觀

健堂生

其一

新春の趣味は富士山である。吉夢にも、先づ一富士といふ、日本では吉事の象徴は富士山である。必ずしも新春といはず、一年を通じて、好感の對象は富士山であるが、それが新春に於て、殊に、好感を喚起するのである。

年末、年頭、雪、霜の頃に、箱根路を、汽車で經過するのは、日本の風景觀及び趣味觀の中でも、他に、類例を發見し難いほどの快よさと、美しくさとを感ずる。汽車の箱根路は、新日本の精神を表現する一の趣味ある舞臺であるので、新らしい風景觀と、社會觀とが、その中に含まれて居る。舊日本で海を眺めた箱根路の「箱根路を、吾越え來れば伊豆の海や、沖の小島に浪の寄る見ゆ」の歌の趣味を有しないが、その代はりに、富士山と溪谷とを有して居る。當初、鐵道の設計者は、何等の趣味觀を以て經營したのでは無かつたのは勿論であるが、鐵道といふ新文明の利器を、舊るい箱根路の溪谷に穿つた結果が、計らずも、新らしい路と、新らしい趣味とを發見したのであつた。此の新らしい路は鐵道としては、今日に於ては、いろ／＼の點に於て批難もあるが、假令、鐵道線としては、勢力を失ふことがあるとも、趣味より見ては、長く人を魅するに足ると思ふ。

國府津から、濤の音に遠ざかりつゝ、だん／＼箱根路に向つて進むと、右の山の手に、山を負ふた村飛び／＼の家が暖かそうに日を受けて居る。酒匂川の川原を隔てゝ遠山の上から富士山が顏を出す。箱根路の寒い溪谷は、深い霜、雪の爲に、あらゆる樹木が悉く紅葉する、火のやうに紅くなつて居る。「紅葉があるのに雪が降る」といふ光景は、今も、昔も、かはらぬ趣味である。駿河驛、則ち小山町の谷が、尤も美しいと思ふ。趣味の小山町の構圖（コムポジション）は、水を中心として、複雜に、意匠を凝らした南畫である。無數の靑山が參差として出沒して居る。山、峰、岡の間隙は、清新な流水が迸しつて居る。峰といふ峰の間から、

清溪が流れて出て、谷を二分する大きな溪流に流れ込む。そのいづれの小さい溪、大きな溪の流も、瀬を立てて、明珠の砕けて飛ぶしぶきを揚げつつ、潺湲として澄み切つた樂譜を奏しつゝ流れて行く。急潮にかけ渡した橋の下から、更に、また紅葉の小風景が望まれる。溪流の幅のひろがつたところ／＼には、割合に廣い川原が出來て、目の覺めるばかりの磷々たる白石が燦らびやかに光つて居るところもある。溪流を岸づけつつある崕から、思ひ出す儘といふ風に、大、小、おの／＼の機軸を有する瀑布が懸つて居る。紅葉、靑山の幕を打つた水の舞臺である。

其二

これ等の美くしき溪谷の崕の上に、小山の紡績町が展開して居るのが、旅客の心を引きつける趣味である。唯だ紅葉靑山の清溪だけならば、舊日本の南畫に、必ずしも珍らしくは無いかも知らぬが、此の清溪の中に、紡績町が開らかれてある事が則ち新らしい趣味である。

かくの如き清溪を、廣大なる煉瓦の建物、高き烟突、それから勞働者の町が、占領して居る光景が、必ずしも此の風景を俗化せしめては居ない。それのみならず、却つて此の勞働町、及びそれの中に含有する勞働問題、現代の人心を緊張させ切迫せしめつつある社會組織及び問題が、此では美化されて見えるのである。譬へば精巧なる顯微鏡の下に照らされつつある動物の肉片の如く、鏡に映出する圖樣は藝術的の印象を起さしめるのである。若し、此の工場、此の勞働町が煤烟に燻ぶる都市の下町に置かれてあるならば、尋常、乾燥したる勞働問題の對象となるだけのものであろうが、此の仙郷かとも見ゆる清溪を占領しつゝあるが爲に、吾輩は、仙郷にも勞働階級、勞働問題があるといふよりも、これ等の階級、問題が仙郷化せられて見ゆるのである。紅葉、靑山に包まれ、清溪に洗はれつつある勞働町、此の如き美くしき勞働町は、此の溪谷の誇として、旅客の前に提示しつつあるのである。崕の上の勞働町の、錯落としたる、ところ／＼の、自ら小さき一郭を劃き成した住宅などは、讀書生をして思索に耽るべき好書齋として、垂涎せしむるに足るほどのものもある。そして此の溪谷を抱へて居る紅葉、靑山の上に、眞白の富士山が照臨しつつ、すべての光景をして、純潔に、且つ崇嚴なる氣分を賦與しつつあるのである。

吾輩は、霜枯の紅葉の溪谷に置かれたる勞働町を、東窓から、飽かず眺めつつ、切迫しつつある勞働問題を美くしく觀察したいと思つた。

其三

小山町は美くしい舞臺であつた。然し、箱根路の檜舞臺としては、風景觀よりしては、御殿場を推稱せねばならぬ。富士山を觀賞すべき風景地は非常に多いけれども、御殿場は、尤も能く富士山の大觀を盡くすを得るのである。富士山の裾野が遺憾無く、此處では展開されて、神のやうな崇嚴と、處女のやうなやさしさとが表はれて居る。此の打ち開らいた、限り無くひろ〴〵した、毫も捕らはれざる氣分の天地に、此の山が、聳えて居る姿が、人の心を壓し付けるやうな高山の氣分を少しも感じさせないのが、嬉しいと思ふ。此の山、殊に、此の場所に於ける此の山の印象は、「自然」の尊さと、やさしさとを浸み〴〵と味はせる。基督教の牧師が、しば〳〵基督を通して神にといふ事を言ふ、基督を通してといふ一句が、氣に入らない。神は、何者を通ほさずとも、直接で無くてはならぬ、御殿場に見たる富士山は、此の美くしい山を通して自然を讃美せしむべく、人に強ゐては居ないのである。山自らが、沈默したる、神秘の律調を以て「自然」を歌ひつつ、「自然」の尊さと、やさしさとを紹介して居るのである。

御殿場は、やがて、帝都の附近に於ける、趣味の一大策源地となるであろう。

此の打ち開らいた裾野の中に、一本の大なる銀杏樹の、美しく、爛熟したる黄葉樹が峙つて居るのを見たとき、吾輩は、その美觀を讃嘆すると共に、計らず現代を回顧して、「趣味より見たる元老」に想到した。銀杏樹が古世界の遺物で、しかも巍然として殘つて居る唯一の喬木である如く恐らくは、それが同時代の樹木と共に榮えて居た時よりも、殘存時代の今日に於て、更に、その光を添えて、儼かめしき生存振を示して居ると同じく、元老は舊時代よりの存留者にして、しかもそれが若き光榮ありし時よりも、他のもの悉く凋落したる今日に於て、遙に貴き威儼を以て活きて居る者である。銀杏樹が古世界に在りし頃には、或は、更に、より美くしい喬木もあつたかも知れぬが、それは今人の想像に任かせるばかりで、今人はそれを見ることを得ず。今人の眼前に榮えて居るのは、銀杏樹ばかりである。そしてそれが、興味を以て見られつつあるのである。

然しながら他の一面から考えれば、古世界から新世界にまで續いて榮えて、その美くしさを示して居るといふことは、銀杏樹の德であるとも見られる、そのものに稀有の耐久性が賦與せられてあるからだとも見られる。而して此の銀杏樹が古世界の遺物であり、遼遠たる年月の力の積んだ貴さと雅味とを有する爲

であるかも知れぬが、花は光らずとの、その地味な葉が、年晩の霜雪に逢ふて黃葉して、非常の美くしさを示して來る。春榮ある花と雖企及す可らざる、底力のある美くしさを示して居る。。。元老の頭が古るくなつて居ることは言ふまでも無い事として、その甚だしく老衰せざる限り、新進の花の才子が企及す可らざる、地味な、底力のある、人格の輪郭を見せて居る。花のように輝く新進の人物が、舊時代の遺物たる元老に頭を下げて來たのが、最近までも、そうであつたのが、無理でないといふ事を首肯させる點もある。

實に、金葉の鬱積したる喬木が、燦爛たる影を、此の廣い裾野に落して居るとき、殘れる舊時代の力を思はしめるのである。然し、霜天に輝く銀杏樹の美くしさは、何時までも、その美くしさが續くべく見えて、その飛散すべき時機の到來するは、案外に急なるものである。秋の夕榮が桔槹落しに傾むくようであろう。しかし銀杏の葉は凋んで落つるのでは無く、散つて飛ぶ。若い草木の多くが凋落するのとは違う。

其四

夢といふ事に就いて、少しく考て見たい。

世人は、新春に夢を說く、夢を以て、その年の運をトうのである。年の始は、理想を、自由に養ふべき時であるのに、夢によつてトうといふ俗習が長く行はれて居たのは、これも日本人が「理想の國民」に非る事の、一の趣味多き證左とすべきものではなかろうか。

夢に就いて、吾輩は、故人坪井正五郎博士を思ひ出す。彼は、夢に趣味を有した人で、また非常に多く夢みる人であつた。曾て、彼と、夢について話したとき、彼は、一ケ月の中に廿五六回以上、夜、夢みた事があつた事を話した。それも唯一回の記錄ではなく、それくらゐに多く夢みることは珍らしくないので、つまり一年の大多數は夢みる習慣を有する人であつた。此の事實は、吾輩を駭かした。吾輩の如きは、彼が夢みざる日數より夢みる日數が少い。吾輩から見ると、彼の如き多く夢みる人は、恐らくは病的では無いかと疑がうのである。世上にも、彼の如き、夢の多い人は、稀であろうと思はれる。彼は、隨分、瘠せて居たが、なか〳〵健康で、病氣に罹つて休むといふようなことは少なかつた。その點から見ると、彼の方が、吾輩よりも健强者である如くに見える。しかし彼の瘠せて居た理由が、腸胃の弱い爲であつて、その爲に夢みることが多かつたのかも知れぬ。その性質も、神經過敏に屬し、精神過勞の爲に、夢みることが多かつたのかも知れぬ。夢みることの原因は、よくは分らぬが

兎に角、事實に於て多く夢みる人であつた。夢も習慣になるのであろう。もつとも晩年に至つては、夢が稍、少くなつたといふ話であつた。吾輩が夢の話をした知人の中では、彼ほどに夢の多い人は無かつた。

　彼は、夢に就いて、驚くべき意見を有して居た。少くとも、吾輩の爲には驚くべき意見であつた。彼は、次の意味の事を話した。それは、人は、平生、恐らくは夢と實事を混同して居るであろう。混同して居ない人は少かろう。夢と實事との混同は、髣髴たる水天と同じく、その境界が判然せざることがある。そして人は、往々、夢の記憶を實事の如くに記憶し、それと反對に、實事を夢のように印象して居る場合が少くはない。その結果として人間の歴史といふものは、夢と實事との印象を混同して居ることがあるだろうといふのであつた。そして彼は、それを洒落ではなく、極めて眞面目なる態度を以て話した。それから、夢と事實との混同を信ぜざる世人を、却つて不注意であるように思つて居るような様子を見せた。

　吾輩は、坪井博士の、夢に對する意見を信ずるわけに往かなかつた。いろ／＼の點から質問を試みた。夢と實事とを混同するのは、こどもである。夢から驚きさめて、泣いて居たり、呼び醒まして見ても、それが夢であつたといふ事が、容易に氣附かぬ場合もある。それから夢の記憶を辿つて、それを實事として印象して居ることもある。しかし、それ等は、皆、こどもの時の事である。おとなになれば、夢の中で更に夢を見たり、夢で驚いて醒めるぐらゐのことはあろうが、覺めてからも、夢と事實とを混同して居るようなことは無い。それが、夢から見たるこどもとおとなとの相違である。壺阪の浄瑠璃にいへる「夢が浮世か、浮世が夢か」などといふのは、文學的の感想であるので、眞に、夢と事實とを混同して居るのではない。それであるから、夢のようなといふ。十六年は一夢といふてあきらめる、夢と思へばこそあきらめられもする、實事と思ひつめては、悟つた熊谷蓮生坊もあきらめが悪るいのである。それから夢と實事との印象を混同させる子どもが、成長した曉までも、その印象を保持するものであるならば、少年の時の歴史は、眞、夢、混同するかも知れぬが、子どもは、その頃の事を、成長するに隨つて忘れて仕舞うものである。吾輩は、如上の事を彼に話したが、彼は頑として聽かなかつた。彼は、どこまでも、その所信を守つて居た。彼の態度が、餘りに眞面目であるので、彼に對する質問は、一先づ打切りにした。

　それから後、長らく、彼の晩年に至るまで、吾輩は彼を識つて居たが、夢の話は、それきりで終つた。彼は晩年までも、果

して、如上の所信を守つて居たか、どうかは分らない、恐らくは意見は渝はらなかつたであろうと想ふ。

彼は、一時、夢の記錄を作ろうと試みたことがあつたそうだ。夜、ねる時に、枕頭に鉛筆と紙とを置いて、目がさめたときに夢を記しておいた。はつきりと普く、遺漏無く覺えて居るのもあれば、大部分を忘れたものもあつたが、全く忘れて仕舞つたのは無いといつて居た。

彼が、かくの如く毎晩、努力して夢を記したどいふ事が、彼の夢の意見には少からぬ關係を有して居ると思ふ。彼は、多く夢みる人であるから、夢に親しむようになり、夢を書くといふことにもなつたであろうし、夢を書いたのが非常に夢に親しませたのである。夢を書くといふ事は、非常の努力であると思ふ。若し吾輩でも、突然として、このような事を企てたら恐らくは、その爲に神經衰弱になるだろうと想はれる。多くの人は、そうであろうと思ふ。

其五

古詩人の詩集の中には、夢を書いたものが少くはない。なかには夢の詩を澤山作つた人もある。そういふ人は、定めて餘ほど、多くの夢を見た人であろう。夢の中で得た文句や、詩の一節などは、すべて夢がさめると、霧が消えるように忘れて仕舞うものである。それを、詩人の中には、長篇の詩を夢の中に作つて、それを一句を落さずに覺えて居て書いたといふ人もある。此のような人は、恐らくは坪井博士の如く、夢に親しみ、夢に趣味をもつて居た人であつたろうと思う。

夢のような話は、澤山ある。殊に、支那人の隨筆には、そういふ話が多い。初の中は珍らしくて讀むが讀みなれると、馬鹿々々しくなつて來る。しかしその中の傑作には、趣味津々として、いつまでもおもしろいのもある。孀婦が筐の中で蠶を飼つて居たが、それがあがるには未だ少し早いのに、桑葉を食ふことを已めて、首をあげて起たうとするようすを見せて居る。それから數日間、孀婦は病に、臥た爲に、その儘に、放任しておいたが、病が癒えてから、筐を開けて見ると、中から數十の小さい美女がはい出て、梁に傳はつて、何處ともなく往つて仕舞つた。蠶が美女になつたといふのである。猿の話の中にも頗る奇拔なのがある。或ところで、術士があつて、卜筮に長じ、能く未前の事を話す、毿々たる白髯の好翁であるが、それを、確に、老猿の精であると看破した人があつた。或時、卓の下に、花火を仕掛けて、その道火線を隣室に通じておいて、そして此の老術士を招いて、いろ／＼の事を問いた。術士といふ者は、

すべて、人の事は分るが自分の事は分らないものである。頃合を計つて、主人が合圖をすると、花火が卓の下で爆發した。老術士は驚天して通を失なつた。うづまく白烟の中から老猿が飛び出して、梁上に躍り上つて、主人の不人情を罵つたなどは、隨分、よく出來て居る笑話である。

支那人は、何物にも、皆、精ありと信じて居る。その精なるものは、人格化せられて居るのが趣味のあるところである。隨つて金、銀にも、また精ありと說いて居る。金人、銀人が尋ねて來て、小錢が無いからといふので、舟賃を借りたなどといふのも興味が深い。近來の日本の如く小錢が拂底して來ると、やがて金人、銀人が古墓の中から幽現して來るかも知れぬ。

支那の小說には、金山の事を記したものの中に、大なる金山があつて、黃光、爛然として輝いて居る。地下、若干尺まで金、その次の若干尺が銀で、その次が銅、鐵、錫といつたように、順次に、排列されてあるように書いてあるのも、無邪氣な夢の話である。支那人は、屢、精煉されたる金銀が山中から出るように說いて居るのは、こどもの話のようである。やはり夢に近いといはねばならぬ。金牛、銀牛の古小說、則ち、金牛は金を、銀牛は銀を脫糞して行く、脫糞が皆、純なる金、銀塊である。そして此の牛の行くや甚だ早い、前をあるいて居るようでも、後からは到底、追付き得られないのである。此牛を得た者は、固より、皆、豪富を致す。牛の腹中に金銀山があるからである。そして此の牛に行き逢つた者が、それが金銀牛たる事を直覺して、すぐに前から捕へるのでなければ、此の牛は手に入らないと說いてある。希臘の機會といふ獸の話にも、少し似て居る。而して希臘のに較べると、支那の金銀牛の方が、的面に有利でもあり、話としても雅味が多いように思ふ。

支那には成金の話は多くあるが、此の金銀牛の如きは、古今東西に稀な成金話である。しかし、多少、寓意の小說のように思はれないでもない。

其六

夢の話は暫らく措き、金銀牛から、吾輩は、佐渡の瘠牛を思出す。瘠牛に就いて緊切なる話をし度い。

佐渡の瘠牛は、今、大に瘠せて居る筈である。佐渡の北海岸、文化の後れて居る地方が海府である。佐渡には、多くの文學藝術が保存されてあるにも係らず、海府は荒凉たる別世界である。その海府が瘠牛の國である。牛といへば肥滿して居るものと思つて居た吾輩は、海府を旅行して、牛の小さくして、且つ瘠せて居るのに驚いた。その原種は但馬牛で、柔順にして、能く困苦

缺乏に堪え得る眞性を有して居る。海府人は、牛を飼ふのに、牛小屋を設けない、海府の牛は、家畜でありながら全然、放牧の牛である。彼等の許されたる繩張の山林、野原の中で草を食ふて、自活して居る。換言すれば、彼等は給金無くして使はれ、報酬無くして勞働しつゝあるのである。足尾や、日立鑛山の騷動のあつた此頃、これ等の痩牛を可憐に思ふ。牛の群には未だ勞働問題は起らないのである。然し關西、九州などの逞しき牛が、海府に於ける如くに放牧して、自活せしめて、そして海府の痩牛の如くに、善く使はれて勞働すべきやは問題である。此の意味から見れば、海府の痩牛は、後れたる牛である。

然し海府人が此の牛を使役するのを見ると、頗る悠長なるものである。牛に鼻綱が無い、鼻綱の無い家牛は、他の地方には見當らぬ、牛といへば鼻綱、馬といへば轡である、その要件たる鼻綱が無くして、それで十分、柔順に勞働して居る。牛の體の幅の廣い胸に、細い綱を引掛けて、婦人、少年と雖、一時に、二匹くらゐの牛を使役する。牛を使ふ懸聲が極めてのどかに聞える。關西、九州で聞くような叱咤の聲、荒々しき調子は到底聞かれない。そして阪路を登るときなどには、人がわざ〳〵牛の荷物を輕減して、牛の荷物を人が背負つて登る。牛に報酬を拂はぬが、牛を愛して居る。人と牛との間に主從の恩情が見えて居る。

此の後れた牛を愛して居る海府の文化も亦た著るしく後れて居る事を象徵するものは菰風呂(コモフロ)である。菰風呂と云ふのは、据風呂である。臺所の隅土間などに木の据風呂を据えてその上から菰の屋根を釣り下げてある。此の風呂で湯をわかすのではなく、わかされた熱い湯を汲んで、一人、一人、入浴する毎に、二升或は三升位の湯を入れて、浴者は、風呂の中に、踏臺を置いて、その上を踏んで、蹲まりつつ、手拭を以て、湯をからだにかけては洗ふので、入浴といふけれども實はからだを洗ふだけのものである。字面の通りの洗湯である。入浴のたび毎に、熱湯を注入するといふ事が頗る危險なる事實で、それに由つて、屢、人道問題を惹起することがある。彼等の土間に、燈火の設備が不十分で、因より未だ電燈は無い。暗い土間の隅で、菰をかぶつて、風呂の中にうづくまつて居るのであるから、入浴者は、鼻唄でも歌つて居なければ、その存在を認められぬことがある。それも、おとなであれば、菰をあけて見たとき、おぼろげながらも、存在を認められるが、こどもが、おとなしく小さくうづくまつて居ると、居るか、居ないか、分らなくて、次の人が熱湯を、頭から注ぎ込むことがある。その爲に、過失致死の慘事は、一年に、四五箇以上は出來る。最近の新聞にも、菰風呂の中にうづくまつて居る隣家のこどもの頭から二升の熱湯を注いで、重傷を負はせ、

翌日、つひに不歸の客とならせた爲に、過失致死として罰金三十圓を課せられたといふ事件を發見した。孤風呂の存廢は、全く、人道問題である。

孤風呂は、昔は、佐渡の全國にひろまつて居たが、近來は、殆んど、唯だ海府に殘つて居るばかりである。孤風呂で表はされる海府人の文化は、その生活に於て、驚くべき低級のものである。固より風呂ばかりが後れて居るのでは無い、近年は、內地式の据風呂を用ひて居る者もある、試みに孤風呂といづれが可いかと聞いて見たら、それは据風呂が良いと答へた。

孤風呂と瘠牛とは適さはしいものである。それが人道問題であると雖、一概に、急に、これを全廢せしむることは困難である。都市に於て、家屋の改良の强制す可らざると同じである。されぱとて、自然的の改良に任かせて置くべき問題では無い。頭から熱湯を掛けられて死ぬるこどもが年々あるといふ事實は熱風呂の全廢を促進せしむべき大切なる動機である。吾輩は想ふに、救世の事業といふは、唯だ、都市の貧民を救濟するばかりでは無く、片田舍の子どもを救濟せねばならぬ。併せて、その瘠牛をも。

其七

勞働から見たる世態、人心の變遷も亦た興味あるものである。

維新前、舊幕府の刑法では雇人と被傭人、主人と奉公人との道義的關係は主從に準じてあつた。主從といふ二字が社會組織の根本義であつた世の中に於ては、かくすることが、必要であり、かくせねばならなかつたのである。それが徹底的に行はれて居たのは薩摩であつたと思ふ。此の國では、奉公人、殊に士族屋敷の下女の如きは、履物をはかず、夜も疊の上には寢ないといふ有樣であつた。戰場に於ける、武士道が奉公人に適用せられて居たのである。薩摩は士族の國といふべく、今日に於ても勢力は士族に存して居る。「御維新のおかげで士族に蹴られるようになつた」といふ俗說があつたくらゐである。その意味は維新前ならば、士族に對して、百姓町人が無禮をすると、斬捨御免で、しかもそれが能く行はれて居たのであるが、御維新後に至つて、斬捨は出來なくなつて、蹴られて濟むことになつたといふ事である。固よりこれは明治以後今から三四十年前の事であらうが、それにしても、薩摩の國情は推知するに足るものがある。士族は薩摩の地方粹であり、その數から見ても、此の國ほど士族の多い國は無い。維新後の政治史に於ける所謂薩閥の勢力を築き上げた地盤は、その兵力であるが、兵力は則ち士族の數である。士族の多いことに於ては、長州も土州も肥前も、遙か

に薩摩には及ばない。士族が社會組織の中心である此の國に於ける奉公人は此の如くであつた。最近に於ては、世態も頗る變遷して居るが、それにしても、他地方に較べれば、まだ〳〵當年の面影が殘つて居るといひ得るであらう。

九州の中に、竹田、南畫の畫聖竹田の出生地、即ち昔の岡藩に於ける士族の奉公人も亦た薩摩に對照して語るべきものであつた。竹田は小藩であり、隨つて士族の祿高は概して小さかつた。その割合に、奉公人を使用することが多かつたようである、吾輩は、先年竹田に遊び、その舊藩時に於ける士族の生活を研究して、文明史上、研究の好舞臺たることを想ふた。藩の城は、山上にあるのは少くはないが、舊藩主は山上の城に生活したのでは無く、山上の城は要塞であり、そして城主の館は、概ね山下に設けられてあつた。然るに、竹田に於ては、藩主が山上の城に住居して居た。奥御殿の遺址なども、皆、歷々として殘つて居た。一箇の豆腐、一尾の肴でも、皆、山下から運ばねばならぬのであるから、その不便、推して知られる。此地では、藩主ばかりで無く、すべて町が溪谷の間に出來て居るから、藩士も山上の生活をして、居た者が少くはなかつた。中にも有名な勤王家の小川彌右衛門(名は一敏)の遺宅なども、けはしい山の巓にある。その井戸が、また珍づらしい絶壁に設けられてある。天下、稀有の井戸である。普通の場合に於ては宅を相するのに、先づ井戸を考へるのであるが、小川氏の井戸は、山巓の住家より一段、低い崕に作られ、しかもそこから井水が湧き出るのでは無い、井水は、その眩ゆき崕の下に在りて、崕の上から水を汲み上げるので、崕には井筒が設けられてあるが、汲み馴れない者には、此の井水を汲み上げるのは、頗る危險的努力である。長い生活の間に、水を汲み上げる爲に墜落して死んだ者もありはしないかといふ疑問が直ちに觀者の頭に浮ぶ。これほどの冒險的の汲水を敢てしてまでもかかるところに井戸を作らずとも可さそうなものと考へられるが、山巓に家を造つたのは、武道に本づいたので、崕の上に井筒を作つたのは、モウ一段低く井戸まで下りて汲むのは、大分の廻り道になるからである。山巓には井戸が無く、この井戸が此の家に最も近く發見せられたのである。若し生活の便宜からいふと、此の山上生活の住宅は、此の井戸の附近に作らるべきが、當然であつた。

此の如き奇異なる生活の遺跡を見た時に、吾輩は、直ちに、汲水の實地に從事した下女、下男の勞働を考へた。然るに研究の結果に依れば、此の如き勞働に從事する下男は、農村から徵發した壯丁であるので、無給金である。此の藩の士族には、それ〳〵俸祿の高に應じて、壯丁を下男として徵發するの數が定

められたので、無給金の勞働者を有するから、此の如き、危險なる汲水を敢てせねばならぬほどの山上生活にも、左までの不便を感じなかつたのである。そして小川氏は家老でもあつたから、その家格に準じて數人の徵發下男を有したわけである。

　高祿、もしくは多人數の家庭に於ては、これ等を必要としたであらうが、小祿若しくは小人數の家庭に於ては、下男を必要とせざる向もあつた。一方、徵發せらるゝ壯丁から見れば農事の働時節を空しく奉公せねばならぬのみならず、自家の生産に大影響があるのであるから、寧ろ、勞働の代はりに費用を納入して徵發を辭しても可いといふことになる。その他納額で、他から下男を雇入るべき筈であるが、徵發者の方からは、その代納金を取つて、別に、下男を雇入れないで、却てその金を以て自家の生活費の一部を補助して居たといふ小祿の士族も少くはなかつたといふ、話である。

　徵發下男は一種の徵兵であり、その任務は、全く、家庭的の從卒である。代納金を取つて、そして、代はりの下男を雇入れない侍は、公式に、仲間を必要とする時のみに、臨時に、日雇男を傭うて、その場をすまして居たのである。此の藩の制度で見れば、徵發下男は、その主人たるべき侍の爲には一種の收入たるを失はざるものである。仲間を雇はねばならぬところを官給されるからである。然し、徵發せらるゝ壯丁に取つては、常の苦痛であり、支出であることは言ふまでもない。岡藩は、租稅の外に、勞働をも徵收したものといふべきである。

　勞働の徵收が行はれたといふ事、則ち徵發下男は勞働より見たる封建制度の象徵であるといひ得る。封建時代に於ては、傭人、被傭人の關係が、階級的に組織され、道義的精神を以て支配されたのである。維新の改革は、此の制度を打破して半世紀の世運を經由して今日の勞働問題にまで進み、如上の岡藩の一例に示す如く、勞働の中に武士道が行はれて居たのが、一變して世界的になつたのである。

其八

　推理の人と、趣味の人とある。推理と趣味と兼ね備へて居る人もある。元來、推理、科學と、趣味藝術とは反照するものであるが、一つの人に、それが備はるといふ事も、決して矛盾したる事實ではない。推理も、趣味も、ともに一つの心の働らくのである。

　久しぶりで小川芋錢に面會した。彼の趣味は、河童である。彼は牛久沼のほとりに住つて、そして沼に、眞に河童が實在すると信じて居る。彼の爲には、河童は、傳說の趣味では無く、

一つの確實なる、智識であるらしいが、然し、彼も、全く、未だ河童の實物を觀たことは無い。彼は好んで、屢、河童を畫くが、吾輩の見た中では、群游する河童を描いて、その上に、家庭と題したものが傑作であつたと思ふ。彼ほど、河童を美化して考へた人は、畫家の中にも、文人の中にも、昔から始めてだろう。鳥山石燕は妖怪畫を好んで畫いて、その中には河童も、固より畫かれて居るが、何等、新機軸の點も見出さない。芋錢の如くに、河童に憧憬して居る者は、趣味の人として、未曾有である。支那流に言へば河童は沼の精である。芋錢は、そういふ風に考へて居るらしい。然し、彼の考では、支那に所謂、精なるものの定形の無いものとは違つて、實在の定形を爲せるものである。

吾輩は、先きごろ西游の旅中に、帆足萬里の隨筆を讀んで、その中に奇拔な河童の記事があるのを發見して、直ちに、芋錢を県出して、その原文を寫して郵送すると、早速、返書が來て、頗る珍づらしい河童であると書いてあつた。面會の際、話が、その事に移つた。芋錢はいふ、萬里の記事にある如き、恰も、龜のやうに首を胴の中に引込ませるといふ、河童は極めて珍づらしい、始めて見た記事である。自分はそれに由つて、河童と龜との雜種のようなものを想像して畫いた。それから彼は、萬里の隨筆に挿畫が無かつたかを、吾輩に尋ねたが、吾輩は、自筆の原本を見たことはあるが、それには挿畫は無かつた事を答へた。芋錢は更に、印幡沼から先年、發見した河童の古骨に就て話し、自分は、河童の研究は一生續けるつもりで居るといつた。

芋錢は、飽くまで趣味の人であると、吾輩は思うた。然れども彼は畫人であるから、それもつともの事であると思つたが、帆足萬里は、科學の人である。彼は漢學者であるが、その長所は推理力であるので、彼の大事業は、蘭書を獨力、研鑽して、浩瀚なる物理學を譯述したことである。それほど推理に凝つた人であるのに、その隨筆を見ると、怪力亂神を語つて居ることが割合に多いのは興味ある事實である。河童の記事もその一である。その外に、いろ／＼の怪異の傳文が、眞面目な漢文を以て書かれてある。彼は、書に巧であるけれども、畫は能くしなかつた。若し畫を能くしたら、定めて、文中の怪異を畫いておいたろう。

九州の不思議は不知火である。不知火は萬里の科學眼を漏れることは無かつた。彼が不知火に關する研究は、いろ／＼の條件を列擧し、結局、不知火は發光蟲の作用たる事たることに論結して居るが、科學的説明として見るに足るべきものである。

從來、日本の學者では、不知火の研究を試みた者は萬里を以て嚆矢となすであろう。漢學者の中に、此の如き科學的議論をした者は無い。萬里は、世の中に不思議は無いと信じて居る。不思議といふものを、研究、說明しようと試みて居る。彼は、全く、科學者である。此の如き科學的の萬里が、趣味の河童を、まじめに傳へたのが、興味ある事實ではあるまいか。

萬里は科學者にして趣味に富み、理窟屋にして、放談を好み、怪力亂神をも語る人であつた。名人の庖刀の前には惡魚無し。怪力亂神は唯だ推理の好題材に過ぎざるものである。譬へば怪力亂神は料理の中の惡物喰のようである。料理通の中には、往々、めづらしい六つかしい趣味の食物を探して喰べるものがある。孔子は怪力亂神を語らずといへば、その一事だけでも、その風格は推知するに足るのである。

其九

今世の隱君子の一人は本多錦吉郎翁である。野に隱君子あり、壽にして康なるは、聖世の祥瑞である。

彼は、油畫に於ては、現存者中の元老である。年、七十一。その樸實なる容貌に、その精神は表はれて居る。彼は維新の前年、十六七歲の時、長州征伐に、藝州にて從軍したといふから、武士敎育を受け、干戈の間を經過した人である。彼の態度に昔堅氣の、極、律義なところが見えるのは、彼の天禀ばかりではなく、その少年時からの修練にも依るであろう。油畫が日本に傳はつたのは、明治以前の事實であるが、それ等は、皆、いはば間に合はせの藝術であつた。正則の油畫とでもいふべき新藝術を、歐洲から齎し歸つたのは國澤新九郎であつた。此人が銀座に彰技堂を創めて弟子を敎え、竹川町で油畫の展覽會を開いたこともあつた。日本に於ける最初の洋畫展覽會である。煉瓦通りの、新橋に向つて行けば左側である、小さな煉瓦屋のせまい二階に、雜然と油畫をならべたのであつたが、此の時、本多氏の小さな靜物畫が三圓で賣れた。その頃、洋畫の三圓といふは珍づらしい價格で、また今日と違ひ、三圓の金も固より貴かつた。彼が畫料を得たのは、此の時が始めてなので、それが比較的高價であつた事は、彼自身及び同窓の友人を刺激したそうだ。然し、當代の錚々たる新藝術が三圓といふのは、今から思へば隔世の感がある。その時の彰技堂は、煉瓦通りの變遷の爲に、分らなくなつた。展覽會は彰技堂の二階で開いたのである。

銀坐に彰技堂を置いたのは、一つには世間に向つて、此の新藝術を知らせる爲であつた。それで通行の紳士なども、好奇心に驅られて、立寄つて見て、その序に、展覽の畫を觀るといふ

わけであつた。展覽會は、殆んど常設の有樣で、今日の如く、一年一二回、盛大なる臨時の展覽會をするのとは意味が違つて居た。伊藤公なども、來て見たといふ事である。本多氏の畫を買つた人にも、新藝術の趣味が分つたか、分らぬか知らぬが、半ば奬勵の爲といふ意味で購つたものであるといふ。

國澤氏は肺病の爲に早く沒したが、沒するに際して、彰技堂の前途を本多氏に托したのは、秀吉が秀頼の傅役を片桐且元に托したと同じで、人物を識るの明があつたと思ふ。爾來、四十年間、本多氏は彰技堂の看版を守り、極めて敬虔なる態度を以て、先師の遺志を繼承して居た。油畫が時運につれて盛大になつて、彰技堂の名は顯著ではなくなつたが、彼が薫陶した藝術家は欝然として多きを致して居る。舊冬、彼の七十の壽宴を、大森の望翠樓ホテルに開かれたが、附近の邱陵、雜木林の田舍びた雅びやかな氣分が、此隱君子の風格、閲歴を讃美するには、適はしい背景であつた。

斯翁は、新油畫の歴史の活ける記錄である。此の意味に於ても尊重すべき隱君子であると思ふ。日本畫の歴史の初期は詳かに分らないが、油畫の歴史は、今日に於て調べて置けば、その第一頁から、委曲に分るのである。おほよそ歴史には、微細な事實が載せられて、省發すべきものが無ければ、後世から、實況を目睹するように思はせることはできないのである。單に、系譜のような歴史、傳記は、生理の骨骼標本を見るような味のものである。維新前後から發生した油畫の歴史を今日に於て研究すれば、その大系から微細の事實に至るまで、調べて網羅することが出來ると思ふ。

其十

吹雪の荒れて居る空を、とぢ籠めた窓の下で、靜かに、火鉢を擁して、筆を執つて居ると、山陽が鐵瓶の湯氣の湧き騰るのを眺めて阿蘇山の噴烟を聯想したといふ事を思ひ出す。小室の中、閑かに、天下の山川を、思ひまはして空想に耽つて居るのも、愉快である。

寫山樓の雅號を以つて標榜し、名山圖會を著はした文晁は山の精神を捕へることに於ては、未だ、成功して居ない、形似は得ても、神似は得ない。名山圖會も、單に課題の作、畫室の作としては巧いものであると想ふが、吾輩の游歴して目睹したところと較べると、名山の靈は、文晁の筆には、憑つては居ない。恐らくは形似の上から見ても成功したものではない。此の圖會の中に、陸中の岩手山は、初には、文晁の弟、元旦の作を挿入したのであつたが、山形が似て居ないといふので、後には、文晁に

依頼して、改めて畫いて貰つたのが卷尾に附してあるが、吾輩は、それも善くは似て居ないと思ふ。山岳を畫く者は、神似を得ざるものは、併せて形似をも得ない。山岳畫の泰斗は大雅堂である。大雅堂は山靈と共鳴して居る。

日本アルプスの畫趣に著眼した先驅者は大雅堂であるといひ得る。彼は、アルプスの山巓をも攀ぢた。屢高山に登つた。山靈と共鳴するには、やはり時々、高山に登攀するが可い。山を畫くに、唯だ遠くから眺めるばかりでは、山靈と親しまない。文晁は眺める方で、登る方ではなかつた。大雅堂と文晁とは、性格も違ふけれども、畫のかき方も違つて居た。山を畫いた大雅堂と文晁との相違は、山に親しむと親しまないとの差別があるので、大雅堂の筆端には、山の氣分が表はれて居る。

山陽の風景觀は小さかつた。妙義山を推稱して關東第一とし、後に耶馬溪を稱揚して、海内無雙とした。耶馬溪山天下無の一句がある。

妙義山も耶馬溪も天下稀有の絕景たるには相違無いが、その景は、ともに小さい。彼は山水の大風景を觀て居なかつた。千山萬岳の壯觀は信州である。殊に、秋來、あらゆる萬木悉く紅葉して、國を擧げて千山萬岳、悉く紅葉するのでさえも、紅葉國の大風景であるのに、その背景に、眞白な日本アルプスの雪の連峯が高く頭を擧げて居る。山陽は日本アルプスの大觀を知らなかつた。山岳觀に於ては、山陽は大雅堂に及ばなかつた。山陽は、隨分、旅行も好きであつた、然し彼の共鳴した山水は、皆、大きくないと思ふ。彼は瀨戸内海を、屢、舟行したのに、彼には、瀨戸内海の大觀を歌ふた詩は見えない。彼は、備後の尾道にも淹游したことがある、此の附近は、瀨戸海の中の、尤も明麗な一帶だと思ふが、山陽には、それに關する名作は無い。妙義山、耶馬溪は、ともに小さいけれども、其の奇峭なる風景の氣分が彼と共鳴したのであろう。瀨戸海の明麗なるのには、廣島の人たる彼は、生れながらにして馴れて居るから、明麗には驚かない。奇峭は、彼を刺激した。そして彼の、つねに賞讚するのは、大風景ではた無く、部分的の、よく纏まつた小風景であつた。風景の氣分は、奇峭、閑雅などを好んで、豪宕、雄偉のものは、彼の得意では無い。大雅堂と山陽と風景觀の異なるは、たとへばその字の如くであつた。山陽の書は才華流露して居る、大雅堂のは、豪宕な、飽くまで伸び〳〵して居る。

大雅堂は中津の自性寺に滯在して、一室の襖に書畫を描いた建物を、その地方では、大雅堂といつて居る。必ずしも代表作では無いが、これほど大雅堂の畫作を一室に集めることは六づかしい。此の時の滯在は、寺僧の晉山式の際に大雅堂は、その

禪友であるから、誘はれて京都から同伴して來たので、滯在は長かつた。寺より外に、彼の書も畫も、舊家に殘つて居る。此の長逗留の間に、山水癖の彼は、必らず耶馬溪を一見したであらうと思うが、彼は、此の溪山と共鳴するには至らなかつたと見える。山陽の心友たる竹田も、耶馬溪を觀たが、山陽の如くに心醉しなかつた。竹田の郷里が、耶馬溪のような奇巖、淸流とで組織せられた溪谷であるから、山陽が尾道に刺激されざる如く、竹田も耶馬溪には驚かなかつた。竹田は却つて九重山に心醉して、自ら九重仙史と號して居る。九重山は阿蘇山系の最高峯で、阿蘇よりも約二千尺高く、九州第一の高山である。阿蘇の噴烟は無いが、その豪宕な氣分は、天下の名山といふべきである。山陽は、木枯らしの吹きすさぶ寒い時に、その山腹をかごに乘つて通過した、此の山靈と共鳴するに至らなかつたが、一篇の詩を作つて、中原を望む心地がすると書いて居る。壯快の印象を得たことは疑無い。此の九重山を、豐後の人は、今、九州アルプスと稱へて居る。

大雅堂と竹田とは、吾が南畫に於ける、眞摯にして敬虔なる二大家であるが、竹田は天性、弱質にして、高山に登らず、それに眼病に罹つて、眼も亦非常に弱く、一時は失明の危機に瀕したこともあつた。彼と大雅堂とは自ら、山岳畫の領域が違うが、若し彼が健軀、健眼であつたら、その畫も大分、異なつた氣分を見せたであろう。大雅堂は、健軀、健脚である。その屢、日本アルプスの連峯に登攀したのは、彼の畫趣を養ふと共に、その書の精神を鼓舞したに相違無い、彼の書も畫も、山岳に自得して居ると吾輩は思ふ。それに大雅堂は禪を好み、白隱禪師の感化を受けて居る、大雅堂と較べると、多くの人の書畫は、その精彩を失うて、見られぬものであるが、自性寺の大雅堂の一室に、白隱の畫を掛けて見たときに、彼の精神の强いあとが善く分る。白隱の畫に、決して大雅堂に遜色無いばかりか、氣魄、却つて他を壓倒するの慨がある。白隱の遺像といふものに見えた彼の表情は驚くべき、獰猛にして奇偉なるもので、白隱の全人格が見えると思ふ。白隱が大雅堂に與へた影響は、その畫、その遺像を見れば分る。

大雅堂は禪に親しむこと山に親しむが如く、山陽は、禪を眺めること、山を眺めるが如くであつた。

其十一

日本アルプスに對して、水郷の趣味を憶ふ。水郷は、表日本で利根川、裏日本では信濃川の流末である。利根川の潮來、霞浦佐原附近は、水郷趣味の尤も濃やかな地方で、その地方の

心舞臺ともいふべきは新島である。新島は、利根川の中に出來た島で、その開墾は今から約三百年前、家康の時で、眞に蘆荻を以て培養した新島ともいふべきである。堤防で、めぐらされて、島の地面は、利根川の水よりも高くない。滿潮の時には、川の水が島に流れ込み、引潮の時には、島の水が川に流れ出る。その出入の水は、瀬を爲すのであるから、水門を設けて、島の水量を調節して居る。そして島の中では、棊盤の罫線のようなといふよりも、モウ少し細かい、木の葉の纖維のように、大溝小溝が遍ねく疎通して、島の人は、皆、小舟を操つて行く。隣家に行くのも舟である。水が道路で、舟が履物である。日本の和蘭ともヴェニスともいふべき水鄕趣味は此の島である。潮來の十二橋といふのが、昔から有名であるが、それは潮來では無く、對岸の此の島の中にある。

ヴェニスは繁華の街であるが、此の島は、極めて閑かで、呑氣で、伸び〱した田舍氣分で日を送ることを得る。島を出れば大江が横はり、平原を望み、島の空は、高くて自由である。杜甫の詩に、天地一沙鷗といふ句の氣分は、此の島の生活に表はれて居る。此の水鄕に使用する小舟をサッパ舟といふ。サッパ舟は、扁平で淺くて、それに乘つて居ると、フワリとして搖籃に搖られ〱て居るような心持である。先年、吾輩は神經衰弱に罹つたとき、此の水鄕に來て、島の土豪、高安氏の書樓に淹留し、毎日、サッパ舟に乘つて遊びあるいた間に、健康は忽ち回復した事があつた。神經衰弱者には、サッパ舟の保養は、確に有効であると思ふ。

信濃川の方面は全く、利根川の水鄕とは趣を異にして居る。蒲原の大平原を、吾輩は、試みに、平面國と名づけた。一望百萬石、それが信濃川の緣から、水平的に、天際に向つてひろがつて居る。關東の平原には、ところ〱邱陵もあり、土地の高低もあるが、此の蒲原の大なる平面國は、卓の上のように平らな水田が限無く、續いて行くのである。その平面國の端が新潟である。信濃川は、新潟の町を環ぐつて、汪々、滔々、漫々として流れ行くのが、此の都市をして、美觀を增さしめつつある。川に臨んで居る篠田旅館は、宏壯なるのみならず、その川端の浴室は頗る快適である。新潟には、旅館に朝湯がある。篠田は、東に信濃川を受けて居るから、大江の水面に映ずる旭光が、一杯に浴室に反映するのを、朝湯の中で見て居る。春雪の銀世界の頃は、一層、長江の西岸が明かるいから、春曉に、此の川端の浴室にさし込む朝日の麗らかさが想ひやられる。

其十二

京都の人權蹂躙問題は火の手を揚げたようである。木内氏に對する檢事の糺問事實の事相は、未だ分らぬが、成るべく徹底的の闡明を望む。且つ、此の事實の眞相は如何なる風に發表せらるかは別問題として、此の事を動機として、豫審に於ける取調の態度、聞取書の作製、豚箱の廢止等、司法裁判上の内容の革新を爲すに至らん事を希望するのである。

一體、此の種の問題は、今日、木内氏の場合を待つまでも無く、世間の問題とならなければならぬ筈であつたが、久しく等閑に附せられてあつた。江木衷博士が、東京日日の新聞の紙上に於て、日本に於ける憲法政治の創始と裁判制度との由來に就いて論述したことがあつた。裁判所の内部の事は案外、世間に知られぬから、公判廷に於て、被告が往々、豫審の告白を打消すことがあるのを、世人は被告に對して惡るく解釋することがある。然るに、打消した方が眞事實になつて、全く、豫審の告白が顚覆されることもある。公判廷に於て、被告が、前告白を打消すのは、裁判の進行を複雜ならしめ、停滯せしむる爲の、卑怯な心事に本づくのではなくして、實際、檢事が論告の基礎とするところの豫審調書、聞取書といふものに、不備の點が多い、聞取書といふものが、被告の告白した意味の眞情を盡くしたものでなく、往々、間違つたことがある爲に、公判に於て、此の如く、被告と檢事と、論爭の行違を生ずるに至るのであるといふ事を、世人が知らぬからである。聞取書といふものが、裁判上、極めて重要なものであるに係らず、その作製に就いては、遺憾な點があるらしい。然るに、一旦、出來上つた聞取書といふものは、權威のあるものであるから、檢事は、飽くまで、これを楯に取ろうとする、被告は、その作製の始に溯つて、聞取書といふものに服從しようとは思はない。

裁判官の頭に、被告といへば、惡るい事をした者といふ印象を持つように見える。世人は裁判所に引出されたといふ事だけで、もはや被告といふものを惡るい者にして仕舞う。此の如き雰圍氣の中に孤立する被告が、取調上、大勢の壓迫を受けるといふ事は容易に想像される事實である。原告も被告も、裁判の確定するまでは、均しく無垢の者として公平に取扱はねばならぬのを被告とすれば見下げたくなるのは人情の弱點であるが、その弱點に捕はれて居るようでは、知らず、識らず人權を蹂躙するようになるだろうと思ふ。これは檢事の勸告によつて和解に終つた一例であるが、その取調に、原告の聞取書は、原告に讀ませて、そしてその書き方の間違つて居る點を、原告が指摘した通りに訂正した。然るに、被告の事は、唯だ書き放しのを突付けて、それに自畀させた。勿論、これは原被兩告の正邪、勝敗、

歴然たる場合ではあつたけれども、被告は、何事が書いてあるか讀みもせずして聞取書に自署する。檢事が、それを讀んでならぬと、禁じたわけではなかつたが、唯だ、これに自署しろといつて出したので、讀んで見よといふ注意を與へはしなかつたのである。それを讀んでも見ずに自署するといふのは、いはゞ被告が、自ら人權を捨てゝ仕舞つたので、檢事が人權を蹂躪したのでは無い。然し、此の如くにして出來上つた聞取書であるから、被告の眞情を被告の納得するように書いてあるか如何かは、問題であると思ふ。

其十三

支那の振はざるは支那人が政治的能率が進まないからである、行政の事は暫らく措き、支那は、裁判制度の改良、發達せざる國である。人權が擁護せられず、人民、寃枉に苦しむといふのが、支那の實情である。必ずや寃枉無からしめんと言つた堯舜の理想は、則ち憲法政治の理想境であるが、それが何千年を經過しても、少しも理想境に近づかない、堯舜と憲法政治の精神とはます／＼遠くなる。近世の支那には裁判小説が非常に多い、裁判文學が榮えるのは、人權の發達せざる證據である。また或は裁判文學の繁榮は、人權發達の道程を示すものといひ得る。日本の近世に於ける裁判小説の發達、その代表的のものは大岡裁判であり、それから支那の裁判文學、就中、棠陰比事の如き、盛んに流行つたもので、明治の初年にも欺騙叢書の和譯などもあつた。今川了俊、青砥藤綱、畠山重忠等の人物が文學及び劇の上に美化されて大立物になつたのは、裁判小説の力である。裁判小説の流行は、人民が人權に渇し、人權を要求する叫びである。吾輩は、維新の大原因の一は人權要求の聲である。ペルリが來ずとも、維新は早晩、人權要求の聲から來るべきであつたと思ふ。此事は、別に委しく論じて見たい。

憲政の施行されて既に三十年、裁判制度の發達は稍後れて居た。今日に於て、人權蹂躪の聲が起つたのを動機とし、取調上の舊套を打破したいと思ふ。

其十四

世の中がます／＼忙がしくなるに隨つて、汽車の中などで書類の取調に從事する者を少からず見受ける。東京、大阪間に於て殊に多い。吾輩の如きも、汽車中で、執筆する一人である。讀書の爲には、普通席でも、寢臺車でも、多く差支は無いが取調とか執筆とかは、テーブルが有る方が可いと思ふ。汽車中の執筆に馴れても、やはりテーブルが慕つかしく、事實に於て

テーブルのあるのが便利である。

世の中の、多忙はます／＼加はるばかりで、汽車中の時間、東京、大阪間、或は東京、下關間の時間が、いよ／＼際どく用ひられる。取調の時間が緊切になり、隨つてテーブルの效能がます／＼發揮される。喫烟室に備へてある半圓形の大理石のテーブルも、非常に心持よく感ずる。これまでの寢臺車のように、テーブル車を一輛、連結して、寢臺券の如く、番號を定めたテーブル券を發行したら可かろうと、車中で、同感の多忙者と話し合つた。

此の一篇の大半は、東京から下關までの車中にて起稿した。特急車で東京を出れば富士山下の午飯、最急車では須磨、舞子の朝暾の時の食事が、尤も愉快である。健堂生再記。

廓の春 京の島原

澤田撫松

一

神戸から東京へ歸へる途中、汽車が京都驛へ着いた時、私は生れ故郷を素通りするのが、何となく殘り惜しく思はれたので、五分鈴が鳴つて、汽車が動き出し相になつてからふいと飛び降りた。降りる者は皆降りたあとだつたから、プラツトフオームには四五人の見送人と赤帽と驛員が居るだけで、ひつそり閑として居た。改札口から外へ出ると、

『旦那、行きまへうか』

骨骼の逞ましい車夫が、非男性的の京言葉で乘車を勸めながら、梶棒を私の鼻の先へ突きつけたが、何所へ行かうと言ふ當なしに降りた私は、俥に乘るわけにも行かなかつた。時計を見ると十二時を十分過ぎて居た。こんなに夜おそくなつてから親戚や友達の家を叩き起こすのも心ない業だし、手土産一ツ持つて居ないで訪問も出來ないので、宿屋へでも泊らうと思つて、烏丸通りの方へ歩き出すと、

『旦那乘つとおくれやす、島原までどうどす』
車夫は空車をひいて後からついて來た。車夫に島原と言はれて私は考へた。成程島原は近い。これから宿屋へ行くのも妙でない。久しぶりの島原遊びもよからうと、
『じや島原へ行かう』
私が車に乘ると、
『お馴染の所がおすか』
車夫が梶棒をあげながら聞いた。戯談いつちや困るよ、京都で生れて京都で遊んだ人間をつかまへて、島原に馴染があるかないか聞く奴があるかと、言ひたかつたが、馴染の所へ行つて、京都者あつかひされるのも面白味が薄いから、何所までもお上りさんで通さうと思つた。
『馴染の所なんかないから、何所でもよい、一番よさ相な所へやれ』
車の上から呶鳴ると、車夫はのろい足どりで、七條通りを大宮へ出て其所を右へ曲つた。三丁程行つた所を又左へ曲る時、其所に立つてある燈籠を見た。お祭佐七の芝居で、佐七が手紙を讀む時に傍に立つてある樣な恰好の燈籠であつた。燈籠に島原口と書いてあつた。島原口の狹い路を車の上から眺めると、兩側の家は皆表を閉めて、外燈のある家が尠ないので、廓へ通ふ路とは思はれなかつた。それでも島原の大門まで來ると、出口の柳がアーク燈の光を浴びてはつきりと見えた。大門を入ると兩側の中啓に火が點いて、二階から電燈の光が漏れる家もあつた。車夫は大門から少し入つた左側の家へ車の梶棒を下した。
『おいでやす、お上りやす』
若い仲居が、俥の前に立つた。車夫に車賃を渡して入ると、
『どうぞこつちへ』
若い仲居が梯子段を先へ上る、私はその後からついて上ると、あがつた所には五燈の雷燈がついて居るが、廊下を廻つて座敷へ入ると、其所はまつくらがりで何にも見えない、若い仲居は私の手を把つて中央へ坐らしてくれた。仲居が燐寸を擦ると其所に銀の燭臺があつた。百目かけの燭蠟に火が點くとポーと座敷が明るくなつて、十二疊の間に立て廻らした金襖が目映しかつた。仲居が四個の燭臺に火を點けると、金襖の裾に描いた青海波の青さが冴えて、床の間に掛けた松年の墨繪の松の大幅が鮮に見えた。
『ようこそ……』
若い仲居は、疊の上へ兩手を重ねて、小笠原流の御辭儀をした。藤紫の襟の下に重ねた緋縮緬の襟が、化粧した白い領脚を

艶めかしく見せた。

『遲くやつて來て氣の毒だね』

緞子の座蒲團の上に坐つた私は、仲居の方を向いてから言ふと

『そんなことおへん。あんたはんこそ遲いのによう來とおくれやした』

袂から赤い絹の布を出して、紫檀の卓子の上を拭いた。同じ樣な仲居が茶と菓子とを持つて來た。

『誰よびまへう』

蠟燭に火を點けた方の仲居が聞いた。

『誰でもよい、太夫を呼んで貰ひたい』

どこまでもお上りさんで通した。仲居はあとから上つて來た女に耳うちすると、女は莞爾り笑ふて下へ降りた。間もなく卓子の上に吸物やら燒物やらずらりと肴が並んで、御銚子が出た。日本酒を餘り好まない私は、ビールをと言ひたかつたが、金襖と蠟燭の手前遠慮した。

『おうきに』

敷居の外で手を突いて、若い藝者が三人入つて來た。三人の藝者は暫らくぺちやくちや喋つて居たが、仲居に注意されて三味線をひき出した。廓下に足音がしたと思ふと、金襖が左右にあいた。襖をあけた二人の仲居が、敷居に兩手を突いて頭を下げると絹ずれの音をさして、肩から袖へかけ櫻の花を散じ腰かと裾へ紅葉に水の立田川の縫潰した裲襠を重さうにさばいて、繪に書いた樣な太夫がしなやかに坐はると、胸からさがつた前帶の金糸が蠟燭の火に光り、無言で頭を下げた白い顏に、花簪の房がくれなゐに流れた。禿が運んだ蒔繪の煙草盆に小櫻と書いてあつた。藝者は京の四季やら和歌の浦やら、勝手にひいて勝手に引揚げて行つた。座敷が引けると仲居は私を表の方の小室へ案内した。秋には入つて居るけれど、まだ蒸暑い晩であつたから、障子を開放して、月影のさし込むまゝにしてあつた。此室は電燈が點いて、襖も金でなかつたから、やつとサイダを飲むことが出來た。

『今夜はなんでこんなに暑いのどすやらう』

飲みほしたコップに仲居が又サイダを注いだ、暑さも今暫らくだとか、もうぢき高臺寺の萩が咲くとか、紅葉時分には是非も一度京都へ來て高尾の紅葉を見いとか、すつかりお上りさん扱ひにして、喋るだけ喋ると下へ降りて行つた。

『よう喋らはる人どすやろ』

今までだまつて居た太夫小櫻が初めて口をきいた。頭に飾りつけてあつた大きな鼈甲の櫛や笄を取り去つて、裲襠を脫

いで前帶を緋縮緬の扱(しごき)に更へた小櫻の姿は、漸く人間らしい感じがした。

『こゝの家で、あのお豐どんが一番お喋りで、一番臆病どつせ、此花さんが殺されやはつた時、一番先に腰を拔かさはつたのもあのお豐どん……ほゝ』

座敷に居た時は、裲襠と笄とでだまつて居る人間離れのした小櫻も、打ち寛(くつ)ろいで話をすると只の女になつて居た。

『此花が殺されたと言ふのは、いつ頃、何所であつたことだ』

此花と言ふのは無論太夫(たいふ)であらう、それが殺されたと言ふことは、私としては聞き捨てにして置けなかつた。

『こわい話どつせ、それでもお聞きやすか』

兩袖を胸の上へ重ねて、私の方を見た小櫻の顏は、月の光を浴びて凄い程白かつた。

二

豆腐屋の源吉は朝風呂から歸へつて來ると、簞笥の抽斗を開けて秩父縞の着物と同じ羽織を出した。

『あんた、何所(どこ)へお行きやすのや』

不安な目附きをして、女房のお時が夫の傍に立つた。

『今日は太夫の道中やがな　一年に一ぺんのこつちや、見に行つて來るわ』

源吉は着物を着ると、博多の帶をぐつと締めた。

『およしいな、獨り者やないし、人が見たら笑はるがな、けたいな人やな』

お時は不平らしい顏して、ふくれて居た。源吉は女房の不機嫌なぞに頓着なく、さつさと出て行つた。源吉が島原の大門へ來た時は、廓内は一ぱいの人で、容易に入れなかつたが、見番の役員に知合があつたから、やつとのことで中へ入れて貰つた。道の兩側に竹の欄干(てすり)を作つて、道中の道筋へ人の出ない樣にしてあつた。欄干の中は動きも出來ない程に人が詰つて、夜の明けない前から押しかけた連中が、退屈もしないで、今か〳〵と太夫の出て來るのを待つて居た。道の兩側がこんな混雜だから、二階のある家は二階、二階のない家は屋根の上まで人で埋まつて居た。源吉は見番の向側の西洋料理店の前に割込むで、人の頭の上から往來を眺めて居た。かなり長い時間を立たされたので、足が痛くなつて來た頃、見番の前から花車が動き出した。一松、吉子、吉代、久男、とん八、三長、松千代、[illegible]松の廓より拔きの若い藝者が、藤紫裾模樣紋付の着物に白襟をかけて、島田の花簪も派手やかに、紅白の縮緬を綯つた太い綱を引いて繰り出すと、目の覺める樣に綺麗に飾つた花車が靜かに動く。赤い紋

付の大振袖を着た可愛らしい禿が二人、赤地に金糸で『此花』と縫取りしたものを背中にかけて両側を澄つて歩く後から、火焔と剣と蛟龍とを織出した緞錦の帯を前に結んで、紫地に火焔と蛟龍を織出した裲襠を着て、赤い鼻緒のすがつた黒塗三枚歯の木履で八文字を蹈むで歩く此花太夫の美しさを見ると、群衆のどよめきが靜まつて、見物の視線が悉く此花の道中姿に集つた。源吉はのびあがつて見て居ると、神々しい程あでやかな此花太夫の顔が、眼の中に染込む様な氣がして、電氣にうたれた様に軀中が顫えた。若衆が後から差しかけて行く大きな傘の見えなくなるまで、太夫の後姿を見送つて居た。此花太夫の後から、菊人、玉の井、八千代、大井、君人、彌生、花雲、玉琴、八重雲、九重、思君、小紫等四十二人の太夫が、帯や裲襠の模様こそかはるが、皆同じ姿で澄つて歩いた、最後に青木楼の美吉野太夫が、さめ子、せい子、さき子、政野、駒子、政子、富子、峯子の七人の禿と、引舟もと子に取り巻かれ、三枚襠の切髪で、其の日の傘止めを勤めて居た。太夫と言ふものを見つけて居た源吉も、道中姿の此花の美しさに今更の様に驚いた。自分の家へ歸つてからも此花の姿が目の先から去らなかつた。まるで氣抜けの様になつて、商賣も手につかなかつた。女房からがみ〳〵言はれても、叱りつけるだけの氣力がなかつた。道中があつてから十日程たつた頃であつた。源吉は金楼の座敷へ通つて、蠟燭の火で酒を飲むで居た。道中の時に、群衆に押されながら見た神々しい姿を、今は自分の傍へ引きつけて、近づくことの出來ないもの、様に思つて居た美しい對象を、自分の自由になる肉體として接觸することが出來ると思ふと、このまゝ地球が破裂して、軀が木端微塵に砕けて、宇宙の外へ散つてしまつてもかまはないと思つた。自分の商賣が豆腐屋と言ふ、餘り幅の利かない職業なので、その引け身をかくす爲めに、金を惜まずに遊んだので、周圍の者にちやほやされたばかりでなく、此花にもかなり丁寧な待遇を受けた。一昨年の春女房を貰うと、間もなく父親に死なれて、一家の主人となつた源吉は、稼業は豆腐屋であるけれど、父が汗水を流して稼ぎためた財産があつたので、賣子の五人も使ひ、何不自由なく暮して居た。かうした自由の境地に在る二十六才の青年が、色街の事業を知つては、周圍の事情を考慮する遑もなく、無我夢中に進むより外はなかつた。源吉は女房の諫めも、親類の意見も用ゐないで、島原通ひを續けて居

三

た。島原の太夫遊びには金が要る。伯人や娼妓を買ふ様に簡單には行かなかつた。太夫を呼ぶには、その度毎に藝者を呼んで遊

ばなければならず、太夫について來る引舟禿等にも祝儀をやらねばならぬ。父親が幾等稼ぎためて置いたからとて、たかが豆腐屋のことであつたから、半年程の間に家も地所も賣りはらつて、借りられるだけの借金をしてしまつた。かうなると默つて居ないのは女房であつた。

『これが商賣で失敗したとか、不景氣で店が立ち行かぬと言ふのなら、どんなにでも辛抱をしますけれど、肝心の亭主の心持が腐つてしもうて、おやま買ひに夢中になつて居る樣では末の見込がおへん、こんな所に居て、帯一筋でもとられてお見やす、あほらしおすがな』

源吉の女房は人をつかまへると斯んな話ばかりして居たが、その時はもう嫁入りの時に持つて來た二棹の簞笥が實家に運ばれてあつた。平打ちの金の指輪も、女持の懷中時計も皆實家の母親に預けてあつた。それでもお時は、執達吏が來て家中の物を差押へるまで形勢を觀望して居たが、差押へられた物が愈々競賣ときまつたとき、とう〳〵實家へ逃げて歸へつた。自分が生れて育つて來た家がひと手に渡つたばかりでなく、屋財家財悉く執達吏に賣り拂はれてしまつた上、連添ふ女房にまで逃げられた源吉は、佛壇と寢具と臺所用品だけを抱へて、行く所のない身の上となつた。かうなつては相談相手になる者がないので、無理な苦面をして此花に逢ひに行つた。

『面目ない次第だけれど、さう言ふ譯やよつて、逢ひとうても暫らく來られんさかい、まあ暇乞のつもりで來たのや』

源吉は元氣のない顏をして居た。

『さうどすか、其んな事ちよつとも知りまへんよつて、あんたはんを引きつけて居たのは惡おしたな、かんにんしとおくれやす。』

此花は眼に淚を溜めて居た。

『こんな身の上になると、親戚や友達が俺を敵の樣にして、何の相談にも乘つてくれやへんよつて、何所へも相談に行くとこがないので太夫に賴みに來たのや。俺は學問も、智惠も何にもない人間で、今は金にも離れてしもうたのや、只覺えたことは豆腐をこしらへることだけやさかい、やつぱり覺えた商賣をしやうと思ふのやけれど、京ではもう相手にしてくれる人がないよつて、大阪へ行つて一稼ぎしてくるつもりや。どうで資本がないのやさかい、大きい家へ奉公して金をためるつもりや、然しな、自分で金を持つて居ると此所へ來たくなるよつて、少しづゝでも金が出來たゞけ太夫の所へ送つて置くさかい、預かつておくれ。來年一年うんと働いて、暮にはきつと出來る』

源吉は此花を自分の女房か何ぞの樣に、しんみりとした話を聞かして居た。此花は九歲の時から廓の人となつて、讀書習字から遊藝一式、太夫に必要な諸藝を仕込まれて成人したが、二十二の今日が日まで、金錢を手に持つたことがなかつたから、金のために苦しむ世相を見たことがなかつた。それが今まのあたり、馴染の客が金の爲めに苦しむで居ると言ふ話を聞かされて、未知の世界を見せつけられたのに驚いた。世間を知らない太夫氣質の此花には、此場合何と言つてよいか、源吉を慰めるに適當な言葉を見出すことが出來なかつた。親から讓り受けた家屋敷をひと手に渡して、連添ふ女房にまで別れて來た源吉に取つては、此花の態度がもの足らなかつたが、兩眼に涙のあるのを見て、それで滿足して居た。

四

大阪へ行つた源吉は、今宮に同業の知合があつたので、其所の賣子になつて、毎日荷を擔いで市中へ豆腐を賣りに出た。少しでも多く此花の所へ金が送りたい一心から、骨身を惜しまず働くので、豆腐屋の主人も驚いて居た。知合の仲だから、賴まれて見るといやとも言へないので、澁々使つて見たが、なみの奉公人よりもよく働くのを見ると、だまつても居られないから、豆腐屋の賣子としては過分の給料をやつて居た。源吉は其の給料を殆ど使はなかつた。酒も飲まず煙草ものまず、京都者でけちだと言はれる位にして、此花の所へ金を送つて居た。今までなまけて居た軀が、急に烈しい勞働をしたので、初めの中は軀の具合が惡かつたが慣れると苦にもならなかつた。毎月此花の所へ金を送るのを樂しみにして蔭日向なく働いて居た。此花の所からは毎月手紙が來た。その手紙の中には、今まで此花が言つたこともない、人情の籠つた、男を悅ばす文句があつた。源吉は此花から來る手紙を人に見られるのがいやであつたから、讀むでしまうと每も燒き棄てゝしまつた。源吉が大阪へ來てから丁度一年たつた時、手帖を廣げて勘定して見ると、此花へ送つた金が百八十圓になつた居た。この暮に主人から二十圓貰ふことになつて居るから、此金を加へると二百圓になる。正月の休みには二十圓の金を持つて、久し振りに此花に逢ひに行かうと思つて其の旨を手紙で言つてやると、直ぐ返事が來た。其の返事を讀むと源吉はいゝ氣持がしなかつた。一年振りに逢ひに行くと言つてやつたのだから、待つて居ると言つて來るだらうと思つて居たのに、まだ京へ來るには早い、百八十圓や二百圓位の金をためたところで、何が出來るものでない。もう二三年は京の土を踏まないでお働きなさい。切めて千圓もたまつたら歸へつて來

てもよいと言ふ意味が手紙に書いてあつた。源吉は其手紙を幾度も讀みかへして見たが、此花の眞意が分らなかつた。一日も早く逢つて、此花がどう言ふ考へで居るかを知りたいと思つて居たが、暮の忙しいところを暇をくれとも言はれないので、正月の休みを待つて居た。大晦日の晩になつた。愈明日だと思ふと、源吉は嬉しかつた。京都に家を持つて居た時は、大晦日の夜の十二時になると、火繩を持つて祇園の八阪神社へ行つて、社殿の燈明を火繩に移して、勘平が花道から出て來る樣な姿勢で、火繩を振りながら祇園町を歸へつて來るのが、若い者にとつては面白かつた。火繩で持つて歸へつた火を神棚の燈明に移し、其の燈明を正月の十五日まで消さない樣に守つて、三ケ日と七日の七草と十五日の鏡開きとに、其の火で雜煮を煮るのであつた。そうした正月の儀式も、今の身分では出來ないと思ふと、折角勇み立つた氣分も滅入る樣であつた。

五

主人の家で雜煮を祝ふた源吉は、屠蘇機嫌で此花に逢ひに來た。島原の大門に大きな松飾が立つて居た。廓の中は家每に松飾が綺麗に並んで居た。美しく着飾つた若い藝子や禿等が、しなやかな姿勢で追羽子をして居た。飾幕の間から濃化粧をした伯人が道行く人の品さだめをして居た。源吉は一年ぶりに金襖の座敷へ通されて、夢見る樣な心地で居た。仲居も源吉の身の上を知つて居たから、並のお客の樣に藝者を呼ぶことをやめて、直ぐ此花を迎へにやつた。小紋縮緬の二枚重ねに繻珍の丸帶を締めた若い仲居が二人、七枚重ねの赤い盃と長柄の銚子とを持つて來た。元日の吉例で、源吉は赤地に金蒔繪のした盃で酒を飲むだ、上から〳〵と飲むで行つて五枚目まで飲むだ、もうそれ以上飲めなくなつて止めた。前には組重からよそふた田作や數子を乘せた皿が並べてあつた。源吉がほつと酒臭い息を吐いた時、今一人の仲居が、番茶の中へ梅干と混布とを入れた大福を、清水燒の茶碗に入れて持つて來た。源吉が大福を飲み乾した時、金襖があいて此花が入つて來た。二人は顏を見合しまゝ暫らくものを言はなかつた。仲居はわざと座をはずして下へ降りた。大きな丸桐の火鉢の中に池田炭が赤々とおこつて、冷酒を飲みすぎた源吉の額には汗がにじんで居た。

『明けましてお目出度う』

此花が挨拶すると、源吉も改まつて新年の挨拶をした。源吉は昨年別れてから大阪で辛苦をしたことを語つて、此花の手元へ送つた百八十圓に持つて來た二十圓を加へると丁度二百圓になると言ふ樣なことを、元氣よく話した。

『私に百八十圓を送つたと言ひやすが、それは何時の事どすか』

此花は不思議さうに尋ねた。

『そら何を言ふのや、毎月、十圓なり十五圓なり送つて、丁度それが、さうや玆に書いてある』

源吉は懐中から手帳を出して、送金した日附を一々讀みあげた。

『私、そんなことはちよとも知りまへん、あんたはんのお居やす所さへ知らんのどすが、』

此花が金を受取つて覺がないと言ふのを聞いて、源吉は赫つとなつた。

『太夫、それは本氣で言ふのか、なぶるのなら止してくれ、』

此花の方へ膝を進めた源吉の様子のたゞならぬのに、此花は尠なからず驚いた。

『ほんまどすとも、何で嘘言ふもんどすか、お金を受取つた様なことは夢にも知りまへん、何ぞあたはん考へ違ひしといやすのやおへんか』

此花の落ちついた言ひ様が、源吉をして一層苛立たしめた。

『知らん、受取つた覺えがない、そら何を言ふのや、金を送る度びに、受取つたと言ふ手紙を毎もおくすじやないか、受取らん者が何であんな手紙を出すい』

源吉の額には青筋が立つて、握り締めた兩の手はぶる〳〵顫えて居た。

『手紙を出したとお言ひやすの、私が、おゝいや、あたはんのお居やす所さへ知らん私が、何で手紙を出せます、』

源吉があんまり金々と言ふので、此花もむつとした。

『ナニ、手紙を出した覺えがない、ようそんなしら〳〵しいことが言へるな、金を送ると、直ぐ長い〳〵手紙を送つたやないか、それでも太夫お前は知らんと言ふのか』

源吉は血相かへて詰め寄つた。そこへ仲居が入つて來たので、二人は金の話を止めた。

『誠にすみまへんが、太夫さんが御年始にお廻りやすので、家から迎ひに來やはりましたさかい、歸へらしてあげとくれやす、晩になつたら來やはります』

成程さう言はれて見ると、元日の朝から太夫を引きつけて置くだけの大盡風は吹かされなかつた。

『俺もこれから年始に行かんならんよつて、また晩に來ます。大夫にはまだ話が殘つてゐるさかい、晩にきつと來るやうにな』

源吉は腹の中の煮えかへる様な思ひをじつと抑さえて、何氣なく裝ふて居たが、眼は血走つて居た。

六

島原を出た源吉は、何處を當てともなく、ふら／＼と歩いた。家も捨て女房も捨てゝ、一途に思ひ込んだ此花に、うま／＼と騙されたかと思ふと、腹が立つて、口惜し涙の出るのが止められなかつた。大阪へ行くまでは、此花を何所までも實意をつくす女とは思はなかつたが、大阪へ行つて金を送ると、今までの此花とは思はれぬ程情の籠つた優しい手紙を送つて來たので、世の中の總ての人に捨てられた自分に、百萬の味方が出來た樣な氣がして、その後も引續いて金を送ると、その度每に隨分濃厚な手紙を送つて來た。そして最近の手紙には夫婦になりたいとさへ言つて來た。遊んで居た間はそんなに打ち解けなかつた此花が、別れてからまるで人が變つた樣に人情深くなつたのが不思議だとは思つたが、太夫だつて女に違ひないから、別れて居ると反つて情が深くなるものだらうと自分できめて居た。それが逢つて見ると、手紙で言つて來たことをまるで忘れた樣な顏して居るばかりでなく、汗水滴してこしらへた百八十圓の金を、現在受け取つて居ながら知らぬと言ふ、受取つた覺えがないとぬかす。島原の太夫と言ふものは、金勘定も知らないものと聞いて居たので、此花の樣な毒婦が居やうとは今まで知らなかつた。一年が間身を粉に碎いて働いたのも、貯めた金で小さな店でも開きたいと思つてゐたからだ。金錢に目をくれない太夫に金を預けて置くことが一番たしかだと思つて居たからだ。初めの中は多少不安な氣持がしないではなかつたか、親切に言つてくれる手紙を見ると、もうこの世の中に此花より他に賴りにする者がないと思つたから、自分の女房にでもした樣なつもりになつて、せつせつと金を送つて居たのだ。それもこれも今になつて考へて見ると、此花の毒婦めに一杯喰はされたのだ。今夜逢つて、もう一度責めつけた上、どうしても知らぬとしらばくれるなら、その時は……こうまで考へて來て眼を閉ぢると、恐しい魔の影が見えたので身顫ひした。何所へ行くと言ふあても無しに、鯨幕と松飾とで裝飾された、靜かな京の街を歩いて居た源吉は、石に躓づいた拍子にあたりを見ると、烏丸の五條を、自分の家のあつた方へ歩いて居たのであつた。何の爲めにこんな方へ來たのか、自分でも分らなかつたが、知つた者に逢つたら面倒だから、後へ引かへして、室町を四條の方へ歩いた。それでも元の家の前を通つて見たい樣な氣持のしないでもなかつた。と、ふと胸に浮んで來たのはお時であつた。此花と言ふものが、自分の胸の全部を占領して居た時分は、お時のことなぞは考へても見たことがなかつたが、此花に突き離されてしまつた

今となつては、女房と同棲して居た時の記憶の襲撃を受けずに居られなかつた。餘り人情のある女房とは思はなかつたが、此花の様な毒婦から比べればよつぽどましだと思ふと、急に逢ひたくなつた。けれどもさつた女房の所へ、今更おめ〳〵訪ねても行かれないから、切めてどうして居るか近狀でも知らうと思つて、六角堂の裏手の、女髪結の家を訪ねた。お時が自分の家に居た時、女房の髪を結ふて居たお國に聞けば、お時のことが分ると思つたからだ。

『あんたはん、どうおしやしたのや、』

お國は驚いた顔して源吉を迎へたが、容易にお時のことを言ひ出さなかつた。堪まらなくなつて、源吉の方から聞くと、お時は暮の廿六日に西陣の織屋へ嫁入りしたと言ふことを、言ひにくさうに話した。それを聞くと、源吉は挨拶もろく〳〵しないで表へ飛び出した。綺麗に着飾さつた娘や、禮服を着て鹿爪らしく歩いて居る廻禮者の間を縫ふて、源吉は新京極へ入つた。たら〳〵おりを下つた左側の小田卷蒸屋でしたゝか酒を飲むで御旅町の方へ歩いて行くと、錦天神を少しさがつた右側に金物屋があつた。店に立つて眺めて居た源吉は、刄渡り六寸程の短刀を買つた。

七

電燈に青い絹をかぶせたから、月の光に植込の松の梢が、座敷へ影を投げた。夜が更けたので、廓の表も靜かになつたが、ツンツルテンツルと流しをひいて歩く新内の三味線の音が、悦樂の巷に感傷的の氣分を漂はして居た。

『今年の元日の晩どす、此の廓下の突き當りのお座敷』

小櫻は後を振り向いた。

『あこで、豆腐屋の源吉と言ふ人が、此花太夫を殺さはつたのどす、此花さんは、短刀で胸を突かれて、壁にもたれたまゝ死んで居やはりました。そのお座敷はあとで、疊を入替へたり壁を塗り替へたりして、すつかり綺麗にしやはりましたが、どう云ふ譯か新しい壁に、元のまゝの血の痕が現えるのどす、これは油が出るや言ふて、其所の壁土を取つて、下から新しい壁を塗つたのに、やつぱりおんなじ血の痕が現れるどす。それから二度も三度も壁を塗り替へやはつたが、何度塗り替へても血の痕が消えまへんので、とう〳〵根まけして、あの御座敷はつかわんことにしやはりました』

私は小櫻の差し出す銀の手燭の燈火で、土の臭の未だ去らない新しい壁に、人がたの様な、生々しい血の痕を見た。私が身

うちの寒さを感じた時、

『怖うおすよつて、あつちへ行きまへう』

小櫻は手燭を持つて廊下へ出た。私は自分の座敷へ戻つてから、夜の明けるまで小櫻と語りあかした。源吉が自首をして檢事局へ廻されると、仲居のお竹が檢擧された。源吉から此花へ送つて來る手紙を、途中でお竹が開封して、金だけ取つてよい加減な嬉しがらせの返事をやつてゐた。それを源吉が此花から來たものと思つて、切々と金を送つてゐたのであつた。

その明け方、小櫻に送られて大門を出た私は、十歩程歩いて振りかへると、出口の柳の傍に、濡燕の縫取りした補襠を着て立つて居る小櫻の姿を見て、浮世の風に當らずに、夢の樣に咲いて夢の樣に散つた太夫此花の運命を悲しむだ。



「我れ爾を救ふ」

山中峯太郎

『我れ爾を救ふ』

この聲を、聞くを得て、而して後に、わたくしは、初めて、自分が死ぬといふことに、やうやく氣がついた。死ぬといふことに、眼があいた。

自分の死、いはゆる後生の一大事、それに先づ氣がついて、それから救ひをもとめたのではない。「自分は救はれる」といふことが、やうやくのことで『我れ爾を救ふ』との聲によつて、わからしてもらつて、それから、更に、やうやくのことで、後生の一大事といふことに氣がついたので、畢竟するところ、自分の死といふことは、全く氣づかせていたゞいたのである。

その聲をかけられて、そこに佛教の「眞心徹到」といふのであらう。心の髓まで、その聲が徹り、心の底を、その聲が貫き、永へに、ぴたりと心の上に印を捺されたのが、昨年の、十二月五日のことであつた。印の意味は、「決定」といふのである。「救はれる者」と永遠に決定したしるしの印である。キリスト教の使徒パウロの「聖靈をもつて印す」といふのは、之であらう。確かに之れである。

あゝ昨年の十二月五日。もう一週間すれば、ちようど滿一年になる。おもへば、うれしい涙がこぼれる。その聲を聞き得てから後に、更に心づかしていたゞいた事々もあるし、それらの事々を、滿一年にならうとしてゐる昨今の、一週間前後のあひだに書けるだけ、少しでも多く書きのこしてをかう。ほんとうに、わたくしは死ぬのだから、いつ死ぬのか分からないのだから、この滿一年といふことを緣にとつて、いろ〳〵氣づかせていたゞいてゐる事々を、今のうちに書きのこしてをかう。

——一九一九・一一・二七・夜——

——東京市外・西大久保・九四——

わたくしは、初め、キリストの十字架が、わたくしの救の象

徴であることを信じてゐた。今も、然く信じてゐる。そのキリストは、さうして、わたくしを彌陀如來の懐のなかに、導いて往つてくださつた。導かれて往つて、今から思ふと、如來の御懐に、いよ〳〵懐きとられた〻刹那の時に、聲が、その刹那に、

『我れ爾を救ふ』

と、聞こえたのである。忽然と聞こえた。

その聲は、ほんとうに聞こえたのである。

まさしく、「聲」として、はつきりと聞こえたのである。と書くより他に、書きやうが無い。聞き得たこゝろもちは、「靈の聲」と書くのが、其の聲に對する感覺を、最も良く現はし得た語であると思ふ。佛書に、「空中の聲」といふのが有るさうであるが、まさしく空中より忽然と頭上に降ちてくる聲である。キリストが宣道の始めに、洗禮を御受けになつた時、「天たちまち之れが爲にひらけ、神の靈の鴿の如く降りて、其の上に來るを見る。また天より聲ありて、こは我が心にかなふ我が愛子なりと云へり」とある其の「聲」である。「天よりの聲」である。靈の聲である。降靈の聲である。靈の降臨そのものが、「聲」になつて現はれたのである。ほんとうの洗禮は、こゝにある。こその聲が、わたくしには、

『我れ爾を救ふ』

と、やはり頭の上より閃めくごとく、彈指のあひだ、刹那のあひだに聞こえた。

それと同時に、おのづから心づかせられた事々を、次ぎに書いてをかう。聲につゞいて、更に「默示」といふ語どほりに、聲なくして示された事々を書いてをかう。

『我れ』は、『爾』を、『救ふ』ためばかりに在り給ふ御方である。『我れ』の存在の全部は、「爾を救ふ」ためより他には、絶無である。『爾を救ふ』ことが『我れ』の全生命であり給ふ。『我れ』が、若し、天地を創造し主宰し給ふならば、それは『爾を救ふ』ためのみの創造であり主宰であつて、その他に創造主宰の目的は絶えて無い。『我れ』が若し全知全能にてましますならば、それは『爾を救ふ』ためのみに用いらるる全知全能であつて、『我れ』が若し永生の主であり給ふならば、その永生は『爾を救ふ』ためのみに存在する永生である。『我れ』は即ち『爾を救ふ』ためのみに在り給ふ御方なのである。

『爾』は、『我れ』に『救はれる』ためのみに存在する唯一人である。『我れ』に救はれる他に『爾』の存在の目的もまた絶えて無い。

『我れ』と『爾』とが、『救』により、その存在の目的――『救ふ』と『救はれる』との目的を完うして、兩者が一つになる。一つになることが、『我れ』と『爾』の全目的である。元は全く一つであつたものが、『我れ』と『爾』とに長く別かれてゐる。それを復た一つに還すのが『救』である。『我れ』は『救はん』が爲に、『爾』は『救はれん』が爲に存在する。宇宙は之れが爲に建立せられ、人生は之れが爲に展開されてゐる。

『我れ』は、神、佛、道など、その名を詮索することは無用である。『爾』を『救ふ』ためのみに在り給ふ絶對の大慈者である。

『爾』は、天上天下わたくし一人である。

『救ふ』は、『我れ』の『爾』に對する全意識の顯現凝集である。その最高顯現は、キリストの十字架と復活、彌陀如來の願行と正覺にある。まことに如來の願行は、十字架の血と滴り、その正覺の成就は、復活の光と輝く。すべてが『我れ』の『爾』に對する全意識――『救ふ』の顯現である。一切が、

『我れ爾を救ふ』

の一聲に歸する。それを、『爾』の此方に受けては、一心歸命の「アーメン」となり、御恩報謝の「南無阿彌陀佛」と口に露はれる。

『爾』――わたくし一人の爲めのみに在り給ふ『我れ』の全意識は、絶對慈悲である。絶對愛である。

右やうの事々に、聲を聞くと共に、一時に氣づかせていたゞいた。

聲を聞く前までも、わたくしは、キリストによる神の救拯を信じてゐた。しかし、その信仰には未だ無理があつた。自分の信仰上の缺陷を、自分で蓋をして、無理に滿足してゐたところが、いくらもあつた。強いてする力行的な信仰であつた。しかし、聲を聞いた時から後は、今までの無理が、すべて自然にとれていつた。それから、今までは奥齒に物の介まつてゐたやうな、物足りない、靴を隔てゝ痒きを搔いてゐるやうなところも無くなつていつた。それと同時に、彌陀如來といふ御方に對する、佛教――淨土眞宗の「純他力の御信心」が、初めて會得がいつたかのやうに思はれた。さうして、キリストの御話、また、使徒たちの信書のなかの節々に對する從前の自分の理解が、その旨趣を變へてしまつて、キリストは實に彌陀如來の救濟、純他力の信心の福音を、お説きになつたものだといふことを、自分の上に引きうけて、まことに、しみじみと、心ゆくばかりに、良くわからしていたゞいた。

一つの物象を、同時に同所で撮影した二つの乾板があるとして、その二つを齊しく重ねてみるならば、そこに二枚の乾

は、全く一つの象を現はすであらう。「淨土眞宗聖典」と「新約聖書」とは、如上の二つの乾板であることを、わたくしは敎へられた。

これから、純他力の信心を撮影した二葉の乾板を、重ね合はして、そこに現はれた心象――一道の信味を書いてゆかう。

『救ふ』とは、よくしてくださることである。

『我れ爾を救ふ』の『救』は、『我れ』と同じものに『爾』を、爲てくださることの謂である。『爾』を、最も良くしてくださるのであつて、絶對最良のものに、無上第一のものに、即ち『我れ』と同じものにしてくださるのが、『救』である。

こゝに於て『救』は充足せられ、『我れ』も、『爾』も、その存在の目的を完成する。『救』は、絶對の救、唯一の救、完全なる救である。

『爾』たるわたくしは、『我れ』と同じものにせられる。否でも應でも、本來が然くせられるためのみに存在する私なのである。『我れ』が佛陀ならば、わたくしは佛陀にせられる。『我れ』が神であるならば、わたくしは神になる。絶對最良のもの、無上第一のものになる。『爾』たる私の本質上、どうしても必ず然くせられてしまふ。こゝに『救』が在る。されば、救はれた後の究竟のわたくしは、親鸞聖人が其の信仰の備忘錄たる「顯淨土眞實敎行證文類」また略して「敎行信證」の證の卷の始めに御書きになつた如く、「利他圓滿の妙位」、「無上涅槃の極果」を獲得するのである。こゝに、わたくし自分の死後の成行きが、はつきりと、うかゞはれる。猶ほ、自分の死後の消息について、すこし書いてをかう。

天國――淨土のうちの消息、即ち、死後のわたくしのことを、無量壽經には「そのもろ〳〵の聲聞、菩薩、天、人、智慧高明にして、神通洞達せり。こと〴〵くおなじく一類にして、形に異なる狀なし。たゞ餘方に因順するがゆへに、天人の名あり。顏貌端正にして、超世希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、みな自然虛無の身、無極の體を受けたるなり」と釋尊が、お說きになつてある。

この死後の消息について、キリストは、「それ死より甦へるときは、娶らず嫁がず、天にある使たちの如し」とお敎へになつた。前の無量壽經の其れと對照して、釋尊の直說と、キリストの御語と、全く同一の消息が現はれてゐるのが、まことに、しみ〴〵と、うれしく思はれる。みな他ならぬ私自分の、死後の事實なのであるから、まことに、うれしいのである。

淨土眞宗の中興の祖、蓮如上人は、「罪悪凡夫の彌陀をたのむ一念にて、佛になるこそ、不思議よ」と仰せられた。まことに、このわたくしといふ醜悪な汚穢な一凡夫が、必ず、佛陀になり、神になり得るといふとの不思議さは元より、古も今も常に人性自然の欲求たる生の「解放」も「改造」も、こゝに盡く充足されるのである。この濁悪邪見な私が神佛と同體になつて「自然虚無の身」「無極の體」を受ける。まさにこれ絶對無上の解放であり改造である。人性の生に對する本能的欲求は、この『救』によつて、始めて最も完全に滿たされる。この世に是れ以上の大滿足が、他に有り得べしとは思はれない「このたび、この身のをはり候はんとき、眞實信心の行者の心、報土(天國のこと)にいたり候ひなば、壽命無量を體として、光明無量の徳用はなれたまはざれば、如來の心光に一味なり」と、慶信坊もお書きになつてある。壽命無量を體として光明無量の徳用を得る、即ち如來の心光と一味にして、彌陀と同體の悟を開く。佛陀となり得るのである。生きんとする無限の欲求は、こゝに始めて充足される。『我れ』は、『爾』を、最もよきものに、即ち、自分と全く同じものにし給ふ。あゝ山中峯太郎は、死ぬのと同時に、佛陀となる。光壽無量の體用を享受する。神通洞達して、三千世界の主人となる。神になる。虚のやうである。しかし、無二の眞實である。一に一を加へれば二になるよりも、猶ほ眞實である。『我れ爾を救ふ』の聲のとほりである。

この『救』の眞實が、キリスト教の信仰の上には、つぎのやうに現はれてゐる。

使徒パウロの書簡のうちに、「聖靈みづから我れ等の靈と偕に、我れ等が神の子たるを證す。我れ等、もし子たらば、また後嗣たらん。即ち、神の嗣子にして、キリストと偕に後嗣たる者なり」との句がある。我れ等は神の子にして嗣子である。「嗣子」は、その本質上、永遠に子としてのみ存在するものではない。親の後を嗣ぐべき素質ある子である。さればこそ嗣子なのである。即ち、子は親の後を嗣いで、親となる。子たる信者は、天にまします父なる神を嗣いで、神になる。

キリスト信者の靈は、この世の肉の死と共に、天國に於て神と同體の榮光に入る。これが信者の靈の完全なる復活である。我れらは永へに神と從屬關係にのみ始終するものではない。神人は、主僕ではない。父子である。我れらは、今生にあつては神の子にして後嗣である。嗣子である。死と共にする復活と共に、まことに神になる。天父を嗣ぐ。キリストの『救』は、こゝに於いて即ち完い。

天路歴程の著者ジョン・バンヤン氏も、その信仰上の過程を

忠實に叙述した「恩寵溢るゝの記」のなかに、「――私はこの世に生きてゐるあひだに言ひ現はし得るよりも、猶ほ其れ以上に、「神の嗣子」といふ語を悟つた。即ち、「神の嗣子」とは、神それ自身が聖徒の資産であることである。私は、これを見、これを驚いた。けれども、私は見たところを、讀者に語り得ない」と、書いてゐる。いかにも神は信者の資産である。信者は神そのものを嗣ぐ。即ち嗣いで神になる。神と人とを遂に二元的に立たしめるユダヤ教の信仰遺風に、深く浸潤されてゐるキリスト教の信仰が、おそらく先入主になつてゐたバンヤン氏自身にとつて、自分が神になる、とまでは明白に書き得なかつたのであらう。それでも、純他力の眞實信心は、常に何處でも時所を絶して唯だ一つである。彼れは神そのものを資産として直覺した。神そのものを享受して、神になり得る死後の榮光を直覺した。「私は見たところを讀者に語り得ない」との結句は、自分の死後の眞消息を、純眞なる信仰によつて正しく發見し得たものゝ、それを語るには、その眞消息が眞に絶大な光榮であることを、暗示してゐる語であると思ふ。それを明白に、自分は神になると語つたならば、他の全般の因襲的な信仰を固守してゐるキリスト教信者から、それがいかに僭越不敵な褻語として取扱はれたことであらう。そのバンヤン氏に對する災厄は、十二年間の囚人生活ばかりでは、おそらく濟まなかつたであらう。

まことに有りがたいことには、前にも書いた如く、眞實信心は時空を絶して二つはなく、使徒ヨヘネも、その信仰の上から、死後の消息を直感して、書簡のなかに、「愛する者よ、我れ等いま神の子たり。後いかん、いまだ露はれず、其の現はれん時には、必ず神に肖んことを知る。そは我れ等その眞の狀を見るべければなり」と、書いてある。「必ず神に肖んことを知る」は、神と同體の榮を受くべき死後の消息を、彷彿として直感し得た純なる信仰から流露した尊き一語である。

使徒パウロの書簡には、神の嗣子としての信仰のほかに、更に、「我れ等の國は天にあり。われらは救主すなはちイエス・キリストの其の處より來るを待つ。彼れは萬物を己れに服はせ得る能に由りて、我れらが卑しき體を化へて、其の榮光の體に象らしむべし」とも錄るしてある。惡凡夫が佛になる心光一味の淨土の趣と、われらの卑しき體が、神としてのキリストの榮光の體に化せらるる天國の消息とは、兩者まさに同一信仰の味である。パウロの書簡にはまた「視よ、我れ爾らに奧義を告げん。我れら盡く寢るには非ず、我れらみな末りの鐵のならんとき、忽ち瞬くひまに化せん。そは鐵ならんとき、死にし人よみがへ

りて壞ちず、我れらもまた化すべければなり」とも書かれてある。これまた「臨終捨命のあかつきに大涅槃を證す」との同一の信味に他ならぬ。

わたくしの死後の成りゆきは、右に書いてきた如くに決定せられてゐる。この往生決定の自分を省みて、「つみふかく、如來をたのむ身になれば、のりのちからに、西へこそゆけ」蓮如上人のお歌を、よそごとならず有りがたく思ふ。

その死後の榮光を、しかし、今から、斯くもあらうかと、實感にのぼし得ることは、わたくしにはできない。凡夫の身でゐて、佛陀の御境涯が、すこしでも分からうはづがない。「一切衆生、佛境を思量すれば、心すなはち狂亂す」と釋尊も般若經に既に仰せられてあるのが、成る程と會得がつく。この世に、まだ人でゐるあひだは、神の自意識を如實に測り知ることはできない。「われら今、鏡をもて見るごとく見るところ昏然なり。されど彼の時には、面を對して相見ん。我れいま知ること全からず。されど彼の時には、我が知らるゝ如く、全く知らん」と、使徒パウロの書簡に記るされてある。存覺上人は「往生といふは、凡夫の情量におほせて、これをいふことばなり。實の生死にはあらざるなり。他力の本願に乘じ、無生の名號を稱して、一乘清淨の土に往生すれば、かの土は、これ法性無生のさかひなるがゆゑに、凡情には生ずとおもへば、自然に無生の理にかなふなり」と、お書きになつた。わたくし風情の身に、ほんとうの所は、分からない。

分からないけれども、佛陀の大悟を證得し神の榮光と一つになれるといふことだけは、よく分かつてゐる。何がどうなるのか、さらに分からないけれども、たゞ絕對に眞に此の上もない結構至極な身のうへにしていたゞけることだけは、まことに心の底を擧げて良く分かつてゐる。さうして、それで無二の大滿足を感じさしていたゞいてゐる。「物の思ひたるより大いにちがふと云ふは、極樂へまいりてのことなるべし。こゝにて、ありがたや、たうとやと思ふは、物の數にてもなきなり。かの土へ生まれての歡喜は、ことのはも有るべからず」と、蓮如上人は仰せられた。身にしみて有りがたく尊い次第である。このお諭が、わたくしの胸に、しつくりと溫かく入つて、くだされて、限りなき滿悅が、こゝに湧いてくる。この人生に於て悅び得る最高の悅びであるとおもふ。

わたくしは、いづれ死ぬ。けれども、永く生きてゐる。わたくしの爲ばかりに、神の懷に用意されてある永生、わたくしが其れを嗣ぐためばかりに備へられてある永生の在ることを思ふ

ときに、「死」は、どこへか消えてしまふ。有るけれども無いのは死である。しかし、「死」は、今でも私は眞に畏ろしい。おそらく死ぬまで畏ろしいであらう。しかしまた、死んでも生きてゐる――必ず生きてゐる永生の事實を、わたくしの爲ばかりに在り給ふ神の恩寵のうちに實感すると、死に對しては畏れながらも、死も猶ほ征伏し得ざる永遠性を含むでゐる山中峰太郎の存在を、明きらかに知覺し實感することができる。こゝに「わたくしは、死なゝい。」との永性の自覺が、顯然と完成せらて、別に强い者にならなくても、弱いまゝで死を畏れながらも、使徒パウロと共に、「死よ、爾の刺は安くに在りや。陰府よ、爾の膝は安くに在りや」と、少しも憚かることなく誓くことができる。できる其の力は、もとより、わたくしの力ではない。まとにすべてが、たゞ恩寵である。讃仰、感謝のほかはない。恩寵にまゐめられて、果ては『我れ』の御心のまへに、歸依せずにゐられない。

無量壽經の名は、永生の書である。「亡ぶること無くして、永生を受けしめん」とは、キリスト敎の精髓であると、信者のあひだに傳へられてある。

「爾時、世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして、光顔巍々たり」釋尊が無量壽經を、お說きならうとする直ぐ前に、斯く變貌せられたことが、その御經のなかに記錄されてある。この釋尊の變貌を拜して、阿難尊者が、「――光顔巍々なること、明淨なる鏡の影、表裏に暢るが如し。威容顯曜にして、超絕したまへること無量なり。未だ曾て殊妙なること、今の如くましますを瞻覩しまづらず――」と、讃仰しつゝ、「何が故ぞ、威神の光々たること、乃ち爾るや」と問ひ奉るに至つて、「――阿難、諦らかに聽け、今、爾が爲に說かん――」斯くて釋尊のお說きになつたのが、無量壽經、卽ち、永生の書であつた。

この釋尊の變貌、卽ち、彌陀の大悟界に冥合し給ひし顯現として、巍々たる光顔と共に、お說きになつた永生の福音こそ、余佛敎の眞髓が現はされたものであるとの信仰によつて、親鸞聖人は、釋尊の變貌を記錄した無量壽經の正文を掲げ「しかればすなはち、これ眞實の敎をあらはす明證なり。まことにこれ如來興世の正說、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極說、速疾圓融の金言、十方稱讃の誠言、時機純熟の眞敎なり。しるべし」と、「敎行信證」の敎の卷の最後に、お書きになつた。その敎の卷の劈頭には、「大無量壽經、眞實の敎、淨土眞宗」と意義の明きらかな標題を、お掲げになつた。

この親鸞聖人の信仰より流露せられて成立した淨土眞宗の名は、神の國の眞の福音の謂ひである。

「イエス、ペテロ、ヤコブ、およびヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて、高き山に登り給ふ。斯くて彼れ等の前にて、その容貌かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ」と、福音書に傳へられてある。顔は日のごとく輝き光[illegible]耀々たるキリストは、神の榮光に入り給ひ、衣は光のごとく白くなり威容顯曜にして超絶したまへること無量にして、釋尊の變貌と、まさに同一の姿色を顯はし給ふたことが拜察される。三人の弟子たちの靈感は、「こは我が愛する子、我が悦ぶ者なり。爾等これに聽くべし」との、上よりの空中の聲を聞いた。

「永生の言は、爾に在り」と、使徒ペテロは、キリストに對して信仰を告白した。「彼れ(キリストのこと)は卽ち眞の神にして永生なり」と、使徒ヨハネも書いた。「神の賜物は、我れの主キリスト・イエスにありて受くる永生なり」と、使徒パウロも書いた。キリスト自身も「永生は、唯だ一つの眞の神にいます爾と、爾の遣はし給ひしイエス・キリストを知る是れなり」と、お祈りになつた。こゝに私一人の、幼き實感に徴するに、この「知る」とは、「體得」の意味であらう。恩寵を體得することが、知ることである。神とイエス・キリストの恩寵を體得すれば、そこに永生の自覺が生まれる。

「彌陀如來は、命のあるじにてまします。そのゆへは無量壽佛とまうして、はかりなき命の佛にてまします」と、「一宗意得之事」といふのに書かれてある。「國中の人、天、壽命能く限量なからん」とは、無量壽經のなかの如來の仰せである。「諸佛のなかに、ひとり無量壽佛と號す。壽命は一切の根元なれば、諸佛も彌陀の智慧より流出し、衆生もまた、かの壽命より、いでゝ、かへりて、みな、如來の壽命に流入すべきなり」と、存覺上人もお書きになつてある。如來の御慈悲に懷かれて、その御慈悲が聞こえれば、自身の往生成佛に疑が無くなる。こゝに無量壽獲得の眞實信心が生まれる。永生の自覺といふのは、「往生の心うたがひなくなり候は、攝取せられまいらせたるゆへとみえて候」と親鸞聖人がお書きになつた、此の自覺である。

今、斯くある人生は一つしかない。此の同じ處にて、人類の受け得る永生――無量壽に、佛教のそれと、キリスト教のそれと、二つの異なつた種類が有るべきでない。

靈鷲山上の釋尊の變貌と、ヘルモン山にてと傳へられるキリストの變貌と、その日のごとく輝き給ひし兩尊の耀々たる光顏の上に、表顯せられた彌陀の大悟界の光明と、神の榮光とは、

わたくしの信仰の上に、まさしく唯一絶對界の顯現として映り給ふ。かしこしとも、かしこき同一顯現であり給ふ。「教」に、佛教あるひはキリスト教との、特異な冠辭、固有名詞の存在は、わたくしに些の權威も有しない。純善の教は、唯だ一つ、「我れ爾を救ふ」の福音、たゞ一つである。

『我れ爾を救ふ』――『爾』は、わたくし一人である。ひろげれば十方衆生＝全人類の上に擴充される。

十方衆生を、我れ救ふ。との彌陀の全人格が、無量壽經のなかに、四十八條の本願になつて展開せられてゐる。如來は、此の四十八願を說きをはり給ふて、更に三つの誓を含む頌を述べ給ふた。

「我れ無量劫に於て、大施主と爲りて、普く諸々の貧窮を濟はずんば、誓つて正覺を成ぜじ」これが彌陀如來の三つの誓のうちの一つである。限りなく生きんとする本能の欲求、生の解放を求め、生の改造を欲する本能、それらが滿たされざる靈的「貧窮」に對し、永遠＝「無量劫」のうちに、「大施主」として、人類の靈的缺陷を滿足せしむべく臨在し給ふ救主の名は、彌陀である。

この「大施主」としての佛格の地上に顯現せられたものが、キリストのパンの奇蹟である。パンの奇蹟の眞意義は、こゝにある。

「イエス、その五つのパンと二つの魚をとり、天を仰ぎ謝して、パンをわり、弟子に與へて、人々のまへにおかしむ。また二つの魚を、人ごとに分け與へぬ。衆人みな食ひ飽き、そのパンと魚の餘屑を拾ひしに、十二の筐に盈ちたり」キリストの地上の生涯のうちに、パンの奇蹟は、この他に猶ほ一つある。七つのパンと少量の魚をとりて、四千人ばかりの者に分け與へ給ひ、すべての人々は食ひ飽きて、その餘屑を、七つの籃に拾ひとつた。キリストは、此の時に、大施主と爲りて、普く諸々の貧窮を濟ひ給ふた。彌陀の佛格を體現し給ふた。衆生の貧窮なる靈的饑渴は、キリストの分與し給ふ福音のパンを飽喫して、はじめて滿足して救はれる。キリストは「大施主」であり給ふ。

「我れは生命のパンなり。我れにきたる者は餓ゑず、我れを信ずる者は恒に渴くことなし」と、キリスト自身も宣言せられた。わたくしは、キリストの手のうちから、限りなく更に後から後からと殖えてくるパンの奇蹟の上に、「大施主」として「普く諸々の貧窮を濟ひ」給ふ彌陀の慈心の顯現を仰ぐ。

海上の颶風をしづめ給ひ、また、あるときは海面を歩み給ひしキリストの奇蹟も、大いなる驚異である。

「イエス、舟に登りければ、弟子たちも之れに従ふ。このとき大いなる颶風おこりて、舟を蔽ふばかりなる浪たちし、イエスは寝ねたり。弟子たち之れに近づきて醒し曰ひけるは、主よ、救ひ給へ、我れら亡びんとす。イエス、彼れらに曰ひけるは、信仰うすき者よ、何ぞ懼るゝや。遂に起きて、風と海とを斥しめければ、大に平息になりぬ。人々、奇しみ曰ひけるは、こは如何なる人ぞ、風も海も之れに従ひたり」親鸞聖人の御作のうちの節々が、この海の奇蹟によつて顯はされてゐる靈的意義の内容を、まことに良く的確に教へて下さつた。

「生死の苦海ほとりなし。ひさしくしづめるわれらをば、彌陀弘誓のふねのみぞ、のせてかならずわたしける」この和讃の一節を拜讀したときに、わたくしは、キリストの海の奇蹟に氣づかせていたゞいて、おのづからなる讃仰の一念に、暫くつゝまれてゐた。その奇蹟の眞意義が、はつきりと、わたくしの胸にをさまつた。親鸞聖人の御信仰が説明してくださつた。

「イエス、直ちに、その弟子を强ひて舟に乘せ、むかふの岸なるベテサイダへ先づわたらしめ、己れは衆人を歸らしむ。衆人を歸らしゝのち、祈禱のために山に往けり。日暮れて舟は海の中に在り。イエスは獨り陸に居れり。風逆らふによりて、弟子たちの舟を漕ぐに勞れたるを見て、曉の四時ごろ、イエス、海の上を履みきたり、彼れらを過ぎんとせしに、弟子、その海を履めるを見て、變化の物ならんかと意ひ、叫びたり。そは弟子みな之れを見て懼れしが故なり。イエス、直ちに彼れらに語りて曰ひけるは、心安かれ、我れなり、懼るゝこと勿れ。遂に舟に登りしかば、風やみぬ。彼れら心の中に駭き異しめること甚し」こゝにも、海に關する奇蹟がある。

海は、「流轉」の象徴であると思ふ。船は、「救拯」の象徴であると思ふ。「常沒流轉の凡愚」――「生死大海」などゝのこゝろも聯想される。「流轉輪廻もきはもなし。苦海の沈淪いかゞせん」の和讃もある。逆風激浪については、「濁世の起惡造罪は、暴風駛雨にことならず」との和讃の一節もおもひだされる。「無明長夜の燈炬なり。智眼くらしとかなしむな。生死大海の船筏なり。罪障おもしとなげかざれ」静かに之れを唱へさせていたゞくと、海の奇蹟によつて顯示せられしキリストのうちに充ち滿てる深奥なる恩寵――キリストの仁心が、ひた／＼と私の胸のすみ／＼にまで、隈なく溶けこむでくださるのを覺える。

「彌陀、觀音、大勢至。大願のふねに乘じてぞ、生死のうみに

ろかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ」との和讃もある。觀音は慈悲の化身、勢至は智慧の化身。慈悲は恩寵であつて、智慧は眞理である。使徒ヨハネはキリストを讃仰して「それ道、肉體と成りて、我れ等の間に宿れり。我れら其の榮を見るに、眞に父の生みたまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充てり」と書いた。觀音勢至の佛格を一身に鍾め給ふたキリストその人を、使徒ヨハネは「恩寵と眞理にて充てり」と觀じた。

「小慈小悲もなき身にて。有情利益はおもふまじ。如來の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき」との親鸞聖人の御述懷を拜すると、聖人の御信仰の裏に、船上のキリストが、歷々と生きてゐられるのを、感じずにゐられぬ。まことに眞實信心は一味であると思ふ。「大願海のうちには、煩惱のなみこそなかりけれ。弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり」との和讃もある。斯くて後の奇蹟に顯はされしキリストの仁心は、親鸞聖人の御信仰のなかに、輝いてゐると思ふ。

「しかれば大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮かみぬれば、至德の風しづかに衆禍のなみ轉ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土にいたりて、大般涅槃を證し、普賢の德に遵ふなり。知るべし」と、親鸞聖人は、その御悅びを披瀝なされた。「すみやかに無量光明土にいたる、」淨土の彼岸に到達する。ヨハネ傳福音書には、海の奇蹟について、この彼岸到達の趣を明きらかに、「弟子喜びて彼(キリスト)をうけ、舟に登せければ、直ちに其の往かんとする所の地に着きぬ」と書かれてあるのが、深い肯定的印象を、わたくしの信仰の上にあたへる。

省みて、この舟の乘客が、わたくしなのである。この奇蹟のことを斯く書いてゐるのは、決して他のことを述べてゐるのではない。わたくし自分のことを書いてゐる自叙なのである。「懼るゝな」とのキリストの御語、「罪障おもしとなげかざれ」との和讃の一節、それは同じ一つの聲で、死を畏れてゐるわたくしを懇ろに慰撫してくださる。「わがたましひを、あいするエスよ。なみはさかまき。かぜふきあれて、しづむばかりの、この身をまもり、天のみなとに、みちびきたまへ」讃美歌の一節を、こゝに書きつゝ默誦する。彷彿として、キリストの臨在を近き身邊に感じつゝ。

「彼の八道の船に乘じて、能く難度海を度す。自から度し亦彼を度せん。我れ、自在人を禮しまつる」大乘佛教組成の第一中心者たる龍樹菩薩の「易行品」のうちの一節である。菩薩の禮拜し給ひし「自在人」に、キリストの面影を、わたくしは明きらかに偲ぶ。

變貌、パンの奇蹟、海の奇蹟に、彌陀の地上顯現を仰ぐ私は、キリストが諸々の難病を治し給ひし奇蹟によつて、こゝに如來靈能の明きらかなる顯現を、更に敎へられる。

無量壽經のなかに、釋尊は、彌陀の威神光明の最尊第一なることを讃嘆なされた後に、「それ衆生ありて、斯の光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踊躍して、善心生ず」と仰せになつてある。癩病、癱瘋、癲癇など、いづれも心靈の汚穢と缺陷と濁惡との象徵である。それがキリストの靈能を受けて潔められ、健全になり、正氣に復して治癒される。治癒されて「三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踊躍して、善心生ず」るの奇蹟は、福音書の隨所に記るされてある。

瞽者は、「智眼」の缺けたる者。跛者は、「行足」の缺けたる者。また「目連所問經」のなかには、「眼無き人」「耳なき人」と、釋尊が仰せられてある。靈的不具の象徵者は、福音書のなかに、キリストを幾重にも圍繞してゐる。「難化の三機、難治の三病は、大悲弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治し、これを憐憫して療し給ふ。たとへば醍醐の妙藥の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし。本願醍醐の妙藥を執持すべきなり。しるべし」と、親鸞聖人の、お書きなつたのを拜すると、この一文の趣旨は私に、キリストの病者に對する奇蹟の恩寵を直ちに聯想せしめ渇仰せしめ給ふ。

龍樹菩薩の御著述「十住毘婆娑論」の中には、キリストが治し給ふた癩病、癱瘋、癲癇などより、熱病、手枯、腹脹などに至るまでの、福音書の中に書かれてゐる殆ど有らゆる病名を列擧して、「これみな惡羅刹なり」とお書きになつてある。羅刹とは人を食ふ魔鬼であるといふ。キリストは人に憑いてゐる惡鬼を殆ど隨所に逐ひ出し給ふた。

煩惱の「繋縛」との語もある。「十八年鬼に患らはされたる婦あり。傴僂りて少しも伸ぶること能はざりき。イエス之れを見て呼び、婦よ、爾は其の病より釋さるゝと曰ひて、手を婦に按きければ、直ちに伸びて、神を讃美せり」とある煩惱の「繋縛」が「釋された」のである。イエスが此の婦を癒やし給ひしを見て、その會堂の宰が「安息日に爲され」と曰つて怒つた。イエスのお答へは「——十八年サタンに縛られたる其の結びを、安息日に解くべからざらんや」と仰せられた。「煩惱の繋縛」——「サタンに縛られたる結び」「釋す」——「解く」——「解脫」などの語のうちに、キリストの恩寵と、彌陀の靈能とは、一つになつて含まれてゐる。「惡鬼」と「惡羅刹」と、「煩惱」と「サタン」と、い

づれは一つである。「八萬四千の煩惱」といふ。ガダラ人は「レギヨン」すなはち一聯隊の夥しき悪鬼＝煩惱に憑かれてゐたのを、キリストによつて逐ひ出していたゞいた。

死者もまた、靈的に死せる象徴である。「逆謗の死骸」、「雜毒雜心の死骸」などの語もある。キリストの恩寵は、死者をも復活せしめ給ふた。逆謗も、雜毒雜心も、恩寵のまへには障りにならぬ。「凡聖逆謗齊しく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し」とは親鸞聖人の「正信偈」の中の一節である。

すべて、誰れも、彼れも、眞宗信者の御同行たる妙行人も、キリスチアンたる聖徒も、同じ一味の恩寵慈悲に救はるゝ人々である。「同一に念佛して、別の道なきが故に、遠く通ずるに、夫れ四海の內、みな兄弟たるなり」と、天親菩薩は「淨土論註」のなかに、お書きなされた。「それ神の旨に從ふ者は、是れ我が兄弟、我が姉妹、我が母なり」と、キリストも仰せられた。

アウガスチンも、親鸞聖人も、フランシスも、蓮如上人も、皆同じ淨土天國に歸つてゆかれた。而して、かく書きつゝある此の峯太郎その者までも、生前生後の逆謗兇惡すこしの障りなく、聖人や聖徒たちと全く同じ所に還へらしていたゞけるといふ。我が事ながら、今更に、まことに大いなる奇蹟である。省みて强い自己驚異に撲たれざるを得ぬ。再び省みて、まことに我れならぬ歡喜踊躍、感激の涙を禁じ得ない。涙と共に溫い一道の法悅を、我が衷に汲みとらしていたゞく次第である。今しばらくペン軸をさし擱いて、この悅びをしみ〴〵と悅ばしていたゞかう。報謝、報謝、それもたゞ「有りがたうございます」と、申上げるより他に、私には何もない。

「健やかなる者は、醫者を要せず。たゞ病ある者、これを要す。我れは正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり」キリストの御語である。「罪人を招かんとて來れり」こゝにキリストの世に來り給ひし御本旨の宣言が有る。寸毫も疑ふ餘地なき最も明白なる自己宣言を、こゝにキリスト御自身の唇より拜し得る次第である。「正しき人を招かんとにはあらで」キリストが世に來り給ひし御本旨は、正しい人の爲ではない。善人を招かんとにはあらで、「罪人を招かんとて來れり」。實に惡人を招き給はんが爲である。

キリストの世に來り給ひし御本旨は、惡人救拯に在る。その地上の御生涯に徵しても、キリストの昵近者は、殆ど「罪ある人」のみであつた。キリストの御振舞を見て、人々は「彼れ（キリスト）は罪人の家に入りて客となれり」――「この人は罪人を

迎へて食を共にす」――「なにゆゑ爾等(キリストと共の弟子)は取税人、罪人らと共に飲食するか」などと呟いた。

前記の御宣言によつてみても、醫者を要する「病ある者」は「罪人」の象徴である。而して、福音書の殆ど如何なるページにも、病者の有らざるはない。キリストの御生涯より、病者との御應對を除外しては、すでにキリスト傳の基調は成り立たない。キリストは病者――罪人をこそ愛し給ふ。惡人をこそ愛し給ふ。キリストの福音は、惡人救拯を本旨とする。「正しき人」――善人は、キリストの世に來り給ひし本然の御目的には適はない。

さるにても惡人救拯の御本旨は、彌陀如來本然の御慈心である。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひと、つねにいはく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人は、とおほせさふらひき」親鸞聖人の御物語を傳へた「歎異鈔」の第三節の文である。こゝに惡人救拯の福音がある。キリストの世に來り給ひしお本旨が最も明白に徹底して、この一文の上に活現されてある。惡人が救はれる。されば此の私こそ最も當然に救はれる。救はれねばならぬ惡人救拯、こゝに安心が在る。この福音あつて始めて私は心を安くする。キリストは惡人の友であり給へばこそ、わたくしはキリストに最も親しくしていたゞける。斯くてこそ、キリストは私にとつて友のうちの友であり給ふ。「すこしでも、よきことあれば迷ふのに、まるで惡るうて、わしの幸はせ」との誰れかの歌があつた。わたしの愛誦歌の一つである。

「他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり」この歎異鈔のうちの一節を、わたくしは悅ぶ。キリストは一の譬を語り給ふて「二人のもの祈らんとて、宮にのぼる。一人はパリサイ人、一人は取税人なり。パリサイ人、たちて心のうちに斯く祈る。「神よ、我れは他の人の、強奪、不義、姦淫するがごとき者ならず、又、この取税人の如くならぬを感謝す。我れは一週のうちに二度斷食し、すべて得るものゝ十分の一を獻ぐ」と。

然るに、取税人は、遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ「神よ、罪人なる我れを憫れみたまへ」と。我れ爾らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おほよそ己れを高うする者は卑うせられ、己れを卑うする者は高うせらるゝなり」と仰せられた。この譬に、取税人の祈の言「神よ、罪人たる我れを憫れみたまへ」のこゝろこそ、「他力をたのみたてまつる悪人」そのまゝの語に他ならぬ。この人こそ「義とせられて」即ち「往生の正因」を備ふるものとして、神の御本旨、本願他力の意趣に、まさしく適ふ者である。「一週のうちに二度斷食し、すべて得るものゝ十分の一を獻ぐ」るパリサイ人、「自力作善のひと」は、「ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあら」ざる人として、キリストは譬のうちにも之れを嘉し給はなかつた。罪人は罪人のまゝにて、取税人に於けるが如くに「義とせらるゝ」福音こそ、悪人救拯の御本旨である。彌陀の慈心、キリストの仁心にてまします。

「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず。佛智無邊にましませば散亂放逸もすてられず」との御和讃を拝すれば、自分を賣りし弟子のユダをも、「友よ」と呼び給ひしキリストのいかなる悪人をも愛し給ふ仁心が、ます〱懐しく讃仰せられる。

悪人をこそ、ます〱深厚に愛し給ふ。「譬へば人に七子ありて、其のうちに一子、病に遇ふときは、父母の愛は平等ならざるにあらずと雖も、然も病子に於いて、心ひとへに重きが如く、如來もまた諸々の衆生に於いて、平等ならざるにあらざれども、然も罪ある者に於て、心ひとへに重し」これは釋尊が「涅槃經」にお說きになつた慈音である。「爾らのうち、誰れか百匹の羊を有たんに、若し其の一匹を失はゞ、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出だすまでは尋ねざらんや、遂に見出ださば、喜びて之れを己が肩にかけ、家に歸りて其の友と隣人とを呼び集めて言はん『我れと共に喜べ、失せたる我が羊を見出だせり』と。我れ爾らに告ぐ、斯くのごとく悔い改むる一人の罪人のためには、悔い改めの必要なき九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あるべし。又、いづれの女か銀貨十枚を有たんに、若し其の一枚を失はば、燈火をともし、家を掃きて見出だすまでは、懇ろに尋ねざらんや。遂に見出ださば、其の友と隣人とを呼び集めて言はん『我れと共に喜べ。我が失ひたる銀貨を見出だせり』と。我れ爾らに告ぐ、斯くのごとく悔い改むる一人の罪人のために、神の使たちの前に歡喜あるべし」キリストの語り給ひし此の譬と、猶ほ、御自分が世に來り給ひし御本旨の宣言として、更に「それ人の子の來れるは、失ひたる者を

尋ねて救はん爲なり」との御語を拜する時に、「九十九人の正しき人」よりも、「一人の罪人」をして「悔改」めしめ給ふことを悦び給ふ惡人救拯の仁心が、まさしく「涅槃經」の其れと一つなる如來の慈心に他ならぬことを、わたくしは謹みて欽慕しまつる次第である。キリストは斯くその全體が常に彌陀如來の最高體現者であり給ふ。彌陀の大悟界を御本地として、惡人救拯のために垂迹し給へる救主であり給ふ。「キリスト・イエス、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信ずべく正しく受くべき言なり。其の罪人の中にて我れは首なり」との、使徒パウロの告白は、惡人救拯を本旨とし給ふキリストに仁心、彌陀の慈心に適へるものである。

「罪人の首」なればこそ、使徒パウロは救はれた。「我れは是れ烏帽子もきさる男なり。十惡の法然房が、念佛して往生せんと云ひて居たるなり。また愚癡の法然房が、念佛して往生せんと云ふなり」と、法然上人も自ら仰せられた。「淨土眞宗に歸すれども、眞實心はありがたし。虛假不實のわが身にて、淸淨の心もさらになし。外儀のすがたはひとごとに、賢善精進現ぜしむ。貪瞋邪僞おほきゆへ、奸詐もゝはし身にみてり。惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり。修善も雜毒なるゆへに、虛假の行とぞなづけたる」と、親鸞聖人も御述懷あそばされた。

「我れは我が中、すなはち我が肉のうちに、善の宿らぬを知る。善を欲すること我れにあれど、之れを行ふ事なければなり。我が欲する所の善は之れをなさず、反つて欲せぬ所の惡は、之れをなすなり。我れ若し欲せぬ所の事をなさば、之れを行ふは我れにあらず。我が中に宿る罪なり。然れば善をなさんと欲する我れに惡ありとの法を、我れは見出だせり。我れ、中なる人にては神の律法を悅べど、我が肢體のうちに他の法ありて、我が心の法と戰ひ、我れを肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る。噫、我れ惱める人なるかな、この死の體より我れを救はん者は誰れぞ」と、使徒パウロも、其の書簡のうちに、衷心の惱苦を述べてゐられる。聖人も聖徒も、御自分の「惡」に惱み給ふた。惱み給ひつゝも其の「惡」をこそ救ひ給ふ彌陀の慈心、キリストの仁心を、更に大きく猶ほ強く御悅びになつた。惡人救拯の福音によらずして、誰れが救はれやうぞ。さゝやかなる私さへも、とにもかくにも自分の「惡」に聊かながらも氣づかせていたゞく。それと同時に、この「惡」をこそ救ひ給ふ、大靈のみこゝろが仰がれる。「惡」は、そこに何の障りにもならぬ。惡ありてこその御慈悲と思へば、常に惡を懷いて、わたくしは時々に感泣する。それに延いて、「つみとがをくやむ、こゝろこそは、父よりあたふる、たまものなれ」この讃美歌の一節

に共鳴のこゝろが動く。

「大いなる群衆、跛者、不具、盲人、啞者、および他の多くの者を連れきたりて、イエスの足もとに置きたれば、醫やし給へり」あらゆる「病ある者」＝「罪人」は、キリストの靈能をうけて醫やされた。「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我れに躓かぬ者は幸福なり」とキリスト自身も仰せられた。いかなる病者も醫やされた。病ある者の治癒は、罪人救拯の象徴である。その病を醫やし給ひし時に、キリストは、「爾の信仰、爾を救へり」と、屢々仰せられた。『救』は信仰に依る。いかなる罪人も、信仰によりて救はれる。「信仰により功なくして義とせらる」とは、使徒パウロの信仰の第一義である。その書簡のうちに、「我れらは思ふ、人の義とせらるゝは、律法の行爲によらず、信仰に由るなり」または「それ働く者への報酬は、恩惠といはず、負債と認めらる。されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたまふ神を信ずる者は、その信仰を義と認めらるゝなり」との旨趣を、使徒パウロは宣傳してゐる。彼れの主要なる書簡は、此の慈音福音の宣傳の爲に費やされてゐる。信仰一つによつて救はれる「往生之業、信心爲本」は、淨土眞宗の心髓である。「彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず。たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと。云々」と親鸞聖人は、その御信心を語り給ひ、蓮如上人は之れを承繼がれて、「聖人一流の御勸化のをもむきは、信心をもて本とせられ候」とお書きになつた。人は律法の行爲によつては、斷じて義とせられざる旨趣を、親鸞聖人は、「蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ。如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん」と、お述べになつた。「律法に由りて神の前に義とせらるゝことなきは明きらかなり。義人は信仰によりて生くべしとあればなり」――「律法に由りて義とせらんと思ふ爾らは、キリストより離れたり。恩惠より墮ちたり。我れらは御靈により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるゝことを待てるなり。キリスト・イエスに在りては割禮(受戒と同義)を受くるも割禮を受けぬも益なく、たゞ愛によりてはたらく信仰のみ益なり」などゝの、使徒パウロが、殆ど常に反覆力説するところは、まことに「往生之業、信

心爲本」の一慈音に他ならぬ。「信心を以て本と爲す」とは、そのまゝパウロの高調せし常用語である。

「爾の信仰、爾を救へり」斯くキリストは仰せられた。そこに治癒されし有らゆる病者は、キリストの靈能を受けて治癒された。病者を醫やし救ひ給ひし靈力は、一にキリストのうちより流れいでたる大能の動力に他ならぬ。まことに病者自身の力ではない。「爾の信仰」は、「爾に與へられたる信仰」である。その信仰によつて、いかなる罪人も救はれる。與へられたる靈能によつて、いかなる病者も醫やされた。眞實の「信仰」は、靈能の感動である。親のまごゝろの子に徹したものが、子の孝心として子のうちに動く。『我れ爾を救ふ』との『我れ』の至誠心が、『爾』のうちに徹つた時に、『爾』のうちに動いて『我れ』に對する眞心を發露する之を「信仰」と呼ぶ。純眞なる孝心は、子のうちに徹底し化成せられたる親心の顯現である。流動の源泉は子には無い。一に親にある。純眞なる信仰の源泉は、一に神にある。その源を人のこゝろより發するところのものは、すでに虚濁なる第二義以下の情意に屬する。「爾の信仰」は「爾の有になれる信仰」である。賜はりたる信仰、他の力によりて與へられたる信仰である。キリストは先づ醫やし給ひ其の靈能を病者の衷に注ぎ給ふて後に、始めて「爾の信仰、爾を救へり」と仰せられた。信仰によつて醫やされた其の信仰はキリストの靈能より發せられたものである。この他力信仰の旨趣を使徒パウロは、「爾らの信ずるは、神の大いなる能の感動に由るなり」と書いた。また「爾ら恩惠に由りて救を得。これ信仰に由りてなり、已れに出るに非ず。神の賜なり」とも書いた。賜である。「信心とは、まことのこゝろとよむなり。行者のかたにおこすゆへに、わがこゝろよりおこるとおもへども、もと如來の御こゝろより、おこさしめたまふなり。もし行者のこゝろをいはゞ、いつはりまがりて、かたましければ、まことのこゝろとは、まふしがたし。如來のすぐなる御こゝろなるがゆへに、まことのこゝとはまふすなり」と、蓮如上人も、お書きになつた。信心は如來の御こゝろである。「信仰によりて義とせらるゝ」とは、すでに「信仰」そのものが神の「義」なのである。「彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに」と親鸞聖人も仰せられた。信仰卽義なるこそ、他力純眞の信仰である。

「信樂といふは、すなはちこれ如來の滿足大悲圓融無礙の信心海なり。このゆへに疑蓋間雜あることなし。かるがゆへに信樂となづく。すなはち利他廻向の至心をもて信樂の體とするなり。しかるに無始よりこのかた、一切の群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし。法

爾として眞實の信樂なし。こゝをもて無上の功德に値遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし。一切の凡小、一切時中に、貪愛の心つねによく善心をけがし、瞋憎の心つねによく法財を燒く。急作急修して、頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒雜修の善となづく。また虛假諂僞の行となづく。眞實の業となづけざるなり。この虛假雜毒の善をもて、無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり」親鸞聖人は斯く御書きになつた。「敎行信證」の信の卷にある。人は他力純眞の信仰によりてのみ救はるべくして、自力策勵による律法の義の、いかに汚濁に充てるものなるかゞ、こゝに拜せられる。「往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす。其のほかをばかへりみざるなり」とも親鸞聖人は仰せられた。「彌陀のかたより、たのむこゝろも、たうとや、ありがたやと、念佛まふすこゝろも、みなあたへたまふゆへに、とやせんかくやせんと、はからふて念佛まふすは、自力なれば、きらふなり」と蓮如上人も仰せられた。「爾の信仰、爾を救へり」その靈能の感動によつて救はれる。たゞ信仰一つによつて救はれる。その信仰さへも、「神の賜」「彌陀のかたよりあたへたまふ」純他力の信仰、絕對他力の信仰によつて救はれる。『救』の靈能が、救はれるこちらに來て、信仰となる。「金剛堅固の信心は、佛の相續より起る。他力の方便なくしては、いかでか決定心をえん」との親鸞聖人の和讃。また「この信心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち、他力のなかの他力なり」と同じく聖人がお書きなつたのなど、純他力の要諦は、絕對の大慈心より流露發動せられたる無上の信仰である。絕對の大慈心は時所を越えて唯だ一つの實在であり給ふ。やがて、佛敎と、キリスト敎との歸一點が、この純他力の要諦「我れ爾を救ふ」の一慈音に存することを、わたくしは、また他力の信心によつて、信じてゐる。

キリストが、その弟子たちに、「爾らは我れを誰れと言ふか」と、問ひ給ひし時に、バルヨナ・シモン即ち使徒ペテロは、その信仰を告白して、「爾はキリスト、活ける神の子なり」と申しあげた。キリストは更に之れに答へ給ふて、「バルヨナ・シモン、爾は幸福なり。爾に之れを示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。我れはまた爾に告ぐ。爾はペテロ（磐の意義）なり。我れ此の磐の上に、我が敎會を建てん。黃泉の門は之れに勝たざるべし。我れ天國の鍵を爾に與へん。凡そ爾が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は、天にても解く

所なり」と仰せられた。

キリストを、キリスト即ち救主なりとして、「活ける神の子なり」として承納れる純眞の信仰は、後天的の人の理解によるのではなく、「血肉にあらず、天にいます我が父」によつて示された純他力の信仰であることを、キリストは、こゝにも仰せられた。その信仰を告白したシモンは、この時に、ペテロ＝磐と命名せられた。シモンのキリストに對する磐のごとき信仰の上に救世の教會を建設すべく、「我れ此の磐の上に我が教會を建てん」とキリストは仰せられた。「黄泉の門は之れに勝たざるべし」死も此の磐の信仰には勝ち得ない。天なる父の賜ひし磐のごとき不壞の信仰は、如來より賜はりし金剛堅固の信心である。

神は「唯一の眞の神」とキリストは仰せられた。神は唯だ一つにてましませば、それより賜はる金剛不壞の信仰もまた唯だ一つである。有らゆる數萬の病者は醫やされた。醫やし給ひしは唯だキリスト御一人であり給ふ。十方衆生は救はれる。救ひ給ふ靈能は唯だ一つである。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマ（洗禮）は一つ、すべての者の父なる神は一つなり」と使徒パウロは、その書簡のうちに明記した。純他力信仰は、萬人の信仰みな唯だ一つである。絶對一味の御信心であつて、そこに差別は絶無である。

「法然聖人の御とき、御弟子そのかずおほかりけるなかに、おなじ御信心のひとも、すくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信（親鸞聖人）が信心も、聖人（法然聖人）の御信心も、ひとつなりとおほせのさふらひければ、勢觀房、念佛房なんどまうす御同朋達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおはしますに、ひとつならんとまうさばこそ、ひがごとならめ、往生の信心においては、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあげゝれば、法然聖人のおほせには、源空（法然聖人）が信心も如來よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も、如來よりたまはらせたまひたる信心なり。さればたゞひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまいらんずる淨土へは、よもまいらせたまひさふらはじと、おほせさふらひしかば、當時の一向專修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心に、ひとつとならぬ御ことも、さふらふらんと、おぼえさふらふ」これ

は親鸞聖人の御物語である。「歎異鈔」に記錄されてゐる。前記の使徒パウロの「信仰は一つ」とあつたのと對照して、時所を絕する純他力信仰の唯一なるまへに、佛敎とキリスト敎との差別を、わたくしは毫末も感じ得ない。

哲學で、編みあげた神は、他の哲學のために動搖する。概念を綜合して造りあげた神は、他の概念のために崩される。すべて後天的なる自力の信仰には、歷史のうへに、知識のうへに、敎義のうへに、佛敎とキリスト敎とは區別せられねばならぬ。たゞ對絕の大慈より出づる純他力信心のうへには、『我れ爾を救ふ』ことのみを全意識としたまふ唯一の大慈心をのみ感じるばかりである。「神は愛なり」と使徒ヨハネは書いた。「佛心とは大慈悲是れなり」と釋尊は「觀無量壽經」に仰せられた。「涅槃經」には、「大慈大悲を名づけて佛性となす」「慈は卽ち如來、如來は卽ち慈なり」と仰せられた。古今を貫き、東西を蓋ふて、「愛」は一つである。その愛の靈動による信仰も一つである。『我れ』も『爾』も『救』も時所を超絕して一つである。

「我れは正しき者を招かんとにあらで、罪人を招きて、悔い改めさせんとて來れり」キリストはまた斯くも仰せられた。罪人の眞の「悔改」は、自身の力により自分の心よりするのではなく、「悔い改めさせ」られる他力の「悔改」である。

九十九匹の羊を野におき、失はれたる一匹の羊を見出だすまで尋ね、見出だして肩にかけ、家に歸りて大いに悅び、また失はれる一枚の銀貨を、燈火をともし家を掃いて、懇ろに尋ね見出だしては卽ち悅ぶ。この「悔改」に關するキリスト直說の譬話を思へば尋ねられ肩にかけられて家に連れ歸らされるのが「悔改」である。燈火をともされ家を掃かれ懇ろに尋ねられ見出だされるのが、「悔改」である。眞の「悔改」は全く他力より出づる。「それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり」とのキリストの仰せにみるも、失せたるを尋ねられる「悔改」は、キリストよりせらるゝことを知る。「悔い改めさせんとて來れり」と最も明白にキリストも其れを御宣言になつた。「爾ら悔い改めて福音を信ぜよ」とはキリストの第一宣傳であつた。されば「悔改」は、信ぜざりしを悔い改めて信ずるにいたるの謂ひである。不信より信へ「悔い改めしめ」給ふがキリストの世に來り給ひし御本旨である。其の不信より信への「悔改」は、畢竟するところキリストより信仰を賜はるの謂に他ならぬ。人すでにキリストの靈能に觸れて「悔い改めさせ」られた時に、すでに、其の心の懐を省みれば、キリストの仁心が信仰と

なつて信者の衷に靈動されてゐるのを覺える。從前の心機はこゝに不信より信へ廻轉させられる。「廻心」とは即ち是れである。「悔改」は「廻心」に他ならぬ。

不信より信へ「廻心」する「悔改」の消息は、親鸞聖人の「自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつる」心機の一轉である。「こゝろをひるがへして」が「廻心」即ち「悔改」である。「その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ」と、「歎異鈔」にあるのを、心静かに拜するならば、この一文のうちより、「爾ら悔い改めて福音を信ぜよ」とのキリストの御語を明きらかに聞く。また悔い改めて信ぜよと仰せられて、惡を悔い改めて善を行へとは仰せられなかつた。「信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、かならず廻心(悔改)すべしといふこと、この條、斷惡修善のこゝちか。一向專修のひとにおいて、廻心(悔改)といふこと、たゞひとたびあるべし」と、「歎異鈔」に仰せられてある。キリストもまた、「斷惡修善」の悔改を宣傳し給はずして、「信ぜよ」とのみ仰せられた。「一切のことに、あしたゆふべに廻心(悔改)して往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちは、いづるいき、いるいきをまたずして、をはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、攝取不捨の誓願は、むなしくならせおはしますべきにや」とも仰せられてある。まことに他力純眞の金剛信心を賜はりて、その刹那に廻心する一轉機は、人の生涯に唯一度のみ存在する。苟くも一度以上に亘つて、即ち變化のあるものは、「金剛堅固」の眞實心ではない。「斷惡修善」の悔改は、然し無限の前途を有してゐる。惡より善に精進する無限の悔改を完全にし得て始めて救はるゝものならば、もし然らざるうちに死に接する信者の靈は、遂にキリストの招きに入らないのであらうか。前記の「歎異鈔」の一文は、こゝの事を仰せられた。彌陀如來の「攝め取りて捨てざるの誓願」とは、「我れに來る者は、我れかならず之れを棄てず」と仰せられしキリストの誓語である。その仁心の凝集は十字架に鍾まる。惡より善に悔改め得ざるうちに逝く信者の靈が亡ぶるものならば、キリストの「攝取不捨」の象徴たる十字架は空しく朽廢せらるるであらう。

眞の「悔改」はキリストの靈能よりせらるゝ純他力より出で、信仰を賜はる回心の謂である。之れに反して「斷惡修善」の「悔改」は重き一つの自力的律法であるのに過ぎない。それは假初

めにも福音ではない。「神あるひは彼れらに悔い改むるの心を賜ひて眞理を悟らせ給はん」「神の仁慈は爾らを悔改に導き」などゝ使徒パウロも書いた。この「悔改」は人爲的心象を謂ふのではない。

淨土眞宗の信條として傳へられる蓮如上人の御作「改悔文」は、名のごとく、「悔改」の文である。その短かき一文の最初は、「もろ〳〵の雜行雜修自力のこゝろをふりすてゝ、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへと、たのみまうして候」と記るされてある。不信より信へ。「雜行雜修自力の心をふりすてゝ――たのむ」が即ち純眞なる「悔改」である。然も「たのませて、たのまれ給ふ方なれば、たのむこゝろも、われとおこさず」との古歌もある。尋ねられ見出だされ肩にかけられ連れて歸らせられる純他力の「悔改」の眞消息が、こゝにある。斯くて『救』は始終を一貫して純他力の救拯である。わたくしは斯くて始めて救はれる。「我れに來るものは、我れかならず之れを棄てず」とのキリストの誓語は、「父もし引かされば、人よく我れに來るなし」との御語と相待つて、その「攝取不捨」の全き御仁心に浴し得る。「往く」のは「引かれる」のである。「來れ」と仰せられても、敢て一歩だも動かうとはしない石のごとき私が、「父に引かれ」て、即ちキリストに「招かれ、」「悔い改めさせ」られ、信仰の「賜」を受けて、そこに始めて頑い盲ひたる瞳を開かせられてキリストを漸く仰ぐ。キリストと共に「神の嗣子」となる。永生を保證される。そのすべてが『救』である。その『救』を感じた時は、既にすでに「悔い改めさせ」られてゐた時なのである。

「彌陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」これは「歎異鈔」の最初に記錄せられてある親鸞聖人の御語である。獲信、＝廻心、＝悔改、の心象が、この簡潔ある一文のうへに歴々と流露されしてゐる。「攝取不捨の利益」にあづかつて、そこに念佛もうさんと「おもひたつこゝろ」がおこり、その「こゝろ」は「往生をばとぐるなりと信じ」たこゝろの發動であつて、それは「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせ」たしるしである。「たすけ」と、「信ずるこゝろ」と、「念佛まうすこゝろ」と、「攝取不捨」とは、一つの機能より流動せらるゝ同一の心調である。その總べての心象は、一に「彌陀の誓願不思議」より發せられる。されば純他力信仰の第一義諦は、「不思議」亡言絶慮の境涯に屬

る。親鸞聖人は屢々「佛智不思議」と仰せられた。時と空と因果とに繋がれてゐる相對者＝人の言に意に、もし完全に示し現はされ得るものならば、それは既に已に相對界に墮在せるものである。絕對他力の慈心より授けられたる信仰の心象、その靈と靈との交渉の內容は、たゞ「不思議」一語に盡きる。「佛智うたがふつみふかし。この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし」＝「悔い改めて福音を信ぜよ」と、和讃にある。「不思議」をたのめよとある。

されば『救』に對する信仰の心理は、たゞ是れ冷煖自知すべき不立文字の境涯に屬す。「父のほかに、子は誰れなると識る者なく、また、子および子の顯はす所の者ほかに、父は誰れなると識る者なし」と、キリストも仰せられた。この父子のみ相知の境涯を親鸞聖人は「如來の誓願は不可思議にましますゆへに、佛と佛との御はからひなり。凡夫のはからひにあらず」とお書きになつた。父子のみの相知＝「佛と佛との御はからひ」＝「唯佛與佛」の境涯は、使徒パウロによつて更に精細に、「神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり。と有るが如し。されど我れらには、神これを御靈によりて顯はし給へり。御靈は、すべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。それ人のことは、己が中にある靈のほかに、誰れか之れを知らんや。斯くのごとく、神のことは神の御靈のほかに知る者なし。我れらの受けし靈は、世の靈にあらず、神より出づる靈なり。是れ我れらに神の賜ひしものを知らんためなり。また我れら之れを語るに、人の智慧の敎ふる言を用ひず。御靈の敎ふる言を用ふ。卽ち靈の事に靈の言を當つるなり。性來のまゝなる人は、神の御靈のことを受けず、彼れには愚なる者と見ゆればなり。また之れを悟ること能はず、御靈のことは、靈によりて辨ふべきものなるが故なり」と、殆ど餘蘊なきまでに書きつくされてある。

『救』は、靈と靈との交渉、靈と靈との握手である。淨土眞宗の或る信者に、「あなたの御領解は」と、訊ねた時に、訊ねられた其の人は「もろ〳〵の雜業雜修自力のこゝろをふりすてゝ、一心に阿彌陀如來、我れらが今度の一大事の後生おたすけさふらへとたのみまうして候――」と、蓮如上人のお書きになつた「改悔文」またの名「領解文」を、そのとほりに述べた。領解とは信仰の領得理解といふほどの意味であらう。訊ねられた人が「領解文」を型のやうに述べるのを聞いて、訊ねた人は、「おなた、それでは、お淨土まいりはかなひませぬぞ」と試みに言つた。すると更に答へて、「さあ、そのまいれぬ私を、まいらせて下さる御慈悲でござります。まいれぬ私がまいらしていただき

ます」と、言ひつゝ「南無阿彌陀佛」を低唱して、訊ぬられた人は、その恩寵を悦び讃へたとの話を、わたくしは嘗て聞いた。「救はれぬ私は、救はれる」此の純眞なる他力信仰の内容に誰れか容喙し得やう。苟しくも第三者の覗観するを許さゞる一髪の隙なき靈と靈との抱擁化合＝唯佛與佛、＝父子のみ相知の境涯が、こゝに在る。こゝに至れば「信仰」といふも、尚ほすでにもどかしい。對者を前に置いて、それを此方から信じてゐるのではない。對者から攫まれて、それと一つに化せられるのである。父子相迎＝神人合一の眞趣に他ならぬ。

またある人に、「あなたの御領解は」と訊ねたときに、その人はたゞ「大不思議、大不思議」とのみ答へたといふ。「いつゝの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくぞなき。佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓にあづけたり」と、和讃にある。その彌陀の弘誓の畢竟するところは即ち『我れ爾を救ふ』に歸する。其「誓願不思議」なる『救』にあづかつて、「救はれぬ私が救はれ」果ては只だ「大不思議」の一語より他にはない「信心決定」の時、すなはち「如來より賜はりたる信心」をいたゞいた時が、その人の往生の確定せられた時である。親鸞聖人は、「信心のさだまるときに、往生さだまるなり」と、お書きになつた。さうして、其の前には「眞實信心の行人は、攝取不捨のゆえに、正定聚のくらゐに住す。このゆえに臨終をまつことなし。來迎をたのむことなし」と、お書きになつてある。臨時をまたざる往生が、こゝに有る。「正定聚」とは、釋尊が「無量壽經」のなかに、「それ衆生ありて、彼の國に生まれんとする者は、皆悉く正定之聚に住す」と仰せられたのより出でゝゐる。淨土に往生の人と正しく定められた聚りに入れらるゝとの謂である。親鸞聖人は之れを「如來の本願の御名を信ずるひとは、自然に不退のくらゐに、いたらしむるをむねとすとおもへとなり。不退といふは、佛にかならずなるべきみと、さだまるくらゐなり。これすなはち、正定聚のくらゐにいたるをむねとすと、ときたまへるみのりなり」と、お書きになつた。されば「信心さだまるときに、往生のさだまり」し人は、既に此の現世に於て、「正定聚に住し」此の世に此の肉體の存在するまゝに往生の身となるのである。即ち、平生より往生の業が成立してゐる其れを、「平生業成」と稱へる。淨土眞宗が特有の信仰味である。

釋尊は「無量壽經」に、「諸有ゆる衆生、其名號（彌陀如來の）を聞きて、信心歡喜し、乃至一念せんに、至心に回向し給へり。彼の國に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て、不退轉に住す」と仰せられた。この即ち往生を得る「即御往生」は「正定聚に住し」たると同一の靈的消息を示すものであつて、釋尊の

如上の御語の「諸有ゆる衆生――不退轉に住す」る趣は、まさに獲信の心象を現示し給ひしものである。この趣を柔く解説して「報土往生の他力不思議の信念を、善知識ありて、つたへときて、さづくるを、行者きゝうるによりて、文のごとく、一念歡喜のおもひ、おこるにつきて、往生たちどころに定まるを、正定聚のくらゐに住すともいひ、かならず滅度にいたるともいひ、攝取不捨の益にあづかるともいふなり。このときすなはち、凡夫自力の心のつくるときなれば、こゝろのをはりともいふべし。しかれば、ふたゝび臨終をまつべきにあらず、信心のさだまるとき、往生またさだまるゆゑなり」と、「本願鈔」に示されてある。存覺上人は「親鸞聖人の一流にをひては――平生をいはず、臨終をいはず。たゞ信心をうるとき、往生すなはちさだまるなり。これを即得往生といふ」と、お書きになつた。

親鸞聖人は、此の現世に於ける「即得往生」の義を、少からず御說きあそばしたやうに拜察せられる。「即得往生といふは、即はすなはちといふ。ときをへず、日をもへだてぬなり。また即はつくといふ。そのくらゐに、さだまりつくといふことばなり。得はうべきことをえたりといふ。眞實信心をうれば、すなはち無碍光佛の御こゝろのうちに、攝取してすてたまはざるなり。攝はをさめたまふ。取はむかへとるとまうすなり。おさめとりたまふとき、すなはち、日をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり」――「即得往生は、信心をうれば、すなはち往生すといふ。すなはち往生すといふは、不退轉に住するをいふ。不退轉に住すといふは、正定聚のくらゐにさだまるなり」など、お書きになつた。この「即得往生」に關する聖人の御信仰の最も良く現はされてゐるのは、「體失、不體失の往生の事」とある信仰上の興味ゆたかなる左の物語である。

「聖人親鸞のたまはく、先師聖人源空（法然聖人）の御とき、はかりなき法門評論のことありき。善信（親鸞聖人）は、念佛往生の機は體失せずして往生をとぐといふ。小坂の善惠房證空は、體失してこそ往生はとぐれ云々。この相論なり。こゝに同朋のなかに勝劣を分別せんがために、あまた大師聖人源空の御前に參じてまふされていはく、善信御房と善惠御房と、法門評論のことはんべりとて、かみくだんのおもむきを、一一にのべまふさるゝところに、大師聖人源空のおほせにのたまはく、善信房の體失せずして往生すとたてらるゝ條は、やがてさぞと御證判あり。善惠房の體失せずして往生すとたてらるゝ條、やがてさぞとおほせあり。これによりて、兩方の是非わきまへがたきあひだ、そのむねを衆中よりかさねてたづねまうすところに、おほせ

にのたまはく、善惠房の體失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機(善を修し或は自力の念佛によりて往生する者の謂)あればなり。善信房の體失せずして往生するよしまうさるゝは念佛往生の機(信心一つによりて往生する者の謂)なればなり。如來教法元無二なれども、正爲衆生機不同なれば、わが根氣にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり。

念佛往生は佛の本願なり。諸行往生は本願にあらず。念佛往生には、臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の一心、他力よりさだまるとき、即得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて聞持する平生のきざみに、治定するあひだ、この穢體亡失せずといへども業事成辨するは、體失せずして往生すといはるゝ歟。本願の文(無量壽經の文)あきらかなり。かれをみるべし。——(下略)

かくて法然聖人また「即得往生」の義を、「この穢體亡失せずといへども」此の肉身のまゝに往生することそ、「佛の本願」佛陀救拯の御本意なることを、明きらかに御證判になつた。この「即得往生」の義は、キリスト教に謂ふ「新生」と同一味である。「即得往生」は、「新生」と同義である。この生に於ける「生」である。キリスト教にいふ「新生」——「更生」——「重生」など、いづれは「即得往生」の義に他ならぬ。

ユダヤ人の宰なるニコデモといふ人が、キリストのもとを訪れたときに、キリストは「まことに誠に爾に告ぐ。人、新たに生まれずば、神の國を見ること能はず」と仰せられた。「人はや老いぬれば、いかで生まるゝことを得ん。再び母の胎に入りて生まるゝことを得んや」とのニコデモの疑惑に對して、キリストは更に、「まことに誠に爾に告ぐ。人は水と靈とによりて生まれずば、神の國に入ること能はず。肉によりて生まるゝものは肉なり。靈によりて生まるゝものは靈なり。爾ら新たに生まるべしと我が爾に言ひしを怪しむな。風は己がまゝに吹く。爾その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて靈によりて生まるゝ者も、斯くの如し」と仰せられた。新生の靈的消息が、こゝにある。「すべて靈によりて生まるゝ」不思議さを、キリストは、その實在を知り得て去來するを測り難い「風」に譬へたまふた。「たゞ誓願を不思議と信じ、また名號(南無阿彌陀佛)を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき、きゝわけ、しりわくるなど、わづらはしくは、おほせられさふらふやらん。これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候」と、親鸞聖人も、不思議を不思議として信ずべきことをお勸めになつた。「佛智不思議と信ぜさせ候ひなば、別にわづらはしく、とかくの御はからひあるべからず候」ともお書きになつた。「即

得往生正定聚」の位に住したる人は、親鸞聖人の御語の如く「佛に必ずなるべき身と定ま」つたのである。これを「淨土眞實信念の人は、この身こそ、あさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしとまうすことも、あるべしとしらせたまへ」ともお書きになつた。この如來とひとしき卽得往生の靈的消息を、使徒ペテロは「讃むべきかな、我れらの主イエス・キリストの父なる神、その大いなる矜恤にしたがひ、イエス・キリストの死人の中より甦へり給へることにより、我れらを新たに生まれしめて、生ける望を懷かせ、爾らの爲に天に蓄へある、朽ちず、汚れず、萎まざる嗣業を繼がしめ給へり」と書いた。不朽の嗣業を繼がしめられし新生は、如來とひとしき卽得往生と、同一境涯に住するものである。

「卽得往生は、信心をうれば、すなち往生すといふ」との親鸞聖人の御語のごとく、それも之よりまた純他力の信心を賜はる靈能に他ならぬ。その純他力による新生の「靈によりて生まるゝ」恩寵を、使徒パウロは述べて「我れらの救主なる神に仁慈と、人を愛したまふ愛との顯はれしとき、我れらの行ひし義の業にはよらで、唯だ其の矜恤により、更生(新生)の洗と、我れらの救主イエス・キリストをもて、豐かに注ぎたまふ聖靈による維新とにて、我れらを救ひ給へる。これ我れらが其の恩寵によりて義とせられ、永遠の生命の望にしたがひて世嗣とならん爲なり」と書いた。永生の「世嗣と」なることは、「佛に必ずなるべき身に定ま」つて、無量壽を享受する「正定聚に住する」の謂に他ならぬ。

「平生の一念によりて、往生の得否は、さだまれるものなり。平生の時、不定のおもひに住せば、かなふべからず。平生のとき、善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、その時をもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし」と、覺如上人は仰せられた。こゝに從前の舊生命の死がある。猶ほ覺如上人は、この「卽得往生」と共にする舊生命の死を、「無始よりこのかた生死に轉環して、出離を希求しならひたる迷情の自力心に、本願の道理を聞くところにて、謙敬すれば、心命のつくるときにてあらざるや。攝取不捨の益にもあづかり、往正定聚のくらゐにもさだまれば、これを卽得往生といふべし。善惡の生處をさだむることは、心命のつくるときなり。身命のときにあらず。しかれば臨終を期すべからざる義、道理文證あきらけし」と、お書きになつた。臨終を待たざる舊生命の死と共に、新生を得る靈能の消息が、こゝにある。これを使徒パウロは「爾ら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合ふバプテスマ(洗禮)を受けたる我れらは、その死に合ふバプテスマを受けしを。我れらはバ

プテスマによりて、彼れとともに葬られ、その死に合はせられたり。これキリストが父の榮光によりて、死人の中より甦へらせられ給ひしごとく、我れらも新しき生命に歩まんためなり。我れらキリストに接がれて、その死の狀にひとしくば、その復活にも等しかるべし。我れらは知る、我れらの舊き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の體ほろびて、こののち罪につかへざらん爲なるを。そは死にし者は罪より脫るゝなり。我れら若しキリストと共に死にしならば、また彼れと共に活きんことを信ず。キリスト死人の中より甦へりて復た死に給はず、死もまた彼れに主とならぬを我れら知ればなり。その死に給へるは、罪につきて一たび死に給へるにて、その活き給へるは、神につきて活き給へるなり。斯くのごとく爾らも己れを罪につきては死にたるもの、神につきてはキリスト・イエスに在りて活きたるものと思ふべし」とその舊死新生の信仰を力說した。死より生へ、その「即得往生」の生と、「新生」の生と、生命は恒に一つである。如來の信心による新生、キリストによる即得往生。何れともに現世に永生＝無量壽を享受して、そこに『救』を自覺する。「不思議」である。しかも「怪しとするな」と、キリストは仰せられた。

されば、淨土眞宗の信者も、キリスト教の信者も、すでに現世の地上に於て、同一の靈的鄕土に住むでゐる。「超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にあそぶなり」と、親鸞聖人は地上の「新生」を讚美なされた。「爾らバプテスマを受けて、彼れ（キリスト）と共に葬られ、また死より彼れを甦へらしゝ神の大能を信ずるに因りて、彼れと共に甦へらされたり――既に爾らキリストと共に甦へりたれば、天に在るものを求むべし――夫れ爾らは死にし者にて、其の命はキリストと共に神の中に藏れ在るなり」と、使徒パウロは、地上の「即得往生」の靈趣を說いた。

キリストに手を按かれんことを希望して、人々が、嬰兒たちを運れてきた。弟子たちは、それを見て禁めたけれども、キリストは、幼兒たちを呼びよせ給ふて、「幼兒たちの、我れに來るを許せ。止むるな。神の國は斯くの如き者の國なり。我れ誠に爾らに告ぐ、おほよそ幼兒のごとくに神の國をうくる者ならずば、之れに入ること能はず」と仰せられた。「新生」すなはち「神の國に入る」者は、「幼兒のごとくに神の國をうくる者」である。そこに學慧も、理解も、批判も、思辨も、あらゆる知識は、神の國に入りて「新生」を得る爲には用をなさぬ。「幼兒のごとく

に」純眞に信ずるには、宗教學も、哲學も、科學も、盡く無用である。

「各々、十餘箇のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちを、とひきかんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめし、おはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もし、しからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひと〴〵にもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然上人）のおほせをかうふりて、信ずるほかに、別の子細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」と、親鸞聖人が、求道の人々に仰せられた。こゝに、まさしく「幼兒のごとき」親鸞聖人を觀る。聖人は、またみづから「愚禿親鸞」と仰せられた。「愚禿」の二字に、「幼兒のごとき」聖人のみこゝろを觀る。

「それ十字架の言は、亡ぶる者には愚かなれど、救はるゝ我れらには、神の能力なり。錄して「我れ智者の智慧をほろぼし、慧き者の慧きを空しうせん」とあればなり。智者いづこにか在る。學者いづこにか在る。この世の論者いづこにか在る。神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや。世は己れの智慧をもて神を知らず（神の智慧に適へるなり。）この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救ふを善しと爲たまへり。ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。されど我れは、十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。これはユダヤ人に躓物となり、異邦人に愚となれど、召されたる者には、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の能力、また神の智慧たるキリストなり。神の愚かは、人よりも智く、神の弱きは人よりも强ければなり」と、使徒パウロは、人の智慧と、神の智慧との、眞實の賢愚いづれにあるかを說き示した。この二種の智慧について、蓮如上人は、

「それ、八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ、一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。しかれば、當流のこゝろは、あながちに、もろ〳〵の聖教をよみ、ものをしりたりといふとも、一念の信心のいはれをしらざる人は、いたずら事なりとしるべし」とお書きになつた。すべての理論も學識も、佛智を信受し、キリストを知るには無用である。

「――かまへて學匠沙汰せさせたまひさふらはで、往生をとげさ

せたまひ候べし。故法然聖人は、淨土宗の人は愚者になりて、往生すと候しことを、たしかにうけたまはり候しうへに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、ゑませたまひしを、みまいらせさふらひき。文沙汰して、さか〳〵しきひとのまいりたるをば、往生いかゞあらんずらんと、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり」と、親鸞聖人も、「往生必定」なる愚者の智慧を、お書きになつた。使徒パウロの書簡にも、この「往生必定」の人に就いて、「兄弟よ、召を蒙れる爾らを見よ。肉によれる智こき者おほからず、能力ある者おほからず、貴き者おほからず。されど、神は、智こき者を辱づかしめんとて、世の愚かなる者を選び、強き者を辱づかしめんとて、弱き者を選び、有る者を亡ぼさんとて、世の卑しきもの、輕んぜらるゝ者、すなはち無きが如き者を選び給へり」と、記るされてある。斯くて、親鸞聖人の御徳を讃へた「嘆徳文」には、「内に宏智の徳をそなふといへども、名を碩才道人のきゝにてらはんことをいたみ、ほかにたゞ至愚の相を現じて、身を田夫野叟の類にひとしめふせんと欲す。これすなはち、ひそかに末世凡夫の行狀をしめし、もつぱら下根往生の實機を表するものをや」と、「幼兒のごとく」佛陀の本願慈心を信受し給ひし聖人の愚にして賢なる御面影が描かれてゐる。また使徒パウロは自叙して、「神の御靈によりて禮拜をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我れらは、眞の割禮(受戒と同義)ある者なり。されど我れは肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃む所ありと思はゞ、我れは更に恃む所あり。我れは八日めに割禮を受けたる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、熱心につきては教會を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所なかりし者なり」として、その從前の宗教的血統に族籍に戒律に力行に何れも缺くるところなき自信を披瀝した後に、「されど曩に我が益たりし事は、キリストのために損と思ふに至れり。然り、我れは我が主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、すべての物を損なりと思ひ、彼れのために既に總べての物を損せしが、之れを塵芥のごとく思ふ」と述べ、從前のすべてを捨てた。同じく親鸞聖人も、「聖道難行の門をさしおいて、淨土易行の道に歸し、たちまちに自力の心をあらためて、ひとへに他力の願に乘じ」給ふて、使徒パウロと同一轍を選び給ふた。

　されば純他力信心の境涯は、たゞ「幼兒のごとく、」「往生には、かしこきおもひを具せずして、たゞほれ〳〵と、彌陀の御

思の深重なること、つねにおもひだしまいらすべし。しかれば、念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほに、いふひとのさふらふよし、うけたまはる。あさましくさふらふ」と、「歎異鈔」に仰せられてある境致が即ち本眞の信仰である。そこに信者自身の「はからひ」は毫も無い。理論も智識も無い「幼兒のごとき」思ひ邪なき歸依のこゝろのみが存在する。

この毫も「はからひ」の無い心趣を、法然聖人は「義なき義」と仰せられた。それを受繼ぎ給ひて親鸞聖人も「彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、義なきを義とすとこそ、大師聖人《法然聖人》のおほせにてさふらへ。かやうに義のさふらんかぎりは、他力にはあらず、自力なりときこへてさふらふ。また他力とまふさすは、佛智不思議にてさふらふなるときに、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりをえさふらふなることをば、佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ。しかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすとは、自力のひとのはからひをまふすなり。他力には、しかれば義なきを義とすとさふらふなり」と、繰りかへして「無義の義」の、「幼兒のごとき」信仰の眞趣を、お述べになつた。

この純眞なる他方信仰のこゝろを、蓮如上人は、「佛法には、無我と仰せられ候。われと思ふことは、いさゝかあるまじきことなり」とも、「他力の御すゝめにて候。ゆめ〳〵われといふことは、あるまじく候」とも仰せられた。こゝに無知の知がある。無義の義がある。「心得たと思ふは、心得ぬなり。心得ぬと思ふは、こゝろえたるなり。彌陀の御たすけあるべきことの、たうとさよと思ふが、心得たるなり。少しも心得たると思ふことは、あるまじきことなり」とも、蓮如上人は仰せられた、この「彌陀の御たすけあるべきことの尊さよと思ふ」智慧が、眞實の智慧である。授けられたる佛智。「聖靈に感じて」と使徒パウロの言ひし智慧である。「イエス聖靈によりて喜びて言ひたまふ「天地の主なる父よ。我れ感謝す、これらのことを智きもの、慧き者に隱して、嬰兒に顯はしたまへり。父よ、然り、かくの如きは御意に適へるなり」——」と、天父の聖旨をキリストの感謝し給ひしことが福音書に傳へられてある。嬰兒に顯はされる佛智不思議の慈心を讚へ給ひしキリストの大いなる法悦が、こゝにある。その「父」の御名は「彌陀」である。

純眞なる幼兒のこゝろは、無雜なる「一心歸命」のこゝろであ

る。キリストの悦び感謝し讃美し給ひし「幼兒のごとき」信仰は、すなはち思邪なき絶對歸依。「無量壽經」に謂ふ「至心信樂」のすがたを、讃へ給ひしものに他ならぬ。さうして、この「至心」は、卽ち彌陀如來よりの賜であることが、純他力の信心と唱へらるゝ所以である。

彌陀如來の誓願に、「もし我れ佛となるをえたらんに、十方の衆生、至心信樂し、我が國に生まれんとおもふて乃至十念せんに、もし生まれずば正覺をとらじ」との旨が、「無量壽經」に仰せられてある。この誓願を、親鸞聖人は、「至心信樂の願」と讃仰あそばした。その至心信願の誓願が成就せられて如來が正覺を取り給ひし後の文のうへには、「あらゆる衆生、その名號（彌陀の御名）を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に廻向し給へり。彼の國に生まれんと願へば、卽ち往生するを得、不退轉に住す」と、同じく「無量壽經」に現はされてある。こゝに衆生の卽得往生の途が開かれ、「至心に廻向したまへり」卽ち衆生は「至心」を如來よりあたへられ、その至心は衆生の胸のうちに、「一心歸命」の「信樂」の華を開く。されば「至心信樂」の幼兒のこゝろは、親にてまします如來「至心」の發露である。信心は卽ち佛心であつて、「大信心は佛性なり。佛性すなはち如來なり」と、親鸞聖人は、お書きになつた。この「至心信樂」の親子相愛の趣を、「我れらが神を愛するは、神の先づ我れらを愛し給ふに因れり」と、使徒ヨハネは書いた。

如來の至心を廻向せられて、人は一心歸命の信樂を獲得し、そこに純眞無雜の信仰を生む。これを親鸞聖人は、「教行信證」の信の卷の序に、「夫れ以みれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり」と、劈頭に御書きになつた。猶ほ、信の卷の本文には、この如來廻向の慈心を讃仰あそばして、「大信心は、すなはちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり」と、お書きになつた。これは一に親鸞聖人が御自分の信仰味を、そのまゝ告白あそばしたものであつて、經文の句を、たゞ徒らに列擧あそばしたものではない。

如上の「至心廻向」の信仰味を、キリスト教に言へば、それは「聖靈の賜」の義である。聖靈は卽ち「神の靈」であり、神の至心である。

「爾ら惡しき者ながら、善き賜物を、その子らに與ふるを知る。まして、天の父は、求むる者に、聖靈を賜はざらんや」と、キ

リストは仰せられた。聖靈を賜ふ「至心廻向」の消息が、こゝにある。使徒ペテロは、神の大慈を說いて、神は、その選民なりと自負しあるイスラエルの民族のみならず、異邦の民にも平等に其の至心を廻向して十方衆生を救ひ給ふ爲に、キリストを遣はし給ふたのであるとの新しき福音を、イスラエル民族たるユダヤ人たちの前に述べて、「兄弟たちよ、爾らの知るごとく、久しき前に、神は爾らの中より我れを選び、我が口より異邦人(ユダヤ人ならざる異教者)に福音の言を聞かせ、之れを信ぜしめんと給へり。人の心を知り給ふの神は、我れらと同じく、彼れらにも聖靈を與へて證をなし、かつ信仰によりて彼れらの心をきよめ、我れらと彼れらとの間に隔てを置き給はざりき」と、一視平等なる聖靈賜與の福音を說いた。また、使徒パウロは、「靈によりて信仰を賜はり」と書いた。「至心」より廻向せられる「信樂」の賜との謂に他ならぬ。

「爾らも眞の道すなはち爾らを救ふ福音を聞きし後、キリストを信じ、我れらが業を嗣ぐの質なる約束の聖靈を以て印せらる。神が聖靈を以て印し給ふは、その買ひうけしものを救ひ、且つおのれの榮を顯はさんためなり」——「神はまた我れらに印し、且つ質として靈を、我れらの心に賜へり」などゝ、使徒パウロは、神の嗣業の保證として、聖靈の賜與せらるゝ自身信仰上の實驗味を說いた。「嗣業」とは、神の業を嗣ぐの謂、キリストの仰せられし「永生を嗣ぐ」の義に他ならぬ。「神の賜物は、我れらの主キリスト・イエスにありて受くる永生なり」とも、使徒パウロは書いた。その永生——無量壽を享受すべき質、すなはち保證としての聖靈の賜與は、「涅槃畢竟の眞因」また「證大涅槃の眞因」たる「信心」を廻向せらるゝの義である。「如來、清淨眞實信樂をもて、諸有の衆生に廻向したまへり」と、親鸞聖人も同一の靈趣を、お說きになつた。されば永生の保證たる聖靈の賜は、また即ち親鸞聖人の「長生不死の神方」に他ならぬ。斯くて、至心廻向——聖靈の賜與により、永生を嗣ぐべき「往生必定」の身にせられたる信者の境涯を、使徒パウロは「斯く爾ら神の子たる故に、神は其の子の靈を、爾らの心におくり、あゝ父よと味ばしめ給ふ。されば最早、爾らは僕にあらず、子たるなり。既に子たらば、また神によりて嗣子たるなり」と、述べて、聖靈の賜が、神よりのおくりもの即ち「選擇廻向の直心」なることを現はし、そこに「神によりて嗣子たる」正定聚の位に住せしめらるゝ趣を說いた。この神よりのおくりものたる聖靈の賜を、親鸞聖人は更に「如來、清淨の眞心をもて、諸有の衆生に廻向したまへり」とも、お書きになつた。「すべて天の使は、救を嗣がんとする者に事へんため遣はさるゝ靈に非ずや」とも、使徒パ

ウロは書いた。

「この心、これ如來の清淨廣大の至心なり。これを眞實心となづく。至心すなはちこれ大悲心なり。」また「この心すなはちこれ、本願圓滿、清淨眞實の信樂なり、これを信心となづく。信心すなはちこれ大悲心なり」また、「この心すはちこれ不可思議、不可稱、不可說、一乘、大智願海、廻向利益他の眞實心なり。これを至心となづく。すでに眞實といへり。眞實といふは涅槃經にいはく、實諦といふは一道清淨にして、二あることなきなり。眞實といふは、すなはち是れ如來なり。如來はすなはちこれ眞實なり。眞實は卽ち是れ虛空なり。虛空はすなはちこれ眞實なり。眞實はすなはちこれ佛性なり。佛性は卽ち是れ眞實なり」などゝ、親鸞聖人は、至心すなはち如來すなはち佛性なることを、お述べになつた。聖靈は、神の靈である。キリストは、「神の靈となり」と仰せられた。使徒パウロは「主は卽ち靈なり」とも書いた。この至心を廻向せられて、こゝに「佛凡一體」——「機法一體」の妙用を現はし、聖靈の賜によつて、「神人合一」の恩寵を受ける。

キリストは、神に、「父よ、爾、我れにいまし、我れ爾にをるごとく、彼れら(衆生)も我れらに居らん爲なり。是れ爾が我れを遣はし給ひしことを世の信ぜん爲なり。我れは爾の我れに賜ひし榮光を、彼れらに與へたり。是れ、我れらの一つなるが如く、彼れらも一つとならん爲なり。卽ち、我れ彼れらに居り、爾、我れに在し、彼れら一つとなりて全くせられん爲なり」と、お祈りになつた。釋尊は「觀無量壽經」に、「諸佛如來は是れ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入り給ふ」と、お說きになつた。衆生の心想の中に如來の入り給ふ「佛凡不二」の境涯を、使徒パウロは、「爾ら若し棄てらるゝ者ならずば、イエス・キリストは爾らの中に在し給ふ」と、書いた。また「爾らの身は、爾らが神より受けたる爾らの衷にある聖靈の殿なり」とも、「爾らは活ける神の殿」なりとも、「爾らは神の殿にして、神の靈なんぢらの中に在すことを知らざるか」とも書いた。この「聖靈の殿」——「神の殿」なる機法一體のすがたを、蓮如上人は、「彌陀をたのめば、南無阿彌陀佛の主になるなり。南無阿彌陀佛の主に成るといふは、信心をうることなり」と仰せられた。「聖靈の殿」は卽ち「南無阿彌陀佛の主」である。また「一心とは、彌陀をたのめば、如來の佛心と、一つになしたまふが故に、一心といふなり」と、蓮如上人の仰せられたものは、「主に合ふものは一つの靈となるなり」と、使徒パウロが述べたものと、同一の信味である。同じく「キリストをして信仰に由りて爾らの心に居らめ」——「我れらはキリストの心をもてり」などと、使徒パウロ

によつて述べられあるものは、「たきぎに、火をつければ、はなるゝことなし。たきぎは行者の心にたとふ。火は彌陀の攝取不捨の光明にたとふるなり。心光に照護せられたてまつりぬれば、わが心をはなれて、佛心もなく、佛心をはなれて、わが心もなきなり」と、「安心決定鈔」に記るされてゐるのと同一境涯である。

「心光照護」すなはち彌陀の光明のうちに攝め取られてゐる信味は、「キリストの中に在る」こゝろに他ならぬ。同一法味である。

神は第一の我れである。キリストは第二の我れである。之れを書いてゐる現在の山中峯太郎なる私は第三の我れである。この三つの我れを一つにするのが『救』である。その『救』の靈能が、「聖靈の感動」である。法身は第一の我れである、如來は第二の我れである。わたくしは第三の我れである。この三つの我れを一つにする『救』の靈能は、彌陀の「願力」である。

聖靈の感動は、彌陀の願力よりおこる。

親鸞聖人の仰せられた「願力」は、『我れ爾を救ふ』との彌陀如來誓願の意思力である。その意思の衆生に徹する至心の賜與、即ち「願力廻向」は、「聖靈降臨」の義である。

キリストが既に復活し給ひて、まさに昇天し給はんとする際に、「我れ我が誓のものを爾らにおくらん。爾ら上より力を授けらるゝまでは、エルサレムに留まれ」と、弟子たちに仰せられた。弟子たちはエルサレムの一つ處に心を合はせて集まつてゐた。而して「こゝに於て彼れらはみな聖靈に滿たされ」と、「使徒の傳記」に書かれてゐるやうに、聖靈、すなはちキリストの仰せられし「誓のもの」――「力」が、弟子たちの上におくられた。聖靈は即ち力である。『救』の意思力である。「それ十字架の教は、亡ぶる者には愚かなるもの、我れら救はるゝ者には、神の力たるなり」――「わが言ひし所また宣べしところは、人の智慧の婉言を用ひず。唯だ靈と力の證を用ひたり。そは爾の信仰をして、人の智慧に由らず、神の力に由らしめんとおもへばなり」などゝ、使徒パウロが書いたごとく、十字架の教――キリスト教は、『救』の「力」である。「彌陀の誓願不思議」なる佛教の『救』もまた「願力廻向」の法である。力の教である。

キリストが、病者を醫やし、すなはち罪人を救ひ、これに信仰をあたへ給ひし靈能もまた、キリスト自身の裏に充てる力による奇蹟であつた。「婦あり。十二年血漏を患ひ、醫者の爲に、その身代を盡く費したれども、誰れにも癒やされ得ざりしが、

イエスの後に來りて、御衣の裾にさはりたれば、血の出づること、たちどころに止みたり。イエス言ひ給ふ、我れに觸はりたるは誰れぞと。人みな否みたれば、ペテロ及び共にをる者ども言ふ、君よ、群衆が爾を圍みて押し迫るなりと。イエス言ひ給ふ、我れに觸はりし者あり、能力の我れより出でたるを知ると。婦おのが隱れ得ぬことを知り、戰き來りて、御前にひれふし、觸はりし故と、たちどころに癒えたる事々とを、人々の前にて告ぐ。イエス言ひ給ふ。「むすめよ、爾の信仰、爾を救へり。安らかに往け」そのキリスト自身より出づる能力によりて、病者は醫やされた。罪人は其の聖靈至心の力を享けて救はれる。これが病者に對する奇蹟の眞意義である。この「願力廻向」の『救』なる靈的病者の全癒について、蓮如上人は「總じて、つみはいかほどあるとも、一念の信力にて、けしうしなひたまふなり。」と仰せられ、「されば無始以來、輪轉六道の妄業、一念南無阿彌陀佛と歸命する佛智無生の名願力にほろぼされて、涅槃畢竟の眞因、はじめてきざすところをさすなり」との存覺上人の御語をも引いて、罪と妄業とが「願力」によつてほろぼされる靈的病者の全癒。即ち聖靈賜與の靈的事實を、お說になつた。この靈的事實の地上に顯はされたものが、キリストの對病奇蹟である。人類の『救』は、大靈の力用である。力である。その顯現の本體は一である。「我れらの救主なる神」の名は、即ち、彌陀であり給ふ。

「我れ若し神の靈によりて鬼を逐ひ出したならば、神の國は、もはや爾らに至れり」と、キリストは仰せられた。聖靈の廻向と共に、人は「神の國」を享ける。聖靈は、神の至心である。「この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり」と、親鸞聖人は、お書きになつた。

「神の國」は「菩提心」の義である。

「夫れ神の國は、爾らの衷に在り」と、キリストは仰せられた。「神の國」は人の衷に內在する。「一切の衆生は悉く佛性を有す」と、釋尊は「涅槃經」に仰せられた。「佛性はすなはちこれ如來なり。佛性は大信心となづく。何をもての故に、信心をもてのゆへに――一切の衆生はつねにさだめてまさに大信心をうべきがゆへに、このゆへにときて一切衆生は悉く佛性を有すといふなり。大信心はすなはちこれ佛性なり。佛性はすはちこれ如來なり」と、親鸞聖人は「涅槃經」より引用して、「教行信證」の信の巻にお書きになつた。如來は佛性である。「身土不二」の義により佛性はすなはち浄土の義である。浄土は即ち佛土すなはち「神

の國」の謂である。

「神の國」とは畢竟するに、神より廻向せらるゝ純他力の信心そのものを、キリストが仰せられた一つの別名たるに他ならぬ。

「天國は、畑に隱れたる寶のごとし。人、見出さば之れを隱しおきて、喜びゆき、有てる物を、こと〲く賣りて其の畑を買ふなり。また、天國は良き眞珠を求むるごとし。價たかき眞珠一つを見出さば、往きて、もてる物を盡く賣りて、之れを買ふなり」と、キリストは仰せられた。「天國」すなはち「神の國」は、人類無二の至寶である。釋尊は此の趣を「華嚴經」に、「人の手ありて寶の山に入りて、自在に寶を取るが如く、信あるもまた然り。佛法の中に入りて、自在に無漏の寶財を取る」と仰せられて、「信」あることが無漏の寶財を取る所以である旨を御說きになつた。「心地觀經」にも此の旨趣を、「人の手なければ、寶の山に入るも終に所得なきが如く、信の手なきものは三寶に逢ふと雖も所得なし」とも仰せられた。猶ほ「大莊嚴經」には、最も明らかに「一切の諸々の功德は、信を以て使命となす。もろ〲の寶の中に於て、信の財を最も第一となす」と、「信」が無二の至寶なるを御示しになり、更に「華嚴經」には、「信は、――法藏第一の財とす」とも御說きになつてゐる。

「天國は一粒の芥種のごとし。人これを取りて、その畑に播くときは、萬の種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて、空の鳥きたり、その枝に宿るほどになるなり。神の國は、ある人、種を地に播くが如し。日夜起き臥しするほどに、種生え出でゝ育てども、その故を知らず。地はおのづから實を結ぶものにして、初めには苗、つぎに穗、ついに穗の中に充ち足れる穀となる。實、熟れば直ちに鎌を入る。收穫時の到れるなり」と、キリストの仰せられた「神の國」に關する御譬は、「華嚴經」に、「信は能く菩提樹を成長す」との佛語に盡きる。「天國はパンだねのごとし。女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、悉く脹れいだすなり」との御譬もまた、「信は能く最勝智を增益す」との同じく「華嚴經」の佛語に盡きる。

「日夜起き臥しするほどに、種は生え出でゝ育てども其の故を知らず。地はおのづから實を結ぶものにして初めには苗、つぎには穗――」と、苗より次第に成長し、または芥種の如きより空の鳥の宿るほどの巨樹にまで繁茂する他力成育の「神の國」即ち「純他力信心」のありさまを、蓮如上人は、「木艸の生ずるは種のちからなり。枝葉生ずるは、土のはごくみなり。華さき實なりてさかゆるは、日のひかりによる。おひたちて、しぼみかゝることなきは、雨露のちからなり。されば眞宗の行者、この法にあひたてまつるは、如來因位の願行種子のちからなり、これ

を宿縁となづく。きゝわけたのむこゝろのおこるは、如來正覺の大悲願智のちからなり。往生一定のはなひらくことは、光明攝取のちからなり。御恩のよろこばれ、相續報謝のこゝろ、つねに退轉なきは、彌陀如來および恒沙の諸佛菩薩の擁護したまふゆへなり」と、お書きになつて、キリストの御譬のごとく、他力成育の信心圓熟のさまを、同じく樹木の成長にお喩へになつた。即ち「神の國」とはキリストが純他力信心を仰せられしものに他ならぬ。

「魚はそこにしづみ、けだものは穴にかくれ、鳥は枝にとまる。をろかなる畜類なをよく、わが身をやすくする智慧あり。まして人たる身、のちの世の身ををくべきすみかをもとめざらんや。まことにあさましきこゝろならずや」とも、蓮如上人は仰せられて、すみやかに純他力の信心をたくはへ、即ち「神の國」を神より享けて　死に對しての用意を平等に完成しあるべき旨を、お諭しになつた。この旨を、キリストは、次ぎの興味ふかき譬によつてお諭しになつた。「天國は、燈火を執りて新郎に迎へ出づる十人の處女に比すべし。その中の五人は愚かにして五人は慧し。愚かなる者は燈火をとりて油を携へず。慧きものは油を器に入れて、燈火と共に携へたり。新郎遲かりしかば、皆まどろみて寢ぬ。夜半に、やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ、と呼ばはる聲す。こゝに處女みな起きて、その燈火を整へたるに、愚かなる者は、慧き者にいふ、爾の油を分けあたへよ、我れらの燈火きゆるなりと。慧きもの答へて言ふ、おそらくは我れらと爾らとに足るまじ、むしろ賣るものに往きて己がために買へと。彼れら買はんとて往きたる間に、新郎きたりければ、備へたりし者どもは、彼れとともに婚筵に入り、而して門は閉ざされたり。その後、かの他の處女ども來りて、主よ主よ、われらの爲に開き給へと言ひしに、答へて、まことに爾らに告ぐ、我れは爾らを知らずと言へり。されば目を覺ましをれ、爾らは其の日その時を知らざるなり」

燈火の油、すなはち他力の信心を平生にたくはへあるべきこと、また新郎を以て代表せられある死の來訪が、何れの日にあるかを知り難きことなどを、キリストは地上の譬のうちに趣きふかく、蓮如上人と同じやうにお戒めになつた。眞宗の信者なる一少女は、「うつむいたとこが臺や蓮華。」との俳句をものして、自身の信仰告白に代へたといふ。まさにキリストの如上の御譬のうちの、慧き處女が、この少女に他ならぬ。この少女の胸には、他力信心の不斷の燈火が常に點じられて、新郎が入り來ると同時に、婚筵の淨土に入るべき用意が、すでに整へられてゐる。即ち「天國」――「神の國」を既に享けてゐる。「うつむいたとこが臺

や菫草」

「我れ一切の衆生を觀るに、衆生みな、貪欲、瞋恚、愚痴等の煩惱の中に、佛の智と、佛の眼と、佛の身とを具へて、儼然として動かず。善男子よ、一切の衆生は、煩惱の中にありても、常に汚れざる如來藏あり」と、釋尊は「首楞嚴經」のなかにお説きになつた。この「煩惱の中に如來藏ある」心性を、キリストは、次ぎの譬によつて、お示しになつた。「天國は良き種を畑にまく人のごとし。人々の眠れる間に、仇きたりて、麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。苗はえ出で〻實のりたるとき、毒麥もあらはる。僕ども來りて家の主に言ふ、主よ、畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何にして毒麥あるかと。主人いふ、仇のなしたるなりと。僕どもいふ、さらば我れらが往きて之れを拔き集むるを欲するかと。主人いふ、いな恐らくは毒麥を拔き集めんとて麥をも共に拔かん、兩つがら收穫まで育つに任せよ。收穫のとき、我れは刈る者に、まづ毒麥を拔きあつめて焚くために之れを束ね、麥はあつめて我が倉に納れよと言はんと」

麥は如來藏であり、佛性であり、菩提心の意である。毒麥は煩惱の意である。「毒麥を拔き集めんとて麥をも共に拔かん」とは、煩惱を斷ぜんとして菩提をも滅せしむるに至ることの謂である。この麥と毒麥と、共に存する信仰味を、存覺上人は「三毒の煩惱はしば〳〵おこれども、まことの信心は、かれらにもさへられず。顚倒の妄念はつねにへたざれども、さらに未來の惡報をばまねかず」と、お書きになつた。「收穫」は死である。死に際して、毒麥は焚かれ、麥のみ倉に納れらるる。信者の靈は死と共に「往生をうるひとは、貪瞋の惑をはなれて、自然虚無の身をうけて、清白の法をききて、離蓋清淨の報をうく」と、存覺上人の仰せになつたものが、「天國」を享けたもの〻「收穫」の時に於ける消息である。「麥」の佛性――菩提心が、「かならず安樂淨土にいたれば、彌陀如來とおなじく、かの正覺のはなに、化生して、大般涅槃のさとりをひらかしむ」と親鸞聖人の仰せられしものは、キリストの「麥はあつめて我が倉に納れよ」の義である。

譬の眞意なる如上の義を、キリストは、從前のユダヤ教の信仰樣式によつて、つぎのやうに御說きになつた。「良き種を播く者は、人の子なり。畑は世界なり。良き種は天國の子どもなり。毒麥は惡しき者の子どもなり。之れを播きし仇は惡魔なり。收穫は世の終なり。刈る者は御使たちなり。されば毒麥の集められて火に焚かる〻如く、世の終りにも斯くあるべし。人の子、その使たちを遣はさん、彼れら御國の中より凡ての顚躓となるものと不法をなす者とを集めて、火の爐に投げ入るべし。其處

にて哀哭切齒することあらん。そのとき義人は、父の御國にて日のごとく輝かん。耳ある者は聽くべし」と、仰せられた。これを外界の、この世上の事象なりと解釋するものは、「耳ありて聽く」者ではない。仰せられし「世界」は衆生個人の心性である。「世の終り」は死である。「哀哭切齒する」者は不信者の義であることが、こゝに介まれてある。「義人」は純他力による信者の謂である。「義」は善惡の上の義ではなく、神の御本旨に適ふ所以のもの卽ち純他力信心そのものこそ、使徒パウロの謂はゆる「神の義」である。「父の御國にて日のごとく輝かん」と、こゝに「義人」なる信者が、「父の御國」——彌陀の淨土に、往生して、「光明無量」なる「無碍光」の輝き、神の榮光を嗣ぐの消息が「日の如く輝かん」の御語のうちに現はされてゐる。まことに「耳ある者は聽くべし」である。

樹木の成育繁茂するのは、「自然」である。「地はおのづから實を結ぶものにして」とキリストの仰せられしごとく、他力信心の育てられるのは「自然」である。『救』のためのみに存在し給ふ「我れらの救主なる神」——彌陀が、衆生を救ひ給ふは、まことに「自然」の本能であり給ふ。『救』は神の本能にで自然であり給ふ。そこに與へらるゝ「神の國」は自然の鄕土である。「其の國は逆違せず。自然の牽くところなり」と、釋尊は「無量壽經」に仰せられた。衆生を牽き給ふ神の『救』は神の自然である。

この「自然の救」を、親鸞聖人は、「自然法爾の事」との題下に、「自然といふは、自はをのづからといふ。行者のはからひにあらず。然といふは、しからしむるといふことばなり。しからしむるといふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなりけるゆへに、おほよそ行者のはからひのなきをもて、この法の德のゆへに、しからしむといふなり。すべての人のはじめてはからはざるなり。このゆへに義なきを義とすとしるべしとなり」と仰せられて、一に自然の救のみに任かしまつるべき純他力の福音を宣べ給ひしつぎに、「自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とは申すぞときゝてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまうすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに自然とはまうすなり。かたちもましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせ

んとて、はじめて彌陀佛とまうすぞときゝならひてさふらふ。彌陀佛は、自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり」と、お書きになつて、純他力の自然の救拯が、遂に亡言絶慮の不思議に屬することを仰せられ、凡慮の沙汰すべきに非ざる旨を、お示しになつた。キリストの靈能に接して「神の國」を享受する「救」もまた、神の自然の靈能であり給ふと共に、人の智慧、凡慮の理解には測るべからざる靈界の消息に屬する。キリストは「神の國は見ゆべき狀にて來らず。また、視よ此處に在り彼處に在りと、人の言ふべきものにも非ず」と仰せられて、更に「夫れ神の國は爾らの裏に在り」と仰せられた。「神の國」は論ずべきものではない。たゞ「火はものをこがし、水はものをぬらすといふことを、たれもうたがふものあるべからず。されば彌陀をだにたのみたてまつれば、御たすけ一定なりと、うたがひなきを信心とまうすなり」と、蓮如上人のお書きになつたやうに、火は燒き水は濡らすごとき「自然の救」を、そのまゝ仰いで自然に信受するこそ、即ち、キリストの「幼兒のごとく神の國をうくる者」である。

釋尊が、永生之書たる「無量壽經」を說き畢はらんとし給ふや、更に、「若し衆生ありて、疑惑の心を以て、もろ〳〵の功德を修して彼の國に生まれんと願じ、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了らず、此の諸智に於て疑惑して信ぜず。然れども、猶ほ罪福を信じ、善本を修習して其の國に生まれんと願ふ。この諸々の衆生は彼の宮殿に生まれて、壽は五百歲、常に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩聲聞を見ず。この故に彼の國土に於て之れを胎生と謂ふ」と、お說きになつた。こゝに「善本を修習して」行爲の義によりて、救はれんとするものゝ生まるべき所を、「胎生」の名を以て、釋尊は仰せられた。この「胎生」の者の詣るべき國を、親鸞聖人は「化身土」なりと、お定めになつた。「化の淨土」とも、「化土」とも稱へられる。純他力の至心を廻向せられて、眞實信心のみにて、彌陀の御本旨どほりに救はれる者の往生すべき所を、「眞佛土」と、親鸞聖人はお定めになつた。また「眞報佛土」とも、「報の淨土」とも、「報土」とも稱へられる。「さま〳〵の大小の戒品をたもてる、いみじきひと〳〵も、他力眞實の信心をえてのちに、眞實の報土には往生をとぐるなり。みづからの戒善、

おの／＼の自力の信、自力の善にては、眞實の報の淨土にはうまれずとしるべし」と、聖人はお書きになつて、釋尊仰せの「功德を修め善本を修習す」る者の、「眞實の報の淨土」に生まれ得ざる旨を、お示しになつた。この自力の善行、自力の信仰にて、永生を嗣がんとすることの、神の聖旨に適はざる事を、キリストは、次ぎの御譬によつて現はし給ふて、こゝに「報土」と「化土」との別、「選ばるゝ者」と「招かゝ者」との差を、お示しになつた。

「それ天國は、朝はやく出でゝ、葡萄園に工人を雇ふ主人の如し。工人は一日に銀一枚をあたへんと約束をなし、彼れらを葡萄園に遣はせり。また九時ごろ出でゝ街にむなしく立てる者を見て、爾らも葡萄園にゆけ、相當の價をあたへんと、彼れらに曰ひければ、則ち往けり。また十二時と三時ごろ出でゝ、前の如く行へり。五時ごろ出でゝ、また他の立てる者に遇ひ曰ひけるは、何ゆへ終日こゝにむなしく立つやと。之れに答へて曰ひけるは、我れらを雇ふ者なきに因りてなりと。彼れらに曰ひけるは、爾らも葡萄園に往け、相當の價を得べしと。日暮るゝとき葡萄園の主人、その家宰に曰ひけるは、働きたる者どもを呼びて後に、雇へる者を始めとし、先の者にまで價を拂へよと。五時ごろに雇はれし者ども來りて、銀一枚づゝを受けたり。先の者ども來りて、我れらは多く受くるならんとおもひしに、また銀一枚づゝを受く。これを受けて、主人を怨みつぶやきけるは、この後に至れる者の働きたるは一時ばかりなるに、終日くるしみを負ひ、暑さにあへる我れらと均しく之れをなせりと。主人その一人に答へて曰ひけるは、友よ、我れ爾に不義をせず、爾と銀一枚の約束をなしたるに非ずや、爾のものを取りて往け、われまた後に至れる者にも、爾の如くあたふべし。我がものをもて、我がおもふごとくなすは宜からずや、わが善きによりて爾の目あしきかと。かくの如く後の者は先に、先の者は後になるべし。それ招かるゝ者は多しと雖も、選ばるゝ者は少し」葡萄園に招かるゝ者は多いけれども、その大多數は、自身の勞力によつて報酬的に恩寵を受けやうとする「善本を修習して、共の國に生まれんと願ふ」もの、すなはち、「化の淨土」に生まれる者ばかりが多く、却つて夕の五時ごろに雇はれたばかりで、働きの聊かも無いものが、葡萄園の主人の恩寵のみによつて、そこに他と同一の賜を受ける他力救濟の秘義を、キリストは如上の譬のうちに、お示しになつた。こゝに『佛智不思議』の『救』にあづかる「選ばるゝ者、」すなはち、報の淨土』に生まれる者の消息がある。

「報の淨土に生まるゝものは、極めて少し。化の淨土のなかに

生ずるものは少からず」と、源信僧都が「往生要集」にお書きになつたのは、「招かるゝは多しと雖も、選ばるゝ者は少し」との義に他ならぬ。またキリストは他の譬に就いても、「神の國」に比し給ひ「盛なる夕餐」に招かれた者が、その招きに應ぜざる例を舉げ給ふて、その最後に、「我れ爾らに告ぐ。かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味はひ得る者なし」との語にて、その譬をお結びになつた。「若し此の經を聞きて信樂受持することは、難の中の難、この難に過ぎたるはなし」と、釋尊は「無量壽經」の最後に、純他力の信心を享受して「選ばるゝ者」の極めて少きを仰せられた。

猶ほ、其の他に、キリストは、「天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし」と仰せられて、左の意味の譬を、お說になつた。――婚筵に招かれた者は誰も其れに應じなかつた。遂に王は其の僕だちに「婚筵は既に備はりたれども、招きたる者どもは相應しからず。されば爾ら衢に往きて、遇ふほどを婚筵に招け」と言つた。僕たちは善きも惡しきも遇ふほどの者をみな集めてきた。王は、その客を見にきた。禮服をつけてゐない一人の者が其處にゐた。「友よ、いかなれば、禮服を著けずして、こゝに入りたるか」と王は問ふた。問はれた者は默つてゐた。王は侍者たちに「その手足を縛りて外の暗きに投げいだせ、そこに哀哭切齒することあらん」と言つた。――キリストはこの譬を語り給ふて後に、「それ招かるゝ者は多かれども、選ばるゝ者は少し」と同じく仰せられた。「禮服をつける」ことは、「涅槃畢竟の眞因」たる他力信心を蓄へをくの義である。その信心なしに婚筵に列し、すなはち淨土に生まれんことを期してゐた者は、「手足を縛り、夜の暗黑に投げいだ」されて、そこに「哀哭切齒す」べき者とならねばならぬ。この招かれて選ばれざる「胎生」の者を釋尊は「この諸々の衆生もまた是くの如し。佛智を疑惑せしを以ての故に、かの宮殿に生まれて、刑罰乃至一念の惡事有ることなく、但だ五百歲の中に於て、三寶をみたてまつらず、供養して諸々の善本を修することを得ず。これを以て苦とす」と「無量壽經」に仰せられた。「佛智を疑惑するゆへに、胎生のものは智慧もなし。胎宮にかならずむまるゝを牢獄にいるとたとへたり」――「佛智疑惑のつみゆへに、五百歲までに牢獄に、かたくいましめおはします。これを胎生とときたまふ」――「邊地七寶の宮殿に、五百歲までいでずして、みづから過咎をなさしめて、もろもろの厄をうくるなり」など、親鸞聖人は、猶ほ此の他の多くの和讚によつて、この「胎生」の厄災たる、「手足を縛りて夜の暗黑に投げいだせ。そこにて哀哭切齒すること」ある旨を、お示しになつた。

「招るゝ者」は「化土」に生まれ、「選ばるゝ者」は「報土」に生まれる。

選ばれて純他力の信心により報の淨土に往生するものを、和讃に、「五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく●死をすてはてゝ、自然の淨土にいたるなれ」と、親鸞聖人は御述べになつた。この和讃のこゝろの最適の體現者は、つぎのごとくキリストによりて、その事蹟のうへに示されてゐる。

「髑髏といふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また惡人の一人を其の右に、一人を其の左に、十字架につく。斯くて、イエス言ひたまふ、父よ、彼れらを赦し給へ、その爲す所を知らざればなりと。彼れらイエスの衣を分かちて鬮取にせり。民は立ちて見ゐたり。――、十字架にかけられたる惡人の一人、イエスを譏りて言ふ、爾はキリストならずや、己れと我れらとを救へと。他の者は之れに答へ禁しめて言ふ、爾は同じく罪に定められながら、神を畏れぬか、我れらは爲しゝ事の報いを受くるなれば當然なり。されど此の人は何の不善をも爲さゞりきと。また言ふ、イエスよ、御國に入り給ふとき、我れを憶えたまへと。イエス言ひ給ふ、我れ誠に爾に告ぐ、今日、爾は我れと偕にパラダイスに在るべし」

この謂はゆる「惡人」は、十字架にかけられて死を直前にし、たゞキリストに對する「信心」ばかりにて、「パラダイス」すなはち淨土に、キリストと共に在るべきことを保證せられた。

釋尊より親鸞聖人まで、淨土眞宗の正意を相承せられしものに、「大祖」としての七高僧を、聖人は擧げ給ふた。龍樹――天親――曇鸞――道綽――善導――源信――法然、の「七祖」が其れである。中に、わけて大いなる權威として崇仰せらるゝ善導大師の垂訓のうちに、「二種の深信」と稱へられて、淨土眞宗の信條ともいふべきものが遺されてある。「一には決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に沒し常に流轉して、出離の縁あることなしと信ず」これが「機の深信」と名づけられてある。「二には決定して深く、かの阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝取し給ふ。疑なく慮なく、かの願力に乘ずれば、さだめて往生を得と信ず」これが「法の深信」と名づけられてある。キリストと共に十字架につけられし「曾て一善も無き」惡人が、自身を「罪に定められし」と信じ、キリストの「我れを憶えたま」へば「御國に入れ」られんことを信じて、疑慮なくキリストに歸依したこゝろと共の言は、善導大師の仰せられた謂はゆる「機の深信」と「法の深信」との、「二種の深信」

に正しく適へるものとして、信仰上の興味まことに饒かなる永遠の宗教的事蹟である。

親鸞聖人の「大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を閲して、佛恩の深遠なるをしりて、」選作し給ひし「正信念佛偈」のなかに、「彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に卽時に必定に入る」――「一生惡を造れども、弘誓に値ひぬれば、安養界に至りて妙果を證せしむ」などの句を拜するときに、キリストと共に十字架につけられ、キリストゝ共に卽時に神の榮光に入れられた謂はゆる「惡人」こそ、これらの偈句を、そのまゝ完全に體現してゐることが、直感せられる。かへす〴〵も讃仰せらるゝは、彌陀如來の慈心すなはちキリストの仁心であり給ふ。

「願海にいりぬるによりて、かならず、大涅槃にいたるを、法性のみやこへかへるとまうすなり。法性のみやことまうすは、法身といふ如來のさとりを、自然にひらくなり。さとりをひらくを、法性のみやこへかへるとまうすなり。これを眞如實相を證すともいふ。無爲法身ともいふ。滅度にいたるともいふ。法性の常樂を證すともまうすなり。このさとりをうれば、すなはち、大慈大悲きはまりて、生死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを、普賢の德に歸せしむ、といふなり」と、親鸞聖人はお書きになつた。

淨土に往き、法性の常樂を證して、無上覺に至り、こゝに彌陀の榮光を嗣いで、神と同體の榮をうければ、更に再び此の現世の生死界に還り臨みて、救拯の任にあたる。前者の往生の相も、後者の還來の相も、共に、彌陀の願力廻向の靈能によるが故に、これを、親鸞聖人は、「往相廻向」および「還相廻向」と仰せられた。「廻向に二種あり。一には往相、二には還相なり。往相といふは、おのれが功德をもて一切衆生に廻施し給ひて、作願してともに、かの阿彌陀如來の安樂淨土に往生せしめ給ふなり。還相といふは、彼の土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することをえて、生死の稠林に廻入して、一切衆生を敎化して、ともに佛道にむかへしめたまふなり。もしは往、もしは還、みな衆生をぬきて生死海を度せんがためにしたまへり」と、曇鸞大師は、その「淨土論註」に、お書きになつた。その「註」のもととなる「淨土論」のうちに、天親菩薩は、この還相廻向について、「大慈悲をもて、一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身をしめして、生死の園、煩惱の林のなかに廻入して、神通に遊戲し、敎化地にいたる。本願力の廻向をもてのゆへに」と、お述べになつた。

使徒パウロの言ふ「キリストと共に神の嗣子」とせられし信者は、死と共に、キリストと同一體なる神の榮光を嗣ぎて、神となり、而して、更に、神の靈能によりて、人類救拯のために、再び此の世界に臨在する。この還相廻向のすがたが、即ち、「キリストの再臨」である。ユダヤの國にナザレのイエスとして降臨し給ひしキリストの靈を享けて、猶ほ多くのキリストが、さまざまの形に化して、人類救拯の任に當つてゐられる。「彌陀如來は、如より來生して、報、應、化、種々の身を示現し給ふなり」と、親鸞聖人のお書きになつたものは、即ち、この「再臨」の靈趣を仰せられしものに他ならぬ。「煩惱の林に遊びて神通を現はし、生死の薗に入つて應化を示すといふは、これは還相廻向のこゝろなり。彌陀の淨土にいたりなば、娑婆にもまた、たちかへり、神通自在をもて、こゝろにまかせて、衆生をも利益せしむべきものなり」と、蓮如上人もお述べになつた。こゝに至つて、「再臨」の意義がますます明白にせられる。

「往相廻向」の「神の國の福音」と、「還相廻向」の「再臨の福音」に就いて、親鸞聖人は、「しかれば大聖の眞言、まことにしんぬ、大涅槃を證することは、願力の廻向によりてたり。還相の利益は、利他の正意をあらはすなり。——、あふいで奉持すべし。ことに頂戴すべし」と、「教行信證」の證の卷をお結びになつた。

わたくしは、佛教、また眞宗の教義を知らない。神學、またキリスト教の教義を知らない。たゞ、『我れ爾を救ふ』との、聲を聞き得し後に、聖典、聖書、を拜見して、そのうちより幼き信仰の上に氣づかせていたゞいた事々の幾つかを、そのまゝに、こゝに唯だ描寫してきた。

「我れ佛道を成すに至らば、名聲十方に超えん。究竟して聞こゆる所なくんば、誓つて正覺を成ぜじ」とは、彌陀如來の御誓である。「爾ら行きて萬國の民にバプテスマを施し、之れを父と子と聖靈の名に入れて弟子とし」と、キリストは昇天の際に仰せられた。彌陀の名聲と、キリストの御名と、その宣傳の一端として、この一文が何等かの使命を、すこしでも果たし得るならば、まことに誠に幸ひである。

猶ほ最後に、この一文に一顧の榮を賜ひし讀者諸賢の、御指導、御批判、御感想なりを賜はりまして、拜承いたすことを得まするならば、同じく誠に幸に存ずる次第であります。

——一九一九・一一・七・午前——

——東京市外・西大久保・九四——

詞藻

平和第一春

與謝野晶子

去年(こぞ)見しは白き太陽この朝の東天(とうてん)にある赤き太陽
地の上の平和の花の大きさよ日のめでたさに似たるものかな
春の人十六億のしら鳩の舞ふにたとへんまた戰(いくさ)せず
いくさせず正しきものに歸りたる春と思へば共にことほぐ
人人のめでたきは皆手を擧げて招きし春のめぐりこしかな
紫を着ていみじかるこの春の光の端(はし)につらなりぬわれ
平和をば香料にして生甲斐(いきがひ)を思はぬ日なき世も作りけり
地の上のこと改り人は皆創造の世の神ならぬ無し
人多く名のみ知るなりわれは見ん新しき日をたなぞこに置き
春となり新しき世の光をば負ひて我等のなし出でんこと

天馬の途に
(ガブリイレ・ダヌンチオに寄す)

土井晩翠

月桂の緑の冠、寶劍の光を添ふる
一代の詩神の寵兒、
天來の想に驅られて人工の翼をのばし、
九天にはたたき、白雲に駕し、
烟波夢むる地中海、
中央亞細亞山河の險、
五天搖曳の暮の雲、
轉じて洞庭瀟湘の水、
黄海の波、韓山の月、
千山萬水下に見て、
南歐遠く三千里、
飛行の十機一齊に、
東亞縹渺の空に飛ぶか。

たゞ一氣、靈妙の大氣の海、
人間の目に觸れずして、
人間の世をおほひなす
無限無邊の空の海、
しづまりては
深淵の如く、幼兒の眠の如く、
あらびては
英雄の狂ひの如く、蒼海の怒濤の如く、
渺々として鳥飛ぶにまかせ、
悠々として雲行くを送り、
下界の山川草木國土その下につらね、
有生無生森羅萬象その底にやどす、
空の大海、空の明鏡、空の眩惑、空の神變。

人間いくたび飛鳥をうらやみ、

高く憧憬のまみを回して、
或は金色染めなす雲に
天使天軍の飛翔を思ひ、
或は長汀白沙の上に、
仙女霓裳の舞を夢みし
その幻境も今はまこと、
世界にあれし颶風の狂ひの中に、
心靈の巧みと思ひはぐくみし
空をとぶ舟、翔くる羽、
かれ流星を碧落に逐ひ
これ輕燕を虛空に凌ぐ。

聞かずや、アングロ・サクソンの誇り、
太西洋を一氣にこせしアルコック、
(先にホーカア九仭の功を一簣にかくも善し)
つゞいて百丈のデリジブル、
巨大のR(アール)三十四、

悠々として雲をわけ、潮を眺め、
天漢の連なり上に
新たなる大陸のはしおりたてる勇士スコット
『大英の獅子王の勇やみしや』と
世界の面に事問ふよ。
『セイクスピヤの生れし故鄕、
ニュートン、ダーヰン思索の邦土、
領を四海に及ぼせる大英の子のわざ見よ』と
その民一齊に眉揚ぐる。——

太平洋はいまだしか、
玉魚銀海、幻想の翼自由に飛ぶ處、
茫洋として幾千里、
新大陸の日の入るほとり
金門峽を飛びたちて、
天地一白月明の光に翔くるものなきや。
南洋の暖潮北にはせ

北洋の寒流南に下り、
陰陽冷熱一つに合ひて
大東洋の雲蒸すほとり、
大鵬虚空に舞ふ如く、
浩氣を凌ぐ者なきや。

知らずや南歐ラテンの精華、
光彩あらたに他方ににほふ。
むかし幻影の立ちこめし
東方不思議の國にあこがれ、
風煙高く鳥飛ぶあとに、
黄漠低く月出づる方に、
來りしポーロを生みし邦、——
そのあと更に憧憬の心をそそり、
金色のひらめく姿照し見て、
潮に洗ふ落日の光を慕ひ、
渺々の神秘の海に乗りいでし

金剛の意思コロムバス、クリストフアを生みし邦——
美なる伊太利、
一たびは世界の覇王、
二たびは心靈の王者——
いくたびか巨大の靈を生みし邦、
千載の光輝てりわたるラテンの精華衰へず、
新たに詩美の幻影に打たれてたてる
藝園の奇才今さら生ける詩と
なりて遙かに三千里、
東亞の空に飛びくるや。

『オーリエント、オーリエント、オーリエント、
光はじめて出づる郷、
名工レニの刷毛に見るオーロラ花をちらす郷、
紅寶石の郷、碧玉の郷、
滄溟の底、純潔の眞珠の光生るゝ郷、
黄金の屋のひかる郷、

サフランの花にほふ郷、
石楠のかほり溪流に引かれて遠くにほふ郷、
百蠻のあなた、長城の雲に入る郷、
十二帝陵あれはてて敗墟にのこる奇怪の巨像、
夜半に日擧げ天上のきらめく星に語る郷、
神秘の文字、上より下に奇怪のペンに書かるる郷、——
クブライ汗の宮廷にヱニスの公子招かれし
このかた西のファンタジイ
わが東洋を夢みしや。

オーリエント、オーリエント、オーリエント、
今なほ遠く縹緲の神秘の霧にとざされて
殘るか——ここの珊瑚礁、
千仞の底、玄妙のしげみ、花咲き藻開き、
おほいなる鰭、落日の光すきくる波の下、
黄金碧玉瑪瑙の色に
ゆらぐ潮をわくる影、

上を帆走る船人の眼（まなこ）に寫らぬ跡に似て、
東亞の玄秘今になほ
西の想像の目に入らじ。

東の邦のものがたり、
學者を坑にし書籍を燒ける
秦の世避けし桃の原、
武陵の天地とざされて、
千萬の花紅（くれなゐ）の霞にこもる春の榮、
その一片のおとづれを微かに谷のよう洩らす
譬に似たり、西、東。
文明の潮ゆきかよう跡しげけれど、
底の波未だ親しく交はらず。

オクシデント、はたオーリエント、
蒼海の上、漫々の潮みだれて
行き通ふみどりの流、黒き流、

熱き汐、また寒き汐、
その水よする一片のたより空しき瓶の中、
しられずしらぬ岸に着く
跡見る如く民俗の精華かすかに
縹緲の雲を隔て洩れきしか。

オクシデントはたオーリエント、
萬花の春の曙の詩美の邦より侵し入り、
イサス、アルベラ、轟雷の荒びにつづき、
遠く遠く東五天に入りし彼れ、
インダスオクザス流れにたちて
馬に水飼ふ胸甲の閃き、照す熱帶の
炎日遂に大軍を西にかへしし跡ふりぬ。

脂粉三千バビロンの錦繍の帳かきわけつ、
時に妖婦に誘はれてパーセポリスの劫火擧げ、
時に詩聖を陣營の燈下に讀める年若き

大王の威は夢なれど、
オリインポスの十二神高きまぼろし
名工の魂に宿りし名殘の香、
吹きて傳へて金銅の
毘盧舍那の影にほひしか。

オクシデントはたオーリエント、
二千餘年のあと問へば
かなたカルタゴ海王の榮華のはての國の亡び
ローマ七丘赫々の富と力と驕慢と、
別に禍亂の恐るべき妖魔を内にはぐくめる
時、こなたには詩美の花、
「哀蟬の曲」「秋風の歌」
萬乘の君一代の文化の流導きつ、
佳人を悼み、歡樂のはかなきあとに仙の道
求めてたてし承露盤、
金莖高く雲に入るそれはた一時——手を擧げて

十萬の鐵騎大漠の外に進めば、
妖氛の晴れ行くきわみ逐はれ行く
蠻族次第に西に馳せ、
侵略の波、移住の波、
あふれて春秋四百年
はては金殿玉樓のローマの都
炎々の焔にやけて、
紫の衣纒へる富貴の子、
先に異邦に臨みたる跡を返せし奴隸の身、
その慘劇も跡古りぬ。

オクシデントはたオーリェント
隔てて遂に離れ得ず、
東の波瀾西へと動き、
西の雲煙東になびき、
大化の氣運布き滿ちて
彼と此とを包む時、

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

人類遂に一つの歷史。
落花の一片雲より落ちて
幽禽しづくを仰ぎのむ谷間の水にひたる後、
千波萬波の空うたす
大海原に遂に入り、
無形の連鎖無象の帶
同じ一塊の地球をめぐる。

オクシデントはたオーリェント、
或は西の十字軍、
夕日をかへす劍戟の光につれて
文明の華を次第に移し植え、
或は鐵騎百萬の
蹄、靑草のあとたちし
モンゴル、タータル、オットマン、
威を大陸の外に布く。――
花もあらしもやがて來ん

春を粧ふ種子のため。

オクシデントはたオーリェント
やがて半島イベリヤの岸より遠く
サンタマリアの禮拜の道を傳へし法の群、
點ぜし熱火ひろごれは
遂に犧牲の幾萬の火刑の焰燃えたちぬ。

つぎて扶桑の東北、
脾肉を嘆ぐ老雄の使(つかひ)、
金華松島かたはらの
月島の沖こぎいでて、
わけし太平太西の茫々の波幾萬里、
幻影幻境、白雪の泛ぶるにつれて湧き來しか。

三春の花燃えいでし盛はすでに移れども、
法王殿のあけの勤行、

サンピイトロの夕の鐘聲、
神秘の影に眺め入りて
そぞろに湧ける渴仰の信の姿は
合掌の使ヒリップ、フランツア支倉(はせくら)の
畫像今もとどむる。

オクシデントはたオーリェント
紅毛の人、此邦の
西海のはし瓊の浦に
時を定めて海外の富もたらすを外にして、
羹に懲り膾吹く愚昧の幕府、
偸安の夢貪りて、
春秋三百、海國の英氣を枯らし、
南洋の天領西の侵入の
民族掠め取るに任せつ、
東海のみどり波瀾を隔ちて、
鄰邦四億民衆の

興敗ただに冷眼に眺め、——
更に五大洲擾亂のはて、
萬里へだつる島國の
版圖に歸せるあとかたを
絶えて迷朦の夢にも知らず、
甘眠ながく悠々の春を夢みて
かくて浦賀の砲聲に
長夜のねふり覺むるに到る。

偉なる維新の光明の照りしとのかた五十年、
世界の地圖に存在のあとのみ微か留めたる
ピグミイの邦今にして
列强の中、一流の名をかち得たる時の運。
大局廣く眺むれば
世界にあれし炎焔の餘燼またくは消え去らず、
しかも新たに民心のゆらぎあらぺる颶風は
虚空をゆりて吹き來る。

時なり、ガブリレ、ダヌンチオ、
アドリアの海アルプスを越して飛行の機上より、
爆彈ならず檄文を雪とふらして、
敵國の民に宣ぜし秋霜の辭。
ハプスブルグの光榮は暗に沈みて同盟の
敵邦ひとしく崩れたる
後（のち）も『イタリヤ恢復の業まだ成らず、
熱血を湧かして叫ぶ民のため、
列强パリに定めたる不法の約に背かむ』と
よびてヒウメの地に入りぬ。

公法の約、國民の冀望、いづれを善しとせむ、
一塊の石抛てる湖面のみだれしづまりて
天心の月やどる時、
まことの姿遂に判ぜむ。
劍俠驅りさる悲憤の血汐、

わきたつ跡に顧みて、
過(あやまち)を見て仁を知る
ラテンの民の意氣酌まむ。

其ガブリーレ、ダヌンチオ
天風の弓、蒼海のおもての絃を拂ふ時
千波萬波の樂(がく)湧く如く
冥想ひとたびオーリェント詩想詩影の群りを
観じて九天雲烟の闊き高きを凌がんづ。

世界の地圖を落葉の窓打つ下に打披き
飛行の道をたどり見る——
永遠の都、光榮のローマを立ちて、
アドリヤ海の波をこし、
百年禍根をはらみし處、
世界の大亂かもせしほとり、
バルカンの岑サロニカを

過ぎてトルコのアダーリヤ、
回教の史にあらはれし
アレッポ、次ぎて千歳の名に負ふ舊都バクダット、
ユーフレーツの大江の岸のブソラに憩ふ後、
ペルシヤ灣上オルムヅの瀨戸の夕潮洗ひ去る
バンデルアバス、チョーバール、
「エーダ」に歌ふ河の王、インダス、海に入る處、
カラチを過ぎて、
ヒマラヤの雪、恒河の水、
抱く五天のいにしへの都のデリイ、
神聖の流、信徒の幾萬の群りよするビナーレス、
恒河の口のカルカッタ、
天風あほり鯨鯢おどり
朝日夕日の紅に
夜摩天上の莊厳の光を示す印度洋、
年に四たびの收獲の豐饒を[illegible]るラングーン、
佛に捧ぐる三千の伽藍藍濃き空を突き、

錦繡粧ひ寶玉飾る白象を見るバンコック、
佛領支那のハノイの市、
やがて禹域の「中華」の地、
玉關紫塞遠からず、
廣東、福州、後にして
楊子江頭北に飛び、
旭の旗のひるがへる青島につぎ
燕京を過ぎらば近し一葦帶、
月は老ゆ江上の羌笛、
風はすさまし大漠の牧歌、
義州釜山をとびこして
扶桑の空はまたたくま。

北冥の巨魚鵬と化し、
垂天の翼雲を分け、
南溟の天地めざしゆく
その荒唐のもがのたり、

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

その玄想を凌ぎさりて、
方所の差別風土の異同、
聯想更に時劫の古今、
地理と歴史の長卷を
かはる〳〵に開く如く
大陸あまねく見おろして
十機ひとしく雷光の
羽に東亞に斯く寄せむ。

あゝあゝ
東海思をはせて
鴻より早く長空に、
機翼ひとしく沖いる時、
亞細亞大陸茫々の
山河を越して興敗の
跡はそゞろに忍ばれむ。
ダーヂリンの高原、

ヒマラヤの連峯、
飛行の途にそるるとも
大聖生みし五天の姿、
君、憧憬の心眼に
望むやいかに、
おほいなる詩のあるところ、
聖あるところ、
あるひは赤道直下のほとり、
大印度洋の落日の
紅焔紅雲虚空に燃ゆる
大莊嚴の影を見なば、
亞細亞のために幸祈れ。

大陸亞細亞歐羅巴
虚空のうへに隔らず、
千載永く光榮と
詩歌と平和と文明と
明珠互に相映み、
寶鏡互に照す時、
天馬の路に南歐の
詩神の寵兒生ける詩を
つらねし功朽ちざらむ、
人間長く情ありて
胸の皷動に英靈を
讃する限り朽ちざらむ。

時　論

所謂呂運亭事件について

法學博士　吉野作造

上海に於ける朝鮮人獨立政府の代表者呂運亨氏を、或る政府當局者が東京に招いだと云ふ事が、端なくも世上の物議を醸して新聞を賑はし、外交問責同盟會とやらは國法を破壊し、朝憲を紊亂するの行爲として政府を糺彈するの決議をなして居る。之がどれ丈けの反響を生じて、どれ丈け政界を攪亂するやは知らないけれども、此事が偶々此種の問題に關する國民の正當なる理解を誤らしむるの虞あるを思ふが故に、予輩は玆に之に關する予輩の見解を述べて置かうと思ふ。

第一に呂運亨氏を招いだと云ふ政府の態度其物は斷じて何等糺彈に値しない。成程朝鮮獨立の計畫は日本の國法に對する叛逆の行爲たるに相違ない。此行爲の主謀者の一人を帝都に招致して歡待優遇すると云ふ事は國法の行爲を無視した事に相違ない。國法の無視は原則として之を許すべからざるも、併し之は絕對の約束ではない。何となれば國法の權威よりも、國家其物は遙かに重い。國家が大事だからこそ國法も尊敬すれ、若し國家の爲めに一時變則として國法の權威を着眼の外に置くことが必要であるなら、さうすることが眞に國家の爲めを計る所以である。而して朝鮮問題が斯くの如く紛糾し、日鮮兩國の將來の平和と幸福との爲めに上下心を惱ますこと今日の如く甚しきの秋に當り、紛糾の原因たる問題の有力な一人を、禮を以て招致し、之と將來の平和幸福を相談するのが何で惡いか。さうする事が國家の利益でないと云ふ點で爭ふのならまだしも、國法破壞、朝憲紊亂の形式論で行くのは餘りに政治家としての聰明と臨機應變とを無視するものではあるまいか。予輩はやつた事の成績は別問題として、兎に角今度の事件についての政府當局者の賢明と機略とを多とするものである。

第二に同じく叛逆不逞とはいひながら、對手が朝鮮人であると云ふ事は特に之を眼中に置く必要がある。大和民族の一人が

假りに同じ事を企てたといふなら、之は到底一歩も假借することは出來ない。併しながら彼は朝鮮人である。形式を離れ、朝鮮は如何にして日本に合併されしかの實質を考へて見よ。更に今日我々國民の耳目に最も明白になつた過去十年間の朝鮮統治上の重大なる失策を反省して見よ。許すべからざる事ではあるけれども、朝鮮人の獨立を企つるにそこに恕すべき何物をも見出すことが出來ないだらうか。假りに地を代へて日本人があの境遇に居つたとしたならばどうだらう。武士道を以て誇る大和民族にはかう云ふ點にもつと寛大な同情を有ち得る雅量がある等だ。赤坂離宮拜觀の恩典を與へ賜ふたのが或は彼等の此の衷情を酌み給ふた結果であらうと拜察する。此點についても一圖に形式論を振り廻はすのが、日本人らしくない態度であるのみならず、又問題の眞實を摑むの妨げとなる。

第三に我々は更に呂運亨氏一派の主張する所を十分に聽いてやるの餘裕を有たなければならない。過去の統治に於て日本にも重大なる過失を犯した事は我々自ら承認する所ではないか。然らば一概に我々に反對するからというて、單にそれ丈けで彼等を不逞呼はりするのは餘りに輕卒である。同じく日本を罵る朝鮮人の聲の中にも最近東京で發行せらるゝ「新朝鮮」の如きもある。隨分醜穢の言辭を弄して罵詈讒謗を逞うして居る點に於て、我々は此中に餘り多くの誠實を認め得ないが、呂氏の說く所の中には確かに一個侵し難き正義の閃きが見える。斯く云ふ所以は予も亦彼と會談するの機會を得たからである。彼は一個の年若き紳士にして、別に經歷の誇るべきものなきも、其品格に於て、其見識に於て、予は稀に觀る尊敬すべき人格を彼に於て發見した。支那 朝鮮、臺灣等の多くの人と會談したが、一個の教養ある尊敬すべき人格として呂運亨氏の如きは其最も勝れたる一人であることを斷言する。如何に彼が帝國に對して許すべからざる計畫をして居つたにせよ、彼を道德的に不逞の徒と蔑しむことはどうしても予輩の良心が許さない。偏狹なる國家至上主義の道德觀を取るものは格別、最高善を國家に實現せしめんとするのが我々の理想であるとす以上、予輩は彼の把持する一片の正義を包容し得るにあらずんば、日本の將來の道德的生命は決して伸びるものでないと云ふ感を深うせざるを得なかつた。彼は確かに少くとも世界的正義の確立の爲めに行動するの意識に動いて居る。從つて徒らに故なく我に反抗するものと見てはいけない。此點に於て我々は寧ろ此種の連中と胸襟を披くとによつて、初めて日鮮問題は本當の解決を見得べきであると考へる。何れにしても我々は只一片の形式論を取つて彼等を不逞と呼んではいけない。況んや威壓によつて屈服し得べしと考へて

はいけない。彼等が一片の道義をとつて獨立を叫ぶ以上、我はそれ以上の高き道義的理想を掲ぐる事の外に彼等を服せしむる途はない。是に於て初めて我々は朝鮮の統治を如何にすべきやの根本問題を正當に理解するの端緒が開かれる。此點に一切盲目で、漫然國法の破壞、朝憲の紊亂を叫ぶのでは、世界は到底我々の立場を諒解せざるのみならず、日本人たる我々も眞に日本を思ふの赤誠から此種の形式論に反對せざるを得ない。

第四に我々は此種のデリケートな問題が政爭の具に供せらるるの弊を努めて避けなければならない。政友會を攻擊するの道具として貴族院各派其他頑迷なる一部の國民を動かすには極めて格好の問題かも知れない。予輩は大體に於て、政友會の爲す所に常に多大の不滿を感ずる一人である。けれども今度の問題について丈けは政友會内閣の爲す所を賞讃するのみならず、又此問題を正しく視ない事の結果、我々にとつて最も大事な朝鮮問題の正しき理解を國民に得しめない怖れあるの點に於て、特に政友會の今度の行動を辯護するの必要を感じた。無論政府のやつた全體を是認するのではない。不用意に招び、彼等と對抗すべき何等道德的見識なくして應接した所から、結局不得要領に畢つたのは我々の甚だ遺憾とする所である。若し政府を責むべくんば、即ち此點であつて、呂運亨氏を呼んだ事夫れ自身は決して何等の糺彈に値せざるものである。

「何某の時代」とは何の故ぞ

近頃よく某々氏の時代去つて某々氏の時代來る、と云ふやうな事が流行る。其中でも最も我々の眼についたのは、福田時代去つて河上時代來ると云ふ事であるが、意味の取りやうによつてはさうとうなづかるゝ點もないではないが、福田博士の豐富なる學殖と、河上博士の緻鋭なる直感とは共に現代の珍なるのみならず、今後も永く時勢を指導する二明星として輝くだらう。我々は河上博士によつて教へらるゝことの大なるは勿論であるが、また福田博士を過去の人として葬らんとするならば大いなる誤りである。

一體此事に拘らず何某の時代去つて何某の時代來ると云ふやうな事は、場合によつては大いなる誤解を學界にも又實際界にも流すの虞があると思ふ。人間は活物である。就中學者は眞理に活くる者であり、又活きんとするものである。彼は社會の事々物々について常に其眞理を闡明せんことを心掛けて居る。從つて少くとも主觀的に於ては學者に時代は無い。只其のよつて立

つ所の根本思想に誤る所あれば即ち時代の捨つる所となる。學者が或時代に於て特殊の問題に主として興味を有つたからといつて、次の時代に他の問題に興味を有つの用意を缺くと斷定することは出來ない。

されば甲の時代去つて乙の時代來ると云ふ意味を、甲が取扱つた問題に對する興味は失せて、新時代は更に乙の取扱ふ問題に主として興味を感ずるやうになつたと解するなら分る。現に最近我國に於て一般社會の興味は甲より乙、乙より丙と著しく變轉を示して居るからである。從つてまた學者も之について先きには甲の問題を說き、今は乙の問題を論ずると云ふ風に其論陣を擴げて居る。此點に於て甲の時代去り、乙の時代來ると云ふやうな言ひ方は餘り意味を成さない。

それよりも我々が最近の社會問題の論じ方の風潮を觀て著しく感ずることは、唯物主義的の改造論の時代が過ぎて、理想主義的の改造論の時代となつたと云ふ事である。時代の變遷は人にあらずして根柢の思想其物にある。世の中が政治上の形式問題から社會生活の實質問題に入るに及び、一部の唯物主義的社會改造論者などが我輩の時代來れりと得意氣に叫んで居る間に、時代の要求は彼等を葬つて理想主義の立場を後援して滔々たる大勢たらしめて居る。今日は果して何人の時代か、心ある者は恐らく其判斷を誤らぬであらう。

小題小言三則

◉**國民の議會か議員の議會か**　議員の職務が專ら中產階級の手に握られて、議會の論議が一般國民の生活と殆んど沒交涉な閑問題に齷齪して居ると云ふ弊は各國通有の現象にして、而して殊に我日本に於て其甚しきを見るは識者の夙に認むる所である。此弊害に激せられて西洋には既に議會無用論すらある。尙一層の弊害に苦む我國に於て議會無用論の叫びなきに安心するのは、恰も火山の上に憩ふの類にして危險此上もない。視よ既に各一般下層階級の自覺は非常な勢を以て進みつつあるではないか。斯う考へて今度の議會の形勢を揣摩するに、普通選擧問題、勞働法問題、其他二三國民生活の實質に直接の關係ある提案もあるやうだが、併しながら政治期節に入つて朝野兩黨の政戰の準備に察するに、彼等の主力を注ぐ所は依然として如何にすれば敵を苦め、味方を安んずる事を得るかの一點である。或は物價調節問題といひ、或は西伯利問題といひ、又支那朝鮮の問題といひ、彼等の論ずる所はどうすれば敵をして辯解の辭に苦ましめ得るかと云ふにある。我々國民としては彼等

の論議によつて問題は更に發展せず、時局が更に解決を見ないといふ感がある。不信任案も出るさうだが、成程今日の國民の多數が現政府に十分の信任を措いてはゐないが、只憲政會の提出せんとする不信任案に國民の幾パーセントが興味を有つたらうか。それよりも重大な問題はいくらもある。之を等閑に附して徒らに些末の形式論に拘泥するが故に、我々は今日の政爭を以て彼等の贅澤なる遊戲と感ぜざらんとするも得ない。議會は議員の議會でなくして國民の議會である。今や國民は政爭の上に超然として、國民生活の實質の立場から彼等の論諍を十分に監督するの必要がある。

●學校昇格問題

勞働問題と相並んで昨今の流行は學校昇格問題である。之についてはいろ〳〵贊否の議論があるが、兎に角之を論ずるには次の諸點に注意することを要する。第一、之は文部省の既定の方針の當然の結果であることである。中橋新文相は高等教育機關の改善と擴張とを計つて、新大學令を布いた。之には細目についていろ〳〵の批難があつたけれども、兎に角國內に澤山の大學の發生せんことを奬勵するものに外ならない。然らば之に應じて自ら大學たり得るの自信あるものが昇格運動をするのが理の當然である。只それ丈けの自信無くして徒らに空名を追ふものゝ其間に發生するはまた已むを得ない。若し夫れ高等師範學校の如く、初めから其性質を異にするものまでが、大學の空名を得んが爲めに見苦しい狂奔をして居るのは沙汰の限りである。第二に、昇格と伴つて形式內容共に一段の整頓を加ふると云ふ事は、教育の爲めに誠に好ましい事である。官立の學校は政府の財政の許す限りどん〳〵昇格せしむべきである。學校の側からも昇格を迫ることは必ずしも不當でない、否、昇格を迫ることが偶々他の無用の國費を大いに削減して、之を教育に轉用するの抂げ難き風潮を造ることを得ば、誠に國家の大幸である。只私立學校などに於て昇格の爲めに授業料等を增額し、資産なきものに門戶を狹むるの結果を來たすならば之れ亦一つの弊害と認めざるを得ない。第三に昇格運動は徒らに稱號を欲する虛榮心に出でたと觀る者もあるけれども、之は正しい見解ではない。成程彼等は稱號を欲するだらう。けれども單に稱號として之を欲するのではない。之に大いなる實利を伴ふことを忘れてはならない。視よ學士たるとたらざるとによつて給料、等級、地位等が如何に差別せられるかを。而かも能力の如何は少くとも最初問ふ所でない。即ち從來の大學は餘りに特權に誇つて居つた。從來大學卒業生の特權は他の學校卒業生の不利益を來たす元になつて居ることを思はば、特權打破の要求或は利益の公平なる分配の要求が、偶々昇格運動によつてあ

らはるゝと云ふ事も亦已むを得ない。之を要するに予は昇格運動夫自身には固より格別の同情もなければ又大した興味も感じない。けれども之が學界に於ける特權打破の運動であり、教育界に於けるデモクラシーの精神の確立の運動であり、之によつて天下の人材が最も公平に其所を得るの端緒が開かるべきを思ふて、又密かに此運動の一時的に止まざらんことを希望する。昇格運動は實際運動としては更にいろ／＼複雜な要素をも含むから、中には其まゝ贊成することの出來ないものもある。此點は勞働問題などゝ同じ事である。併し外面は兎も角其根本精神は勞働問題のそれと同じものであつて、所謂近代精神の一つの要求に外ならない、否、考へ樣によつては近代精神の一要求とし恥しからぬ運動たるやうに之を指導しなければならない。此點から觀て今日現實の昇格運動に隨分つまらないものもあることは云ふを俟たない。

●マツソン秘密結社なるものについて

西伯利に居る軍人が何を間違つたか、フリーメーソンとシオニズムとを混同して「マツソン秘密結社」なる空中樓閣を描き、之が自由平等博愛の宣傳によつて世界を顚覆せんとする怖るべき猶太人の陰謀團だ、と獨り決めに決めて隱密の中に言ひ觸らして居るとは公然の秘密である。之は愚にもつかぬ妄想なるのみならず、偶々以て驚くべき無智蒙昧を曝け出す者であるから、不問に附するに忍びずして十二月初めの黎明會に於て講演した。委しい事は講演集に之を譲るが、其後聽く所によれば、此荒唐無稽の所謂陰謀計畫は去年の春已に偕行社月報とやらに載せられたもので、陸軍部内には餘程早くから弘まつたものなさうである。從つて上級の將官連にも之を眞面目に信ずる連中が多いさうだ。然るに去年十二月の「公論」と云ふ雜誌を視ると、之にもA秘密結社の陰謀とやら云ふ題で麗々しく同じ材料を並べて居る。A結社などゝ云ふ事が已に彼等の無識を證明するもので詰りフリーメーソンのシムボルがコムパスと弧形尺度より成るを、其形丈けを觀てAと間違つたのであらう。兎に角内容を讀んだ丈けで、荒唐無稽なることが分る程度のものなのに、之を左も鬼の首でも取つたやうに、如何にも世界の秘密を探り當てたかの顏をするのは、實に噴飯の至りである。併し之れ丈ならまだいゝ。聽く所によれば東北の某縣では縣廳の役人が民力涵養委員と計り、時勢に適切な極めて有益な材料だと稱して態々之を複製して役場、小學校、青年團、在鄕軍人分會、縣會議員、郡會議員、富豪、郡縣立學校、圖書館等に配らしめたと云ふ事である。縣廳の命を受けた郡役所では「出所確實にして根柢ある調査に基けるものに有之、現下國民の一讀すべき重要なる印刷物と相認め申候」と附言して居る。之が偶々地方の問題となつて當局の官憲に詰問すると、彼は何所までも時勢に適切な有益な印刷物と强辯して止まない。斯う云ふ頭腦の所有者が牧民官として民力涵養を計つて居ると云ふ驚くべき事實を我々國民として看過することが出來ない。

中央公論第卅五年新年號創作

■鮫人……谷崎潤一郎

■生別……野上彌生子

■神の如く弱し……菊池寛

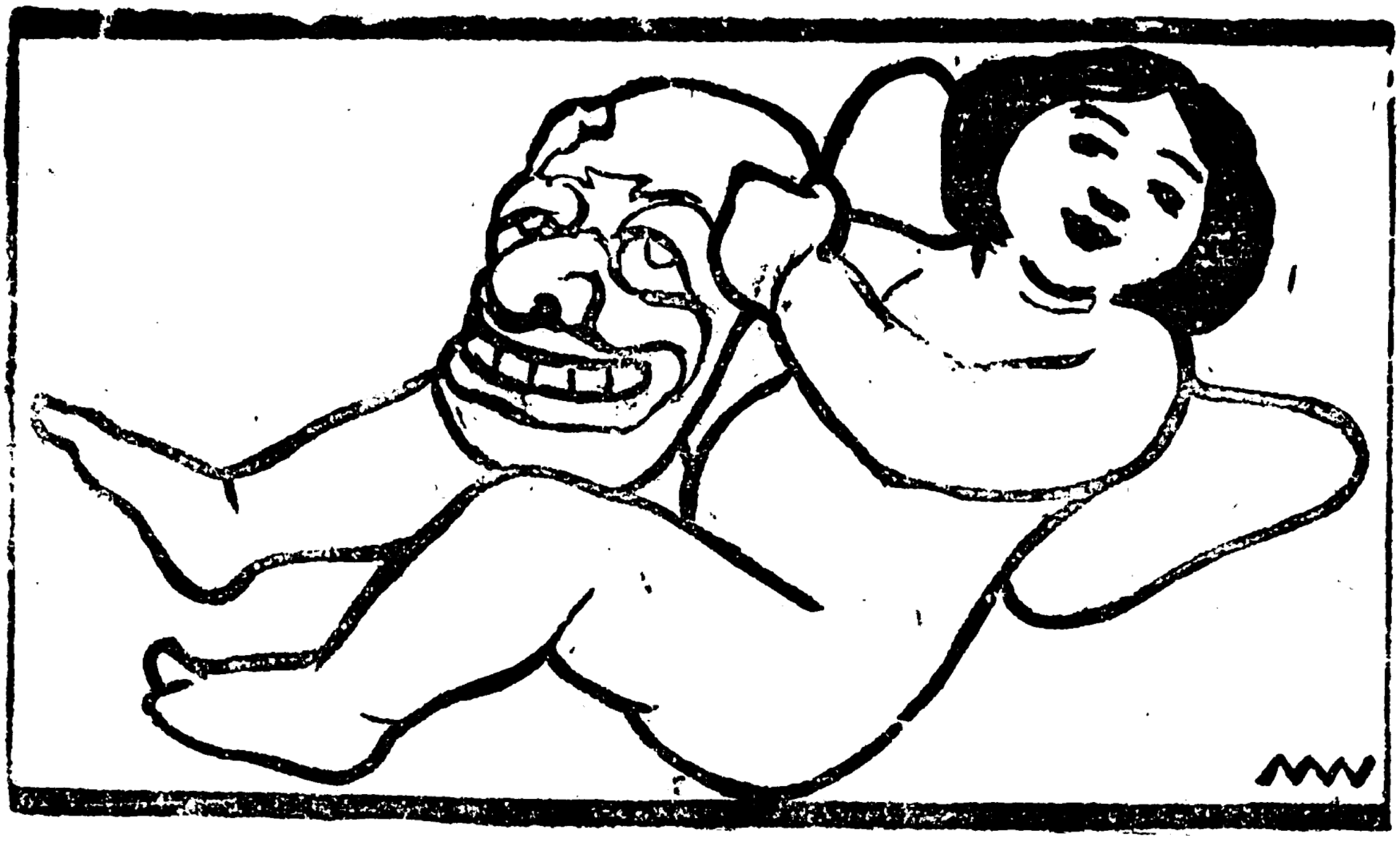
■雪の夜話……里見弴

■鼠小僧次郎吉……芥川龍之介

■胡瓜……山本鼎

■澁谷家の始祖……中條百合子

■人心……宇野浩二



鮫人

谷崎潤一郎

不擇南州尉　高堂有老親
樓臺重蜃氣　邑里雜鮫人
海暗三山雨　花明五嶺春
此鄕多寶玉　愼勿厭淸貧
（岑參）

第一編　或る藝術家の憧れ

第一章

その頃服部はもう一年近く其處に住んで居た。それは三四年前から始まつて居た歐洲大戰がまだいつ終るとも見えなかつた千九百十八年の春の半ば過ぎのことで、彼が住んで居た家は、淺草の本願寺の裏の方にある、松葉町の路次の奧の長屋だつた。戰爭以來世間の好景氣につれて、東京の市中や郊外には粗惡なほつたて小屋も同然な借家が續々と方々へ新築されたが、彼のも其

れ等の長屋の一軒であつて、新しいには新しくても地震や火事のことを考へたら一日も安心しては住まへないやうな、立て附けの惡い、ガタピシした厭な家だつた。二階が六疊一と間、下が四疊半に二疊の玄關に臺所、――しかし、妻子もなく下女もなく、ほんたうの孤獨であつた服部には、それだけでも結構廣過ぎたくらゐだつたのである。大抵の日は彼はいつも寢道具を敷き放しにしてある二階の六疊にごろごろしながら、何を考へるともなく暮らすのが常で、食事の時と便所へ行く外はめつたに下へ降りては來なかつた。尤も、時々金が欲しくなつたり、うまい物が食ひたくなつたり、酒が飲みたくなつたりする場合には、不承不精に立ち上つて、寢るにも起きるにも着たきりの古洋服を着けたまゝで、穿く物と云つては何にも彼にも一足しかないぼろ靴を穿いて家の外へ出て行くこともないではなかつたが、それも其の家のある松葉町から公園の附近に限られて居た、と云ふ譯は、金を取るにしろ飲み食ひをするにしろその外いろいろの欲求にしろ、兎に角彼の日常生活になくてならない娯樂と用件とは凡べて、公園を中心とする其の區域の中で立派に――とは行かないまでも東京の他の區域でよりは遙かに滿足に、充たすことが出來ると彼は考へて居たから。さうして又彼だけに就いて云へば、それはたしかにほんたうでもあつたから。で、彼は其の持ち前の不精の上に偏屈な感情も手傳つて、淺草以外の土地へは殆んど足を蹈み入れないのであつた。

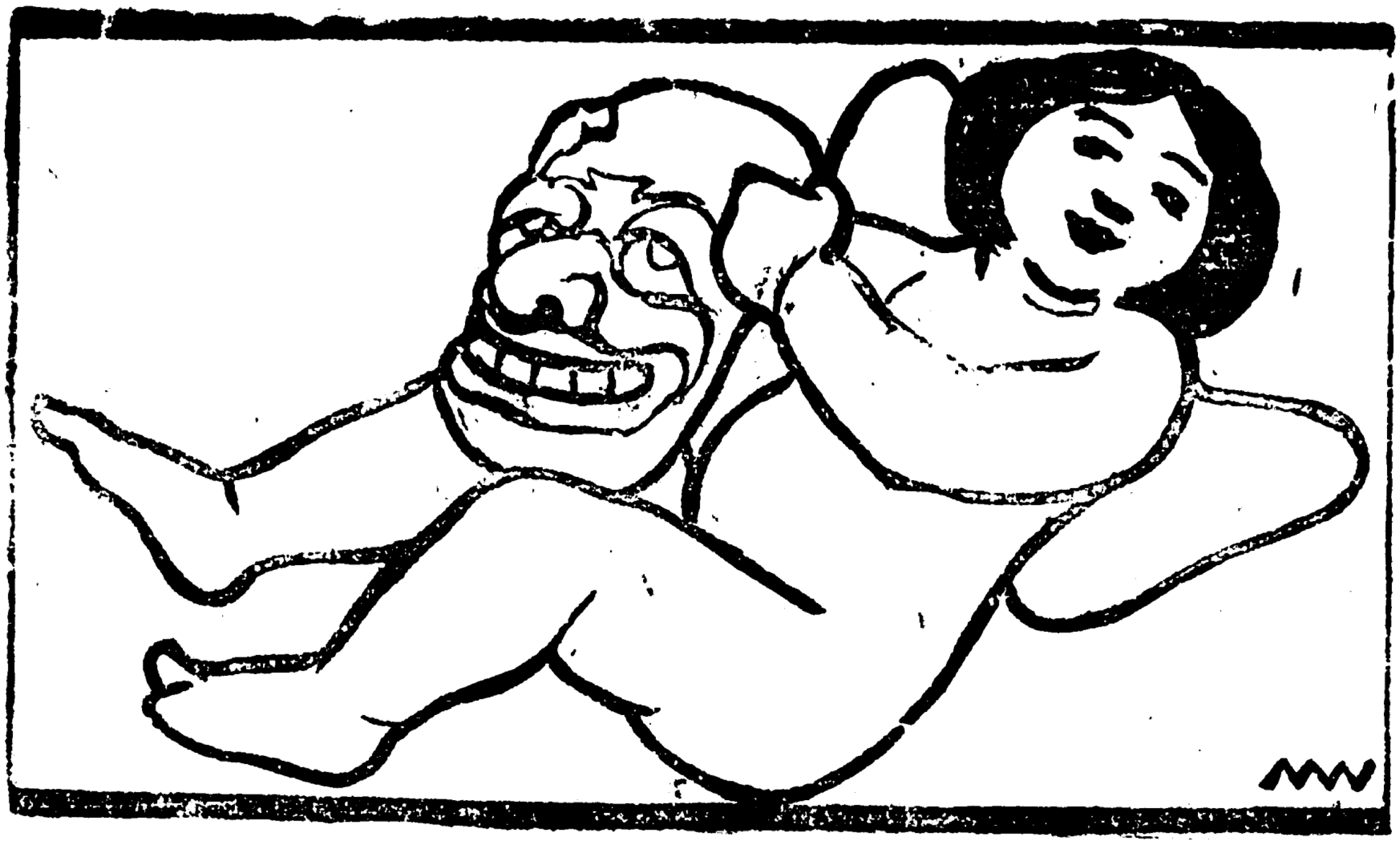
彼は今年二十七歳になる青年だつた。彼の職業は？――さう云つて人に聞かれたら、彼は恐らく「ない」と答へるであらう。勿論彼には頼りにする親や故鄕はないのであるから、自分の手で日々の生活を支へて居た筈ではあるが、それは「稼ぐ」と云ふよりも「借りて來る」方が多かつたのである。金のない時は家にぢつとくすぶつて居るか、でなければ近所のバアだのカフェヱだのを出來るだけ借り倒して命を繫いで居る。それがいよいよ遣り切れなくなると、淺草劇場の樂屋へ行つて、背景の手傳ひをさせて貰ふか、成るべくならそんな仕事も御免蒙むつて、其處の劇團の俳優たちに泣

き付いたりしていくらかの金を貸して貰ふ。「また服部がやつて來やがつたぜ。」樂屋に彼の姿が見えると俳優たちはよくさう云つて眉をしかめたが、彼はどんな惡口を云はれても平氣なもので、にやにや笑ひながら小遣ひ錢をせしめては歸つて行く。しかし彼の態度には、哀れなうちにも何處か超然と悟り濟ました樣子があり、それほど下品には見えないのであつた。又それだけの人徳が彼の風貌に備はつて居ればこそ、樂屋の連中も口叱言を云ひながら彼を赦して居たのでもあつた。さうして更に又、彼自身の心の中に這入つて見れば、自分は洋畫家ではあるが芝居の背景を畫くのが商賣ではない、自分は此れでも眞劍に藝術に志して居る。それ故氣の進まない仕事で金を稼ぐよりは、まだ借りるなり貰ふなりする方が疚しくないと云ふ風に考へて居たのでもあらう。自分は藝術家になる爲めに生きて行くのだから、生きる爲めの手段などは第二の問題で、そんな事に頭を惱ますのは馬鹿な話である。第二の問題での範圍なら、自分は人に卑しまれようと輕蔑されようと差支へはない。どんな方法ででも金が這入つて飲み食ひが出來さへすればそれでいゝのだ。――と、此の信條を彼は何處までも押し通さうとするのだつた。その爲めには生活に關する費用と勞力とを堪へ得る限りに切り縮めて居た。で、先も云つたやうに、着る物と云つては一張羅の古洋服、穿く物と云つてはぼろ靴一足、茶を飲む代りには水道の水を飲み、大掃除の時ででもなければ部屋の掃除をすることなんか一度もなかつた。さうして、その埃だらけな蒲團の上に打倒れて兩手で頭を抱へたまゝ、その頭の中を次ぎから次ぎへと通り過ぎるさまざまな空想の影を追ひ廻しながら、毎日ぼんやりと日を送つて居るのだつた。

だが、それ程第二義的の「世間」と云ふものを輕蔑し、また孤獨を樂しんでも居るところの彼が、なぜ其の住み家を騷々しい公園の近所に擇んだのであるか？　彼が淺草を好み、淺草以外へ足を踏み出さないに就いては、どんな理由が潜んで居たのであるか？――作者は此の物語の筋を進める前に、先づ其の事を茲に說明して置かなければならない。ー

此の服部と云ふ青年は、まだ社會一般からも彼の僅かな知人からも其の才能を認められては居なかつたが、しかし作者に云はせれば少くとも彼の心根の奥底に於いては、彼自身がさう信じて居るやうに、たしかに殊勝なる藝術家であつた。(此の點に就いては讀者もどうか始めから彼を信じて欲しい。たとへ作者が此れから舒述しようとする彼の日常生活が、いかに醜悪なものだらうとも!) 彼は、藝術と云ふものは、神が萬物を創造するやうに人が其れに依つて「美」を創造することが出來、また其れに依つて自己を永遠に生かすことの出來るものだと云ふ眞理を、決して疑ひはしなかつた。それ故にこそ彼自身も藝術に志したのに違ひなかつた。が、それと同時に、彼は生れつき非常に生活慾の旺盛な人間でもあつた。彼が出來る限り世間から遠ざかり、生活を簡素にしようと努めるやうになつたのも、一つには藝術に忠實にならうとする心がけから來たのでもあらうが、一つには其の生活慾の反動でもあつたのである。さうして恐らくは後者の方が、彼をさうさせたところの最大の力であつた筈である。彼は今でこそ見るかげもなく落ちぶれては居るものゝ、もとは彼にも立派な親があり家庭があつて、つひ四五年前までは可なり裕福に暮らして居た。のみならず都會に育つた藝術家の常として日常生活の享樂に對しても人に負けない執着を持ち、一種の通人氣質とも云ふべき誇りと趣味とを持つて居た。で、彼が何故に彼の立派な親と家庭とを一時に失ふやうなハメになつたかと云ふ理由は、話し出せば長くなるから後の機會に讓るとして、兎に角彼は陋巷に住む身の上になつてからも、なほ暫くの間は其の通人氣質から脱け切ることが出來なかつた。却て彼は落ちぶれた爲めに、負け惜しみからでも其の趣味の標準を一層高くしたくらゐだつた。何を食つても容易にうまいと云ふ言葉を吐かず、どんな女を見てもめつたに美人だとは云はなかつた彼の癖は、貧乏が激しくなるほどだんだんに募つて行つた。「此の頃の米は外米が交つて居るからとても己の口へは這入らない。」彼

はさう云つて其の日から飯を食ふのを止めて、その頃住んで居た田端の家から三日に一度づゝ銀座のカフェエ・ヴィエナまで黑パンを買ひに行つて、それへトラピストのバタとかチーズとか又は越前の雲丹をつけて食つたりした。その時分は彼も今ほど不精ではなかつたので、食物の爲めにはそんな面倒をさへ惜しまずに二た月ほども續けて居たが、しまひに或ることで癇癪を起してそれからぱつたりと銀座通ひを止めにした。その當座は、勿論黑パンを喰ふ譯には行かず、さうかと云つて又あのまづい飯を咽喉へ通す氣にもなれず、いつそ何も食はずに居てやらうかと思つたほど、彼は腹を立てたのである。なぜ銀座通ひを止めにしたのかと云ふと、其處へ行く途中の電車の混雜と路の惡さとがひどく彼の癇癖に觸れたのであつた。「東京は以前に比べるとたしかに不愉快な都會になつた。其處にある生活機關は何一つとして滿足に役立つては居ないぢやないか。却つてある爲めに不愉快を增させるやうなものばかりだ。何處に首府の面目がある！　何處に日本の文明がある！」彼は其の時さう考へて忌ま忌ましかつた。東京に生れて東京に育つた彼は、云はゞ自分の家が誰かに荒らされて居るやうにも感じたのである。電車に對してさへさうであるから、彼はもう疾うから電話と云ふものをかけたことがなかつた。電話は決して便利なものではなく、若しそれがなかつたら心地よく過されるであらう平和な日をも不安にさせ、人を神經衰弱にさせる罠であると極めて居た。で、飯を喰ふのだけはいくらまづくても止める譯に行かなかつたが、電車と道路にはつくづく業を煮やして、もう此れからは町の方へ散歩にも行くまいと思つたのだつた。（彼が不精になつた原因は斯う云ふ所にもあつたであらう。）實際にまた、據んどころない用事の爲めに表へ出たりする折があると、彼をイライラさせるやうな出來事が一つや二つはいつも必ず轉がつて居た。或る時などは上野の山下で敷島を買つたまではいゝとして、その敷島に附けてくれるマチの事から煙草屋の爺と激しい爭論をした。「おい、此のマチは火の附くマチかね？」――と、彼が最初に、少し吃りの癖のある口調で氣むづかしさうに尋ねたのが喧



鮫人

谷崎潤一郎

不擇南州尉　高堂有老親
樓臺重蜃氣　邑里雜鮫人。
海暗三山雨　花明五嶺春
此鄉多寶玉　慎勿厭清貧
（岑參）

第一編　或る藝術家の憧れ

第一章

その頃服部はもう一年近く其處に住んで居た。それは三四年前から始まつて居た歐洲大戰がまだいつ終るとも見えなかつた千九百十八年の春の半ば過ぎのことで、彼が住んで居た家は、淺草の本願寺の裏の方にある、松葉町の路次の奥の長屋だつた。戰爭以來世間の好景氣につれて、東京の市中や郊外には粗惡なほつたて小屋も同然な借家が續々と方々へ新築されたが、彼のも其

れ等の長屋の一軒であつて、新しいには新しくても地震や火事のことを考へたら一月も安心しては住まへないやうな、立て附けの悪い、ガタピシした厭な家だつた。二階が六疊一と間、下が四疊半に二疊の玄關に臺所、――しかし、妻子もなく下女もなく、ほんたうの孤獨であつた服部には、それだけでも結構廣過ぎたくらゐだつたのである。大抵の日は彼はいつも寢道具を敷き放しにしてある二階の六疊にごろごろしながら、何を考へるともなく暮らすのが常で、食事の時と便所へ行く外はめつたに下へ降りては來なかつた。尤も、時々金が欲しくなつたり、うまい物が食ひたくなつたり、酒が飲みたくなつたりする場合には、不承不精に立ち上つて、寢るにも起きるにも着たきりの古洋服を着けたまゝで、穿く物と云つては何にも彼にも一足しかないぼろ靴を穿いて家の外へ出て行くこともないではなかつたが、それも其の家のある松葉町から公園の附近に限られて居た、と云ふ譯は、金を取るにしろ飲み食ひをするにしろその外いろいろの欲求にしろ、兎に角彼の日常生活になくてならない娯樂と用件とは凡べて、公園を中心とする其の區域の中で立派に――とは行かないまでも東京の他の區域でよりは遙かに滿足に、充たすことが出來ると彼は考へて居たから。さうして又彼だけに就いて云へば、それはたしかにほんたうでもあつたから。で、彼は其の持ち前の不精の上に偏屈な感情も手傳つて、淺草以外の土地へは殆んど足を蹈み入れないのであつた。

彼は今年二十七歲になる青年だつた。彼の職業は?――さう云つて人に聞かれたら、彼は恐らく「ない」と答へるであらう。勿論彼には賴りにする親や故鄕はないのであるから、自分の手で日々の生活を支へて居た筈ではあるが、それは「稼ぐ」と云ふよりも「借りて來る」方が多かつたのである。金のない時は家にぢつとくすぶつて居るか、でなければ近所のバアだのカフヱエだのを出來るだけ借り倒して命を繋いで居る。それがいよいよ遣り切れなくなると、淺草劇場の樂屋へ行つて、背景の手傳ひをさせて貰ふか、成るべくならそんな仕事も御免蒙むつて、其處の劇團の俳優たちに泣

き付いたりしていくらかの金を貸して貰ふ。「また服部がやつて來やがつたぜ。」樂屋に彼の姿が見えると俳優たちはよくさう云つて眉をしかめたが、彼はどんな惡口を云はれても平氣なもので、にやにや笑ひながら小遣ひ錢をせしめては歸つて行く。しかし彼の態度には、哀れなうちにも何處か超然と悟り澄ました樣子があり、それほど下品には見えないのであつた。又それだけの人徳が彼の風貌に備はつて居ればこそ、樂屋の連中も口叱言を云ひながら彼を赦して居たのでもあつた。さうして更に又、彼自身の心の中に這入つて見れば、自分は洋畫家ではあるが芝居の背景を畫くのが商賣ではない、自分は此れでも眞劍に藝術に志して居る。それ故氣の進まない仕事で金を稼ぐよりは、まだ借りるなり貰ふなりする方が疚しくないと云ふ風に考へて居たのでもあらう。自分は藝術家になる爲めに生きて行くのだから、生きる爲めの手段などは第二の問題で、そんな事に頭を惱ますのは馬鹿な話である。第二の問題での範圍なら、自分は人に卑しまれようと輕蔑されようと差支へはない。どんな方法ででも金が這入つて飲み食ひが出來さへすればそれでいゝのだ。――と、此の信條を彼は何處までも押し通さうとするのだつた。その爲めには生活に關する費用と勞力とを堪へ得る限りに切り縮めて居た。で、先も云つたやうに、着る物と云つては一張羅の古洋服、穿く物と云つてはぼろ靴一足、茶を飲む代りには水道の水を飲み、大掃除の時ででもなければ部屋の掃除をすることなんか一度もなかつた。さうして、その埃だらけな蒲團の上に打倒れて兩手で頭を抱へたまゝ、その頭の中を次ぎから次ぎへと通り過ぎるさまざまな空想の影を追ひ廻しながら、毎日ぼんやりと日を送つて居るのだつた。

だが、それ程第二義的の「世間」と云ふものを輕蔑し、また孤獨を樂しんでも居るところの彼が、なぜ其の住み家を騷々しい公園の近所に擇んだのであるか？　彼が淺草を好み、淺草以外へ足を蹈み出さないに就いては、どんな理由が潜んで居たのであるか？――作者は此の物語の筋を進める前に、先づ其の事を茲に説明して置かなければならない。―

此の服部と云ふ青年は、まだ社會一般からも彼の僅かな知人からも其の才能を認められては居なかつたが、しかし作者に云はせれば少くとも彼の心根の奥底に於いては、彼自身がさう信じて居るやうに、たしかに殊勝なる藝術家であつた。(此の點に就いては讀者もどうか始めから彼を信じて欲しい。たとへ作者が此れから舒述しようとする彼の日常生活が、いかに醜惡なものだらうとも！) 彼は、藝術と云ふものは、神が萬物を創造するやうに人が其れに依つて「美」を創造することが出來、また其れに依つて自己を永遠に生かすことの出來るものだと云ふ眞理を、決して疑ひはしなかつた。それ故にこそ彼自身も藝術に志したのに違ひなかつた。が、それと同時に、彼は生れつき非常に生活慾の旺盛な人間でもあつた。彼が出來る限り世間から遠ざかり、生活を簡素にしようと努めるやうになつたのも、一つには藝術に忠實にならうとする心がけから來たのでもあらうが、一つには其の生活慾の反動でもあつたのである。さうして恐らくは後者の方が、彼をさうさせたところの最大の力であつた筈である。彼は今でこそ見るかげもなく落ちぶれては居るものゝ、もとは彼にも立派な親があり家庭があつて、つひ四五年前までは可なり裕福に暮らして居た。のみならず都會に育つた藝術家の常として　日常生活の享樂に對しても人に負けない執着を持ち、一種の通人氣質とも云ふべき誇りと趣味とを持つて居た。で、彼が何故に彼の立派な親と家庭とを一時に失ふやうなハメになつたかと云ふ理由は、話し出せば長くなるから後の機會に讓るとして、兎に角彼は陋巷に住む身の上になつてからも、なほ暫くの間は其の通人氣質から脱け切ることが出來なかつた。却て彼は落ちぶれた爲めに、負け惜しみからでも其の趣味の標準を一層高くしたくらゐだつた。何を食つても容易にうまいと云ふ言葉を吐かず、どんな女を見てもめつたに美人だとは云はなかつた彼の癖は、貧乏が激しくなるほどだんだんに募つて行つた。「此の頃の米は外米が交つて居るからとても己の口へは這入らない。」散

はさゝ云つて其の日から飯を食ふのを止めて、その頃住んで居た田端の家から三日に一度づゝ銀座のカフェ・ヴィエナまで黒パンを買ひに行つて、それへトラピストのバタとかチーズとか又は越前の雲丹をつけて食つたりした。その時分は彼も今ほど不精ではなかつたので、食物の爲めにはそんな面倒をさへ惜しまずに二た月ほども續けて居たが、しまひに或ることで癇癪を起してそれからぱつたりと銀座通ひを止めにした。その當座は、勿論黒パンを喰ふ譯には行かず、さうかと云つて又あのまづい飯を咽喉へ通す氣にもなれず、いつそ何も食はずに居てやらうかと思つたほど、彼は腹を立てたのである。なぜ銀座通ひを止めにしたのかと云ふと、其處へ行く途中の電車の混雜と路の惡さとがひどく彼の癇癖に觸れたのであつた。「東京は以前に比べるとたしかに不愉快な都會になつた。其處にある生活機關は何一つとして滿足に役立つては居ないぢやないか。却つてある爲めに不愉快を增させるやうなものばかりだ。何處に首府の面目がある！　何處に日本の文明がある！」彼は其の時さう考へて忌ま忌ましかつた。東京に生れて東京に育つた彼は、云はゞ自分の家が誰かに荒らされて居るやうにも感じたのである。電車に對してさへさうであるから、彼はもう疾うから電話と云ふものをかけたことがなかつた。電話は決して便利なものではなく、若しそれがなかつたら心地よく過されるであらう平和な日をも不安にさせ、人を神經衰弱にさせる罠であると極めて居た。で、飯を喰ふのだけはいくらまづくても止める譯に行かなかつたが、電車と道路にはつくづく業を煮やして、もう此れからは町の方へ散歩にも行くまいと思つたのだつた。（彼が不精になつた原因は斯う云ふ所にもあつたであらう。）實際にまた、據んどころない用事の爲めに表へ出たりする折があると、彼をイライラさせるやうな出來事が一つや二つはいつも必ず轉がつて居た。或る時などは上野の山下で敷島を買つたまではいゝとして、その敷島に附けてくれるマチの事から煙草屋の爺と激しい爭論をした。「おい、此のマチは火の附くマチかね？」――と、彼が最初に、少し吃りの癖のある口調で氣むづかしさうに尋ねたのが喧

事のもとだつたのである。（彼は酒飲みであるけれど其の時は決して醉つて居たのではなかつた。）すると、爺も虫の居所が悪かつたのか、或は服部が見すぼらしいなりで居ながらイヤに大風なのが癪に觸つたのか、グンと旋毛を曲げて、「火の附かないマチはありませんよ。」――と、さう云つたものだつた。「いや、ところがあるんだ。」と、服部は直ぐやり返した。「マチと云ふものはみんな火が附くものだと思つたら大違ひだ。此の頃煙草屋でくれる奴は大概火の附かないマチばかりだ。」さう云つて、彼は言下に今貰つたマチを擦つて見せた。結果は彼の云ふ通りであつた。何本擦つても何本擦つても、――まるきり火が出なかつたり、或はしゆツと燃えたかと思ふとそれなり消えてしまつたりして、とても煙草に火を移すことは出來なかつた。「どうだね、マチと云ふものは、――煙草屋でくれるマチと云ふものは、火の附かないものだと云ふことが分つたかね、」彼は、自分の言葉が爺の眼の前で證明されたのに、得意を感じるよりは寧ろ一層青くなりながら、腹立たしさに聲をブルブル顫はせて居た。「しかし其のマチはもともと景物について居るんですから。」「そりやあさうだ。」と、服部はまだ默らなかつた。「そりやあさうだが、己は景物を貰ふのが目的ぢやあない。火の附くマチが欲しいんだ。」「そんなら金を出して買つたらいゝさ。」と、爺も負けて居なかつたが、服部はますます急き込んで吃りながらまたそれへ喰つてかゝつた。「しかしだね、君は今何と云つた？　火、火の附かないマチはないと云つたぢやないか。それだから僕は腹を立てたんだ。此れからこ、こ、此のマチをくれる時は、此れは景物でございますから火、火は附きません。附くのが欲しかつたら別にお買ひなすつて下さいツて、ちやんと斷つたらいゝだらう。さうすりやあマチの代ぐらゐ誰も惜しみはしないんだ。」さうしてしまひに、「こんなマチをくれて人に景物だと思はせるのは一種の詐欺だ。」と云つたのであつた。「詐欺とは何だ！」と、爺はかツとして怒鳴りつけた。それからお互ひに甲高い聲で二た言三言云ひ合ひをした揚句、結局服部はマチを店先へ叩きつけて歸つて來たのである。――こんな事が、町へ出ると彼には

殆んど始終であつた。マチの役目をしないマチ、米の役目をしない米、洋食の役目をしない洋食、酒の役目をしない酒、――その外まだ數へ切れないいろいろの事件が、一つ一つ彼の神經を焦ら立たせる種になつた。

服部のかう云ふ偏屈は、彼が落ちぶれてから後も猶それで押し通さうとする貴族的な趣味が累ひをなして居たには違ひないが、作者が彼に同情をして云へば、彼の偏屈にもあながち「偏屈」とのみ云つてしまへない理由があつたのである。なぜかなら、彼の住んで居る「東京が以前に比べると不愉快な都會になり」つゝあることは、彼ばかりでなく心ある市民なら誰でもさう感じて居る事實であつたから、――殊に戰爭以來は、此の傾向がますます激しくなつて居たのであるから。戰爭のお蔭で東京には好景氣が來た、日本は債權國になつた、實業家は彼等の資産を豊かにし、宰相は新しい爵位を得、軍人は勳章を貰つた、ぼろ船を賣つて儲けたり、染料や藥劑の買ひ占めで儲けた成金どもが輩出した、ところが其の爲めに東京と云ふ土地は一般には却て住みにくい街になつて居た。成る程以前より文明的の施設は殖えたでもあらうけれども、市民がそれらから受ける便利は、それらから受ける不便に比べたら無い方が増しなくらゐなものだつた。水道が出來たから安心して井戸を埋めると、その水道が充分には水をくれない。おまけに納税を怠れば直きに水を止められてしまふ。（井戸の時分には誰がそんな心配をしたらう？）瓦斯が敷けたから炭火を止めると、此の頃では其の瓦斯の出かたがだんだんに細くなつて、新しく管を敷かうとすれば恐ろしい費用と手間が懸つたり、費用を懸けても應じてくれなかつたりする。タキシーが出來たので俥を止めようとすると、そのタキシーの運轉手が鼻息が荒くて容易に客を乘せてはくれないし、乘つても其れを走らせる道路がない。電話は勿論のこと、郵便は後れる、電報は後れる、何一つとして頼りにはならない。時には一本の敷島を吸ひたいと思つても、市中に其れが一と箱もないことさへある。あんなにまづい、あんなに高い、據んどころなく其れを吸はされて居るあの煙草でさへも！――服部が口癖にする言葉

を借りれば、「われわれ日本人はもう長いこと煙草の味と香とを忘れさせられてしまつて居る。われわれが此の頃吸つて居るのはあれは煙草ぢやない」のであつた。――かうして東京の市民は、舊時代のいゝ物を奪ひ取られて、新時代のあてにならない物を無理强ひにされて居るのだつた。凡べて此れ等の、此の都會のあらゆる方面で經驗される亂雜と不誠實とは、煙草屋の爺を掴まへて「詐欺だ」と云つた服部の眼からは、みんなあのマチと同じやうな「文明の詐欺」だつた。此れは彼のやうな性情を持ち、且それにも拘らず彼のやうな境遇に陷された人間の場合に於いては、普通の人よりも猶更その感が深かつた譯である。彼はそんな詰まらない世間の事や物質慾に囚はれたりするのが、藝術家としての自分を研き出す爲めに餘り有益でないことは知つて居たのだが、一面に於いて病的なほど意志の弱い男でもあつたので、容易に享樂生活への執着から自分を切り放すことが出來ずに居た。――いや、恐らく此の後とても、一生彼はさうであるのかも知れない。――で、彼は窮迫した暮らしをしながら決してそれに甘んじては居ないで、當り前なら辛抱の出來る事柄にも不滿を抱いたりくよくよ氣を揉んだりしたので、その爲めに其の落魄した境涯から受ける悲慘を、それの正當な程度以上に大きくも感じ、深くも味はつた事はたしかである。たとへば今も云つた彼の「東京」に對する反感と憎惡、――それは彼の現在の位置から見れば身の程知らずの滑稽な沙汰ではあるが、彼に云はせれば此の都會に於けるいろいろの醜惡は、一つとして彼の生活に、――時には勿論彼の精神生活にまでも、――胸をむかむかさせるやうな臭氣を齎らさずには居なかつたのである。「此の頃の東京には何處に美しい市街があるか？何處に面白い芝居があるか？何處にうまい料理屋があるか？何處に人間らしい血の通つた藝者が居るか？」――彼には其れが自分に痛痒のない事としては感ぜられなかつた。のみならず其處に住んで居る市民の多くが、彼よりはもつとやかましく愚痴をこぼしてもいゝ筈の市民の多くが、それほど不平さうな顏もしないで悠長に暮らして居るのが不思議でもあつた。彼等は彼等の生

活に關して無神經なばかりでなく、「美」に關しても無神經な人々であると、さう思ふ時、服部の反感は市民全般の上にひろがつて行つた。いやそれどころか、彼には近頃の東京の天氣までが、戰爭以來著しく惡くなつて居るやうな氣がした。春になつても春らしい心持のする麗らかな日はめつたに來ないで、どんよりと曇つた空が始終陰鬱に頭を壓さへつけて居る。秋は秋で、身も心も輕々とする爽やかな日の光を仰ぐことは殆んど一日もなく、たまに晴れたかと思へば直ぐに薄暗くびしよびしよと雨が降つて來る。彼はなつかしい少年時代に見覺えのある青い青い空の色を、此の二三年の間と云ふものはすつかり忘れかけて居た。「己の頭の上にあつた空だの雲だのは、あんなに美しかつた空だの雲だのは、いつの間に何處へ行つてしまつたんだらう。」――それを考へると彼は呼吸が詰まるやうな苦しさを覺えた。さうして誰に向つてだか知れないが腹を立てた。若し腹を立てる相手を見附け出すとしたら、それは「自然」に對してであつたらう、――その土地の「文明」に對して愛憎を盡かしてしまつた人間が、せめて其處の「自然」のうちに何かの慰藉を求めようとするのは當然だのに、此處ではその「自然」すら恩寵を垂れてはくれないのだつた。

服部が、數年の間此處彼處の陋巷を漂泊した揚句、その最後の落ち着き場所を淺草に擇ぶまでには、以上のやうな心持ちの經過があつた譯である。彼は都會人であるから、東京の醜惡が厭になつても田舍へ引込む氣にはなれなかつた。そこでつまり、其醜惡が最も露骨に現はれて居る方面――公園の近所に巢を造つた。此は一見甚しい矛盾のやうであるが、世間には斯う云ふ例が案外多いのである。現にあの公園に依つて衣食して居る俳優や、芝居ごろつきや、墮落文士や、その外何とも名のづけやうのない浮浪者や醜業婦の群のうちには、いろいろの意味で服部に似た心境を經てから、始めて彼處へ流れ着いた者が決して少くはないだらうと云ふこと、――此れは誰にも想像し易いことであつて、また事實も其の通りに違ひなかつた。怠け者で、金がなくて、意志が薄弱で、それでやはり贅澤な物質慾から自分を救ひ出すこと

が出來ない人々、さう云ふ人々がだんだんと社會の壓迫に追ひ詰められ、不平の餘り世を茶化したり拗ねたりする了見になり、燒け糞半分から安價な享樂に溺れる爲めに集まつて來る土地としては、淺草ほど究竟の場所はないのであるから。まことに淺草へ行きさへすれば、此の都會にある凡べての享樂機關は大槪其處に備はつて居るのである、但し、その最も醜惡な形に於いて！——だが、どうせ此の東京では何處にも「美」を求めることは出來ないのだから、醜惡が醜惡そのまゝの姿で現はれて居る淺草が、一番住み心地のいゝ場所だとも云へないことはないであらう。其處には下町の中心地や山の手にあるやうな虛僞や不調和がなく、醜惡がやゝともすると「美」に近い光を放つて輝いて居る。その輝きはあの程度ではまだ甚だ不充分ではあるけれども、公園へ落ち込んで行つた哀れな享樂主義の人々には、(さうして服部には勿論の事、)それがせめてもの慰藉であり得る場合もあるに違ひない。だから彼の人々のうちには、昔のそれよりはもつと複雜な性格を持つ紙衣姿の伊左衞門や紀文大盡も居るであらうし、拗ねた揚句に悟り濟ましたやうな仙人も居るであらうし、飽く迄も世間を罵つて已まない不平分子も居るであらう。服部も見やうに由つては紀文大盡にも見え、仙人にも見え、不平分子にも見えたことはたしかだが、たゞ彼がいくらかでもそんな人々と違つて居る點があつたとすれば、彼の場合には、前に云つた其れ等の孰れもであると同時に、ボオドレエルがその散文詩「ヴィナスとフール」で歌つたところのフールでもあつたと云ふことである。チヤリネに出て來る道化役のやうなけばけばしい服を着けて鈴の附いた帽子を冠つて、ヴィナスの像の前にひれ伏して居るフール、——その毒々しく白粉を塗つたおどけた顏つきの中にある二つの限には、よくよく見ると、やはり永遠の美を慕うて已まない人間の嘆きと悶えとが淚で光つて居る、——さう云ふ切ない苦しい氣持ちが、服部の胸にはあつたのである。さうして其の氣持ちが、彼をまだ全くの痴人にはさせてしまはなかつたところのもの、彼を痴人から藝術家の方へ區別してくれるところのものだつたのである。

けれども、淺草に住むやうになつてからの彼の生活のし方は、それはたしかに墮落であり、世間的には彼はもうほんたうの痴人であつた。以前の彼にはまだ上品な趣味と誇りとがあつた筈だのに、そんなものはいつの間にか捨てられてしまつて、後には旺盛な物質慾ばかりが殘つて居た。食ふことでも飲むことでも、質を問はないで量を貪ると云ふ風に彼は變つて行つた。「どうせ何處へ行つたつてうまい物なんかありやしないんだ。値が安くつて勿體ぶらないだけでも淺草が一番だ。」――彼はそれを口癖にした。食ふと云ふ慾、――彼の持つて居る慾のうちでも最も病的に强かつたところの食ふと云ふ慾、それは彼の頭へしきりなしに附いて廻つて、さまざまな妄想の形で彼を苦しめ通して居たものだつたのである。(作者は此處で彼の食慾がどんなに奇矯で過激だつたかを說明するのに、少し精しくなり過ぎても差支へはなからうと思ふ。なぜかなら、世の中には隨分酒好きの男はあるが、好きな食ひ物をたらふく胃の腑へ詰め込みたい慾望が、彼に於いてほど激しい例はあまり多くはあるまいと考へるから。のみならず、彼の場合にはそんなに食ひしんぼうであると共に可なりな酒飲みでもあつた!)勿論人間の欲望のうちで食慾は一番簡單に滿足され易い性質のものだから、貧乏すれば誰でも其の慾の大部分を喰ひ氣の方へ集注する。「衣」と「住」とが意のまゝにならないとすれば、せめて「食」だけは、――好きな物を腹一杯喰ひたい、――さう思ふのが人情に違ひない。しかしさう思ふと同時にそれを徹底的に實行もした(又は實行せずに居られなかつた)服部のやうな男も珍しからう。作者は此の章の初めに、服部が成るべく無駄な費用と勞力とを切り縮めて暮らして居ることを物語つたが、實を云ふと、彼の節約は文字通りの意味ではないので、その節約から剩し得たものを悉皆食慾の方へ浪費するのだつた。彼は出來るだけ生活を簡素にしてさうして出來るだけ多くを喰つた。――喰ふ事の外は恐ろしくしみツたれで呆れるほど辛抱强かつたくらゐに。たとへば一張羅の服を着たきりで居たり、一足のぼろ靴しか持つて居なかつたり、內に居る時は茶の代りに水ばかりがぶがぶ飲んで居たり、――

そんな悲慘な生活の裏にはそれよりももつと悲慘な慾、その悲慘に堪へてまでも時々煖かい肉や酒に有りつきたいと云ふもつと悲慘な慾が潜んで居た。「己は一體昔からこんなに意地が穢かつたらうか？　食ふに困るやうになつたので急に食ふことが氣になり出したのぢやないだらうか？」彼はよくさう思ひ思ひした。さうしてさう思ふ時に、自分の今の落魄を恨まずに居られなかつた。なぜかと云ふに人は金錢に不自由をしない間は、自分がどのくらゐ意地穢なであるか氣が付かずに濟ます事が出來るのだから。――つまり服部が裕福であつた時代には、食ひたい物を好きなだけ食つて居られたので、彼は自分の食ひしんぼうがこんなであらうとは知らなかつたし、また或る意味では食ひしんぼうでなかつたとも云へる。食ひ氣と云ふものが人間に於いてどんなに根強い本能であるか、（尤も彼の場合には特別なのだが、）それに氣が付いたのは彼が落ちぶれてから後のことだつた。ちやうど鰹節を削ると中から赤い心のところが出て來るやうに、種々雜多な彼の慾望が貧乏のために一つ一つ削り取られた時、其處に食慾――「意地穢な」と云ふ最も太い最も味のある心が露はれて來たのである。さうして其の意地穢なの味は、彼には矢張り鰹節の赤身と同じに嚙みしめれば嚙みしめるだけ旨味の出て來るものであつた。「己は成る程意地穢なには違ひない。だが人間の慾のうちで此れが一番最後の眞劍な慾だからな。」――若し彼の食ひしんぼうを卑しむ者があつたら、彼はさう答へたでもあらう。彼は「意地穢な」が卑しい慾であればあるほど猶更その味を忘れかねた。「實際」――彼の吃りの口調で云はせれば、――「し、し、疥癬ッ掻きになつて見なければし、し、疥癬を引掻く氣持ち好さは分らないやうに、貧乏しなければ意、意地穢なの味は分らない」のであつた！　服部は自分自身のうちに醜惡な快感を貪りつゝある疥癬ッ掻きの姿を見た。のみならず其の快感を覺えたことを感謝した！　さうして、疥癬ッ掻きが彼の不思議な快感に溺れて疥癬が一層ひどくなるのを厭はないのと同じに、彼も亦なつかしい食ひ意地の爲めに一層素寒貧になるのを厭はなかつた。

「食ひ意地」と云ふことが人に同情を起させるよりは滑稽を感じさせる種であるから、服部がそれへどんなに高い犧牲を拂つたからとて、誰がその悲壮を認めてくれよう！——けれども、若しさう云ふ文字を使つておかしくないなら、彼の食ひ意地はたしかに悲壮なものだつた。まるで年を取つてから女狂ひをやり出した始末に負へない老人のやうだつた、即ち食ふ事にかけると彼は見えも外聞もなかつたのであるから。で、彼がその素晴らしい食ひ意地を充たしに行く家は、大概六區の近所の芝居小屋や活動寫眞館の樂隊などが聞えて來る路次の中の小さなチャブ屋で、どうせロクな食ひ物屋のない公園のうちでも最もロクでもないバアだのカフェだの馬肉屋だのに限られて居た。それはさう云ふ店でなければ勘定を貸してもくれなかつたし、又其處へ行けば彼を最負にしてくれる連中（此れは主に例の劇團の俳優たちのことだが、たまには其處のウェイトレスの中にも彼の仙人じみた性格の一面を面白がる女が居たのである。）の誰かしらに會へたからでもあつた。諸君が若し松葉町の家に彼を訪ねて留守だつた場合に、その日のうちに是非彼に會ひたいと思つたら、晩の九時から十時頃にそれ等のチャブ屋を一軒々々覗いて見るがいゝ。さうすれば諸君は間違ひなくそれ等のうちの孰れか一軒に彼の姿を見出だすであらう、——既にむしやくしやと平らげてしまつた三四枚の洋食の皿やビールのコップや正宗の壜に圍まれながら、テーブルの上に眞赤な顔を突き出して（彼は醉ふと最初に赤くなつて意地が穢くなり、しまひに眞青になるたちの男だつた。）まだ何かしら喰ひたさうに眼を光らせて居る彼の姿、——其處にはしかし、昔ては米がまづいからと云つてトラピストのバタにヴィエナの黒パンを喰つてばかり居た時代の、貴族的な彼の俤はもう何處にも見あたらなかつたけれども。彼は今では食ひ物のうまいまづいを全く忘れてしまつたのであらうか？彼の胃袋はあのグチャグチャした、生油臭い胸の燒けるやうなシチウやビフテキやカツレツに充分愉快に飽滿して居るのであらうか？——だが、若しさう考へる人があつたら其れは餘りに彼の爲めに思ひやりのない觀察だと云はなければなら

ない。彼の意地穢なで光つて居る獸のやうな眼の中にも、その淺ましい獸の「己」を嘆く心が、云ひやうのない哀愁の輝やきを帶びて時々はちらりと湧き上る事があるのだから！　それを見てくれるほど親切な人はないかも知れない、たゞ神が見てくれるかも知れない、と、彼は思つた。さう思ひながら彼はしかし依然として「食ひ意地」の奴隷だつた。彼がどんなに落魄した今であつても、まづい物はやはりまづかつたに違ひなかつたが、まづければまづいほど顔をしかめながら意地になつて喰つたのである。喰はずに居られなかつたのである。此心持ちは彼自身にも說明の出來ないもので、喰はなければ悲しかつたし、喰つて見ても悲しいし、……そのうちに醉ひが循つて來て、舌が痺れて、たべた物が腹一杯になり體中が火照つて來さへすれば、やがて悲しみの底から何か賴りになりさうなものがぐつぐつと血管に煮えくり返つて來る。何か賴りになりさうなもの、——さうだ、此の世の中にはそんなものはない筈だが、若しあるとすれば此の一瞬間の「滿腹の氣持ち」だけだ。自分が自分の體の中にしつかりと物を所有して居る感じ、此の感じより外にもつと賴りになるものがあるだらうか？　もつとあてになる感じがあるだらうか？　人間は胃の腑へ物を詰め込む以外に、何をもつとしつかりと所有することが出來るか？　金持ちの財產だつて學者の智識だつてこんなにたしかに、どつしりと重々しく體中へこたへるやうな所有の感じは得られないぢやないか！　どんな懷疑家だつて今喰つたものが自分の胃袋の中にあるのを疑ふことは出來ないぢやないか！——服部の心持ちはこんな風にでも說明するより仕方がなかつた。彼の食ひ意地は味覺の快感が目的でなく滿腹の快感が目的だつた。彼は舌で食はないで胃で食つた。どんなにか彼は空腹を恐れたことであらう！　どんなに彼は滿腹を得る爲めに勇敢だつたらう！彼は寒中でも着物を質に入れて食つた、帽子を食ひ書籍を食つた、身の周りにある物は自分の物でも人の物でも！　此の若い藝術家の頭の中には、いつも「美」の幻影が夕ぐれの地平線に浮く雲のやうに棚引いて居ると思つたら、それは全然買ひ被りでないまでも餘程割引きをす

る必要があらう、一旦腹が減り出したら彼の頭は食ひ物の妄想ですつかり塡まつてしまふのであるから。いや、腹が減り出したらではなく、滿腹の感じが消え出したら直ぐ、である。彼にはちやうどいゝ腹加減の感覺と云ふものがなかつた。いつでも下腹がゴム毬の如く膨くれてもたれ氣味で居なければ決してちやうどよくはなかつた。それ故彼の喰ひたがらうとするものはあつさりした野菜や魚などではなく、腹の足しになりさうなしつッこい肉類ばかりであつた。讀者は多分服部が空腹で困つて居る時に、それ等の食ひ物の幻影がいかに生き生きした實感を持つて彼の腦裡に描かれるかを想像するとは出來ないであらう。實際それは服部になつて見なければとても考へられないことであるから。――たとへば牛鍋が食ひたいとなると、彼の頭は其の牛鍋をあたゝめる焜爐となり、さうして其處で牛がほんたうにヂクヂクと煮え出すと云つても誇張ではない。彼はその鍋から立ち昇る煙と匂とを感じ、どろどろに煮詰まつた汁の色を眼のあたりに見、その汁の中から摘まみ上げて口の中へ持つて行く大小さまざまな肉の切り身の形――大きな切り身は亞弗利加大陸のやうな形をしたり、小さな奴は日本帝國のやうに細長くちぎれさうになつたりして、たらたらと汁を垂らしながら箸の先にぶら下つて來る。――をも眼で見るばかりか確かに舌で受け取つて喉へ嚥み下すのである。シユウマイの事を考へる時がしかし最も滑稽であつた。彼は布を丸めたやうなシユウマイの皮膚にある太い皺の線をハツキリと見た。さうして何よりも其の皺を想ひ出すと、あのぽかぽかした豚肉の饅頭が喰ひたくてたまらなかつた。二日でも三日でも食はうと思ひ立つた物が食へない間は、彼の頭は此れ等の食ひ物の怪物が勝手氣儘に暴れ廻る化物屋敷だつた。それが彼の食慾をどんなに激しく刺戟したか？　どんなに彼の意地穢なを募らせたか？　――こんな經驗は多くの人には持ち合はせがないかも知れない。だが諸君のうちでも、非常に腹の減つた時に何かの御馳走を喰ふ場面を活動寫眞で見た者はないか？　さうして其を見た時に不思議な誘惑を感じたことはなかつたか？　若しさう云ふ人があつたら、幾分かでも服部

の氣持ちを想像することが出來るであらう。つまり服部の場合には、その誘惑がそれでなくても薄弱な彼の意志を滅茶滅茶に蹈み躙つて、餌を投げられた犬の如くに彼を食ひ物屋の店先へ走らせる不可抗力だつた。彼は夢中で餌食をたらふく食つてから、始めて自分が犬だつた事に氣が付き、自分の意志の薄弱を呪ふ餘裕を持つた。彼には常に悔恨が噫と共にやつて來た。――或はそれは悔恨ではなく單純な哀愁に過ぎなかつたとも云へよう。なぜかなら、彼は噫が出る度毎に、意地穢なを悔やみながらも今食つた物の味を回想して、私かに苦い樂しみにさへ耽つたからである。

――服部と云ふ男の生活は實にこんな工合だつた。既にこゝまで讀んでくれた諸君は、きつと其の醜惡さに鼻つみをされたことであらう。だが、豫め斷つて置きたいのは以上は彼の食ひ意地の方面だけを述べたので、まだ此の外にも人の目につかない所では一層醜惡だつたかも知れないのである。こんな事を餘り長たらしく説明すると讀者は迷惑であらうから、成るべく差し控へることにはして置くが、讀者にしても、服部は食ふ以外には何をしたか？　或は何もしなかつたか？　或は又、彼の旺盛な物質慾は常に食慾にのみ集注されて、その外には何も欲しなかつたか？　と云ふ疑問は當然起されるに違ひないと思ふ。さうして此の疑問は、彼を贔負にしてくれる樂屋の連中や飲み仲間の間にもそれが一個の謎として屢々語られたくらゐであつて、彼等は服部が女を買ひに行くところをつひぞ一度も見たことや聞いたことがなかつたのである。それに就いて、或る者はこんな觀察を下した、――彼奴のやうな意地穢なの人間が、而もあの歳で、女に對しては意地穢なでなしに居られると云ふ筈がない。彼奴はたしかに女好きだ。第一自分でも女好きを標榜して居るし、醉拂ふと直ぐに女の品評を始める。其の癖未だ嘗て女との噂を立てられたことがないとすると、彼奴は其の點に於いて食ひ物に對するよりももつと醜惡な安價な滿足を貪つて居るのぢやないだらうか？　此の頃の彼奴の樣子を見ろ、あの睡いやうな顏つきや眼の表情や口のきゝやうを見ろ、何だか斯う、以前よりも頭がだんだん朦朧として馬

度になつて來たやうぢやないか。いや、そればかりぢやない、内へ行つて見ると彼奴は晝間でも蒲團に寢ころがつて、何かしらぼんやりと考へ込んで居る。——此の說に反對する者は又斯うも云つた、——成る程現在の彼は殆んど廢人と擇ぶ所がないまでに成り下つては居るが、それでもまだ何處か知らにお坊つちやんらしい上品な俤をとめて居る。で、察するに彼が今日の如く墮落したのは失戀の結果ではないだらうか？　さうして未だに或る一人の戀人を思ひ詰めて居て、食ひ物に對しては卑しくなつても女に對してはプラトニックな感情を持ち續けて居る、と云ふやうな事がありはしないか？　さればこそ、平生はまるで痴呆のやうにどんよりとして居る彼の瞳の中にも、をりをり深い悲しみを帶びた淸しい耀やきが閃めいて通ることがあるのだ。——と、此の二つの見方は孰れも一應は尤もであつたが、玆にもう一つ、一番眞相に近いと思はれる見方があつて、近頃では多くの人がきつとさうに違ひないと云ふやうになつて居た。その說に依ると、過去の服部に失戀の經驗があつたかどうかは別問題として、此の頃の彼はたしかに或る女に惚れて居る。彼が時々淺草劇場の樂屋へ出沒するのは、金が借りられるばかりでなく、其處に彼の目ざす女が居るからで、彼女と口をきゝたさにやつて來るのだ、と云ふのであつた。此の噂は初めは「人の惡い冗談」として通つて居ただけで、誰も眞に受ける者はなかつたのに、その冗談を云はれる度びにいつも服部がドギマギしながら顏を赧くするところから、やはり本當だと云ふことになつてしまつた。何でも服部に惚れられたと目されて居る女優は、此の劇團のソプラノ唄ひの林眞珠と云ふ少女だつたのである。彼女は斯う云ふ社會には珍しい無邪氣な情深い處女であつたし、——此の少女の事に就いては、こゝでは單に極く必要な部分だけを云つて置かう、——それに、此の一座では割りに優待されて懷都合も好かつたので、服部が來ると屢々いくらかの金を惠んでやつたが、その場合に彼女の手から其の賜物を恭しく受け取る服部の樣子が、何となく不思議であると云ふのが抑もそんな噂を生む原であつた。「服部さん、あなたにお小遣ひを上げませう

か。」――さう云つて少女が、銀貨や札を無造作に摑んで彼の鼻先へ翳して見せる。すると彼は「あゝ有り難う」と云ひながらそろそろと手を彼女の前に差し出す。――此の光景は舞臺ではとても見られない奇觀であつて、噂の眞僞なぞは別問題としても、兎に角それを目擊した者に或る印象を燒き付かせることは確かだつた。斯う云つただけでは或は讀者には其の場面がはつきりと浮かんで來ないでもあらうが、公園のうちでも重に西洋物を演ずる芝居の樂屋では、女優たちはちよいとした幕間などに和服に着換へたりする暇がないので、いつでも直ぐと洋服が着られるやうに、シユミーズや、コルセツトや、腿まである長い襪や、警察の命令で脚へ穿かせられるメリヤスのタイツなどを着けたまゝ、時には踵の高い靴をさへ穿いたなりで、膝を曲げることも出來ずに寢ころんで居るか立つて居るかして居る場合が多いのである。で、眞珠が服部に施しをする時にも、彼女は大抵さう云ふ姿をして居たものと考へて貰はねばならない。勿論都合に依つたら其の姿の上へスカアトを着けても居たらうし、ブロンドの鬘を冠つても居たらうし、エンジエルに扮したりする時は翼を生やしても居たことであらう。さうして彼女は、今も云つた踵の高い靴を側立てゝ小馬の如くチヨコチヨコと廊下へ走つて來て、池の緋鯉に餌を投げてでもやるやうな工合に金を持つた手を突き出しながら、「服部さん」と云つて彼を呼びかける。と、服部は彼女の傍へおづおづと歩いて行つて、いつも必ず片膝を衝いてしやがみながら、妙に澄まし込んだ態度で手を差し出すのである。(此の際彼が例の一張羅の洋服で居ることを忘れてはならない。)立つて居る少女の「白」の感じのする服裝と純粹で淨らかな「優美」を持つた體つきと、その前に跪いて手をさし伸べつゝ(おまけに手は顫へて居た。アルコール中毒の爲めでもあつたが其の時の顫へ方は特別だつた。)彼女の施しを受けようとして居る西洋の乞食じみた青年と、……この二人の對照がどんなだつたかを、讀者は想像することが出來ないであらうか。――實際それは或る高尙な哀れな心持ちを人の胸にそゝらせる場面だつた。多數の人間が寄り集まつて活動して居る劇

々しい社會の一廓、――たとへば通行の激しい大道のまん中だとか、亂雜でふしだらな芝居小屋の樂屋の廊下だとか云ふやうな所にも、時々其處に住んで居る人間同士の偶然の組み合はせから、そんな場所には勿體ない「詩」だの「繪」だのが瞬間的に現はれると云ふことを感じさせる場面だつた、――舞臺の上では始終そんな爲種をやりつけて居る俳優たちまでが心を惹かれずには居なかつたくらゐに。彼等は初めのうち服部が何の爲めに少女に對して、――片膝を衝いたり兩手をさし出したり、――そんな恭しい態度を取るのかを不思議がつて、多分少女にからかつて居るのか、それでなければ樂屋の連中の座興のためにやつて居るのだと考へて居た、彼は折々仙人じみた顏つきで本氣だか冗談だか分らないやうな飄逸な事をやる男だつたから。けれども實はそれにしてもあまり不思議過ぎて居た。たとへば金を受け取る刹那にほんの二秒か三秒の間ではあつたがしかし其の間だけはまるで息の根が止まつたやうに物靜かに少女の顏を見上げて居る彼の眼つき、――それはたしかに空惚けて冗談をやつて居る仙人の眼つきではなかつたのである。その眼つきこそ、彼の痴呆じみた瞳の中にも時々閃めくことのある深い悲しみを帶びた淸しい耀やき――であつたとも云へようし、彼の昔の貴族的な俤を想ひ出させる唯一の品威であつたとも云へよう。いづれにせよ其の眼つきを見た者は、彼の少女に對する爲種が座興どころでなく、彼一流の超世間的な圖太さから端の思はくなどは忘れてしまつて、心の底から何物にか打込んで居る感情の發露である事を疑はなかつたに相違ない。が、此の事に樂屋の連中が氣が付き出したのはずつと後だつた。さうして、彼等が追ひ追ひと其れを噂するやうになつてからも、眞珠は相變らず服部に金を惠むことを止めなかつた。彼女は其の噂を耳にして服部をおかしな人だとは思つたけれども、まだそれを氣味惡く感ずるほど「女」にはなつて居なかつたし、侮辱を感ずるほど高慢でもなかつたから。たゞ、最初は不仕合はせな青年畫家を憐れむ心から、――感心な事に、此の少女は藝術家を尊重し勞つてやるのが世の人々の義務だと信じて居るらしかつた、――親切にし

てやると云ふ樣子だつたのが、此の頃では自分がさうすると服部がマゴマゴするのを面白がつて、極く子供らしい徒ら好きな氣持ちから彼に戯れるやうな風も見えた。金を與へようとするとき、彼女は鹿の蹄に似た可愛い靴の爪先を揃へ、すつきりした兩脚を眞直ぐに立て、まるで小さな兵隊のやうに活潑に、左の腕をぴつたりと脇へあてゝ少し反り身になりながら、銀貨を握つた方の手だけを得意らしく前の方へ突き出してニコニコ笑ふのであつた。――「あの兒はよく笑つて居られる。」と、人々は云つた、「あの服部の底の知れない眼つきで睨まれながら。」――それから服部がその「眼つぶ」を使ひ出すと、ちよいとの間は彼を眞正面から見返して居るが、直きに、踵を一つクルリとさせて、體を半ば横の方へ廻して、伸ばした右の腕の蔭へその顔を意地惡く隱してしまふ――此れは羞澁むのではなく、さうすると服部が狼狽するからで、彼女はなかなか金を渡さうとはせずに、腕の蔭から首を出したり引込めたりして暫く彼をからかつて居るのだつた。と、服部は案の定當惑らしい樣子を見せてモヂモヂした末に、ふいと眼を潰つてしまふ。「あ、眼を潰つた。眼を潰つた。」――さう云つて樂屋の中の者がヤンヤと囃し立てるのは其の時だつた。それは彼の横着な癖で、極まりの惡い時や、焦れつたい時や、返答に困る時や、欲しい物がある時や、そんな場合に彼はいつも眼を潰つて睡さうな顔をして見せるので、「眼を潰る」と云ふのが此の仲間の通り言葉になつて居たのである。少女はまんまと服部に「眼を潰ら」せた自分の働きを誇示するやうに一座を見廻しながら、それでも皆から一齊に喝采されると圓い頬つぺたをさツと紅くして、錢を相手の掌へ落し込むや否や廊下の向うへ急いで駈けて行くのだつた。――そんな譯で、もう近頃では服部が眞珠に惚れて居る事實を否定する者などは一人もなかつた。のみならず彼が外の女に眼もくれない事や、年中寢てばかり居て頭がだんだん馬鹿になつて來るらしい事から推し測つて、恐らく眞珠のことばかりを妄想に描きながら或る滿足に耽つて居るのだらうと云ふやうな說が云はれて居た。つまり、若し此の風聞が本當だとすると、彼は此の方面でも食

物以上に醜惡な人間だつたのである。

さて、作者は服部の一身に就いて、讀者にはさほど面白くもなかつたであらう事柄をあまりくだくだしく説明し過ぎた。で、此れから直ちに此の物語の門口へ這入ることゝしよう。——

第二章

われわれは再び第一章の初めへ返らなければならぬ、——卽ち千九百十八年の四月の末ごろのことであつた、或る日の夕方、松葉町の服部の家へ南貞助といふ一人の青年が訪ねて來た。此の男は、若し「友人」と云ふ言葉を嚴格に解釋するなら彼こそ服部の唯一の友人であつて、それ故に又服部の過去をも知り、その現在にもまだ全くは絶望して居なかつたところの唯一の者だつたとも云へるであらう。東京の帝大の文科に居たゞけ服部よりはいくらか敎養のある方だつたが、學者の素質ではなく矢張り藝術家だつたと見えて、或る時代から繪をやり出して知らず識らず其の道に深入りをし、遂には其處に生きがひのある巳れを見出し其れに生涯を捧げるやうになつてしまつた、——一と口に云ふと、此の南貞助は先づそんな境遇に置かれた青年だつた。彼が服部と知り合ひになつたのは、もう六七年前に其の處女作を或る小さな展覽會へ發表した時からで、彼の方からも服部が彼を信じてくれる唯一の友人であつたかも知れない。なぜなら、まだ世間から認められるほどの仕事をして居ない點では、彼も服部と同じだつたから。で、南は去年の春、ちやうど服部が現在の住所へ引き移つた時分に、父の供をして支那へ漫遊に出かけ、今から一週間ほど前に漸く歸つて來たばかりだつたので、久し振りになつかしい友の顔を見に來たのである。

松葉町の住居を訪ねるのは、彼は其の時が始めてだつた。筆不精の服部は引越したからとて番地を知らせては寄こさな

かつたし、――尤も彼のやうに始終越してばかり居たら一々知らせるのも大變な手數だらうが、事に依るともう松葉町にも居ないのぢやないかと思ひながら、南は夕ぐれの町のゴミゴミした路次の間を何遍となく往つたり來たりした。孤獨も孤獨、全くの一人ぼつちだのに、此れ迄の服部は其の一人ぼつちを樂しむ爲めに間借りをする事を厭つて、小さくとも一軒の家に住むのが常だつたけれど、近頃はそんな風でもなくなつたのぢやないか知らん？――何處か此の邊の二階にでも巣を喰つて居やしないだらうか？――それらの事も南には一向分つて居ないのであつた。が、服部に會ひに行くとなると此の苦勞は每度のことで、彼はもう其れに馴れて居た、實際、此の二三年の間と云ふもの、同じ家に二度と服部を訪ねることはなかつたのだから。引込み思案で町を歩くことなんか餘り好まない南は、外の場合ならこんな面倒を堪へ忍ぶ氣はなかつたであらう。それが服部の場合だと家が分らないでマゴつけばマゴつくほど、「たつた一人の友だち」に對する自分の愛情がますます强く感ぜられて、あの哀れな服部の淋しさうな姿までがはつきりと頭に描かれて來るのだつた。彼は歩きながら、自分が始めて足を蹈み入れた其の邊の町、――曖昧な、下品な、低い小さな家ばかりがごたごたと押し合つて居る其の邊の路次の匂を嗅いだ。さうして其處に、そのじめじめした濁つた空氣と服部の生活とを結び付けて、或るぼんやりした好奇心を起さずには居られなかつた。彼も服部と同じ東京の生れではあつたけれども、山の手の嚴格な家庭に育つて、藝術家としては消極的過ぎるほど淸く明るい生活に馴染んで居たので、たまにこんな所へやつて來ると、都會の暗黑面に潛む町の樣子が、全く別の世界へでも來たやうな心地を覺えさせるのである。彼はふと、去年の十一月の或る日の暮れに、父につれられて南京の秦淮の町をさ迷うたことを想ひ出した。父は杜牧の詩にある杏花村の故蹟を調べるのだと云つて、せゝこましく曲りくねつて居る秦淮の陋巷を二三時間もうろつき廻つたのであるが、あの時、あの廢頽した支那の町を歩きながら彼にはなぜか知ら服部の事が想ひ出された。服部が若し一緒だつたら、きつと

斯う云ふ町の情景を喜ぶであらう、さうして若し、彼が支那に生れたら、きつと斯う云ふ路次の奥の洞穴のやうな巣窟にくすぶつて阿片でも吸ふことになるであらう、――と、そんな事を考へ考へ彼は父の跡に從つて居た。兩側には廢墟の如く崩れかゝつた灰色の壁の家が並んで居た。父と自分とが其の壁の間をやつと通れるほどの狹い路だつた。路には凸凹の煉瓦が敷き詰めてあり、喰ひ物の油だの小便だのが其の窪みに溝を作つて黑く流れて居た。――南はそれを昨夜見た夢のやうに記憶から呼び起した。服部が支那人であり、さうして自分も支那人であつたら、此の松葉町があの秦淮の町になつて居るだらうとも思つた。賑やかな區域の直ぐ傍にある陰鬱な惨めな一廓、――その點に於いて、兩者には何處か共通なところがある。服部と違つてデカダンスの趣味のない南には、かう云ふ場所の生活は永久に鎖された謎であるが、その「謎」の氣分を抱かせることは孰方も同じだつた。たゞ、支那の町の方が、同じ廢頽でも此處のやうにじめじめと中途半端に腐つて居るのでなく、土地柄だけにパサパサに乾燥し切つて荒れ果てゝ居るのが、「荒凉」とか「蕭殺」とか云ふ字面にかなつて餘計人を壓迫もするし、又それだけに、南のやうな旅行者の眼には一種の美感を與へたのである。

「實際だよ、腐つたら腐つたで其處に『美』が生れる筈なんだが、東京の惡いところはほんたうに腐つても居ないことだ、要するに紙屑見たやうな都會さ。」

――あの秦淮の町の樣子を東京嫌ひの服部に聞かせたら、斯うも云ふだらうかと南は思つた。

家々の窓に燈火がつき出した時分に、二人の友は一年ぶりで漸うめぐり會ふことが出來た。尋ねて來た友は、やつとの事で尋ねあてた家が豫想したほどむさくろしい住居ではないと思つたが、「上り給へ」と云はれて其の聲のする二階の部屋へ這入つて行くと、其處は矢張り亂雜――と云ひたいところだが生憎今では亂雜と云ふほどの品物もなくなつて、

むツとする黴の臭ひと汗の臭ひとの打ち交つた不潔さがあるばかりだつた。其處に服部は夜具蒲團の上へ(今起き上つたところらしく)あぐらを搔いて居て、その蒲團の餘りの方を指しながら「まあ据わり給へ」と云つた。

「なに此處で結構」

南はちよつと困つた顏をして、わざと疊の上へ据わつた。――彼は黒光りに光つた脂染みた夜具蒲團よりも、埃を充分に吸ひ込んで居る疊の方がまだ淸潔だと思つたのだらうか? それとも特に、その蒲團を嫌がる譯があつたのだらうか?――

―

其の晩、南は對の細かい久留米絣に、(和服の時は殆んどいつも)袴を穿いて居た。さうして其のなりは、彼の容貌や骨格や皮膚の色に附いて廻つて居る淸純な感じに、よく似合ふものだつた。たとへば其のとげとげしく細く長い頸、襟の間から見える鐡の如く瘦せてコチコチした胸の一部、その胸と同じ鐡で出來て居るらしく黒くシツカリと袖口から突き出た腕、――それらは此の靑年に行者じみた氣高さを與へるもので、洋服であつたら隱されてしまふだらう。彼は背の高い、骨組みの頑丈なわりに肩の線の優しい、肉が締まつて少しひよろひよろして見える體つきだつた。全身の肌が何處にもムラがなく珈琲に似た色をして居た。それほど黒かつたのであるが、其の爲めに彼の小さな、しかし底深く透き徹つた生き生きとした眼の力がどんなに引き立つて居たか知れない。彼は又、頭を常にクリクリと五分刈りにして居た。彼の外見のうちで一番立派なものは、横顏から眺めた時の頭の鉢の形だつた。それはやはりコチコチに引き締まつて何處にも不規則な凹凸がなく、濃く密生した短かい毛髮で一面に蔽はれ、額から後頭部へかけて圓滿に、顏全體との釣り合ひもよくくつきりした弧を描いて居たのである。それはあの地球儀の形を想はせる立派な球で、其處に永久の若々しさが見えて居た。此の顱頂の骨相は彼の親讓りのものだつた。さうして、彼がその父親から讓り受けた遺傳的特質のう

ちでも、殊に貴重なものだつたと云へよう。嘗て彼が文科大學へ通つた時代に、彼の父親の南博士も彼の出席する教室へ東洋哲學史の講義に來て居たが、此の二人の親子の顱頂が生き寫しであることは屢々學生たちの注意を惹いたくらゐだつた。もう五十近い博士の髮の毛にはところどころに白髮が光つて居たし、小皺の多い顔には早くも老いが來て居たけれども、その八面玲瓏とした頭蓋の恰好を見ると、其處には未だに息子のそれに劣らない永久の若々しさがあることを思はせた。人間の骨相、――さう云ふものが一般に當てはまるかどうかは分らないとして、兎に角その顱頂骨は、博士の場合にも息子の貞助の場合にも、彼等に共通な生一本で潔白な人格、明晰な頭腦、さうして而も幸福に穩やかに生きられるお坊つちやん育ちの象徴であつた。たゞ其の明晰な頭腦が、――此の親子を知つて居る學生たちの意見に依ると、――親の博士には緻密で深遠な學者的の理解力として現はれ、それが息子の方へは藝術家的に鋭く透徹した直觀力に變形して傳はつて居た。で、服部はいつも南のことを考へると直ぐに其の頭の鉢が眼に浮かんだ。――それから妙な話ではあるが、中學時代に習つた幾何學を想ひ出した。彼は幾何學は嫌ひだつたけれど、南の頭の形はキチンとして好かつた、のみならず其のキチンとしたところが羨ましかつた。自分が若し女に生れて南に戀ひするとしたら、何よりも先づあの形を讚美するだらうとも思つた。――さう思つたのは結局服部が男だつたからであらう。なぜなら、あの顱頂には人間の情慾を唆かすものはないのだから。あの形の美を解する女は少ないに違ひない、幾何學を解する女が少ないと同じに。けれども、若し女と云ふものが男の肉體に戀ひするのでなく其の魂に戀ひするのだつたら、あの永久に若々しい顱頂を持つ南こそ、どの男よりも先に女の愛を奪つたであらう。さう云ふ女が出て來ない限り、南はいつ迄も戀愛を經驗し得ない人間であつた。そんな經驗が一遍でも彼にあつたとしたら、相手はきつとさう云ふ女だつたに違ひないことを、作者は玆に斷言して置かう。――しかし讀者は、作者が南の顱頂に就いて特筆した爲めに、その他の部分では彼

が醜男だつたと早合點をしてはならない。作者は彼を横顔から見た時に頭部の輪廓が目立つて美しかつたことを、注意したまでゞある。實を云ふと、彼は其の他の部分でも決して醜男ではなかつた。その顔は、それと頭部との釣り合ひがよく取れて居るやうに、それと全身との釣り合のよく取れて居る大きさであつた。顱頂の皮膚が伸びて女性的な生え際を持つ優しい額となり、貴族的な瘦せた細長い鼻となり、それを左右から挾んで居る心持ち憔けた兩頰、その頰の先の更に憔けたところに刻まれた小さな口——になるまで、それ等は凡べて上品な冷めたさを持つ纎細な線で畫かれて居た。顏の肌は黑いばかりでなく少しさらさらした感じがあつたが、それと太い眉毛とのお蔭で女性的過ぎるのをやつと免がれて居たほど、その目鼻立ちはきやしやであつた。——だから、普通の女たちが見ても彼の容貌は必ずしも惡くなかつたであらう。しかしそんな場合（が若しあつたとして）に何處迄も邪魔をするものは、彼の體中にある犯し難い冷めたさと固さだつた。それが最後に女たちを手強く撥ね飛ばしてしまふに違ひなかつた。彼の方では無論最初からそんな女に眼もくれないことは確かだが、——

「妙な所へ引越して來たね。僕は淺草と云ふ所へはほんたうに久し振りだ。子供の時分に二三度觀音樣へ來たことがあつたけれど、……」

南は肘掛け窓に倚りかゝりながら、そんな風にぽつぽつと語つた。もう初夏が近づいて來たらしい生暖かい風の吹く晩であつた。窓の外には、直ぐ頭の上にある十二階のイルミネエションが、光と云ふよりは毒々しいペンキ色で夜の空を染めて居た。上海から土産に買つて來た五十本入りの葉卷の箱を出して、南は其の場で封を切つて服部にすゝめた。服部は、格別吸ひたさうな樣子でもなかつたけれど、「君吸つてくれ給へ。僕は自分は吸はないが匂を嗅ぐのが好きなんだから。」さう云はれて仕方がなしにと云つた工合に、其の一本を口に咬へた。さうして其處に暫く沈默があつた。それ

は二人が匂を嗅ぐために默つてしまつたからである。――南の頭の中には、その匂と共に、上海から杭州へ旅行した時の汽車の沿道の光景が鮮やかな幻になつて浮かんだ。彼と彼の父とは一等室の窓際に向ひ合つて座を占めて居た。親子以外の者はつやつやしい黑繻子の服を着た支那の紳士ばかりで、彼等は皆高價な煙草を吹つて居た。父もそれを吹かして居た。滿員の室内には、遠い地平線にある春の朝の山の色をした青白い煙が、水の中へ墨を滴らした如く重く緩く流れつゝ、こつそりと擽ぐるやうな甘い薫りを次第に濃く忍び寄らせた。……その匂がどんなにあの美しい日の夢心地を助けたであらう! さうして又、あの日は何と云ふ素晴らしい日だつたらう! 秋とは云へちやうど日本の今頃に似た暖かい氣候で、窓の外には溜らなく晴れ晴れとした青空が展け翡翠色に澄み渡つた川や水たまりは喜びに充ちて輝き、麗らかな太陽を浴びて幸福に光つて居る田園の綠、楊柳の枝、鷺鳥の群、丘陵、城廓、寺院の塔、――それらのものが絕え間なく續く祭禮の音樂のやうに花やかに現はれて來る江蘇省の沃野の間を、汽車は終日走つて居た。走つても走つても豐饒な野の景色は盡きなかつた。まるでお伽噺にでもあるやうな樂しい國土、――かう云ふ國土に生れたら、自分はどんなに仕合せだつたらう、明け暮れ此の莊嚴な景色の中に育てられたら、「自然」に對する自分の感覺はどんなに早く眼を開いただらう、自分の藝術はどんなに此の自然から深い秘密を汲み取ることが出來ただらう。――南はその時さう思はずに居られなかつた、自分のやうに支那思想に傾倒する人間が支那に生れなかつたのは、取り返しのつかない不運だと云ふ氣がした。さうして彼は今、服部の口から吐き出される葉卷の匂を嗅ぎながら、再び其の不運に就いてしみじみと考へることを餘儀なくされた。自分は旣に支那から歸つて來た。日本の過去の文明の親であり淵源であつた彼の貴い大陸に別れて、自分は永久に日本人として此處に斯うして居る。自分の眼の前にはあの幽邃で冥想的な北京の代りに淺薄で醜惡な東京がある。此の二つの都會の相違はアラビアン、ナイトを讀んだあとで講談本を讀むほどの相違ではな

いか。自分は結局東洋人であるから、藝術に於いても東洋主義の精神を離れたくない。然るに自分の生れた此の今の日本では、西洋主義――それも半熟の西洋主義に祟られつゝある今の日本では、自分が其處に美を見出ださうとする純朴な自然が到るところで破壞されて居る。もともと支那に比べれば小規摸で貧弱な此の國の自然のうちで、倪雲林の山水や王摩詰の詩境を何處に求めたらいゝであらう。自分が今かうして此處に据はつて居るむさくろしい松葉町の裏長屋の二階、――此れこそ東京の醜惡その物ではないか。此の都會に住んで居る限り、自分は決して服部の穢ない生活を嘲笑ふ譯には行かない。服部がこんなに墮落したのも、一つは此の東京が惡いのである、今の日本が惡いのである。……

南の空想が遠く曾遊の地に飛んで行つて其處の夢を見て居る間に、服部はまた別の夢を見つゝあつた。それがどんな夢だつたかは讀者の想像に任せるとして、兎に角彼が夢を見て居ることだけは其の顔つきに現はれて居た。尤も、表情の鈍い、青ぶくれに膨れた黄色味がゝつた顔の中にあるぼんやりした眼は、酒を飲まないといつもどろんとして居るのだから、今に限つた譯でなく年中夢を見て居るのかも知れない、――喰ひ物の夢や女の夢を。が、久し振りで上等な煙草を一と息吸つた時に、その象のやうな細い眼をぱちぱちやらせて、吸ひ馴れないものを吸はされたのが迷惑のやうな、しかし其の味の旨さにちよつと驚きもしたやうな、妙に混亂した表情を見せたが、やがて又張り合ひがなささうに打ち沈んで、葉卷を持つた自分の手元を伏し目がちに視詰めて居た。顔と同じに青ぶくれにふくれて、太つた中年増のそれの如く生白くむくんだ手、その手の先のアルコール中毒で微かにわなわなと顫へて居る指、――それが彼自身にも不思議に見えたのではなかつたらうか? 實際、その手だの指だのは誰が見ても、或る大喰ひな、酒飲みな、さうして而もむさくろしい生活をして居る人間のものに違ひなかつた。一體服部は二十前後の時代には寧ろ痩せて居た方だつたのに、落魄して意地穢なの度が強くなり酒量が増すに從つて、だんだん體中が不健全にむくんで來たのである。貧乏すれ

ば痩せるのが普通であるに拘らず、彼は其の點で反對だつた。しかし反對に太つたと云ふ事が、彼の貧乏人じみた風采を少しでも景氣よくは見せないばかりか、却つて其のむさくろしさを事實以上にむさくろしくさせて居た。彼が若し色の黒い小じんまりした體つきだつたら、同じ垢だらけな風をして居ても恐らく其の垢が今ほどは目立たなかつたであらう。おまけに、彼は一日でも風呂へ這入らないと直ぐ手足がぬるぬると脂じみる體質だつた。そんな汚れつぽい體質の男が昔よりは倍も肥滿して、その青白い皮膚の上へ一面に垢をこびり附かせて居たのだから、不潔さが一層際立つた譯なのである。服部がいくら不精な人間であつても、此の吐き溜めのやうな不潔に馴れるまでには、可なりな修行を積んだのであつた。貧乏し出してから後も、最初のうちは三日に一度ぐらゐづゝ錢湯へ行かずには居られなかつた。それを怠ると顔や掌にニチャニチャした脂汗が湧き出して、鼻の周りだの指の股だのが氣味惡く粘着くやうになり、しまひには頭の地の中にまで滲み込んで行く。さうして一と晩のうちに枕や夜具の襟が眞黒になる。同時にその汗とも脂ともつかないものゝ臭氣が、着物は勿論、身の周りにある凡べての物へ乘り移つて、蒲團でも疊でも壁でも柱でも其處ら中がべとべとに臭くなつて、それが黴の匂と交りつゝ一種異樣に醱酵した空氣を籠らせる。殊に、大酒を飲んだり、大喰ひをしたりした明くる朝の體の臭さは特別だつた、――「人間臭いとか男臭いと云ふ臭さがあるとしたら、きつと此の臭ひを云ふのだらう」と、服部は屢々さう思つた。「厩には馬の臭ひがする、豚小屋には豚の臭ひがする。同樣に己の住んで居る此の人間の小屋には人間の臭ひがする。己が豚小屋の臭ひを嗅いで『あゝ豚が棲んで居るな』と思ふやうに、豚も此の人間小屋の臭ひを嗅いだら『あゝ人間が棲んで居るな』と思ふだらう。」――で、服部は何よりも自分の體の臭ひを嗅ぐ時に、自分が馬だの豚だのと大して違ひはない狀態に居ることを感じた。此の臭ひが附いて居る自分は、高尚な人間の一人ではなく、虎や熊と一緒に動物園へ入れられる仲間であるやうな心地がした。けれども彼が其の臭ひを氣にする間

はまだ人間だつたかも知れないのだが、貧乏が彼を堕落させるにつれて、彼は次第に其れを忘れるやうに努め、成るべく獸の仲間になる修行をした。もう此の頃では一と月に一度か二度も湯へ這入ればせいぜいであつた。それに、不養生の結果いつの間にか心臟を惡くして居て、とても度び度び入浴する事は出來なかつた。こんなになつて居ても、彼はやつぱり死ぬのが恐かつたのであらう、風呂の中でふらふらと眼暈がしたり、動悸が激しく搏ち出したりとすると、今にも氣が違ひさうに狼狽して、「助けてくれ！」と云ひながら矢庭に誰にでもしがみ着きたい氣持ちになるのである。全く、死ぬよりは獸でも生きて居る方が增しかも知れない！　誰にもせよ！　だから服部は此の死の恐怖を逃れる爲めにも、不潔を忍ばなければならなかつた。さうして今では、彼の周圍のあらゆる物に附き纏はつて居る惡臭を、まるきり感じない迄になつて居た。のみならず、意地穢なの場合と同じに、その不潔の底に沈湎する事を秘密な樂しみにもした。ぼうぼうと生えたふけだらけな髮の毛をゴリゴリ掻き挘つたり、それを掻き挘つた指先の爪垢をほじくつたり、そんな淺ましい忌ま忌ましい事に無聊の時を費すのが、人に明かされない、云ふに云はれない苦い樂しさ、――とでも形容すべき心持ちを彼に味はせた。で、彼が今、南から貰つた葉卷を持ちながら、その手元を不思議さうに眺めて居るのも、大分それに似た心持ちからであらう。やがて葉卷を左の手に持ち換へると、垢とやにとでべたべたになつた右手の人差指と親指とを何か面白い事がありさうにぬるぬる擦り合つて居たが、暫くすると、今度はその二本の指を鼻先で開いて脂汗の爲めに指紋がギラギラ光つて居る指の腹をぢつと視詰めた、――相變らずどんよりした睡さうな眼をしながら。それから、指紋のギラギラからふと或る事を思ひ付いたらしく首を擧げて南を見た。

「君、久し振りだから何處かへ晩飯をたべに行かう。」

それは南が、夢から覺めて其の夢に見た支那の話を持ち出さうとして居る矢先だつた。

「行つてもいゝけれど、君は風を引いて居るやうぢやないか。先から大分咳をするぜ。」

「なに、風を引いてるんぢやないんだよ。僕の咳は慢性なんだ。」

さう云つて服部は、ずるさうに眼を潰つた。彼は先から葉卷を一と息吸ふ度に喉をげえげえ鳴らして、物を吐くやうな咳をし續けて居た、が、それは明かに風邪の爲めではなく、慢性胃擴張の結果であることを、自分では承知して居たのである。

「だけど、僕は今日は君の内を捜すんで散々歩かせられたもんだから、斯うして此處に落ち着いてしまつたら、もう動く氣がなくなつちまつたよ。」

「でも直き其處だぜ。此の近所に何でもあるぜ。」

「此の近所?」

南はまた顏をしかめた。

「此の近所は嫌だな。」

「此の近所でなくつちやあ困るんだよ、僕は此處へ引越してから、淺草以外の土地へは出ないやうにしてるんだから。」

「なぜ?」

「なぜツてこともないんだけれど、あんまり遠くの方へ出たくないんだよ。兎に角僕は酒を飲ませてくれないぢや話が駄目なんだから、何處かへ行かう。――此の近所なら僕が奢るぜ。」

「君に奢らせなくつてもいゝ。金は僕が持つてるから、何か此處へ取つて喰べよう、酒でも食ひ物でも。」

「そ、そりやそれでもいゝがね」

と吃りながら云つて、服部はもう一度眼を潰つた。

南は、服部が彼に對しては常にいくらかの遠慮を持つて居ることを知つて居た。二人は心の奥底では互ひに信じ合つて居たに拘らず、面と向ふと、話に興が乘つて來る迄は其處に一種のぎごちなさがあつた。此のぎごちない感じ、——服部の遠慮——それがあればこそ、南はあらゆる意味で自分とは全く反對の極端に居る服部を、自分の友として愛しもすれば憐れみもすることが出來たのである。此の我が儘な恥も外聞もない男が、自分に對してはさすがに恥を感じつゝ附き合つてくれる、自分の前では柄にない遠慮をして居る、——さう思ふ時、南には服部と云ふ不運な男がしみじみ可哀さうになつて來て、其處から彼に對する深い友情も湧いて來れば、その貧困に打ちのめされた垢だらけな體を抱きすくめて勞はり勵ましてやりたいやうな、母親じみた氣持ちにもなるのであつた。彼にそれだけの友情なり「母親じみた氣持ち」なりがあるだけ、猶更彼は服部の方から遠慮して附き合つて貰ひたかつた。「遠慮のない友達」——彼の考へに從へば、そんなものは決して「ほんたうの友達」では有り得ない。互ひの心と心とが無言の裡に感銘し合ふやうな交はり、——さう云ふ交はりをするのには、其處にその心が通ひ合ふだけの間隔を置く必要がある。或る程度の遠慮と禮儀とを守る必要がある。だから南は、服部と斯うして言葉數も少なくしんみり差し向ひになつて居る時が一番好きだつた。一番服部と云ふ人間がよく分るやうな氣持ちがした。かうして居ると、彼はいつも「主人不相識。偶坐爲林泉。」と云ふ唐詩選にある賀知章の五言絶句を想ひ出した。勿論此の詩と自分たちとの間には何の聯絡もないやうではあつたけれども、どう云ふ譯か此の詩の旨味と服部と云ふ人間の面白味とが同時に腸へ沁み渡つて來るやうな工合だつた。で、彼は決して、服部を醉拂はせておしやべりにすることを望まなかつた。それよりはしらふのまゝで、その特有の吃りの口からぽつりぽつり間を置いて語り出される言葉の方に、云ひやうのない懷かしさを覺えた。服部の方でも南の心持ち

に氣が付いて居ると見えて、めつたに酒を飲まうと云ふことを云ひ出さなかつた、――少くとも去年まではさうだつたのである。

「現に俺達に酒を飲ませてくれないぢや話が駄目なんだから、――」

珍しく服部がこれを云ひ出した時、南はひよいと不思議さうな顔つきで彼を見た。するとやがて彼は極まりが惡まうに眼を潰つた。ちやうど天井から下つて居る電燈の球が、眼を潰つた顔の鼻先で眩ゆく輝やきながら、彼の血色よりはずつと生き生きした赤いものを其の頬の上に流して居た。丁度一年會はなかつた間に、もういくらか變つて來て居る。南はさう思つて、明りの下にある友の風貌を、其の時始めてまぢまぢと眺めたのである。太つたと云ふよりは肉の重みで皮が弛んで居るやうなのつぺりした面長の顔、髯だらけな、すの伸びた顋と一緒に少し前の方へ飛び出た口、結ばれたまゝ始終もぐもぐと不氣味に動いて居る厚い唇、その唇の運動と同じに絶えず睫毛を神經質にわなゝかせて居る腫れぼつたい怖げた眼瞼、――此れが自分と同い歳の青年の持つ容貌だらうか？ 此の顔の中の孰の部分にも、妙にむくむくと肥えては居るけれど若々しい元氣はなく、早くも老衰と病弱の影が漂うて居る。既に去年あたりからさうなりかゝつて居たには違ひないが、たつた一年の間にしては可なり著い變遷である。その間に彼がどれ程の墮落をしたかが思ひやられる變遷である。いや、變遷と云つたのでは言葉が不充分であるかも知れない。なぜかなら、その目鼻立ちの一つ一つには別段此れぞと云ふ變りはなかつたのであるから。たとへば心が空洞になつてしまつた大木のやうに、外側の形は昔と違はなかつたに拘らず、その奥にある精神の墮落が、何處からともなく腐つた息を顔全體に吹きかけて居たのであるから。

「ぢや、ちよつと待つてゝくれ給へ。何か其處いらで誂へて來るから。」

暫くもぢもぢと考へて居るらしい樣子だつたが、間もなく服部はふいと眼を明いてそんなことを云ひながら、大儀さうに梯子段を降りて行くのだつた。

「今夜は餘つぽど酒が飲みたいのだらう。だが表へ出ようと云ひ張らなかつただけ、あれでもまだ遠慮して居ると見える。」

其處へ氣がつくと、南はやはり服部が可哀さうだつた。彼はひとり二階の部屋に殘されて居る間、夜の街へ酒と食ひ物とを求めに出た淋しい友の後ろ影を腦裡に描いた。

一時間ほどしてから、二人の間には洋食の一品料理がズラリと十皿も並んで居た。――讀者は多分、淺草邊の貧しいカフエエでたべさせるそれ等の下等な洋食を――洋食でなくつて或は妖術であるかも知れないそれ等の料理を御存知だらう。さうして又、讀者のうちの或る人々は、それを食ふのに一種の心得がいることをも御承知だらう。たとへばどんな料理を誂へても、大抵の場合その皿の半分を占めて居るものは、簡箋綴のやうに細く刻まれたキャベツである。が、諸君は決して其れを漬け物の積りでたべてはいけない。なぜなら、其れは貧弱な料理の餘地を塡める爲めに、鋸屑の代りに置かれてある生のキャベツに過ぎないのだから。又其の料理に附屬するフオークやスプーンが銀でもニツケルでもなく、鉛で出來て居ることを忘れてはならない。若しうつかりしてライスカレーの飯などを其れで掬つたりすると、飯が鉛筆で染めたやうに黑くなる事請け合ひである。しかし育ちのいゝ南には勿論そんな心得がある筈はなかつた。彼はやつと二た皿たべたあとで、再びフオークを取上げる勇氣がないらしく、口の周りを頻りにハンケチで拭つてばかり居た。

云ふ迄もなく其儘に剩された八皿の料理は、南とは反對にそんな心得を超越して居る服部の口へ收まつて行つた。彼は南が少食である事と此の勘定を拂つてくれる事とを胸算用に入れて、こんなに多くの品數を取り寄せたのである。のみならずもつと狡猾な事には、誂へに行つた歸りに五合德利をぶら提げて來て、豫め冷酒を呷つて居た。だから料理が來た時分には、もう醉つて居て極まりの惡い思ひなぞまるで知らなかつた。

「此れは近頃にない御馳走だぞ。」

素晴らしい勢でムシヤムシヤやり出した彼の頭の中は、恐らくこんな考へで一杯になつて居たのであらう。さうしてあらかた平げてしまつた頃には、青ぶくれの顏へ赤味がさして來たばかりでなく、睡さうだつた眉宇の間からは二つの鋭い火が燃え輝き、吃りの口は知らず識らず活氣を帶び始めて、彼は別人のやうにてらてら光り出したのである

「君は相變らず大喰ひだね、君に本式の支那料理を喰はせたら嘸壯觀を呈するだらう。」

南は無邪氣な眼をぱつちりと睜いて笑つた。

「相變らずではない、僕はだんだん意地穢ながひどくなつて來る。何でも脂ッ濃いものでさへありや此の洋食でも結構なんだ。君は支那でなけりやいけないか知れないが、僕は淺草で充分滿足して居るよ。」

「僕は支那だ、どうしても支那でなけりや駄目だ。來年にでもなつたら親父に賴んで、もう一度支那へ行かして貰はうかと思つて居る。尤も君の淺草と一緒にされちや少し困るがね。」

「はゝゝゝ」

と、服部が元氣よく笑つた。ちやうど人が照れ隱しにする時のやうに。

「僕はね、君、もう油繪なんか止めにして此れから南畫をやる積りで居る。僕は支那旅行をして居る間に此の決心を固

めたのだ。――」

さう云つた南の口吻は、服部の笑ひ聲を覺えず引込めさせるほど眞面目だつた。彼は先からそれを思ひ詰めてゐたやうに靜かに續けた。

「――僕がこんな考へになつたのは、一つには親父の感化があるかも知れない。親父と僕とは今度始めて、たつた二人ぎりで一年間も旅をして歩いたんだが、其の間に僕は親父からいろいろの事を聞かされたのだ。親父が僕を支那へ連れて行つたのは、今考へると僕に對して可なり親切な意味があつたんだね。僕はたゞ護衛代りにお供を仰せ付かつた氣で居たんだけれど、後になつてだんだんさうでないことが分つて來た。兎に角今度は、親父と一緒だつた事が僕には非常に爲めになつたよ。」

「君のフアザアと君のことだからきつとさうだらう。僕にはとても親のお供をして一年も一緒に居ることなんか出來ないがね。」

服部はふと、自分を辯解するやうな語氣で云つた。南が父の博士に傾倒して居るのは今日に始まつたことではない。さうして其れを聞かされる度に、服部は自分の親不孝を責められるやうな心地がした、――現在の彼には親や故郷がない筈ではあつたけれども。

「そりや其の點で君と僕とは大いに違ふさ。僕は親父に接觸するのが好きなんだし、それに今度のやうな機會でもなけりや、落ち着いて話を聞く時はめつたにないんだから、旅行と云ふ事を拔きにしても此の一年間は面白かつた。僕は親父の藝術觀を聽くことが出來たよ。」

「その影響で南畫をやる決心になつたんだらう。」

「まあさうさ。知らず識らずの間に親父の感化を受けてしまつたのさ。君は恐らく親父の議論には反對するだらう。しかし親父を眼の前に置いて度び度び其の議論を聞かされて居ると、僕にはどうしても親父の云ふ事がほんたうだと思はれて來るのだ。それに其處には支那の自然と云ふ有力な味方があるんだ。親父は其の支那の自然を指摘して、それを證據に議論を進めて行くんだからね。僕は昔から君と違つて、『人間』よりも『自然』の方に憧れる性質を持つて居る。『自然』の裡に自己の藝術を見出さうと努めて居る。さう云ふ僕があの雄大な支那の自然――洞庭湖や揚子江の景色を眺めながら、東洋藝術の理想を說かれたのだ、實際醉はされてしまつたのだ。いや、醉はされたと云ふと又直きに醒めてしまひさうだが、多分永久に醒める時はないだらう。僕は其の後自分獨りで其れを何度も考へて見たけれど、やつぱり親父の云ふ通りにしなければ噓だと云ふ氣がして居る。僕の藝術は長い間誤まつた方向を辿つて居た。僕は自分が東洋に生れた藝術家だと云ふ事を忘れて居た。東洋にも西洋に劣らない立派な藝術の傳統があり理想があることを知らなかつた。僕の行く可き途は南畫より外にない。南畫の精神に浸ることに依つて、僕は自己を永遠に生かすことが出來る。――此の信念はますます强くなつて來るばかりだ。」

「ぢや、君にそれだけの信念を與へた君のファザアの議論を聞かせてくれ給へ。君と君のファザアとは學者と藝術家との違ひだけで、體質から何から何まで同じ型なのだから、君が其の議論に感化されたのは不思議はないけれど、しかし僕だつて東洋に生れた藝術家だ。ねえ君、なぜ東洋に生れた藝術家は、東洋畫をやらなけりやいけないのだらう?」

一瞬間、服部は全く食ひ意地のことを忘れた、意地穢なの服部でなく藝術家の服部だつた。彼にもたまにはこんな事があつた。さうして其れは、殆んど南と話をする時だけだつたのである。

「君も知つてるやうに、僕の親父は死んだ夏目さんの友達だつた。で、僕によく夏目さんを例に引いて話したが、藝術

家として夏目漱石を世間が認めるやうになつたのは、云ふ迄もなく其の小說で文名を馳せたからだ。けれども小說家としての夏目さんは實はそんなにえらくはない。夏目さんが若し、支那に生れて詩人か畫家として立つことが出來たら、たとへ今日ほど有名にはならないにしても、もつと優れた藝術の境地を開拓することが出來たらうし、夏目さん自身も今の日本に生れるよりは遙かに幸福だつたらうと思ふ（と、親父は云ふのだ。）夏目さんは英學者の癖に英文學よりは漢文學が好きだつた。それから、小說家の癖に小說よりは漢詩を作つたり書畫を書いたりする方が、どんなに感興が湧くか知れないと云つて居た。で、親父は夏目さんの小說よりは其の漢詩や書畫に現はれた悠々自適の氣分、夏目さんが晩年になつて口にした私を去つて天に則ると云ふ氣分、あの方が藝術的にずつと貴い物だと云つて居る。夏目さんほどの英文學者が結局あゝ云ふ境地に這入つて行つたことは、いかに東洋思想の傳統がわれわれ日本人の頭に深く泌み込んで居るかを、證據立てる事實だと云つて居る。一體小說と云ふものは西洋から輸入された新しい藝術の形式で、明治以前には日本にはなかつたもの、あつても本當の意味での小說とは云はれないものばかりだ。本當の意味での小說は、――無論日本人でも二流三流の地位に行くことは出來るだらうが、ユーゴーとかバルザツクとかトルストイとかに比べても劣らないやうな偉大な小說は、西洋の土でなければ育つ筈がない。なぜかと云ふと、（親父の考へでは、）東洋の藝術と西洋の藝術とは形式が違ふばかりでなく、根本の精神が違つて居るから。一と口に云へば、西洋では次ぎから次ぎへと常に新しい美をクリエートして行く、自分で自分獨特の美の世界を建設する、あらゆる方面へ美を分化させ發達させる、其處に藝術の目的があり藝術家の生命がある。ところが東洋の藝術は美をクリエートするのでなく美を暗示すればいゝのだ。東洋人の考へて居る美は、暗示するより外に形で現はしやうのないものなのだ。つまり西洋人の考へて居る美の種々相のもう一つ奧にあるたつた一つの美、――美の眞髓とも云ふべきもの、――たゞ其れだけを東洋人は狙つてゐる。親父は美

を月に光と云へて僕に話した。西洋人は月の光が溪川に映るところや、庭の木の葉を照らすところや、都會の電信柱に光つて居るところや、そんな景色を掴まへて其れを一つ一つ擧だと思つて居る。さうして藝術家でも餘程えらい人でなければ、その景の本が大空の月であることを知らない。のみならず、そんな景色を一つ一つ離すよりも、直ちに大空の月を見た方が近道であることを知らない。其處へ行くと東洋人は初めから大空の月を見て居る、見ない迄も感じて居る。

術家の、いや藝術家ばかりではない、宗教家でも哲學者でも『永遠の生命』を欲する凡べての人間の終局の目的が、大空の月にあるのだとすれば、月の存在を信ずる事にあるのだとすれば、東洋の藝術の方が西洋のそれよりも端的だとは云へないだらうか。だから東洋では水滸傳や紅樓夢よりも李太白の五言絶句の方が貴い。李太白は僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲエテの領域へ一と息に行き着くことが出來る。さうしてダンテやゲエテと共に今も尚人類の中に生きて居る。或はダンテやゲエテよりももつと Omnipresent だと云へるかも知れない。なぜなら、われわれはファウストや神曲を暗記することは出來ないけれども、李太白の五言絶句ならいつでも心に繰り返すことが出來るのだから。繰り返してさうして其れに依つて直ちに大空の月を思ひ起すことが出來るのだから。此れは繪の場合でも同じことだ。倪雲林や黄大癡の南畫はミケランヂェロの壁畫と同一の高さに届いて居るのだ。」

南は語りながら懐ろからスケッチ、ブックを出して、その或るペエヂへ鉛筆で圓く月を畫いた。月の下へ横に長い地平線を畫いた。地平線から月の方へ何本も何本も矢を引いた。それから矢の傍へ「藝術家」だの「宗教家」だの「ゲエテ」だの「李太白」だのと書いた。矢は人間の「無窮に對する憧れ」を示した積りなのである。月の圓にも丁寧に「月」と書いた。「月」と書いただけでは足りなくて "eternal life" とも書いた。それらを鉛筆でぐいぐいと太く濃くなぞりながら話して來た。

「僕にはそんな事はよく分らない。」

突然服部が、冷酒をぐつと呷り付けてから云つた。

「だけども君のやうに云ふと、藝術家も宗教家も結局同じことになつてしまふね。」

「あゝさうだよ、僕はそれでいゝと思ふよ。」

と、南が云つた。

「親父が僕に月の譬へを引いたのは、ちやうど或る滿月の晩に、洞庭湖へ船を出して二人で月見をした時だつた。『東洋の藝術は宗教と同じことだ。それで魂が救はれさへすればいゝのだ。佛教で云ふ眞如の世界も藝術の美の境地も一つものだ。みんなあの空の月に向つて憧れて居る。だから私もお前も、道は違つて居るが遂には一つ所へ行く、――行かなければならないのだ。さうして私は、月の存在を信じるやうに永遠の生命のあることを信じて居る、』と親父は云つた。『お前はそれを信じられないか』と云ふから、『僕はお父さんを信じますから、やはりそれを信じます』と云つた。ほんたうに僕はそんな氣持ちだつた。今では僕は、誰に聞かれても『其れを信じます。』と云へる積りだ。」

「君は感心だね、君は僕よりかえらい。僕は羨ましいよ。」

服部は冷酒の茶碗を置いて眼を潰つた。

（第一篇第二章終り）

此の長篇小說は、嘗て本誌に載せかけた「嘆きの門」の代りに書き出したものである。「嘆きの門」は中途で止めにしてしまつて讀者にも編輯者にも申譯のないことをしたが、今度は最後まで必ず書き通す決心である。尤も、此小說は多分千枚位、少くも七八百枚にはなると思ふから、以後隔月ぐらゐに纏めて出す計劃である。目下の豫算では、此の次ぎを二月に出し、三月を休んで四月に出す。その先はまだ極まつて居ない。完結までには半年以上かゝるだらうと思ふ。

作者記

生別

野上彌生子

燿子は遠い故郷に居る母のことを、近頃は殊によく思ひ出した。親子は數年前父の不幸の時に逢つたきりであつた。その時も何年ぶりと云ふ面會であつた。二た月の逗留の後、燿子が東京の家へ歸らうとすると、母は激しく悲しんだ。やつと馴染んだ小さい子供たちに別れることの悲しさを、取り分け數へ立てて泣いた。これからは、でも一人身の自由な境界だから、おばあさまの方からお前たちのところへいつでも逢ひに行かれるだらう、と云ふことをせめての慰めとして云つた。

『きつと近いうちに行くで、なあ。おばあさまをよう覺えてゐてくれんしえ。』

母は古風な國言葉で何度も斯う云つて、誓ふやうに二人の子供の小さい手を交る〳〵取りながら、それで自分の顔を撫ぜさせたりした。そのことは燿子も心から望んでゐた。大きな打撃の後の氣保養としては、それ以上のよい方法はないと信じたので、兄にも嫂にもその意味を通じて同意を求めた。父の死後、父に代つてS家の大家族を統轄して行かうとしてゐる分家の伯父には、殊によく賴んでおいた。母の希望する時期にいつでも上京さしてあげてくれるやうにと。それにその計畫は今日まで少しも實行されなかつた。

冬がすんで、春の暖い季節が近づくと、この春こそはと云ふ母からの便りがあつたが、春はその儘すんで夏に入つた。今度は、涼風が立つたらと云つて來た。けれども秋も空しく冬になつた。母は肋膜の病氣があつたから、寒い頃の旅行は不可能であつた。來るとすれば、三月から五六月まで、でなければ九月から年一杯の間を選ばなければならなかつた。燿子には、母の折角の思ひ立ちが、斯ういつも不滿足に裏切られて行く度に、國の家の紛糾した、面倒な家族關係が顧られた。家長と云ふ古風な、嚴しい威力の下に包括されてゐる幾つかの家、幾組かの夫婦、それ等の數多い子供たち。樣々な心と心、意志、感情、慾望の合つたり、放れたり、紛れたりする大きな渦、ことに女同士のお愛想や、片笑ひや、含み聲や、空つとぼけた無關心や、その他あらゆる欺瞞の中に隱されてゐる底深い渦。——一人の子供に一つのおもちやを買つてやらうとするにも、他の子供を無視することは出來なかつた。半襟一つ帶一筋にかかる慾望も、多くの感情の一致に訴へなければならないやうな家族の中では、一人の人の願ひが、單純に、卒直に、その儘手輕に受け入れられることの六づかしいのは、その家族の中で育つた一人である燿子には、誰よりもよく分つてゐた。けれども母だけはもう除外例の地位に立つてよい筈であると彼女は信じた。未亡人に對する彼等の一般の見方に從へば、母は父の死と共にこの世の中から隱退した人間であつた。晴々しい主婦權を失つたと共に、家事上のあらゆる面倒な繋累からも放たれ、新しい家長の支配力も及ばない、字義通りの御隱居樣であるべき筈だと思はれた。且つ東京へ遊びに行くと云つたところで、遊覽者が都でなければ味へない、數多い享樂を目ざすのとは譯が違つてゐた。幾ら悲しんでも悲しみ足りない心の痛みを、たつた一人の娘——今は斯う云はなければならないことも悲しいことであつた。父を失つた明けの年、快活で正直で、皆んなに愛せられてゐた燿子の一人の妹、直ぐ近所の町へ嫁いで、最後まで母の手近にゐた妹が亡くなつた。母に取つては、これは嘆きの上の嘆きでなければならなかつた——と孫たちの中で癒さうとするだけの、つつましい母

親らしい願ひを、何が妨げたり阻んだりするのかと思ふと、燁子は腹立たしい氣がした。彼女は伯父に宛てて長い手紙を書いた。伯父の返事には伯父一流の理屈と、厳めしい家長の專橫が交り合つてゐた。而してその上を如何なる場合にも彼が持ち出すことを忘れない『世間體』と云ふ言葉で巧に修飾しようとした。——故人の一週忌がやつとすむかすまぬうちにその未亡人が急に上京すると云ふことは、家内に不和でもあるらしく見えて、體面上甚だ面白くない。且つ、家に年寄りがゐなくて、若い者ばかりでは、家政上何かにつけて不行屆になつて困る。その點から云つても嫂は 家に取つてかけ替のない重要な人であるから、まうお前の考へるやうに、無造作な旅行は出來ない——けれどもこの言葉は、内情に通じてゐる燁子に解釋さすれば、母を無能な御隱居樣にする代りに、色んな勿體をつけて、便利な家政管理人にしようとするに外ならなかつた。それに、彼が『若いもの』扱ひにしてゐる人たちにしたところで、もう決して年寄りの監視や掣肘を必要とする年頃ではなかつた。

『あれだけの人がゐるのだから、一人でもお母樣の心を眞から汲んであげる人があつたら。』

燁子はその中から兄と弟を選み出して見た。兄は母には義理ある息子であつた。けれども大抵の世間の人はそれを知らないでゐる位その間柄は自然で、どちらも信頼し合つてゐた。たゞその兄も伯父には頭が上らなかつた。而して彼の妻は伯父の一人娘であつた。弟はまたその從姉と入れ違ひになつて、伯父の養嗣子として少年時代から分家の方へ引き取られてゐた。それ故、伯父の力と、亡くなつた父の方の力との沈默のせめぎ合ひに外ならぬやうな事件に面する度に——母のこととても矢張りその一つの現はれに過ぎなかつたが——彼が一番苦しい人になつた。殊に甘やかされて育つた末子として、母に對しては人一倍深い愛を有つてゐるだけ、それだけ辛かつたに相違なかつた。けれども彼の強い性格は、その苦痛と愛を同じ程度の冷靜で蔽うてゐた。燁子は弟の氣の毒な立ち場に同情しながらも、最後に激しく打つ

付かるものは矢張り其處より外にはなかつた。彼女は興奮した調子で書いた。――お母様をもうお幾つだとお思ひですか。六十五と云へば、何日どんなことが起らないとも限らないお年です。お前はそれを思ひませんか。わたしはただそれだけが怖ろしいのです。お母様の望むことは何事に限らず今直ぐにも滿足させてあげなければ、もう時がなくなると云ふことを思ひませんか。お前たちは朝晩お母様の手近にゐて、話聲を聞いたり、笑つた顔を見たりしてお出でだから斯んな感じは幾らか鈍いのではないかと思はれます。けれどもたゞひとり遠くに離れてゐるわたしの心持はずつと切迫してゐます。もう幾らも時がない、これは何と云ふ怖ろしいことでせう。この聲は絶えずわたしをおびやかしてゐるのです。

世の中にさらぬ別れのありと云へば
いよ／＼見まくほしき君かな
世の中にさらぬ別れのなくもがな
千代もと祈る人の子のため。

わたしはこの間ふとした機會からこの親子の贈答を思ひ出しました。いつまでも涙が出て困りました。けれどもこれは幾らか身體のせゐもあるかと思はれます。――燿子はこの春には自分も三人目の母親となる筈だと云ふことを洩らした。而して新たに來るその小さいものは、百人の人よりもよくお母様を慰めるに相違ない。その點から云つてもこの春を取り逃してはならぬやうに思はれると書いた。年寄の餘生にたゞ僅かに殘されてゐる樂しみをさへ、横暴な家長權の犠牲にするやうなことが、萬一にも起るとすれば、私たちはS家とは義絶してもよい。同時にそんな人間らしくない人々の群れの中にお母様をお置きすることは出來ないから、その時には今度の一時的な計畫とは全然別な形式でこちらへ

お迎へする決心だ、とまで書いた。――年取つた、氣の毒なお母様を愛しておあげなさい。お前が伯父上とでも誰とでも喧嘩をする氣になつてくれたら、お母様は明日にも上京されるのだと思ひますよ。

弟からの返事は直ぐ來た。――お母様のために伯父上と喧嘩をすることは何でもありません。併しその後にお母様は皆んなと氣まづい思ひをして、而して通りすがりの旅人かなぞのやうに、鞄一つでこつそりと出發すると云ふやうなことが、お母様の感情に堪へられるでせうか。お母様としては矢張りお義理でも大勢の人に見送られて、十分な土産物を持たされて、而して皆から快よく餞けの挨拶を受けて出掛けるのでなければ、皖度い〻氣持はしないに極まつてゐます。お母様はこの煩瑣な生活樣式を厭ひながら、それがために自分の生活をどれだけ邪魔されてゐるかをよく知つてゐながら、矢張りその樣式から離れることが出來ないのです。これは悲しい矛盾だと思ひます。併し僕を信じて下さい。近いうちにきつと都合よくことを運ぶ積りです。あなたの期待を裏切らない時日内に、お母様がきつとそちらへいらつしやられるやうにいたします。――彼は最後にS家の改造と云ふことに就いて深い決心を見せて書いてあつた。今のやうな生活は到底その儘續けて行かれる生活ではない。そのことはもう疾くから皆んなが感じてゐる共通の感じであると共に、同時にまた共通の恐怖である。どうにかしなければならないと思つても、手を下した後に來るものを考へると誰にも怖ろしいのである。併し自分の心は今日までの忍耐で可なり鍊はれたと信ずる。もう何が來ても怖くはない。やるだけのことは何處までもやる決心がついた。――伯父上との喧嘩はその時まで保留して置きませう。全くそれはどんな怖ろしい喧嘩になるか分かりません。辛いことです。併し已むを得ないことです。――

弟は三四年前までは東京に出てゐて燿子の家から學校へ通つてゐたので、彼のものの見方、考へ方は姉夫婦に一番よく分つてゐた。燿子は彼が養父のよくないやり方や間違つた行狀にひどく苦しめられながら、それでも尙その老人を深

く愛してゐたことを知つてゐた。若い青年には珍らしいほどの忍耐と謙遜を以つて生きて來たことを知つてゐた。ことに二年前に結婚してからはその苦痛は一層複雜になつたことも知つてゐた。彼は忍べるだけ忍んで來たのである。同時にまたこの手紙にあるやうな叫び聲をあげた以上は、どんな思ひきつたことをもやりかねない人間であることを知つてゐた。

『みんなどんな風に暮らしてゐるのだらう。それもお母様が入らつしやりさへすれば分ることだ。』

燿子は色々の意味で母の來る日が待たれた。

母は三月二十日の夜汽車で着いた。燿子の良人の衛の從兄で、銀行に勤めてゐる若い法學士が、丁度國の近くの支店まで出張したのを幸ひに、わざ〳〵迎へに行つて貰つたのであつた。停車場へは衛が迎へに行つた、

『あゝ、やうやうのことで來やんした。』

家について、座敷に通ると共に、挨拶の一番先に云つたこの一句は、母のあらゆる思ひを語る言葉であつた。

『清一さんが來て下さらなければ、まだいつ出られたやら分りやせんめぢやが。』

母は斯う云つて、若い同伴者の前にまた改めて頭を下げた。

『なあに、僕はほんのお伴をしただけでお役には立ちません。——まあ叔母さんも今度は十分御ゆつくりなさるとよいですね。』

『さうだとも。お母さん、今度は歸つてくれと云つて來たつて、歸つちやなりませんよ。』

衛は決定的な調子で云つた。

『有り難う。わたしもな、今度こそは當分御世話になる積りでをりさあす。』

東京よりもあちらは繻絆一枚だけ暖いとか、魚だけは相がはらず旨いところだとか云ふ、國の話が十分間ほども續く間には、大きな信玄袋が開かれて、種々の土産物が取り出された。

『色んなものを持つて來ましたのねえ。』

燿子は子供のやうな聲をあげて、平斷よりか明るい球をつけた電燈の下に並べられて行く菓子や食べ物に目を注いだ。それは一と目で故郷と云ふものをはつきり思ひ出させるものばかりであつた。昔の通りの容れ物、鄙びた商標、包み紙、燿子は煎餅の鑵の口をあけてそれを衛と清一との間においた。

『明日の朝子供たちが起きたらどんなに悅ぶか知れないわ。』

彼等はおばあさまを待つてゐる氣で、浮かれて、時間が來ても中々寢ようとしなかつたのを、先刻やつと寢かせたのだと云ふ話を燿子がすると、母は目を細めて聞いた。而して、

『あゝ、さう〳〵、子供と云へはまだ起きてたらな二人に食べさせようと思つて買うて來たものがあつたのぢや。』

忘れてはならないと云ふ風に、籐の手提げの中から靜岡の鯛飯の折を二つ取り出した時には皆んな笑ひ出した。

『骨がなうて、子供が食べるには極くよからうと思ふたんぢや。』

と云つて、母も一緒に笑つた。そんな瞬間の母の顏が燿子の目をちつと見詰めさせた。

『この顏をわたしはどんなに見たがつてゐたことだらう。あゝ、やつと、やつと見ることが出來た。』

彼女は目を放さなかつた。三年前とちつとも變つてゐなかつた。大層元氣さうで、而してまた非常に若く見えた。燿子は安心した。

頓て清一が歸つて行つて、皆んな寢床へ着かうとする時になると、母は、

『子供たちは何處に寢て居るのな。』

と尋ねて、燿子に連れられて子供たちの眠つてゐる部屋を覗きに行つた。

『まあ、二人とも大きうなつたこと。』

九つと六つの兄弟は、小さい枕を並べて眠つてゐた。その平和な寢顔と規則正しい鼾は、彼等のよい成長と健康を證明するものであつた。土の匂ひと、草の匂ひと、それから小犬の匂ひの交り合つた男の子らしい匂ひが漂うてゐた。母はいつまで見ても見飽かぬものを見るやうに、うす暗い枕頭に立つて稍暫く二人の寢姿を眺めてゐた。座敷の男たちの前では口へ出すことを憚かつてゐたらしい、燿子の健康上のことも、其處で尋ねた。

『間に合はんやうなことがちやどもならんと思ふて、氣が氣ぢやなかつた。まあ、身體を大事にせにやならん。』

と痛はるやうに云はれた時には、燿子は泣きさうな氣持ちになつた。それでゐて何となしに恥づかしかつた。

明けの日から燿子の生活には珍らしい變化が起つた。彼女の家は良人と彼女との手で新しく始められた家であつた。衛の兩親は國の方で、燿子の實家のすぐ近くに住まつてゐたが、今では二人ともも一此の世の人ではなかつた。その上衛は一人息子であつた。そんな譯で二人の家庭には何等の束縛もなければ繫累もなかつた。經濟的の條件でも、生活樣式でも自分たちの自由になつたと共に、家政上の事務になると、使用人以外に身内のものの援助を期待することは少しも出來なかつた。二人は二人で何もかもして行かなければならなかつた。男の力はそれでよかつたとしても、女の肩には習慣上いつも割の惡い荷物が載つてゐた。先づ子供を育てることから云つても、炊事、裁縫、洗濯、掃除と云ふ不秩序と混亂の怖ろしい怪物で、ヘルクレスの仕事以上の困難で、且つ日本婦人の三百六十五日間の不斷の脅威であるものを切り拔けるにしても、女中と云ふただ一人の微力な助手しか有たなかつた。その他良人に對しては常に若い、善き妻である

り、社交上では氣の利いた主婦であることが必要であつた。燿子はその上にもまだ仕事があつた。彼女は机に向ふ時には文筆上の職業婦人であつた。同時にまた志した學問に對しては一女學生の研究心を失はなかつた。そんな譯で彼女は可なり忙しかつた。それでも規則立てた順序に邪魔が入りさへしなければ、毎日の生活は滑かに、秩序正しく流れた。心も働けば、身體も働いた。而して二つの上に深い悦びと滿足があつた。その代り何かの出來事のためにその順序が狂はされようものなら、其處には忽ち無理が出來た。心の仕事と身體の仕事とかち合ふ時が一番苦しかつた。こんな場合になると燿子はいつでも自分を助けて貰ふに都合のよい或種の手を空想した。それは女中ほど粗雜でない手で、自分に對して十分の理解と愛をもつてゐてくれる手でなければならなかつた。またもう一つ他の條件としては、物質的の報酬を要しないと云ふことを擧げなければならなかつた。

『あゝ、わたしにも氣の利いた、優しい奥さんが一人欲しいわ。』

燿子は斯んな冗談を良人に向つて本氣に云つた。

彼女は今度の母の上京に依つて、久しぶりに親子が一つ家に住むと云ふ悦びを味ふと共に、その空想をも實現したわけであつた。而して手に入れたものは勿論期待以上のものであつた。

『お母樣、お母樣。』

燿子は何年ぶりかで娘らしい、甘へた聲を出して、何かの用事を母に賴んだ。

午後は、市内配達で屆いて來た行李の整理に費された。行李の中からは、昨夜信玄袋から取り出された土産物とは又別な種類の土産物が出て來た。それは他人の目からは何でもない、詰らないもので、見やうに依つては滑稽な位の贈物であつたが、愛がすべてを實質以上のものに變へてゐた。同時にまた娘のところへ來た母親の荷物からでなければ、決

して出て來ないやうなものばかりであつた。かき餅や、乾物類や、小豆の袋まで出た。その他派手な昔風の小袖とか、帯の片側とか、小ぎれ類の包みとか、色々なものがあつた。その中に赤地金襴の古代ぎれで出來た、小さい長方形の袋が交つてゐた。その數は四つあつて、而して四つとも同じ大きさで、どれにも堅い紙のやうなものがきつちり詰まつてゐた。

『これは嫂さんに一つと、お前に一つと、それから子供たちへ一つづつあげやうと思うて縫うておいた。』

と云つて、母から渡されたのを、よく見るとお守りであつた。雁子は袋の金襴にも見覺えがあつた。彼女は聞いた。

『それは打敷のきれですね、お母樣、打敷を取り變へたの。』

お父樣の一周忌に京都へ注文して新しい打敷が出來たのだと云ふことであつた。話の自然の流れとして、國の家の話が引き出された。

『委しい話はゆつくりせにやならんが、まあお父樣が無事な頃のやうな氣で居ると、大きにあてが違うで。』

母はこれだけを云つて言葉を切つた。雁子も聞く氣がなかつた。親子には相通ずる感情があつた。話さなければならないこと、聞かなければならないことを澤山有つてゐながら、そんな話に觸れるまへに、もつと無心な邂逅の悅びに浸つてゐ度いと云ふ願ひであつた。二分間、親子が逢つてから初めての意味ある沈默があつた。併し最後に雁子は矢張り尋ねないではゐられなかつた。

『お母樣、何もかも話して聞かして頂戴、家は一體どうなつてゐるのですか。』

而して彼女の求め得たものは、取りも直さず一種の地獄の縮圖であつた。兄と嫂は結婚したと云ふよりも　なるたけ他人を交へまいとする舊風な家族制度の便宜のために、強ひられた結婚をしたのであつた。二人を媒介した親の手はきつ

く 弱であつた 禍の根は其處から生じた 彼等は夫であり 妻であるよりも 常に我儘な從兄妹同士であつた 父の死後には一層著しく。最後に良人が良人でなくなつた。妻が妻でなくなつた。良人が妻を裏切ると共に、妻も良人を裏切つた。二人は離婚を望んだ。併しそれはこれまでの家族の組織を根本から破壊するものとして、伯父の到底許さぬものであつた。此處でまた親と娘と婿は激しく爭つた。恨み合つた。斯うして絶望した夫婦はだん〳〵と救ひの屆かぬ淵へ墮ちて行つた。これ等の淪落から脱却してゐる一團とても、また闘爭なしではなかつた。新舊思想の衝突、固陋な家族制度、習慣等に對して皆深い惱みを有つてゐた。前者は伯父と兄夫婦との三角悲劇であり、後者は弟夫婦を中心として、甥とか、姪とか、從姉妹とか云ふ若い理想派の苦悶であつた。ことに最近の家庭的墮落は、彼等の堪えられないものであつた。其處には一人として滿足してゐるものはなかつた。一人々々が自分の在り場所を、本統の在り場所ではないと信じ込んだ。呪はないものは、悲しむものであつた。驕つて、恣でないものは、嘆き、憤るものであつた。斯う云ふ狀態の間を九人の幼い私生兒の群れが、無遠慮に、憚るところもなく現はれて、驅け廻つた。三人は兄の子供であり、六人は伯父の子供であつた。

『それがお前、伯父さんの子供たちを分家へ引き取るといふのなら聞こえて居るが、本家へまで連れ込むと云ふ法はないぢやないな。それを兄さんが一言反對出來んのぢやから情ない。まあこれから先きが騷動で。どんなことが起るか分りやせん。』

母は深い溜息を洩らした。燿子には母の暗示がよく了解された。それは兼ねてから一家族の懸案となつてゐる、兄の嗣子選定問題に外ならなかつた。何故なれば、兄にはその三人の庶子より外には實子がなかつたから。同時にまた嫂の感情に取つては、同じ妾腹の子供を選ぶとならば、仲の惡い良人の子供を選ぶよりも、寧ろ父の子供を選ばうとするか

も知れなかつた。そんな譯で九人の子供は九人の候補者のやうなものであつた。樣々な暗鬪と陰謀と反目と猜視、さう云ふ事情の下に於て、生ずべきだけのものは悉く生ずるに極まつてゐた。當面の候補者たちが幼く、無心であればあるだけ、鬪爭はいよ／＼醜くうごめくであらう。

『大變なことになつてしまつたのですね。』

今度は耀子が深い溜息を洩らした。彼女はそれ程までの狀態だとは知らなかつたのであつた。同時にその間に立つて伯父の養嗣子と云ふ地位を占めてゐる弟の苦痛をその時ほど強く思ひやつたことはなかつた。彼は或る時書いた。――

カラマアゾフの家族がすつかり家(うち)だと思つて下さい。あれより惡くとも、善くはないのです。その惡い中での一番惡いことは、此處には一人のアリヨオシヤらしいものもゐないと云ふことです。又もう一層惡いことは、人々が私をアリヨオシヤに擬しようとする錯誤です。これほど怖ろしい間違ひはありません。否、その間違ひを私自身でも犯さうとしたことがあります。一時は。でも直ぐと氣がつきました。今では自分にアリヨオシヤらしいものが幾らかでもあるなんてことは微塵も思ひません。私はもつと野心家です。うんと仕事がし度いのです。それも金儲けの仕事です。吃驚するほど儲けて見度いのです。儲け得る自信もあるのです。たとうちの資本の幾部分かを自由にさせて與れさへしたら。若し何かの手段で養父のあの頑冥な保守的な頭と、專橫な勢力を變へて、私の計畫に加擔させ得る可能さへあるとすれば、どんな術策でも、また權謀でも避けない人間です。その點では寧ろ私はイヷンです、併し私の立ち場に於てはイヷンよりもドミトリイの亂暴と情熱を有つてゐた方が、却つて都合がよかつたと思はれます。でも私には今のところ矢面に立つて一と暴れ暴れてやるなんてことは出來さうにありません。それだけ私は弱蟲なんでせう。憎むと云ふことはそれ以上に困難です。あの人たちの醜い行爲や、間違つた生活に腹は立てても、その感情は、どうしても憎惡までには沸騰

し得ないのです。私は養父に對して尙ほ多くの愛を感じます。怒りと不快の中にもあの人からも、ひどくいぢめられながら、また强く愛されてゐることをも知つてゐます。更に兄上のことは云ふまでもありません。私はあのぐうたらな、意久地のない放蕩者を誰よりも愛するのです。また誰よりも兄上に愛されてゐるのです。兄上はやくざな人間でせう。けれどもその半面には實に善良な、立派なものを有つてゐます。あの人は氣の毒な人です。……併し私のこれ等の感情は、すべて血から來た偏愛だ、と咎める人があつたならば、私は何とも辯解の仕樣はありません。さうです、偏愛でせう。怖ろしい血の偏愛だと信じます。――

燿子は手紙の中にあつたその言葉を今はつきり思ひ出した。同時に彼の所謂血の偏愛が、彼女にこれ等の話を聞かして、彼等の不正と不義を悲しみ、怒つてゐる母自身の中にさへも、多分に流れてゐることを見遁がすことは出來なかつた。母はまつ直な、激した調子で、一人々々の行爲を責めて、彼等のためにS家の名譽が悉く失はれ去ることを嘆きながら、その言葉の最後には、屹度次の感想を附け加へるのが極まりであつた。

『でもなあ、考へて見ればあの人も可愛想なものぢや。』

伯父は、彼自身の顧問からとは云ひながら、あの年になつて若いものたちから悉く叛かれ、たつた一人の娘からさへも恨まれるのが氣の毒であり、叔母は伯父の大勢の私生兒の世話をさせられるのが氣の毒であり、兄と嫂はお互に愛してもゐないのに結婚させられ、喧嘩をしながらもなほ別れることが出來ないのが氣の毒であり、彼女の愛する末の息子は、養子などにやられて、しなくもよい心配をさせるのが氣の毒であり、また彼の若い妻は、自分なら決してさせない氣苦勞を養家の姑からさせられるのが氣の毒であり、その他一人々々に何か知ら氣の毒なものを見つけ出してやつた。その缺點と共に。母はまた伯父の我儘な一例として、本家に來てゐる彼の小さい息子（本家には二人來てゐた）の一人

が先達ひどい病氣をした時のことを語つた。それは腹膜炎で、母は看護婦と共に出來るだけの看病をした。一週間は夜も殆んど帶を解かぬほどのことさへあつた。而して一と月ほどもすると危ぶまれてゐた子供が完全に快くなつた。併し伯父は母に對して一言の謝辭をも與へなかつた。伯父さんのなさり方は萬事がこれである、と云つて母は說明した。

『第一、わしにそんな子供の世話をさせると云ふことからして間違つた話ぢやないな。本統に、わしがもつと意地惡く出る氣なら、あの子供たちに本家の敷居の前も通らせやせん。』

斯う云つて、ひどく怒つて、訴へた。でもその後に續いた言葉は、すつかり前の調子を裏切るものであつた。

『でもなあ、子供に罪はないと思ふと、可愛想なのはあの子達ぢや。どうか素直に育つてくれればよいがなあ。』

耀子は母の態度に現はれるこれ等の矛盾を笑ふことは出來なかつた。自分の中にも同じ感情を捨て得なかつたから、寧ろ彼女の心持はもつと積極的であつた。耀子には彼等がみんな懷しかつた。それから後、毎日のやうに聞いた彼等の話。聞いて一つとしてよい話はなかつたにも拘らず、それがために彼等の懷しさを打ち消さるゝことはなかつた。弱められさへもしなかつた。それに彼女が三年前に見た時の彼等は、重な人の不幸の中で、嚴肅な、共通の悲しみに打ち挫かれてゐる時であつた。お互ひ同士慰め合はうとしてゐる時であつた。すべての私情、すべての感情は死の陰に淨められてゐた。而して一家族のものが愼んだ、眞面目な態度で、この大きな缺陷の後をどう埋めて行かうかと怖れ、案じてゐる時であつた。彼等の有つてゐるよいものが、裝はずして悉く流れ出てゐる時であつた。耀子はその時の彼等を忘れることが出來なかつた。それだけどうしても惡くばかりは思はれなかつた。惡いことをしてゐると云ふ人は云ふ人だけに、淋しいやうな氣がした。逢つてよく心の底を聞いてやり度いやうな氣がした。

『これが血の偏愛であらうか。いゝえ、寧ろ人間が人間に對する偏愛でなければならぬ。』

その感情のために、母でも弟でも、苦しむものは二重の苦しみをしなければならないのだ、と燿子は考へた。

『何を云うてもなあ、血で血を洗ふことぢやから、情ないわな。』

斯う或る時しみ〴〵と嘆息した母の言葉に、燿子は強く同感した。

『お母様、まあ餘り心配しないことにいたさうぢやありませんか。こちらでゆつくり様子を見ておいでなさいな。その内にどうにか旨い都合にもなりますわ。』

彼女の慰めの言葉はこの外にはなかつた。

『さうとも、さうとも、お前たちのところへ斯うしてをればわしだけは極樂ぢや。』

この言葉は勿體なかつた。同時にまた衛がこの母に對して親身以上の愛を示してくれることが燿子には何より嬉しいことであつた。細かいことによく氣のつく彼は、燿子のぼんやりしてゐることを償つてくれた。彼は勤め先の歸りに名高い食料品店などに寄つては、母の好きさうなものを買つて來た。色々な珍らしい食料が交る〴〵彼等の食卓を賑はした。

『お母様、これは如何ですか。越前の焼うにです。』

彼は酒は飲まなかつたがこんな種類の食べ物に對する味覺だけは精緻であつた。それが一二杯の盃を旨がつて干す母の食物と一致した。

『頂きやんしよ。』

母は彼の優しい心遣ひを感謝した。それと共に勸められた珍らしい食物に箸をつける前に、先づその容物を注意した。

『まあ、可愛い壺ぢやなア。』

若しそれが壺であれば、さう云つた。また曲物であつても、箱のやうなものであつても、それが、小ぎれいに、手際よく出來上つてゐるものなら、何でも、一つの美術品を發見したやうに悦んだ。都會の店にあるものは、斯んなちよつとしたものまで風雅に出來てゐると云つて感心した。最後に、中の食べ物が食べ終られた後での、その容れ物の利用法がきつと工夫された。壺には何か花でも植えたら面白からう。箱にはお煮しめでも入れて、それにおにぎりさんの少しも添へると、何處へ持つて行つても恥かしくない立派なお辨當が出來ると云ふやうなことが持出された。而してそれは重に彼女の左右に座つて箸を動かしてゐる二人の子供たちを相手として話される意見であつた。小さい二人は勿論おばあ様のこの感嘆すべき思ひつきに胸を躍らした。兄は花の植ゑられた壺を自分の小さい机の上に飾ることを希望した。弟の方はまたそのお辨當を持つて——お煮しめの中にはいんげんさんと玉子燒とを入れることを忘れないで——おばあ様にすぐ近所の植物園へ連れて行つて頂くことを約束した。悦びの聲と、はしやいだ高笑が常に彼等の間から起つた。皆んなが幸福な感じに充たされた。中でも母が誰よりも一番高くその賜物を値踏みしてゐたことは確かであつた。母は全く嬉しさうにしてゐた。彼女を苦しめてゐた樣々の心の煩ひは、その瞬間、三百里向ふの國の方へ、文字通りに遠ざかつてしまつたやうに見えた。これ等の悦びは月が變つて、今一人の孫を手に入れたことに依つて、更に完全になつた。

子供は矢張り男の兒であつた。母がこの新たな小さいものに引きつけられてゐる心持は燿子の想像以上であつた。これまで上の二人の子供に見せた愛も、今この赤ん坊に注ぐ愛も、愛に變りはなかつた。でもその愛の受け取られ方には著しい相違があつた。上の二人は既に發達した意志、感情を以つて行動してゐる小人間として、幾ら馴れても甘へても、平常同じ家に住んでゐない人と人とが持つだけの隔りを失ふことは出來なかつた。彼等を見る祖母の目には、或る瞬間

淋しい色が閃めいた。けれども赤ん坊はこの世界に現はれると同時に彼女の手に落ちたやうなものであつた。その把握は確實であつた。ただ愛すればよかつた。背かれることはなかつた。抱いても、かゝへても、振り放されることはなかつた。赤ん坊は黒いぱつちりした目を開いてたゞぢつと彼女を見詰めてゐるだけであつた。

『おばあ様、わたしはおばあ様のものです。』

彼女ははつきりさう云つてゐるかのやうに見えた。

『あゝあ、おばあ様は赤さんが一番好きぢやなア。』

祖母は口に出してよくさう云つた。上の子供たちが云ふことを聞かなかつたりする場合には殊に。便宜上からもまた赤ん坊はすつかり『おばあ様つ兒』にならなければならなかつたのであつた。擢子がいつもの産後の例で、長い間、ちよつとした身體の無理もきかなかつたに、女中を今一人増さうとして探してゐたが見つからなかつたから。母は中々忙しくなつた。彼女は氣立てのよいせきやを相手にして、臺所のことでも子供の世話でも出來るだけ働からうとした。でも母の長い家庭生活からは、召使たちを指圖することしか數へられなかつたので、今自分で手を下さうとするとすべてが鷹揚で間が拔けてゐた。而して赤ん坊が少しでも泣くとはら／＼して可愛想だと云つた。擢子は少しでも長く寢てゐる習慣をつけさせようとしてゐたので、少し位泣いても其にしておいてほしいと賴んだ。でもそんなことは彼女の堪へられることではなかつた。

『おゝ、可愛想に、可愛想に。』

母は斯う云つて泣く度に直ぐと抱きあげて子守り歌のやうなものをうたひながら部屋の中をゆすぶつて歩いた。母の信ずるところに依れば、赤ん坊と云ふものは生命の根源から切り放されたばかりの、ぴち／＼した、新生命の一塊であ

るから、(母はこんな言葉は使はなかつたが、意味は斯うであつた。――ぴち／＼と云ふ形容詞は實際用ゐられた)形のやうにぢつと寢てゐるものではない、と云ふのであつた。母のこれ等の言葉の前には、燿子が學校から仕入れて來た育兒法などは無視されてしまつた。燿子はその無視を寧ろ甘んじて受けた。それと同時に母の云ふやうな育て方は、僅かに優秀な育兒法に相違ないと思はれてゐた。子供を生み、育てることが婦人の唯一の生活であり、唯一の悅びであり、唯一の希願であつた頃には。その時代に於ては、育兒は單なる母の務めでもなければ、仕事でもなかつた。それは絕對無二の最も美しい宗教に外ならなかつたのであつたから。乳を飲ませること、小さい身體を洗ふこと、着物を着せること、抱くこと、おんぶすること、子守り唄を歌ふこと、それがその儘母たちに取つては、見えざる生命の本體に對する禮讃であり、勤行であり、祈禱であり、彌撒であらねばならなかつた。それ比較すれば嚴正な規則と時間割と、それに僅かの乳液を加へて出來上つたやうな今の所謂教科書的育兒法は、何と云ふ事務的な乾からびたものであらう。

『正三ちやん、おばあ様に斯んなにして頂いて、あなたはお兄様たちよりかずつと、ずつと仕合せな人ですね。』

燿子はこの言葉を囁かないではゐられなかつた。彼のまだ聞こえもしない小さいその耳許に。同時に自分の耳の中にも一人の若い母の聲を聞いた。――あなたは育兒が宗教から事務に變つたことを嘆く前に、その事務さへも安心しては取られない私たちのために嘆いて下さらなければいけません。もつと長くあの可愛いものを抱いてゐ度い時でも、私たちの新たな仕事――從來の奴隷でなしに、本統の意味での女性と云ふ一人間として生きようとする努力は、子供の側から私たちを引き放します。而してその犧牲的隔離から得られるものは、まだ乏しく僅かです。物質的の報いをあげて見るならば、彼等に食べさせ度いものを食べさせ、着せ度いものを着せるだけにも足りない位です。何故に？――女であるがために。――此處で事務は重荷にさへ變じます。私たちに十分なものを、自由に有たして下さい。心の糧と共に、

身邊の糧をも。それさへ理想的に行けば宗教はまた容易に育兒の上に歸つて來ます。いゝえ、初よりもずつと立派な、自覺ある宗教心が生れるでせう。多くの若い母たちの上に。私たちは營養のよい、健康な、賢い子供たちを兩手にさしあげて神を讃美するでせう。今の時代より更により善くあるべき次の時代のために彼等を捧物とするでせう。アブラハムがイサクを捧げたやうな信仰をもつて。その時代の子守り唄こそ本統の聖歌です。――

これ等の聲は學校の窓から、會社のタイプライタアの際から、新聞社の編輯局から、醫局の藥棚の下から、工場の紡績器械の横から、一齊に叫び出されてゐる聲であると共に、燿子自身の聲でもあることは爭はれなかつた。その瞬間彼女は、茶の間の小さい卓を中にして此處に睦じく向ひ合つてゐる母親と娘との距離が――六十代と三十代と、長い月の推移から見れば、云ふほどもない位な僅かの距離が、如何なる時代の親子にもなかつた程に遠くかけ離れたものであることを感じないではゐられなかつた。燿子は何となしに母の顔が打ち眺められた。

『何を、人の顔が見ごとがあらう。』

と云つて、優しく咎められた程に。

『いつ見ても高い鼻だ、と思つて見てるところなの。』

燿子はわざと斯んなことを云つて笑つた。

『つまらんこと。』

母も笑ひ出した。而して笑ひながらその問題の鼻を一撫なぜた。

母の鼻は實際高い鼻であつた。高いばかりでなく、希臘形の端正な鼻で、それは母の里のG家の人の特長と認められてゐる形であつた。G家の血を引いたものは皆んな美貌であつた。同時にその型は肉感的な點の絶無な、冷たい、彫像

のやうな美であつた。母の若い頃からの仇名を燿子はよく乳母から聞かされた。象牙人形だの、政岡だのと云ふのであつた。これ等の仇名はよく母を表はしてゐた。燿子は自分の幼い頃の記憶を呼び返して見ると、母が美しいと云ふことは、小さい自分に取つて何より強い誇りであつたことを忘れることは出來なかつた。彼女はその美を殆んど崇拜してゐた。それと共にその母の娘である自分が人並みほどもない醜い子供であることに氣がつく時彼女は深い悲しみに陷つた。これ以上に恥かしいことはないやうに思はれた。妹や弟の顔の上には、どちらにも母の美の附物の幾部分が認められるのに反して、燿子の顔には何處を探してもそれらしいものは見出されなかつた、彼女のことをば皆んなお父樣似だと云つた。而して女の子が父親に似てゐると大變運がよいのだと云つた。けれども燿子には運なぞはどうでもよかつた。それよりはもつと美しい娘に生れたかつた。流石にあのお母樣の娘だと誰からも嘆美せられるほどに美しくありたかつた。親類はよく子供たちを招待し合つた。子供たちはその度に出來るだけ着飾つて行つたり、來たりした。家の女たちは朝からその子供たちの支度をしてやるのに忙しかつた。美しく生れた從姉たちや、妹は——彼女は目のすぐれて美しい少女であつた——何を着ても、どんな髮に結つても、似合つて可愛らしかつた。その中に立つと燿子は普斷より一層見すぼらしくなつた。彼女は自分の醜さを恥ぢると共に、美しい仲間がこの上もなく羨ましかつた。彼女はその苦しい心持のやり場に困つて、支度の最中によく腹を立てたり、肝癪を起したりした。自分の花簪が他の人のより少し古過ぎるとか、女中の誰かゞ自分の帶を手傳ふ前に、妹の帶を締めてやつたとか、下らないことを種にして。結局その不機嫌のためにいよ／＼ふくれた、醜い顔になつて出掛けなればならないのであつた。彼等を迎へたおばさんたちや、その他の女たちは、第一の挨拶として、彼等が着て來た着物や帶の立派なことを云つて、彼等の母親たちのよき趣味と丹精を賞めると共に、彼等が皆んな見違へるほど大きくなつて、おななしくなつて、而して喫驚するほど美しくなつて行くことに

ついてお祝ひを云つた。それから鼻とか、目とか、口とか、また皮膚の綺麗なことゝか、姿のよいことゝか子供たちは自身が有つてゐる、それ〳〵の優れた點などが數へ立てられた。ただ一人燿子だけは何一つ賞めて貰へるものはなかつた。彼女は恥かしさと、羨ましさと、同時にどうしようもない絶望に壓しつけられて部屋の隅の方へ小さくなつてゐる時、やつとたゞ一つの救ひが現はれた。それは彼女の髪の黑く、多く、長いことに對する賞め言葉であつた。

『お母樣その儘のおぐしちや。』

と云はれると、燿子は嬉しくつて急に顔がまつ赤になつた。『お母樣その儘の髪』と云ふ形容詞一つで、彼女の傷つけられた感情を幾ら和げるに十分なのであつた。が、彼女は知つてゐた。自分の髪が賞められると云ふことは、外に何一つ賞めるものはない、あはれな説明であつたことを。母は彼女に常に一つの教訓をした、それは、お前のやうに美しさを惠まれなかつた娘は、せめて心だけも美しくもたなければならない、それから何でもよい人並み以上に優れたものを一つ持たなければならない、でなければ誰もお前と結婚する人はないだらう。――と。この言葉は彼女を悲しませるよりは寧ろ憤慨させた。また恥かしがらせもした。彼女は決して誰とも結婚はしまいと決心した。けれども母の云ふ通りに心の美しい、優れた女にだけはなり度いと願つた。何故？　でなければ餘り見じめであらうから。――これは燿子の十位の頃のことであつた。

『お母樣はまだ矢張りお美しい。而してまた何と云ふ若さだらう。』

これが六十をすつと越した老婦人だと見る人があるだらうか、燿子は斯んなことを思ひながら卓の向側の横顔をぢつと眺めた。これは嬉しいことであつた。十の子供の時分の感情に劣らぬ位。

斯うして母と晝の大部分の時間を茶の間でさし向つて暮らすと云ふ稀有な機會は、燿子に彼女の小さい頃のことを色

々思ひ起さした。平常は考へ出しもしないやうな人の名前や、古い出來事が記憶に甦つて來た。燿子は母と色んな昔話をして樂しんだ。それに母は話好きであつた。――と云ふよりはこれまでの母の生活では、談話がその全部であると云つてもよい位であつた。母の常に座つてゐる『內所』と呼ばれてゐる一部屋は、一家族の人々の團欒室であつたと共に、出入りの親しい人たちのランデヴゥであつた。表立つた客でないものは悉く其處へ集つて來た。而して集まつて來る程のものは何か知ら話を持つて來た。人の噂、地方での出來事、景氣、不景氣の話、食べ物、着物、聞き物の話、東京と大阪から來る新聞紙上の珍らしい社會記事、宗教、政治、經濟、工業、世上百般のあらゆる話が其處へ持ち寄られた。殊に父が晩年に政黨と關係を持つやうになつてからは、談話は非常に政治的色彩の多いものとなつて、選擧の時なぞは、その部屋は政治運動の機密室に變つてしまつた。母はその中であらゆる話を聞いた。斯うして彼女の興味は如何なる問題に對しても、廣く、自由に開けて行つたのであつた。聞いてゐると喫驚するほど多方面な話材を母が有つてゐるのに燿子は氣がついた。それ等の話に耳傾けることは、まだ書物を讀むことも出來なければ、六かしい考へ事も出來ない疲れた身體でぶら〳〵してゐる彼女に取つては、丁度適當な、日課であつた。その中でも故鄕に殘つてゐる古い傳說や、近傍の漁村の生活や、船乘たちの話が最も多く燿子を樂しませた。珊瑚船に乘り込んだり、朝鮮の方の遠漁に出掛けたりする若者たちの物語の中には、シングのものの中にでも出て來さうな話が澤山あつた。一艘の小さい漁船に乘り込んで釜山へ渡らうとした三人の漁夫が暴風雨のために反對の小笠原沖まで吹き流されて、飢えと苦痛の長い航海の間に二人の仲間はとうとう死んでしまふ。たゞ一人生き殘つた若い漁夫は、何十日と云ふものを食べも飮みもせずにゐたが、それでも不思議な生命を取り留めて、終に或る汽船に救はれて歸つた、と云ふ難破船の話なぞもあつた。

『食べるものも、飮むものもなうなつてからと云ふものは、たゞもう一心不亂に金比羅樣を信心したのとなあ。さう

すると有難いものぢやないな、耳許ではつきり、東へ行け、東へ行けと云ふ御聲が聞こえたといふで。』

自分を救うてくれたものは神様だ、とその漁夫は信じ込んでゐると母は話した。それは結局母がさう信じ込んでゐると云ふことであつた。斯うして、物語は物語それ自身が面白いばかりでなく、それに挿まれた感想や批評に依つて、母の有つてゐるよい性格や、優れた感情が見られるのが、耀子に取つては一生の悦びであつた。二人はその時許なり熱心に宗教の話をした。或時はまた繪畫の話をした。九州に生れたものは誰と云へば大抵竹田のことであつた。母は竹田や杏雨の話をよくした。竹田の町の近くに生れた母は、その優れた畫家に就いて、土地に殘つてゐる逸話などを多く知つてゐた。母の實家の親類に竹田と親しい友だちがあつた。竹田はよく其家へ遊びに出掛けた。その家の子供たちはとの畫描きのおぢさんが來る度によい遊び相手にして鳥や花ゝ畫をかゝした。でもその畫は決して長くその儘にはされてかつた。子供たちはそれで鼻をかんだり、菓子の包み紙にしたり、こよりにしたりした。今から考へると勿體ないことのやうであるが、小さい彼等に取つてはそれが自然であつた。

『大事な物の分らんものには、大事の物ちうものは、何一つないのぢやけんなあ。』

とれが母の批評であつた。或る時にはまた人間の職業と云ふやうなことから百姓の話になつた。百姓ほどよいものはない、と母は云つた。

『お年貢の心配ばかりしてゐるやうなのはちつと困るがな、大きな百姓ならそれこそお大名よりよいとしたものぢや。食べるものは皆んな自分の土地から湧く上に、お大國様より外に頭を下げるものはないのぢやけんなあ。斯んな結構な身の上はありやせん。』

とも言葉を聞いた時、耀子は

『お母様、ロシヤに斯んな人があつたのですよ。』

と云つて、トルストイの話を簡單にした。今度は母が熱心な聞き手になつた。彼の勞働の精神はすつかり母を感心させた。世の中の人が悉くさう云ふ心持になれたら、人間の有つてゐる今の不德の大部分は消滅した筈であると云つた。

『國の家のことにしてもさうぢやないな、あれで皆んなが今日明日の食べることまで自分だちで心配せにやならん境遇なら、あんな我儘が出來た話ぢやない。遊んでゐて食べられるのが却つていけんのぢや。』

母の溜息は深く、重かつた。燿子はその時、話は矢張り戻るべきものへ戻つて來たことを感じないではゐられなかつた。今までの種々な話もその最後の一つに達するまでの道草に過ぎなかつたのであつた。母は家を出てからもう百日近くになるのに、嫂からは一通の手紙も受取らない、と云ふやうなことを云ひ出して心配らしい表情を見せた。

その頃花であつた庭の樹も悉く青葉になつて、今ではその上から毎日以らしい、强い光線が射し通すやうになつて來た。庭は坪數にすると二十坪にも足りない位であつたが、西の方に植物園の臺から續いた、樹木の多い崖を有つてゐるのと、庭の中に二本の栗の大木があつて、枝一杯に房づいた、濃綠色の夥しい葉の聚團が屋根から蔽ひかぶさつてゐるのとで、山の中に居るやうな木深さがあつた。夜などは崖の上で梟の鳴く聲がした。母の行李からはネルの着物が取り出された。母はその上に小巾の黑い繻子の帶を締めて毎朝庭を掃いた。その時には燿子も赤ん坊を抱いて一緒に下りて見る程にまで元氣づいてゐた。制服になつて、背嚢をしよつて、學校へ行くばかりに支度をした上の子供は、母と祖母の側で一と遊びして行く氣で急いで靴を穿いた。中の子供も元より後れなかつた。二人は競爭で樹から樹の間を駈けつこしたり、崖によぢ上つたりした。

『赤さん、赤さん。』

二人は崖の樹につかまりながら、母に抱かれてゐる赤ん坊を見下ろして、呼んで手を叩いた。

『お父様も出ていらつしやいよ。』

最後にはとうとう父まで呼び出された。白いペンキ塗りの洋風の二階の書齋の硝子窓から衛の顔がのぞくと、下に居るものは皆んな笑ひ顔をして見上げた。

『お母様、大抵になすつておかなければ、疲れますよ。』

『何んの、あんた、これ位のこと。丁度いい運動になります。』

衛と母は窓と崖で話をした。邸の中庭木には掃き寄せられるごみは、この頃は殆んど栗の花ばかりと云つてよかつた。その甘酸つぱい匂ひを有つた紐のやうな花は、掃いた後から後からと落ちて來た。子供たちはその栗が實になる時のことをおばあ様に話さうとした。それがどんな見事な、大きな毬であるかと云ふことを、またそれが枝を離れて、落ちて來る時に、トタン張りの庇に當つて、どんなに喫驚するほどの音がするかと云ふことを、それからまた、夕方から風でも吹き出した日の明けの朝の光景が、どんなに目覺ましいものであるかと云ふことを、そんな晩には夕御飯の箸を置いたら直ぐにも寐なければならない。――彼等一流の推理法に依れば、三十分でも早く寐れば、その三十分だけ早く樂しみな明日が來さうのだから。昨年の九月の末の或る朝には、一つ栗のつやつやした大きな栗が、一度に一升も拾へたと云ふことを二人は誇つて話した。而して、若しおばあ様がこの秋まで歸らずにゐたならば、彼等と一緒にその栗拾ひの樂しみを有つことが出來るだらうと云つた。

『本統に、おばあ様もそれまでゐられるとよいがなあ。』

母はさう云つた。けれども、必ずその時分までゐて、彼等と共にその樂しい栗拾ひをしようと云ふ約束を二人に與へ

るごとはしなかつた。燿子は後で書齋へ這入つた時、良人の耳許に囁いた。

『お母様も大分國の方のことが氣になり出したと見えますね。』

國の方からはたまにしか便りがなかつた。その中でも一番多く來たのはどうしても弟の手紙で、その次には兄からのであつた。分家の伯父からは最初に形式上の挨拶狀が屆いたきりであつたし、嫂からは矢張り來なかつた。弟の手紙は、それがどんなに愛に充ちたものであつたにせよ、寧ろ當然のこととして平氣に受け取られたが、義理の息子なる兄から書き送られて來る、優しい信實の籠つた言葉は、母を強く感動させたやうに見えた。彼は初めには國の方のことなどは何にも心配しないで、氣永に逗留するやうにと云つて來た。二た月目位からは、母がゐないために家の中が非常に淋しくなつたと書いて來た。それが近頃になると明かに歸國を待ち詫びる手紙に變つた。家はお母様がゐらつしやらなくては矢張り駄目だから一日も早く歸つてほしいと訴へて來た。淋しくつて仕方がないと書いて來た。母はそれ等の手紙をすべて燿子に讀ませて聞いた。而して

『困つたなあ、もうそんなことを云うて來だしたかなあ。』

と迷惑らしいことを云つたが、でも燿子は、母の心が兄のそれ等の言葉にどんなに悅ばされてゐるかと云ふことを知つてゐた。母は懷しさうに手紙を覗いて見た。

『あの人は詰まらん人ぢやが、腹の中は誰よりも善い人ぢやけんなあ。可愛想ぢや。わしが居らんで淋しいと云ふのも嘘ぢやない。本統に淋しいのぢや。』

『でもお母様、今度はあれほどの思ひをして出てゐらしたのですから、歸り急ぎはありませんよ。お姉さんなんぞの仕打一つでは當分こちらにゐらつしやる位な決心をしてゐなさつた方がよござんすわ。』

『そりや、さうとも。――お波さん（嫂の名）は歸つて來いどころぢやない、手紙一本寄越さんのぢやけんな。ひよつこり歸つたらどんな顏されるか分りやせん。』

母は淋しさうに笑つた。

『誰がそんな中へ歸りたかろ、歸らすになられたらそれに越したことはない。』

とも云つた。燿子はこれ等の言葉から多くの複雜な意味を汲み取つた。言葉がその儘意味ではなかつた、また意味がその儘言葉にはならなかつた。その中でたゞ一つ明瞭に分つてゐることは、母は矢張り國の家に住むべき人であると云ふことであつた。娘夫婦ゝ家に、愛する孫たちと送る現在の生活は、そのまゝで母の夢の實現であつた。優しい心遣ひ優しい笑顏、優しい言葉、愛と信賴の完全な樂しい四ヶ月も、家と云ふものに對する人間の根深い執着をば、どうすることも出來なかつたことを燿子は見た。母は現在の悅びを十分に悅び、感謝し、その價値の貴さを認めながら、尙ほ自分を待つてゐる苦痛と爭鬪の家を見捨てることが出來ないのであつた。決して歸り度くはなかつた。しかし、歸つて來てくれと云はれないことは淋しかつた。其處に悲しい矛盾があつた。燿子には母の心持ちが鏡の中を覗くやうに分つた。やつと救ひあげて來た溺人へ、また投げ戾すやうなことになつたのを嘆きながらも、母自身の心持には深く同情された。

『おや、今度は何日頃歸るかなんて云つて來ましたよ。』

燿子は段々性急な催促狀になつて來た兄の手紙を何度目にかでまた母の前に擴げた。

『さう云つて來るのに歸らん譯にも行くまいなあ。』

『お母樣がどうしても歸らないと云ふ御決心なら、それまでですがねえ。』

燿子は其處まで突つ込んで云つて見た。が、

「お父様のお位牌のある家にわしが歸らんと云ふことは、どんな事情があつたにせよわしの我儘ぢや。」

と云ふ一言を聞いたので、燿子はもう決して引き留めないことに決心した。けれどもその儘不用意に直ぐと歸國させることはどう考へても不安であつた。長い留守の後で、何十年の馴れた古い巣に對して、其處の柱や、壁に對してまでも、深い執着を以つて歸つて行かうとするのを、どんな顏が迎へるかを知つて置きたかつた。燿子は弟へ向けてすべての事情を書き送つた。返事は直ぐと來た。——それ等の顏のことは餘り多く問題になさらないで下さい。母上にしたところで、其處で見てゐるやうな顏を、こちらでも見ようと期待してゐられないでせうから。どちらにせよ、お歸りになるには今が丁度よい時機だと信じます。いつお歸りだらう、と云ふことが皆んなの口に上つてゐます。待たれて、威勢よく歸つてゐらつしやれるわけです。——彼ははつきり斯う斷定してあつた。その最後に彼はまた一つの重大なことを書き添へてあつた。それは、自分も色々考へて見た末、もつと世の中を見て來たいと云ふ氣が頻りにする。かたく〳〵志してゐる仕事の研究もやつて見たいので、暫く家から離れようと決心した。その事について家父の承諾が得られなければ——勿論得られないと信ずるので——その時は無斷で決行する。たゞその事が餘り激しく母上を驚かしはしないか、と云ふことが自分を怖れさせる。それだけが心配である。それ故どうか母上の滯在中にそれとなく自分の決心と計畫を知らせておいて頂きたい、と云ふのであつた。——私も頓て三十です。考へるとぢつとしてゐられない氣がして來ます、今の生活は、目の前に好望な運命の波がだぶだぶしてゐるのを見ながら、その中に飛び込むことが出來ないで、ぼんやり岸に佇んでゐる者のやうです。それでは餘りに悲慘です。S家の改造と云ふやうなことも、始まればそれから始まりませう。どちらにせよ。その第一聲の烽火を擧げる人に私がならうと覺悟したのです。私は多分無一物で、空つ手で飛び出すのです。今までおやぢの金を利用しようとしてゐたのは私の間違ひでした。おやぢの金はおやぢの金で、私の金では

ないのですから、私は今度こそパンの味を知るでせう。勞働の價を知るでせう。この地上に、一人ぼつちで、裸體で出て來た一人の男が、自分の手でかち得た、自分の最初のパンの一嚙みに知ると同じ味と價を、本統に知ることが出來るでせう。どうか私のために祈つて下さい、私の成功のために。それから又今怒つたり、恨んだりし合つてゐる人達、悲しんだり、憎んだり、絕望したりし合つてゐる人達、私たちの氣の毒な、親しい血緣の人達が救はれて、今一度心から笑ひ合ふ日の來るために。さうです、これはもう一家の私事ではありません。人類の社會の一組織の改善として、公共的に必要なことです。では、母上のことはお賴み申します。――

この手紙は何となしに燿子を涙ぐませました。

『何か長いことを書いて來たぢやないな。』

燿子がいつとなしに眞面目なきつい表情になつて讀んでゐたのが、母の注意を引いたらしかつた。が、その場ですぐと手紙の內容を打ち明けることは、そのことを一層大げさに悲劇的にしさうに燿子には感じられた。彼女は一二日立つてから、突然、何んでもないことのやうにして話し出した。母は思つたほどは驚かなかつた。

『家を出て何處へ行く積ぢやろ。』

すべての話にぢつと耳傾けた後で、たゞこれだけ、事を聞いた。

『さあそんなことは何とも書いてないから分りませんが、何處へでも出掛けて行つて色々な運命に進つて見ることも必要だと思ひますわ。世間は廣いのですからねえ。』

母は二分間位默つてゐた。而して云つた。

『若い人たちは何でも氣任せにやつて見るがいい。わしたち見たやうに、あの家で一生朽ち果にやならんと云ふ極まり

はないのぢやけんなあ。それが若いものの一得ぢや。』

若いものは、若いものの道へ、老いたるものは、老いたるものの道へ、と云ふことを暗示した母のこの言葉の中には、強く燿子の胸を打つ或るものがあつた。老いたるものの道――その行き着く先へ待つてゐるものの何であるかを思ひやつた時、それは餘りに明白な、餘りに怖るしいことであつたから。彼女はこの恐怖を母に悟られないために、なるたけ斯んな種類の話を避けようとした。が、意識して注意すればするほど、意地惡くそんな場面が現はれて來た。燿子は時々はつとして口をつぐんだ。

いよ〳〵近いうちに歸國すると云ふことが決定されると共に、

『今度はいつまた來られるやら。』

と云ふやうな言葉は何につけても出た。

『來たいと思つたらいつでもまた出掛けてゐらつしやるといゝのよ。お母樣は餘んまり遠慮深くしてゐなさるからいけないのですわ。』

『まあ永生きをして居りやんしよ。生命さへあればまた逢はれることもあらう。』

『いやなお母樣、そんな話はまだ早過ぎますよ。』

燿子はわざと咎めるやうな調子で云つた。が、內實は怖るしくなつた。どうにかして話題を變へようとしたが、出來なかつた。母の血緣は男の方は割りに短命だけれども、女の方は中々長生きをした人が多い。燿子の祖母は七十五まで壯健で生きてゐたし、大祖母は九十何歲まで生きたと云ふやうなことがそれから話出された。

『ですからお母樣も大祖母樣見たいに長生きをしますよ。』

燿子は斯う受け合ふやうに云ふと共に、その大祖母様に就いて彼女が有つてゐる唯一つの記憶を話さうとした。――それはもう話したことのある話ではあつたが、どうかすると息苦しくなつて來る其場の空氣を、もつと呑氣なものに變へるに役立たせようとして。

大祖母の家（母方の祖母の實家）は、燿子の町から山一つ越した向ふの村に在つた。その村は日向に近い南の暖い日と、暖い海と、暖い風を受けて、昔から蜜柑の名所であつた。燿子の上つてゐた小學校では、毎年の秋の遠足地として、よくその村を選び出した。同時に、三里の山越えに堪えられる足を有つた生徒と云ふ條件から、三四年以上の子供だけに限られてあつたので、連れて行かれない下級生達に取つては、それは強い羨望であつた。その美しい果實の村が見られると云ふことのために。見られるばかりでなく、その果樹の下に直接行き、その枝に直接手を觸れて、而して自分が自分の手でもぎ取つた蜜柑を、食べ度いだけ食べられると云ふことの爲めに。三學年になつて、初めてその蜜柑の村へ遠足することに定められた生徒たちの悦びは、小さい彼等の間だけにしか解されない、特殊な滿足であつた。燿子の場合には、その上にまた今一つの樂しみと好奇心とが加はつてゐた。それは、大きい人達の話にばかり聞いてゐて、今まで一度も見たことのない、大祖母様に、その機會で逢ふことが出來ると云ふことであつた。

『お母様のお母様の、またそのお母様』と云ふやうな考へ方が、九つの燿子を何となしにおかしがらせた。

小さい遠足の女生徒たちの列は、皆んなお揃ひに紫の脚絆をつけて、草鞋を穿いて、お結びの這入つた白い風呂敷を肩から斜にかけて、彼等の足には可なり急な山道を勇氣を出して登つて行つた。山の峽の、思ひもかけないところに青い海が光つたり、紅い蔦の絡まつた木立の下に、どう／＼と波の音が聞こえたりした。村に近づくと山にはもう他の樹木は一本もなかつた。樹木と云ふ樹木は悉く蜜柑の木で、またその木には悉く金色に熟した、圓い果實が生られるだ

け、寄りかたまつて、高い奇聲を放つてゐた。生徒たちは叫び聲をあげた。山を下り切つて、村の入口の小學校で休んで、お辨當を食べた時、燿子は其處で受持の先生へ、その村に在る大祖母様の家を訪ねて來たいと云ふことの許しをたふたことを覺えてゐる。でも、それから先は何處をどう歩いて行つたのか、また誰が案內者であつたのか、それとも一人であつたのか、それ等の記憶は一として殘つてゐなかつた。その中にたゞ一つ、小さい流れにかかつてゐる石橋を渡つたことと、白い、高い、森閑とした土壁の門を這入つたことだけは忘れなかつた。而して或る家の――どんな家だつたかすつかり分らないが――うす暗い、人つ氣の何にもない、がらんとした廣い玄關の土間に立つて待つてゐると、正面の白い障紙の一枚がすうつと內から開いて、一人の非常に小さい、どう考へても小學一年生の脊丈以上はない白髮のおばあさんが現はれて來て、

『まあ、まあ、お前がお燿かなあ。よう來た、よう來た。』

と云つた。それから先は又何んにも記憶になかつた。どんな話をしたか、何かお菓子でも貰つたか、貰はなかつたか、何處をどう歸つて來たか。――

『まるで夢見たいですわ、でも大祖母様が小さかつたのだけは今でも目についてゐてよ、本統に小さいつて、小さいつて。』

『そりや無理もないぢやないな。その時はもうお祖母さんが九十近い頃ぢやもの。』

『ぢやお祖母様だつてもあんなに小さくなるのね。さうしたら、わたしおねんねこへ入れておんぶしてあげませう。』

母はおかしがつて笑つた。――笑つてくれさへしたら、燿子の話は成功であつた。

けれども、話題は少しも出來なかつた。憂欝は不意に襲うて來た。燿子は話の途中で進むことも、退くことも出來ない

やうなワナに陷つた。默つてしまへば事情は何ほど惡くなつた。彼女は大抵の場合ふざけて其處を通り過ぎようとした。でも母のしんみりした氣分をかき亂すほどの調子を取ることはすまない氣もした。燿子はよく困つた。

『わたしが死んでもお前たちにやるものは何んにもないな。』

或る時母はふとこんなことを云ひ出した。

『お母様のものなんぞ頂いたつて仕方がありませんわ。着物だつて一つもほしいやうなものはないぢやありませんか。』

燿子はわざと輕蔑するやうに云つた。すると、

『今國で着て寢てゐる布團をやらうかな。』

と云つて、その一組みの布團は亡くなつた父のであつたのを母のに直したので、非常に立派な綿が這入つてゐて、非常に暖い布團だと說明した。

『かたみ分けに布團をやるちうのも珍らしいな。人が聞いたらさぞ笑はう。』

母は先づ自分自身で笑つて見せた。さう云ふ笑ひでも、矢張り普通の笑ひと云ふ字で書き現はさなければならないことは、何と云ふ文字上の窮屈な約束であらう。それはもう決して燿子にふざけることを許さなかつた。

『布團なんて澤山ですね、貰ふのならもつと何かよいものでなくちやつまらないわ。』

と云ふ風な輕蔑で、無視させることは一層許さなかつた。それ程嚴肅な、胸を壓する表情であつた。燿子は素直に是非その布團が欲しいと云はなければならなかつた。彼女は斯うして母の記念分けの約束をした。——いつかは來るべき死に、確證のサインをとうとう押してしまつた。

燿子はもつと快活な、明るい空氣を作り出さなければいけないと云ふことを強く感じた。彼女は衛へ頼んで方々へ母

を連れ出して貰ふことにした。それが不安な對話から自分たちを救ひ出すと共に、母の滯在の殘りの日數を最も有效に使ふ方法だと信じた。子供たちにものを見せに連れて行くとか、下町の方へ買物がてら旨いものを食べに行くとか、また日歸りで未だ行かなかつた近郊の名所へ遊びに行くとか、誘へば母は悅んで出掛けた。さうなるとまた母は決して手輕な支度では出て行かなかつた。髮にも、顏にも、着物にも、非常に細心な、女らしい注意が拂はれた。

『昔の女の人つて云ふものは、一體に皆んながお洒落をしたものでせうね。』

『頭の方にひまが多かつただけね。』

若い二人が斯んな憎まれ口を――好意のある微笑で囁き合つた程に。母は全く若く、美しく見えた。孫と子供連れで出掛ける時なぞは、決して彼の姉以上には受け取れなかつた。

『お母樣はまだあんなにお若く、あんなに元氣がよいのだもの。わたしは何を餘計な心配をするのだらう。』

赤ん坊と二人で大抵留守番に廻つた燿子は斯う思つて、門の方へ歩いて行くその後姿をぢつと見送つた。手も足もまだあんなにしつかりしてゐる。美しささへ失つてゐない。而してあんなに元氣のよい歩き方をして、あの通り話をして、笑つたりしてゐる、その一人の人が、いつか自分たちの居るところから消滅してしまふ――幾ら探し歩いても探し出すことも出來なくなり、呼んでも、もう今の聲では返事をしなくなるなんてこ　があられるだらうか。燿子はどうしてもく信じられない氣がした。併し三年前に父の臨終の床に侍してゐた時も、彼女は矢張り同じやうな感じがしてゐた。死の瞬間まで死を信ずることが出來なかつた。その愚痴な不信者の目の前に、その時死がどんなに無造作に、またどんなに冷淡に、自分の權威を見せつけたかを思ふと、息が詰るやうな氣がした。燿子の神經は病的にまで過敏になつた。

お母樣、どうぞいつまでも御元氣でゐらして下さいましよ。』

たゞこれだけの言葉を口に出すのさへ怖ろしかつた。時間と生命に觸れる話がたゞ怖ろしかつた。二人は何となしに默つたまゝ坐つてゐる瞬間が多くなつた。

『來る時は樂しみがあつたが、歸ると云ふことは、いやなものなあ。』

母が嘆息するやうな調子で云ふ時には。燿子は震えた。彼女は何者とも知らない、まつ黒い、怖ろしいものに向つて、たゞ哀願した。

『怖ろしいものよ、この氣の毒な年寄りを憫んであげて下さい。どうぞもう暫くその側へ近づかないであげて下さい。見逃されるだけ、見逃がしてあげて下さい。』

鐵道院編纂

朝鮮 滿洲 支那案内

東亞案内邦文版 内容見本進呈

新刊

四六判小形・五百九十八頁・定價金五圓・郵送料十八錢
六號及六ポイント二段組・地名發音振假名付・カット版
百二十五面・石版刷地圖二十四葉・コロタイプ挿畫三葉

財政經濟時報記者 善生永助著

戰後の支那

新刊

四六判五百頁 定價三圓

一月上旬發賣 送金順送本の事

國際勞働會議政府代表顧問 窪田文三著

歐米勞働問題

六版

菊版八百頁 定價四圓五拾錢

鎌田榮吉 武藤山治 兩氏推奬

善生永助著

最近支那經濟

三版

菊判五六〇頁 定價二圓七拾錢

贊評嘖々

發行所 丁未(ていび)出版社

東京市麹町三丁目 振替東京七八四七

電話九段六六〇番



神の如く弱し

菊池寛

一

雄吉は、親友の河野が、二年越の戀愛事件以來――それは、失戀事件と云つてもよい程、失戀の方が主になつて居た――、事々に氣が弱くて、ダラシがなく、未練がじめ〳〵と何時迄も續いて居て、男らしい點の少しもないのが、はがゆくて堪まらなかつた。

河野の愛には報いないで、人もあらうに、河野には無二の親友であつた高田に、心を移して行つた令孃や、又河野に對する輕い口約束を破つてまで、それを默許した令孃の母のS未亡人に對する河野の煮え切らない心持は、雄吉から考へれば不甲斐なき限りであつた。

雄吉が、若し河野であつたならば、斬つたり突いたりするやうな事は、自分の教養が許さないにしても、男らしい恨みを、もつと端的に現はせる筈だのにと思つた。それだのに河野は、ぐた〳〵となつてしまつた丈ではなく、令孃の愛が自分にないと知ると、自分の身を犧牲にして、戀の敵手と云つてもよい高田と、自

分の戀人とを、仲介しやうとするやうな、自己犧牲的な行動に出やうとした。河野は、それを人道主義的な、高尚な、行動でゞもあるやうに思つて居た。雄吉は、さうした河野のやり方を、蔑すんだ。自分が捨てられると、今度は直ぐ、自分の戀人と、憎まねばならぬ筈の戀の敵手とを、仲介しやうとする、それでは至醇に思はれて居た筈の河野の最初の戀までが、イカサマな贋物のやうに思はれるではないかと、雄吉は思つた。

而も、河野のさうした申出が、相手の高田から「大きなお世話だ」と、云ふやうに情なく斷はられると、今度は最後の逃げ道として、歸郷を計畫しながら、而も國へ歸つたかと思ふと、もう三日振りには、淋びしくて堪らなくて、東京へ歸つて來たのであつた。

それに、自分獨りで、グツと踏み堪へる力がなくて、毎日のやうに友人を代りばんこに尋ねて、同じ愚痴を繰り返して、安價なお座なりの同情で、やつと淋びしさをまぎらして居るやうな、河野の態度も、雄吉には堪らなくはがゆかつた。

それも、細木だとか藤川だとか雄吉など云ふ極く親しい友達が、河野の愚痴を聽き飽いて、もう新鮮な同情を與へなくなると、今度は高等學校時代の舊友や、一寸した顏馴染の人達を囚へて、河野は相變らず、同じ事を繰り返して居るやうであつた。

「若し、河野があの失戀をグツと踏み堪へて居て、田舍で半年も、ぢつと默つて居て呉れゝば、我々はどれほど河野を尊敬したかも知れない。河野だつて、何れほど男を上げたかも知れない」と、雄吉は細木などに、よくそんな事を云つて居た。

河野の失戀は、その腐つたやうな尾を、何時迄も、何時迄も引いて居た。そして、その尾は何時の間にか、放恣な出

縁目な、無檢束な生活に變つて居るのであつた。彼の生活の何處にも、手答へがなかつた。性格から、凡ての堅い骨を抜き取つてしまつたやうに、何事をするにも強い意志がないやうに見えた。そして、おしまひには、今迄の親友の群を放れて、何時の間にか、遊蕩生活をさへ、始めて居た。そして、自分に對する友人達の尊敬や信頼を、自分で塗り潰して居た。

その頃の雄吉は、細木や藤田などに逢ふと、定まつて河野の生活に對する惡口を云つて居た。細木などゝ、久し振に會つて、三時間も四時間も、立てつゞけに喋べつた後で、總勘定をして見ると、會話の三分の二までが、河野の過去や現在のだらしのない行爲や生活に對する非難で持ち切つて居た。失戀當時の弱々しい未練たつぷりの態度や、それにつゞいての妄動や、現在の彼の生活の頽廢して居ることを、掛合で喋べつて居るのであつた。それに氣が付くと、雄吉は淋びしかつた。親しい友人の惡口を、陰でさんぐ\に云ひ合ふ。その事自身が、可なりいやしい厭はしい事に違ひなかつた。が、會話の途中で、つひその事に氣が付いて、

「あゝよさうく\。又河野の惡口を云つて居た」

と、お互に制し合ふ場合には、きつとこの後の話には、一時に澤山の禁句が出來たやうに、妙な窮屈さを感じた。そして、何時の間にか、話しが河野の惡口に、後戻りして居るほど、雄吉たちは、河野の生活に對する非難で、心が一杯につまつて居た。

雄吉は思つた。我々の親しい友達の間では、今迄陰口などは、決して利いた事はなかつたのに、河野に對してのみは、皆が平氣で少しも良心の苛責を受けずに、いくらでも惡口を話し續けられるほど、河野は友達に對する威嚴を無くしてしまつたのだと。友人に對する威嚴や、友人からの信頼を、無くしてしまふ事、それは無くする當人から云つても、

無くされる友達から云つても、可なりの悲劇に違ないと思つた。

殊に、雄吉は細木などから、

「何うだ。やつぱり、君が新聞小說なんかを、書かせるからいけないのだ。河野を貧乏にして置いたら、今頃は困まつて居るにしても、健全な清淨な生活を送つて居るぜ」などゝ云はれる度に、くすぐつたいやうな不快を感じた。河野が失戀に苦しむと同時に、物質生活の不安に脅かされて居る時、多くの友人の抗議を排して、新聞小說を書かせたのは、雄吉であつた。河野が、細木や吉岡などの烈しい反對に逢つて、到頭書かないことを決心して、斷りの返事を、雄吉の所へ持つて來たとき、敢然として再考を求めたのは雄吉であつた。

河野と同じやうに、無資產の貧乏人である雄吉は、細木や吉岡などよりも、河野の心持はよく判つた。失戀と同時に、凡てに元氣を失つた彼には、貧乏人には付物である物質上の不安が、何時もよりも猛烈に、感ぜられて居たのだ。その不安を取り去ることは、失戀に對する對症法ではなくとも、彼の心持を、少しでも輕くする事に依つて、間接に幾分かは、彼の苦惱を癒すものだと信じて居た。雄吉のさうした考も、一時は誤つてないやうに見えた。

「僕は、新聞小說をかいた事に依つて、やゝ救はれたと云つても、いゝ位だ。あの頃の友達の忠告の中では、君のが一番適切だつた」と、河野は後になつてから、雄吉に感謝の意を洩したこともある。それに對して、雄吉も內心多少の得意は感じて居た。それだのに、河野の生活が、此頃のやうに放埒になつてからは、宛もその原因が、新聞小說をかいた爲に得た比較的豐かな、物質上の自由にあるやうに解釋されて、從つてそれを書く事を勸めた雄吉迄が、細木などから輕い非難の的になつて居た。その事も、雄吉としては、快い事ではなかつた。

その上、その頃は雄吉の知人で、同時に河野を知つて居る誰かに逢ふと、その人はきつと河野に對する報告を、聞か

せて呉れた。丁度、子供か何かの悪戯を、それを監督する責任のある父兄に、告口でもするやうに、

「君！　河野君が此間の晩にね……」とか、

「君が、まだ知らないとは驚いたね」と、云ふやうな冒頭で、河野があゝしたからしたと、云つたやうな事を、いくらか誇張したやうに、話して呉れた。どの話を聴いても、河野は決していゝ役廻りをして居なかつた。河野が人が好くて、氣の弱いのに付け込まれて、散々に利用されて居て、しかも陰では、馬鹿にされて居ると云つたやうに結論せられる話ばかりであつた。そして彼等は、きつとおしまひに、

「君達から、少し忠告するといゝんだ」と、親切ごかしに、付け加へて呉れるのであつた。

雄吉も、細木や藤田などの極く親しい間丈では、河野に對する非難を、いくら繰り返しても、さう不快でもなかつたが、餘り自分たちと、親しくない者から、彼に對する非難や侮蔑を聞くと、やつぱり不愉快であつた。もつと、何うかして呉れゝばいゝと、思はずには居られなかつた。もつと、シャンとして呉れゝばと、思はずには居られなかつた。

河野は、生活の調子を、ダラシなくしたばかりでなく、創作の方面でも、同人雜誌をやつて居た頃の向上的（アムビシャス）な理想などは、悉く振り捨てゝしまつて、婦人雜誌の中でも、一番下品な雜誌へ續き物を、書く約束などを始めて居た。藤田などは、それを知ると、目を丸くして、驚きかつ慨いた。

「僕は、河野が放蕩を始めたからと云つて、それを彼是云はふとは思はない。いくら、遊蕩をしてもいゝが、創作の方面でもつと眞劍であつて呉れゝば文句はないのだ。また創作の方面を投げやりにするのなら、もつと實生活の方でシッカリした眞面目な生活を送つて呉れゝばいゝんだ。河野は、生活も創作も兩方とも、投げやりにして居るから、救はれないと思ふんだ。どんなに放蕩をしてもいゝ。いゝ物を書いてさへ呉れゝば、僕達はグウの音も出さないんだ」と、雄吉

は細木に云つたことがある。

河野の生活が、だん〳〵その調子を狂はしてからは、雄吉たちとの交際も、だん〳〵疎遠になつて來た。夕方の五時からは、どんな所用があつて、尋ねて行つても、在宅して居ることは、殆どなかつた。

「河野の所へは、何時行つても居ない」と、雄吉たちは口々に云ひ合つた。家に居ないことまでが、何も河野に、道德的責任がある譯でもないのだが、幾度も重つて居る中には、さう云ふ事からしても、妙な感情上のコヂレが出來かけて居た。

其中に、河野は雄吉などの連中とは、全く違つた遊び友達を、作つて居た。

「君達は、酒が飮めないから、駄目だよ。僕にはやつぱり、飮み友達と云つたやうなものが必要だよ」と、河野はよくそれを辯護した。又、人が好くて、角がなくて、我を出さないで、殊に醉ふと、益々無邪氣になる河野は、誰にでも友達として、直ぐ受け容れられて、行くのであつた。

「あの連中との交際は、第二義第三義の交際だよ。君達との交際が、やつぱり第一義だよ」と、河野はそんな事を云つた事もある。が、然しさうは云ふものゝ、河野がだん〳〵今迄の友達と放れ、新しい――同時に交際の興味も新しい――友達に、親しみかけて居るのは事實だつた。相對する高臺と高臺とに、住んで居ながら、河野は雄吉を尋ねて來ることなどは、殆どなかつた。何時行つても不在なので、雄吉の方から、訪問する氣も起らなかつた。

今年になつてから、仲間中丈で、組織して居る會で、雄吉達は久し振に、河野に逢つた。河野の生活に對する非難が、銘々の心の中で、一番白熱して居る時であつた。河野は、は入つて來た時から險惡な空氣に包まれて居た。細木と藤田とは、つひ妙な話の機みから、河野に對する平生の非難を、口に出してしまつた。それは、陰で云つて居る河野の惡口

の、ホンの餘沫が出たのに過ぎなかつた。それでも、河野には可なりの致命傷であつたらしかつた。雄吉は、陰では河野の惡口を眞先に云つて居る癖に、いざと云ふ場合になると、一口も云へなかつたことが、恥しかつた。誰に對してもいゝ子だと思はれたいと云ふやうな、利己的な心持から、默つて居たのではないかと、自分で恥しかつた。やつぱり、細木や藤田などの方が、あゝした直言をするほど、自分などよりも、河野に對して、熱誠を持つて居るのだ。何も云はないで、默つて居た自分が、河野に對して、一番冷淡なのではないかと思つた。

が兎に角、偶然の機みから、少しは場所柄がよくなかつたにしろ、河野に對する苦言が與へられたことを、欣ばずには居られなかつた。

あれで、少しでも河野の生活が、引きしまつて呉れゝばいゝと思つた。

が、さう思つたのは、雄吉の空しい望であつたことが、直ぐ判つた。

河野は、細木や藤田などの忠告を「友達が惡い」と云ふやうに、うすつぺらに解釋して、新しい友達の今井などに云つたので、今井などが細木や藤田などに對して、惡意を持つやうになつたと云ふ事實を、雄吉は新聞のゴシップで知つた。それを知つた時に、雄吉は河野に對する最後の愛想を、盡かさずには居られなかつた。

細木や藤田などの、河野の生活の根柢そのものに觸れた非難を、小學校の生徒同志の忠告か何かのやうに、「誰それさんと遊ぶな」と云ふやうに解釋して、しかもその誰それさんに、直ぐ云ひ付けに行く態度を、憤慨せずには居られなかつた。

交友が惡いと云ふやうな忠告は、小學生少くとも中學生、大負けに負けて、高等學校の生徒迄位に對してのみ、與へられるべきものだ。もう三十にも近く、創作でもしようと云ふ人間に、友達の善惡などが問題になるものかと思つた。

みんな、自分自身の問題ではないか。自分の生活の心臓に、指し向けられた非難を、正當に受け入れる勇氣がなくて、それを誰も報もない遊び友達に、指し向けやうとする河野の男らしくない弱者の態度を、雄吉は賤しまずには居られなかつた。こんな事は、自分自身の腹の中で、グツと堪へて居ることではなからうか、それを自分一人では辛抱が、しきれなくて、遊び友達を非難の渦中に、捲き込んで、彼等に縋り付くことに依つて、細木などの忠告から受くる淋びしさや苦悶を、免れやうとして居るらしい河野の弱さを、雄吉は賤しまずには居られなかつた。それと同時に、用でもなく、滿更知らない仲でもない今井などゝ、細木や藤田などの間柄を、傷けるやうな河野のやり方を、雄吉は心の中で可なり烈しく非難した。

細木などの苦言を受けて、全く悄氣て居た河野には同情した雄吉も、かうなつては少しの好意も殘つて居なかつた。彼のやり方を詰責する手紙を送つてやらう。その爲に、河野との友情が害はれても仕方がない。何うせ、こんな調子で、推移して行けば、早かれ遲かれ、おしまひには破れてしまふのだからと思つた。

が、雄吉がさうした手紙を書かうと思つて居た時であつた。雄吉は、河野から、こんなハガキを受け取つた。

××座の一行と川越に來て居る。今日一座の者と一緒に町廻りをした。ふと、振り返つて見ると、僕の乘つて居る車にも、河野秀一と云ふ旗が立つて居るのには駭いた。

と云ふ簡單な文句が、書いてあつた。雄吉は、之を見た時、「河野らしい反抗だな」と、思つた。「君達が、忠告すればするほど、ダラシなくしてやるのだ。田舍で役者と一緒に町廻りなどをすれば、君達は又鹿爪らしく非難する事だらうよ」と、云つたやうな河野の棄鉢的な反抗が、マザ〳〵と見え透いて居るやうに思はれた。雄吉は、河野の氣持が、こんなにこぢれてしまつて居る以上、詰問などをしても、甲斐がないことだと思つた。その儘に思ひ止まることにしてし

まつた。それに、河野は川越から歸ると、又直ぐ大阪の方へ遊びに行つて、其處から又「俺は大に遊んで居るよ」と、云ふやうなハガキをよこした。それで、大阪から歸る汽車の中で、風邪を引いたのにも拘はらず、帝劇の初日に可なりの發熱を感じながら、見に來て居たと云ふやうな噂を、其後誰からともなく、雄吉は聽いて居た。

「あの人は、あゝした賑やかな場所へ來ることが、何よりも好きらしいな。この頃は、自分の家などには、淋びしくて居たゝまれないらしいのだよ。この間の初日なども、河野君にとつては、別に顏出しをしなければならない譯はないのだが、それでも顏を出さずには居られないんだね」と、その男は附け足した。

* * * *

かうした心持で居たから、雄吉は雄吉達の友達である鳥井の結婚式があると云ふ日の午前に、河野から

「流行性感冒にかゝり、昨夜以來、發熱四十度、今日の鳥井の結婚式には、とても出られない。鳥井によろしく云つて與れ。」

と云ふ速達のハガキ――それも誰かの代筆らしいのを、受け取つた時、友人の急な重態に驚くのと同時に、心の底の何處かで、「いゝ氣味だ」と、云ふやうな氣がするのを、何うしても打ち消すことが出來なかつた。自分達の河野の生活に對する非難が、かうした偶然の出來事に依つて、代辯されたやうにさへ思つた。無論、河野の放恣な出鱈目な、無檢束な生活が、直接には發病の因を、成しては居なかつただらう。が、雄吉は若し河野が、一月ほど前に、細木や藤田などが與へた苦言を、幾らかでも聽いて、もつと愼ましい秩序のある生活をして居たならば、かうした危險な病勢などを、未然に防ぎ得ただらうと思はずには居られなかつた。

「あの忠告は、本當に時宜的忠告（タイムリイアドヴアイス）だつた。今度のことで、少しは思ひ知るがいゝ」と、雄吉は思つて居た。

二

お互の感情が、どんなに荒さんで居たとしても、それは、河野が壯健で跳ね廻つて居る時のことで、生命の危險さへ伴つて居る病氣になつては、見舞に行かないと云ふ譯には行かなかつた。

鳥井の結婚式が濟むと、雄吉は細木と連立つて、下谷の河野の家を尋ねた。

取次ぎに出て來た河野と同じやうに、人の好いお母さんの眞蒼な顏には、背負ひ切れぬ心配が、滿ちわたつて居た。二三日櫛を入れないらしい髮のほつれ毛が、一層この年とつた母親を、いたましく見せて居た。子供の危い生命を、全身で縋りついてゞも、取り止めやうとするやうな此の母親の姿を見ると、雄吉は悲哀と敬虔な尊敬とが、交じつて居るやうな心持で、いたく〳〵しく見詰めずには居られなかつた。

「ほんとうに、何うなる事かと心配して居ます。熱が昨日から、ちつとも下らないのでムいます。それに、秀一は常から心臟が、わるいのでムいますから、本當に何うなる事かと心配して居ます」

お母さんの低い聲は、低いながらに、小さく顫えて居るやうにさへ思はれた。

「何方樣も、玄關でお斷りして居るのですが、秀一に訊いて見ますから」

さう云つて奥には入つた、お母さんは座敷に寢て居る河野に訊いて居るらしかつた。

痰がからんだやうな河野の低い聲が、かすかに聞えた。再び、顏を出したお母さんは、

「お目にかゝりたいと申して居ります」さう云つて、雄吉たちを、病室へ案内して呉れた。

雄吉は、河野には、一月も逢つて居なかつた。が、健康であれば、少しも變つては居ない筈の河野が、殆ど別人のやうな、蒼ざめた顏をして、氷嚢を頭に載せたまゝ、死人のやうに床の上に横はつて居た。

「あゝ死相が現はれて居る」雄吉は、心の中でさう思つた。いつも、赤みがゝつて居る河野の顔には、あの臨終の人にありがちな黒い陰翳を持つた青みが、塗り付けたやうに、漲つて居た。唇は、紫色にかはつて居た。河野が、いつか「俺の眼は澄み切つて居るだらう」と自慢して居た眸丈が、明るい電燈の光のもとに、ます〱澄み切つて居るやうに思はれた。その顔は、河野の平生には、夢にも見られないやうな清浄さと、けだかさとを供へて居た。雄吉と細木との顔を、上目を使つて、チロリと見た河野は、

「ありがたう！」と、口の裡で微かに云つて、何か云ひ續けやうとしたが、咽喉へからんで居る痰の爲だらう、苦しさうにの咽喉元を、顫はしたまゝ、何も云はなかつた。

雄吉と細木も、病氣見舞と云つたやうな、ありふれた御座なりを、友達が瀕死の場合に云ふのは、如何にも空々しく見えるので、何も云はないで默つて居た。

が、常にない河野の神々しいと、云つてもいゝやうな顔を見て居ると、河野の過去一年の凡ての行爲が、今度の病氣に依つて、スツカリ浄化されたやうに思はれて、河野に對して懐いて居た感情のこぢれを、悉く忘れはてやうとして居た。十年に近い間、いろ〱さまざまな生活を、一緒にして來た友達に對する、純な感情がしみ〱と、蘇つて來るやうに思つた。

雄吉は、その晩自分の家へ歸る道で、この瀕死の友達のために、出來る丈の事をして、やらねばならないと思つた。

河野が、病氣になつたに就いて、一番困まつて居ることは、やつぱり金ではないかと思つた。新聞小説を書いて得た收入は、入るに從つて散じてしまつたやうだし、その小説を出版して得る印税は、前借までして使つて居たし、その

上、河野は最近になつてから、急に身の廻りの物を、整へ始めて、身分不想應ではないかと思はれるほど、立派な洋服と外套とを、新調して居たし、雄吉の考では、借金こそあれ、餘分の金は一文もないやうにさへ思はれた。殊に、河野が倒れて居る以上、月末には入る原稿料などは、一文も入つて來る筈はないのであつた。

雄吉は、友達同志で據金して、せめて百圓か二百圓かの纒つた金を、河野の爲に蒐めてやらうと思つた。が、實際その積で、蒐めかけて見ると、雄吉ほど氣乘りのしない友達を見出したり、友達の中に河野同樣惡性感冒にかゝる人が出來たりして、思つたほどで手輕に纒りさうもなかつた。

それで、到頭その方は思ひ切つて、先輩や友達仲間の傑作選集を出版して、その印稅を河野に贈ることにした。その方法は、誰にも大した迷惑をかけることなくして、纒つた金を作り得る簡易な方法であつた。自分の古い作品の中から、著作集にも入れてしまつたもゝの中から、選集のために、一篇を割くと云ふことは、作家に取つては、たゞ一寸した好意丈で、出來る事だつたから。

河野の病氣は、危篤と云ても、いゝ位な重態のまゝで、四五日の間持ち合つて居た。醫者は、弱い心臟を保護するため、あらゆる手段を盡くして居るらしかつた。

さうした危險な河野の重態を、憂慮しながらも、雄吉は細木と相談して、選集を出す計畫を進めて居た。この選集で得られる印稅が、河野に對する香奠になるのではあるまいかと思ふほど、河野の病狀は險惡であつた。

丁度、その頃であつた。

雄吉は、ある日突然吉岡の訪問を受けた。吉岡は河野とは可なり親しかつたが、雄吉とはまだ友達とは、云はれない位な知合であつた。お互に訪問したり、訪問せられたりする程の、親しい間柄ではなかつた。

従つて、雄吉は此場合、吉岡の訪問を、一寸意外に思はずには居られなかつた。
「いや！一寸失禮するよ。一寸君に相談する事があつてね」と、吉岡は出迎へた雄吉に　さう斷りながら、二階に通つた。
吉岡は、座に着くと、ロク／＼落着きもしない裡に、
「いや實は外から一寸、聽いたのだがね。河野君が、病氣のために金に困まつて居るらしいので、君たちが河野君のために、金を蒐めて居ると云ふやうな事を聽いたが、本當かね」と、やゝ性急だと思はれる位口早に訊いた。
雄吉は、吉岡が何のためにそんな事を、訊くのだか分らなかつたが、多分吉岡自身應分の金を出して呉れるのだらうと思つたので、
「蒐めやうと云ふ計畫もあつたが……」と、答へた。
吉岡は、一寸云ひ出しにくさうにして居たが、
「話が可なり突然になるのだが、實はS家でね、若し河野君が金に困まつて居るのなら、療養費は幾らでも出さうと云ふのだがね。實はそれで、先刻河野君の家へ行つて、それとなく樣子を覗たのだが、人事不省同樣で誰にも會はせられないと云ふから歸つて來たのだ。それで、君が一番適任者だと思つたから。相談に來たのだが、一體何うしたものだらう」と、吉岡は持前の、明快な口調で、早口に云つた。
雄吉は、吉岡の云ふことを、何氣なく聽いて居る中に、それが思ひがけなくも、可なり重大な問題であるのに、氣が付いて、緊張せずには居られなかつた。
雄吉は、河野の代理として、かうした惠與を、受くるべきか、斥くべきかの判斷をする、重大な責任を感じた。

表面丈から云へば、S家は河野の愛に背き去つた戀人の家ではあるにしろ、二年前に死んだ主人と河野とは、先づ師弟と云つてもよい間柄であつたのだから、S家で河野の急場を救ふと云ふことは、さう大して筋違ひのやうではなかつた。が、然し——問題はさう簡單でなかつた。

河野とS家とは、お互に義絶の通知をこそしないけれど、今では可なり烈しい確執を懐き合つて居る間柄だつた。河野はS未亡人の約束の破棄を恨んだやうな、それに報ゆるやうな意圖を藏して居る作品を、昨年以來幾つも發表して居た。

さうした不和な間柄でありながら、河野の大病を聞き知つて、金を出さうと云ふ。それは今迄の行きがゝりを悉く忘れて、河野が作品の中で、示した反抗的な復讐的な態度を、少しも意に介さないで、敵を愛すと云つたやうな、恩を以て怨に報ゆると云つたやうな、美しい醇な心の發露であるかも知れなかつた。が、然し——と雄吉は思つた。善意に解釋すれば、如何にも美しい事にも違ひないが、ホンの少しの邪推を、交へて考へると、それが全くアベコベに考へられないことはなかつた。今迄、自分に面向つて來た敵が、窮狀に落ちて居るのを、見濟まして、のつぴきならぬ救助を與へて、敵の今後の反抗をいや應なしに、封じてしまはふと云ふ、卑怯な邪しまな意圖が働いて居ると、考へ得られないことはなかつた。

雄吉は、無論S家の動機が、凡ての行きがゝりを捨てた純な厚意から、出て來て居るのだと信じたかつた。が、然しその動機は、善惡孰れにもせよ、あゝした確執を結んで居る間柄でありながら、相手が如何に大病で死にかゝつて居るにもせよ、如何に金に困まつて居るにもせよ、金を與らうかなどと云ふ申出は、それがどんなに至醇な動機からであらうとも、相手に對する可なり重大な侮辱を、意味しては居ないだらうか。お互に憎んで戰つて居る相手から、さうした申出

を示された時、少しでも慨氣のある男であつたら、オメ〳〵と受けるだらうか。若し、雄吉が河野であつたならば、さうした救助の手を、憤然として拂ひ除けるに、躊躇しないと思つた。拂ひ除けるばかりでなく、相手のさうした侮辱に對し、相當な復讐をさへ企圖するかも知れぬと思つた。

　吉岡は、雄吉が默つたまゝ考へて居るのを見ると、說明をするやうに語を次いだ。

「僕は、河野君にそれとなく話して見ようと思つたのだが、何にしろ人事不省に近いことだし、そんな話をして、激動（シヨツク）を與へては惡いと思つたから、默つて歸つて來たのだ。何なら、河野君に對しては、S家の名は云はなくもいゝのだ。ある特志家が、金を出すと云ふ名義でいゝのだが、何うだらう」と、吉岡は雄吉の返事を促した。

　雄吉は決心して云つた。

「僕は不贊成だね。S家の厚意は感謝するよ。そして、その心持も判らないことはないがね。が、然し兎に角、あゝした關係になつて居るのだらう。まあ、義絕と云つてもいゝだらう。若し、さうした救助を受けて置いて、もし人事不省で居る河野が恢復して、俺はS家の厚意なんか死んでも受けるのぢやなかつたと云つたら、取り返しの付かないことになると思ふのだ。又、河野としては、當然さうなければならないと、僕は信ずるのだ。從つて、彼奴が生きて居る裡は、さうした金はお斷りしたいと思ふね。然し、死ねば別だよ。あゝ云ふ重態だから死ぬかも知れぬと思ふが、死んだ時香奠として下さるのなら、僕は河野の代りに、欣んで受けやうと思ふのだ。死ねば、あゝ云ふ行きがゝりも消えてしまふ事だし、あのお母さんをよくして上げるのには、少しでも金が澤山あつた方がいゝと思ふから……」と、雄吉は實際河野の死んだ場合を豫想しながら云つた。

「が、然し生きて居る中は、お斷りしたいね。河野が貰ふと云つても、僕は忠告して止めさせたい位だ。まして、僕が、

人事不省で居る河野の代りに、貰つてもいゝとは、何うしても云はれないね」と、雄吉は可なり眞劍になつて云つた。そして、瀕死の親友のために、立派に正當に、代理を務めてやつて居るのだと云ふ感激をさへ、感じて居たのだつた。

「それに、萬策が盡きてしまつて、金の出所が少しもないと云ふのなら、兎も角だが、河野が金に困まつて居るだらうと云ふ事も、僕達の老婆心から出た推測で、河野が自分で金に困ると云つた譯ぢやないんだ。もし又困まつて居たにした所が、友人もあることだし、親類もある事だし、S家の世話などになる前には、僕達で出來る丈の事をしてやるのが、當然ではないかと思つて居るのだが」と、雄吉は云ひつゞけた。

吉岡は、雄吉の謝絶を、あまり感情を害さないで、割合平靜に聽いて居たが、

「あゝさうか、いやよく判つたよ。僕も最初から何うかと思つて居たのだが」と、穩やかに受け入れた。

雄吉は、此事を病床に居る河野に、聽かせたら、きつと憤慨するに違ない、此方の弱身に付け込んで、侮辱的恩惠を施さうとするのだと云つて、S家の態度を憤慨するに違ないと思つた。そして、雄吉が河野の代りに、敢然として、此の申出を謝絶したことを、必ず感謝するに違ないと思つて居た。

「それで、君達で金を蒐めやうとして居るのかい」と、吉岡は暫くしてから、訊いた。

「いや、金を蒐めやうと思つて居たのだが、金だと十圓にしろ廿圓にしろ、一寸苦痛を感ずる人もあるだらうから、僕達の仲間の傑作選集と云つたやうなものを、出さうと思つて居るのだ。それなら、誰にも迷惑をかけないで、濟む事だから」

「そりや名案だね」と、吉岡は可なり感心したやうに云つた。「金なんか貰つたり、やつたりして居ると、後々喧嘩なんかをした時に、お互に不快だからね。選集はいゝよ、それに君達のものなら、引き受ける本屋があるだらう」と、續け

た。

雄吉は、吉岡が不用意の裡に犯して居る自家撞着に、氣が付かずには居られなかつた。それと同時に、それに依つて自分の取つた態度を、更に肯定されたやうに思つた。吉岡は、將來萬一起るかも知れない不和の場合を恐れて、友人間の金の惠贈を、避けたらいゝと云ふのだ。所が、河野とS家との不和は、ホンの僅かな可能性をしか、持つて居ない將來の事ではなくして、嚴として眼前に横はつて居る事實なのだ。將來の萬一の不和を怖れて、金の惠贈を避けると云ふのなら、その何百倍何千倍の强さを以て、現在の不和のために、金の惠贈を避けるべき筈ではないかと思つた。憎んで居る相手から、金を受けると云ふことは、恩惠や厚意を受くることでなくして、一つの侮辱を受くることではないかと、雄吉は思つた。

吉岡も本心では、此の申出の不合理に、氣が付いて居るのだが、S家に對する義理の爲に、仕方なく行動して居るのだと思つた。

さう思ふと雄吉は、瀕死の友人のために、萬人が認めて正當とする處置を、取つたのだと云ふ確信と、それから來る滿足とを持たずには居られなかつた。

* * *

その中に、河野はだん〳〵恢復して行つた。最初恐れられて居た心臟の弱さも、杞憂であつたことが判つた。豫後は、隨分長くかゝつた。それでも、發病してから、三月目の初には、もう常人と變化しないほどの健康に、近づきかゝつて居た。

その間雄吉は、吉岡から聽いた話を、河野に傳へなかつた。河野に云へば、きつと不愉快を感ずるだらう、病氣のた

めに可なり氣を倦らせて居る時に、話してはならない、病床にある間は默つて居ようと思つて居た。が、兎に角、河野の代理にやつたことだから、一應は河野に話して、その事後承諾を得なければならぬと思つて居た。同時に、河野からの感謝を得たいと言ふ心持もあつた。

ある晩、河野は珍らしく雄吉の家を尋ねて來た。もう夏の初であるのに、まだ外套を着て居た。

「夜外出して見たのは、今日が初てなのだ。もう大抵大丈夫だと思つたから、試驗的に君の家まで來て見たのだ」と云つた。

もう全くの健康帽だつた。少し位いやなことを聽いても、ビクともしないやうな感情と身體とを、取り返して居るやうに思はれた。雄吉はもう話してもいゝと思つた。

世間話が一寸途切れた時に、雄吉は心持言葉を改めながら、

「君、今だから話すがね。君が人事不省だつた二月の廿日頃の事さ。吉岡が僕の家へ突然やつて來てね。何の用事だらうと思ふとね、S家で君が金に困まつて居るやうなら、いくらでも出さうと云ふのだ――」から云ひながら、雄吉は河野の顏を見た。河野は、顏を赤くしながら、可なり緊張した顏付で、雄吉の顏をぢつと見詰めて居た。

「無論、僕は斷つたよ。君の代りに敢然として斷つたよ。僕は、可なり君を侮辱して居ることだと思ふのだ。下品な言葉で云へば、金で面をはると、云つたやうなやり方ぢやないかね。さう此方で思はれないこともないからね……」と、雄吉は河野の憤慨を唆るやうに、自分自身興奮してしまつた。

「僕は、少し怪しからないことだと思つたんだ。よくもそんな事を云つて來られると思つたんだ。今更、そんことを、云つて來られる義理ぢやないんだらう」と、云ひながら雄吉は、河野がきつと、烈しい憤慨を洩すだらうと待つて居た。

が、河野は雄吉の豫期とは、全く違つて居た。彼は、顔を一層赤くしながら、俯き加減に、ちつと疊の上を、見詰めて居たやうだつたが、その眸は濕んで居るやうにさへ、雄吉には思はれた。暫くすると、やつと　を擧げたかと思ふと、

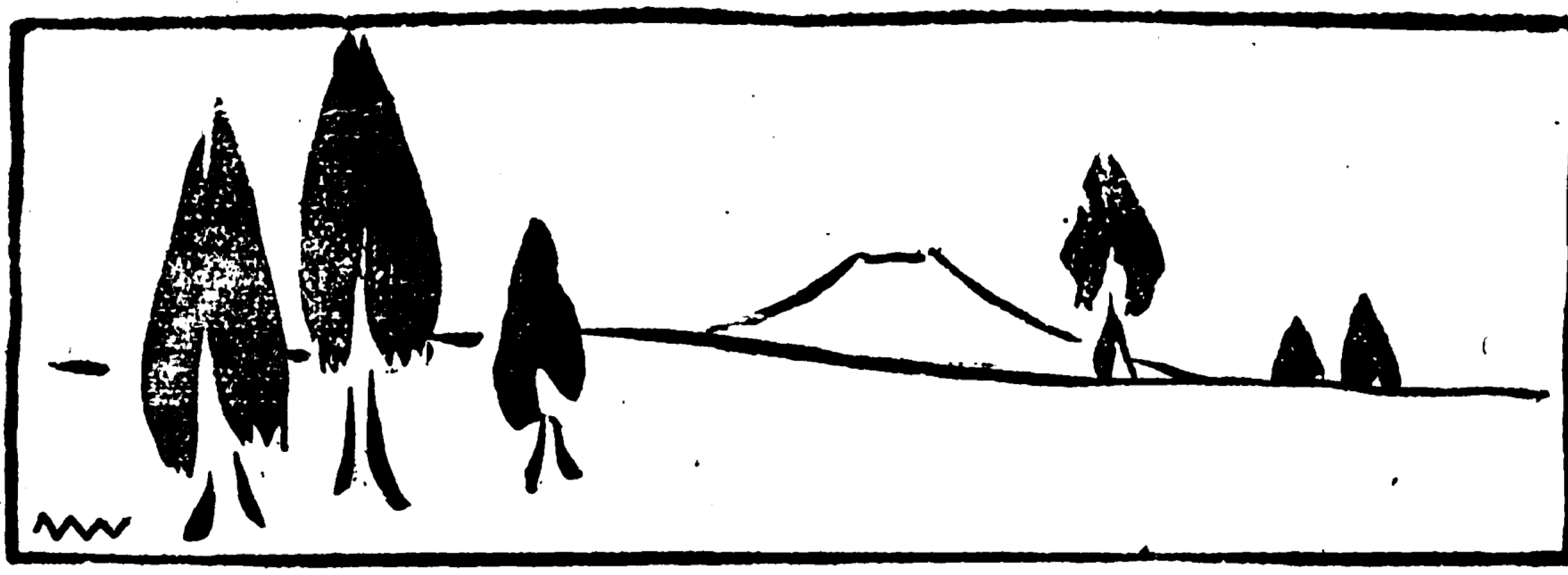
「君はさう憤慨するけれども、先方はさう惡意でやつた事ぢやないよ」と、云つた。逆に、自分自身の弱さを耻ぢるやうであつた。が、その顔には、ある感激をさへ認めた。

雄吉は、自分が壁だと思つて突き當つて行つたものが、ヘナ〳〵と崩れてしまつたやうな拍子拔けを感じて、暫くは茫然として河野の顔を、見詰めて居た。そして心の裡では急に方角を見失つた男のやうに、ボンヤリとしてしまつた。

雄吉が、若し河野であつたならば、どんなに憤慨したかも知れないやうな侮辱を、河野は憤慨どころか、ある感激を以て、受け入れて居る。河野自身が「怪しからない事だ」と云つて、憤慨するところを、第三者の雄吉が、マア〳〵と云つて和めるべき筈のものが、丸切りその反對になつて居る。雄吉から考へれば、可なり重大な侮辱だと思ふことを、河野はさうは思はない。相手の行爲に潛んで居るかも知れない惡意などは、全く無視してしまつて、善意だけを出來る丈汲まうとする。あれほどＳ家に對して恨みを懷いて居るやうな事を云ひながら一寸Ｓ家から好意――それも、あゝした關係に於ては侮辱と思はれる――を示されると、平生の意地も恨みも忘れて、先方の好意丈を感ずる。何と云ふ意氣地なしだらうと思つた。何と云ふ弱さだらうと思つた。が、雄吉は之迄の河野の弱さは、大抵輕蔑したり、冷笑したりして來た。が、弱さがかうまで、徹底して人間ばなれのした、人間の普通の感情では、律せられない所まで、行つて居ると、頭から輕蔑することは出來なかつた。河野の徹底した弱さ、人から踩み躙られながらもまだ踩みにじる足の中から、何かの好意を、見出さうと云ふやうな心持は、弱さが徹底して無邊際の愛と云ふ所まで、行つて居るのではないか

と思つた。從つて、河野は人間として雄吉のやうな、普通の感情や道德で、行動して居るものもよりは、數段かけはなれた高い所に居るのではないかとさへ思つた。さう思ふと、雄吉は自分の感情で、河野の弱きを、メチヤクチヤに冷笑して居た自分が、不安にならずには居られなかつた。それと同時に、河野の際限のない弱さに對して、尊敬に似たある心持を、懐かずには居られなかつた。

雄吉は、豫期した通に、河野から承認や感謝を、得られなかつたことに、輕い失望を感じながらも、自分の前に、ぢつと俯向いて居る河野の顔を――十年近くも見馴れて居る顔を、別人を見るやうな目新しい心持で、暫くは見詰めて居た。そした心の裡で、「神の如き弱さ（ディヴァイン　ウヰクネス）」と云ふ言葉、を何時の間にか思ひ浮べて居た。



雪の夜話

里見弴

道は針葉樹の密林にはいつた。息をとつて行かれさうだつた風は、そこで急に凪ぎでもしたやうに遮ぎられたが、雪はまだ落ちて來た。低くも三丈以上の木々が、ガツシりと枝を組み、葉を重ねて、舊い農家の廣々ととつた土間に立つて眞黒に煤けた屋根裏でも仰いだやうに、厚ぼつたく天をかくして、そこでは雪さへも暗い腹を見せてゐた。それでゐて、どこからともなく粉雪がハラ〱と落ち續けた。吹き晒しとは比べものにならないほど薄くはあつたが、大地ももとより雪に覆はれてゐた。でも、喬木の根かたなどには、少しばかり黒い土の色に隈どられてゐるところもあつて、どうかすると、存外生々とした草が顔を出したりしてゐた。この林間の薄暗い道が、山の腹をダラ〱登りに可なり長いこと續いた。

ふと、どこか下の方で水の音が聞えだした。で、旅人は、Hと云ふ炭燒の村に近づいたことを知つた。朝の七時からその時刻まで、(その時刻と云ふのは午近く、――或はもう少し廻つてゐるかも知れない、兎に角、彼の腹はさう知らせてゐる)雪のなかを、怠屈に、ズボリ〱こいで來た彼は、思はずほツと一息ついた。

旅人は、兵隊の外套、——カアキイ色にならない前の黒いやつを着てゐる。釦は黒いのと取り變へてあるが、袖には赤い筋が卷かれたまゝになつてゐる。外套の下に、小さな風呂敷包でも帶の上から背負つてゐるとみえて、尻のところがプクリとふくらんでゐるし、前の衣嚢にも何か入れてあるかして、下廣がりに、格構の惡い空瓶に足が生えて歩きだしたやうだ。外套についてゐる頭巾を劍先鰑の形に突立てゝ、顏と云つては、寒さに赤くなつた鼻の先がちつとばかり覗いてゐるだけだ。足のかためは云ふまでもなく雪沓だが、林にはいつてからつぼめて、杖についてゐる洋傘が白張で、ところ〳〵に赤い汚點のやうなものが見える。尤も白張と云ふのは出來た當時のことで、古びて鼠色になつてはゐるが……。

旅人は足をとめて、その不思議な洋傘を前に、甲の方がシャコ〳〵な玉羅紗で腹に茶革を縫ひ合せた時代ものの手袋の兩手を、グタリと柄に重ねて、白く長く息を吐いた。莫大小の襟卷に息が玉になつてゐて、惡あつたかく頬をクシャ〳〵刺す。手袋のまま額を一つブルンと撫で廻して、序に、ほつそりと瘦せ尖つた顋を襟卷のそとに出した。汗ばむだ咽に冷たい大氣が快い。鼻の奥が、あんまり早く氷水をかつこんだ時のやうにツウンと痛んで、何か眉間へぬけさうな氣がする。ただ膝から下には、殆ど感覺がない。……風が林の上を渡つてゆくとみえて、時々木々がギユツ〳〵と軋むで鳴る。どこか見えない下の方で激流が岩に噎んでゐる。——寂かだ。

旅人はまた歩きだした。ただ何がなし怠屈な道だつた。永久に右左の足を前に動かし續ける動物でもあるかのやうに、彼はなんにも思はずに歩いて行つた。……雪の重みで可なり太い枝が折れてゐるところがあつた。新しい雪が堆く行く手の道を塞いでゐる。葉末を雪に抑えられた枝は、裂けた口に蒼白い地肌を露はして、まだ充分跳ねあがる力をこめたまま、チツと靜まつてゐた。旅人は、その姿勢に一寸心を惹れた。雪を押し退けてやらうかとさへ思つたが、餘

り彫しいので、よして、その上を踏み越えて進んだ……。

やがて林を出はづれた。雪はまだ盛に降つてゐたが、山懷にはいつたせいか、風は死んだやうに落ちてゐた。旅人は洋傘を擴げた。赤く筆太に、越中富山千金丹本家何の某と現はした文字が、見る〳〵雪に覆はれて行つた。重くなるとつぼめたり擴げたり、パタ〳〵二三度あほつて、また越中富山千金丹本家何の某になる。黒い格構の悪い空瓶が、鼠色の傘をさして、そこに赤い文字を現はしたり消したりしながら、モグ〳〵と膝きりの雪をこいで行く。あとはただひと色に白い。

ほのぼのと、一筋、灰色の煙が山の腹を匍ひ騰つて行く。……やがて家が見えた。旅人の舊い記憶では、そこらに五六軒家がかたまつてゐたやうだが、見れば、ポツリと一軒家になつてゐる。だが、間違なくあの學校だ。學校のほかに硝子窓を持つてゐる家があらう筈はない……。

下りになつて、一度その家が見えなくなつた。捗らない道が急にもどかしく思はれだして、旅人は幾度か仰いで煙を見た。急な坂を登りきると、先刻見えてゐたのとはまるで反對の側面へヒョッコリと立つてゐた。

板敷を跳び廻る足音。嘻々と云ふ子供の叫聲がそとまで洩れて來た。その上、子供の顔が五つ六つ好奇らしく硝子窓に押しつけられてゐるのにも氣はついてゐたが、旅人は冷かに見向ふともしなかつた。それは然し、その朝Cの木賃宿を出てから、最初に見る人間の顔ではあつたのだが……。

バラック建の平べつたい長方形の家、その長い側面の中央に戸口があつた。旅人は眞直にそこへ行つて觀音開きの扉を、つぼめた洋傘の柄でコツ〳〵と叩いた。

「誰だ。……コラ〳〵、お前たちちつと靜にしてくれ。なんにも聞えやせん。……オイ。誰だね。あいてるぞ」

子供達は一時に鳴りを靜めた。聲は、正しく旅人が尋ねて來た男のそれだつた。無言で、彼は、白い陶器の取手を廻した。同時に扉が内から引かれて、毛だらけな、アイヌのやうな男とあぶなく鉢合せをしさうになつた。

「誰だ」

ボウ〳〵とした髪と髯のなかに、鋭く眼を睜つて、光を背負つて立つた旅人の頭巾の奧を覗き込んだ。

旅人は白張の洋傘を相手の鼻の先へ突出した。

「やあ、千金丹か。……はいれ〳〵」

はいつた所が一間四方の土間になつてゐた。そこから同じ幅で奧の突當りまでが、土間とは五寸ほどしか上つてゐない板敷で、兩側の羽目には、生徒達が着て來た簑だの、どんつく布子だの、古外套だの、饅頭笠だのが懸け連ねてある。そのとツつきから右へは、一間の出還入り口で、同じ高さの床の、教場で同時に遊戯場。もとより單級教授のことだから十坪ほどのその板敷が一間きりだ。左手は障子じきりで、床もかれこれ普通の家の高さにした住居に續く。髯男は、云ふまでもなく、そこの主人で、校長で、兼てたつた一人の教師でもある。

その薄暗い簑笠の置場に、方三尺ほどの箱火鉢が据えてあつて、炭火がヘラ〳〵と青い舌を吐いてゐる。校長は、教場の出還入り口の硝子戸をたてて、少しでもそつちの喧騷に遠ざかりながら、且また硝子を透して生徒達の惡戯を監視しながら、その箱火鉢の前に倚子を一脚寄せて、設火で、うつとりとものを思つてゐたところだつた。

「フム、來たか。まあ上つてくれ。……しかしどうして……」

校長は、土間にあつた生徒の雪沓を突掛けて踏出してゐた片足を引いて、住居へ上る障子に手を掛けたが、「イヤ矢つ張りここがいい。ちつと騷々しいが、俺の部屋には晝間は火の氣がないから……。こんなところでは、火が何よりの御馳

走だ」

さう云ひながら教場へはいつて行つて、教壇からコオルテン張りの倚子を持つて引き返して來た。

「オイ〳〵、お前たちちつと靜かに遊んでくれんか。先生のところはお客さんだ。コラ〳〵、何故そんなところから覗いたりする。あつちへ行つて遊びなさい」

と、隔の硝子戶をたてきつて、火鉢を差狹んで倚子を向ひ合せに置いたが、

「しかしどうして……？」

「ぢア、矢ツ張り死んだんだな？」

旅人は土間に突立つたまま、表情のない、まるで寢とぼけたやうな聲で云つた。

「死んだ。……が、どうして……？」

「夢を見た。それで來た」

「フム、夢を……？さうか。まア、しかし上つてくれ」

「いや、さうはしてゐられない。で、屍骸は……？死んだのは先一昨日の晚だらう？」

「昨日と、……さう、一昨日の午前の三時だつたさうだ」

「フム、さうか。……汽車なら昨夜のうちにAに着けたんだが、——俺は丁度Fにゐたんだ。——例によつて金がない。でも、どうやらかうやらYまでの切符は買へた。あすこから、昨日の午からおつとほしに雪のなかを步いて來た。步けば、四五里のまわりで、ここへ寄つて容子も聞かれるし、と思つてな」

「でも、わざ〳〵よく出かけて來てあげた」

「なアに、年が年中渡り鳥だ。どこにゐたつても同じことさ。こゝへ来て『なに、夢を見た？ くだらないことを云ふな。達者でゐるよ』と噬はれゝばつて、別に無駄足をしたとは思はない。無駄を云やア、どこにゐたつて無駄なんだ。わざ〳〵と云はれちア恐縮する」

「然し、……さうか、夢を見たか……」

「で、屍骸は、まだそのまゝか」

「誰がそのまゝで置くものか。昨日の朝Aの頓兵衛と一緒に行つて、頂いて來た」

「いや、それアさうだらうが、そのさきの話だ。埋めるとか、焼くとか、始末をして了つたかと訊くんだ」

「あ、それはまだだ。今夜頓兵衛が火葬場へ持つて行く手筈になつてゐる。さうだ。これから大急ぎで山をおりれば、夕方には大丈夫A市へはいれる。まア死顔でも見てやれ。夢に現はれるほどだ、死ぬ間ぎはまでお前のことを思ひ続けてゐたんだ」

一人は土間に、一人は箱火鉢のそばにモツソリと突立つたまゝ、暫く言葉がなかつた。

「ぢアすぐに出かけやう」

と旅人はもう戸口の方へ動きかけた。

「まア待て。行くと云つたつて、頓兵衛のうちを知るまい」

「あ、あの老人は、もう子羊を飼つてゐるんぢアないのか」

「頓兵衛の牧師が聞いて呆れる。もう四五年前からAに出て、小羊の代りに狼を飼つてる。……木賃宿の亭主だ」

「フム、箱船屋のたぐひなら、俺も轉げ込むがな」

「そんな殊勝なんぢアない。ひとかど慾張つた亭主になりすましてゐる。……フム、然しお前がそれを知らないとすれば、俺たちはもう五年以上も遇はなかつたわけだなア。……さうか、夢のしっせがあつたか。フム、然しまアよかつた。……久し振りで大に談じたいが、折角この雪のなかを出て來て、死顏にもしろ、遇へないぢアつまらない。急いで山をおりたがいゝ。然し歸りには、必ず、ゆつくりよつてくれ。久し振りで夜もすがら飮まうぢアないか」

「まア兎に角行つて來よう。……頓兵衞の木賃宿はなんと云ふところだ」

「A市、鷹匠町百七十三、當り屋。一寸分りにくいぞ」

「なに、露次ぬけ裏の勝手ならお手のものだ。ぢアいづれ、また逢はふ」

「ま、待て。晝食はどうした。まだだらう。食つて行けよ」

「用意はあるが」とふくらんだ尻を撫でゝ、「ぢア湯を貰つてかつこまして貰ふか。實は大分北山だ」

「丁度いゝ、昨日市に出た序に買つて來た鹽鮭がある。……まア、兎に角こゝへ上つて、あつたまつたらよからう」

校長は赭顏を人のいゝ微笑に皺めて、いそ〳〵と住居の方へはいつて行つた。旅人は雪沓をぬいで上ると、外套の下から風呂敷包をぬき出しながら、一つの倚子に腰をおろして、大きな箱火鉢の緣へ兩足をかけた。幾度も水をくゞつたらしい縹色木綿の腿引に、脚袢、足袋、――その足袋からは、すぐにホヤ〳〵と湯氣があがつた。手袋はぬいで兩手を火にかざしたが、不精か、まだ外套の頭巾ははねずにゐた。

そこに、下男の老爺さんにも手傳はせて、校長は、鮭の切身や、金網や、德利を藥罐につけたのや、茶道具やらを運んで來た。

「まア、一杯やつてつてくれ」

さう云ひながら、倚子にかけて、湯呑を差した。「なんだな、まア、頭巾をとれよ」

無言で、片手で湯呑に酒を注がせながら、片手で頭巾をはねた。色の淺黑い、キリツと肉のしまつたいゝ男だつた。年は髯男と同年輩の、四十二三にもなるらしいが、美貌のせいで、一寸見には五つ六つも若く見える。……けれども、左の生えぎはから眉と眼尻を掠めて、斜に耳の下へ、帶を引いたやうなひツつれで、そつちの半面は見るもいやらしい相好になつてゐた。

二人は顏を見合せた。校長はすぐ目を潤まして、感慨に堪へぬらしく、自分にも湯呑を取つて、手酌で、あほつた。千金丹と呼ばれた旅人は、冷かに、と云ふよりも馬鹿のやうに無感情に、これも咽を鳴らして一息に飲ほした。

「ハツハヽヽハア」と校長が意味もなく高笑をして、「大分飲むな、近頃は……」

「飲めれば飲む。が、そんな結構の時はめつたにない。……もう一杯貰はふか」

「おつと、注がう」

下男の老爺は二人の足の間に顏を突込んで、鮭を燒いてゐた。立續けに四五杯やると、「千金丹」は、膝の上で風呂敷包をといて、なかゝら竹皮包の握飯を出して、默つてムシヤ／＼食ひ始めた。

「ハヽまるで石を嚙んでるやうだ」

「相憎だつた、なア金造」と校長は下男に向つて、「もうちよつと早かつたならなア。丁度二人して平げて了つたところでな。時間さへ構はなけれりやア、なにすぐ焚かせるんだが、目の暮までに市へ着かなきアなんにもならないしなア……」

さう云ふ心づかひも通じるのか通じないのか、「千金丹」は、相手には目もくれずに、無言で、たゞ貪り食つた。[illegible]

も、手づかみで、三口か四口に食つて了つた。校長は、それでも嬉しさうに、ダビ〳〵と殘つた酒をやりながら、旅人の顏を見守つてゐた……。

茶を三杯飲んで、湯呑を置くと、唇をモグ〳〵やりながら、すぐもう「千金丹」は立ちかゝつた。

「ヤア、お世話さん」

云ふと思ふと、藁沓のなかへ足を入れてゐた。

「ぢア、時間があることだから、今日は止めないが、明日は是非來てくれ。待つてるぞ、いゝな。きつとよつてくれな。明日は、學校の方は休みにして待つてるぜ。……長居は無用だ……。云ふまでもないが市からはさつさと消えろよ」

「まア然し、分らない。あれが死ねば、俺ももう自分の體だ。久し振りで自分の體になれるんだ。どう云ふことになるか、さきのことは分らない」

「千金丹」は、その時初めて生々とした聲でものを云つた。そして一寸の間、美しい眼を輝かして、

「さうかい、死んだかい」

と、さも嬉しさうに獨語ちたが、すぐまた退屈しきつたやうな鈍い眼の色に返つて、

「だが、俺の顏を見ないぢア、あれも成佛しにくからう」

「惚話るな、と云ひたいところだが、それに違ひない。早く行つてやれ。……まあ然し、歸りには成可くよつてくれな。今後のことも相談に乗らうぢアないか」

「ぢア、いづれまた。……えゝと、鷹匠町……？」

「百七十三」

「當り屋だね。……さよなら」

「さよなら」

校長は急いで教室へはいつて行くと、冷たい硝子窓に額をあてた。

越中富山千金丹本家何の某をかたげて、旅人はもう坂をおりかけてゐた。

* *

牧夫が牧草を逐ふて轉じて行くやうに、炭燒は樹木を逐うて山の奥へ奥へと進んで行く。以前に炭燒小屋の中心に建られた校舍も、いつか麓近くに取り殘されてゐた。遠いのは、二里三里の山奥から、子供たちを通はせてよこした。去年の冬、生徒の一人が、學校の退けに、雪に埋もれて死んでから、校長は雪の深い時分には、道のりの遠い、或は年のいかない子供たちだけを、廣くもない己の住居に預ることにしてゐた。今も、さう云ふ預かられてゐる子供たちが六人あつた。彼等は 毎晩「先生」にお話を聞かして貰ふのを常としてゐた。

思ひがけなく「千金丹」が尋ねて來た晩、校長は、三合のおしきせを、下男の金造にせびつて二合ふやして貰つた。その最後の德利を前にして、彼はまた、子供たちにお話をねだられなければならなかつた。

「困つた。今夜だけ勘忍してくれ。先生は今夜は少し醉つた。それに……」

正面だけから云つて、毛の面積の、僅かに二分の一よりは大きくない顏の部分を眞赤にして、校長は、安座の膝の上へ肘で凭せかけてゐる上半身を、グラ〳〵と前後に搖り動かしながら云つた。

「それに……。まア、今晩だけは勘忍してくれ」

然し子供たちは聽かなかつた。校長は殘り少くなつた酒を、大事さうに盃に注ぎながら、――頻りに脣を甜めづり廻しながら、さて話しだした。

「ぢア、今夜は一つ珍らしい話をしてやらう。今まで、先生が、だアれにも話して聞かせたことのない、とつときのおだ。まア、みんなよく、大人しくして聞くんだぞ。えゝと、昔々、昔な、或る國に、えらい先生があつた。その方は、なんにも惡い方ぢアないんだが、その國の王樣には憎まれてゐた。何故かと云ふと、……何故かと云ふと、おゝ、さうだ〳〵、切支丹伴天連と云ふのを知つてるだらう。その時分には、あれが、國をつぶして了ふやうな、大層惡い教えだと思はれてゐたんだ。それで、その方が、切支丹の先生だもんだから、王樣に憎まれたのだ。大勢の御弟子もあつたが、そのうちの重だつたものが三十何人、それに先生はもとよりだが、みんな王樣の御家來にとつつかまつて、チヨン〳〵チヨン〳〵首をチヨン切られて了つた。な？ なにも笑ふことはない、お氣の毒だらう？ えらい先生なんだ。ところが、まだ、あとの御弟子たちも、そのまゝには捨て居かれないといふので、中々御詮議が嚴しい。その嚴しい御詮議のなかを、えゝと、なんだ、さうだ、藥賣りにばけてな、――姿を變へてな、諸々方々と伴天連の法を擴めて歩いてゐる強い、死ぬことをちつとも恐がらない御弟子が一人あつた。王樣の御家來がその若者に目をつけて、あつちこつちと追ひかけ廻すのだ。そいつもはしこい奴だつたが、段々追ひつめられて來たんだ。すると、そいつには、年上の…いや、さうぢアなかつた。……あゝ、さうだつた、一人の姉さんがあつたんだ。その姉さんがまたえらい女で、その男の、……つまり弟のだな、弟の持つてゐた伴天連の本をすつかり自分の家に預つてやつた。それを持つてゐさへしなければ、別におとがめもないわけなんだ。そんなら、早く燒くなり、海の底へ沈めるなりしたらよささうなものだが、そ

こはそれ、大切な伴天連の御本だから、勿體なくつて、そんなことは出來ない。と云つて、持つてゐれば、命にかゝはる。若い御弟子は決して命なんぞ惜がつてゐるやうな男ぢアない。けれども、弟思ひの姉さんの方でもまた承知しない。私がお前の身代りになつて死ぬから、お前はもつと生きながらへて、伴天連の法を擴めておくれ、そして、亡られた先生の思ひを晴してあげなければいけないぢアないか、伴天連の法のためにも、また何んの罪も報ゐもないのに首をチョン切られた先生始め三十何人の兄弟子たちの仇うちのためにも、お前が今王樣の御家來につかまへられるやうなことがあつてはならない。乞食になつても生きながらへて、伴天連のためにつくすのだよ。さう云つてね、隱して持つてゐた燒鏝でもつて、いきなりベタリと弟の顏を撫でたんだ。

弟思ひの姉さんが、何故またそんな亂暴なことをしたかと云ふと、その火傷のあとがひッつれになれば、顏かたちがまるで變つて了ふだらう。さうでもしなけれア、とても弟が逃げのびられないほど近くまで、その時にはもう追手がかかつてゐたんだ。ね？　それほどにされたから、弟も卑怯のやうだが、姉さんの言葉どほりに一時姿をかくしたんだ。王樣の御家來が姉さんのうちを檢べると、伴天連の本はあるし、自分でも立派に伴天連の信者だと云ふんだからたまらない。すぐつかまつて牢へぶち込まれて了つた。

どうだ、面白いか。さうか、まア、待て〳〵。……金造、もう一本！」

いろ〳〵云つて制めてみたが、聽かないので、下男はもう一本盛りを惡くして持つて來た。見ると、校長はギョロリと目を据えて、默つて一つところを見詰めてゐる。子供たちさへ心配さうに、ヂッとその容子を見てゐた。

「先生樣、あんた醉ひなすつたな。あゝ、もういかねえ〳〵。お話も、あとはまた明日の晩のこつちや。もう寢なさろ。醉つたら駄目ぢや。有繫の先生樣だが、醉つたらはア、一文の値打もねえ。だから、金造の云ふことをきかねえぢア默

目だと云ふんぢや……」

「なアに、これしきの酒に醉つてたまるかい。まア、金造、お前もそこに坐つて聞け。……いゝか。年上の……姉さんは牢獄にぶちこまれたが……」

「先生駄目ぢや。年上の姉さんだなんて、姉さんに年下なのがあるかね。そんなこと云つたら、生徒にだつて馬鹿にされるわ。もうよしにしなされ。駄目ぢや／＼」

「うるさい！　默つて聞いてろ！

姉さんは牢にぶち込まれたが、罪が輕いといふので、終身……殺されない代り、一生涯牢から出されないと云ふ囚人だ。その位なら、一思ひに殺された方がまだましなくらゐだ。藥賣りにばけてゐた若者の身にしては尙更だ。惡くチヤパタすれば、折角の女の……姉さんの志を無にすることになる。そのうちに伴天連の信者は片ッ端から御召取りになる。手も足も出せない。さうかつて今更自首して出たところで仕樣はなし、表向に、世間に面の出せる身ではなし、つまりまあ、それだけ大恩のある姉だが、姉さんの死ぬのを待つて、それから一かばちか、捨身になつて伴天連の敎えを吹鳴り立てゝ、潔く殺されやう、と云ふやうな了見で、乞食同樣の暮しをして、姉さんの死ぬのを待つてゐたんだ。ところがまた、元來丈夫な人でもなかつたのに、この姉さんが中々死なない。十七年と云ふもの、その若者は、こゝに五日、あすこに十日、今日こゝにゐるかと思へは、明日はもうどこかへ行つて了ふと云ふやうな、宿なしになつて歩き廻つてゐた。そんなに顔かたちまで變つても、まだ中々油斷はならないのだ。王樣の御家來は、執念深く伴天連の御弟子たちの行方を尋ねて、ちつとでも御詮議の手をゆるめたわけぢやないのだから、一つところに長居をするわけにはいかない。それでも、姉さんのことは始終氣にかゝつてゐるかして、姉さんのはいつてゐる牢獄のある御城下から、さう遠く

へは行かない。

そこで、丁度十七年目に、たうとう姉さんが死んだ。どうだ、人が死ぬと云ふことは悲しいことだらう？ それもはたで見てゐてさへ羨しいほど仲のよかつた姉弟でおまけに、自分の身代りに牢獄へ行つて、十七年もいろ〳〵悲しい思ひをした揚句に死んだのだ、弟の身としたら、こんな悲しいことはないだらう。それを、その日の來るのを、弟は今日か明日かと待つてゐなければならないはめになつてゐたんだ。……弟は姉さんの死んだ夢をみて、せめて死顔にでも遇ふと思つて、雪の降るなかを、――今夜のやうに、あんなに……」

と、脊男は口を噤んで、ヂツと耳をすました。シン〳〵と降りつむ雪の氣勢は、小屋がけ同様の校舍をめぐつて、細かな白い魔ものの群が、衆を恃んで、ひそめきながら八方から取り圍まうと押し寄せて來るかとばかり、靜かに、然し重くるしく立ちこめてゐた。

「……あんなに、あんなに雪の降りしきるなかを、弟は、牢死した、――牢獄で死んだ姉さんの屍骸を引き取つた或る男のうちへたどり着いた。さア、その時の弟の心持はどんなだと思ふ。十七年ぶりで遇ふ大好きな姉さんは、死んでゐる。汚い木賃宿みたいなうちの一間に、屍骸になつて寢てゐる。弟の心持はどんなだらう。その悲しい時を、あけくれ待つてゐて、さて目の前にそのことが起つて來た時の、その弟の心持はどんなだらう……」

モジャ〳〵な髮の毛のなかへ指を突込んで、校長は兩掌に額を支えた。涙がぽたり〳〵と、大きな圍爐裡の灰に落ちた。

「先生、それからその弟はどうしましただね」

と、生徒の一人が尋ねた。

「そんでおしまひだらうぢやアねえか」と金造が、「さア、もう九時を打つた。先生様も今夜は大分酔ひなすつたぢや。早う寝かしてあげずばならん。な？　お前さんたちも、八時半の規則に、もう半時の上も長起きしてるぢやから、きがあるとしてもまた明日の晩のことぢや。今夜はもうみんな寝ずばならんぜ」

「だつて、弟が……」

「弟も姉もあるものか。みんなこしらえ話ぢや」

「ねえ、弟はどうしただかねえ」

「もつと聞きたいなア」

子供たちは、そんなことを耳語き合つてゐたが、

「ねえ、先生、それから弟はどうしただかねえ、聞かしてくだされ」

と、また先刻の一人が云つた。

「弟か」

と校長は、涙に輝く眼をあげて、「弟はきつと、今に、何かどえらいことをするぞ」

「先生様、それア、何を云はつしやる……」金造は慌て、その口を抑えるやうな手つきをして云つた。

「……するとも。きつと何かするとも。死んだ人たちの霊だつて、きつと何かさせずにはおかない。……十七年、十七年と云へば永い間だが、まさか、あいつ、心までの乞食にはなりおるまいからなア……」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

●　●　●　●　●　●　●　●　●　●

雪はやんでゐた。が、鼠色の雲が、一面に空を包んでヂット靜り返つてゐた。微な風の吹き廻しで、粉のやうな雪が、キリ〳〵と渦を卷いては散つた。――A市からN縣へ通じる國道の峠道へ、旅人がかゝつた。

深々と被つた頭巾のなかで、相變らず彼は怠屈な顔をしてゐた。眠むたげな薄目をして、口をあいたまゝ、ノソリ〳〵と登つて行つた。

道は山の腹をうねりうねつて段々高く登つて行つた。水腫の來た足のやうにノツペラボウな連山を、眼下に見おろすやうになつた。――彼はどこへ行かうにも、行つてどうしようにも、なんにも思つてはゐなかつた。怠屈でさへもなかつた。そこに全く通行の杜絶えた要らないやうな道がうねつてゐるのと同じに、彼もたゞ「要らない」歩みをはこんでゐた……。

牢死した女が、彼の本を預つた。……言葉や熱情や命や、靈までも預つて牢へ行つた。十七年の間、彼はそれらのものなしに暮して來た。それでも、女が命を終つた時に、忘れずにそれらのものを返して貰ひに行つた。然し彼は、そこで、涙一つ取り返すことが出來なかつた。蒼黄色い、皺くちやな婆さんの死顔を前にして、悲しいとも、懐しいとも、嬉しいとも、醜いとも、どんな感情一つでも取返すことは出來なかつた。――きつとそれらのものは、女が返し忘れて、一緒にあの世へ持つて行つて了つたのではなからう。それより、もつと以前に、牢のなかにゐた間に、預つたことすら忘れて了つたのではないだらうか。――怠屈に暮してゐるものに限つて、きつと忘れツぽいから……。そして、乞食だの、囚人だのと云ふものは、怠屈なものに違ひないから……。

いつか峠の絶頂へ來た。左右の足を代りばんこに前へ動かす運動の、力の量に或る變りが感じられた。――下りになつて樂になつたのだ。然し、變つたと云ふことが、旅人をそこに立ちどまらせた。

足もとから、雪のためにフツクラと滑かにされてゐるほどよい勾配の斷崖が、何千丈とも知れぬ谿間へと走つてゐる、白い泡を噛んで、山水がその底を落ちて行く。が、耳をすましても微な音さへ聞き分けられないほどに遙かに下だ。彼方の連山が、その谿間に鼻を突込んでゐる。鋒を並べたやうな杉が、山の足から中腹までスク〳〵と立ち並んでゐる。

旅人は、マツチよりも短く見えるその杉林のあたりを見おろしてゐたが、白張の洋傘を突支棒に、ふとそこに蹲んだ。何故蹲んだのでもない。兩手をかけた柄に額を托して、目をつぶつた。何故さうしたのでもない。……と、蒼黄色い、皺〳〵ちやな顏が見えて來た。なんとも思はないで、彼はそれを見詰めてゐた。……中腰をしてゐる膝に、痛み、と云ふほどでもない窮屈さが感じられだした。それで前へ足を投げ出して座つた。

空腹が感じられた。衣嚢に手を入れてみると、左に、いつの食ひあましか、コチ〳〵になつた腰高饅頭が一つころげてゐた。彼はそれを食つた。

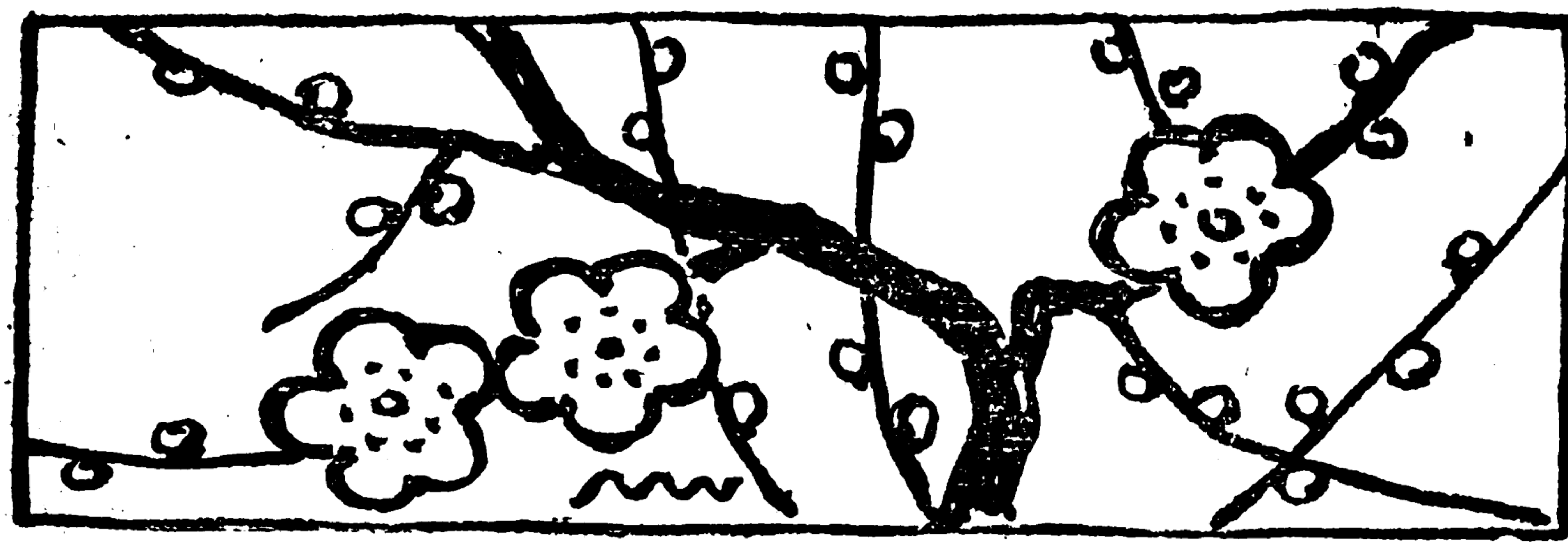
うまくない、と思つた。捨てた。パツと粉雪がたつと、それは、コロ〳〵と傾斜を轉げ始めた。一筋、雪煙をあげて、彈みをうつて落ちて行く……。が、忽ち見えなくなつて了つた。

旅人はそれを見送つてゐたが、不意に雪の上にコロリと横になつて、一つ寢返りを打つた。黑い空瓶のやうなものが、見るまに白い球になつて、饅頭と同じやうに雪煙をあげながら、深い谿底へ轉げ落ちて行つた。雪にとざされた山奥の寂寞を破るほどの音も立てずに、どこまでも〳〵落ちて行つた。水音さへ聞えない遙か下の谿川までには、僅に一分は轉げてゐた。……音もなく、思ひもなく……。

あとには、鼠色に舊びた白張の洋傘が、斜に雪にさゝつて立つてゐた。持主の最後を見屆けようと、谿底の方を窺き込んでもゐるやうに、細い首を延して……。

驛の校長は、その日、課業を休みにして、英雄の來訪を今か今かと待つてゐた。

――八年十二月作――



鼠小僧次郎吉

芥川龍之介

一

或初秋の日暮であつた。

汐留の船宿、伊豆屋の表二階には、遊び人らしい二人の男が、さつきから差し向ひで、頻に獻酬を重ねてゐた。

一人は色の淺黑い、小肥りに肥つた男で、形の如く結城木綿の單衣物に八反の平ぐけを締めたのが、上に羽織つた古渡り唐棧の半天と一しよに、その苦みばしつた男ぶりを、一層いなせに見せてゐる趣があつた。もう一人は色の白い、どちらかと云へば小柄な男だが、手首まで彫つてある剳靑が目立つせいか、糊の落ちた小辨慶の單衣物に算盤珠の三尺をぐるぐる卷きつけたのも、意氣と云ふよりは寧ろ凄味のある、自墮落な心もちしか起させなかつた。のみならずこの男は、役者が二三枚落ちると見えて、相手の男を呼びかける時にも、始終親分と云ふ名を用ひてゐた。が、年輩は彼是同じ位らしく、それだけ又世間の親分子分よりも、打ち融けた交情が通つてゐる事は、互に差しつ抑へつする盃の間にも明らかだつた。

初秋の日暮とは云ひながら、向うに見える唐津樣の海鼠壁には、まだ赤々と入日がさして、その日を浴びた一株の柳が、こんもりと葉かげを蒸してゐるのも、去つて間がない殘暑の思ひ出を新しくするのに十分だつた。だからこの船宿の表二階に、障子こそもう唐紙に變つてゐたが、江戸に未練の殘つてゐる夏は、手すりに下つてゐる伊豫簾や、何時からか床に掛け殘された墨繪の瀧の掛物や、或は又二人の間に並べてある膳の水貝や洗ひなどに、まざまざと盡きない名殘りを示してゐた。實際往來を一つ隔ててゐる堀割の明るい水の上から、時たま此處へ流れて來るそよ風も、微醺を帶びた二人の男には、刷毛先を少し左へ曲げた水髮の鬢を吹かれる度に、凉しいとは感じられるにした所が、毛頭秋らしいうそ寒さを覺えさせるやうな事はないのである。殊に色の白い男の方になると、こればかりは冷たさうな掛守りの銀鎖もちらつく程、思入れ小辨慶の胸をひろげてゐた。

二人は女中まで遠ざけて、暫くは何やら密談に耽つてゐたが、やがてそれも一段落ついたと見えて、色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、無造作に猪口を相手に返すと、膝の下の煙草入をとり上げながら、

「と云ふ譯での、おれもやつと三年ぶりに、又江戸へ歸つて來たのよ。」

「道理でちつと御歸りが、遲すぎると思つてゐやしたよ。だがまあ、かうして歸つて來ておくんなさりや、子分子方のものばかりぢや無え、江戸つ子一統が喜びやすぜ。」

「さう云つてくれるのは、手前だけよ。」

「へへ、仰有つたものだぜ。」

色の白い、小柄な男は、わざと相手を睨めると、人が惡るさうににやりと笑つて、

「小花姐さんにも聞いて御覽なせえまし。」

「そりや無え。」

親分と呼ばれた男は、如心形の煙管を啣へた儘、僅に苦笑の色を漂はせたが、すぐに又眞面目な調子になつて、

「だがの、おれが三年見無え間に、江戸もめつきり變つたやうだ。」

「いや、變つたの、變ら無えの、岡場所なんぞの寂れ方と來ちや、まるで嘘のやうでござえますぜ。」

「かうなると、年よりの云ひぐさぢや無えが、やつぱり昔が戀しいの。」

「變ら無えのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ。」

小辨慶の浴衣を着た男は、受けた盃をぐいとやると、その手ですぐに口の端の滴を拂つて、自ら嘲るやうに眉を動かしたが、

「今から見りや、三年前は、まるでこの世の極樂さね。ねえ、親分、お前さんが江戸を御覽んなすつた時分にや、盜つ人にせえあの鼠小僧のやうな、石川五右衞門とは行かねえまでも、ちつとは睨みの利いた野郎があつたものぢやござえませんか。」

「飛んだ事を云ふぜ。何處の國におれと盜人とを一つ扱ひにする奴があるものだ。」

唐棧の半天をひつかけた男は、煙草の煙にむせながら、思はず又苦笑を洩らしたが、鐵火な相手はそんな事に頓着する氣色もなく、手酌でもう一杯ひつかけると、

「そいつがこの頃は御覽なせえ。けちな稼ぎをする奴は、箒で掃く程ゐやすけれど、あの位な大泥坊は、つひぞ聞か無えぢやござえませんか。」

「聞か無えだつて、好いぢや無えか。國に盜賊、家に鼠だ。大泥坊なんぞはゐ無え方が好い。」

「そりや居無え方が好い。居無え方が好いにや違えごぜえませんがね。」

色の白い、小柄な男は、剳青のある臂を延べて、親分へ猪口を差しながら、

「あの時分の事を考へると、へへ、妙なもので盗つ人せえ、懐しくなつて來やすのさ。先刻御承知にや違え無えが、あの鼠小僧と云ふ野郎は、心意氣が第一嬉しいや。ねえ、親分。」

「嘘は無え。盗つ人の尻押しにや、こりや博奕打が持つて來いだ。」

「へへ、こいつは一番おそれべか」

と云つて、ちよいと小辨慶の肩を落したが、こちらは忽ち又元氣な聲になつて、

「私だつて何も盗つ人の肩を持つにや當ら無えけれど、あいつは懐の暖え大名屋敷へ忍びこんぢや、御手許金と云ふやつを擢攫つて、その日に追はれる貧乏人へ惠んでやるのだと云ひやすぜ。成程善惡にや、二つは無えが、どうせ盗みをするからにや、悪黨冥利にこの位な陰德は積んで置き度えとね、まあ、私なんぞは思つてゐやすのさ。」

「さうか。さう聞きや無理は無えの。いや、鼠小僧と云ふ野郎も、改代町の裸松が贔屓になつてくれようとは、夢にも思つちや居無えだらう。思へば冥加な盗つ人だ。」

色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、相手に猪口を返しながら、思ひの外しんみりとかう云つたが、やがて何か思ひついたらしく、大様に膝を進めると、急に晴々した微笑を浮べて、

「ぢや聞きねえ。おれもその鼠小僧ぢや、とんだ御茶番を見た事があつての、今でも思ひ出すたんびに、腹の皮がよれてなら無えのよ。」

親分と呼ばれた男は、かう云ふ前置きを聞かせてから、又悠々と煙管を啣へて、夕日の中に消えて行く煙草の煙の輪

と一しよに、次のやうな話をし始めた。

二

丁度今から三年前、おれが盆茣蓙の上の達て引きから、江戸を賣つた時の事だ。東海道にやちつと差しがあつて、路は惡いが甲州街道を身延まで出にやなら無えから、忘れもし無え、極月の十一日、四谷の植木店を振り出しに、運は賽の目と覺悟をきめの、とうとう旅鴉に身をやつしたが、なりは手前も知つての通り、結城紬の二枚重ねに一本獨鈷の博多の帶、道中差をぶつこんでの、革色の半合羽に菅笠をかぶつてゐたと思ひねえ。元より振分けの行李の外にや、道づれも無え獨り旅だ。脚絆草鞋の足拵へは、見てくればかり輕さうだが、當分は御膝許の日の目せえ、拜まれ無え事を考へりや、實は氣も滅入つての、古風ぢやあるが一足毎に、後髮を引かれるやうな心もちよ。

その日が又意氣惡く、底冷えのする雪曇りでの、まして甲州街道は、何處の山だか知ら無えが、一面に雲のかかつたやつが、枯つ葉一つがさつか無え桑畑の上に屛風を立てよ、その桑の枝を摑んだ鴉も、寒さに咽喉を痛めたのか、聲も立て無えやうな凍て方だ。おまけに時々身を切るやうな、小佛颪のからつ風が、原がありや枯尾花、川を渡りや枯蘆をやけにざつと吹きまくつて、橫なぐれに合羽を煽りやがる。かうなつちやいくら威張つても、旅慣れ無え江戸つ子は形無しよ。おれは菅笠の緣に手をかけちや、今朝四谷から新宿と踏み出して來た江戸の方を、何度振り返つて見たか知れやし無え。

するとおれの旅慣れ無えのが、通りがゝりの人目にも、氣の毒たらしかつたのに違え無え。府中の宿をはづれると、堅氣らしい若え男が、後からおれに追ひついて、口まめに話しかけやがる。見りや紺の合羽に菅笠は、こりや御定りの旅仕度だが、色の褪めた廣桟の風呂敷包を頸へかけの、洗ひざらした木綿縞に剝つちよろけの小倉の帶、右の小髮に禿

があつて、顔の悪くしやくれたのせえ、よしんば風にや吹かれ無えでも、懐の寒むさうな御仁體だ。だがの、見かけよりや人は好いと見えて、親切さうに道中の名所古蹟なんぞを敎へてくれる。こつちは元より相手欲しやだ。
「御前さんは何處まで行きなさる。」
「私は甲府まで參りやす。旦那は又どちらへ。」
「私は何、身延詣りさ。」
「時に旦那は江戸でござりやせう。江戸はどの邊へ御住ゐなせえます。」
「茅場町の植木店さ。お前さんも江戸かい。」
「へえ、私は深川の六間堀で、これでも越後屋重吉と云ふ小間物渡世でござりやす。」
とまあ、云つた調子での。同じ江戸懐しい話をしながら、互に好い道づれを見つけた氣で、よ、一しよに路を急いで行くと、追つけ日野宿へかからうと云ふ時分に、ちらちら白い物が降り出しやがつた。獨り旅であつて見ねえ。時刻も彼是七つ下りぢやあるし、この雪空を見上げちや、川千鳥の聲も身に滲みるやうで、今夜はどうでも日野泊りと、出かけ無けりやなら無え所だが、いくら懐は寒むさうでも、其處は越後屋重吉と云ふ道づれのある御かげ様だ。
「旦那え、この雪ぢや明日の路は、とても捗が參りやせんから、今日の中に八王子までのして置かうぢやござりやせんか。」
と云はれて見りや、その氣になつての、雪の中を八王子まで、辿りついたと思ひねえ。もう空はまつ暗で、とうに白くなつた兩側の屋根が、夜目にも跡の見える街道へ、押つかぶさるやうに重なり合つた、――その下に所々、掛行燈が赤く火を入れて、歸り遲れた馬の鈴が、だんだん近くなつて來るなんぞは、手もなく浮き畫の雪景色よ。するとその越

後屋重吉と云ふ野郎が、先に立つて雪を踏みながら

「旦那え、今夜はどうか御一しよに願ひたうござりやす。」

と何度もうるさく賴みやがるから、おれも異存がある譯ぢやなし、

「そりやそう願へれば、私も寂しくなくつて好い。だが私は生憎と、始めて來た八王子だ。何處も旅籠を知ら無えが。」

「何に、あすこの山甚と云ふのが、私の定宿でござりやす。」

と云つておれをつれこんだのは、やつぱり掛行燈のともつてゐる、新見世だとか云ふ旅籠屋だがの、入口の土間を廣くとつて、その奥はすぐに臺所へ續くやうな構へだつたらしい。おれたち二人が中へ這入ると、帳場の前の獅嚙火鉢へ嚙りついてゐた番頭が、まだ「御濯ぎを」とも云は無え內に、意地のきた無えやうだけれど、飯の匂と汁の匂とが、湯氣や火つ氣と一つになつて、むんと鼻へ來やがつた。それから早速草鞋を脫ぎの、行燈を下げた婢と一しよに、二階座敷へせり上つたが、まづ一風呂暖まつて、何はともあれ寒さ凌ぎと熱燗で二三杯きめ出すと、その越後屋重吉と云ふ野郎が、始末に了へ無え機嫌上戸での、唯でせえ口のまめなやつが、大方饒舌る事ぢや無え。

「旦那え、この酒なら御口に合ひやせう。これから甲州路へかかつて御覽なさいやし。とてもかう云ふ酒は飲めませんや。へへ、古い洒落だが與右衞門の女房で、私ばかりかさねがさね――」

などと云つてゐた內は、まだ好かつたが、銚子が二三本も並ぶやうになると、目尻を下げて、鼻の脂を光らせて、しやくんだ顋を乙に振つて、

「酒に恨が數々ござるつてね、私なんぞも旦那の前だが、茶屋酒のちいつとまはり過ぎたのが、飛んだ身の仇になりやした。あ、あだな潮來で迷はせるつ。」

とふるへ聲で唄ひ始めやがる。おれは實に持て餘しての、何でもこいつは寐かすより外に仕方が無えと思つたから、潮ざきを見て飯にすると、

「さあ、明日が早えから、寐なせえ。寐なせえ。」

とせき立てゝの、まだ徳利に未練のあるやつを、やつと横にならせたが、御方似なものぢや無えか、あれ程はしやいでゐた野郎が、枕へ頭をつけたとなると、酒臭え欠伸を一つして、

「あゝあつ、あだな潮來で迷せるつ。」

ともう一度、氣味の惡い聲を出しやがつたが、それつきり後は鼾になつて、いくら鼠が騷がうが、寐返り一つ打ちやがら無え。

が、こつちや災難だ。何を云ふにも江戸を立つて、今夜が始めての泊りちやあるし、その鼾が耳へついて、あたりが靜になりやなる程、反つて妙に寐つかれ無え。外はまだ雪が止ま無えと見えて、時々雨戸へさらさらと吹つかける音もするやうだ。隣に寐てゐる極道人は、夢の中でも鼻唄を唄つてゐるかも知ら無えが、江戸にやおれがゐ無えばかりに、一人や二人は夜の目も寐無えで、案じてゐてくれるものがあるだらうと、――これさ、のろけぢや無えと云ふ事に、――つまら無え事を考へると、猶の事おれは眼が冴えての、早く夜明けになりや好いと、そればつかり思つてゐた。

そんなこんなで九つも聞きの、八つを打つたのも知つてゐたが、その内に眠む氣がさしたと見えて、何時からうとうとしたやうだつた。が、やがてふと眼がさめると、鼠が燈心でも引きやがつたか、枕もとの行燈が消えてゐる。その上隣に寐てゐる野郎が、さつきまでは鼾をかいてゐた癖に、今はまるで死んだやうに寐息一つさせやがら無え。はてな、何だか可笑しな容子だぞと、かう思ふか思は無え内に、今度はおれの夜具の中へ、人間の手が這入つて來やがつた。それもが

たがたふるへながら、胴卷の結び目を探しやがるのよ。成程。人は見かけにやよら無えものだ。あのでれ助が胡麻の蠅とは、こいつはちいつと出來すぎたわい。さう思つたら、すんでの事に、おれは吹き出す所だつたが、その胡麻の蠅と今が今まで、一しよに酒を飲んでゐたと思や、忌々しくもなつて來ての、あの野郎の手が胴卷の結び目をほどきにかかりやがると、いきなり逆にひつ摑めえて、捻り上げたと思ひねえ。胡麻の蠅の奴め、驚きやがるめえ事か、慌てて振り放さうとする所を、夜具を頭から押つかぶせての、まんまとおれがその上へ馬乘りになつてしまつたのよ。するとあの意氣地なしめ、無理無體に夜具の下から、面だけ外へ出したと思ふと、「ひ、ひ、人殺し」と、烏骨鷄が塒でもつくりやしめえし、奇體な聲を立てやがつた。手前が盜みをして置きながら、手前で人を呼びや世話は無え。唐變木とは始から知つちやゐるが、さりとは男らしくも無え野郎だと、おれは急に腹が立つたから、其處にあつた枕をひつ摑んで、ぽかぽかその面をぶちのめしたぢや無えか。

さあ、その騷ぎが聞えての、隣近所の客も眼をさましや、宿の亭主や奉公人も、何事が起つたと云ふ顏色で、手燭の火を先立ちに、どかどか二階へ上つて來やがつた。來て見りやおれの股ぐらから、あの野郎がもう片息になつて、面妖な面を出してゐやがる始末よ。こりや誰が見ても大笑ひだ。

「おい、御亭主、飛んだ蚤にたかられての、人騷がせをして濟まなかつた。外の客人にやお前から、よく詫びを云つておくんなせえ。」

それつきりよ。もう後は譯を話すも話さ無えも無え。奉公人がすぐにあの野郎を、ぐるぐる卷にふん縛つて、まるで生捕りました河童のやうに、寄つてたかつて二階から、引きずり下してしまやがつた。

さてその後で山甚の亭主が、おれの前へ手をついての、

「いや、どうも以ての外の御災難で、さぞまあ、御驚きでございましたらう。が、御路用その外別に御紛失物もなかつたのは、せめてもの御仕合せでございます。追つてはあの野郎も夜の明け次第、早速役所へ引渡す事に致しますから、どうか手前どもの届きません所は、幾重にも御勘辨下さいますやうに」

と何度も頭を下げるから

「何、胡麻の蠅とも知らねえで、道づれになつたのが私の落度だ。それを何も御前さんが、あやまんなさる事は無えのさ。こりやほんの僅ばかりだが、世話になつた若え衆たちに、暖え蕎麥の一杯も振舞つてやつて御くんなせえ。」

と祝儀をやつて返したが、つくづく一人になつて考へりや、宿場女郎にでも振られやしめえし、何時までも床に倚つかかつて、腕組みをしてゐるのも智慧が無え。と云つてこれから寐られやせず、何かと云ふ中にや六つだらうから、こりや一そ今の内に、ちつとは路が暗くつても、早立ちをするのが上分別だと、かう思案がきまつたから、早速身仕度にとりかかりの、勘定は帳場で拂つて行かうと、外の客の邪魔にならねえやうに、そつと梯子口まで來て見ると、下ぢやまだ奉公人たちが、皆起きてゐると見えて、何やら話し聲も聞えてゐる。するとその中にどう云ふ譯か、度々さつき手前の話した、鼠小僧と云ふ名が出るぢや無えか。おれは妙だと思つての、兩掛の行李を下げた儘、梯子口から下を覗いて見ると、廣い土間のまん中にや、あの越後屋重吉と云ふ木念人が、縄尻は柱に括られての、大あぐらをかいてゐやがる。そのまはりにや又若え者が、番頭も一しよに三人ばかり、八間の明りに照らされながら、腕まくりをしてゐるぢや無えか。中でもその番頭が、片手に算盤をひつ掴みの、薬罐頭から湯氣を立てて、忌々しさうに何か云ふのを聞きや、

「ほんによ、こんな胡麻の蠅も、今に劫羅を經て見さつし、鼠小僧なんぞはそこのけの大泥坊になるかも知れ無え。ほんによ、さうなつた日にやこいつの御陰で、街道筋の旅籠屋が、みんな暖簾に瑕がつくわな。その事を思や、今の内に

ぶつ殺した方が、人助けよ。」

と云ふ側から、ぢぢむさく髭の伸びた馬子半天が、ぢろぢろ胡麻の蝿の面を覗きこんで、

「番頭どんともあらうものが、いやはや又當て事も無え事を云つたものだ。何でこんな間抜野郎に、鼠小僧の役が勤るべい。大方胡麻の蝿も氣が強えと云つたら、面を見たばかりでも知れべいわさ。」

「違え無え。高々鼬小僧位な所だらう。」

こりや火吹竹を得物にした、宿の若え者が云つた事だ。

「ほんによ。さう云やこの野猿坊は、人の胴卷もまだ盗ま無え内に、うぬが褌を先へ盗まれさうな面だ。」

「下手な道中稼ぎなんぞするよりや、棒つ切の先へ黐をつけの、小供と一しよに賽錢箱のびた錢でもくすねてゐりや好い。」

「何、それよりや案山子代りに、おらが後の粟畑へ、突つ立つてゐるが好かんべい。」

かう皆がなぶり物にすると、あの越後屋重吉め、ちつとの間は口惜しさうに眼ばかりぱちつかせてゐやがつたが、やがて宿の若え者が、火吹竹を顋の下へやりの、ぐいと面を擡げさせると、急に卷き舌になりやがつて、

「やい、やい、やい、こいつらは飛んだ奴ぢやねえかえ。誰だと思つて寢言をつきやがる。かう見えても、この御兄さんはな、日本中を股にかけた、ちつとは面の賣れてゐる胡麻の蝿だ。無面目にも程があらあ。うぬが土百姓の分在で、利いた風な御託を並べやがる。」

これにや皆驚いたのに違え無え。實は梯子を下りかけたおれも、あんまりあの野郎の權幕が御大さうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。まして人の好ささうな番頭なんぞは、算盤ま

で持ち出したのも忘れたやうに、呆れてあの野郎を見つめやがつた。が、氣が强えのは馬子半天での、こいつだけはまだ髭を撫でながら、何處を風が吹くと云ふ面で、

「何が胡麻の蠅がえらかんべい。三年前の大夕立に雷獸樣を手捕りにした、横山宿の勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を知ん無えか。」

と嵩にかかつて嚇したが、胡麻の蠅の奴はせせら笑つて、

「へん、こけが六十六部に立山の話でも聞きやしめえし、頭からおどかしを食つてたまるものかえ。これやい、眠む氣ざましにや勿體無えが、おれの素性を洗つてやるから、耳の穴を掻つぽじつて聞きやがれ。生まれは粋な江戸つ子だ𛂦

――」

と聲色にしちや語呂の惡い啖呵を切り出した所は豪勢だがの、面を見りや寒いと見えて、水つ涕が鼻の下に光つてゐる。おまけにおれのなぐつた所が、小鬢の禿から顋へかけて、まるで面が歪んだやうに、脹れ上つてゐようと云ふものだ。が、それでも田舍者にや、あの野郎のぽんぽん云ふ事が、ちつとは效き目があつたのだらう。あいつが乙に反身になりの、餓鬼の時から惡事を覺えた行き立てを饒舌つてゐる内にや、雷獸を手捕りにしたとか云ふ、髭のぢぢむせえ馬子半天も、追々あの胡麻の蠅を胴突かなくなつて來たぢや無えか。それを見るとあの野郎め、愈しやくんだ顋を振りの、三人の奴らをねめまはして、

「へん、このごつぽう人めら、手前たちを怖はがるやうな、よいよいだとでも思やがつたか。いんにやさ。唯の胡麻蠅だと思ふと、相手が違ふぞ。手前たちも覺えてゐるだらうが、去年の秋の嵐の夜、この宿の庄屋へ忍びこみの、有り金を殘らず掻つ攫つたのは、誰でも無えこのおれだ。」

「うぬが、あの庄屋様へ、――」

から云つたのは、番頭ばかりぢや無え。火吹竹を持つた若え者も、さすがに肝をつぶしたと見えて、思はず大きな聲を出しながら、二足三足後へ下りやがつた。

「さうよ。そんな仕事に驚くやうぢや、手前たちはまだ甘えものだ。かう、よく聞けよ。ついこの中も小佛峠で、金飛脚が二人殺されたのは、誰の仕業だと思やがる。」

あの野郎は水つ涕をすゝりこんぢや、やれ府中で土藏を破つたの、やれ日野宿でつけ火をしたの、やれ厚木街道の山の中で巡禮の女をなぐさんだの、だんだん途方も無え惡事を饒舌り立てたが、妙な事にやそれにつれて、番頭始め二人の野郎が、眼に見えてあの木念人へ慇懃になつて來やがつた。中でも圖體の大きな馬子半天が、莫迦力のありさうな腕を組んで、まぢまぢあの野郎の面を眺めながら、

「お前さんと云ふ人は、何たる又惡黨だんべい。」

と唸るやうな聲を出した時にや、おれは可笑しさがこみ上げての、あぶなく吹き出す所だつた。ましてあの胡麻の蠅が、もう醉もさめたのだらう、如何にも寒さうな顏色で、齒の根も合は無え程ふるへながら、口先ばかりや勢よく、

「何と、ちつとは性根がついたか。だがおれの官祿は、まだまだそんな事ぢや無え。今度江戸をずらかつたのは、臍繰金が欲しいばかりに二人と無え御袋を、おれの手にかけて絞め殺した、その化の皮が剝げたからよ。」

と大きな見得を切つた時にや、三人ともあつと息を引いての、千兩役者でも出て來はしめえし、小鬢から眼れ上つたあいつの面を、難有さうに見つめやがつた。おれはあんまり莫迦らしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが、その途端に番頭の藥罐頭め、何と思やがつたか横手を打つて、

「や、讀めたぞ。讀めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおぬしの渾名だな。」
と頓狂な聲を出しやがつたから、おれはふと又氣が變りの、あいつが何とぬかしやがるか、それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。するとあの胡麻の蠅め、ぢろりと番頭を睨みながら、
「圖星を指されちや仕方が無え。如何にも江戸で噂の高え、鼠小僧とはおれの事だ。」
と、横柄にせせら笑やがつた。が、さう云ふか云は無え内に、胴震ひを一つしたと思ふと、二つ三つ續けさまに色氣の無え嚔をしやがつたから、折角の睨みも凄無しよ。それでも三人の野郎たちは、勝角力の名乘りでも聞きやしめえし、あの重吉の間拔野郎を扇ぎ立て無えばかりにして、
「おらもさうだらうと思つてゐた。三年前の大夕立に雷獸樣を手捕りにした、横山宿の勘太と云つちや、泣く兒も默るおらだんべい。それをおらの前へ出て、びくともする容子が見え無えだ。」
「違え無え。さう云やどこか眼の中に、すすどい所があるやうだ。」
「ほんによ、だからおれは始から、何でもこの人は一つぱしの大泥坊になると云つてゐたわな。ほんによ。今夜は弘法にも筆の誤り、上手の手からも水が漏るす。漏つたが、これが漏ら無えで見ねえ。二階中の客は裸にされるぜ。」
と繩こそ解かうとはし無えけれど、口々にちやほやしやがるのよ。すると又あの胡麻の蠅め、大方威張る事ぢや無え。
「かう、番頭さん、鼠小僧の御宿をしたのは、御前の家の旦那が運が好いのだ。さう云ふおれの口を干しちや、旅籠屋冥利が盡きるだらうぜ。桝で好いから五合ばかり、酒をつけてくんねえな。」
かう云ふ野郎も圖々しいが、それを又正直に聞いてやる番頭も間拔けぢや無えか。おれは八間の明りの下で、藥罐頭の番頭が、あの飲んだくれの胡麻の蠅に、桝の酒を飲ませてゐるのを見たら、何もこの山甚の奉公人ばかりとは限ら無

え、世間の奴等の莫迦々々しさが、可笑しくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。何故と云ひねえ。同じ惡黨とは云ひながら、押込みよりや擦拂ひ、火つけよりや巾着切が、まだしも罪は輕いちや無えか。それなら世間もそのやうに、大盜つ人よりや、小盜つ人に憐みをかけてくれさうなものだ。所が人はさうぢや無え。三下野郎にやむごくつても、金箔つきの惡黨にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧と云や酒も飲ますが、唯の胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盜つ人だつたら、小盜つ人にやなりたく無え。——とまあ、おれは考へたが、さて何時までも便々と、こんな茶番も見ちやゐられ無えから、わざと音をさせて梯子を下りの、上り口へ荷物を抛り出して、
「おい、番頭さん、私は早立ちと出かけるから、ちよいと勘定をしておくんなせえ。」
と聲をかけると、いや 番頭の藥罐頭め、てれまい事か、慌てて桝を馬子半天に渡しながら、何度も小鬢へ手をやつて、
「これは又御早い御立ちで——えゝ、何とぞ御腹立ちになりやせんやうに——又先程は、えゝ、手前どもにもわざわざ御心づけを頂きまして——尤も好い鹽梅に雪も晴れたやうでげすが——」
などと譯のわからねえ事を並べやがるから、おれは可笑しさも可笑しくなつて、
「今下りしなに小耳へ挾んだが、この胡麻の蠅は、評判の鼠小僧とか云ふ野郎ださうだの。」
「へい、さやうださうで、——おい、早く御草鞋を持つて來さつし。御笠に御合羽は此處にありと——どうも大した盜つ人ださうでげすな。——へい、唯今御勘定を致しやす。」
番頭のやつはてれ隱しに、若え者を叱りながら、そこそこ帳場の格子の中へ這入ると、仔細らしく啣へ筆で算盤をぱちぱちやり出しやがつた。おれはその間に草鞋をはきの、さて一服を吸ひつけたが、見りやあの胡麻の蠅は、もう御神

酒がまはつたと見えて、小鬢の禿まで赤くしながら、さすがにちつとは恥しいのか、なるべくおれの方を見無えやうに、側眼ばかり使つてゐやがる。その見すぼらしい容子を見ると、おれは今更のやうにあの野郎が可哀さうにもなつて來たから、

「おい、越後屋さん。いやさ、重吉さん。つまら無え冗談は云は無えものだ。御前が鼠小僧たなどと云ふと、人の好い田舍者は本當にするぜ。それぢや割が惡からうが。」

と親切づくに云つてやりや、あの阿呆の格天井め、まだ芝居がし足り無えのか、

「何だと。おれが鼠小僧ぢや無え？　飛んだ御前は物知りだの。かう、且那々々と立ててゐりや」

「これさ。そんな啖呵が切りたけりや、此處にゐる馬子や若え衆が、丁度御前にや好い相手た。だがそれもさつきからぢや、もう大抵切り飽きたらう。第一御前が紛れも無え日本一の大泥坊なら、何もすき好んでべらべらと、爲にもなら無え舊惡を並べ立てる筈が無えわな。これさ、まあ默つて聞きねえと云ふ事に。そりや御前が何でも彼でも、鼠小僧だと剛情を張りや、役人始め眞實御前が鼠小僧だと思ふかも知れ無え。が、その時にや輕くて獄門、重くて磔は逃れ無えぜ。それでも御前は鼠小僧か、——と云はれたら、どうする氣だ。」

とかう一本突つこむと、あの意氣地なしめ、見る見る内に唇の色まで變へやがつて、

「へい、何とも申し譯はござりやせん。實は鼠小僧でも何でも無え、唯の胡麻の蠅でござりやす。」

「さうだらう。さうなくつちや、なら無え筈だ。だが火つけや押込みまでさんざんしたと云ふからにや、御前も好い惡黨だ。どうせ笠の臺は飛ぶだらうぜ。」

と檀で煙管をはたきながら、大眞面目におれがひやかすと、あいつは醉もさめたと見えて、又水つ洟をすゝりこみ

の、泣かねえばかりの聲を出して、

「何、あれもみんな噓でござりやす。私は旦那に申し上げた通り、越後屋重吉と云ふ小間物渡世で、年にきつと一二度はこの街道を上下しやすから、善かれ惡しかれいろいろな噂を知つて居りやすので、つい口から出まかせに、何でも彼でもぼんぼんと――」

「おい、おい、御前は今胡麻の蠅だと云つたぢや無えか。胡麻の蠅が小間物を賣るとは、御入國以來聞か無え事だの。」

「いえ、人樣の物に手をかけたのは、今夜がまだ始めてでござりやす。この秋女房に逃げられやして、それから引き續き不手まはりな事ばかり多うござりしたから、貧すりや鈍すると申す通り、ふとした一時の出來心から、飛んだ失禮な眞似を致しやした。」

おれはいくらとんちきでも、兎に角胡麻の蠅だとは思つてゐたから、かう云ふ話を聞かされた時にや、煙管へ煙草をつめかけた儘、呆れて物も云へなかつた。が、おれは呆れただけだつたが、馬子半天と若え者とは、腹を立てたの立て無えのぢやねえ。おれが止めようと思ふ内に、いきなりあの野郎を引きずり倒しの、

「うぬ、よくも人を馬鹿にしやがつたな。」

「その頰桁を張りのめしてくれべい。」

と喚き立てる聲の下から、火吹竹が飛ぶ、枡が降るよ。可哀さうに越後屋重吉は、あんなに橫つ面を腫らした上へ、頭まで瘤だらけになりやがつた。……

三

「話と云ふのはこれつきりよ。」

色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、かう一部始終を語り終ると、今まで閑却されてゐた、膳の上の猪口を取り上げた。

向うに見える唐津樣の海鼠壁には、何時か入日の光がささなくなつて、堀割に臨んだ一株の葉柳にも、そろそろ暮色が濃くなつて來た。と思ふと三縁山增上寺の鐘の音が、靜に潮の匂のする欄外の空氣を搖りながら、今更のやうに曆の秋を二人の客の胸にしみ渡らせた。風に動いてゐる伊豫簾、御濱御殿の森の鴉の聲、それから二人の間にある盃洗の水の冷たい光――女中の運ぶ燭臺の火が、赤く火先を靡かせながら、梯子段の下から現はれるのも、もう程がないのに相違あるまい。

小辨慶の單衣を着た男は、相手が猪口をとり上げたのを見ると、早速德利の尻をおさへながら、

「いや、はや、飛んでも無えたわけがあるものだ。日本の盜人の守り本尊、私の贔屓の鼠小僧を何だと思つてゐやがる。親分なら知ら無え事、私だつたらその野郎をきつと張り倒してゐやしたぜ。」

「何もそれ程に業を煮やす事は無え、あんな間拔な野郎でも、鼠小僧と名乘つたばかりに、大きな面が出來た事を思や、鼠小僧もさぞ本望だらう。」

「だつとつて御前さん、そんな駈け出しの胡麻の蠅に鼠小僧の名をかたられちや――」

割靑のある、小柄な男は、まだ云ひ爭ひたい氣色を見せたが、色の淺黑い、唐棧の半天を羽織つた男は、悠々と微笑を含みながら、

「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えちや無えか。手前にやまだ明さなかつたが、三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは――」

と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ眼をくばつて、
「この和泉屋の次郎吉の事だ。」

(八・十二・六)



胡瓜

山本鼎

今朝、私はふいと、あの胡瓜の味を思ひ出した。

露西亞での名は何といつたか忘れてしまつたが、あちらの食物で一寸うまかつたあの鹽水に漬けられた、まるまつちい、角のない胡瓜――齒あたりは柿のやうにこり〳〵して、嚼むで居ると、鹽けに混つて特種な微い甘味の出てくるあの胡瓜――どんな場末の八百屋にでも、大きな硝子壜のなかに唐辛の葉などをまぜて漬けられてある。一とつが十五哥ばかりにあたる（目方で賣つて居るから）頗る安値なあの野菜の味を思ひ出した。

そして、卒かに當時の追憶に耽つた揚句、例によつて雜然たるお喋りをやり度くなつたのであるが、其お喋りに興味を有つて耳を傾けてくれる筈の大事な一人が既に故人であるのを深く〳〵嘆かないわけにゆかない。

それは、當時モスクワの總領事であつたＴ、Ｈ氏の事で、此人はたいへん豪放な性格のやうに噂されて居たけれども、私の觀る處では却つて節度のある人情に濃かな人であつた。尤も、下顎の張つて眉の太く濃い其容貌にも徴されて

居たやうに、頗る覇氣に富むだ、どちらかと云へば、巧言を必要とする外交場裡よりは、直言を憚らない議政壇上にふさはしい感じのする人品ではあつた。

私は、巴里からモスクワへ着くとすぐ此人を訪問した。單に吾々の總領事だからではなく、自分にとつて一刻も猶豫なり難い事情があつたのである。

それは千九百十六年七月廿一日の午前の事で、ツレルスカヤの寂しい裏通りにあたる日本領事館の前で辻馬車(イズボーシク)をかへし、五年來持ち古した、革で鎧つた柳行李を一とつ一階の戸口まで持ち込んで、さて、私は心を靜めて鈴(ベル)を押したのであつた。

體が强健で年が若くて、そして放浪の味を少しでも知つた者はたいていさうだが、私も、何か測り知れない不安に面した場合、むしろ娯(たの)しい劇的な空想に魅(チャーム)される。此時だつて、若し領事が旅行して不在であるとか、又は會見が不幸に終りでもしたなら、私は實際慘目(みじめ)を見たに違ひないのであるが、而も、戸口に立つた瞬間に私の精神は、例によつて目前の『逆境』に對應する快活な決心や、奇拔でそして可能的な作戰を整へ終つて、新鮮な氣力が肩や眼や唇に湧きのぼるのを感じたのである。

併し左樣な勇氣は必要がなかつた。運よくも、五分と待たないうちに私は、其處の應接間で領事の接見をうけたので……。

領事は、私の差し出した巴里のS君からの紹介狀を手に持つたまま室へはいつて來て、

「私がT、Hです、いつ此處へ着かれましたか」

と、磊落な仕草(マニエー)で椅子を私にすゝめながらたゞねた。

「今着いたばかりです。停車場から辻馬車でいきなり此處へ來ましたので」

「それは、お疲れでせう、フヰンランドをお廻りでしたね、ペテログラードには滯在されましたか」

「え、旅行許可(パスポルト)を貰ふために一週間止りました。實は着いた翌日美術館(エルミタージュ)を觀まして、すぐにモスクワへ來る筈でしたが、何處でも旅行許可(パスポルト)がめんどうで閉口しました」

「いやどうも、此處でも馬鹿〱しくめんどうですよ」

「まつたく馬鹿〱しい位です、巴里をたつ時、行きつけのカフヱへ寄りましたところが、其處の娘が日本の琴の事を質問しだので、持ち合した『三田文學』の裏表紙へ鉛筆で一寸圖解したのですね、處が、それがディエープの檢閲所で大いに祟つちまつて私だけは三十分ばかり足止めを喰ひましたよ。

トロネアの檢閲所も猛烈でした。あすこで、モスクワで必要であつた露西亞の美術家への紹介狀や、アドレスブックなんかまで一切取り上げられてしまひました。僅かに、其名刺裏へ佛文で書いた簡單なS君の紹介狀だけが奪掠をまぬがれた次第ですが……まつたく奪掠ですよ、トロネアでは、私以外の者は殆ど懷(ふところ)へ手を突込まれてさぐり出されましたからねえ」

「どうも旅行も厄介至極だな、……時にS君は健在ですか」

「頗る元氣です、此頃は忙しいなかから英語を勉强はじめたやうです」

「さうですか、あの人は昔から勉强家でしたよ、なか〱剛情な質でね」

「さうです、あの職業の人には珍らしく、いゝじみちな考へを有つた人です……たいへんあなたに御世話になつたとかで、宜しく傳へてくれと申して居りました。」

「いや、なに、……なんですか、あなたはゆつくりモスクワにお滯在ですか、」

斯ふ問はれた時、私は顏を赤らめて口ごもつた。これから云はうとする事情が汚れた黄色いコール天の旅行服を着けた身に如何にも似つかはしいのに氣が付いて急に恥しくなつた。けれども遂に口をきつた。

「……實はそれに就てお願ひがあるのです。とも角一と通り聽いて戴き度いのでして、此事はもう巴里を發つ時わかつて居りましたので、S君が心配してあなたに紹介狀を書いてくれたやうなわけですが、私は全體マルセイユから船で歸らねばならなかつたのです。其ためにパトロンから郵船の二等切符を送つてくれたのでしたが、私はどうしてもスカンディナヸヤを迂廻して見度かつたのです、あすこには特別なミユゼヱがありますからね、ムンクの畫などは容易に巴里でも見られないのです。勿論露西亞も見たかつたのです。尤も他の理由に、性來船が大嫌ひだといふ事もありました。で、北歐迂廻と決心して、倫敦で切符を金に替へましたが、意外な事には一割を差引かれてしまつた事でした。倫敦で細く計算して見ますと、モスクワへ達した時五十餘留はたしかに殘る勘定でした。處が實際は、十三留しか殘らなかつたのです。それはトンネルの夥しい諾威を通過する間二等室に移つた事や、露都で一週間も滯在せねばならなかつた番狂せのためですが、要するに、此處から日本までの旅費はモスクワで作らねばならないのです。これは始めつから覺悟した處ですから、萬一の要心に、一と月ばかりかゝつて出來たシヤヴアンヌの壁畫の模寫を賣らうかと考へて持つて來て居るのですが、若しも出來得る事なら、露西亞人に紹介して戴いて、肖像を描くなり、背景畫の手傳をするなり、止を得ずんば西洋木版の工場へ傭はれてなりして其金を稼がうと存じますので……何しろ十三留では一日の宿代しかありませんから、ぐずぐずしずにゆきなり此處へ上つて、幸ひにお目に懸れましたので、すべて申上げてお賴りする次第なんですが、もしかしたら左樣な無理な方策をとらずに、パトロンに金を賴むで見るがいゝと御思ひでせうが、それは頗る辛

いのです。と申しますのは、私は三年で歸る可き處を五年も居てしまつて、其上に安全に歸國出來るやうにしてくれた船旅を嫌つて、勝手に不便な陸路を選むだやうなわけですから、とても其勇氣はないのです。……一體こういふぶちまけは愼まねばならたいのですが、――併しこうするのが一番場合に適つて居ると考へまして……」

斯う喋り終つて私はほつとして領事の眼を見た。

「いや、それがいゝです、まあとにかくゆつくり滯在なさい。モスクワにはあなた方の御參考になるものが澤山ありますよ、丁度、今は夏で、いけない時ですが、冬にはいりますとね、例の藝術座もはじまりますから、そんなものも觀ていらつしやい。今私達は田舍の別莊に居りますから四時頃になつたら御一所に參りませう、其前に荷物を小使に持たせてやつときますから……荷物は停車場ですか」

と、領事は、無造作に私の陳述に答へた。それからエヒームといふ小使に命じて、みすぼらしい私の荷物を持ち行かしめたあとで、事務室に誘つて書記生のI氏へ、

「I君、此方はね山本さんと云はれる巴里から見えた美術家です」

と紹介してくれた。

I氏も實に良い人であつた。たいへん畫の好きな人で、道樂に寫眞術と畫集を買ふ事とお茶を飲む事であつたから、私にとつてはまことに都合のいゝ人であつた。此人の寫眞道樂はかなり深い處まで進むで居て、靜物(ナチユーモルト)をゴムやオイルで試みたり、トラパン式(トラパンはモスクワで有名な美術寫眞家だ)の刷毛使ひを學むだ印畫などを澤山に有つて居た。寢室にも書齋にも技工(テクニツク)の異つたいろ〳〵の寫眞が額にして懸けてあつて、其なかには、日本へ殘して來た可愛い孃さんの寫眞のゴムにして引のばされたのもあつた。

書齋と暗い廊廓を挾むで物置きのやうな室があつて其處がI氏の食堂になつて居た。此食堂を私は好きだつた。かなり貧相な室だつたが、それが私の身なりと釣合がよかつたし、又其處の一偶に寢臺を運むで幾夜か睡つた事もあるのだ。それから、モスクワに於ける最初の晝飯も此處に誘はれたのである。其時、食卓の趣味が一と目で私の氣に入つちまつて、

「こいつは、すばらしい群ですね」

と、口走つた位である。

それは白地に紅の華模樣を染めた、だいぶ古ぼけたゴム引の布が敷かれた上に、ニツケル製の湯沸が湯氣を吹きたつて居て、紅茶を滿したコツプや、玉子と腸詰とでつくつた鍋のまゝのオムレツや、パンや、胡瓜などがそれ〴〵の姿勢で一枚の非凡な靜物畫を現して居るのであつた。

I氏は、今はニコライエフスクの領事に、轉任して居るが、つい近頃偶然三田行きの電車のなかで出つ會した。其時の話に、彼のマドモアゼール、ニユーラがボリシエヸキイに投じたといふ噂があるさうだが、あの世話好きな娘は、私に金を得させやうとして、モローゾフ（露西亞第一の金滿家）の次男に會見してくれた。その前にニユーラは私に、こんな事を云つた。

「モローゾフの次男は、慈善家で美術好きだが、頑固な禁酒會員で、もし畫のなかに酒徳利でも描いてあつたら、決して買ひつこありまんせよ」

と。

さて、私は領事に伴はれて、モスクワから汽車で三十分ばかりの處にある、サリチノの夏季別莊についた。サリチノ

はエカテリナ女皇の離宮のあつた處で、昔の配置(プラン)のまゝに、池や、丘や、庭園が公衆の遊び場になつて居て、附近は森を拓いて大小の貸別莊を設けた大規模な避暑地となつて居る。

領事　別莊(ダアチヤ)も其處にあつた。領事に隨つて白く塗つた低い木戸をはいると、毛房の美事な赭毛(あかげ)の獵犬が駈けて出て鋭く私に吠えついた。皮樣(トネリコ)のやうな木立のならぶほの暗い前庭を數十歩進むと玄關で、其處の露臺(ヴルコン)に、白い絹紗のヹールを冠むつた和裝の若い婦人が吾々を待つて居た。無論それが領事夫人であつたが、後には、いつも色の白い、時には靑くさへ見えた其人の顔が、此時だけ夕映えの反射でもあつたかして、非常に赤く見えた。私は其觀(ヴリユー)をなぜか今でもはつきりと覺えて居る。

領事は私を、I氏に紹介した時と同じ言葉で夫人に引合した。夫人は私の耳に實に久しぶりで聽く、如何にも日本的な上品な言葉と、無邪氣な音聲で迎へてくれた。此夫人には勿論私は多大な厚意をうけた。T、H氏はたしかに任俠な人であつたが、噂さよりは神經質で寂しい處があつた。だから、若し、此夫人の天賦な明るい暢々(のび)した感情が家内を支配して居るのでなかつたとしたら、五ケ月といふ長い時日を、私はあいやうに苦澁なく過す事はむづかしかつたらうかと思ふ。

食事は間もなく露臺(ヴルコン)ではじまつた。御馳走のならむだ大卓(テーブル)を圍むで、一同は籐椅子に倚つた。まだ金色の夕映えは高く空にあつて、庭は幽邃な調子(トオーン)に支配され、私の心には細い一脈の旅愁が絡(から)むだ。パンをちぎつて嚼みながら、『遠い日本で同じ大空の下に親達が自分を待つて居る』といふ感傷的な言葉をわざと胸に言つて見て、涙を瞼の下までも誘ひ出したりした。

食事をはじめる前、領事は佛蘭西語で、同じ食卓についた年とつた婦人に私を引合した。それは、マドモアゼル、

シユザンヌとよぶ、領事夫人の語學の教師であつたが、此人は、佛蘭西人らしい快活(ジエ)な氣分をすつかり失つて居て何となし喰ひしんぼな、下女(ヅナーシヤ)などにも評判の惡い、氣の毒な年寄であつた。

此人の他に、別莊には、エヒーム（領事館の小使）の家族と、下女とが居たが、別莊は木造の大きな建物であるし、周圍に廣い庭――といふよりは空地がとつてあつて、三方は杜になつて居たから、夜になるとむしろ氣味の惡い位寂しかつた。

初めての夜、私は小さいランプを持て、與へられた室に退き、すぐと床にもぐつたけれど、容易に寢つかれずに、晝間領事館で受取つた短い父の手紙を、くりかへし〱讀むで居た。

私は、夏中を此處に暮したのであるが、其間、勿論ずつと娯(たの)しかつたといへる。

一日おきに二時間づゝ、領事夫人に洋裝で座(ポーズ)してもらつて三十號の肖像畫(ポートレート)を描いたし、其間には外へ出て、小さな即寫をいくつも作つた。又モスクワへ引揚げるといふ間ぎわであつたが、エヒームの兒のサーニヤに草叢のなかへ立つてもらつて、露西亞での一番良い土産(スーヴニイル)をも作る事が出來た。

日曜日には、モスクワから、商店の人達がやつて來て、庭で、クリケツトのやうな勝負(ゲーム)を陽の落ちるまでつゞけ、賑かな晩餐の後にはたいてい骨牌(カルタ)をして遊んだものだ。

茸狩りは特に面白かつた。香ばしい味のするエレーとよぶ一種の樺茸で、それが出はじめると、茸狩の男女が杜へ集つて來た。だから、吾々は朝白々あけに露を踏むで杜深く探り入り、一夜のうちに首を擡げた其茸を見つけて數を爭つたものだが、徒足(はだし)で飛び廻るサーニヤには誰しもかなはなかつた。

でも、私は折々氣が鬱いだ。それは要するに、『何時日本へ歸れる事か？』といふ不安が原因であつた。そのくせ實は、日本へ歸へる事もかなりおつくうであつたので、――それには種々雜多な理由があつたけれども『俺れは意志にはぐれて居る』といふ悲觀が重なるものであつたらう。

鮮かな望みを有つた者が道草を喰ふ筈はないと共に、愛の深淵を覗いた事のある身に煩惱のたえ間もないわけだ。

秋のはじめ、樺の林もすつかり黄色くなつた頃と記憶するが、日本から貴族院議員の一行が來るといふので、領事は急に別荘を引揚げてモスクワの役宅に歸へる事になり、私も共に移つて今度は其處の美しい客間に起臥する身となつた。その時はさすがに私も氣がとがめた。領事夫妻の肖像畫を遺していさゝかそれに報ゆる考へはしても、それがむかうで欲しがつて居るものでもないと思へば、單に私は、臆面のない食客にすぎなかつた。とは云へ、卒かに人の恩義を苦に惱むで、無援の街路にさまよひ出る程の元氣はなく、ずる〳〵に冬を迎へてとう〳〵日本へ立つ日まで其處の厄介者となつて居たのである。

けれども、其モスクワの三ケ月間といふものが、私の生涯に濃い影響を有つものである事が、自身には近頃に至つて段々とわかつて來た。私は其處で、スラヴ族の血なまぐさい悪寫實な歴史畫と共に、耶蘇の奇蹟を自然科學と同じに禮讃する或ロマンチツク、ナザレアンの多くの遺作を見た。

金や紫に彩つた擬寶珠を冠としたギリシヤ教の寺院、其美しい寺院が大小無數に、クレムリン宮殿の丘を中心にして蜘蛛手に展がつた民家のなかに、背をぬいて散在する繪畫的な都市だが、ナポリよりもまだ不潔で、馬糞の粉末と紙屑が至る處で、風に舞ひ踊つて居るのを見た。

寺院の暗い土間に跪いて地をなめたり、公衆用のきたない眞鍮の十字架に接吻したりする。而も逞しい體をした無教育な百姓の多い一方に、ぐんと進むだ趣味や思想を有つた都人士が居て、藝術座の戯曲だの、ヴブノウイヴレットの美術などが容易に味解され、農民美術監理所があつたり、農民音樂が試演されたり、兒童創作展覽會が行はれたりするのを見た。

物資がおそろしく缺乏して、一片の肉を購ふにさへ、肉屋の店さきの凍た夜路に、下女の群が明け方まで立通さねばならぬ時に、芝居や音樂會はいつも滿員で、シャリャーピンの出る時には、一夜の觀棚が七百留に賣買されるといふやうな戰時の混亂をも見た。

それから、モスクワの領事館に、旅客となつて來たり去つたりするいろ〳〵な階級の雜多な日本人を見た。

凡そ、これ等の分裂的な現象は、私を曾て知らない感情にいざなつた。人間の創造的情熱と社會組織との關係に潜むある興味深い思想の秘曲ともいはうか——それはやがて私に惻々と『生存の意志』を暗示したものである。

別莊での閑散に對して、領事夫妻の役宅での日常はずいぶんと忙しいものであつた。間もなく、貴族院の一行が、戰情視察といふふれこみで公式に乘り込んで來ると、モスクワ市長は軍監區司令官と共に一行のために盛大なる晩餐を催した。領事館としも招宴をはらねばならぬといふので、領事は勿論、書記生のI氏もW氏も、小使のエヒームも皆目のまわるやうに活動した。其なかにあつて、ジュミ(飼犬の名)と私とは全く閑であつた。其頃、涙ぐまるゝばかり朗かになつた秋の空に誘はれ、私は其繁忙をよそに見つゝ畫布を提げてよく外へ出た。

ツレルスカヤの大通りをまつすぐに歩いて、ナポレオンが最初に炎上するモスクワを俯瞰した地點として有名なる、市の西南を劃る雀ケ岡を指して郊外へ出ると、廣い、玉菜畑があつて、其處の一と抱えもある程な大玉菜から、更紗の

巾を冠つた半身を現して、雀斑だらけな貧しい百姓の娘が、よく、高い顫へるやうな聲で、はてしなく歌を唄つて居るのであつた。それは日本の巡禮歌に似た、唄ふ者も聽く者も同じ悲哀につまされるやうな調子を有つて居た。私は其哀調の遠く漂つて來る路ばたに屢々三脚を据えた。

或日、聖救世主寺(モスクワ第一の大寺)を遠見にする、とある裏街で寫生をやつて居た時の事、若い格ぷくのいゝ紳士が近寄つて來て、何か注意を與へるやうに露西亞語で話しかけたが私には解らないので、

「あなたは私に何か御用がおありですか？」

と佛蘭西語でたづねた。すると紳士は少し羞だ顔になつて、

「さうです、あなたは寫生許可證を有つて居ますか、此處ではそれが必要なんです、戰爭中ですからねえ」

と、私よりも危つかしい佛蘭西語で云つた。私が

「有難う、私はそれを有つて居ます」

と答へると、意外だ、といふやうな表情をして、

「あなたはそれを有つて居ます？　どうしてそれを受取りましたか、吾々露西亞人には、軍監區司令官はどうしてもそれを與へないのですよ、だから吾々は寫生をすべて廢止して居るのです。どうぞお有ちの許可證を私に見せて下さい」

斯ふ云つて彼れは證書を受取つて見てかへしながら、

「有難う、あなたはうまい事をやりました、大いに寫生をおやりなさい。實は僕も美術家なんです、彫塑家ですよ。」

と云つて、指をあげて粘土を觸するまねをして見せた。私は此時、自分のみじめな佛蘭西語が彼れよりはちつとばかり

流暢なのを知つて珍らしく御調子に乘つて喋つたものだ。

彼れは性をヤツセルヴーセフといつて、モスクワに妹と二人で畫室(アトリエ)暮しをして居る者であつたが、戰爭になつてからは高等女學校の畫の先生をして居たのである。ミユンヘンに六年間留學したといふが、腕はへぼだつた。彼れは、私に大切に　て居た素描(デッサン)を一枚くれた。それはこんなやうなわけからであつた。

或晩、私はマドモアゼール、マリイナといふ女流彫塑家のお茶に招かれて、其處に集つた人々に、自分の畫を見せた事がある。其時一人の婦人か、一枚の裸體の寫生(クロツキイ)を指して、

「これは何です？巴里女ではありますまいね」

と、云つた。私が、

「いえ、此モデルは、露西亞婦人です、先夜ヤツセルヴーセフの處であつた寫生會に座(ポーズ)した娘ですよ」

と、答へると、女連が一齊に手を打つて、

「何といふ馬鹿なヤツセルヴーセフだらう、日本人にこんな無格恰な女を露西亞婦人の見本として持つてゆかれてはなりません、さうだヤツセルヴーセフ!! あなたは其罰に是非山本に美しい素描(デッサン)を一枚お渡しなさい、露西亞婦人として恥しくないやうなのをね」

などゝきやつ〳〵騷いで、小供のやうに無垢なヤツセルヴーセフをいぢめぬいて終に承諾さしてしまつた。

多分その素描(デッサン)のモデルはヤツセルヴーセフの愛人であつたのだらうに。

或大雪の降つた翌晩、マリイナが私を、莫斯科女子藝術家俱樂部の例會に誘つてくれた事がある。

其會はモスクワ河に近い、或アパルトマンの地下室に催されるので、雪あかりに中庭(ドーア)を辿つて吾々は地下室に降りた。

するとその處に番人が居て、だまつて外套を受取り、片手で傍の戸を押しておそろしく明るい室に送り込んだ。マリイナは、室口に小さな卓を据へて居る婦人の處へ私を伴つていつて、入場料を三留拂つた。婦人はマリイナの紹介に對して、私に、驚くべき早口な佛蘭西語で、

「おゝそれはいゝ、よく來て下さいました、……巴里のコロラッシを御存じですか？ 私はあすこで彫塑を學むだのです、あなたはちつとも露西亞語は——」

と云つた。

會場は壁も柱も白く塗られた廣い一と間で、暖ためすぎた空氣のなかに、髪と其油の匂ひが濃く蒸されて居た。間もなく室の中央にモデル臺が持ち出され、若い娘がすつ裸で姿勢につくと、大勢の男女が、それを圍むで、思ひ／＼の寫生畫を作つた。異つた姿勢を三十分づゝ二度すますとモデルは臺を下りて臺は忽ち片づけられた。其時、ぞろ／＼と澤山の男女が室へ這入つて來たので、私が驚いた眼をマリイナにむけると、彼の女は、

「これからお茶がはじまつて、ずいぶん面白くなるんです」

と云つた。なる程、室の一隅に手早く食卓が作られて、其處に數個の湯沸しが置かれ、パンだのショコラだの受皿のある茶のコップなどが夥しく列ばつて、自由勝手な飲食がはじまつたのである。その最中に、一方の隅へ大きな卓が運ばれて、其上に立派なピアノが据えられた。そして程なく彈奏がはじまつたのであるが、曲が終る度に嵐のやうな拍手が起つた。突然、入口の方に賑かな人聲が湧いて、一團の男女が這入つて來た。男は皆、艶々した黒い夜會服で、それに護られるやうに、琅玕色のすつきりした服をつけたすてきな美人が一人交つて居た。マリイナは、私に、

「あれが今夜の女王なんですが、第三流の劇場に出る女優なんです」

とさゝやいた。

緑衣の佳人は歡呼のなかに臺の上に現れて、其顔のやうに魅惑な聲で抑揚に富むだ面白さうな歌を歌つた。次には、濃い髮をブラジル風に梳きあげた、才氣に滿ちた容貌の青年が、二つも三つも詩らしいものを朗讀したが、露西亞語を解さない私は、たゞ其潑剌たる氣合に觸れて胸を躍らすばかりであつた。

マリイナに訊くと、

「あの人は近頃聞え出した詩人で、今夜の詩は未來派がゝつたものだ」

と、云つた。

青年が臺を下りると同時に、滿室の騷然たる歌舞を現出した。私はいつか見えなくなつたマリイナを見つけ出して、歸りを促した。しかし彼の女は迷惑さうに、

「あなたは歸り度いの、まだ朝までには四時間もありますよ」

と、いつた。

秋のうちは、上院議員の一行につゞいて、侯爵だの、將軍だの、博士だの、參事官などといふ人達がとつかへひつかへモスクワにやつて來たが其度每に領事は晩餐を催さねばならなかつた。私はそれ等の人々に客間で一々紹介された。領事夫人がジユミの目やにいゝいゝ拭き、となづけた、(ジユミは老眼にたまる目やにを、きまつて私の膝になすりつけるのだ。私の服は肌さはりのいゝコール天であつたから、)憐れな旅行服で饗宴の食卓にも列つたのであるが、私はとにかく、領事夫妻が左程それを苦にしなかつたのは妙である。

そのうちに、旅客の來訪も稀になり、長夜の消閑に吾々はよく骨牌をやつた。商店の人達が遊びに來た時はむろんの事、領事夫妻と私と三人だけの時でも、はじまつて、一と勝負が終ると、熱いテー、ド、コニヤックなどを飲みながら、人の噂や身の上話に夜を更したものだ。

M大使の見えたのも其頃である。其夜は丁度I少將も來合して、賑かなブリヂがはじまつた。惜しい事に大使も、宿痾の癌で死んでしまはれたが、あの人は私にちつとばかり嬉しくない、憶ひ出を遺された。

M大使は、長く巴里に居られたので頗る美術通であつたし、實際素人ばなれがした水彩畫も作り、ネヴ河畔の役宅には立派な畫室も有つて居て、藝術家との交際もかなり廣かつたやうだ。

多くの人は、あの人を極めて平民的な人物と思つて居る。處が私は、僅かに二日ばかりの接觸ではあつたが、むしろ大いに貴族的な性格を備へた人だと思つた。つまり、頗る支配慾のはげしい性格、多分書生も獵犬も其點で愛したらうと考へられる、――官尊民卑の時代に官場に人となつた者が當然有つて居さうな、驕慢な氣質を認識したのであるが、二三度其驕慢な態度が私にもむけられたのであつた。或は何でもない事なのかも知れない。けれども其時私は深く侮辱を感じたのである。その一つはこんな事であつた。

急に大使が自動車で公園へ出かけやうと言ひ出したので、領事夫人が洋服をつけに居間に退いて居た時の事、突然外出の身仕度をした大使が私の仕事場にはいつて來て、

「どうだ、君は卽寫（クロツキイ）が出來るかね」

と云ひながら、小さな眼は『こいつどの位描くか』といふやうに、ちろりと眼鏡ごしに私の顏を見た。

「出來ます」

と私は答へた。

「ぢや一寸、僕がモデルになつてやるからやつて見給へ、五分間だよ」

と云つて、横顔を描かせるやうに椅子へ腰を下して帽子を取つた。そして

「どうだ、ペテログラードへ來んか、畫室もあるから、勉强するがいゝ。モデルも雇つてやるし、繪の具も買つてやらう。」

「え、有難う存じます。露都にももう一度參り度いと思ひます……、美術館に立派なグレコがありますね」

「あすこの、レンブランドや、プツサンを見たらう」

「見ました、『毛皮帽の男』といふのは高い處にあつてよく分りませんでしたが模寫ではないでせうね」

「立派なものだ、美術學校へいつたか」

「いや、參りませんでした、良いものがありますか」

「あるとも、美術學校には立派なものがある……巴里ではだれに就て學むだ」

「だれにも。たゞ自分の畫室で描いてました、『師匠はルーヴルに居る』といふ考へで、それが此頃の巴里の學生の風なんでして、……」。

「Aといふ男が巴里へいつたが……」

「來ました、私と同じ邸内に居ました」

「さうか、あれは畫かきらしい奴ぢやつた。可愛い男だつたよ、美術館で模寫をさしてやつたが、なかなか腕も達者な奴だつた」

こんな會話を交へながら大使はモデルになつて居た。私はチョークが二度ばかり折れたので急がしく削つた。『試して居るな』と思ひながら、毛を失つて特色ある抑揚を現した前額から後頭への印象を動い線でたしかめて居た。すると

「奥さんお仕度が出來ましたね、さ出かけませう」

と、ちつとも私に氣兼する風なくいきなり立ちあがつて、描きさしの印寫を覗かうともしず、

「さ、山本君！ 君も一しよにゆくんだ」

と言ひすてゝ、さつさと室を去つてしまつた。はつきり言ふが、私は其瞬間、背後(うしろ)から飛びかゝつて、無禮者!!と叫けんで撲り倒さうかと思つた。

後に其憤慨を領事夫人にもらしたら、

「私は御遠慮して廊下の端に立つて居たんですの、それを大使は御覽になるとすぐ立つておしまひなさるんですもの、山本さんにお氣の毒でしたわ」

と言つた。

秋の終りの頃、日本から一人の青年がモスクワへ着いて、K教授（此人は二年前からモスクワに止つて露西亞文學を研究して居た人である）と共に、一夕領事の晩餐に招かれた。其青年は、K教授の生徒であつたもので、南滿の東洋語學校へ聘せられてゆく途すがらモスクワへ立寄たのであつた。

此人が思ひがけなく、私の親友の家庭と懇意であつたので、久しく通信の絶えて居る其一族の近況をいろ〳〵と聞かしてくれた。

露西亜での作畫を壁のあちこちへピンで張てある、狭い私の寢室へ伴つていつて、不思議な亢奮を覺えながら、憩みなく、夜の更けるのも知らずに談し合つた。見るから敏感らしい此青年が親友の敵役に廻つて居る或悲劇をつぶさに語つたのち、彼れは聲をあらためて、

「あなたに家子さんをあげ度いといつて、皆さんが待つて居られますよ」

と云つた。私は微笑に顔がくづれた。

「お話で、家子さんがまだお嫁に行かないで居るのを知りましたが、僕は意外でしたよ、なんでも家子さんはもう妻君になつて居るやうな噂を聞いて居たもんですからねえ」

「そんな噂がありましたかねえ、何かの間違ひですね、多分家子さんもあなたのお歸朝を待つて居られるでせう。……御出發前、兄さんとでも、何か御約束をなさりはしなかつたのですか？」

「まつたくありません。……君も何だか御存じのやうですが、僕は其頃、女に欠伸されて、いや、あんまり序歌(プロローグ)が長すぎたもんですから運命てやつに欠伸されたんでせうよ。——とにかく、平氣で身をもちくずして、感傷を肴に飲だくれて居た時ですから、そんな話の出る機會はありませんでした。家子さんはあの時十六でしたよ、鄕里(くに)から出たばかりで、充分な髮の毛をハイカラに結つて、大きい赤い造り花を一つさして居ましたつけ、丸い方の血色の良い顔で、少しちゞれつ毛でしたね」

「いえ、ちゞれつ毛ぢやありませんよ、丸顔でもなく、むしろ細面(おもて)ですね。それに此頃は顔色は青い方ですよ。三崎の家(うち)には艇(ボート)がありましてね、家子さんはなか／＼漕ぐのは上手でした　泳ぎもうまいさうです」

「へえ泳ぎますか、僕なんぞは板子を兩手に二枚づゝ持つても沈むじまひますがね、アハツハツハツ」

私の心には、其夜から或調子が生じた。それは、無風帶を出ぬけた帆船が俄かに風を孕み出したやうでもあり、毀れた牧場に獸が戻つて來たやうでもあつた。とにかく、自分の行く手に處理を待つて居る多くの事務的な煩しい問題が急に情緒を有ち、『畜生!! すべて元氣よく頂戴するかな。』といつた運命に對する雄猛が胸の底で快活に叫ばれたのであつた。

私は、K教授にも領事夫妻にも、此心内の調子をかくさうとはしなかつた。むしろ浮ついて、

柘榴の實をお手玉にして遊べる兒等よ、
汝が野の芝は燒れたり。
土蜂の巢も燒れたり、
見よ、今し蒼穹に
殼から散る如くかすれゆく蜂のやからを。

○

黃金の片空に響き、生物は唾をふくめり
綠は女らの汗に濡され
綠は女らの乳汁を浴びたり、
此時、またも傷きし牡鹿來り
出づる湯にしばし浸れり。

◎

ポプラの葉のそよぎは金紙に銀紙、
そは靜心なき哀樂の螺鈿、
ポプラは廢れたる牧場を圍み
彼の獸らをなつかしむ。

○

空は膨れて呼吸を壓し
俄かにも裂けて震へり、
中空に投げられし虹を見よ、
また岡の上なる
茄子の畑をかへり見よ、
茄子の實はひとり汗ばみ
其花は虹を慕へり。

と、いふ巴里で作つた詩を讀むできかせたりした。

つひに冬が來た。厚い鉛色の雲が幾日も〳〵眼の上に垂れさがつて動かうともせず、やがて雪をおろしてだん〳〵と鞣のやうな氷屑を積らし、モスクワは美しい雪の都となる――。

私の歸心は切になつた。旅費と防寒具を得やうとして、熱心に水彩で日本風景を描きためて賣つたりした。

十二月七日の午前、私は羊の卷毛でこしらへた帽子を冠り、同じ毛で襟を飾つた防寒用の外套に着太り、絨紗で作つた雪鞋（ガローシ）を穿き、買ひたての旅行籠のなかに、畫や書の道具や、本や、土産物や、農民美術などを充したのをひつ提げて其夏、古行李を持込んだ同じ玄關口から、勇み進むで日本への旅に出發した。（八年十二月）



澁谷家の始祖

中條百合子

（一）

正隆が、愈々六月に農科大學を卒業して、歸京すると云ふ報知を受取つた、佐々未亡人の悅びは、殆ど何人の想像をも、許さない程のものであつた。

當時六十歲だつた彼女は、正隆からの手紙を讀終ると、宛然(まるで)愛人の來訪でも知らされた少女のやうに、ポーツと頰を赧らめて、我知らず黑天鵞絨の座布團から立ち上つた。

立ち上りは仕たものゝ、次の運動を何も豫想して居なかつた未亡人は、皺の深い口元に、羞らふやうな微笑を漂べて、そつと又元の座になほると、後の壁の方へ振向いて

「しげや、しげや、しげやは居るかい

と、御氣に入りの小間使ひを呼びながら、手を鳴らした。彼女は早速、此の輝やかしい報知を、親戚中に觸れ廻して、雨のやうな祝辭を浴びたく成つて來たのである。

完く、佐々未亡人の正隆に對する愛は、その熱烈さに正比例して、特異なものであ

つた。彼女の、鍾愛を越えて、偏愛に陥つたとさへ思はれる愛は、何かの折に親類の者等が寄ると集ると、一度は缺かさず皆の話題に上る程、激しいものであつたのである。

勿論、夫には正隆が末子であると云ふ事が、相當の口實には成つて居たゞらう。けれども、彼には、單に末つ子だと云ふよりも、より以上の追憶が負はされて居た。其は、彼の誕生其ものが既に、未亡人にとつては望外に近いものであつたと云ふ事と、彼の生命と、良人の生命とが、引換へに手渡しされたやうな形に成つた、と云ふ事とである。

廿年程も昔に、獨りの長男を育て上げて以來、母親と成る希望は、殆ど絶えたやうに見えた彼女が、孤獨な、頼りない未來を豫想して、自ら心を寒くして居た時に、思ひも掛けず胎に宿つた正隆は、その祝福された誕生後、僅か半年で、まだ五十にも成らなかつた父親を失つて仕舞つたのである。

其時、四十許りだつた佐々未亡人は、此の突然な良人の死に逢つて、殆ど食餌も喉に通らない程、悲歎に暮れると同時に、正隆は、愛すべき良人の最後の記念として、自分に與へられた者だ、と云ふ感銘を、烙印のやうに魂に刻みつけた。彼女は、尊ぶべき良人が、彼の死後自分を襲ふ寂寥を思ひ遣つて、此の望む事さへ不可能に見えた嬰兒を、自分に遺して行つて呉れたのだと云ふ感謝と追慕とに泣き咽びながら、空虚に成つた胸の上に、一人の瘠せて虚弱な男の子を抱き捧げたのである。

此の感傷が、未亡人の心には、不可抗な愛着を募らせずには置かなかつた。愛に對して、自發的であつた彼女は、明かに二種の、相異つた愛を混同して、正隆の上に注ぎ掛けた。彼女は、良人に對するやうな愛慕と眷戀と甘えとを、子供に對すべき母親の、大らかな愛護の中に混ぜ合はせて、彼を育てたのである。

斯う云ふ境遇に生れた子の例に洩れず、正隆は生れた時から虚弱であつた。

何かと云ふと直ぐ痙攣る、神經質な、泣き蟲な彼は、搖籃の時から、自分を取繞んだ、むせるやうな熱愛の中で、宛然温室の植物のやうな發育を續けた。種のうちから、硝子張りの室に入れられた脆弱い草の芽が、何時か其の不自然な熱度と、濕氣とに馴れて、時を經る儘に、一種の變種と成つて行くやうに、母未亡人の燒りるやうな抱擁を雄々しく撥ね反す丈の力を、生理的にも心理的にも缺いて生れ出た正隆は、人も知らず、勿論自分も知らない裡に、一種の變種と成つて、生活の中へ送り出されるやうに成つたのである。

只、可愛いと云ふ一字に、全心を打込んだ母未亡人を批判者とした正隆は、寧ろ當然とも云ふべき無反省を、極度に甘やかされた「我」に持つて居た。彼に、水を掛けて遣るものも無ければ、雜草と燕麥との區別をすら、教へて遣る者が居なかつた。

只、保護である。眞向からの抱擁が、豐饒な肥料を注ぎ込む許りである。從つて、正隆は、一つも選擇されない、あらゆる性癖の芽をぞつくりと生え茂らせたまゝ、野放しの未耕地として、自身の心を抱いて居たのである。けれども、總ての點に、安穩な、平調な生活を續けて來た正隆は、見えない種々の、運命的な缺陷を、そつと、相當な才能と美貌との下に沈ませて青年に成つた。

母未亡人の注意によつて、生れて一年經つと別家して、澁谷家の姓を繼いだ正隆は、人々の一生に、或場合には大きな損失さへも與へる徵兵からも、完全に解放されて、明るい將來の中に、誰でもが持つ、社會的野心を漂はせながら、當時は、素晴らしいものに思はれて居た、學士と云ふ肩書を、擔はうとしたのである。

少年時代から、自分の容貌と、才能とに自信を持つて居る上に、亡く成つた父親や、伯父程年の違ふ長兄の占めて居る地位等を、我知らず目算の裡に置いて居る正隆は、彼の前途に、一面から云へば、自惚以上の光明を持つて居た。昔

通の青年が期待するより以上の名譽なり、榮達なりが、つひ手近な處に、彼を迎へて、腕を擴げて居るやうな心持が仕て居たのである。が、然し、その名譽なり、榮達なりと云ふ、輝やいた彼方と、今、四角い制帽を戴いた自分との間は、ぼんやりと霧の中に消え去つて居る。道程は、如何那風なものだか、其さへも思考の材料とは成つて來ない。正隆にとつて、當時多くの青年が叫んだやうな、意志の強固な勤勉等と云ふ事は、恐るべき無雑さを以て現はれた。

蒼白い、濃い髮の毛の所有者である正隆は、纎い腕を形よく組合はせた儘、貴族的な冷笑と物懶さとを合はせて、眞正面から、世間へぶつかつて行かうとする朋友達を、眺め遣つたのである。

其故、正隆は、間近に横はる卒業後の生活方針等に就いては、何も纏つた計畫は持つて居なかつた。只、自分丈の才能があれば、誰か其を發見して、又無い者に尊敬して與れるだらう、尊敬するに違ひないと云ふ、希望とも臆測とも付かないものが、漠然と、然し、濃厚に、彼の細い胸を滿して居たのである。亡父の遺産で、當面の生活の爲に努力しないで濟む正隆は、自分の才を使つて貰ふ爲に、何處へ頭などを下げるものか、と思つて居た。立派な學識を持ちながら、泣き付いて懇願する恥辱を、忍ばうとする必要は、求めても見出せなかつた。生活と云ふものが、不思議に固定して、動くべき軌道の上を、何の驚異もなく動いて行くのを傍觀仕馴れて居る正隆は、自分の才能が發揮されたからと云つて、其で、今日まで流れて來た、大河のやうな自分の生活が、如何う成るものでも有るまい、と云ふ心持も仕て居た。轉がつて行くトラックの上で、幾何、踊つて見ても舞つて見ても、結局は小車の行く處へ、連れて行かれる許りではないか。

正隆は、此の氣分に、絶望を混ぜては居なかつた。然し、委せた、萎びた無爲である。從つて、彼の持つ希望の中には、焔がない。燃え上る何物をも含んで居ない。

正隆は「青年」を失つて居たのである。

母未亡人の偏愛が醸した、性的の自墮落は、殆ど彼の少年時代から、魂を無責任な追從や阿諛で硬化して來た。彼の感じる生活と云ふものは、相當な歡樂と、相當な名譽との可能を持つた、何かはつきりしない、或程度までは退屈な時の連續であつた。

身も魂も投げ込んで、白熱した生命の威力に洗はれなかつた正隆は、自負を持ちながら、今の生活に何等かの改造を實すべきものとして、自分の才能を考へる事は出來なかつた。生れながら與へられた、際立つた語學の才と、文才は、其等の有る事は事實でも、「今日」とは何の連絡がない。言葉を換へて云へば、正隆は、自分の持つ才能を自覺するから、その發輝を本能的に希望するので、其の才能の方向が暗示する名譽が、自づと產む生活上の影響などは、問題の中には入つて居なかつた。

正隆の場合では、斯樣な心持の持つ、二樣の力の、只消極のみが、感化を與へて居た。仕事の純粹さに對する希望ではない。生活其ものゝ弛緩が、彼の魂の四隅を、確かりと釘づけに仕て居たのである。

(二)

何事かと思はせるやうな歡迎に抱き取られて、歸京してからも、正隆は、何を思ひ煩ふ事もないらしく見えた。母未亡人に金を貰つて外泊をしたり、時には涼風に、長めな髮を嬲らせながら、招魂社の池の邊で、龜の子の甲羅を眺めたりしながら、正隆は悠然と、生活の戶口に彷徨して居たのである。

けれども、母未亡人は、正隆ほど安閑とは仕て居なかつた。

瞳よりも可愛い、唇よりもいとほしい正隆を、その美貌に於て誇る未亡人は、又、彼の榮達に就て、焦慮せずには居られない。生活の爲に息子を働かせるのではない、と云ふ自信を持つ彼女は、殆ど正隆と同量の自尊心を以て、彼の地位を期待した。そして、三月程經つと、長兄の紹介で、正隆は、或官立農學校の教授と成る事に成つた。

其の農學校と云ふのは、東京から數百哩南のK縣に在つて、校長と長兄とが、兼て親しい友人であつた關係から、彼は全く好意で、比較的高級な教授の空席を占める事に成つたのである。

東京を離れると云ふ事は、少くとも、彼を取繞む快樂の減少と云ふ點で、正隆を躊躇させた。けれども、ひどく乘氣に成つた母未亡人は、此を二度と得難い首途として、正隆を説得した。

まだ漸く廿四の彼に比較して、明に優遇である地位は、正隆にとつて、勿論不愉快な招聘ではない。周圍の無條件な賛同を見ると、其でも厭だと云ふべき理由を持たない正隆は、漸々僅かな小徑を現し始めた、彼の道を眺めて微笑した。何者に對してとも分らない、輕い侮蔑と、驕つた點頭とを以て、正隆は、新に提出された位置を承諾したのである。

彼の此の首途を、彼女の思ひ得る最大級の形容で、神聖な、祝すべきものと仕た佐々未亡人は、まるで初陣の若武者を送るやうな感激で、送別の宴を開いた。

親類の者は皆、九段の御祖母様の御大相が始まつた、と云ひながら、集つて、笑つて、彼を祝して、歸つて行つた。が、其の宴を、決して其那輕々しいものと思つては居なかつた未亡人は、人が散つて靜かに成ると一緒に、微醉を帶びた正隆を、古い、佛壇の金具許りが、魂の眼のやうに光る佛間に連れ込んだ。そして、周圍の襖をぴつたりと閉て切ると、未亡人は、正隆が何年にも知らなかつた、嚴格な、威嚇的な調子で

「正隆」

と、息子の名を呼んだのである。

正隆は、思はず顔を上げて、母未亡人を見た。彼の、その豫測し難いものに出逢つた困惑で、何時になくたぢろいだやうな表情を、きつかりと押へるやうに、未亡人は

「正隆、お前も、此から漸く人に成る、今日は大切な日です。だから私も、心許りの御餞別を仕て上げたいと思ふのだが、お前は聞く氣が御ありかへ

「阿母さん——

「はい。——私が是非云つて置き度いと思ふのはね、他でもないが、お前が世間知らずだから、他人との懸引を遣り損つては大變だと云ふ事なのですよ。

斯樣な前提を置いてから、未亡人は、小一時間も、彼女の信ずる處世術とも云ふべきもの、其は唯一の方法で、最も完全なものだと思はれる處世術に就て、正隆を諭した。

愛されて育つた者が、總てさうであるやうに、他人の惡意を看破するに遲い彼は、若年でありながらよい位置に就き得た後援者の力、その力が齎す、嫉妬、反感、羨望等と云ふ人間の弱點を、巧く切り拔けなければ成らないと云ふ事、又、他人が利己的に他人を陷れようと仕て使ふ奸策の種々な種類と、對抗策。其等を、未亡人は、正隆が思はず眼を瞠つた程、辛辣な、冷酷な、執念深い音調で、些細な點までも說明して聞かせたのである。

此の華奢な、切下げの老人の胸に、どうして此程の激しさが包まれて居るかと思ふ程、亢奮した未亡人の言葉によれば、世の中は、要するに敵同志の寄合だと云ふやうにさへ思はれる。彼が幼年の頃から、よく繰返されたやうに、生れてから、死ぬまで、信賴すべきものは、親が在る許りだ。如何那外觀の深切も決して、內心の眞實は示して居るもので

はない。用心をし、用心をおしよ、正隆、用心をおしよ。

母未亡人の記憶に、今も尙鮮やかに遺されて居る亡父が、永年樞要な地方官として經て來た生活の中には、如何那迫害が伏せられて居たか、如何那、難關が、付き纏つたか。其等は、悉く、限りある個人の力等では豫防する事も何も出來ない程、多量であり、複雜であつたと云ふ、母未亡人の說明を事實とすれば、如何程大膽な人間をも、尙脅かすに充分な丈、惡の微妙な筋書(プロット)を持つて居た。

氣の勝つた未亡人は、自制を失つた興奮に燃え立ちながら、激しい、容赦のない口調で、正隆の心を、ビシ〳〵と鞭うつた。彼女は、持ち前の癖を出して、正隆が如何程不安な眼差しを仕ようが、憐みを乞ふやうな溜息を吐かうが頓着なく、彼女の暗い、凄い解剖を仕續けて行つたのである。

「だから、お前、昔から、人を見たら泥棒と思へとさへ云つて居るぢやあないか。世の中へ出て御覽、眞個に油斷は大敵ですよ。御亡く成りに成つたお父樣なんかも、まるで蜘蛛の巣見たやうな奸策許りには、如何那に御難儀なすつたか分つたものぢやない。ね、正隆、私はお前さんの行末を案じる許りに、此那心配まで仕て居るのですよ。御分りだらう、だから、ね、何でも氣を許さずに、怕い人に成つて居なければいけませんよ。人間と云ふものは妙なもんで、一度人に馬鹿にされたと成ると、もう決して、二度と頭の上りつこがないのだからね、正隆——

さう云ひながら、今まで確りして居た未亡人の聲は、俄に顫を帶びた。

「眞個にね。何卒(どうぞ)仕合はせに成れますやうに。私(わたし)だつて、もうさういつまでも、お前の世話は仕て上げられないのだからね、確乎(しつかり)して御呉れ、私(わたし)が居なく成らないうちに、せめて足場だけでも拵へて御呉れ、たのみますよ。

急に、佛壇の方へ振向いた未亡人は、最後の一句を、半ば途切らせたまゝ、止途もなく淚をこぼし始めた。

涙がこぼれ出すと一緒に、未亡人の感じは悉く一變した。今までは、何か陰險な、凄い、心持の惡い老婦人のやうに見えて居た未亡人は、急に、親しい、見なれた涙脆い母親と成つて、正隆の前に現れたのである。

ホロ〳〵と光つて、膝に落ちる涙を眺めながら、正隆は血の氣の失せた顔を引歪めた。醜いと云ふのだか、恐ろしいと云ふのだか、其では餘りひどすぎると云ふ感じが、泥を口一杯突込まれたやうな胸苦しさで、正隆の心に迫つて居た。眞個に、事實に、其那のが、所謂世間なのだらうか、其程惡意と、嫉妬と、猜疑に滿ちて、食ひ合ひをする世の中なのか？

流石の正隆も、うん左樣だ、とは思ひ兼た。疑ひを挾まずには居られない程、母未亡人が、棒切れにかけて、擧げて見せた幕の彼方は、暗憺として居た、何處にも光明が差しては居ない。一面の、眞暗闇である。その暗闇の中を、芝居の「だんまり」のやうに、徐々と覘ひ寄る奸策を、又、こつそりと構えた術策で身を替す世の中は、若し其を事實とすれば、餘りに堪らなすぎるものではないか。

然し、母未亡人の言葉によれば、地位の高さと、名聲の範圍に應じて、其等は、擴大される許りだと云ふのである。

正隆は、思はず

「阿母さん

と云つた。が、其儘ぐつと窒つて仕舞つた。彼は、何か一言で、其の暗闇に何等かの餘裕をつけたかつた。出來る事なら、一思ひに、左樣那事ばかりがあるものか、と勇ましく否定して仕舞ひたかつたのである。が、彼はさうする丈の力が無かつた。何より大切な、魂其ものゝ本然の力が乏しかつた。

彼は、母未亡人の胸に巣喰つて居る、人間丈を騙かす小惡魔の尻尾を見る事が出來なかつたのである。

實際正隆は、或程度までの放蕩兒であり、小さな意味の皮肉家でもあつたが、日常生活を構成する平和な餘裕が、其處まで彼を、否定的な、氷島のやうな觀察者には仕て居なかつた。

勿論、彼は騙された事もある。又、自分に騙される程度の者を、嘘で片付けた事もあつた。生活そのものを、火花を散らす激烈なものとして考へて居ない正隆は、總てを、程々な生温るさで味つて居るのである。善と、人が呼ぶものに對して、燃える感激を持たない彼は同時に、惡と呼ぶ者に對して、寛大な、或は無關心な主人であつた。

多くの人々が、さうして、一日一日と送つてやるやうに、善と惡との、互ひ違ひの出現を一重隔てた彼方に眺めて、薄すりとした暖みを、あらゆる相互關係に感じて居るのである。よい事も、又、惡い事も、其等は、總ての幸、不幸、運、不運を包含して、錯綜しつゝ起るものではあつても、絕對の自分の安定には、要するに、微力な影響と成るに過ぎないと思ひ込んで居た正隆は、愈々、その信念を、試みられようとする時に成つて、殆ど、根本的な打擊を與へられた譯なのである。

性格の持つべき力の缺乏から、正隆は、生命を賭しても敢行した、眞實さの爆發に對しては、弱い、皮肉な冷笑を以て對しながら、所謂人情の、交感的な微温を否定する事は出來なかつた。

その人肌の微温を四圍に感じて居ればこそ、始めて、正隆には息がつけた。彼の冷笑は、決して、故意に自分を陷入れようとする奸策に向つてまで、平然と放たれる程、力强いものでは無かつたのである。

彼が考へた、羨望と云ふものは、單に彼の幸福と、其他あらゆる彼の仕合はせを裏書きするものとしてのみ現はれたのである。

奸策――。正隆は、急に世の中が惡く成つたやうな眼を擧げて未亡人を眺めた。奸策。彼の、贅澤な、物懶い横目で

は、もう如何うにも、負はされない一種の力、何か不氣味に因緣的な、陰氣な意地惡いものが、心の奧からしん〳〵と湧き上つて、自分の周圍を立ちこめるのを感ぜずには居られなかつたのである。正隆は、今まで、ほのかに、柔かく、甘えつゝ馬鹿にして居た世の中と云ふものに、運命のやうな畏怖すべき何物かを感じた。

その摑めない、形の定らない、其で居て、何をするか解(わか)らない豫感は、正隆を、ぞつとさせる。母未亡人の說明通りぞとも、信じ兼ねながら、其かと云つて、其を拒絕する丈の、燈を自らに持たない正隆は、不安な、落付かない懸念(アンキザエテイー)の横木に、吊り上げられた。が、然し、彼は、もう後へ引く事は、不可能な心持がした。

翌日、正隆は幾個かの荷物と一緒に、校長の副島氏に贈るべき、大花瓶の箱を抱いて、南に下つたのである。

（三）

母未亡人の、單に比喩ではなく、呪ふべき警告に、慄つと心を縮めながらも、まだ若い正隆は、流石に此から自分を迎へようとする圍境には、多少の光輝を認めずには居られなかつた。

つい先頃まで、彼の記錄する一點の差にも、大勢の學生達を悅ばせ、又落膽させた教授と云ふ位置に、今、換つて自分が立つのだ、と云ふ想像は、思はず正隆の肩を竦めさせる。

彼は授業の方針とか、理想とか云ふ事で、頭を惱ます種類の人間では無かつた。

生來、虛弱な健康に宜しいと云ふので、野天に晒される事の多い農科に籍を置いた正隆には、地味な研究に沒頭するよりも、多勢の青年を前に並べて、得意の獨逸語を、美しい發音で喋る事の方が、遙に大きな快感であつたのである。まして、危く一二點の差で、及、落の決定するやうな學生が、私に教師を訪問して、寛大な採點を哀願するやうな場合

を、自分の身近に置いて見ると、正隆は、或る亢奮を感じて、優者を自負する快い微笑が、幻のやうに、彼の蒼白い頰に上るのである。

其那時、彼は、正、不正で、行動の是非を判別する氣分には成つて居なかつた。

只、當人には飽くまで、嚴格な審判者として面しながら、いざと云ふ實際の場合に、相當の斟酌を仕て遣る、師らしい態度に自分を假想して、我知らず幸福に成る。正隆の好きな、仄温い人息れが、ほんのりと心を包むのである。

けれども、愈々K縣に到着して、彼の宿なる謠曲の師匠の家に落付いて見ると、正隆は、自ら湧き上つて來る、後悔に似た感じを壓へる事が出來なかつた。

其程周圍は、豫想外であつた。豫想以上の「他國」が、徐々四邊を見廻しながら、近寄つて來た彼を、ぐつと、無雜作に摑み込んで仕舞つたのである。

休暇の出入りにさへ、母未亡人の大業な歡迎に抱き取られ、送り出されて居た正隆は、人々の冷淡な事務的感情に、先づ心を怖やかされた。

長い旅行の間、時を忘れた呑氣さに委せて、私に豫期して居た歡びの言葉等は、誰の唇からも洩らされは仕ない。只、一人の、若い、物馴れない新任の教師を迎へた周圍の、仕來り通りの挨拶と、あとは、物珍らしい、穿鑿好きな注目が、往來を通る、俥夫の瞳からさへ射出されて居る許りである。

正隆の直覺に依れば、その注目も、決して、畏敬から湧き出して居るものでは無いらしかつた。

骨格の逞しい、昔の大和民族の標本にも成りさうな若者達が、大聲で喚めきながら行來する往來を、弱々しい、强調して云へば、此の地方の小娘より果敢なく見える彼が、强いても容積をかさばらせるやうに傲然と歩く姿を、人々は、

どんな氣持で見て居るか、其は正隆が、思ひ度く無くても思はずには居られない程明かな事である。

殆ど無數の群に對して左樣な感じを、第一の印象として得た正隆は、愈々、實物として、農學校の校舍を見、學生を、直接交渉の對照として眺めた時に、まるで、憤りに近い程の、不平を感ぜずには居られなかつた。

多少の想像を色づけて描いて居た校舍は、煉瓦造り處か、古び切つた木造で、其も漸々土臺が崩れないと云ふ許りの荒屋である。その雨風に曝されて、骸骨のやうに成つた部屋々々には、大きな、赧ら顏の山賊のやうな學生達が、肩を聳し、眼を怒らせて控えて居るのである。

其のみならず、彼等が喋る言葉は、何よりも正隆を恐脅した。

一目見た丈でも、弱い彼を威壓せずには置かない彼等の體力の異狀な差は、更に不可解な彼等の方言を添へて、正隆を息も吐かせず、縮み上らせたのである。

勿論正隆は、K縣が、特殊な方言を持つて居る事は知つて居た。けれども、東京に生れて育つた正隆は、方言に就ては、慘めな程無智であつた。又その無智である事を、都會人が持つらしい淡い誇りで認めて居た彼は、今、實際の場面にぶつかつて、少なからず面喰ふのである。

一方から云へば、自分の經驗から、學生丈は少くとも、標準語を使ふだらうと高を束つて、安じて居た樂觀が、現在彼等が喋る、妙に抑揚の强い、丸い、男性的であると同時に、何か原始的な氣分を持つた言葉によつて、見事に裏切られた事に成るのである。

正隆は、完く、うんざりした、途方に暮れた。が、而し、左樣云つて濟む場合ではない。

生れて始めての經驗に逢はうとして、自分自身に對してさへ、安易な信任に落付いて居られない正隆は、第一、外觀

の壓迫に、或不安を感じさせられ、又、言葉の困難に遭遇して、殆ど張切れさうにまで、神經を緊張させた。同じ日本人でありながら、言葉が思ふやうに通じない、其も、自分の言ふ事丈は、滯りなく先方に通じながら、相手の云ふ事を、明瞭に掴めないと云ふ事は、單純な言葉の不自由より、更に、幾層倍か、不愉快なものであつた。

つまり、正隆は、自分の云ふ事は、幾何でも批評される位置にありながら、その批評を、隅から隅まで理解して、又批評を投げ返す事の出來ないのが、何よりも焦（いら）だゝしいのである。

年齡の差異とは反比例した自分の學識に對して、激しい自負は持ちながら、新來の教師として、當然免れ得ない批評を、よかれ、あしかれ、自分には譯の分らない言語で加へられる事が、正隆にとつては、ひどい、不安（アンイーヂー）なのである。

思ひ上つた、人を人とも思はぬらしい笑ひを口邊に漂べながら、內心は、物に拘泥せずには居られない、臆病な、退嬰的な彼は、絕えず、他人の言動に、關心の目標を置いて居る。從つて、斯樣な或均衡を失つた位置に置かれると、彼の不安や焦躁やは、殆ど想像以上にまで、彼を苦しめ、惱ますのである。

斯樣な、言語の不通等と云ふ事は、或人にとつては、問題にも成らない事であらう。又、相當の苦痛とは成つても、到底、正隆の感じた深さにまで進むものではなかつたらう。新來の教師を仰いで、未だ正體を見極めない者に對する愼重さを持つて居る學生に向つて、若し彼が、快濶な、ざつくばらんな口調で、

「私には、未だ君達の言葉が、よく呑込めないのだから、成丈、分り易く喋つて呉れ給へ」

と云ひさへ仕たら、其時から、總ては、もつと單純に、且つ明快に成る筈なのであつた。けれども、彼に、其は出來なかつた。

對照物の價値が、低ければ低い程、彼の、不可能の量は增して來る。若し此が、何か至難な學理上の問題でゝもあれば、

正隆も、解らないものは解らないと、簡單な心持で向はれたであらう。けれども、學識と天分とを、豊に持つた、青年教授として、好意に滿ちた副島氏の紹介につれて、壇に上せられた自分が、如何うして此那、田舍言葉が分らないと、白狀出來よう、斯う云つて、正隆の賴りない、孤獨な自尊心が呻くのである。

勿論、此が位置顚倒して、自分が一人の學生で、傷だらけな机から逆に此方を眺めるのなら、此那苦痛は、百分の一にも滿たないだらう事を、正隆は知つて居た。

けれども、敎室に出て、生徒の質問を受ける每に、感違ひする事を杞れ、自分の弱點を曝露する事を恐れ、曖昧な言葉尻を、臆病に濁しながら、其でも、尙自分の自尊心に突つかれた權威を失ふまいとする正隆の苦勞は、全く、彼にほか解らない重荷であつた。

其許りか、正隆にとつては、每日顏を合はせなければならない同僚が、又堪らないものなのである。

(四)

正隆が同僚に對して持つた感じは、矢張り一種の不安と、云はるべきものであつたらう。彼は、仲間の年長者達が、數年若輩である自分に向ける、試問的な眼を厭つて居た。表面は、好意と助力とに滿ちて居るらしく振舞ひながら、內心では私に、自分と彼とを計量器に掛けるやうな態度。正隆は、假令、如何程同情するらしく

「いや御困りでせう。當分は誰でも閉口しますよ、まあもう暫くです

等と、言葉の不自由を想ひ遣つて吳れても、裏ではきつと、自分の鈍を笑つて居るに違ひないのだ、と思はずには居られない。何も、其を證明する實證は上らないでも、正隆は、總てを其那風に思はずには居られない氣分に成つて來た

のである。
多くの人の中には、實際其那者も有つたかも知れない。けれども、決して其が全部ではないと云ふ事は、斷言出來る。けれども、正隆は、其等の種類を鑑別する丈、自分を開いて居なかつた。自分の魂に、日の目が差さないやうに封鎖した彼は、又他人の心へ、光線を送り、見出す事は出來ない。絶えず揉まれる、落付かない、不眞實な周圍を感じる正隆は、凝と、寂しい、腹立たしい心を噛みながら、同僚に背を向けた。
彼は、濕みのない、堅い、辛辣な、裏切者が濆れた片目許りを光らせる生活を感じたのである。
冷酷だ！
何かにつけて、正隆は斯う呟く。
何が、冷酷なのか？　生活、人生が、冷酷なのだ。何故、冷酷なのか？　其は、はつきりと說明の出來ない心持である。けれども、其が、冷酷であるの丈は、明かな、或一種の心持。其は、容赦なく片端から、自分の持つ希望も、幸福も、努力も、何も彼も擲き落して泥まびれに仕て仕舞ふやうな慘酷さ、胸が搾られるやうな寂寥、皮肉、利己主義、其那感情が、皆ごちや混ぜに成つて、醱酵した心持である。
その薄ら寒い、暗い、じめ〳〵した氣分が近寄つて來ると、正隆は逃げ出す力さへ失つて仕舞ふのが常であつた。
彼は淋しく成る。感傷的に成る。そして、子供のやうに、愛撫されて泣き出したく成つて來るのである。
けれども、何處に彼を泣かせて遣る人が居るのか、正隆は絕望する。
老人の謠曲の師匠。老耄に近い年長者連。皆關係がない各自の生活の中に、巢喰つて居る。敎授と云ふ位置が彼を縛つて、假令、お座なりにしろ、美くしい顏に憐れむやうな表情を浮べて、彼の不平に耳を傾けて吳れるだらう女性にさ

へ、近寄れない正隆は、全く、自分の心の遣場所を持つて居なかつたのである。

靑年が、生活の第一歩を踏み出さうとして、一滴は、必ずこぼすだらう涙。その記錄すべき深い、靜かな、祈願と、憧憬と、漠然と直覺する失望に似た感じが、正隆の場合では、只、感傷的に傾き過ぎて居た。正隆は自分で、自分の魂、生活を御して行けなかつた。周圍の他力に、彼は支配される。自分の心を堀拔く事も出來ず、人の心は、まして燃え拔かせる丈の力を持たない正隆は、胸に滿ちる海潮のやうな感情を、湧くにつれて、後から〳〵と澱ませて行つたのである。澱ませられながら、容積を增す感情は、如何うにか流動しようと身を踠く、その最も自然の結果として、正隆は、自分の身邊に存在する唯一の弱者である學生に、その感情の、甘饐へた、胸のむかつく沈澱を、浴せかけたのである。其にしても、正隆は決して學生を、眞正面から叱責したり、急しい課題の續出で、困らせたりする種類の意地惡さを持つては居なかつた。

彼は、自暴自棄に成つたのである。

今までは、相當に緊張して立つた敎壇の上に、正隆はもう、木偶のやうに押据つた。そして、義務的に獨逸語を、美くしい聲で讀み上げた儘、後はもうかまはない。席順に、一人宛、一節の敎課書を輪讀させて、間違はうが、支えようが、彼は注意をしようともしなかつた。凝と机に頰杖を突いて眼を伏せた正隆は、頭の先から、細い爪先までを滿たした、何とも云へない焦躁と、淋しさと、棄鉢とに身も心も溺らせて、殆んど忘我に近い憂鬱に沈み込んで居るのである。

けれども、斯樣な正隆の態度は、決して學生達を、長く鎭めては居なかつた。

三箇月も經たないうちに、正隆は、學生中の嫌はれ者に成り終せた。

只さへ彼の曖昧な、尊大振つた、弱々しさに何かの物足りなさを抱いて居た少年、或は青年達は、彼の不眞實な擧動を見ると、もう默つては居ない。彼の無能を罵る聲や、彼の不熱心を訴へる聲が、教員室まで侵入して行き始めたのである。

左樣なると、同僚の多くは、問題の主人公たる正隆に對して、何か不自然な、敬遠とも、嫌厭とも付かない表情で、相對するやうに成らずには居ない。

學生と同僚との、不安定な觀察を身に感じる正隆は、心の中で、總ての人間共を侮蔑し、罵倒しながら、表面は平然と、蒼白い頰に冷笑的な薄笑ひの皺を刻みながら、故意と、假裝した動じなさで、皆の、その眼前に姿を持ち出すのである。

全く、此は決して、正隆一人の不幸ではなかつた。彼の周圍に生活して、程度の差こそあれ、多少とも彼と關係を持つ總ての者が、彼の氣分の免れ得ない影響を受けた。

陰氣な、外の人間の裡に在る快活さや、率直さを一目で射殺すやうな正隆の眼を見ると、一人として、元の明快な氣持を保つて居る事が出來なく成る。

妙にこぢれて、焦々しい氣分が、電波のやうに、魂から魂へと傳つて、等しく同樣の苦汁を嘗めさせられずには居ないのである。

斯樣にして正隆の存在が、今まで相當の圓滑さで流動して居た生活の、大きな暗礁に成つたのを心付いた人々が、暗默の中に、彼の自決を諷刺したのは、寧ろ當然とさへ云はるべきものなのである。

可なり敏感な正隆は、勿論此の雰圍氣の持つ意向（インテンシヨン）を知らない筈は無い。彼は、言葉よりも明に、其等の效果ある暗示を讀んで居たのである。けれども、讀んで居たに拘らず、正隆は、自他の責道具である教壇から、身を退けようとはしなかつた。決心をしない許りか、彼には、その計畫さへも無かつた。計畫させないものは、單に正隆の持前である優柔不斷と云ふよりは、寧ろ、ぐつと居直つて、胡座を掻いたやうな一種の意固地が、彼を、恐ろしい搾木に縛り付けて仕舞つたのである。

そして、その意固地を掻き立てたものは、內攻に內攻を重ねた、彼の不安や焦躁の凝り固りである。

時が經るに連れて、人と人との相對的な、複雜な、微妙な、流轉する心の折衝に疲れ切つた正隆は、極度の困憊から、終に、あらゆる不幸は、皆、何人かの憎くも企圖して置いた、一種の惡計によつて齎されたものであると、確信するやうに成つて仕舞つたのである。床柱も、疊も、程よく寂びた離座敷にポツネンと坐りながら、正隆は、よく、その見えない敵に向つて呪咀を投げた。

第一、正隆にとつては、此の事の起りからが、疑問に成つて來た。此程、言葉の不自由な、封建的な地方へ、何故、何の豫備智識も持たない自分が、投げ込まれたのだらう。困るのは、解り切つた事では無いか。

其の困るのを見て、皆が內心では侮蔑しながら、輕視し、邪魔物扱ひにしながら、表面丈は、何處までも、親切さうな、好意を持つた仲間らしく扮つて居る。それのみか、普通、斯樣な狀態に成れば、當然、提出されるべき免職沙汰も持ち上らないのは、如何う云ふ譯なのだらう。

若し、眞個に自分の價値を認めて、留任を願ふならば、何より自分には直接な關係を持つ學生に對して、何等か、緩和的な調停が與へらるべきではないか、其だのに、依然として、學生は自分の惡口を云ひ、解らない言葉を連發して苦

しめる儘に放任して置きながら、其から逃れる方法として免職させようともしないと云ふ事は、正隆を考へさせる。

つまり彼等は、逃路を塞いで置いて、火を掛けたやうなものではないか。何か、魂膽があるに違ひ無い。必ず、何か、在るのだ。誰かゞ自分を苦しめて、悶え苦しみ、身を踠くのを見て、そつと舌を出して居るに違ひないのだ、とさへ、正隆は思ひ始めたのである。誰だらう？

誰が、幕の彼方で、此の憎むべき悪策の糸を操つて居るのか。

正隆は、蒼い額に、切り込んだやうな縦皺を寄せながら、瞼を嶮しく引そばめて、森閑とした周圍を睨まへるのである。

暗い、鋭い正隆の直視の前には、いつも、桑の小箪笥と書棚とが、行儀よく、手を入れられて並んで居た。

まるで、結婚でもしようとする愛嬢に持たせるやうな亢奮で運ばれた、此等の女性的な、贅澤な調度を見ると、流石の正隆も、彼程の亢奮と愛とで自分を送つた母未亡人が、その黒幕の彼方の人物だとは思ひ得なかつた。彼の揺籃の時から、細胞にまで浸み込んだ既定的な愛の信頼は、其處まで延びる彼の疑ひを許さないのである。母未亡人で無いと確定すれば、最も手近な處から、この探求を進めようとする正隆は、勢ひ、第二の嫌疑者として、長兄の正則を、索いて來なければ成らない。

正則は、如何うだらう、

此處へ來ると、正隆は、蒼白い額を灰色にして腕を組んだ。自分に、今日の位置を紹介した當人として、若し疑へば、疑へる場所に、長兄の姿は立つて居るのである。

此處へ來させると云ふ、第一の動機は、兄である彼が、作つて呉れたものでは無いか、其故、若し彼が、自分を陷入

れようと計畫したとすれば、もう、その最初の第一段から、呪ふべき惡意が、親切らしい「兄」と云ふ人間の手に隱れて、前途に投じられたとも、云ひ得るのである。

又、實際、親子程年の違ふ兄弟は、年齡の差以上に、母未亡人の偏愛によつて、互の親密さを薄められて居たのは、事實である。長兄が、もう一人前の青年に成つた頃、誕生した正隆は、連絡を取る事が、不可能な境遇の差と、經驗の差から、殆ど、伯父に對する程度の、關係ほか持つては居なかつた。其故、正隆は、此の一點のみを强調して疑惑を進めて行くと、もう一寸の、際どい處で、最後の結論が引出されさうな處まで、深入りを仕て行くのである。血族關係で結び合はされた二人の人間が、相反目仕合つた場合の、慘憺たる、惡どい爭鬪の歴史を擴げて見ると、正隆は、息が窒りさうな物凄い恐怖を抱かずには居られなかつた。其と同時に、其が餘り恐ろしい事であるが爲、其が餘り淺間しい事であるが故に、却つて、自分の運命に現はれて來さうな心持さへする。

如何うだらう、眞個に、兄、兄貴なのだらうか。

正隆は、我にも無く溜息を吐くのである。

けれども、正隆の目前に、まざ／＼と浮んで來る長兄の、彼とは正反對に分厚な、正直さうに丸い、微笑に滿ちた表情を想ふと、彼は、決定仕かねる。

亡父に生寫しだと云はれる中年の、成功と、愛とで寛大に廣がつた額の所有者である長兄の、見えない宙に、どつしりと据つた像を取り圍んで、や〻暫く徘徊する正隆の、怨靈のやうな疑ひは、もう一息と云ふ處で、いつも、動し得ない何物かにぶつかつて引退る。其の敗北を、喜びと安堵と、半ばの口惜しさに見返りながら、蛇の頭は、又する／＼と、第三の人影に窺ひ寄らうとするのである。

此の様にして、日に幾度と無く這ひ廻る、正隆の摸索は、結局、幾百度繰返しても、要するに摸索と云ふ程度を越す事は無かつた。其に拘らず、疑はずには居られない彼は、探求の失敗で、懐疑の根を洗はれて仕舞へない彼は、散々彷徨ひ歩いた末に、いつも定つて、何か非常に不確な、漠然とした一種の人格が、自分を絶えず付け狙つて、悪意の籠つた羂を張つて居るに違ひ無い、と云ふ處に落付くのである。

其の不思議な力を持つた者は、決して、單純に運命とは呼ばれなかつた。自分の幸福なるべき運命の大道に、邪魔を出す、他の何人かである。明に人格である。

同僚や、生徒の彼方に身を潜ばせて、巧に不幸の糸を引く何者か、運命的な人格なのである。

正隆は、その、彼の前に朦朧と現はれた、悪意の妖魔に向つて、居直つたのである。

正隆は、自分が不幸なのも、他人が不幸なのも知り抜いて居る。然し、その見えない何人かの悪策に負けて引下るものかと云ふ反抗が起つた。自分を取圍む總ての者は、何等かの意味に於て、その影の人の暗示を受けて居る。誰も、その者自身ではない。が、誰かゞその者の一部となつて居る。

正隆は、我と他人とに向つて、

「どうでもしろ、

と云ふ、捨科白を投げたのである。

自暴自棄な捨科白を投げながら、正隆の想像の裡には、不圖、係蹄に懸つた狼と、半狂亂で取組み合つて居る獵師の姿が、浮み上つた。

積つた雪の深みに懸けた係蹄に、何も知らない狼が、餌を漁りに來て足を噛まれたのだ。樹蔭で様子を覗つて居た獵

師は、旨いぞ！ と云つて手を打つただらう。

けれども、いざ手取りにしようと掛つて見ると、命がけで飛び懸つて來た牙に捕へられて、思はず同じ係蹄に轉り込んだ獵師が、泣きながら、叫喚びながら、獸と人間との血を混ぜ合はせて、掴み合ふ、食ひ合ふ、爭闘する——その、自業自得を見ろ！ と云ふ、腥惨な快感が冷笑と成つて、正隆の瘠せた小鼻に皺を刻むのである。

狼は自分である。獵師は、彼の見えざる何者かと、その手下共である。

此時正隆は、決して、係蹄を掛けたものが、結局は同じ係蹄に掛つて殺されるのだぞ、と云ふ、復讐の勝利を感じて居るのではない。自分も、他人も、一緒くたに丸め、突轉して力の限り踏み躙り、嚙み潰す、火のやうな亢奮で、脂汗を掻きながら、齒軋りをするのである。

(五)

皆が、正隆を嫌つて居た。其は事實である。けれども、又皆が、彼を一種の憐愍で見て居た事も、事實であつた。彼は、神經衰弱に成つて、彼那に脱線するのだと云ふ事を、最も確實な説明として、正隆を觀たのである。從つて、人々の嫌厭の陰には、何か其を裏付ける、寛大とも云ふべきものが在つた。

まして、校長の副島氏は形式を越へた心痛で、此の若い教師を眺めたのである。

けれども、人の好い、何方かと云へば單純な副島氏は、正隆の、辛辣な、神經的な顔に面と向つて相對すと、何時も、云ひ度い事を云ひ出せないやうな、不安と壓迫とに押へつけられた。

如何那に元氣よく、大きな聲で快活に物を言ひ掛けようと決心はして居ても、彼の顔を見るや否や、此のよき副島氏

の計畫は崩れて仕舞ふ。忽ちのうちに、正隆と同じやうな陰氣さと暗さとに染められる彼は、まるで、正隆と同樣な感情の所有者のやうな口調で

「如何うですか

と、意味を成さない斷片的な言葉を吐き出して仕舞ふのである。

副島氏の、此の挨拶を受ける毎に、正隆は同じやうに意味を成さない、微笑を返禮にした。時には、

「有難う

と云ふ。

さう云ひながら、彼は心の中に、「又御きまりの、如何うですか、か！」と呟きながら、苦笑をするのである。皮肉な氣分で、表面は、一片の義理に見える此の言葉を嚙み捨てながらも、正隆の淋しい、荒涼たる心は、事實に於ては、どれ程の溫みを感じて居たか分らなかつた。只、彼は、其を示すのが厭なのである。何だ此那もの、と云ふ表情を仕て居たいのだ。けれども、西日に照らされると、まるで茶色の風船玉に、小指でちよい〳〵眼鼻を付けたやうな副島氏の表情は、何の毒も持つて居ないやうにさへ思はれる時がある。

心に喰ひ込んだ疑惑に包まれながら、疑ひと信賴と半々な心持で、いつも正隆は、此の老年に近い校長を眺めるのである。

處が或日の放課後、行くでも歸るでもない正隆が、呆然と、圖書室の柱に倚り掛つて居る處へ、思ひがけず、副島氏が來掛つた。そして、周圍に人の居ないのを見ると、いきなりつか〳〵と近寄つて來て、親しく彼の肩を叩きながら、先づ

「如何うですね

とお定りの口を切つた。が、今日は、其丈で終りは仕なかつた。副島氏は、全く思ひがけず、正隆を夜の食事に誘つたのである。

副島氏の言葉によれば、夫人も、彼には逢ひたがつて居るのださうだ。瞬間、返事に窮すやうな氣分を感じながら、其でも正隆は、明に嬉しかつた。

美貌で評判の高い副島夫人が、自分を顧みて呉れたと云ふ事が、正隆の、久しく封じられて居た遊戯心を擽る。彼は、其時許りは、皮肉さの微塵もない微笑で、承諾した。

長い、退屈な、單調な田舍の生活に飽き盡した正隆の心は、表情の豐かな夫人の美と、抑揚に張のある、丸い、轉る東京辯に慰められて、想像以上に活氣づいた。

罪のない饒舌で坐を賑はす夫人と、何時の間にか、一寸した冗談を云ひ合ふ程、彼はいゝ心持に有頂天になつた。厭な、蒼い、捻れた正隆は影を潜めて、快活な、潑溂な、遊び好きな若者が入れ換つた。容貌に於て、比較に成らない副島氏が、思はず夫人の顏を眺めた程、其程、正隆は幸福であつたのである。

若し、其儘で、副島氏の家を辭する事さへ出來たら、總ては、幸福に明るく、華やかに終つたであらう。然し、さうは行かなかつた。食後暫く經つて、夫人が自慢の濃茶の手前をして見せて呉れた事が、其の作法を全く知らなかつた正隆に、地獄のやうな混亂を起させて仕舞つたのである。

愛嬌のある夫人が、心持首を傾けるやうにして、

「如何が、御茶を差上げませうか

と云つた時、正隆は、半分は上の空で、半分は、普通の茶だと思ひ込んで

「有難う、戴きます

と返事をした。

然し、いよ〳〵改まつて、狭い、くすんだ、爐の切つてある坐敷に席を改てめ、帛紗捌きが始まると、正隆は俄に周章し始めた。

書生である彼に、其那優雅な趣味は教養されて居なかつた。のみならず、必要だと思つた事さへも無かつたのだ。今まで、或時にはコケティッシュだとさへ思はせる程、明るい燈火の下で華やいで居た夫人が、急にきりつと相貌を引き締めて薄暗い爐邊に坐つた樣子は、正隆に寧ろ冷酷な感じさへも與へる。

彼の周章には見向きもしないやうに伏目になつて、白い額際を鮮やかに差俯いた夫人から痛々しく眼を反して、正隆は副島氏を偸見た。唯一の頼みに思つて心ではすがり附きながら眺めた副島氏は、此は又正隆を驚かせる程泰然と坐になほつて、小山のやうな膝の上には謠でも謠ふ時のやうに伏せて双手が行儀よく据えられて居る。のみならず、總てを飲込んだ落付きで、此の憐れな、まごついた正客に眼を吳れようともしないではないか。

正隆は、兩面攻撃に逢つたやうな、頼り無さと、憤りを感じて唇を噛んだ。

先刻までの、明るい、樂しい、笑聲の渦巻いた世界は、瞬く裡に、けし飛んで、冷たい、意地の悪い、疑ひが、化物のやうに根を張つた粘土の世界が、恐ろしい絶望の裂目から、もり〳〵と糶り上つて來たのである。

自分のやうな書生が、此那七面倒臭い作法などを心得て居ないのは常識で考へて見たつて、直ぐ解る事ではないか、其を、只の茶でも飲ませるやうにして、何心なく誘ひ込んで置いて――。二人ともが、ちやんと腹の中で牒し合はせて居たに違ひないのだ――。

正隆は副島氏の夫妻が此處では有名な、茶の凝屋である事は知らなかつた。謠の好きな人が、泣きさうになる相手を前に据えて、心から喜び樂しんで「鉢の木」を一番と云ふ心持を知らない彼は勿論、副島夫妻の罪のない喜びを理解し得ようもなかつた。彼等にとつて、正隆が居ても居ないでも、その純粹な樂しみは同じである。小さい子供達が、友達を呼んで飯事をしましようよ、と云ふやうな心持で、彼等は正隆をお客様にしたのである。

然し、正隆には、何處か間違つた最初の一壓へで、すつかり樣子が變つて居た。彼にとつて、此の席は、決して其那生優しい飯事ではない。憎むべき、彼の影の人の惡計に滿ちた饗宴である。

彼那にも樂しさうに、彼那にも親切さうに、麗はしい表情を活躍させて、もてなした夫人さへも今はもう只最後に此處で痛い目に逢はせよう爲 使はれた傀儡とほか思はれない。握つた拳を袴の折目に埋めながら、正隆は焔を吐くやうな視線で、ハツタと夫人の横目を睨まいたのである。殊更、美くしい婦人の前で赤恥を掻かせて、職務上から免職はさせられない自分を、追ひ拂はうとする氣なのだらう。

思はずも、又うま〳〵と羂に掛つた自分に、嚙み捨てるやうな冷笑を與へながら、正隆は女がするやうにキリ〳〵と眉を吊上げた。が、然し、坐を立つ事は出來なかつた。毛虫が塊つたやうに顰められた眉が、研いたやうな夫人の瞼が擡げられるのを感じて、殆ど本能的に緩和された瞬間、正隆の前には、もう茶碗を捧げた夫人が現れた。

細い、反を打つた白い指先を奇麗に揃へて、靜々と運ばれた茶碗の中には、苔のやうに柔らく、ほこ〳〵と輕さうな泡が、丸く盛り上つて濃綠に滿たされて居る。其を見ると、美くしいと思うより先に、正隆は理由の解らない憤りを誘ひ出された。

手にも取らず、凝と茶碗の中を見詰めて居る正隆に、夫人は

「不加減でございませうが、どうぞ。

と云ひながら微笑んだ。

何が可笑しいのだ！　正隆は頭を上げようともしなかつた。樣子が變だと氣が付いた夫人は、急に今までの容儀を崩して打併けた調子に返りながら、

「澁谷さん、其那ものは、如何うお飲みになつたて拘ひませんですよ

と云ひまでした。が、五隆は、依然として動かない。稍々度を失た夫人が、何か云はうとして言葉を探して居る拍子に、ひよいと頭を擡げた正隆は、薄明りの陰を受けて此上もなく陰慘に唇を曲げながら

「奥さん、何のために此を下さるのですか

と云つた。

思はず眼を瞠つて良人と視線を交した夫人は、其でも社交に馴れた笑を忘れずに

「まあお若い方は、理屈つぽい事、何でもない、ほんの御口直しか、御口穢しでございますわ

「さうですか——然し、奥さん、奥さんは、私が此那作法を知らない事は、始めから御承知なんでせう。御承知でありながら、何故、私の知らない、知らないから飲めも仕ないものを、下さるのですか

此處まで來ると、流石の副島夫人も顔の色を變へた、正隆を見た眼を反らして、凝と彼方を見て居た夫人は、暫くすると、殆ど、命令するやうに、はつきりとした口調で

「どうも、御氣の毒を致しました。

其では、失禮でございますが、御免を蒙つて、貴方

夫人は、眉を　げて、駭きと不快で、度を失つて居る良人を見た。

「御廻し下さいませ

此の夫人の態度が、正隆の言葉に解く事の出來ない封印を仕て仕舞つた。

其の座敷に戻りは仕ても、もう瞳も定まらない正隆は、碌な挨拶も仕ないで、飛び出して仕舞つた。此の不意の出來事で、最初、副島氏が漠然と胸に持つて居た、保養の勸告は、緒口も出ないで、立ち消えと成つたのである。

溫い仕合はせな屋根の下から飛出して、暗い、ガランとした夜を歩きながら、正隆は泣いても足りない氣分に成つて居た。

今まで、何か形の纏らない氣體のやうに、只體中に瀰漫して居た、當のない敵意は、此の思ひがけない出來事に依つて、俄に確かりと凝り固まつたやうな心持もする。その、大きな、むか／＼と膨れ上つて、喉元まで窒め上げる敵意は、殆ど、生理的な苦痛を伴つて、正隆の薄い骨と皮との間を、疼き廻るのである。

彼のやうな突嗟の間にさへ、突掛つて行く相手を、副島氏ではない、夫人に選ぶ程の、敏感を持つて居る正隆は、彼の場合、多くの女性がさうである通り、直き涙を眼一杯に溜た夫人が、しほらしく頸垂れでも仕て呉れたなら、結果は、遙かに安易なものであつた事を知つて居た。

左樣すれば、彼はきつと、もつと執念く、惡どい厭味は並べるだらうが、餘後の氣分は、遙に自由であり、且つ、淡い慰藉さへ感じ得たかも知れないのである。

然し、息子程の正隆に拗ねられて、他愛なく涙組む程、副島夫人の經て來た、年は單純なものではない。卑屈でもない。從つて、一目も二目も下に扱はれたと云ふ、取消し難い自覺が、一層、正隆の敵意を助長させる。彼等が、何等

かの企計を持たに違ひない事を、夫人の平然さで裏書きされたやうに、思はずには居られないのである。

（六）

まるで、ふす／＼と燃え上らずに煙を吐くやうな焦躁に、胸一杯を塞らせながら、正隆は翌朝學校に出掛けた。

出掛けて見ると、正隆は、自分の顔を見る總ての者共は、今朝は、殊更、變な意味ありげな眼付をする事に氣が附いた。

其等の眼は、一つ洩さず、彼の姿を見付けた拍子に

「おや！　居るな

と、云ふ表情を浮べて、さも面白さうにパッと擴がる。それから或者は、詰らなさうな聲で

「フム、まだ元の通りかい

と呟きながら、一寸目配ばせをする。が、或者は、何か、ひどく馬鹿にしたやうな、不平な表情を浮べて、肩を怒らせながら、拳を突出すやうな、素振りをする、心持がある。正隆の眼から見ると、皆が皆、昨夜の事を知つて居て、知つて居る癖に又皆が皆、知らん顔を裝つて、ペッと地面に唾を吐いて居るやうに思はれるのである。

彼は、誰の顔を見ても、擲ちたいやうな衝動を感じた。誰の眼を見ても、小突きたかつた。自分の心持を、自分でも恐ろしく成つて、暫くすると、正隆は何と云ふ當もなく、裏の藥草園の方へ歩き出した。

もう末枯れて、花もない園には、柔かい、お婆さんのやうな芝生が、淡黄く擴がつて、横ぎる者を慰める。正隆は、その温順な芝生を心に描きながら、歩き出したのである。

處が、狹い小使部屋の傍を拔けて、數十歩歩みを運んで居るうちに、正隆は、自分の目差して居た方向に、思ひ掛けぬ獨逸語の音讀を聞いて、耳を欹てた。

重い、彼の國の嚴のやうな發音が、足先をひやりとさせる淸い、透明な空氣の中に、高く響く。きつと學生が、こつそり豫習でも仕て居るのだらうと思ひながら近寄つて行つた正隆は、案外、其は、垣内と云ふ、教師の一人の聲だと知つて、一層の好奇心を煽られた。そして、我知らず其處に立ち止まつた。

年齡も彼と餘り違はない、正直な垣内を、正隆は、他の誰より、淺いうちにも深く交際して居たのである。程度に於て、比較的親しいとは云ひながら、まだ、一度もその垣内の讀む獨逸語を聞いた事のなかつた彼は、丁度自信ある歌手が、後進の獨唱を審判するやうな、愛と侮蔑の半ばした心持で耳を傾けた。

けれども、數句を聞いて居るうちに、正隆の唇は、自然と綻びて來た。垣内が讀んで居るのは、教科書なのだ。其も、現に今朝、彼が、嚙み煙草でも、吐きすてるやうな苦々しさで教へて來た、豫科の教科書ではないか。

子供らしい！

何にしに、彼那子供だましみたいな文句を、聲高々と讀んで居るのだらう、自慢なのか？　肩幅の廣い、土地の者の垣内の姿を思ひ浮べると、その滑稽な對照が、思はず彼を笑はせる。正隆は、徐々と忍び足で近寄つた。不意を襲つて、正直な垣内を、眞赧に恐縮させたい惡戲心が、フイと彼の心に萠したのである。

然し、正隆の忍び足は、五歩と續かなかつた。まるで、彼が動き出したのを合圖のやうにして、讀むのを止めた垣内の聲を受けて、今度は、更に意外なもう一つの聲が質問を仕始めた。

聲は、紛ふ方もない園田ではないか、園田！　今朝、正隆が教へた組の中でも、音なしい學生として、非難の仕よう

もなく思はれて居た、その園田が、今、此處に居る——

正隆は、一寸判斷がつきかねた。此の學生と、垣内とを、如何う結び付くべきなのか、けれども、少年の口から洩れる質問を、全身の注意で聞いて見ると、正隆は、火の玉のやうに成つた。

少年は、今朝、授業時間に、正隆に向つて質ねたと同じ箇處を、又繰返して、垣内に質問して居たのである。

其を知ると、もう正隆の頭は血迷つた。自分が、如何那返答を與へたか、と云ふ事等は、思はうとも仕ないで拳を握つた。

何と云ふ奴だ！

自分が、彼の教師でありながら、その自分を出し拔いて、こつそり陰へ廻つて、此那、廿二才の垣内なんかに、さも、彼那教師は役に立たぬと云つたらしく阿諛を使ふ、誰に敎つた？　犬め！

蹣跚けるやうに、いきなり樹陰から姿を現はした正隆は、もう一度、「間牒め！」と叫びながら、獸のやうな素早さで、園田の頭を目がけて突掛つた。

ボツクリと、黑くて丸い少年の頭が、澄んだ中空に、何氣なく浮上つて居るのさへ、正隆には、故意と空惚けて、やい！　と云つて居るやうに見える。

ヂロリと憎々しく、その少さい頭に眼をくれた彼は、必死に成つて止めに入つた垣内の力で、引分けられるまで少年の頭に獅嚙みついた。野獸のやうな貪婪さで目を眩まされた正隆は、强い垣内の臂力に抱き竦められて、膏汁を流しながら、身を震はせた。

極度な亢奮で、僅かほかない精力を、最後の一溜まで失つた彼は、頭へが納まると一緒に、激しい、神經質の嘔氣を

催して來た。

病氣に成つた野良犬のやうに、舌を吐いて、苦しい空嘔をする正隆は、變に引吊つた眼でそつ方を見据えながら、只生理的の苦痛以外の何物をも感じ得ない程、疲憊して仕舞つた。兩手を、大きな、温い垣内の掌の中に握られながら、横坐りに足を投げ出した正隆は、妙な惡寒が、體中を嘗め廻すやうな不氣味さを感じた。

其から、何秒經つたのか、何分經つたのか、或は又幾日經過したのか。

俄に、はつきりと眼を見開いた正隆が、四邊を眺め廻した時には、いつの間にか家に歸つて、見馴れた調度に、取繞れながら、床に就いて居た。

世界が夜に成つて居る。微細な、潤つた夜の胞子の間を縫つて、卵色の燈火が瞬いて居る。

何時の晩なのだらう

正隆は丁度晝寢を仕過した子供のやうな、間誤付を感じた。

何時の晩なのだらう、今日の晩なのか、其とも、もう明日の晩に成つたのだらうか、……水が飲み度い、喉が乾いた。

最後の一句を、漸く聲に出して云ふと、夜着の裾の方で、誰かゞむづ〳〵と動く氣勢がした、其暖間、正隆は永年の習慣から、不圖其が、切下げ髮の母未亡人であるやうな氣がした。

「水……

默つてコップを差出した人の顏を見ると、其は此處に居るとは思はなかつた垣内である。正隆は怪訝な顏をして眼瞬きをした。

「おい……

「如何したね、氣分は少しは好くなつたか

「きぶんは、すこしは、よくなつたか……？」

正隆は、何處か寢呆けたやうで、はつきりしない頭を、强いて掻き起すやうに仕ながら、垣内の言葉を其儘、書取（ディクテイション）した。

「氣分が惡い？ それぢやあ俺は病氣なのだらうか、何時から？ 何處が惡い？ 仕樣がないな、餘程惡いのかな、垣内……家の婆さんは如何したんだ。陰氣だ、此ぢやあいけない……如何かしよう、然し……其にしても……

グワン、グワンと激しい耳鳴りが仕始めて、正隆は又、ぼんやりとして、何か不仕合はせで頼りない氣がする薄暗闇の中へ、ずるずると滑り込んで行つた。

滿二日經つて、正隆は漸々平常の頭腦を恢復した。恢復したとは云ひながら、その頭腦の存在は、正隆にとつて惱ましいものである。床に就て、夜も晝も只呆やりと、取止めのない影のやうな氣分の錯綜のみを感じて居るうちは、彼の不幸な魂にとつて、又と得られない休安であつた。絶えず朝と晩とを徹して彼を虐げるあらゆる不安も、焦躁も、冷笑も、その時丈は、一面の渾沌の裡に溶け込んで居たのである。けれども、頭が目覺めて、魔術的な細胞が呼吸を仕始めると、正隆の心には、幾日かの休養で、更に精力を增進したやうにさへ見える、尖耳（とがりみみ）の小惡魔が、恐るべき勢で活動し始めた。其は、全く、惡魔の啓示と云つても誇張ではない程、正隆の頭は敏活に、蒼白い光の尾を引きながら、暗黑の裡を、飛翔した。

もう學校へも出ず、散歩さへ止めた彼は、宛然、大發見の手掛りを得でも仕た、科學者のやうな根氣で、暗示（ヒント）から暗示（ヒント）へと、手繰り寄り手繰り寄り、もうクライマックスへ來たらしく見える、「惡計」の發掘に取りかゝつたのである。眞個に、

飢え渇いて、ガツ／＼と汗を掻きながら進行した正隆は、終に或、系統的な、企圖とも云ふべきもの、、正體を掴み得た。

其分解に從ふと、最初、彼が此のK縣に寄來された迄には、何の計畫も、悪意も籠つては居なかつたのだ。

其が、此方へ來て、稍々暫く經つてから、或人の手が徐ろに動き出した。其は、副島氏である。

一口に云つて仕舞へば、副島氏は自分を邪魔に仕て居たのだ。早く追ひ拂ひたかつたのだ。けれど、、相當に學識もあり、美貌でもあり、又生れのよい、彼とは特殊な關係で繋つた自分を、さう理由に成らない口實で、追放する事は出來ない。其處で、陰から先づ學生を唆して自分を虐待させながら、一方、彼自身は、飽くまでも親切を裝つて、食事に招待したのだ。

招待して置いて、散々樂しませ、悦ばせた揚句、彼那赤耻を晒させる事は、而も、美くしい夫人まで使つて耻を掻かせる事は、勿論、直接法に怒らせるよりは、效果が多いのは知れ切つて居るではないか

「南瓜頭（パンプキンヘッド）！」

さう仕て置いて、垣内を、彼の垣内を何時の間にか手馴付けて置いて、丁度見計らつた頃を狙つて、園田との芝居をさせたに違ひないと、正隆は決定したのである。

平常は、彼那に温順で、教室などでは、地蜂のやうな少年に混つて、まるで居るか居ないか分らないやうに恐縮して居る園田までが、一緒に成つて自分に懸つて來るかと思ふと、正隆は、血の煮えるやうな憤りを感じる。此那計畫を立て、追ひ出て行く自分を人々は待つて居るのだ。

正隆は、蚯蚓腫れに膨れに上つた手の甲を撫でながら、あらゆる人々に向つて、苦艾（にがよもぎ）のやうな嘲笑を投げようと仕た。が、突然高い頭の少さい少年の像（イメーヂ）が心に浮び上ると一緒に、正隆は、病氣のやうな心細さを感じ始めた。

何か急に、ポカンと胸のしんが抜けて、がらん洞に成つた心の洞穴を、寒い、冷たい霧雨を含んだ風が、スースー、スースーと風音を立てながら、吹き抜けて行くやうな淋しさなのである。

その侘抜ける風に煽られながら、正隆は、自分の心も體も、滅茶々々に成つて行くやうな氣分に成り始めた。周圍の者達が可哀さうなのではない。勿論。神かけて、彼那奴！　けれども、心が悲しいのだ。何かひどく慘めな、可哀さうな氣分が突上げて來て、眼に涙さへ浮ませる。寂しい、氣の毒な――誰なのだらう？

自分の涙に度を失つた鼠のやうに、正隆はきよろ〳〵と四邊を見廻した。目の屆く限りには、人影さへも動いて居なかつた。

相變らず、小じんまりと、婦人室のやうに飾られた部屋の中に、塵のやうな自分一人が、眞個の一人ぼつちで、ポツネンと据つて居るのに氣が付くと、正隆は、可哀さうなのは、自分が斯うやつて、涙までこぼして劬はつて遣つて居るのは、結局彼自身なのだ、と云ふ處へ行着いたのである。

「さうだ、俺なのだ。俺自身が、我ながら可哀さうに成つて氣たのだ。

俺が可哀さうだと思ひ出すと、正隆は、止途のない感傷に陷つた。

自分が、來た其時まで持つて居た希望は、何處へ行つたのか。

彼程明るく、輝やいて見えた、前途が、此那暗闇に塗り消されようと、誰が思つて、此那遠い田舍まで來るだらう。

若い、向上心に滿ち、總ての點に完備した自分が、此程の惡計に、惱まされなければ成らないと云ふ事。矢張り、母未亡人が、衆々話した通り、自分の境遇と、天分を羨望する餘りに、此那計畫を立てたのに違ひないのだ。

其以外の原因は、何が有るだらう。只其のみなのだ。其に、違ひないのである。

然し、段々斯うやつて進んで來た正隆は、此處まで來ると、或る得意に似た感情が、徐々と悲しみを消し始めたのに心付いた。

皆は、あゝやつて自分を酷めたと思つて居るのだらう。然し、決してさうではない。もう一歩進めて考へて見ると、却つて、彼等が、自分の力に苦しまされて居るのではあるまいか。

彼等にとつて、自分は重荷なのだ、目先に居られると、絶えず壓迫を感じずには居られない。其で追ひ出さうとする。追ひ出し度いと思ひながら、斷然と、其を口に出しても云へない者が、如何うして、優者らしい態度だと云へるだらう。つまり、自分は勝つて居るのだ。最後に於て勝利を得るのは、此の、酷めたと思はれて居る、自分以外の何人でもない筈なのである。

さう思ひ出して見ると、正隆は、もう何も、此那田舍の、古びた農學校なぞに未練を持つべき理由を、何處の隅にも發見しなかつた。野蠻人達の、果しもつかない小競合の中に入つて、爭ふのも慘めな位置などを眼がけるには、もう一寸自分は大きく生れ付いて居る筈だ。

もつと素晴らしい未來が、自分には保留(レザーブ)されて居るではないか

正隆は立ち上つて、兵兒帶の後に、双手を挾みながら、部屋中を王者のやうに緩々と歩み廻つた。そして、半年近い過去を、夢のやうに、其も馬鹿々々しい夢を、自ら顧みて忍び笑ひをするやうに、くすくすと肩を竦ませて、舌を出した。

(七)

斯樣にして、宛然豚にでも與れるやうに、心の中で自分の位置を垣内の、四角な顔に擲きつけた正隆は、其晩手荷物

も持たないで、K縣を立つて仕舞つた。

中二日置いた霜の濃い冬の朝、膏と油煙で黒光る額を洗ひもせずに、九段の家の敷居を跨いだ彼は、もう其限り、二度とK縣へ、振向かうとも仕なかつた。

僅か半年とは云ひながら、充分に物凄まじかつた正隆の教員生活は、最後の、半ば氣違ひに成つた大飛躍で、遠い、遠い彼方まで、放擲されて仕舞つたのである。

副島氏等からの音信によつて、正隆は、もう立派な病人だと思ひ込んだ未亡人は、只管、彼の恢復を希ふ許りで、今更、彼を元の位置迄送り返さう等とは、夢にも思つては居なかつた。

其許りでなく、未亡人は、丁度注意深い獸使ひが、傷に觸つて、狂ふ獸を一層荒れさせまいと用心するやうに、如何那場合にでも、決してK縣の話だけは、鬼門にして觸れなかつた。

又一方から云へば、彼程の希望と、誇りとを負はせて送り出した彼女は、此の常軌を逸した彼の歸京を、病氣にでも理由付けて置かなければ、到底堪らない程の、失望や、間の惡さを感じるのだつたらう。

從つて、可成まで強調された「病」の特權によつて、正隆は、質問を受けないのみならず、自分自身も、何の反省や自責で、苦しめれずに濟んだ。

彼は、久し振りで悠々と、馴染み深い環境の中に身を寢そべらせて、居睡つたのである。

けれども、追ひ〱日が經つに連れて、心の落付きが戻ると共に、K縣での記憶は、何かにつけて、正隆の眼の前に現れた。

赤坊の時から見なれた母未亡人が、相變らず、黒紋羽二重の被布に、淺黄の襟をかけて、小ぜわしく廊下を歩み廻る

のを眺めながら、朝夕、細かな、女性的な情緒に抱擁されて居る今の正隆にとつて、K縣の思ひ出は、我ながら、奇怪なものに成つて來たのである。

思ひ返して見ると、自分が眞個に神經衰弱だつたから、彼程眞暗闇の苦痛を味つたのか、其とも、事實に於て、周圍が其程惨虐であつたのかと云ふ境は、いつも際どい處で、ぼんやりとして居る。何方(どちら)が、如何うだつたとも決定しかねる心持に成つて來るのである。

けれども、彼程の苦痛の原因を、只、俺が神經衰弱だつたからなのだ、と云つて片付ける事は、正隆の自尊心が承知しなかつた。

若し其を承認すれば、結局、惡い、捻れたのは、自分一人で、他の人々は、皆よい、完全な、親切な人々だつたのだと、云ふ事に成るではないか。

「其那のは、俺はいやだ、

正隆は、我儘らしく首を振つた。

が、其ならば、周圍に居た、あらゆる人々は、校長から給仕に到るまで、皆惡人許りだつたのか、學生は皆、買收されて居たのか、と云へば、流石に、うん左樣だとも、とは云ひかねる何ものかゞ、心の底に頭を擡げて來るのである。

小さい鉢植えの紅梅を綻ばせながら、霜除けをした芭蕉の影を斜に、白い障子に寫した朗かな日を背に受けて、我ともなくうつら／＼と思索の緒を辿る正隆は、此處まで來ると何時も、闇で見た幽靈を、追懐するやうな、淡然たる氣分に成るのである。

幽靈を、きつと見たには違ひない氣がするのだ。若し、相貌の詳細(ディテール)を説明しろと云はれゝば、今直ぐにでも出來るの

だ。けれども、いざ、其なら、眞個に彼處の壁に立つて居たのかと詰め寄せられると、決定的な返事には窮するやうな心持なのである。

左樣なると、正隆の眼前に擴がつた濃霧(ミスト)は一層深く成つて、終には、K縣に於ける農學校其物の存在さへ、怪しく成つて來るのである。秩序立てゝ考へて見れば見るほど、自分の立場が不思議な、自分で判斷の下せないものに成つて來るのを感付いた正隆は、或程度まで行くと、もうぴつたりと鑿穿の足を止めて仕舞つた。

我にも、人にも、明答の出來ない記憶の殘滓を、苦笑と共に、そつと生活の淀みに埋めて、正隆は、翌年の春早く、「お信樣」と呼ばれる婦人と結婚したのである。

信子の母親は、佐々未亡人とは幼友達の間柄であつた。

およしさん〳〵と云つて遊んだ美しい人が、大藏省の地位の高い官吏と結婚して生れた末娘の信子は、三四人ある女同胞の中で、最も秀れた美貌を持つて居た。其のみならず、其當時としては最高の敎育を授けられて、鋭く利く目端しを、音なしく古風な禮儀作法に包んだ彼女の趣が、先づ佐々未亡人の趣味を滿足させたのである。

正隆の腦病には、何より生活の變更が第一だと心附いて、可愛い子供の病氣に使ふ適藥を探すやうな熱中さで、相當の婦人を物色した未亡人は、選擇を正隆に委せる心持は持つて居なかつた。

嫁と云ふ者を、奇妙な、良人と姑との共有者のやうな感じを漠然と心の奥に抱いて居る彼女は、女の子を育てた事のない好奇心に手傳はれて、自分の趣味を第一に、標準とした。其に、可愛い正隆は、自分の眼鏡にかなつた者を、拒絶する筈はないといふ自信で、可成まで獨斷で事を進めた未亡人は、いざと云ふ最後の一點まで來て、事實を正隆に洩したのである。

女性に對する神秘さを失つて、結婚等と云ふ事を、彼の年齢に比較すると、想像以上の現實さで考へて居た正隆は、美しくもない婦人を貰つて、義務を負はされる生活は、堪らないと思つて居た。

其で、母未亡人が、最初に徐々と口を切り出した時にも、彼は例の通り鼻であしらつて、如何うでも好いと云ふ表情をしながら、煙草をふかして居た。

けれども、自信のあるらしい母夫人は、何か樂しい詭計を持つ者のやうに微笑みながら、

「正隆や、お前眞個に如何うでも好いと御云ひなのかえ。好い緣を取逃して、後で口惜しがつたつて、私の知つた事ぢやありませんよ

と云ひながら、故意と紙に包んだ寫眞を膝の上でひけらかした。其に釣られて、思はず

「一寸御見せなさい

と云つて手を延した正隆は、紙を開いて中を見ると、一目で、此は！ と云ふ顔をせずには居られなかつた。

其程、中の婦人は美しかつた。その美しさも、數年間、彼が胸に抱いて居た、その型通の美である。上品でありながら、飽くまでも、瀟洒でなければならないといふ、彼の條件を知つて生れて來た者でゝもあるかのやうに、その立姿は冴え渡つて、すつきりとして居る。而も其が、高槻信と自署されて居るのを見て、正隆は思はず、何物かに胸を衝かれたやうな心持がした。

只、美くしい、只、素晴らしい婦人として、彼方に眺めて居た彼の觀賞眼は、此の三つの文字で俄に、その視線の距離を縮めて仕舞つた。焦點が、グツと動いて心の眞正面に移つて來たのである。

子供の時分、よく母夫人に連れられて遊びに行つた、彼の築山の在る、泉水に緋鯉が泳いで居た家と、此那娘が住ん

で居るのかと思ふと、正隆は一種不可解な、謎を感じずには居られなかたのである。
もう、二十にも成つて居るのなら、自分とは、たつた五つ六つの違ひである。
まだ、漸々七つか八つだつた自分が、
「おばちやん、今日は
と云ひながら、紫天鵞絨の大黒帽子の頭を可愛く下げた其の時分に、多分は、ろくに歩けもしない赤坊の信子が、母親の膝にでも抱かれて自分を見て居たのかと思ふと、正隆の胸には、ついぞ湧いた事のない、一種の懐しさが後から〳〵と湧き上つて來た。その懐しさも、曾て彼が一度ならず經驗した種類のものとは何處か異つた處がある。もつとあどけない。もつと、色が、ほんのりとした桃色である。が其にも拘らず、その桃色は、未來と過去とを貫いて、同じ桃色をほんのりと漂はせて居る、居たのだ、此からも居るだらうと云ふやうな心持のするものである。
其が、愛と呼ぶべきものなのか、或は、所謂縁と云ふべきものなのか、正隆に區別はつけられなかつた。
其の時分の教育で、愛の本質等と云ふ事に就て彼此云ふより、先づ美貌を望む正隆は、假定彼女が、千里彼方の見知らぬ國の者であらうと、其の結婚を拒みは仕なかつたであらう。彼が、滿されない希望に終りさうな不安を持たぬでも無かつた、その美が與へられると云ふ事に加へて、親と親との關係は、他人とは云ひながら、幾何かの接近を兩者の間に持つて居る。正隆は、何處にも非の打ち處が無いと思つた。非の打ちどころが無い許りか、もう二度とは惠まれない幸福であると云ふ氣さへする。結婚などゝ云ふものは――と、小鼻に皺を寄せて居た正隆は、平常の冷淡さを、臆面もなく顚倒させて仕舞つた。
彼は、良人として自分が、如何那人間か、又如何那に信子からは觀察されるだらうと云ふ事等は、問題にも仕て居な

かつた。

彼女の傾向も、性質も、一通り未亡人の說明で納得した正隆は、只妻として自分のものに成るべき信子、或は信子と云ふ名を持つて生れた、一種の美の所有を、待ち焦れ、求めたと云ふべきなのである。

(八)

其の、正隆にとつては、寧ろ望外とも云ふべき信子を、愈々滯りなく妻として迎へて、同じ構えの中に新居を持ち、又、長兄の盡力で今度は、農商務省へ出勤するやうに成つて見ると、正隆は、如何程謙遜に計つて見ても、自分が幸福への、最も確實な鈎を投げた者とほか思はれなかつた。

物質は、新しい家庭に華やかな色を添へる以上に豐富である。生活の變化と共に甦つた功名心は、そろ〳〵と彼の胸の中で芽を吹き始めて居た。その上、兎角面倒の起り易い嫁姑●間は圓滿で、彼の眼から見ると、互に競ひ合つて居るやうにさへ見える二樣の愛が、持ち得る總ての奉仕を捧げて、彼の前に呈せられて居るのである。

一年前の、K縣での暗い月日は、今思ひ出す丈の價値もないやうにさへ思はれる。正隆は、現在自分を抱擁する薫しい幸運の微(きざし)の裡に、あらゆる過去の陰翳を否定して居た。否定して居たのみならず、彼の瞬間と、今の、此の、光り輝く薔薇色の瞬間との間には、何の連絡も無く思はれたのである。

幸福を思つて微笑する時も、悲運を思つて、思はず眉を顰める時にも、正隆は決して自分を其の中點として描いては居なかつた。

幸福は、類なく織麗な妻の信子の黑い瞳と、愛撫し、愛撫し、愛撫し盡しても未だ足りないやうに見える母未亡人の、

豐かな頰の皺の中に保證されて居るやうな心持がする。其なら、此種の幸福の萠芽を、又、彼の時分のやうに蹂躪する者があるだらうか？

紫縮緬の衿から俄にパツと光るやうな項(うなじ)を浮立たせた信子夫人が、釵の小鈴をチリ〳〵鳴らしながら、縫物をする傍に横はつて、正隆は、思ふともなく、其那事も思つて見る。

けれども、其は決して、思つて見ると云ふ程度以上には進まなかつた。又、進むべき種類の想像でもなかつた。正隆は、心に確りと描かれて居る豪奢な幸福の色調を、一層鮮に引立てる爲に、一寸使つた影として、樂しく歡びに滿ちた筆觸(タツチ)で一抹の灰色を引くのである。

斯樣にして、正隆は、樂しかつた。其は事實である。彼は自分が幸福である事、若し人間の味ひ得る幸福の種類が十あるものだとすれば少くとも、その中の七つまでは、既に味ひ得た事を、確信して居るのである。

けれども、勿論、其で完全だと云ふ事は出來ない。正隆の理想から見れば、美の形式に於て殆ど完成に近い女性を信子夫人だと云ふ事は出來ても、其ならば、彼が、無意識の中に描いて居た愛と云ふものは、此で完全かと云ふと、正隆は、明に或る躊躇を感ぜずには居られなかつたのである。

よい家庭に育つて、女性としての教育を當時としては出來得る丈與へられた信子夫人は、元より缺點と云ふべき程の缺點は何一つ持つて居なかつた。

總ての女性が、從順である通りに彼女は從順であつた。謙遜であつた。而して辛棒強くもあつた。深い謹と、尊敬とを持つて、良人である彼の前に傅いて呉れる。時によると、無作法な彼が、思はず恐縮する程、嗜の深い細心を持つて生活を縫ひ取つて居るのである。

けれども正隆は時に、散歩などを仕ながら、不圖何かの機勢で、けれども――と思ひ出さずには居られないやうな氣分に成る事がある。其は何處までも氣分である。理窟から云へば、彼程賢く振舞つて、家を治める彼女に、其以上の注文を出すのは、不親切だと思ひながらも、尙、或時に思はずには居られない氣分が、けれども――と遠慮深く呟きながら、或不平を訴へるのである。

其の不平は、何故、彼程利口な信子でありながら、何故又彼程、熱が無いだらう、と云ふ愁訴なのである。

今、此處で正隆は、假りに熱と云ふ言葉を使つては居るが、其は實際、その本質に於て、熱と稱すべきものなのか如何うかは、分らなかつた。が、何か、其に似た一種の力が、素晴らしい信子の裡には、缺乏して居るやうに思はれるのである。

其の或物の缺乏は、外に表れると、彼女の冷靜な、研ぎ澄した銀線にも比すべき美貌に、神秘的な陰翳と底力とを與へるものであるが、其が、魂と魂とが裸心で向ひ合はうとすると、思はず、彼を冷やりとたぢろがせる種類のものなのである。

靜脈が、今にも紫に透き通りさうな、薄くすべ〳〵と滑かな額から、反を打つた細い足の爪先に至るまで、信子夫人の肉體を構成する一本の太い線も無かつた。

總てが毛描きである。弱く、纖く描かれては居ながら、その鮮やかな墨の曲線は、飽くまで白紙の上に際立つて居るやうに、彼女の輪廓は水際立つて居る。單に肉體の容姿のみならず、心の姿も同樣の纖細な力強さを持つて居るのである。

美くしい。全く、美しい。が、然し、冷たい嚴かな美である。太陽の熾な火熱の中に、燃えながら咲き滿ちる華の美

しさではなくて、沈默の月光が、蒼白く顫える中に燦めく氷華（グレース）のやうな美くしさなのである。

傳統的な一種の趣味から、形に於て、信子を求めた正隆は、その容の包む魂に接近して、或 Unexpected を感は居られなかつた。まるで、豫期しなかつた魂を、彼は、よいとも、悪いとも云ふ事は出來ない。彼女を眞實に愛し、或は愛さうとして居る正隆は、信子によつて、最後の天を示されたやうな心持さへ感じるのである。

結婚してから、幾度正隆は、彼女の謎めいた Warning の前に、解答を得ようとしたゞらう。

其は、眞個に彼女の表情である。其以上に説明仕ようもない。が然し、一度その、侮蔑とも云へない侮蔑と、自負と、愛と憎と憐憫とを一緒にして、薄水色の中に溶したやうな、淡い笑を浴せられると、正隆は、何だか分らない自分の無力を感じずには居られなかつた。從つて、あらゆる其等の、けれども――と云ふ前提の後に從つて來るものは、若し彼が、その無力さへ完全に恢復すれば、消失すべきものゝやうに思はれるのであつた。

其なら、如何うして、見えざる其の無力を補充するのかと云へば、正隆は、只高い地位を我ものにする事だとほか目標が付かなかつた。女性の與らない男性の世界である仕事で、彼女の持たぬ何物かを得ようとするのである。けれども、此等の心の過程は、信子の美に、殆ど絶對價値を置いて居る正隆にとつて、決して復讐的なものでないどころか、些の、冷淡さも含んでは居なかつた。只、希望である。形の纒らない野心（アンビション）である。功名心である。一つの暗い洞穴を抜けながらも、天性の自負を失ひ切れない正隆にとつて、其等は限りなき赫奕たるものに想はれる。嘗て彼が、大學の制帽を戴いて居た時分に夢想した成功と云ふものと、今の成功とは、その內容の複雜さ、甘美さに於て、著しく違つて來て居る。

自分の成功は、世間への華々しい出現は、同時に彼の重寶である美の信子を、一層燦然と輝やかせる事であり、彼女の輝きは、同時に翻つて、彼の至上の背光（グローリー）と成るのである。

其處まで考を辿つて來ると、正隆は、最初の、けれども――と云ふ濕つぽい、稍々伏目に成つて愁訴を何時の間にか忘れて仕舞つて居た。結局、何と云つても、自分は幸福なのだ。仕合はせなのだ。時が經てば、自然にどうか成る事を、彼此思ふのは決して利口な遣り方ではないのだ。信子は素敵だ。親切だ。行屆く。其でいゝのではあるまいか。結婚して間もない若い女性に、其以上の注文をするのは、自分の方が無理なのだらう、未だ馴れないのだ。まだ馴れないのだ！。そして又、同じ高みの朗らかさに戻る正隆は、翌年の夏、父親と成つて、一層その安心を確めたやうに見えた。

母と成つて何處か鋭さが圓められた信子は、祖母の名の房の字を貰つて、正房と名づけられた幼兒と、到る處に麗しい母子の肖像を描いて正隆を包んだのである。

(九)

信子夫人の美と、一種の威嚴とも云ふべきものは、結婚後、單に當途が無いと云ふ事が原因だつた正隆の自墮落を矯制して居た。其のみならず、父親と成つて、純白無二な生命を痛はりながら抱き擁いて見ると、決して惡と云ふべき何物をも持たない正隆の心は、眞個によく成つた。此のよさは、時によると彼の弱々しい微笑の間に、大望さへも忘れさせ兼ねないものである。又、時によると、得體の知れない悲しさにさへ沈ませるやうなものでもある。

妻と子と、家と。

正隆は、生活の快い、日向を感ぜずには居られなかつた。有難い日向である。平和な日向である。而して事の無い、日向である。

もう少しで、そのほか〳〵と陽炎の立つやうな生活の安穏に居眠らうとした正隆は、正房が二才に成つた時、思ひ掛けぬ刺戟を與へられた。

其は外でもない、當時、青年と云ふ青年の血を湧き立てずには置かなかつた、海外留學、其も、農商務省からの留學生として、海外派遣を命ぜられるかも知れないと云ふ福音なのである。

此は全く正隆にとつては、眠氣醒しの、灌水浴(シャワーバス)とも云ふべきものであつた。ぼんやりと、霞の掛つたやうな頭の上から、サーサー、サーサーと小粒な水玉を撥ねかけられて、急に甦つた血行が、快い亢奮に躍りながら、細胞の一つ一つを濡して行くやうに、正隆は活氣付いた。眞個に、附元氣ではない希望と活氣とに燃え立つた彼は、此も珍らしく、特殊な感激に打たれて居るらしい妻の顔を倩々と眺めながら、選拔試驗の課題とも云ふべき、獨、佛、英語の或翻譯に着手仕始めたのである。

勿論、正隆は、自分と競技すべき一箇の敵手として、殆ど同年配の同僚が一人在ることは忘れなかつた。夜遲くまで、彼が机に嚙り付いて、あらゆる精力を傾けながら、一生懸命筆を運んで居る時に、彼方の、何處か見えない家の書齋でも、同樣の努力が行はれて居る事は、片時も、正隆の頭を去る事が無かつた。然し、其の競爭の意識は、彼にとつて決して不愉快な重壓ではない。丁度、雨に降り込められた者が、俄にカッと輝き出した太陽に照されたやうに、正隆にとつては、一種の明るい活々した刺戟である。

時に、鈍重(ダル)に成りさうな心持や、長い仕事には付きものゝ、不思議な焦躁等を、或程度まで制御して、適當に仕事を新鮮なものにして行く、調節器であると云つても差支えない程、正隆は、自分の學力と文才とに自身を持つて居たのである。

從つて、正隆は、自分が留學生として選ばれると云ふ事を、殆ど既定の事實のやうに信じて疑はなかつた。三箇年の海外留學と、かち得べき學位、其等は、宛然、今までは、絢爛たる光彩を放ちながらも彼方に在つた、名譽、榮達、幸福と云ふ叢雲の中から、特に彼の爲に下された、黄金の縄梯子のやうに見えた。

此からこそ、眞個によく成るのだ！

その、よく成る、と云ふ內容の詳細は、只一面の渾沌ではあるにしろ、正隆は、總ての、よりよきものを空想せずには居られなかつた。單に自分丈によいのではない、美くしい、素晴らしい信子の爲にもよいのだ、又、小さい、お乳くさい正房の爲にもよいのだ、皆によいのだ。皆が、福祉を受けるのだ。その鍵を、今、自分は丹精して鑄つゝあるのだと云ふ、樂しい意識――。

結婚し、子を持つた正隆は、數年前より、遙に單純な心持で、あらゆる仕合はせに面する事が出來た。仕合はせと呼ばれる總ての腕に喜んで抱き取られたい、取らせ度いと云ふ心持が、見えない內に漲つて居る彼は、眞個によき父、よき良人らしい熱中さで、彼の裡に共生する幾つかの魂の悅びの爲に、勵し、勵まされて、仕事に勤しんだのである。

當時、卅才だつた正隆は、漸々光明に向つて踏み出した生活の三足目で、自分を粉碎する襲擊を豫期仕ては居なかつた。豫期出來なかつた程、正隆は、或點から云へば正直に成つて居たのである。

自信ある競技者のみが感じ得る樂しい、光輝ある緊張の連續で、愈々結果の發表されるべき日が來た。

其日の歸途を想つて、自ら微笑を禁じ得ないやうな心持に成りながら、出勤した正隆は、自分の机に坐るか坐らないかに、課長室へ呼ばれた。彼は、勿論何の不安をも感じなかつた。至極落付いて居た。が、その落付いた、もう解り切つて居ると云ふ平氣さの下に、誰の云へない心臟を率直に鼓動させながら、正隆は厚い木の扉を開いて、半白の課長の

面前に現れたのである。

「まあ、其處へでも御かけなさい。」

機嫌のいゝ聲で、朝の挨拶をして正隆に、傍の椅子を勸めると、課長は、暫く何か決心のつきかねた風で、頰杖を突いた片手を延して机の上を叩いて居たが、いきなり其顏を擧げると、

「いや、如何うもあの飜譯は御世話でした。」

と云ひながら、一寸頭を下げた。

此は、唐突である。正隆は一寸返事を見出せないで次の言葉を待つた。が、此の豫期しない發言の仕方で、正隆は、我知らず、おや變だな、と思はずには居られなく成つた。何處か、彼の思つて居たのとは調子が、違ふ。何を此から云ひ出すのだらう。

漠然とした不吉の豫覺が、心臟を徐々と堅く仕さうに成つた正隆の面前で、平常の態度に返つた課長は「處で……」と云ひながら身を正した。

處で……? 正隆は、思はず喉をゴクリと云はせた。

「處で……彼の結果ですが——。種々委員とも評議の結果、結局如何うも、貴方にはお氣の毒だが、眞田君の方が定りさうな工合です。勿論、貴君が不出來だつたと云ふ譯ではない。いや、寧ろ、御骨折で、却つて立派に出來ては居る位なのだが——如何うも、君も知つて居る通り、斯う云ふ事には種々の都合があるのでね。まあ、今の暸梅では眞田君に行つて貰ふやうに成るらしいから、其を一寸、前もつて御知らせ仕た方が好いと思つたのです

さう云ひ終つて、又頰杖を突いた課長を凝視しながら、正隆は、思はず自分の耳を疑つた。眞田が行く……? 眞田

と——。變だな、其那事は不可能だ、第一彼那學問もない男が——何かの間違ひだらう………

「眞田君——あの、眞田猛君ですか、彼の人が行くのですか

と云ふ反問が、殆ど無自覺の裡に、正隆の口を突いて出た。

「えゝ、さうです、あの眞田君です、

然し、彼の老眼の前で、俄にサツと血の氣を失つた正隆の顔を見ると、何でも無いと云ふ風だつた課長は、急に言葉を次いだ。

「其あ、君も此處まで遣つて殘念でせう。其は私も察しる。が、何にしろ、場合が場合だから、今度は、眞田君に讓つて遣り給へ。まだ君なんか若いんだから、先が緩りして居る。周章てないでも好いでせう。其に君は、家庭もよし、歴とした——

課長は、此處で何故か一寸厭な顔をした。

「兄さんも持つて居るのだから——

「家庭が好い？ 兄貴が有る？ 何を云ふのか、其と此とは、全然異つた問題ではないか、其那事で、左右される事ではないのだ。途方もない、何を感違ひ仕て居るのだ。驢馬！

正隆は、唇を嚙みながら、忌々しげに、顎を逆に撫で上げて、ヂロリと平氣に見える老人の顔を睨み据えた。

然し——。

正隆は、第一、何故自分が除ねられて、彼那眞田が選ばれたのか、其の理由を知らないでは納得出來ない心持がした。自分は、彼那に眞劍にやつたのぢやあないか、自分は、彼那に、彼那に——。

正隆は、急にゲツソリと腹の力が拔けて、妙に震へる力の震動が胸元に突掛つて來るのを感じた。

彼那に――希望して居たのではないか！

もう年を取つて、半ば老耄した課長なんか、勿論誰が行かうが關つた事ではないだらう、然し、自分には違ふ。其那に雜作なく、片づけられる事では、無いのだ――

「其では――。

强ひても、激情を壓へた靜かな口調で、斯う切出すのは、正隆にとつて、最大限の努力であつた。三年前の彼なら、いきなり、其那ひどい事があるものか！と怒鳴らずには居られなかつたゞらう、正隆は、いつか身に着いた、經驗の、不可思議な力で、グッと燃える火の玉を飮み込んだのである。

「其では――眞田君が選ばれた理由だけを、洩して戴くわけには行きますまいか、自分の――自分の參考に成るとも思ひますから

然し、官僚の曖昧に馴れ切つた課長は、種々遁辭を構えて、說明をしないのみならず、數度正隆が壓迫つて、說明を求めると、最後に、彼は氷のやうな冷淡な表情で、

「其那に追究しない方が、君の爲だらう、自分で考へて見給へ。落付いて考へて見れば自分で解る事なのだ、私はもう御免を蒙る――。

と云ひ切つた限り、もう再び正隆の方へ振向きもしなかつた。最後の言葉を、課長は、確信ある者の壯重と、威壓とで斷言したのである。

此の一句が、正隆の心じゆうを、グンと小突き上げた。

君の爲だらう、とは何事だ！

正隆は、思はず激しい音を立てゝ、座から立ち上つた。が目の下に、半ば禿げた課長の頭を見ると、彼は、俄に淋しい、生理的に痛苦を感じるやうな氣分に掴れた。

憎みとも、恥辱とも、口惜しさとも、名狀し難い感情が、盲目のやうに突掛つて來る。グリ〱が出來たやうな、彼の目の前には、今頃はもう有頂天の大喜びで、得意さうに仲間中を觸れ廻つて、自分の成功を祝はれて居るだらう眞田の姿が、幻のやうに浮び上つて來た。

其の想像は、彼に眩暈を起させる。けれども、思はずには居られない。

少し膝が曲つた細いズボンを、小刻みにチョコ〱と歩きながら、眞中から分けた髮を押へ〱、へら〱と笑ふ眞田。

只さへ輕薄な眞田が、面白半分の煽てに乘つて、天地唯獨りの俊才を氣取りながら、如何うだと鼻を蠢めかせる樣子を考へると、想つた丈で、正隆は眞個に、嘔き度いやうな氣分に成つて來た。

何那に確實さうに見え、見えた許りか、同僚の多くも、自分に當然の結果として、選拔を豫期して居たのに、あの眞田が、自分に代ると云ふ事は、一體何事だらう。

平常から、おぺんちやらな男として、數にも上せなかつた彼に、自分の座を横領された事は、正隆にとつて、決して單純な失望には止まらない。

今までは、創世後八日目の宇宙のやうに、晴々と、爽やかに日光の降り濯いで居た地球は、俄に、正隆のこの眼の前で頓死して仕舞つたのである。

（十）

其は實際、總ての爲に悲しむべき、一つの誤謬であつた。

正隆が、外國語に、秀でた天分を持つて居ると云ふ事をのみ强調して、考への中に置いて居た人々は、彼が翻譯した文章を見て、不審を起した。

彼が、外國語にこそ精通して居れ、邦文、而も當時行はれて居た面倒な漢文的な文章を、此程立派に驅使する事は意外だと云ふのである。

人間が、意外な感に强く打たれた時、決して平常の冷靜を保つて居るものではない。少くとも、其の瞬間丈でも、何等かの不安定な動搖を感じずには居られない。その動搖の、落付かうとする方向を、如何なる形式に於ても暗示するヒントが、やがて、その「意外」の種類を決定するものなのではないだらうか。

此の場合では、正隆に對する德義上の疑問が、落付きを與へる一つの重しと成つたのである。即ち、外國語には通じて居る正隆が、不完全な日本文の弱點を補ふ爲に、彼の長兄である正則の助力を仰いで置きながら、其を其儘知らん顔で提出したのではあるまいか、と云ふのである。

勿論、其は有りさうな事で、ないとは云へなかつた。正則は、素人でこそあれ、漢詩をよく作る事で、一部には著名であつた。その兄を持つ正隆が、若し彼を强請(せび)つて書かせたとすれば、此位の文章位、何の苦もなく出來(でか)されて仕舞ふ筈なのである。

從つて、有りさうな事として、此の疑問が、皆の胸に湧いた事は、理由のない事では無かつただらう、然し、漠然と

して居るにも拘らず、人間の心に不思議な昏迷を與へる此の感じは、危險なものである。人は、なか〳〵その妙な暗示から解放される事が出來ない。正隆が、二人掛りで遣つて置いて、私つと口を拭つて居るのではあるまいかと云ふ、最初は極く淡い、互に云ふのさへ憚られるやうなものであつた一種のアンテイシペーションは、討議、評議と時を經て行くうちに、何時とも無く皆の心の中で、濃度を增して、終には動かすべからざる疑問と成つて仕舞つたのである。

疑ひ出して見ると、事は紛糾する許りである。何處にも、決定を與へるべき證據がない。彼だらう、斯うだらうと云つて居るうちに、人は不安に成らずには居られない。さう云ふ結論の與へられない疑の中を這ひ廻つて居る自分自身が、一時も堪らない程、厭に、不安に成つて來る。そして、結局は、如何うでも好い、早く何等かに片をつけて仕舞つたら好いではないかと云ふ心持に、成つて來るのである。

斯う云ふ場合、與へられる決定が、其を受ける者を考の中心に置いて居ない事は、明かである。自分の不安を追ふ爲の決定である。自分に與へる回答である。從つて、最も平明な、最も單純なものを「よし」とする事は免れ得ない事なのである。

正隆の仕事を挾んで向ひ合つた時にも、皆が知らずに、皆が斯樣な心持に成つて居た。そして、摑み處の無い、いざこざの末

「其那疑ひがあるのなら、一層、面倒のない方に極めた方が、一番簡明でいゝぢやあないか

と云ふ發言の下に、出來榮としては數等劣つた、劣つて居るが故に、眞田の實力であるに違ひない仕事を、採決する事に成つて仕舞つたのである。

洋行とか留學とか云ふ事が、直接自分達の生活とは、何の關係も持つて居ない者達は、惡意のない無關心で、評議の

材料を取扱つたのだらう。

並べられた、二百枚近い紙の背後に、如何程熱した魂が、彼等の指を見守つて居るか、せめて只の一度でも考へて見ようとも仕ない人々は、只、文字を並べた紙を綴ぢた物、その「物」によつて、留學と云ふ、一種の概念の価きを決定しようとしたのである。

けれども、正隆にとつて、二百枚の紙は、決して其程輕々と見られるものではなかつた。其の紙背に、あらゆる彼の希望が懸つて居た。父の持つ本能的な愛、良人の持つ無自覺な妻への誇、よき生活への憧憬、其他、順調に流れた數年の後、今彼の胸に暖く芽を育て始めた、總ての「よき願ひ」がどつしりと重く裏付けられて居たのである。

然し、始め、彼の仕事が拒絶された理由を知らなかつた時の正隆の失望は、寧ろ感傷的な甘みを何處やらに漂はせたものであつた。

正隆は、眞個に落膽したのだ。眞個に失望したのだ。彼は勿論眞田を羨望した。彼那、猪口才野郎がと云つて、口惜し紛れの惡體も吐いた。今度こそ見ろ！ と自分の不運(アンラツキー)を呪ひも仕た。けれども、眞田と自分との位置を轉換させた何かの理由に對しては、一種の敬遠を抱かずには居られなかつた。

彼那に見えて居ながら、いざと云ふ土俵際で、巧く自分に背負ひ投げを食はせた、眞田奴！ その呪咀の中には、心の底で一種の謙譲が保たれて居た。彼が幾何(いくら)、喚いても、怒鳴つても、厳然と立つて抜くべからざる壁、その壁は癪には觸るが正當なものだ、と云ふやうな、意識が、正隆の心の奥の奥に流れて居たのである。

自負の強い彼は、家族に對しても、じつと盲なしくは仕て居られない。罵りながら、口では、「何が何だか分るもんか」と云ひながら、正隆は、まだ先を見て居た。今度の意外な當外れは、單に機會的な不運(アンラツキー)で、一生を通して、目に見えない

彼方から自分を大きく支配する運命の狂ひだとは思つて居なかつた。運命（デスティネー）と、運（ラック）とは違ふ。彼は、動く、消える、そして、或程度までは自分で掌握する事の出來る運の戸惑ひ（とまど）として、此の失望を堪へようとしたのである。

然し、彼としては、殆ど豫期出來ない朗らかな心底は、或日受取つた一通の手紙で、見事に破られて仕舞つた。

又破られるのが無理だとは思はれない程、正隆の其當時の魂に對しては、慘酷な蹂躙であつた。覆はれて來た現實は、俄にパツクリと蓋を上げて彼の眼前に見るに堪えない程の醜陋を暴露した。或友人によつて、好意的に書かれた手紙は、眞田が選ばれた理由と、同時に彼に加へれた誤解とを、詳細に説明して寄來したのである。

自分が、彼程眞劍になり、彼程熱中し、あれ程よい心で努力し、努力し、努力し拔いて出來上らせた仕事を、その仕事を、兄貴の御蔭だ等と云つて沒却させて仕舞ふとは、何といふ事だ！　眞個に、何といふ事だ！

「畜生！

丁度、晩餐の卓子に向つて居た正隆は、いきなり齒ぎしりをすると一緒に、片手に持つて居た杯を、擲きつけた。そして、傍に、無言の儘坐つて居る夫人に

「此を見ろ

と手紙を差つけながら、ボロ〳〵と涙をこぼした。何といふ事だ！

彼が、今まで或る正當な事を豫想して、自分の失望を鎭（カーム）しようとして居た事等は、もう總て、間違ひだつたといふ事が示されたのだ。自分が、正しいものと想つて居た處には、下劣がある、卑劣がある。そして、不公平が最後の審判を下して居たのだ。

素晴らしい自分の仕事を疑ふ。疑つた疑問を其なら、何故、自分に正さうとは仕ないのだ。誤つた疑ひで人の生命

を潰して置きながら、その誤謬の儘で價値を定め、自分の一生を臺無しに仕て呉れる――

「フム――

卓子の上のものを、がら〳〵と肱で片寄せながら、正隆は眞蒼な顏を頰杖に支えた。

「フム！　又始めやがつた……

何を始めたのか？　奸策である。彼の一生を滅茶にする惡計である。記憶の奥に埋れて、殆ど忘れかけて居たK縣での事が、惡運の眼のやうに、彼の眼前で輝き出したのである。正隆は、自分の、最初の首途を悲慘なものにさせた、何か恐るべき凶徵が、今も尙、執念深く自分の身を離れずに付いて步いて來て居たのを思はずには居られなく成つた。

永劫である。永久である。命の、限りである。命の限り、自分の生きて居る間中は、此の、恐ろしい呪咀が付いて廻つて自分の行手を遮るのだらう。

副島氏、生徒、垣内を使つた怨念は、今は多くの先輩と、眞田とを摑んで居るのだ。いつも、相手は多い、いつも、多い。其れだのに、自分は獨りではないか。到底適ふ筈は無い。頭を出すとは擲り、頭を出すとは擲りつけて――。今日でも自分が縊れ死ねば、凱歌を奏して、死骸の廻りを踊るだらう。

皆が、死ねばいゝと思つて居るのだ。皆が、首でも吊ればいゝ、まだ死なゝいか、まだ此でもかと、虐めるのだ、何故？　分つて居るぢやないか、皆は俺が怖いからだ。俺の力が恐ろしいからだ。俺に出られちやあ、自分達の立つ瀨が無くなるから、邪魔者の俺を、見えない底へ葬つて仕舞ふとするのだ。

いつも狙つて居る、いつも隙を窺つて居る。其を、俺が知らないとでも思ふのか、馬鹿奴。然し、御氣の毒だが、俺はまだ死なないよ。邪魔にするなら、仕て見るが好いさ。けれども、俺も、負けては居ないからな、貴樣が邪魔にする氣

ら、フム！　正隆は、血走つた双眼をカツト見据えた。覺えて居ろ、俺も命の限り、邪魔に成つて遣るから！

夢中に成つた正隆は、正房を抱いた乳母が御隱居樣、と呼びながら主屋へ逃げて行つた程、狂暴な勢で、譯の分らない事を怒鳴りながら、瓶から酒を煽りつけた。そして、仕舞ひには、失神したやうな信子夫人を、確りと胸に抱き擁へながら、膏と汗でニチャ〳〵に汚れた頰を、冷い、滑な彼女の頰に擦りつけながら

「信子、信子……」

と子供のやうに泣き倒れて仕舞つた。

（十一）

「邪魔にする？、フム、面白い、遣れ！　遣れるものなら、遣つて見ろ！

酒精の力に煽られて、夢中に成つて居た間は、正隆にとつて仕合はせな時であつた。

一時に勃發した激情の浪に乘つて、我も他人もなく荒れ狂つて居る間は、まだよかつた。然し、次第に醉は醒め、目が覺め、或程度まで鎭まつた正隆の心の前に現れた現實は、ひどいものであつた。眞個に、ひどい。生きるには、辛い程の世界である。

一度でも、朗らかな希望の明るみに身を置いた正隆にとつて、忘れようとして居た過去の追憶を一新して、今日に甦らせた許りでなく、互に力を加へ合つて、彼の絶望を一層大きなものにする今の疑惑は、彼自身の力では逃れ得ない煉獄のやうにさへ見えて來たのである。

K縣での忘れ難い印象を、或は一種の病的な幻想（ハルシチーション）だつたかも知れないと、彼自らに思はせて居たものは、正隆の生活に

に與へられた、新たな幸福の力であつた。

强調された現在の色調に、知らず〳〵過去を薄めて居た彼は、今、その頼む現在の破滅によつて、俄に、過去を簡拔けに見るやうに成つて來た。遠のいて、ぼんやりとして居た思ひ出が、一時にカツと鮮明な力强いものになつて彼の面前に迫つて來る。そして、彼の時と、今との連續と成つて居る僅か二三年間の光明は、却つて其が明るい爲に、餘計、左右の闇を濃くする事にほか役立たないのである。

感情に激した正隆は、大きな打擊を受けた瞬間から、あらゆる冷靜さ、實際的方針と云ふべきものを失つて仕舞つた。役所は、ひどい、不正である。自分のすべき仕事と、繫ぐべき希望は、もう無い、無く成つて仕舞つた。と思ふと直ぐ、辭職願を書いて突き出した正隆は、自分に與へられた苦痛を、只有りの儘、其儘に受取つて全身で苦しんだ。その苦しみは大きい。深い。而して、魂の根にまで毒を注射するものであつたらう。けれども、正隆は、其程の苦痛に、解剖の只一刀をも加へなかつた。

自分は苦しい。何故苦しいのか、彼等が、不正だからなのではないか、彼等の不公平が自分を虐げるから、自分は辛いのではないか、此の點から更に一歩を進めて、其ならば、彼等の不公平と、不正とは如何那原因と、內容を持つて居るだらうと云ふ處まで、彼の思索を進める力を、彼は生れながらにして持つて居なかつたのである。

其故、此場合、正隆にとつて、母よりも、妻よりも、よき一人の友が生活の活力素に成る筈であつた。一人のよい友人が、彼の總ての經驗と、周圍の不幸な誤謬とを、些細に解剖し、解體して、あらゆる不幸な偶然を取りのけた運命の大系を暗示しさへすれば、正隆は如何うにか、生活の明るみの上に息を吐けたかも知れなかつたのである。然し、何處にも左樣那友人は見付からなかつた。平常から、群を離れて强者のやうに振舞ふ正隆は、自分の馬鹿を披瀝する者を持

たなかつた。人間が何處かに持つ共通の馬鹿を、痛はり合ふ人を持たなかつた。從つて、多くの同僚は、其の翌日出された辭職屆の事を知つて、彼の物質的安定と、其爲に許される我儘とを羨望したに止まつて居た。或者は、正隆の所謂お坊ちやんを、世にも比類ない仕合はせとして、彼を祝福さへ仕たのである。

此の物質的に、彼が餘り安穩であつたと云ふ事は、一面に正隆の身を自由に解放して居ると共に、他の一面では、彼を只瞬間の激情に已を委せる弱者にして居た。

若し、正隆が、役所から離れると云ふ事が、何等かの點で生活の不安を齎すものであつたら、此程、彼は無反省で、或環境から自分を引離す事は出來ないだらう。出來なければ、從つて、何等かの思考が費される。其處で彼は、自分の苦痛、その苦痛を齎した原因、等に就て、何か掴む事が出來たかも知れない。けれども、役所で受ける俸給などと云ふものは、生活の大道に何の差も起さない境遇に在る正隆は、單に役所を雜作なく罷めたといふ事と共に、同様の無省察で、自分の疑惑を肯定した事に、一層の不幸を持つて居るのである。

彼の追憶は、其が追憶であると云ふ事實に於て、多分の想像が加へられるのを免れない。現實の苦痛は、その結果のみを握つて、原因を手の屆かない彼方に置いて居るといふ點に於て、又、多くの推測と假想とを含まずには居られない。總ての事が只抽象化されて、その抽象を左右する傾向が、只、正隆の氣質にのみ動かされる事は、結果として、正隆の求め得る結論以外のものは出て來よう筈がない。

自分の正直な、眞實な仕事が、劣等な疑と不公平な判斷によつて、現に、拒絶されたといふ事實は、翻つて、妄想かも知れないと思ひかけて居た過去の、K縣での經驗までを、疑ひ得ない事實として、正隆を首肯させた。さうなると、彼の最初の踏み出しから、今日まで、正隆は、只不正の、惡策の的と成つて居たやうなものなのではあるまいか。

黑計を運用する臺として、或處へ運び出されたやうなものである。その運び出す餌として、自分は、僅かな、然し力强い幸福を覗せられた。幸福を厭ふ人間が、此世に獨りでも居るだらうか？　皆は幸福を求める。その皆の求めるものを自分が求めて、釣り出された事は、自分としては自然である。が、相手にとつて、自然である事を、係蹄に使ふのは、或警戒を與へる策略よりも、數等卑劣である。正隆は、彼にとつて、全くの不幸であつた、人々の無責任によつて、止途もなく疑の底に滑り込んだのである。

彼は、先づK縣に於て、その發端を現した不吉を呪ふべき運命が、着々とその確實な計畫を遂行して、今日、第二段落の成功を納めたのだとほか思はれなかつた。

等しく、其を自分が自分の心に經驗したと云ふ點で、K縣の事と、今度との事とは、正隆にとつて、幻想と事實との差を持たなく成つて來た。まして、靜かに、魂を鎭めて、人間の一生を貫く、運命の方向と、その運命の大道に折々現れて來る不幸な錯誤、機會と云ふものゝ不思議な影響などを考へる事は出來なかつた。正隆の見越す運命の終極は、恐るべきものであつた。

自分の性格の裡に在る力の缺乏を知らず、又他人の裡にある同種の不完全さも思はない正隆は、全く日の目もない未來を豫想して、其處に導かうとする運命、明かに、自分を蔑視する者共の手で繰られる運命を呪咀する事ほか知らなかつたのである。

斯様な正隆を取圍んで、最初、彼の眞價を誤つた人々は、勿論、沒交渉であつた。自分等の不眞實を謝して、氣の毒な彼を慰めよう等と思ふ細胞は、大きな頭の一隅にも持つては居ない。

假令、其程の惡意は無かつたにしろ、彼等によつて、突轉がされた正隆を受取つて、母未亡人は、失望にがつかりと

仕ながら、手のつけやうも知らなかつた。

再度の失敗で、ひどく目算を破られたやうな口惜しさを感じながら、强いても、唯一の避難所である腦病に正隆を壓し込めた未亡人は、正隆にとつては、何の慰めにも成らない、身の邊りの手落ちない注意で、温めようとした。

その様子を、靜かに眺めながら、美くしい信子夫人は、良人の受けた疑ひに、或恥辱を感じると同時に、價値の見えさる下落を感じずには居られなかつたのである。

信子夫人にとつて、良人は尊敬すべきものであつた。その良人が、何か厭はしい嫌疑を受けたと云ふ事は、彼女の誇りを、むつとさせる事である。榮達の見込みが確實らしく見えて居た良人の、俄の失墜、顚落しつゝ、男らしくも無く豌き叫びながら、只徒に、焦る彼を見ると、信子夫人は、最初に懸けられた疑を、確かりと否定する事さへ、曖昧なものに思はれて來たのである。

良人を全部、信じ、肯定し切れない信子夫人は、心の中では、幸福な姉達の生活を比較しながら、あでやかな眉を顰めて、憐れな良人を眺めたのである。

總ては、何處にも捌け口のない濁流の渾沌さで彼の周圍に渦卷いた。

正隆は自分の苦悶を、肯定して呉れる者も無ければ、又力强く否定して、鞭撻しようとして呉れる者もないのを發見した。妻も、母も、遠く、或は近いと云つても、或一定の距離を隔てゝ面する以上決して、より接近し、しつかりと魂の奥まで摑んで呉れようとは仕ない。不思議に、遣場のない不安、呪咀。當のない力の焦躁。行き處がない、行き處がない……

正隆は、憤りにまかせて、フム！　遣つて見ろ！と叫ぶだらう。けれども、其は決してその瞬間後の、心其ものゝ空

虚を満すものではなかつた。相變らず、淑やかな、溫順な、動じない妻。正隆や、正隆や、と云ふ母。然し、二人は、何の力も加へては呉れないのだ。彼女等の、相變らずの柔かさ、ほの溫かさが正隆を、一層苦しませる。彼は、自分と共に若し信子も怒鳴つて、狂れて、呪咀すべき運命、人閒、に拳を振つて呉れたらば！　と、思ふ。其でなかつたら、何か、火のやうな言葉で、自分をハツとさせて呉れさへ仕たら！　と希ふ。希ふ。眞個に希ふ。が、出來ない。

信子夫人は、良人として與へられた異性に、只從順に、貞淑に、美くしい身躾みで心を和らげる妻として育てられて來た。彼女の豫想した良人は、多大な名譽と希望とを持つて、華やかに彼女を引立てる筈のものであつた。總ては違つて來た。信子夫人は勿論さう思はずには居られなかつた。正隆も勿論、さう思ふ。正隆は、運命の顏を見そこなつた自分、見そこなふやうな運命の詭計に一生足を攫はれなければならない自分を見出して、總ては違つて居たのだ、と思はずには居られないのである。

自分は母に愛された。よい天分を與へられて生れた。其にも拘らず、いざ、その力を使つて眞個の幸福を摑まうとする段に成つて、何故自分は、此程、他人の嫉妬に苦しめられなければならないのだらう。

暗い運命が、一生自分を覆ふと知つて、何故自分に何かの力を授けて呉れたのだ、

何故、人並に幸福らしい、生活の一片を投げて呉れたのだ？

自分を、富ませ、美くしい信子と、愛すべき正房とを與へて置きながら、如何うして、其那に、足を掬つて倒すのだ？

信子は、信子によつて新しくされた生活の總ては、其なら、其なら、今の苦痛を一層深く、堪え難いものとして味はせる爲に、與へられた餌食だつたのだらうか？　左樣なのか、眞個に。さうなのか、若し左樣だとすれば――。

正隆は、額に膏汗を搔いて吼つた。

若しさうだとすれば、信子さへ、此の麗しい信子さへ、見えざる無數の敵の間諜だと、云はなければならないのだらうか？

（十二）

恐ろしい、其は餘りに恐ろしすぎる事だ。正隆は、計らずも自分の生命の偶像である信子夫人に向けられた疑問を抱いて、三晩一睡も仕なかつた。

若し彼女が、自分の愛に應答しない、信頼を裏切る惡魔の使ひだつたら、如何うだらう。總ては、もう其つきりである。もう、それつきり！　其先に在るものは、云へない。云へない無が、虛無が、闇が擴つて、彼を嚇やかすのである。

彼は、何か只一事で、馬鹿な貴樣だな！　と笑つて、その疑問を殺して仕舞ひたかつた。けれども、彼は、左樣は出來なかつた。

結婚の當時から、何かの折に觸れては感じた、あの「けれども」と云ふ愁訴。幸福な間、その幸福の持つ、華やかな色彩で、何時の間にか隱されて居た、その一種の、明かな物足りなさは、繪の具が落剝すると共に、何か意味ありげな穢點と成つて、正隆の心の前に滲み付いたのである。

此處に至つて、正隆の內面的な問題は、一廻轉を仕たやうに見えた。今まで、只漠然と衆に向つて注がれ、放たれて居た疑惑は、今あらゆる力を集注して、信子を其の對照として摑んだのである。もう、正隆にとつて、自分が、役所を如何うして罷めたかと云ふ事や、此から先、如何う遣つて行かう等と云ふ事などは問題では無く成つた。只、信子である。信子が、眞實に自分を愛し、自分を信じ、その愛と信との爲に、自分に送られた者であるか否かと云ふ事が、唯

一の疑問である。彼の生涯の希望は、只此の一點で決せられるやうに思はれて來たのである。

若し、信子が、眞個に自分を扶け、自分と禍福を偕にする決心で居るのなら、生活に、未だ何かの光明がある。四方、八方から虐げられても、彼は、夫人の美と、美の持つ力とによつて、何か生きて行く途を得られる事を信じて居た。若し彼女が、惡靈の傀儡でないならば、敵は、未だ何處かに隙を與へて居ると云ふ事を思ふ可能があると、思つたのである。其から緊張し始めた正隆の注意は、殆ど間諜のやうに信子夫人を跟け廻した。彼の傍に居る時も、居ない時も、外との交際も、あらゆる隅々を壓へて、彼は、信子の正體を見窮めようと仕始めたのである。

けれども、其は彼女を愛す正隆には堪え得ない仕事であつた。

正隆は、信子を失ふ事を平靜に想像する事は出來ない。涙なしに考へる事は出來なかつた。彼女の美と、捧げられた奉仕を、彼は、いざと成つて何の悲歎も無く振り捨て得るとは、如何うしても思はれない。假令、彼女が、敵の見えざる掌から渡された者でも、若し彼女が自身で其を自覺もせず、又利用されさへ仕ないならば、自分は、決して彼女を見返す事は出來ない、と思はずには居られない。何處に彼女ほど、清澄な美を持つて生れた女性が居るだらう。

何處に、彼女ほど高い氣品を持つた女性が居るだらう。

彼女の從順と、謙讓と。醜い女でも持ち得る、其爲に人に尊敬さへ拂はせる美徳を、比類のない輝くなやう美に並有して居る女性、その信子、その婦人が、尙も自分を裏切るだらうと云ふ想像は、正隆にとつて、恐るべき苛責である。自分の齒で、自分の魂を食ふ苦みなのである。

彼は、一日一日と日を經る每に、その疑惑に堪へ得なく成つて來た。無言の中に、信子を監視する冷淡に、じつと息を殺しては居られなく成つて來たのである。正隆は、只一言、はつきりと天地に懸けて誓つて欲しかつた。切望、焰の

やうな激しさで、愛す！　と云つて欲しかつた。さうさへすれば、自分は、せめて信子丈を信じ、守り、縋り付いて、生活を續けて行かれるのだ、と云ふ切迫した願望が、血行と共に、彼の身内を循環仕始めたのである。

此の、愛す！　と云ふ誓言は、今の場合、正隆にとつては、單純な愛情の誓言ではなかつた。信子夫人の、天地に懸けた愛で、彼自身、彼の全部を、肯定して欲しかつたのだ。彼が、不幸な運命を負ふて生れた者である事も、彼が、よい天分を持つて居る事も、其を發揚する事は、不可能な事も、總てを、有りの儘、よし！　と云つて貰ひたかつたのである。

正隆は、どうぞ

「解つて居ます、皆解つて居ます、私の愛する者よ、まあ確り仕ませう、私は、其の儘の貴方を愛して居るのですよ、」

と云ひながら、腕を引立てゝ、起して欲しかつたのである。

憤りの狂暴な力は、彼を振ひ立たせるだらう。けれども、正隆は、その孤獨な、緊張の中に、たつた一人で立つて居る事は、堪へられなかつた。

怒濤のやうな力が、自然にじわ〳〵と鎭ると、其の後を襲ふ寂寥、恐ろしい迄の靜謐に堪え兼て、正隆は感傷的に成らずには居られない。此の反動的な感傷は、今、正隆の疑惑、その所産である苦悶が大きければ大きい丈、深ければ深い程、共に強度を増して來るものなのである。

食慾を失つて、極度に神經的に成つた正隆は、殆ど大病人のやうに窶れ果てた。一日中床に就いた限り、起きて動かうとする丈の、彈力を失つた正隆は、大きな羽根枕に埋めた頭丈を僅に動かして、傍の信子夫人を顧る。そして、彼は、沈痛な言調で、、日に幾度となく、同じ質問を繰返した。凝と坐つた彫像のやうな夫人の小さい手を自分の掌に置きな

から、正隆は、先づ
「信子、お前は、眞個に俺を愛して居て呉れるのか
と、口を切り出すのである。
最初、正隆の質問が唇を離れた時、信子夫人は、微かながら、ハッとした表情を緊張させて、蒼白い、寧ろ土氣色とも云ふべき良人の顔を、痛々しく眺めた。そして、落付いた聲に力を籠めて、
「貴方、御心配は御止め遊ばせ
と云つた。
「有難う、信子。俺は心配は仕ないよ。然し――信子、眞個にお前は俺が嫌に成りやあ仕ないか、此那不仕合はせな男と、一緒に居るのは、厭ぢやあないか
「貴方は――、如何うして其那事を被云ひますの、大丈夫でございますわ其那こと、
「大丈夫かえ、眞個に、其ぢやあね、信子、俺はもう一つ、たつた一つ、大切な事をお前に訊きたいんだが、有りの儘、何でも返事して御呉れ、ね信子
「何でございますの?――けれども、貴方は、眞個にいけませんわ、餘りお頭を御使ひになると、又氣分が惡く御成りに成るのだから、後でよろしいことなら、後程に遊ばせよ、ね、
「後ぢやあいけないから、今訊くのだ――ね、信子、お前は――變だと思つちやあ、いけないよ。只、俺の氣に成つて仕様がないから、參考の爲に、聞くのだからね、――お前は、誰かに頼まれて、俺の處へ來たのぢやあないのか?、
正隆は、さう云ひながら、ひどく當惑し、混亂した表情を浮べて、眼を屢叩いた。その表情を、じつた眼の下に見な

から、信子夫人の唇には、例の不思議な、彼に「けれども」と思はせずには置かないやうな微笑を湛え始めた。

「誰かに頼まれて？ 可笑しな事を仰云ひますのね、其は、貴方の御母様や、私の母やなんかゞ、來て呉れ、行け、と被云つたから來たのぢやあございませんの、眞個に可笑しな方

「いやね、信子、俺の云ふのは、お母さん達の事ぢやあない、誰か、さうさな、誰か、親類でも何でもない人に、たのまれは、仕なかつたかと云ふのだよ、

「貴方は――。

信子夫人は、滑らかな頰にさつと血の色を上せた。

「妙な事許り被云るのね、私は存じませんわ其那事、

「怒らないで呉れよ、信子、願ふから――

そろ／＼と逃げて行きさうに成る夫人の指先を、確りと握りながら、身を引寄せるやうにして、正隆は哀願した。

「憤らないで呉れ、然し、眞個に、お前は知らないの、誰からも頼まれないの？ 信子、お願ひだから、云つて御呉れ

「存じません。――貴方は何を疑つて被居つしやるの、はつきりと被云しやればよろしいのに。

「疑ひやしない、――が、疑つて居るんだね、疑つちやあ悪いかえ、信子、俺はお前が可愛いのだよ、大切なのだよ、信子、だから俺は――お前に行かれるのが堪らない、

「何處へも行きは致しませんことよ、さあ、其那事はやめにして御休み遊ばせ、

夜着をかけやうとする夫人の兩手を掴んで、正隆は起き上つた。

「いゝ構はない、大丈夫だ。其でね、信子、俺が何を知りたがつて居るんだか分るだらう？　俺は、お前が大切なのだ、お前が居なければ生きても居られない、だから、お前は疑はないでも、お前の後に居る者を疑はずには居られなく成るぢやあないか、

「何を、だから御疑ひに成るの」

「解らないのか、誰かに頼れやしないかと、先刻から云つて居るぢやあないか

「誰の事を仰云るの其は？　うちの母？

「其が分らないのだ。誰だか俺には分らない。だから訊くのぢやあないか、信子、切望、正直に云つて御呉れ、御前は、俺を愛して呉れるか、一生一緒に居て呉れるかえ、眞個に、隠さず云つて御呉れ信子、俺が苦しんで居るのは、お前に解つて居るだらう

「其は分つて居りますわ、だけれど、貴方は――一體何を其那に苦しがつて被居つしやるのよ

「そら！　もう解つて居ない。矢張り分つちやあ居ない。だから、お前は俺の思ふやうな返事を仕て呉れないのだ。信子、眞個にお前は――

手を取られたまゝ、凝と伏目に成つた信子夫人の眉の間からは、「男らしくもない！」と云ふ憤りが、火花に成つて散りさうに見えた。正隆の異體の知れない疑ひや焦躁に掻き亂された彼女の感情は、彼の顫える熱情を、裏返したやうな冷靜、冷淡に冴え渡つて、他人に向ふより鋭い批判を、亂れた良人の面上に注ぎかける。嫌厭が湧かずには居られない。その嫌厭は、彼が、自分の良人であると云ふ意識によつて、一層強められ、醜さを増して來るのである。

「愛すると云ふのなら、

夫人の眉はひとりでにピリ／＼と動いた。

「何故男らしく、安じて愛して行かないのだ。愛して疑ふ、愛するから疑ふ？ 何を疑ふのだ。根もない、自分でも何だか分らないやうな疑ひで、ひとを攻める……

攻める――」。信子は胸のむかつくやうな衝動を感じずには居られなかつた。或感情の齟齬した場合、お互の理解が方向を誤つた時、結婚した妻と良人とほか知り得ない距離の懸隔の感が、淺間しいギャップと成つて、彼女の目前に口を開いた。男性と云ふものに、英雄的な幻想を持つ信子夫人にとつて、女性である自分の前に跪え、哀訴し、泥のやうな疑惑の中に轉げ廻る正隆は、餘りに慘めに見える。餘り弱い。餘りに頼りない。その頼りない、癈殘者めいた男を一生の良人として、自分の生涯を支配されるのかと思ふと、女性の大望（アンビシヨン）を多分に持つ信子夫人には堪え得ない焦躁であつた。

その內面の爭鬪を、本能的な直覺で、或程度まで魂に感じる正隆は、一層、持つ不安と疑とを煽られずには居られなかつた。信子夫人が默れば默るほど、落着けば落付くほど、正隆は多辯に、燃え顫えて、摑み得ない何物かを摑まうとして、後ずさる夫人の心を追ふのである。

けれども、此の魂と魂との爭鬪は、決して長くは續かなかつた。暫く時が經つと、始めの間は、相當な眞實さで、良人の質問に應答して居た信子夫人は、すつかり、その緊張を失つて、丁度、精神病者に對するやうな不眞面目が、彼女の態度に現れ始めたのである。もう、信子夫人は、一言で云へば、正隆に取り合はなかつた。元は、頰を赤めて憤りもした、時によれば議論がましい口を利いた夫人は、もうぴつたりと其等を封じ込んで仕舞つた。そして、氣の違つた者が

「馬鹿やい、馬鹿！　お前は馬鹿だぞ！

と叫びながら荒れ狂ふのに對して、周圍の者は、半ば憫笑を漂べながら、

「あゝ馬鹿だよ、馬鹿だから、音なしく仕ておいで

となだめるやうな調子が、正隆に對する總ての素振りの中に含まれ始めた。彼自身は、氣付かないうちに、正隆は、彼の唯一人の頼りである信子夫人に先づ狂人扱ひをされ始めたのである。

明に、正隆の言動は常軌を逸して居たゞらう。けれども、彼はまだ氣違ひに成つては居なかつた。彼は求めて居るのだ。只管に、信子夫人の眞實な愛の證言を、求めて居るのだ。彼は、其さへ確かりと與へられゝば、何の焦躁も狂亂もなく、生活に戻る事が出來るだらう事を知つて居たのである。が、然し、其は決して與へられなかつた。望み、求める第一のものが與へられないのみならず、其等は刻一刻と彼の周圍から遠のいて行くやうにさへ見えた。

「愛すと云つて呉れ。信子、切望。只一言、愛す、と丈云つて御呉れ、其で俺は救はれる、

亢奮した正隆は、泣きながら掻き口說いて、白い信子夫人の手を引絞るだらう

「どうぞ信子、眞個の事を云つて呉れ、俺を愛す！　と云つて御呉れ、信じて御呉れ、其で、俺は助かるんぢやあないか、信子！

瞬間、夫人の瞳は、彼の言葉に刺戟されて、微かな輝きを持つ。然し、次の瞬間、諦めを含んで憫笑と、もつと性的な壓苦しい嫌厭が醸す冷笑とを、鮮やかに赤い唇に浮べる夫人は、やがて、彼の感激とは、まるで宇宙の異ふやうな冷淡さで

「もう分りました。さあ、氣を鎭めて御休み遊ばせ

と云ふ返答ほか與へないのである。

は少なくても二ケ月や三ケ月くらゐ金の心配をしないで食つて行つて、その間に書き上げなければ出來ない、といふやうな答をしたものだ、そしたら、

「ぢやあ、何か、さうしたら、それから後はうまく行けるんですかい？」と正直な彼は鼻を鳴らしながら聞くのだ。

「行けるんです、」と私は答へた。すると、彼は

「そんなら家の二階が空いてる、あそこでもかまはなければ、あそこへ來なされ、そして二ケ月でも三ケ月でも、私たちと同じものを食べて辛抱する氣なら、お出でなされ、」と言つたものだ。で、私は

「ぢやあ、下宿の方を始末して、今夜から御厄介になります、」と早速に答へたものだ。そして彼と別れて下宿に歸つて來たのだが、元より下宿の始末のしやうどころか、私はその時たしか懷に金三十錢しか持つてゐなかつたのであつた。私はやつぱり濟まないが、いづれそのうち工面をして、そして拂ひに來るから、と心の中で詫びながら、原稿紙と手廻りのものを懷に捻ぢ込んで下宿屋には、「ひよつとしたら、今夜は歸つて來ないかも知れない、その代り明日の午後には乾度滯つてゐたお拂をすつかりするから、」と言ひ置いて、それからその淺草の切屑屋の仲戸丈助の家へ行く途で、別に大した用事もなかつたのだが、一寸本郷の友達のところに寄つたものなのだ。ところがその友達に別を告げて、そこの下宿の玄關を出ようとすると、私は私の目の前に、別れた私の女が彼方から嬉しさうに笑ひながら走つて來て立つたのを見たのだ。そして彼女の言ふのには、彼女は彼女を横須賀の藝者屋から拐した八王子の桂庵の手から、その桂庵は始めは彼女を利用して何事かを企らんだのに違ひなかつた、だか拐したその桂庵さへもことごとくヒステリイの發作を起すところの、彼女の氣儘を制御することが出來なかつたに違ひないのだ、そこで彼は利害關係を抛つて、今は彼女から逃げることを唯一つの目的で、横濱の桂庵に托したらしいのだ、で彼女は横濱の桂庵のところに行つてゐるのだが、話が明

日定る、だからその暇に私に會ひに來たのだ、と言ふのであつた。

「いつ八王子から横濱に行つたのだ？」と私が彼女に聞くと、

「それが面白いのよ、」と彼女は言つたものだ、「昨日八王子から横濱へ行つたのよ、ところが、知らない家で泊るのが厭だつたもんですから、よつぽどあなたのとこへ行かうかと思つたんだけど、何處にゐるやらはつきり分らないんでせう、折角來て泊るところがなかつたら困ると思つたもんですから、八王子の元の桂庵の家に行つたの、そしたらね、あの男も餘程困つてゐたものと見えるのね、もう何處かへ引越して行つてしまつてゐないの、下の家で聞くとね、獨り者だから、それに公周旋だから、店が入らないでせう、二階を借りてたの、で下の家で聞くとね、私が横濱へ出かけた直あとで、大急ぎで荷物をまとめて名古屋とかへ行つたんですつて……」さう言つて、彼女は止め度なく笑ふのだ、だが私はその話に笑へないのだつた、桂庵さへ彼女を持て餘して、彼女から逃げたに相違ないことを考へたからだ。私は再び引返して彼女を友達のところへ連れて行く彼の迷惑を考へて、仕様がなかつたがそれから私は彼女を連れて、的もなく夜の町に出たことだ。

「どこへこれから行くの？」と彼女は私に聞いたことだ。

「僕にも分らない、」と私は答へたことだ、全く私も途方に暮れたものだつた。

「私、御飯を食べてゐないの、」と彼女は言つて心細さうな顔をした、そして私だつて隨分心細い氣がしたのだ。そして彼女は私に聞くのだつた、「あなた今何處にゐるの？」

「今日まではあそこの下宿だつたが、」と私は答へたことだ、「今夜からはどこへ行かうかと思つてゐるんだ、もう友達のところで行くところはなし、」と私はわざと淺草の切屑屋の話はしないで、斯う言つたものだ。

「ぢやあ、私が今夜泊めてもらはうと思つても何處もないの？……御飯も食べないで、これからのこ〳〵横濱まで歸つて、知らない桂庵なんかに泊れやしないぢやないの？」と彼女はだん〳〵に言葉の調子を疳高くして、今にもヒステリイを起しさうにして言ふのだ。「あなた、私がゐなくなつてから、何をしてたの？ 二年目には屹度一人前の小説家になるなんて言つてたのはどうしたの？ もう間もなく一年經つてよ！」

そして私たちは宵の本郷通を、わざと人通りのない大學校の側の人道を、急に足を早めたり、かと思ふと、どうかすると立止まらんばかりに歩を緩めたりして、歩いたことであつたが、だが、どうしたらいゝのだつたらう、先にも言つたやうに、私の懷には金三十錢しかなかつたし、彼女は彼女で新橋で電車を下りた時、何か石につまづいた拍子に、一度に前と横との下駄の鼻緒を切つたとかで、何といふ相變らず無謀なことをしたものだらう、いくらもう古くなつて、いけなくなつてゐたとは言へ、殆ど懷にありつたけの四圓幾らで新しく下駄を買つたものだから、それに今の先も私と友達の下宿から歩き出して二三町來た時、足袋がいけない、と言つてそれを又買つたものだから、十幾錢しかもう持つてゐないと言ふのだ。私たちは、どうしやう？ と私は思つた、彼女もやつぱり思案に暮れて、ぼんやりと反對の側の夜の町の灯と人通りとを見てゐたことだ、さうして私たちは可成り長い間、本郷三丁目の電車の停留所のところで、何の的もなく立つたり、又蹲んだりしてゐたものだ、これで、私たちと、群集が往來したり灯がともつたりしてゐる町との間隔が、もし五丁も離れてゐたとしたら、そして私たちの方に一間と離れてゐないところに海でもあつたとしたら、二人は抱き合つて飛び込んだかも知れなかつたのだ、だが、私は思ひ立つて突然彼女に向つて、「ぢやあ、もう一ぺん先の友達のとこ迄行つて見よう、そして幾らかでも金を借りて來よう、」と言つて歩き出したら、彼女も亦默つて歩き出したことであつた。

その友達にしても、私に劣らぬ貧しい男に相違はなかつた、彼は、女を外に待たしておいて彼に金を借りに行つた私

に、彼のぼろぼろの蟇口をさかさにして、六十何錢かを振り落して、これだけある、と苦笑しながら言つた、私はその中から五十錢だけ拾ひ上げて、彼に別れて、外の電信柱の蔭に蹲んで待つてゐた彼女のところに歸つて來て、默つて二人で元の道を、大學校の塀の前の鋪石の道を歩いたものだ。途中で、私は袂の中で私の持つてゐたのと今借りて來たのとを合はして、それを摑み出して彼女に渡しながら、「これだけしかなかつた、」と私は彼女に言つた、「だが、どうにかこれで横濱までは歸れるだらうから……。」

すると、彼女は忽ちその錢を道端に投捨てゝ、泣き出して言ふのに、「御飯も食べないで、これからのこ〳〵横濱に歸つて行けると思つて？……」

「あゝ、さうだつたね、御飯を食べてなかつたんだね、惡かつた、惡かつた！」と言ひながら、私は暗い道端に捨てられた八十錢の錢を拾ひ集めたものだ、その傍で彼女は立つて泣いてゐたことだ、少ない往來だが、時々人が立止まつたり、或ひは歩を緩めたりして、私たちの方を訝しさうに見るのであつた。だから、立止まつてゐると興しいので、私はもうすつかりヒステリイを起してゐるところの彼女を、引立てるやうにして歩いたことだ、そして今度は本郷三丁目を通り過ぎて、殆ど明神樣の前あたり迄、唯的もなく歩いた。

「どこへ行くの？」と彼女は家の中と違つて、十分ヒステリイを起してゐる暇がないので、無言で歩いてゐる私に負けて、到頭斯ういふのだ。

「仕樣がないからね、」と私は彼女に言つた、「明日になつたらお前は横濱に行けるだらう？　だから、今夜は夜通し二人で歩かうぢやないか？」

そこで、彼女はあべこべに私の斯ういふヒステリイの言葉に、わツと泣きながら、それは丁度宮本公園の前の通りだ

それを母が見兼ねて分けに來たところが、彼女は今度は母を打ちに掛つたものだ、そこで又私がそれを分けに入つたものだ。そしたら、母は分けられて默つて火鉢の傍に歸つて行つて、しく／＼と泣き出したことだつた。そしてその翌日、彼女は「一寸田丸の家まで用事で行つて來ます。」と言つて、そのまゝ私たちの家に歸つて來なかつたのであつた。それから二三ケ月後に私は女に別れたのだ、その時以來の彼女等は出會ひだつたのである。だが、無論、その日彼女等は靜かに話し合つたことださうだ。夕方になつて、私の女が普段から子供のやうに卵燒が好きだつたことを思ひ出したので、母はそれを下宿に注文して、そして二人は膳を並べて食事をしたといふことだ、だが彼女はほんの少ししか箸を取らなかつたさうだ、彼女は髮を丸髷に結つてゐたさうであつた。

「何處かに嫁づいてるの?」とそこで母が聞いたら、彼女は、彼女の癖で、默つてうなづいたさうだ。

「もうあんたも年を取るんだから、」と母が言つたさうであつた。「なるべく大人しくしてね、」すると、彼女はやつぱり默つてうなづいたことであつた。そして彼女が歸る時に、「あんたもさうして他所に嫁づいてゐるんだから、もうあの子に會ひに來ちやあいけませんよ、今度の人に惡いからね、」と私の母は言つたといふのだ、そして「以前なら、とてもそんことは言へなかつたし、又そんなことを半分でも言はうものなら、どんなにひどいヒステリイを起して暴れたかも知れないのにね、」と母はその時私に感慨深さうに言つたことだ。私の女は母にさう言はれた時、さつと顏色を變へたさうだが、やがてそれにも默つてうなづいて、靜かに「さやうなら!」と言つて歸つて行つたさうだ。私は、私にしても、その晩、その話の後夕食の箸が十分にとれなかつたことだ、それが六月の末に近い日のことだつた。

その三

それから又一二ケ月たつと共に、私の小説がだん〳〵と賣れ出して來たものだ、殊に先に話した『苦界』が雜誌に出てからは、それが相當に評判になつて、私は一躍して仲々引手數多の小説家になつたものだ、これは滅多に他所の社界には見られないことに違ひないのだ、私にして見れば、金三十錢の質を置くために、友達に電車の片道の切符を貰ひに行つた時とは、仲々の變りやうなのだ、だが、私の海軍の友達なぞはあの時も大尉だつたし、今も大尉なのだ、その代り彼が少佐になつてゐる時分には私は又乞食をしてゐるかも知れないことだ、さうかと言つて、仲々又この社界だつて、角力士のやうに、唯力さへあればずん〳〵偉くなつて行くといふ程には行かないのだ、私が今日多少の原稿の注文をされるやうになつたのにしても、軍人、政治家に引があるやうに、役者に家柄があるやうに、友達なぞの骨折があることは間違ひないことなのだ。だが又、幾分か先からも洩らすやうに、前の女と別れる時に、私は約束したことでもあるのだ、だから、私だつて相當に確信をもつて掛つたことでもあるのだ。彼女と別れてから最早や二年の月日が經たうとするのだ、二年目の一月といふのは、やがてこゝ數日のうちに來る一月のことなのだ、二年目の一月迄には屹度何程かの小説家になつて見せる、と私は彼女に誓つたことだ、そこ迄は私も本心で誓つたことなのだ、だが、その曉は、即ちその一月からは晴れて、改めて夫婦にならう、と言つたことは、そんな氣なしに約束したと言はれても仕様がないのだ、それ迄には彼女は誰か外の男と夫婦になるだらう、或ひはその時分になつてもまだ身が固まらないでゐるようなら、その時は又何とか話のしやうもあらう位に思つてゐたことは確なのだ。

餘談はおいて、さて、さうして九月のことだ、さういふ譯で、九月には私は多少の金錢の餘裕も出來て、賴まれた原稿を書きに、信州の諏訪に行つたことであつた。そこでは、私は原稿を書き疲れると、土地の藝者なぞを呼んでにや〳〵してゐたものだつた、その中の一人に、ゆめ子といふ、今年二十一歳になる、藝者屋の娘兼主人で、養母といふ實の叔

母に當る者が別に一軒藝者屋を出してゐて、自分では自分で三人の抱え子と一人のお酌とを置いて、そして自分も藝者をしてゐる女があつたものだ、何といふことなく私はその女が氣に入つたものなのだ。

今だに私は別れた女のことを思ふと、何とも言へぬ妙な氣がすることである、現に私は東京の町を歩いてゐると、三日に二度位は屹度一二間先を歩いてゐる女に、はツとして人並より弱い心臓を躍らして立止まることだ、それは私の別れた女に似た女を見ると、さうなるのだ。元來、私は極端に長蟲が嫌ひな性癖を持つてゐるものだ、實際、私は生れてから今日までの長蟲に出遭つた場所と、時と、度數とを悉く覺えてゐる程、それが嫌ひなのだ、だから私はその蟲を見た程度で、發熱して床に就く位なのだ、その代り、少し大袈裟に言ふと、肉眼では殆ど見られない程度の時に、私はもうその蟲が近くにゐることを電氣のやうに身體に異狀を感じて知ることが出來るのだ、私はそれと似た感じを、私の嘗て愛した、愛することには今も變りのない、別れた女の姿に感じるのだ、そして、私は人々の雜踏する町の中でも、幾度となく、彼女にめぐり遭ふことを思ひ出して、胸を震はせることであつた。

だが、さうして信州あたりの三等溫泉の宿屋に泊つて、ふら／＼としてゐると、呑氣者の私はさういふ心配が自分にあつたのか、といふ氣さへしたことだ、又一年足らず前に、淺草の切屑屋の二階にゐて、そこの天井の低い窓から、大正燒屋や橋詰の車屋を羨んだことがあるが、それは前の世に見た夢かのやうな氣がしたことだ、人間といふ者は現金なものだ、といふよりも私自身の淺薄さにもあきれたものだ。

藝者ゆめ子と、退屈なまゝに、いろ／＼と話をしてゐると、或日彼女は自分には當歳の子供があると白狀した。藝者を抱えてゐて、自分も藝者に出て、別に暮しの心配はなくて、いやな座敷には出なくてもよし、と「君はもつたいない程いゝ身分だね、」と私は言つたことだ、すると、ゆめ子は「私、ところが藝者が嫌ひなもんですから……」と聞えない

程の聲で言つたものだ、なる程、素人女にも珍しい程彼女は無口で、さして別嬪ではないが、何處か寂しい顏立で、始終俯向き勝にものを言つて、小さい聲で唄をうたつて、細い爪彈で三味線を引いて、幽靈のやうにすうツと歸つて行つたものだ。

だが、私は、私自身はたよりないのだ。東京にゐる母にしても、月末を遲らせない範圍で、彼女が飮食してゐる下宿屋の拂をしてやつて、年寄のことだからそれに僅な小遣錢を送つてやつておくと、どうせ傍にゐても私たちは決して二人で散步に出るやうなことはないし、同じ下宿にゐながら別々の部屋に住んでゐて、食事さへも三度が大抵三度まで一緒にすることはないし、大抵の時間は友達を尋ねたり、彼等に尋ねられたり、そして一人の時は何かむつかしい顏をして物を書いてゐたり、さうでない時は唯ひよう〳〵と外出してしまふ私のことだ、どうせ家にゐたつて又旅に出てゐたつて同じことなのだから、彼女からは別に早く歸つて來いとも書いて來ない、と言つて、私はさうして旅に出てゐても、旅先でもつと長く滯つてゐよと誰あつて止めてくれる者もない身の上となつたことだ。別れた女と苦勞してゐた頃は、私はどんなに斯ういふ境遇を羨んだことか知れなかつたが、さてさういふ境遇になつて見ると、これは又餘りのたよりなさに呆れ果てた次第なのであつた。

だから、原稿の役目も濟ましてしまふと、私は殆ど晝も夜も、藝者ゆめ子と向ひ合つて坐つたものだ、私も彼女でも相手にしなければ仕樣がないのだつたが、彼女にしても、同じ商賣なら、彼女のやうな性質から、私のやうな性質の客の座敷の方が樂なものだから、遊びに來よいのに違ひなかつたのだ、だが、私が默つてゐると、相手はつい迄も默つてゐたものだ、そして私が何か物を言ふと、彼女はきまつて唯「えゝ」と、下を向いて、顋を引いて答へるだけなのだ、それはもつとも性質からでもあらうが、又一つはしやくれ顏なので、子供の時分からつひさういふ風にしなをする癖がい

中央公論大賣捌所

東京市	神田區表神保町	東京堂
同	神田區裏神保町	上田
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區本富士町	盛春堂
大阪市	北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市	七條停車場前	共盛社
同	四條西洞院	前田大盛社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮京城	本町二丁目	日韓書房

一誌代郵税 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり

一郵券代用 は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一受領證請求 は必ず返信料を要す

○定價 金五拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數＼區別	內國	外國	
六册	金參錢	金參圓六拾錢	以上郵税共
十二册	金六錢	金七圓貳拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金八圓五拾錢外國は金拾圓貳拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

大正八年十二月廿五日印刷納本
大正九年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木西三

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長小石川一四四四 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

◎本號に限り特價金壹圓五拾錢 郵税金六錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 10,20; Single copy 60 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

謹奉賀新年候

舊年中は一方ならぬ御厚情を忝ふし誠に難有奉深謝候、尚ほ御存知の通り大阪、京城、大連に支店も有之候間當年は舊年に倍し本店同樣一層御引立被下樣偏に奉願上候、右謹んで年頭の御挨拶旁御願迄如斯に御座候

◆三越の定休日◆一月一日、二日、三日◆一月四日◆一月十八日◆◆



東京 三越呉服店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す